

河 内 構 遺 跡
河 内 城 跡
河 内 遺 跡
ナ ル 林 遺 跡
久 田 上 原 城 跡
北 条 高 下 遺 跡
峪 畑 遺 跡
岡 遺 跡
比 丘 尼 ヶ 城 跡
城 峪 城 跡
札 ノ 尾 遺 跡

苫田ダム建設に伴う発掘調査

1

2 0 0 3

国土交通省苫田ダム工事事務所
岡山県教育委員会



— サーチャージ水位
(EL.230.0m)

— 付けかえ道路

箱E遺跡

箱

西屋

杉

女原

井坂

奥津町

黒木

河内橋遺跡

河内城跡

河内

ナル林遺跡

河内遺跡

勝の段遺跡

久田上原城跡

国道179号

久田上原

夏栗遺跡

夏栗

北条高下遺跡

久田原遺跡

原

峠畑遺跡

久田下原

岡遺跡

比丘尼ヶ城跡

市場

久田堀ノ内遺跡

札ノ尾遺跡

鏡野町

吉井川

城峠城跡

土生

苦田ダム

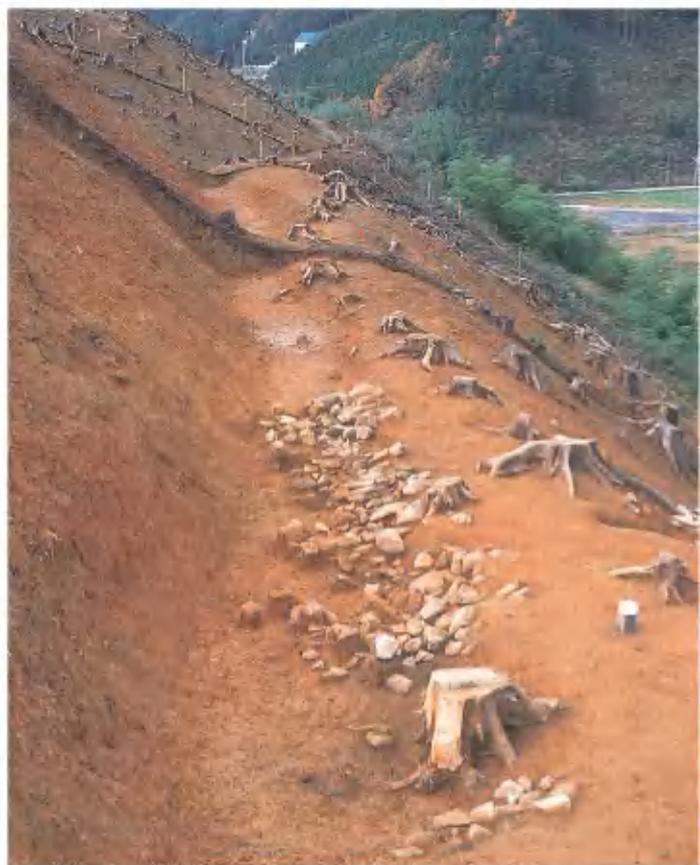
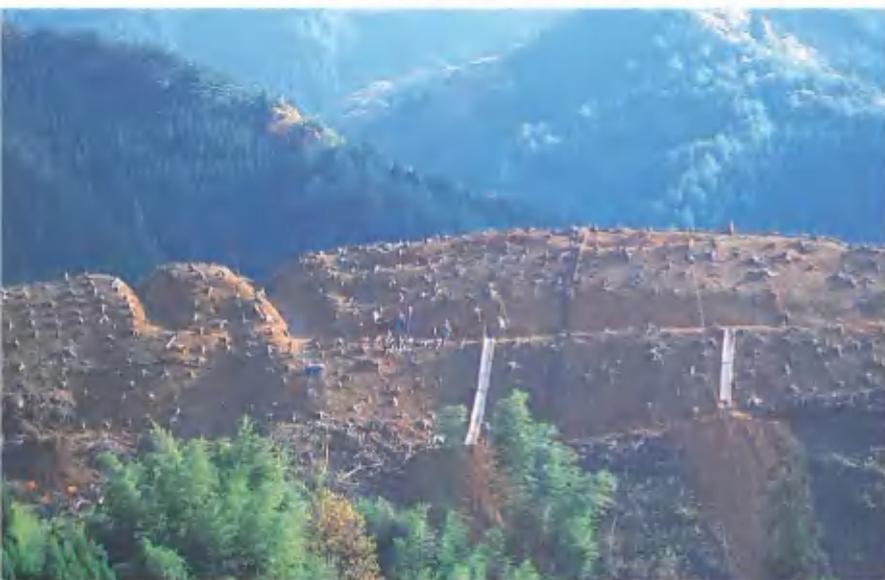
塚谷



1 河内構遺跡（南上空から）



2 河内遺跡（南上空から）



河内城跡

①	
②	④
③	

- ① 全景(北上空から)
- ② 堀切1・2、切岸・土塁1(北から)
- ③ 堀切2(南から)
- ④ 切岸・土塁1 つぶて石出土状況(東から)

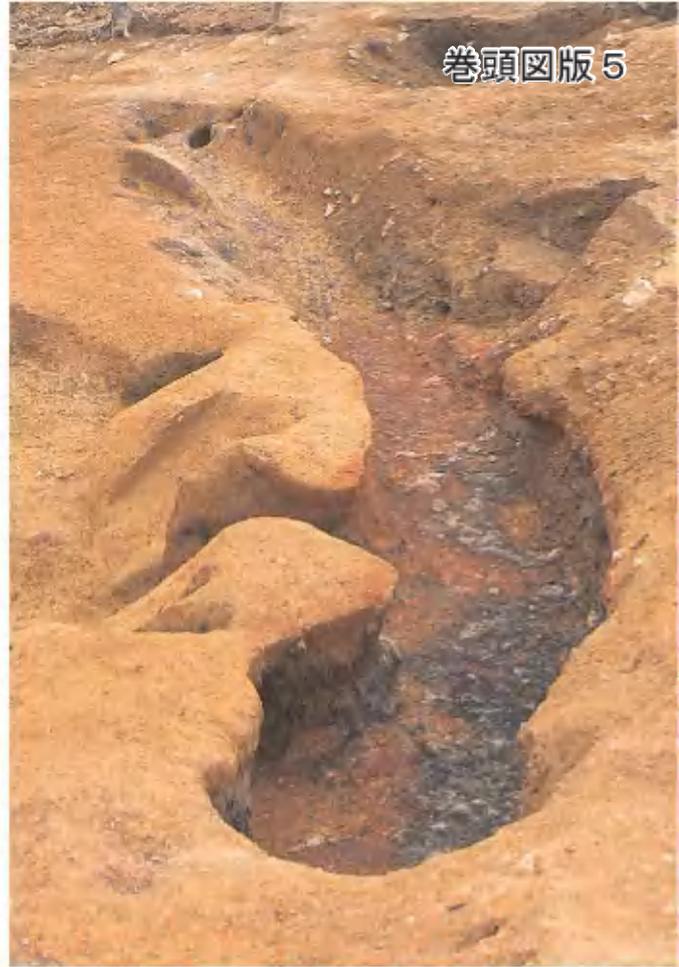


1 久田上原城跡（北上空から）



2 城塔城跡・比丘尼ヶ城跡（南東上空から）

札ノ尾遺跡



①～③城峪城跡

①	③
②	⑤
④	

①切岸・土塁 1 つぶて石出土状況 (西から)

②製鉄炉 1 下部構造 (東から)

③炭窯 1 (北から)

④峪畑遺跡 製鉄炉 1 下部構造 (北から)

⑤比丘尼ヶ城跡 炭窯 1 (南から)

巻頭図版 6

東山城跡



久田上原城跡



勝の段遺跡

ナル林遺跡

1 ナル林遺跡（北東上空から）



2 峪畑遺跡 銅剣転用銅鏃(M1)



3 札ノ尾遺跡 銅製錬関連遺物

序

苫田ダムは、吉井川水系吉井川に建設される多目的ダムであり、完成後は流域の抜本的な治水対策として、また、将来を担う貴重な水源として流域の発展と豊かで安全快適な暮らしの実現に大きく貢献することが期待されております。

国土交通省（旧建設省）では、昭和47年度から実施計画調査を開始し、昭和56年度からは建設事業に着手しました。

以来、多くの関係者の皆様の御理解と御協力を頂きながら事業を進めてまいりました。

現在、平成16年度の完成を目指して事業の進捗に鋭意努力しております。

本ダムの完成によって水没する奥津町箱・河内・黒木・久田の各地区は、久田原遺跡・しろざこ城峪城跡をはじめとする多数の遺跡があることから、本工事に先立ち岡山県教育委員会と協議を重ね、ダムの湛水等によって影響のある遺跡部分についての記録保存を行うため、委員会に発掘調査を委託してまいりました。

この調査によって、奥津町内ではじめて確認された古墳群や県内でも調査例の少ない室町時代前半の山城跡など、縄文時代から江戸時代にわたる、奥津町の悠久の時間に夢を馳せる貴重な史跡資料が発見されるに至りました。

これらの遺跡発掘調査の貴重な記録である本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解を深める一助となり、また、学術・文化等のために広く活用されることを心から期待致します。

末筆ながら、この発掘調査ならびに本書の編集にあられた岡山県教育委員会をはじめとする関係各位のご尽力に対し、深甚なる謝意を表します。

平成15年3月

国土交通省中国地方整備局

苫田ダム工事事務所長 塚原浩一

序

苦田ダム計画は、さまざまな紆余曲折を経ながらも昭和56年度から国土交通省（建設省）によりダム建設事業が着手され、今日に至っています。

岡山県教育委員会は、昭和62年以来、ダム建設によって影響を受けうる埋蔵文化財の保護保存のため、関係各課と協議を進めてまいりました。とくに、平成3年度および平成6年度に実施した分布調査を基に埋蔵文化財とダム建設との調整を重ねてまいりましたが、ダムによって水没する、あるいは湖岸道路などによってやむを得ず削平を受ける部分につきましては、記録保存の措置を講ずることといたしました。

発掘調査は平成7年度から開始し現在も継続しております。この報告書は平成13年度に整理・報告書作成を行った苦田ダム関連遺跡調査報告書の第1冊目にあたります。

本書には平成7年から10年度まで調査を実施した11遺跡を収載しています。内容としては縄文時代早期の土器片を始め、弥生時代の集落跡、古代の製鉄関連遺構、中世から近世にかけての集落跡、近世の銅精錬関連遺物などがあります。なかでも、室町時代に築城されたと考えられる4つの城跡は、近接する城の位置のあり方のみならず、今後報告される久田原・久田堀ノ内遺跡など生活拠点との関係など、久田地域の中世を考える上で貴重な資料です。また、未だ少ない初期的な城の調査報告例としても、全国的に注目されることでしょう。

本報告書が、文化財の保護・保存に活用されるとともに、地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

発掘調査の実施や報告書の作成にあたりましては、苦田ダム建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員の先生方から有益な御助言と御指導を賜り、また、国土交通省苦田ダム工事事務所をはじめ関係各位から多大な御協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 正岡睦夫

例 言

- 1 本書は、岡山県教育委員会が苫田ダム建設事業に伴い、国土交通省と岡山県の委託契約に基づき実施した、河内構遺跡をはじめ11遺跡の発掘調査報告書であり、本報告書は第1分冊にあたる。契約事項は文化課が行い、発掘調査および報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。
- 2 当該遺跡は苫田郡奥津町 河内・黒木・久田上原・久田下原に所在する。
- 3 当該遺跡の一次調査および全面調査は平成7年から同10年まで調査第三課が担当して実施した。調査面積は48,205㎡を測る。
- 4 発掘調査および報告書作成にあたっては「苫田ダム建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」を設け、次の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは有益な御指導と御助言をいただいた。記して深謝の意を表す次第である。

稲田 孝司（岡山大学）
白石 純（岡山理科大学）
橋本 惣司（勝山町立勝山中学校）
船津 昭雄（岡山県遺跡保護調査団）
湊 哲夫（津山市郷土博物館）
宗森 英之（岡山県遺跡保護調査団）
山本 悦世（岡山大学）（平成7年度～8年度まで）
- 5 調査にあたっては苫田ダム工事事務所をはじめ、奥津町役場・奥津町教育委員会の関係各位から多大なる御協力を得た。記して感謝の意を表す次第である。
- 6 本書の作成は、平成13年度に岡山県古代吉備文化財センターで実施した。遺構・遺物の整理は同文化財センター職員江見正己・根木智宏・佐藤寛介の3名が担当し、全体の編集は江見が行った。
- 7 本書の執筆は、発掘担当者および整理担当者があたり、文責はそれぞれ文末に記した。
- 8 遺物に関する鑑定・同定については次の方々および機関に依頼し、有益な教示を得、一部の成果については報告文をいただいた。記してお礼申し上げる次第である。

銅滓鑑定・分析 内田俊秀（京都造形芸術大学）
鉄滓鑑定・分析 大澤正己（株式会社九州テクノリサーチ・TACセンター）
陶磁器鑑定 大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）
石材鑑定 妹尾 護（倉敷芸術科学大学）
樹種鑑定・¹⁴C年代測定 パリノ・サーヴェイ株式会社
- 9 遺物写真については江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。
- 10 本書に記載した出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、北条高下遺跡出土備前焼（奥津町保管）を除き、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本報告書に用いた高度値は海拔高であり、方位は地形図および全体図などは平面直角座標第V系の座標北を示し、古代以降の遺構図については磁北と座標北を併記した。そのほか特に示さない限り磁北であり、遺跡付近の磁北偏差は西偏6°30′を測る。

また、平成14年4月から経緯度の基準が世界測地系へと移行しているが、本書では日本測地系に準拠している。

- 2 グリッドは奥津町箱の北西に位置するX=-92.0km、Y=-41.2kmを基準とし、それぞれの軸上に100mごとに0~50、およびA~Uを付す。さらに、100mを10分割し、Aa~Aj、001~009の様に小文字および小数字で表している。なお、グリッドの基本杭は北西の杭としている。

- 3 図面の縮尺については明記しており、主なものについては一部例外があるものの以下のように統一している。

遺構 竪穴住居1/60 掘立柱建物1/100 井戸1/40 土壇墓・土壇1/30

遺物 土器1/4 土製品・金属器1/3 石製品1/2、1/3、1/8

- 4 全体図では遺構名を以下のように略称を用いている。

竪穴住居：住 掘立柱建物：建 柱穴列：列 土壇墓：墓 井戸：井 袋状土壇：袋
焼成土壇：焼 土壇：土 柱穴：P

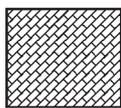
- 5 掲載遺物番号については遺跡ごとに土器、土製品、金属器、石製品、木製品、ガラス製品にわけ通し番号を付け、土器以外については下記略号を番号の前に付している。

土製品C (Cray) 金属器M (Metal) 石製品S (Stone) 木製品W (Wood)

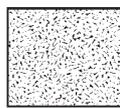
ガラス製品G (Glass)

- 6 土器実測図で表現する中軸線左右の白抜きは、小破片のために口径復元に不確実性のあることを示す。

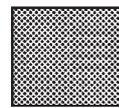
- 7 掲載した遺構上のスクリーントーンは、特別な指示がない限り以下の範囲を示すものである。



基盤層 (地山)



焼土 (面)



炭

- 8 城郭を構成する各種遺構の名称については、基本的に次の文献に準拠した。また、今回報告する4城跡に特徴的な防御施設である、切岸と土塁を組み合わせた遺構については、切岸・土塁とする。

千田嘉博・小品道裕・前川要 『城館調査ハンドブック』 新人物往来社 1993年

- 9 遺構一覧表の土壇などで、断面形は立ち上がり形態がI：袋状、II：筒状、III：逆台形を表し、床面がa：平坦、b：中央がくぼむもの、c：中央が高くなるもの、d：溝が巡るもの、e：凹凸が著しいものを表すこととした。

- 10 本報告書で掲載した地形図のうち第2章第1図は国土地理院発行の1/50,000の地形図「奥津」・「津山西部」、第14章第1図は同発行の1/25,000地形図「香々美」を複製加筆したものである。

目 次

巻頭図版

序

例言・凡例

目 次

第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と体制	4
1 調査の経過	4
2 調査の体制	7
第3節 整理の経過と体制	9
1 整理の経過	9
2 整理の体制	10
第2章 久田地区の地理的歴史的環境	11
第3章 河内構遺跡	15
第1節 遺跡の位置と調査の概要	15
第2節 弥生時代の遺構と遺物	19
1 土壌	19
第3節 中・近世の遺構と遺物	23
1 掘立柱建物	23
2 方形周溝	29
3 柱穴列	31
4 土壌墓	34
5 井戸	37
6 土壌	40
7 溝	45
8 窪地	51
9 柱穴	52
第4節 小結	53
(一覧表・観察表)	53
第4章 河内城跡	59
第1節 城郭の立地と調査の概要	59
第2節 城郭を構成する遺構と遺物	60
1 概要	60
2 曲輪	60

3	堀切	70
4	切岸・土塁	72
5	竪堀	72
6	土塁	72
7	盛土	72
8	犬走	76
9	通路	76
10	出土遺物	76
第3節 城郭以外の遺構と遺物		79
1	弥生時代～古代の遺物	79
2	焼成土壇	79
3	集石墓	80
4	炭窯	81
5	古道	82
6	近世の遺物	82
第4節 小結		83
(一覧表・観察表)		83
第5章 河内遺跡		85
第1節 遺跡の位置と調査の概要		85
第2節 古墳時代の遺構と遺物		90
1	竪穴住居	90
第3節 中世の遺構と遺物		91
1	掘立柱建物	91
2	土壇墓	99
3	土壇	100
4	溝	107
5	柱穴	107
第4節 小結		109
(一覧表・観察表)		109
第6章 ナル林遺跡		113
第1節 遺跡の位置と調査の概要		113
第2節 弥生時代の遺構と遺物		115
1	竪穴住居	115
2	袋状土壇	120
3	土壇	124
4	溝	124
5	遺構に伴わない遺物	125
第3節 古墳時代の遺構と遺物		125

1	豎穴住居	125
2	遺構に伴わない遺物	127
第4節	小結	127
	(一覧表・観察表)	128
第7章	久田上原城跡	131
第1節	城郭の立地と調査の概要	131
第2節	城郭を構成する遺構と遺物	132
1	概要	132
2	曲輪	132
3	土壇状遺構	132
4	堀切	134
5	切岸・土塁	134
6	出土遺物	134
第3節	城郭以外の遺構	138
1	焼成土壇	138
第4節	小結	138
	(一覧表・観察表)	139
第8章	北条高下遺跡	140
第1節	遺跡の位置と調査の概要	140
第2節	出土遺物	141
1	土器	141
2	石塔	141
	(一覧表・観察表)	142
第9章	峪畑遺跡	143
第1節	遺跡の位置と調査の概要	143
第2節	弥生時代の遺構と遺物	145
1	豎穴住居	145
2	遺構に伴わない遺物	146
第3節	古代以降の遺構と遺物	146
1	製鉄炉	146
2	焼成土壇	148
第4節	小結	148
	(一覧表・観察表)	150
第10章	岡遺跡	151
第1節	遺跡の位置と調査の概要	151
第2節	縄文時代の遺物	153
第3節	弥生時代の遺構と遺物	154
1	豎穴住居	154

2	袋状土壇	156
3	土壇	158
4	遺構に伴わない遺物	159
第4節	小結	162
	(一覧表・観察表)	163
第11章	比丘尼ヶ城跡	165
第1節	城郭の立地と調査の概要	165
第2節	城郭を構成する遺構	166
1	概要	166
2	曲輪	166
3	堀切	166
4	土壇状遺構	169
第3節	城郭以外の遺構と遺物	170
1	炭窯	170
2	焼成土壇	171
3	遺構に伴わない遺物	174
第4章	小結	174
	(一覧表・観察表)	174
第12章	城峪城跡	175
第1節	城郭の立地と調査の概要	175
第2節	城郭を構成する遺構と遺物	176
1	概要	176
2	曲輪	176
3	堀切	183
4	豎堀	186
5	切岸・土塁	186
6	溝	192
7	土壇	192
8	出土遺物	194
第3節	城郭以外の遺構と遺物	199
1	概要	199
2	縄文～弥生時代の遺構と遺物	199
3	古墳時代以降の遺構と遺物	203
第4節	小結	211
	(一覧表・観察表)	212
第13章	札ノ尾遺跡	217
第1節	遺跡の位置と調査の概要	217
第2節	縄文時代～中世の遺物	218

第3節 近世の遺構と遺物	218
1 掘立柱建物	218
2 柱穴列	223
3 土壇墓	223
4 井戸	226
5 土壇	228
6 溝	234
7 遺構に伴わない遺物	236
第4節 小結	242
(一覧表・観察表)	243
第14章 まとめ	247
第1節 発掘調査の成果	247
第2節 久田地区の中世山城	248
1 城郭の位置と立地	248
2 東山城と天狗山城	249
3 城郭の構造	250
4 出土遺物と城郭の年代	254
5 築城の歴史的背景	255
6 日本城郭史における位置付けとその評価	255
付載 自然科学による鑑定・分析	
1 峪畑遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査	257
2 城峪城跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査	262
3 札ノ尾遺跡出土銅製錬関連遺物の理化学的分析調査結果	278

目 次

第1章		第7図 土壇2 (1/30)	20
第1図 遺跡位置図 (1/2,000,000)	1	第8図 土壇3 (1/30)	20
第2図 苫田ダム関連遺跡 (1/50,000)	3	第9図 土壇4 (1/30)	20
第3図 苫田ダム周辺遺跡詳細位置図① (1/10,000)	5	第10図 土壇5 (1/30)・出土遺物 (1/4)	21
第4図 苫田ダム周辺遺跡詳細位置図② (1/10,000)	6	第11図 土壇6 (1/30)・出土遺物 (1/4)	21
第2章 久田地区の地理的歴史的環境		第12図 土壇7 (1/30)・出土遺物 (1/4)	21
第1図 調査地周辺の遺跡分布図 (1/60,000)	12	第13図 土壇8 (1/30)・出土遺物 (1/4)	22
第3章 河内構遺跡		第14図 土壇9 (1/30)・出土遺物 (1/4)	22
第1図 調査位置図 (1/2,000)	15	第15図 土壇10 (1/30)・出土遺物 (1/4)	22
第2図 出土縄文土器 (1/4)	16	第16図 土壇11 (1/30)・出土遺物 (1/4)	22
第3図 遺構全体図 (1/800)	16	第17図 掘立柱建物1 (1/100)・出土遺物 (1/4)	23
第4図 主要遺構部分図① (1/400)	17	第18図 掘立柱建物2 (1/100)・出土遺物 (1/4)	23
第5図 主要遺構部分図② (1/400)	18	第19図 掘立柱建物3 (1/100)	24
第6図 土壇1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	19	第20図 掘立柱建物4 (1/100)	25

第21図	掘立柱建物 5 (1/100)	26
第22図	掘立柱建物 6 (1/100)・出土遺物 (1/4)	26
第23図	掘立柱建物 7 (1/100)	27
第24図	掘立柱建物 8 (1/100)	27
第25図	掘立柱建物 9 (1/100)	27
第26図	掘立柱建物10 (1/100)	28
第27図	掘立柱建物11 (1/100)	29
第28図	掘立柱建物12 (1/100)	29
第29図	方形周溝 1 (1/100)・出土遺物 (1/4)	30
第30図	方形周溝 2 (1/100)・出土遺物 (1/4)	31
第31図	柱穴列 1 (1/100)	31
第32図	柱穴列 2 (1/100)	32
第33図	柱穴列 3 (1/100)	32
第34図	柱穴列 4 (1/100)	33
第35図	柱穴列 5 (1/100)	33
第36図	柱穴列 6 (1/100)	33
第37図	柱穴列 7 (1/100)	33
第38図	柱穴列 8 (1/100)	33
第39図	柱穴列 9 (1/100)	33
第40図	土壇墓 1 (1/30)・出土遺物 (1/3)	34
第41図	土壇墓 2 (1/30)	34
第42図	土壇墓 3 (1/30)	34
第43図	土壇墓 4 (1/30)・出土遺物 (1/2)	34
第44図	土壇墓 5・土壇墓 6 (1/30)	35
第45図	土壇墓 5 出土遺物 (1/5)	35
第46図	土壇墓 7 (1/30)	35
第47図	土壇墓 7 出土遺物 (1/2)	36
第48図	土壇墓 8 (1/30)	36
第49図	土壇墓 9 (1/30)	36
第50図	井戸 1 (1/40)・出土遺物 (1/4)	37
第51図	井戸 2 (1/40)・出土遺物① (1/4, 1/5)	38
第52図	井戸 2 出土遺物② (1/4)	39
第53図	井戸 3 (1/40)・出土遺物 (1/4)	39
第54図	井戸 4 (1/40)	40
第55図	土壇12 (1/30)・出土遺物 (1/4)	40
第56図	土壇13 (1/30)	41
第57図	土壇14 (1/30)	41
第58図	土壇15 (1/30)	41
第59図	土壇16・17 (1/30)・土壇17出土遺物 (1/4) ..	41
第60図	土壇18 (1/30)	42
第61図	土壇19 (1/30)	42
第62図	土壇20 (1/30)	42
第63図	土壇21 (1/30)	42
第64図	土壇22 (1/30)・出土遺物 (1/4)	42
第65図	土壇23 (1/30)	43
第66図	土壇24 (1/30)	43
第67図	土壇25 (1/30)	43
第68図	土壇26 (1/30)	44
第69図	土壇27 (1/60)	44

第70図	土壇28 (1/30)	44
第71図	土壇29 (1/30)・出土遺物 (1/4)	45
第72図	溝 1 (1/40)	45
第73図	溝 1 出土遺物① (1/4, 1/2, 1/3)	46
第74図	溝 1 出土遺物② (1/4, 1/3)	47
第75図	溝 2 (1/40)・出土遺物 (1/4)	48
第76図	溝 3 (1/100)・出土遺物 (1/4)	49
第77図	溝 4 (1/100, 1/50)・出土遺物 (1/4)	50
第78図	溝 5 (1/40)・出土遺物 (1/4)	51
第79図	溝 6 (1/30)・出土遺物 (1/4)	51
第80図	窪地 1・2 出土遺物 (1/4)	51
第81図	柱穴出土遺物 (1/4, 1/3)	52
第 4 章 河内城跡		
第 1 図	調査位置図 (1/2, 500)	59
第 2 図	河内城跡 全体図 (1/800)	61・62
第 3 図	調査区全体図① (1/300)	63・64
第 4 図	調査区全体図② (1/300)	65・66
第 5 図	曲輪 1 上層断面 (1/150)	67
第 6 図	曲輪 2 上層断面 (1/150)	67
第 7 図	曲輪 2 柱穴 1 (1/30)	67
第 8 図	曲輪 2 南東下層調査区 (1/80)	67
第 9 図	曲輪 4 土層断面 (1/80)	67
第10図	曲輪 5 土層断面 (1/80)	67
第11図	曲輪 6 土層断面 (1/80)	67
第12図	曲輪 3 遺物出土状況・土層断面 (1/80, 1/150)	68
第13図	曲輪 7 上層断面 (1/80)	68
第14図	曲輪 8・曲輪 9 上層断面 (1/80)	68
第15図	曲輪10 上層断面 (1/150, 1/80)	69
第16図	曲輪11・犬走 3 上層断面 (1/150, 1/80)	69
第17図	堀切 1・堀切 2 土層断面 (1/150, 1/80)	71
第18図	堀切 2 底面掘削痕跡 (1/80)	71
第19図	切岸・土塁 1 土層断面 (1/150, 1/80)	73
第20図	切岸・土塁 1 遺物出土状況 (1/80)	74
第21図	竪堀 1 土層断面 (1/80)	75
第22図	土塁 1 土層断面 (1/80)	75
第23図	土塁 2 土層断面 (1/80)	75
第24図	犬走 1 土層断面 (1/80)	75
第25図	犬走 3 土層断面 (1/80)	75
第26図	犬走 4 土層断面 (1/80)	75
第27図	通路 1 土層断面 (1/80)	75
第28図	盛土 1～4 土層断面 (1/150)	77
第29図	出土遺物 (1/4, 1/3)	78
第30図	弥生時代～古代の遺物 (1/4)	79
第31図	焼成土壇 1 (1/60)	79
第32図	焼成土壇 2 (1/30)	80
第33図	集石墓 1・2 (1/60)	80
第34図	集石墓 1 出土遺物 (1/4)	81
第35図	炭窯 1 (1/60)	82

第36図	近世の遺物 (1/4, 1/2)	82
第5章 河内遺跡		
第1図	調査位置図 (1/2, 000)	85
第2図	トレンチ断面図 (縦1/80, 横1/400)	86
第3図	トレンチ出土遺物 (1/4, 1/1)	87
第4図	遺構全体図 (1/800)	88
第5図	主要遺構部分図① (1/400)	88
第6図	主要遺構部分図② (1/400)	89
第7図	竪穴住居1 (1/60)	90
第8図	竪穴住居1 出土遺物 (1/4)	91
第9図	掘立柱建物1 (1/100)	91
第10図	掘立柱建物2 (1/100)・出土遺物 (1/4, 1/3)	92
第11図	掘立柱建物3 (1/100)	93
第12図	掘立柱建物4 (1/100)・出土遺物 (1/4, 1/3)	94
第13図	掘立柱建物5 (1/100)・出土遺物 (1/4)	94
第14図	掘立柱建物6 (1/120)	95
第15図	掘立柱建物6 出土遺物 (1/4, 1/3)	96
第16図	掘立柱建物7 (1/100)・出土遺物 (1/4)	97
第17図	掘立柱建物8 (1/100)・出土遺物 (1/4, 1/3)	98
第18図	掘立柱建物9 (1/100)	99
第19図	土壌墓1 (1/30)・出土遺物① (1/3)	99
第20図	土壌墓1 出土遺物② (1/4, 1/3)	100
第21図	土壌1 (1/30)	100
第22図	土壌2 (1/30)	101
第23図	土壌3 (1/30)	101
第24図	土壌4 (1/30)	101
第25図	土壌5 (1/30)・出土遺物 (1/4)	101
第26図	土壌6 (1/30)・出土遺物 (1/4)	102
第27図	土壌7 (1/30)・出土遺物 (1/4)	102
第28図	土壌8 (1/30)	102
第29図	土壌9 (1/30)・出土遺物 (1/3)	103
第30図	土壌10 (1/30)	103
第31図	土壌11 (1/30)	103
第32図	土壌12 (1/30)	103
第33図	土壌13 (1/30)	103
第34図	土壌14 (1/30)・出土遺物 (1/4, 1/3)	104
第35図	土壌15 (1/30)・出土遺物 (1/4, 1/3)	104
第36図	土壌16 (1/30)	105
第37図	土壌17 (1/30)・出土遺物 (1/4)	105
第38図	土壌18 (1/30)・出土遺物 (1/5, 1/4)	105
第39図	土壌19 (1/30)・出土遺物 (1/4, 1/3)	106
第40図	土壌20 (1/30)	106
第41図	土壌21 (1/30)・出土遺物 (1/4)	106
第42図	土壌22 (1/30)	107
第43図	土壌23 (1/30)	107
第44図	溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4, 1/3)	107
第45図	柱穴出土遺物 (1/3, 1/4)	108
第6章 ナル林遺跡		
第1図	調査位置図 (1/2, 000)	113

第2図	遺構全体図 (1/400)	114
第3図	竪穴住居1・2 (1/60)	116
第4図	竪穴住居1・2 出土遺物 (1/4, 1/2, 1/8)	117
第5図	竪穴住居3 (1/60)・出土遺物① (1/4)	118
第6図	竪穴住居3 出土遺物② (1/4, 1/3, 1/8)	119
第7図	竪穴住居4 (1/60)・出土遺物 (1/4, 1/8)	119
第8図	竪穴住居5 (1/60)・出土遺物 (1/4)	120
第9図	竪穴住居6 (1/60)	120
第10図	袋状土壌1 (1/30)	121
第11図	袋状土壌2 (1/30)	121
第12図	袋状土壌3 (1/30)	121
第13図	袋状土壌4 (1/30)・出土遺物 (1/4)	121
第14図	袋状土壌5 (1/30)・出土遺物 (1/4)	122
第15図	袋状土壌6 (1/30)・出土遺物 (1/4)	123
第16図	袋状土壌7 (1/30)・出土遺物 (1/4)	123
第17図	袋状土壌8 (1/30)・出土遺物 (1/4, 1/3)	124
第18図	土壌1 (1/30)	124
第19図	溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	124
第20図	遺構に伴わない遺物 (1/4)	125
第21図	竪穴住居7 (1/60)・出土遺物 (1/4)	126
第22図	遺構に伴わない遺物 (1/4)	127
第7章 久田上原城跡		
第1図	調査位置図 (1/2, 500)	131
第2図	久田上原城跡 全体図 (1/800)	133
第3図	曲輪3 関連断面図 (1/80)	133
第4図	北部主要遺構図 (1/300)	135
第5図	切岸・土塁1 (1/80)	136
第6図	切岸・土塁1 断面図 (1/150・1/80)	136
第7図	出土遺物 (1/4, 1/3)	137
第8図	焼成土壌1 (1/30)	138
第8章 北条高下遺跡		
第1図	調査位置図 (1/2, 000)	140
第2図	トレンチ土層断面図 (1/80)	141
第3図	遺跡周辺出土遺物 (1/4, 1/8)	142
第9章 嶺畑遺跡		
第1図	調査位置図 (1/2, 000)	143
第2図	遺構全体図 (1/300)	144
第3図	1区土層断面図 (1/150)	144
第4図	竪穴住居1 (1/60)・出土遺物 (1/4, 1/2, 1/8)	145
第5図	遺構に伴わない遺物 (1/4, 1/2)	146
第6図	2区遺構全体図・土層断面図 (1/80)	147
第7図	2区出土遺物 (1/4)	148
第8図	焼成土壌1～5 (1/60, 1/30)	149
第10章 岡遺跡		
第1図	調査位置図 (1/2, 000)	151
第2図	遺構全体図 (1/300)	152
第3図	調査区土層断面図 (1/150)	152
第4図	縄文土器 (1/4)	153

第5図	竪穴住居1 (1/60, 1/4)・出土遺物 (1/4, 1/3)	154
第6図	竪穴住居2 (1/60)	155
第7図	竪穴住居3 (1/60)・出土遺物 (1/4)	155
第8図	袋状土壇1 (1/30)・出土遺物 (1/4, 1/2)	156
第9図	袋状土壇2 (1/30)・出土遺物 (1/4, 1/2)	157
第10図	土壇1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	158
第11図	土壇2 (1/30)・出土遺物 (1/4)	158
第12図	土壇3 (1/30)	159
第13図	土壇4 (1/30)	159
第14図	遺構に作わない遺物① (1/4)	160
第15図	遺構に作わない遺物② (1/4, 1/3, 1/2)	161
第11章 比丘尼ヶ城跡		
第1図	調査位置図 (1/2, 500)	165
第2図	比丘尼ヶ城跡 全体図 (1/800)	167・168
第3図	堀切3 (1/300, 1/80)	169
第4図	炭窯1・焼成土壇1～4配置図 (1/300)	170
第5図	炭窯1・焼成土壇1① (1/100)	172
第6図	炭窯1・焼成土壇1② (1/80)・出土遺物 (1/4)	173
第7図	焼成土壇2～4 (1/60)	173
第8図	遺構に伴わない遺物 (1/4)	174
第12章 城峪城跡		
第1図	調査位置図 (1/2, 500)	175
第2図	城峪城跡 全体図 (1/800)	177・178
第3図	調査区全体図① (1/300)	179・180
第4図	調査区全体図② (1/300, 1/150)	181
第5図	曲輪4 (1/150)	182
第6図	曲輪5 (1/150)	182
第7図	調査区全体図③ (1/300, 1/150)	184
第8図	堀切1・2土層断面 (1/150, 1/80)	185
第9図	堀切3・4土層断面 (1/150, 1/80)	185
第10図	竪堀1～4 (1/150)	187
第11図	切岸・土塁1土層断面 (1/150, 1/80)	188
第12図	切岸・土塁2つぶて石出土状況① (1/150)	189・190
第13図	切岸・土塁2つぶて石出土状況② (1/150)	189・190
第14図	切岸・土塁1つぶて石出土状況 (1/150)	189・190
第15図	調査区全体図④ (1/300, 1/150, 1/80)	191
第16図	曲輪1土層断面 (1/80)	192
第17図	土壇1 (1/30)	192
第18図	土壇2 (1/30)	192
第19図	土壇3 (1/30)	192
第20図	土壇4 (1/30)	193
第21図	土壇5 (1/30)	193
第22図	出土遺物① (1/6)	193
第23図	出土遺物② (1/4)	194

第24図	出土遺物③ (1/4)	195
第25図	出土遺物④ (1/3, 1/2)	196
第26図	出土遺物⑤ (1/3)	197
第27図	出土遺物⑥ (1/3)	198
第28図	下層調査1・2区全体図 (1/300)	199
第29図	竪穴住居1 (1/60)・出土遺物① (1/4)	200
第30図	竪穴住居1出土遺物② (1/8)	201
第31図	袋状土壇1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	201
第32図	袋状土壇2 (1/30)	201
第33図	土壇6 (1/30)・出土遺物 (1/4)	201
第34図	遺構に作わない遺物 (1/4, 1/3)	202
第35図	製鉄炉1周辺全体図 (1/150)	203
第36図	製鉄炉1周辺出土遺物 (1/4, 1/3)	204
第37図	炭窯1 (1/100)	205
第38図	炭窯1土層断面 (1/80, 1/40)	206
第39図	土壇7 (1/30)	208
第40図	土壇8 (1/30)・出土遺物 (1/4)	208
第41図	土壇9 (1/30)	208
第42図	土壇10 (1/30)	208
第43図	焼成土壇1 (1/30)	209
第44図	焼成土壇2 (1/30)	209
第45図	焼成土壇3 (1/30)	209
第46図	焼成土壇4 (1/30)	209
第47図	焼成土壇5 (1/30)	209
第48図	焼成土壇6 (1/30)	209
第49図	焼成土壇7 (1/30)	210
第50図	焼上1 (1/30)	210
第51図	遺構に伴わない遺物 (1/4, 1/3, 1/2)	210
第13章 札ノ尾遺跡		
第1図	調査位置図 (1/2, 000)	217
第2図	縄文時代～中世の遺物 (1/4, 1/3)	218
第3図	遺構全体図 (1/300)	219・220
第4図	掘立柱建物1 (1/100)・出土遺物 (1/4, 1/2)	221
第5図	掘立柱建物2 (1/100)・出土遺物 (1/2)	222
第6図	柱穴列1 (1/100)	223
第7図	土壇墓1 (1/30)	223
第8図	土壇墓2 (1/30)	223
第9図	土壇墓3・4 (1/30)、 土壇墓4出土遺物 (1/4)	224
第10図	土壇墓5・土壇墓6 (1/30)	224
第11図	土壇墓7 (1/30)・出土遺物 (1/2)	225
第12図	土壇墓8 (1/30)・出土遺物 (1/2)	225
第13図	土壇墓9 (1/30)	225
第14図	土壇墓10 (1/30)	225
第15図	土壇墓11 (1/30)	226
第16図	土壇墓12 (1/30)	226
第17図	土壇墓13 (1/30)・出土遺物(1/3, 1/8)、 土壇墓14 (1/30)・出土遺物(1/8)	227

第18図	井戸 1 (1/30)	228
第19図	土壇 1・土壇 2 (1/30)	228
第20図	土壇 3 (1/30)	228
第21図	土壇 4 (1/100)	229
第22図	土壇 5 (1/30)	230
第23図	土壇 6 (1/30)	230
第24図	土壇 7・土壇 8 (1/30)	231
第25図	土壇 9 (1/30)	231
第26図	土壇10 (1/30)	231
第27図	土壇11 (1/30)	231
第28図	土壇12 (1/30)	231
第29図	土壇13 (1/30)	232
第30図	土壇14 (1/30)	232
第31図	土壇15 (1/30)	232
第32図	土壇16 (1/30)	232
第33図	土壇17 (1/30)・出土遺物(1/4)	233
第34図	土壇18 (1/30)	233
第35図	土壇19 (1/30)	233

第36図	溝 1 (1/30)	234
第37図	溝 2 (1/30)	234
第38図	溝 3 (1/30)・出土遺物 (1/3)	234
第39図	溝 4 (1/30)	234
第40図	溝 5 (1/30)・出土遺物 (1/4)	235
第41図	包含層出土遺物① (1/4)	237
第42図	包含層出土遺物② (1/4)	238
第43図	包含層出土遺物③ (1/4)	239
第44図	包含層出土遺物④ (1/8, 1/3, 1/4)	240
第45図	包含層出土遺物⑤ (1/4)	241
第46図	札ノ尾遺跡周辺の坑道跡分布 (1/40,000)	242

第14章 まとめ

第 1 図	城郭の位置 (1/40,000)	248
第 2 図	束山城 (1/2, 500)	250
第 3 図	天狗山城 (1/2, 500)	250
第 4 図	諸城の縄張り (1/3, 500)	252
第 5 図	堀切断面比較図 (1/1, 500)	253

写真図版目次

巻頭図版 1	苦田ダム周辺航空写真	
巻頭図版 2	1 河内構遺跡 (南上空から)	
	2 河内遺跡 (南上空から)	
巻頭図版 3	河内城跡	
	①全景 (北上空から)	
	②堀切 1・2、切岸・土塁 1 (北から)	
	③堀切 2 (南から)	
	④切岸・土塁 1 つぶて石出土状況 (東から)	
巻頭図版 4	1 久田上原城跡 (北上空から)	
	2 城峪城跡・比丘尼ヶ城跡 (南東上空から)	
巻頭図版 5	①～③城峪城跡	
	①切岸・土塁 1 つぶて石出土状況 (西から)	
	②製鉄炉 1 下部構造 (東から)	
	③炭窯 1 (北から)	
	④峪畑遺跡 製鉄炉 1 下部構造 (北から)	
	⑤比丘尼ヶ城跡 炭窯 1 (南から)	
巻頭図版 6	1 ナル林遺跡 (北東上空から)	
	2 峪畑遺跡 銅剣転用銅鏃 (M1)	
	3 札ノ尾遺跡 銅製鍊剣関連遺物	
第 1 章 発掘調査の経緯		
写真 1	遺物復元作業	10
写真 2	遺物実測作業	10
写真 3	遺構図面トレース作業	10
写真 4	遺物収蔵状況	10
第 3 章 河内構遺跡		
写真 1	河内構遺跡を望む (北上空から)	18
写真 2	溝 2 発掘作業風景 (東から)	18

第 5 章 河内遺跡		
写真 1	発掘作業遠景 (北から)	87
写真 2	竪穴住居 1 作業風景 (南から)	87
第 6 章 ナル林遺跡		
写真 1	遺跡発見時の状況 (西から)	114
写真 2	発掘調査風景 (南西から)	114
第 3 章 河内構遺跡		
図版 1	1 遠景 (北西上空から)	
	2 調査区中央全景 (上空から)	
	3 掘立柱建物 2・3 (南西から)	
図版 2	1 掘立柱建物 6 (北から)	
	2 掘立柱建物 8～10・溝 4 (南西から)	
	3 方形周溝 1・2 (南から)	
図版 3	1 土壇墓 7 (南から)	
	2 土壇墓 7 遺物出土状況 (南から)	
	3 土壇墓 8 (北西から)	
図版 4	1 井戸 1 (北から)	
	2 井戸 2 (南東から)	
	3 井戸 3 (西から)	
図版 5	1 溝 1・柱穴列 3 (南東から)	
	2 溝 1・土壇 2～4 (北東から)	
	3 溝 2 (南西から)	
図版 6	1 溝 2 (北から)	
	2 溝 3 (北東から)	
	3 溝 4 (北から)	
図版 7	出土遺物①	
図版 8	出土遺物②	

第4章 河内城跡

- 図版9 1 遠景(北西から)
2 城郭全景①(北から)
3 城郭全景②(西から)
- 図版10 1 曲輪2(西から)
2 曲輪3(西から)
3 曲輪6・竪堀1(東から)
- 図版11 1 曲輪8・9(東から)
2 曲輪10・11、犬走3周辺(南上空から)
3 曲輪10(西から)
- 図版12 1 堀切1・2(北から)
2 堀切2底面掘削痕(北から)
3 堀切1・2周辺(北東上空から)
- 図版13 1 竪堀1(南から)
2 切岸・土塁1(西から)
3 切岸・土塁1つづて石出土状況(南西から)
- 図版14 1 盛土1土層堆積状況(西から)
2 犬走4(西から)
3 曲輪10・11、犬走3(南から)
- 図版15 1 集石墓1・2(東から)
2 焼成土壇1(西から)
3 炭窯1(北から)

図版16 出土遺物

第5章 河内遺跡

- 図版17 1 遠景(北から)
2 南側調査区全景(北上空から)
- 図版18 1 北側調査区全景(西から)
2 竪穴住居1(南西から)
3 掘立柱建物4(南東から)
- 図版19 1 掘立柱建物6(北西から)
2 掘立柱建物7・8(南東から)
3 掘立柱建物8P12土錘出土状況(南から)
- 図版20 1 土壇墓1(南東から)
2 土壇6(南東から)
3 土壇18(東から)

図版21 出土遺物

第6章 ナル林遺跡

- 図版22 1 遠景(南上空から)
2 調査区全景(南西から)
- 図版23 1 竪穴住居1・2土層堆積状況(北東から)
2 竪穴住居1・2完掘状況(南から)
3 竪穴住居2遺物出土状況(北西から)
- 図版24 1 竪穴住居3・4土層堆積状況(北西から)
2 竪穴住居7(南西から)
3 袋状土壇1～3(北西から)
- 図版25 1 袋状土壇5(南から)
2 袋状土壇6(南から)
3 袋状土壇8(南から)
- 図版26 出土遺物

第7章 久田上原城跡

- 図版27 1 遠景(北西から)
2 城郭全景(北西上空から)
3 切岸・土塁1つづて石出土状況(西から)
- 図版28 1 曲輪3周辺(南上空から)
2 曲輪3集石(北東から)
3 焼成土壇1(東から)
- 図版29 1 城郭全景(北東上空から)
2 曲輪1から北西方向を望む
3 土壇状遺構1(北西から)
- 図版30 1 曲輪2(南西から)
2 出土遺物

第8章 北条高下遺跡

- 図版31 1 遠景(南から)
2 T1(東から)
3 T3(西から)
- 図版32 1 T4(南西から)
2 出土・採集遺物

第9章 峪畑遺跡

- 図版33 1 遠景(北から)
2 1区全景(南東から)
3 竪穴住居1(西から)
- 図版34 1 焼成土壇1(北から)
2 2区土層堆積状況(北西から)
3 製鉄炉1(北西から)
- 図版35 1 2区完掘状況(北西から)
2 出土遺物

第10章 岡遺跡

- 図版36 1 遠景(西から)
2 調査区全景(北東から)
3 竪穴住居1遺物出土状況(東から)
- 図版37 1 竪穴住居2(西から)
2 竪穴住居3(西から)
3 土壇1遺物出土状況(北西から)
- 図版38 1 袋状土壇1(南から)
2 袋状土壇2(南から)
3 出土遺物①

図版39 出土遺物②

第11章 比丘尼ヶ城跡

- 図版40 1 遠景(南西から)
2 城郭全景(北西上空から)
- 図版41 1 堀切1・2(南西から)
2 堀切3の手前から曲輪1・2を望む
3 堀切3(北東から)
- 図版42 1 調査区全景①(東から)
2 調査区全景②(北東から)
3 炭窯1①(北から)
- 図版43 1 炭窯1②(北東から)
2 炭窯1焼成部内面(上方から)

3	出土遺物
第12章	城峪城跡
図版44	1 城郭全景（南東上空から）
	2 調査区全景①（東上空から）
	3 調査区全景②（西上空から）
図版45	1 曲輪4（北西から）
	2 曲輪5（南東から）
	3 溝1・曲輪6（北西から）
図版46	1 曲輪7（北東から）
	2 曲輪8～11、竪堀4（北から）
	3 曲輪8（東から）
図版47	1 曲輪9（北西から）
	2 堀切1・2（南西から）
	3 堀切3・4（南東から）
図版48	1 竪堀1（北から）
	2 竪堀2（北西から）
	3 竪堀3（南西から）
図版49	1 切岸・土塁1つづて石出土状況（東から）
	2 切岸・土塁2（西から）
	3 切岸・土塁2つづて石出土状況（北から）
図版50	1 切岸・土塁2、3（北東から）
	2 切岸・土塁3（東から）

3	切岸・土塁3盛土土層断面（北東から）
図版51	1 下層調査1区製鉄炉1周辺（南東から）
	2 下層調査1区土壇8鉄滓出土状況（北から）
	3 下層調査1区竪穴住居1周辺（東から）
図版52	1 下層調査2区炭窯1①（北東から）
	2 下層調査2区炭窯1②（南東から）
	3 下層調査2区炭窯1焼成部内面（南東から）
図版53	出土遺物①
図版54	出土遺物②
第13章	札ノ尾遺跡
図版55	1 遠景（南東から）
	2 調査区全景（南東上空から）
	3 掘立柱建物1（南西から）
図版56	1 掘立柱建物2（東から）
	2 土壇墓4（北東から）
	3 土壇墓7～10（南東から）
	4 土壇墓13（南東から）
	5 井戸1（東から）
	6 土壇4（南東から）
	7 土壇5・6、溝1（北東から）
図版57	出土遺物①
図版58	出土遺物②

表 目 次

第1章	発掘調査の経緯	
苦田1収載遺跡調査一覧表	……………	4
対策委員会におよび現地説明会記録表	……………	7
第3章	河内構遺跡	
掘立柱建物一覧表	……………	53
土壇墓一覧表	……………	54
井戸一覧表	……………	54
土壇一覧表	……………	54
土器観察表①	……………	55
土器観察表②	……………	56
石製品一覧表	……………	57
金属器一覧表	……………	57
木器一覧表	……………	58
第4章	河内城跡	
曲輪一覧表	……………	83
堀一覧表	……………	83
切岸・土塁一覧表	……………	83
土壇一覧表	……………	83
土器観察表	……………	84
石製品一覧表	……………	84
金属器一覧表	……………	84
第5章	河内遺跡	
竪穴住居一覧表	……………	109
掘立柱建物一覧表	……………	109

土壇墓一覧表	……………	109
土壇一覧表	……………	110
土器観察表①	……………	110
土器観察表②	……………	111
土器観察表③	……………	112
土製品一覧表	……………	112
石製品一覧表	……………	112
金属器一覧表	……………	112
第6章	ナル林遺跡	
竪穴住居一覧表	……………	128
袋状土壇一覧表	……………	128
土壇一覧表	……………	128
土器観察表①	……………	128
土器観察表②	……………	129
石製品一覧表	……………	130
金属器一覧表	……………	130
第7章	久田上原城跡	
曲輪一覧表	……………	139
堀一覧表	……………	139
切岸・土塁一覧表	……………	139
土壇一覧表	……………	139
土器観察表	……………	139
金属器一覧表	……………	139
第8章	北条高下遺跡	

土器観察表	142	堀 一覧表	212
石製品一覧表	142	切岸・土塁一覧表	212
第9章 峪畑遺跡		竪穴住居一覧表	212
竪穴住居一覧表	150	袋状土壇一覧表	212
土壇一覧表	150	土壇一覧表	212
土器観察表	150	土器観察表①	213
石製品一覧表	150	土器観察表②	214
金属器および製鉄関連遺物一覧表	150	土製品および製鉄関連遺物一覧表	214
第10章 岡遺跡		石製品一覧表	214
竪穴住居一覧表	163	金属器および製鉄関連遺物一覧表①	215
袋状土壇一覧表	163	金属器および製鉄関連遺物一覧表②	216
土壇一覧表	163	第13章 札ノ尾遺跡	
土器観察表①	163	掘立柱建物および柱穴列一覧表	243
土器観察表②	164	土壇墓一覧表	243
石製品一覧表	164	井戸一覧表	243
第11章 比丘尼ヶ城跡		土壇一覧表	243
曲輪一覧表	174	土器観察表①	244
堀一覧表	174	土器観察表②	245
上壇一覧表	174	土器観察表③	246
土器観察表	174	土製品および製銅関連遺物一覧表	246
製鉄関連遺物 一覧表	174	石製品 一覧表	246
第12章 城峪城跡		金属器および製銅関連遺物 一覧表	246
切岸・土塁1～3出土つぶて石の計測値および構成表	188	第14章 まとめ	
曲輪一覧表	212	久田地区の中世山城一覧表	256

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

岡山県東部を流れる吉井川の上流、奥津町（当時苦田村）にダム構想が表面化したのは昭和32年（1957）11月18日付、山陽新聞の報道による。それによると、『岡山県の三大河川のうちで未開発のまま取り残されている吉井川を総合的に開発するため、かねてから津山市北西にダムを建設して水利調節を行い、干害、災害を防止し、農業、工業用水の確保を図ることが計画されていたが、このほど農林省岡山農地事務局及び岡山県で極秘裏に調査、検討した結果、大体の構想がまとまり、ダム名も「苦田ダム」と名付けられることになった。』と発表されている。

この吉井川総合開発の構想は、苦田郡苦田村市場地内に、堤長220m、堰高45mの堰堤を建設、吉井川を締め切って上流216km²の地域から集水する。ダムの有効貯水量は3,000万tだが、この水で津山市周辺の2000町歩、下流7900町歩の既存耕地に用水補給するとともに、将来開墾が予定されている津山市北部と和気郡日生町鹿久居島など干拓予定地1663町歩の用水を確保する。さらに余った水は工業用水として、さしあたって下流の西大寺市に建設中の日本エクスランに一日一万t、将来は5万tの送水が計画されている。発電部門では常時1,100kwh、最大5,200kwh、年間1,000kwh程度の発電量を計画し、堰堤、発電施設、水没家屋補償費、農業用施設費などを含めた総事業費は59億円が計上され、旭川ダムに次ぐ大規模な物が考えられている。そして、ダム建設による経済効果として災害防除費、下流改修費などの節減、米・麦の増産効果が上げられている。なお、構想実現に当たっては事業費の起債問題、水没家屋約200戸の補償解決、発電のコスト高などはさらに検討され、ダム地点についても今後十分な調査が行われるものと見られる。

と締めくくられている。

そして、この報道からすでに44年が経過した本年、国道179号付け替え、湖岸道路工事、鞍部ダム工事、ダム本体工事の事業が平成16年度完成の予定で進行している。

工事開始までには、一言では言い表すことの出来ないほど数多くの問題が山積し、ダムに沈む町とダム建設を進める側との長期におよぶ協議、交渉が続けられた。そして、平成6年8月に奥津町議会振興対策特別委員会は奥津町の振興計画の決定にあわせて建設省、県、町で締結する「苦田ダム建設事業にかかる基本協定書」案を了承する。それを受けて町議会臨時会で、苦田ダム阻止特別委員条例（ダム阻止条例）が廃止され、名実ともにダム建設にゴーサインが出された。



第1図 遺跡位置図 (1/2,000,000)

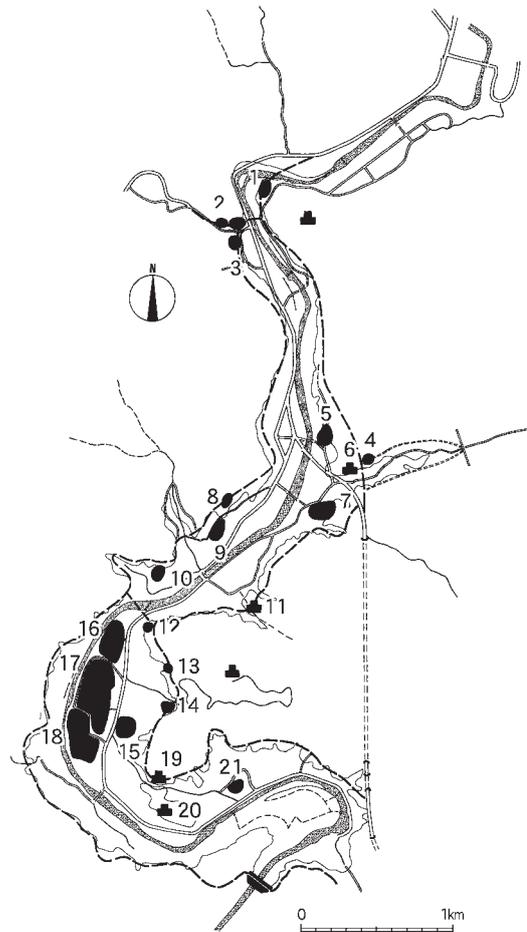
苦田ダムの経緯と発掘調査に至る経過抄

- 昭和 32年11月 苦田ダムの建設構想を新聞が報道
- 34年 4月 奥津町の誕生（苦田村、羽手村、奥津村が合併）
6月 奥津町は「苦田ダム阻止特別委員会条例」を制定
- 40年 3月 建設省は現地予備調査（ボーリング）を開始
- 41年 4月 建設省は吉井川水系工事実施基本計画を策定
- 42年 4月 建設省、奥津町は吉井川総合開発事業苦田ダム調査協定を締結
- 47年 4月 建設省は苦田ダム事業区域9.45kmを直轄管理区間に指定
5月 建設省は吉井川総合開発調査事務所を設置し、実施計画調査に着手
- 48年 3月 建設省は吉井川水系工事実施基本計画を決定
- 54年 4月 岡山県は苦田ダム対策本部を設置（県教育委員会教育次長が代表幹事）
4月 岡山県、下流受益市町は（財）吉井川水源地域対策基金を設立
- 56年 4月 建設省は吉井川総合開発調査事務所を苦田ダム工事事務所に名称変更
12月 苦田ダムの建設に関する基本計画の告示
- 57年 2月 河川予定地の告示
3月 水源地域特別措置法（水特法）による指定ダムに指定
- 60年 2月 苦田ダムの建設に関する基本計画（第1回変更）の告示
- 61年 5月 建設省、賛成地権者4団体破損損失補償基準協定の調印
岡山県、（財）吉井川水源地域対策基金、賛成地権者4団体は生活再建対策費等協定を締結
9月 建設省、岡山県、奥津町行政連絡協議会の発足
- 62年 4月 苦田ダム建設に伴う周辺整備の一環としての県営工業団地建設につき、苦田ダム推進班から教育庁文化課に鏡野町古川地内の埋蔵文化財の有無についての照会
- 63年 6月 大開遺跡の存在することを受けて、苦田ダム推進対策室長から教育庁文化課に鏡野町古川地内の工業団地建設に伴う確認調査の依頼
8月 確認調査を行い、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落が判明
- 平成 2年 2月 鏡野町苦田ダム周辺地域整備連絡協議会の発足
8月 苦田ダムの建設に関する基本計画（第2回変更）の告示
- 3年 2月 森本町長のダム建設前提を受け、国道179号の立ち入り調査等の協議
4月 建設省苦田ダム工事事務所長から県教育委員会に奥津町苦田ダム関連埋蔵文化財の分布調査についての依頼
建設省苦田ダム工事事務所、県苦田ダム推進対策室、県文化課の3者による分布調査の打ち合わせ・苦田ダム工事事務所長から県、奥津町に分布調査の協力依頼
- 6月 苦田ダム推進対策室から国道179号の付け替えは平成4年度に着工、ダムの堰堤工事は平成6年度以降の予定
県文化課、県古代古備文化財センター、奥津町、苦田ダム関係者による分布調査の実施
- 8月 奥津町は町地域総合振興計画（仮称）案を策定し、奥津町、建設省、岡山県の3者が協議する行政連絡協会の設置
- 6年 4月 県文教委員会にて、苦田ダム水没予定地内に確認されている遺跡と、今後の対応を質問
平成5年度に蒜山・美作リゾート構想に関連して奥津町内も遺跡詳細分布調査が実施され、久田堀ノ内遺跡を含めて新たに134遺跡を確認これを持って確認調査および記録保存について建設省との協議予定を回

答・きちんとした発掘調査実施の要望

- 5月 この時期から苦田ダム工事事務所と県文化課との会合数が多くなり、今後の事業の進め方、水没地域内の遺跡の有無の照会、オオサンショウウオの生息確認、有形民俗文化財・無形文化財への対応、現在までの事業進捗状況などを協議
- 6月 苦田ダム工事事務所から現在は179号改良工事のみを実施しており、予備調査に関しては奥津町の了解が必要、鏡野町分は了解の回答
- 7月 奥津町のダム水没予定者代表と同町の間で、共有財産などの権利保障に関する覚え書きの締結
- 8月 奥津町議会振興対策特別委員会は奥津町の振興計画の決定に合わせて建設省、県、町で締結する「苦田ダム建設事業にかかる基本協定書」案を了承、そして締結
奥津町は「苦田ダム阻止特別委員会条例」を廃止
- 9月 県文化課は苦田ダム工事事務所へ水没予定地内(259,950㎡)埋蔵文化財14か所、湖岸道路路線内(10,700㎡)埋蔵文化財10か所の用地買収の進捗状況を確認(24か所の内4か所の買収)
奥津町教育委員会にて発掘作業員の確保を打診
- 11月 苦田ダム工事事務所にて平成7年度の発掘調査について協議
苦田ダムは平成15年度末に完成予定、発掘調査は平成14年度末までの8年間の計画
平成7年度の発掘調査費の積算内訳、作業手順、作業内容、業務の契約形態、報告書作成業務の概要、文化財保護法57条の3第1項の通知提出等を説明
- 12月 用地買収の進捗状況24か所の内9か所が終了
- 平成7年1月 岡山県庁にて文化課と苦田ダム工事事務所関係者が発掘調査の詰め協議を行い、発掘調査の年次全体計画、工事行程のすり合わせ、そして、平成7年度は条件整備の終了した場所より遺跡の規模および時代を把握するための第一次調査を行い、随時発掘調査を進めて12,000㎡の調査を実施することを確認
- 2月 1月末から2月を中心に文化課、岡山県古代古備文化財センターは苦田ダム工事事務所と現地協議・踏査を重ね、調査場所、プレハブ設置場所等の条件を整備
- 3月 建設省中国地方建設局長から苦田ダム建設(400%)の埋蔵文化財発掘の通知(第57条の3)提出

(高畑知功)



- | | |
|-----------|------------|
| 1 杉正宗遺跡 | 12 久田神社遺跡 |
| 2 箱E遺跡 | 13 北条高下遺跡 |
| 3 かなくろB遺跡 | 14 峯畑遺跡 |
| 4 丸ヶ嶋散布地 | 15 岡遺跡 |
| 5 河内構遺跡 | 16 夏栗遺跡 |
| 6 河内城跡 | 17 久田原遺跡 |
| 7 河内遺跡 | 18 久田堀ノ内遺跡 |
| 8 ナル林遺跡 | 19 比丘尼ヶ城跡 |
| 9 勝の段遺跡 | 20 城峯城跡 |
| 10 下黒木遺跡 | 21 札ノ尾遺跡 |
| 11 久田上原城跡 | |

太字は記載遺跡

第2図 苦田ダム関連遺跡(1/50,000)

第2節 調査の経過と体制

1 調査の経過

発掘調査は平成7年度から開始した。調査対象遺跡は21遺跡にのぼり、そのうちダム湖岸道路関連9遺跡、水没予定地12遺跡に大きく二区分され、初年度は4名の調査員により水没地にあたる河内遺跡から調査を実施した。その後、河内構遺跡および久田上原城跡の全面調査を実施するとともに、その間に峪畑遺跡（久田下原B）、岡遺跡（久田下原C）の一次調査を実施し、遺跡の範囲確定等を実施したが、県北特有の冬期における天候不順の中での厳しい調査初年度となった。

平成8年度は調査員12名となり城峪城跡の調査に始まり、後半は河内城跡と中世城郭の調査が続いた。当該年度は他に札ノ尾遺跡（市場散布地）の全面調査や、後年大規模な調査となった久田原遺跡、夏栗遺跡などの一次調査を実施した。一方、6月には久田上原城跡の東側を巡る湖岸道路の法面が長雨のため崩落した。城跡保存のため、湖岸道路の影響を最小限に講じたにも拘わらず、軟弱地盤であったため、結果的には城跡の北半を大幅に削平せざるを得なくなり、急遽調査を実施した。

平成9年度は調査員6名と減員となる中、河内城跡および城峪城跡の継続調査を再開する一方、岡遺跡、峪畑遺跡の全面調査を実施した。峪畑遺跡調査中の6月初旬、勝の段遺跡の西側で湖岸道路の建設工事が開始された。分布調査では遺跡が確認されていなかった場所ではあるが、遺跡の広がりが見込まれる地形であったため、現地を踏査したところ、掘削された法面で3基の上層が確認された

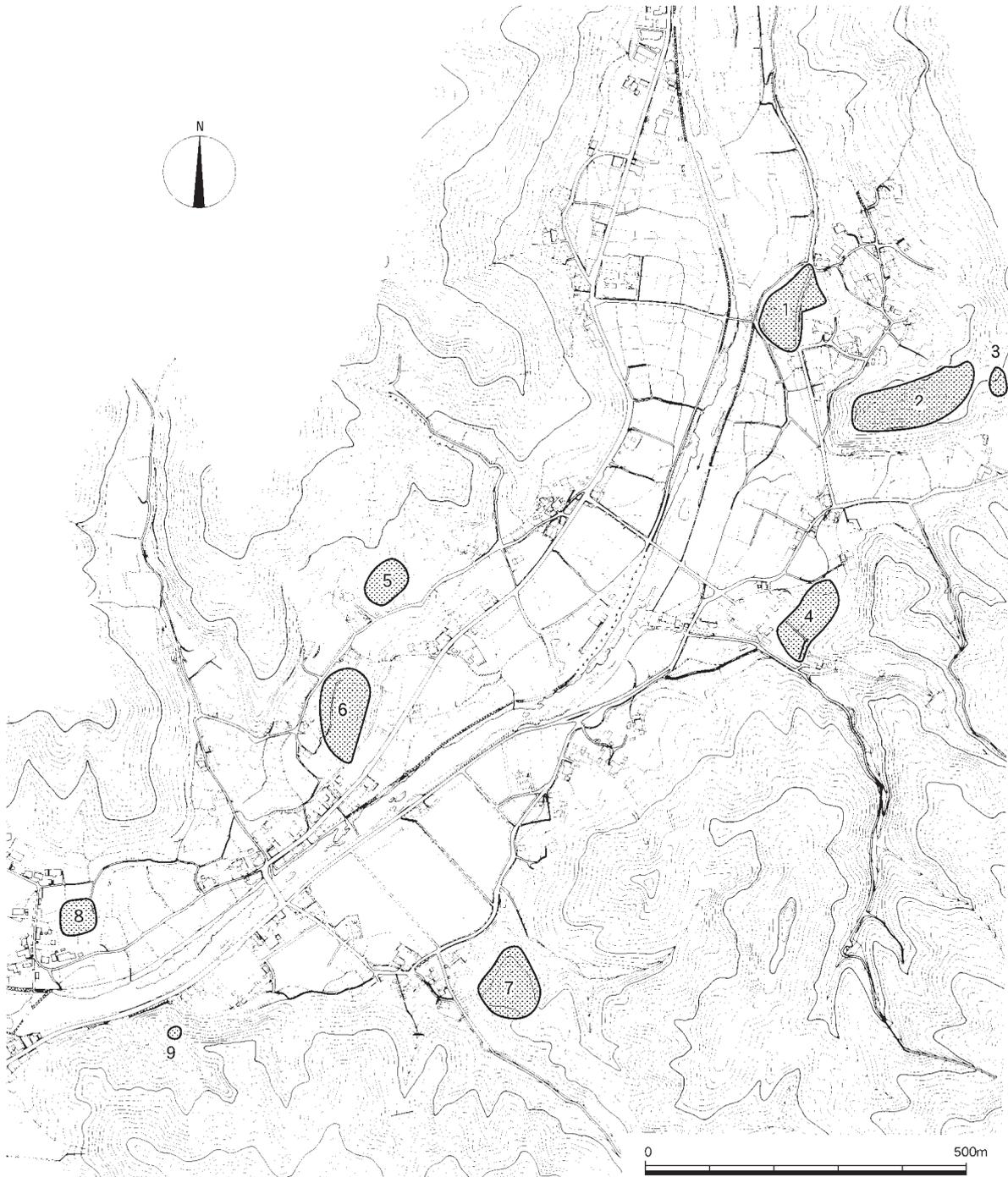
苫田1 収載遺跡調査一覧表

収載遺跡	ダム関連	区分	遺跡名	種別	調査期間(平成)	調査面積(m ²)	発掘調査担当者
1	5	○	河内構遺跡	全面	7年9/11～3/28	5,580	下澤公明・高田恭一郎・久保恵里子・高見生朗
2	6	△	河内城跡	全面	8年9/2～2/28	7,410	易伯通・烏崎東・宇垣匡雅・岡田達矢・大村俊幸・砂泰将
				全面	9年4/4～4/24	550	岡田博・山本道夫・佐藤寛介
3	7	○	河内遺跡	全面	7年4/1～9/30	4,830	下澤公明・高田恭一郎・久保恵里子・高見生朗
				一次	9年1/21～1/30	20	宇垣匡雅・岡田達矢・砂泰将
4	8	△	ナル林遺跡	全面	9年6/12～8/29	1,150	岡田博・山本道夫・佐藤寛介
5	11	△	久田上原城跡	全面	7年10/16～11/21	600	下澤公明・高田恭一郎・久保恵里子・高見生朗
				全面	8年7/1～7/29	705	易伯通・亀山行雄・砂泰将
6	13	○	北条高下遺跡 (久田下原A遺跡)	一次	10年2/10～2/13	190	易伯通・亀山行雄・井上吉和
7	14	△	峪畑遺跡 (久田下原B遺跡)	一次	7年11/6～11/17	60	下澤公明・高田恭一郎・久保恵里子・高見生朗
				全面	9年5/28～7/18	560	岡田博・山本道夫・佐藤寛介
8	15	○	岡遺跡 (久田下原C遺跡)	一次	7年10/11～10/13	540	下澤公明・高田恭一郎・久保恵里子・高見生朗
				全面	9年4/18～6/27	720	岡田博・山本道夫・佐藤寛介
9	19	△	比丘尼ヶ城跡	全面	9年8/25～1/12	1,470	岡田博・山本道夫・佐藤寛介
				全面	10年4/6～5/26	860	岡田博・権田俊朗・井上吉和・小嶋善邦
10	20	○	城峪城跡	全面	8年4/5～12/6	16,000	松本和男・易伯通・山本道夫・亀山行雄・井上吉和・砂泰将・佐藤寛介
				全面	9年4/4～9/19	4,000	易伯通・亀山行雄・井上吉和
11	21	○	札ノ尾遺跡 (市場散布地)	一次	8年7/1～7/29	400	松本和男・山本道夫・佐藤寛介
				全面	8年11/1～3/18	2,560	松本和男・井上吉和・佐藤寛介
						48,205	調査員延べ70名

○は水没予定地、△は湖岸道路予定地

め、文化課と苦田ダム工事事務所で新規発見となった遺跡の取り扱いについて協議を行ったが、現状保存は困難であるため、新規発見のナル林遺跡の調査を実施することとなった。

8月からは比丘尼ヶ城跡の調査に入る一方、久田原遺跡の全面調査、久田堀ノ内遺跡の一次調査、北条高下遺跡等の調査を実施した。



- | | | | |
|----------|---------|-------------|---------|
| 1 河内構遺跡 | 4 河内遺跡 | 7 久田上原城跡 | |
| 2 河内城跡 | 5 ナル林遺跡 | 8 下黒木遺跡 | 太字は収載遺跡 |
| 3 丸ヶ嶋散布地 | 6 勝の段遺跡 | 9 久田小学校裏山古墳 | |

第3図 苦田ダム周辺遺跡詳細位置図① (1/10,000)



- | | | | |
|-----------|------------|-----------|----------|
| 10 久田神社遺跡 | 13 久田堀ノ内遺跡 | 16 東山城跡 | 19 城峪城跡 |
| 11 夏栗遺跡 | 14 岡遺跡 | 17 峪畑遺跡 | 20 札ノ尾遺跡 |
| 12 久田原遺跡 | 15 北条高下遺跡 | 18 比丘尼ヶ城跡 | |
- 太字は収載遺跡

第4図 苦田ダム周辺遺跡詳細位置図② (1/10,000)

平成10年度は、骨材採取予定地である久田原遺跡の調査を最優先で実施する必要から、6月までの調査員を12名、7月以降が調査員10名という変則的な増員体制をとった。発掘調査の中心は久田原遺跡に移っているが、当該報告書収載の比丘尼ヶ城跡は昨年度に引き続いての継続調査であるため、未調査範囲を4月に再開し、5月末をもって終了した。

なお、文化庁は平成10年9月29日付け、庁保記第75号で『埋蔵文化財の保護と事務処理の円滑化等について（通知）』という次長通知を出したが、その中で「発掘調査を要する範囲の基本的な考え方」、「記録保存のための発掘調査その他の措置を行う場合の基本的な考え方」を別紙で示した。

ダム関係での従前の対応としては、「常時満水になる水没地のみならず危険水域の（サーチャージ水位）までを対象」としていたが、この通知が出された以後、すなわち平成11年度からの岡山県教育委員会の対応としては、常時満水以下については全面調査とし、常時満水、サーチャージ水位までの間は遺跡の範囲確認を実施することとした。但し、将来的に施設、地下埋設物、その他付帯施設などの計画等があったならば、発掘調査を行うこととしている。

以上、本報告書収載遺跡を中心とした調査の経過を略述してきたが、この間「苦田ダム建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」を12回開催し、委員の方々から有益な御指導・御教示を得た。

また、現地説明会は4回開催し、いずれも多くの方々への参加をみた。このような現地からの情報発信のみならず、平易な文章と多数のカラー写真によって構成された一般の方々を対象とするパンフレットも平成9年には刊行した。第1号は「発掘された久田の埋蔵文化財」－よみがえる久田の歴史－である。親しみやすいものであると好評であったことを付け加えておきたい。（江見正己・松本和男）

対策委員会議および現地説明会記録表

年度（平成）	埋蔵文化財保護対策委員会	遺跡現地説明会	その他
7	平成7年7月27日（木） 平成7年11月27日（月） 平成8年2月27日（火）	平成7年9月15日（金） 河内遺跡	
8	平成8年7月24日（水） 平成8年11月11日（月） 平成9年2月18日（火）	平成8年11月16日（土） 河内城跡	
9	平成9年5月29日（木） 平成9年11月6日（木） 平成10年3月13日（金）	平成9年8月9日（土） 城峪城跡 平成9年11月22日（土） 久田原遺跡	11月 パンフレットの刊行
10	平成10年7月1日（水） 平成10年12月10日（木） 平成11年3月11日（木）		

2 調査の体制

平成7年度	課長補佐（埋蔵文化財係長）高畑 知功
岡山県教育委員会	主 査 若林 一憲
教育長 森崎岩之助	岡山県古代吉備文化財センター
岡山県教育庁	所 長 河本 清
教育次長 黒瀬 定生	次 長 高塚 恵明
文化課	次 長（文化課本務） 葛原 克人
課 長 大場 淳	<総務課>
課長代理 樋本 俊二	課 長 丸尾 洋幸
参 事 葛原 克人	課長補佐（総務係長） 井戸 丈二

総務主幹	守安 邦彦
主 査	石井 善晴
主 任	木山 伸一
<調査第三課>	
課 長	柳瀬 昭彦
課長補佐(第一係長)	平井 勝
文化財保護主幹	下澤 公明
文化財保護主事	高田恭一郎
文化財保護主事	久保恵里子
主 事	高見 生朗
平成8年度	
岡山県教育委員会	
教育長	森崎岩之助
岡山県教育庁	
教育次長	黒瀬 定生
文化課	
課 長	大場 淳
課長代理	松井 英治
参 事	葛原 克人
課長補佐(埋蔵文化財係長)	平井 勝
主 査	若林 一憲
岡山県古代吉備文化財センター	
所 長	河本 清
次 長	高塚 恵明
次 長(文化課本務)	葛原 克人
文化財保護参事	正岡 睦夫
<総務課>	
課 長	丸尾 洋幸
課長補佐(総務係長)	井戸 丈二
総務主幹	守安 邦彦
主 査	木山 伸一
<調査第三課>	
課 長	柳瀬 昭彦
課長補佐(第一係長)	松本 和男
文化財保護主査	易 伯通
文化財保護主査	島崎 東
文化財保護主査	山本 道夫

文化財保護主任	宇垣 匡雅
文化財保護主任	岡田 達矢
文化財保護主任	大村 俊幸
文化財保護主任	亀山 行雄
文化財保護主事	井上 吉和
文化財保護主事	砂 泰将
主 事	樋口 雅夫
主 事	佐藤 寛介

平成9年度

岡山県教育委員会

教育長	黒瀬 定生
-----	-------

岡山県教育庁

教育次長	平岩 武
------	------

文化課

課 長	高田 朋香
課長代理	白井 洋輔
課長代理	西山 猛
参 事	葛原 克人
課長補佐(埋蔵文化財係長)	平井 勝
文化財保護主任	大橋 雅也
主 事	三宅 美博

岡山県古代吉備文化財センター

所 長	藪本 克之
次 長	正岡 睦夫

<総務課>

課 長	小倉 昇
課長補佐(総務係長)	井戸 丈二
主 査	木山 伸一

<調査第三課>

課 長	柳瀬 昭彦
課長補佐(第一係長)	岡田 博
文化財保護主査	易 伯通
文化財保護主査	山本 道夫
文化財保護主任	亀山 行雄
文化財保護主任	井上 吉和
主 事	佐藤 寛介

平成10年度		課長補佐（総務係長）	安西 正則
岡山県教育委員会		主 査	山本 恭輔
教育長	黒瀬 定生	<調査第三課>	
岡山県教育庁		課 長	柳瀬 昭彦
教育次長	平岩 武	課長補佐（第一係長）	岡田 博
文化課		文化財保護主査	権田 俊朗
課 長	高田 朋香	文化財保護主任	井上 吉和
課長代理	西山 猛	文化財保護主事（6月まで）	速水 章人
参 事	正岡 睦夫	文化財保護主事	小嶋 善邦
課長補佐（埋蔵文化財係長）	松本 和男	主 事（6月まで）	杉山 一雄
文化財保護主任	大橋 雅也	課長補佐（第二係長）	福田 正継
主 事	三宅 美博	文化財保護主査	内田 博雄
岡山県古代吉備文化財センター		文化財保護主任	亀山 行雄
所 長	葛原 克人	文化財保護主任	小山 浩司
次 長	大村 俊臣	文化財保護主事	砂 泰将
<総務課>		文化財保護主事	根木 智宏
課 長	小倉 昇		

第3節 整理の経過と体制

1 整理の経過

苫田ダム関連遺跡調査の整理作業は今年度（平成13年）から開始することとなった。整理対象遺跡は河内構遺跡ほか10遺跡と久田原遺跡の一部で、前者は平成14年度印刷刊行し、後者は平成14年度も引き続き整理作業を継続し、平成15年度に印刷刊行という変則的なものとなった。

当該報告書記載の11遺跡からは総遺構数150、総遺物数140箱余りが検出されている。

整理作業は河内構遺跡・河内遺跡・久田上原城跡・北条高下遺跡を根木が、河内城跡・ナル林遺跡・峪畑遺跡・岡遺跡・比丘尼ヶ城跡・城峪城跡・札ノ尾遺跡を佐藤が行い、編集および久田原遺跡の遺物整理を江見が担当し進めた。

遺物については洗浄・注記作業はすでに済ませており、復元作業からの開始であった。調査面積の割には量的にも、また、残りの良いものは少なく、各遺構の時期決定を判断するのに苦慮するものが多く認められたが、年度前半にはトレース作業をほぼ終了する事ができた。

一方、遺構については特に今報告書には4か所もの城跡を記載することになり、煩雑となりがちな重複するラインを多色刷りを用いたり、スクリーントーン廃止による新たな検計などを行った。

上記の整理作業を進める中、5月中旬には調査担当者を集め編集会議を実施し、報告書作成にあたっての確認事項の説明と調査員からの要望などを聞いた。以後、編集会議は5回開催し、調査担当者との疎通を図りながら作業を進めた。また、3度開催された埋蔵文化財保護対策委員会においては委員から貴重な御教示を頂いた。

（江見）



写真1 遺物復元作業



写真2 遺物実測作業



写真3 遺構図面トレース作業



写真4 遺物収蔵状況

2 整理の体制

平成13年度
 岡山県教育委員会
 教育長 宮野 正司
 岡山県教育庁
 教育次長 國定 忠克
 文化課
 課長 松井 英治
 課長代理（埋蔵文化財係長）松本 和男
 課長代理 藤井 守雄
 主任 奥山 修司
 岡山県古代吉備文化財センター
 所長 正岡 睦夫

次長 能登原 巧
 <総務課>
 課長 安西 正則
 係長 田中 秀樹
 主任 小坂 文男
 <調査第二課>
 課長 伊藤 晃
 課長補佐（第二係長）中野 雅美
 文化財保護主幹 江見 正己
 文化財保護主事（12月まで）根木 智宏
 文化財保護主事 佐藤 寛介

報告書作成にあたっては以下の各氏から貴重な御教示をいただいた。記して感謝の意を表します。
 岩永省三（九州大学）、日下隆春（奥津町教育委員会）、田中勝弘（財団法人滋賀県文化財保護協会）、
 徳平昌（春野町教育委員会）、中井均（米原町教育委員会）、松木武彦（岡山大学）、吉田広（愛媛大学）

第2章 久田地区の地理的歴史的環境

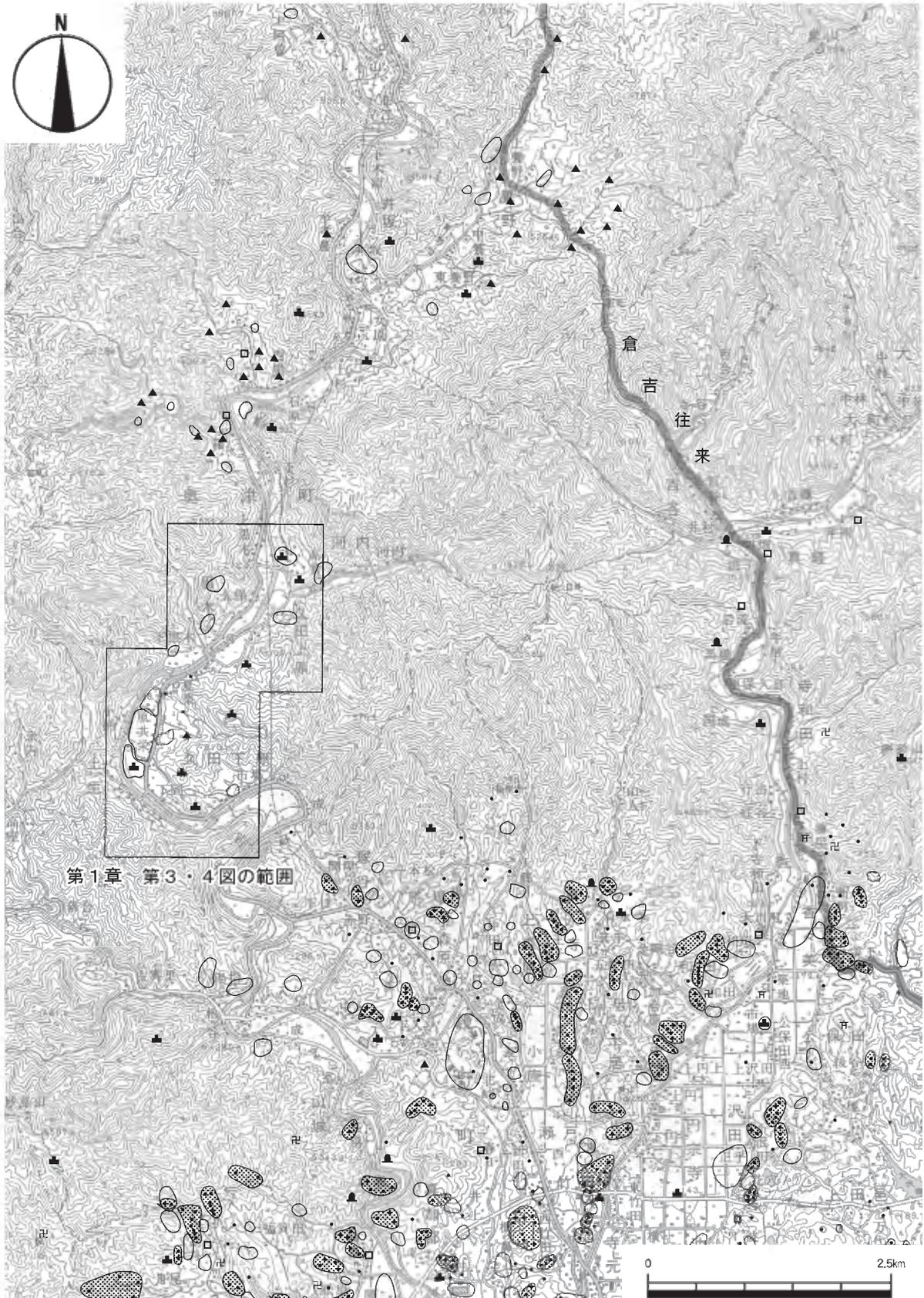
本書で報告する11遺跡は、岡山県苫田郡奥津町の南部、大字河内・黒木・久田上原・久田下原（以下、久田地区とする）に所在する。奥津町は、美作三湯の一つ奥津温泉を擁する、緑豊かな山間の町である。岡山県の北端に位置し、北は上斎原村と県境を挟んで鳥取県三朝町、東と南は津山盆地西端の鏡野町に接する。中国山地脊梁部の南面にあたることから、町域には標高500～1,000m級の山並みが連なり、町面積約130万㎡のうち、実に89.1%が山林によって占められている。

これらの山塊を東西に分かつように、町域のほぼ中央を岡山三大河川の一つ吉井川が南流する。さらに、樹枝状に展開する谷筋からは、数多くの中小河川が奔出し、吉井川へと注ぎ込んでいる。平野部は、これらの河川沿いに形成された谷底平野を主体としている。地形に制約されて狭長なものが多い中で、吉井川流域には胃袋状を呈するやや広まった平野が散在的に認められ、主要な生活の場、そして交通路となっている。特に久田地区には、周囲を比高100～300mの山々によって囲まれた、幅200～300mの平野部が長さ約4kmにわたって形成されており、吉井川上流域では比較的まとまりのある小盆地状の地形をなしている。

第1図は、久田地区を中心に奥津町南部・鏡野町西部の遺跡分布を示したものである。津山盆地の一画を占める鏡野町域では、低丘陵を中心に高い密度で遺跡が分布している。一方、奥津町域では吉井川流域に遺跡が集中するとともに、山間部に近世を中心とした製鉄遺跡が多数分布する状況を看取することができる。こうした特徴的な遺跡分布が示すように、この地域の歴史や文化を特色付けるものとして、吉井川および中国山地を介した各地との交流、そして鉄生産が挙げられる。以下、現在までの発掘調査成果を中心に、久田地区の歴史について概観する。

旧石器時代については、現在のところ確実な旧石器は確認されておらず、具体的な様相は不明である。しかし、吉井川を約20km遡った上斎原村恩原遺跡群で、良好な後期旧石器文化層が検出されていることや、下流の津山盆地で単発的にナイフ形石器が発見されていることを勘案すると、今後発見されることも十分考えられる。特に、恩原遺跡群では黒曜石やサヌカイトを素材に瀬戸内技法や湧別技法によって製作された石器が出土しており、中国山地を介した旧石器人の広範な移動があったことを示唆している。そのルートとして、吉井川流域が利用されたことは想像に難くない。

縄文時代については、主に早期と後～晩期の遺構・遺物が確認されている。早期については、箱E遺跡・河内構遺跡・岡遺跡・夏栗遺跡・札ノ尾遺跡で押型文土器が出土している。特に箱E遺跡では、4点の尖頭器が共伴しており注目される。しかし、量的にはいずれもわずかで、小集団が丘陵部を中心に短期間の移動生活を営んでいた状況を示している。後～晩期になると、丘陵部では岡遺跡、平野部では久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡・夏栗遺跡で多数の遺物が出土しており、この段階から集落立地が平野部へと変わり、定住的な生活に移行したと考えられる。久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡では、晩期の竪穴住居や貯蔵穴が検出されるとともに、根菜類の採集に使用されたと考えられる石鍬が多数出土しており、当該期の集落構造や生業のあり方を解明する上で貴重な資料が得られている。また、特筆される遺物として、石刀や南九州産の緑色石材を用いた管玉、東日本の大洞式の特徴をもつ壺形土器などが出土しており、遠隔地との交流をうかがわせる。



○—遺物散布地（集落） ●—古墳 ■—山城・居館 ▲—製鉄遺跡 □—その他

○—遺物散布地（集落） ●—古墳群 ●—古墳 ■—山城・居館 ▲—製鉄遺跡 □—その他

第1図 調査地周辺の遺跡分布図（1/60,000）

弥生時代については、久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡でわずかながら前期土器片が出土しており、中期前～中葉には同じく上記遺跡で本格的な集落形成が始まる。中期後葉には、岡遺跡・峪畑遺跡・札ノ尾遺跡など周辺の丘陵部にも小集落が営まれるが、これらは平野部の集落から派生した分村的集落と評価できよう。後期になると、平野部では夏栗遺跡・河内遺跡・河内構遺跡、丘陵部ではナル林遺跡・河内城跡・岡遺跡・城峪城跡で遺構・遺物が確認されるようになり、集落域がさらに拡充した状況を看取することができる。さらに、久田堀ノ内遺跡では県北部で初例となる水田が、夏栗遺跡では集落内を縦断する大規模な溝が検出されるなど、山間地域における遺跡の分布や変遷、集落構造を全体的に把握しうる希有な調査成果が得られている。特筆される遺物として、久田原遺跡では石矛・鑄造鉄器片・碧玉製管玉とその未成品が、峪畑遺跡では銅剣を転用したと考えられる銅鏃が出土しており、久田地区の拠点性と山陰地域との密接な交流を物語っている。このように、中～後期にかけて順調な発展をとげる久田地区の弥生社会であるが、後期終末～古墳時代初頭に発生したと考えられる吉井川上流域の集中豪雨により、壊滅的な打撃を受けたようである。

古墳時代については、先述の大洪水の影響により前期の遺構・遺物は極めて希薄であるが、中期以降、平野部を中心に大規模な遺跡が形成される。本格的な集落の形成は5世紀中頃から夏栗遺跡が始まり、6世紀代にかけて数十軒の竪穴住居からなる大集落に成長する。これに呼応して、下流側の久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡では古墳の築造が開始される。6～7世紀代には、久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡まで集落域が拡大するとともに、古墳築造も最盛期を迎え、大小十数基の墳墓からなる久田古墳群が形成される。その一方、丘陵部の遺跡は極めて希薄で、ナル林遺跡で前期の竪穴住居1軒、久田神社遺跡で横穴式石室墳1基が確認されているにすぎない。なお、吉備の基幹産業ともいえる鉄生産については、久田古墳群の中に炉壁や鉄滓を副葬するものがあることや、城峪城跡・比丘尼ヶ城跡で7～8世紀に比定できる製鉄炉と横口付炭窯が確認されていることから、この地域においても古墳時代後期には開始されたと考えられる。

古代については、奈良時代を中心に大きな調査成果が挙がっている。和銅六年(713年)、備前国から6郡が割かれて美作国が成立し、このうち久田地区一帯は苦田郡能鶏郷のけに比定される。久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡・夏栗遺跡では、合わせて数十棟もの掘立柱建物が検出され、古代村落の全体像が明らかとなった。建物群は側柱建物と総柱建物で構成され、小規模なものが多いものの棟方向や配置に規格性が認められる。また、出土した多量の遺物中には、円面硯や稜椀、丹塗り土師器など官衙遺跡に通有のものがある。さらに、建物群を区画する溝から多量の土器とともに陶馬・土馬が出土し、律令祭祀が執り行われたと考えられることや、鉄鉢形須恵器を骨蔵器に用いた火葬墓が検出されるなど、注目すべき文物が数多く発見されている。前代に始まった鉄生産は、美作国が調鉄の貢納国であることからこの時期さらに活発になったと考えられ、久田地区では峪畑遺跡・久田原遺跡で製鉄炉が確認されている。特に久田原遺跡では、複数の鍛冶炉に加え多数の鉄器や羽口、鉄滓が出土しており、集約的な鉄・鉄器生産が行なわれていたと想定される。こうした遺構・遺物のあり方から、先述の建物群は公的性格をもつとともに、鉄と鉄器の生産管理に深く関わっていたと考えられる。

中世については、久田地区一帯に比定されている久田庄の実体が発掘調査によって明らかにされている。久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡・夏栗遺跡は久田庄の中心的な集落と考えられ、県内最大級のものを含む多数の掘立柱建物が検出された。特に、久田堀ノ内遺跡は大規模な方形居館であることが判明し、戦国期には美作国守護所の院庄館に匹敵する規模に拡張されることが明らかとなった。建物群

の周辺では鍛冶工房と考えられる竪穴遺構や多数の鍛冶炉が検出され、前代同様、鉄器生産が盛んに行われたことをうかがわせる。さらに、水田や畑、土壙墓や火葬墓、石造物、各地で生産された陶磁器など、中世荘園の具体像を物語るさまざまな遺構・遺物が発見されている。また、杉正宗遺跡・河内遺跡・河内構遺跡でも、鎌倉～戦国期の集落が確認されている。一方、これらの集落を取り巻く丘陵上には大小の山城が高い密度で構築されており、このうち河内城跡・久田上原城跡・比丘尼ヶ城跡・城峪城跡について発掘調査が実施された。その結果、この4城は全国的にも調査例が少ない南北朝期の山城であることが判明し、当該期の城郭構造を検討する上で非常に重要な成果が得られた。美作地域は中世を通じて周辺勢力の脅威にさらされ、室町時代には伯耆の山名氏と播磨の赤松氏、戦国時代には山陰の尼子氏・安芸の毛利氏・備前の宇喜多氏が覇権を争った。これらの山城は、陰陽を結ぶルート上にある久田地区の重要性と、緊迫した社会情勢を物語っているといえよう。

近世の久田地区は、宇喜多氏・小早川氏の支配を経て、慶長八年(1603年)津山藩領、後に幕府領津山藩預地となり、北から箱村・黒木村・河内村・久田上原村・久田下原村・土生村が成立した。久田地区以北の丘陵部は花崗岩地帯で、たたら製鉄が盛行したことが数多くの製鉄遺跡の分布から読みとれる。また、美作と伯耆を結ぶ倉吉往来が整備され、箱村まで高瀬舟が運行するとともに、久田下原村には諸品の買集と津山城下への川下が許されており(「郷中御条目」)、吉井川の水運を活かした物流拠点として重要な役割を果たしたことがうかがえる。発掘調査では、久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡・夏栗遺跡・河内構遺跡・札ノ尾遺跡で掘立柱建物や井戸、土壙墓などが検出され、近世村落の様相が捉えられている。特に札ノ尾遺跡では多量の銅滓が出土し、銅製錬を行っていたことが判明した。

近代以降、この地域は明治4年(1871年)北条県の管轄となり、同9年岡山県に合併された。久田地区の諸村は、明治22年(1889年)の合併により西西条郡久田村となり、昭和30年(1955年)に北部の泉村と合併し苦田郡苦田村となった。そして昭和34年(1959年)、苦田村と北部の奥津村・羽出村が合併して奥津町が誕生した。現在、昭和32年(1957年)に発表された苦田ダム建設工事が急ピッチで進められ、かつての景観は大きく変貌しつつある。(佐藤寛介)

参考文献

本章で述べた内容は、2002年3月までの発掘調査成果と次の3～7の文献に基づいている。このうち、本書に収載した遺跡以外については現在整理中であり、今後の整理・検討を通じて内容や評価に変更が生じる可能性があることを断っておく。また、第1図は文献2をもとに近年の発掘調査成果と平成5・13年に岡山県教育委員会が実施した遺跡分布調査成果を盛り込み作成した。なお、奥津町および隣接する上斎原村・鏡野町の地理的歴史的環境については、8～11の文献が詳しい。併せて参照されたい。

- 1 『岡山県の地名』 平凡社 1988年
- 2 岡山県教育委員会 『岡山県遺跡地図』第5分冊 1978年
- 3 岡山県教育委員会 『岡山県埋蔵文化財報告26～32』 1996～2002年
- 4 岡山県教育委員会 『教育時報』第630号 2002年
- 5 岡山県古代吉備文化財センター 『所報吉備』第20・25・26号 1997・1998・1999年
- 6 建設省苦田ダム工事事務所・岡山県古代吉備文化財センター 『発掘された久田の埋蔵文化財』Ⅰ 1997年
- 7 国土交通省苦田ダム工事事務所・岡山県古代吉備文化財センター 『発掘された久田の埋蔵文化財』Ⅱ 2001年
- 8 岡山県教育委員会 『福見口遺跡・殿釜遺跡・大高下遺跡・大柄畑遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告168 2002年
- 9 奥津町教育委員会 『杉遺跡』奥津町埋蔵文化財発掘調査報告4 2000年
- 10 鏡野町 『鏡野町史』考古資料編 2000年
- 11 上斎原村 『上斎原村史』通史編 2001年

第3章 河内構遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の概要

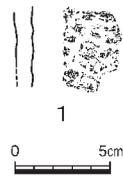
河内構遺跡は、南に下る吉井川が石原と杉の地区で「く」の字に大きく屈曲してから、比較的屈曲のない流路を形成する所の比高約10mの段丘上に位置する。

遺跡の内容については、遺跡名にある通り「構」という名が残され、さらに、当遺跡東側の丘陵上には、現状でも郭、堀などが明瞭に認められる河内城跡が所在する。このようなことから、この地点に河内城との何らかのつながりのある遺構の存在が予想されていたのである。

調査は、河内遺跡の調査中において、第3四半期の調査工程の具体的な資料を得るため一次調査を実施したのである。この一次調査は7月に実施し、その結果、約5,000㎡について遺構の広がりか認められた。このことから全面調査の対応をとることとなったのである。なお、調査期間は平成8年3月までであったが、1月に入り県北の気候条件が悪化し調査が予定内に終了する見通しが立たなかったのである。しかし、諸条件の整備により何とか終了させることができたのである。



第1図 調査位置図 (1/2,000) ■ 一次調査トレンチ



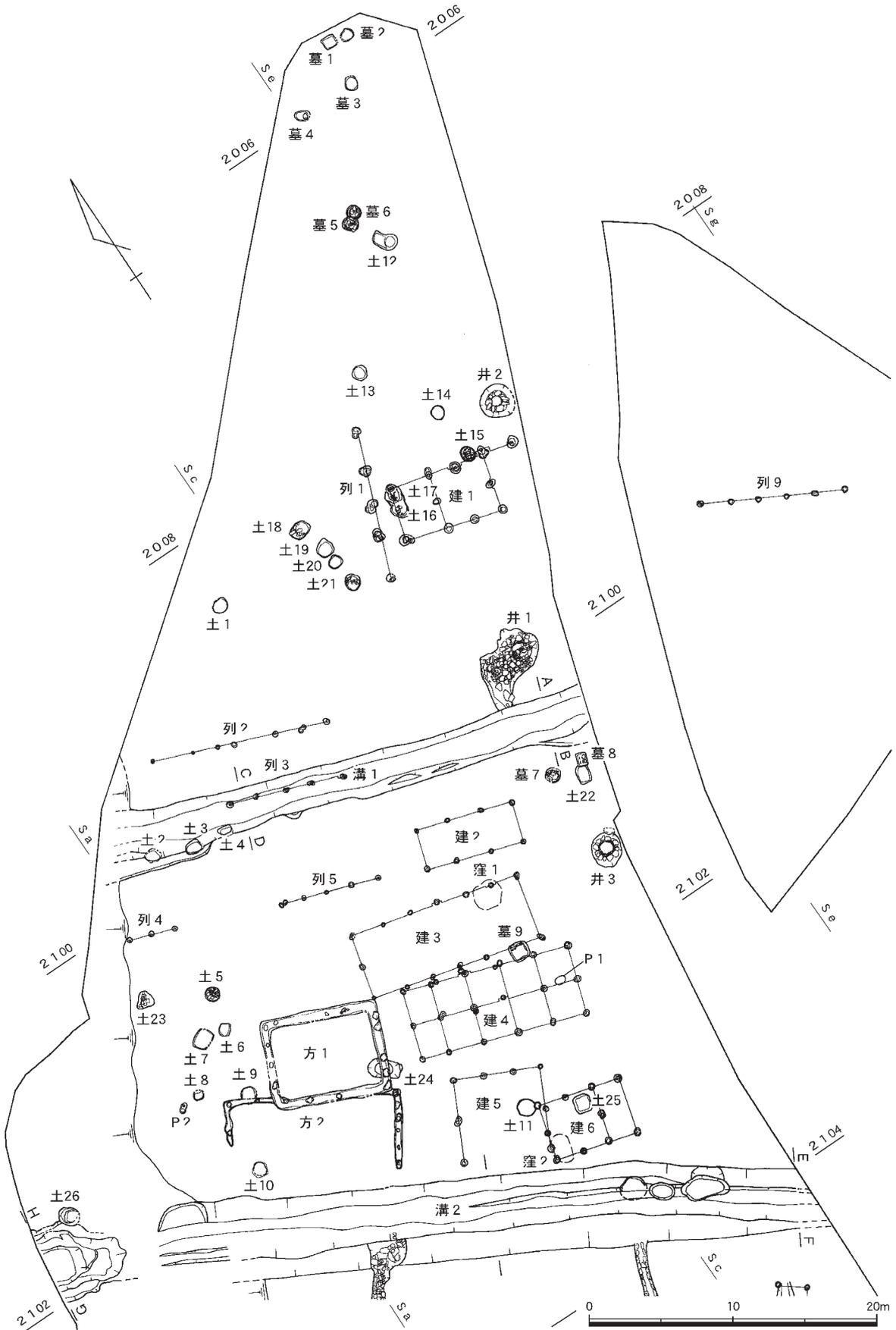
第2図 出土縄文土器 (1/4)

遺跡は、南北に通る町道の東西に広がる。東側部分については、基盤層がなだらかに下ることが確認されている。したがって、この部分については、遺構の広がりを読めることができなかった。当該部分では、柱穴列以外浅い柱穴がまばらに検出されただけである。西側部分においては密度が濃く認められ、とくに、中央から南の地区には、建物が重複する状態で検出されている。

遺物は、縄文早期の押型文が最も古く、遺構に伴う遺物は弥生後期からで、間を抜けて中世から近世にかけてである。 (下澤公明)



第3図 遺構全体図 (1/800)



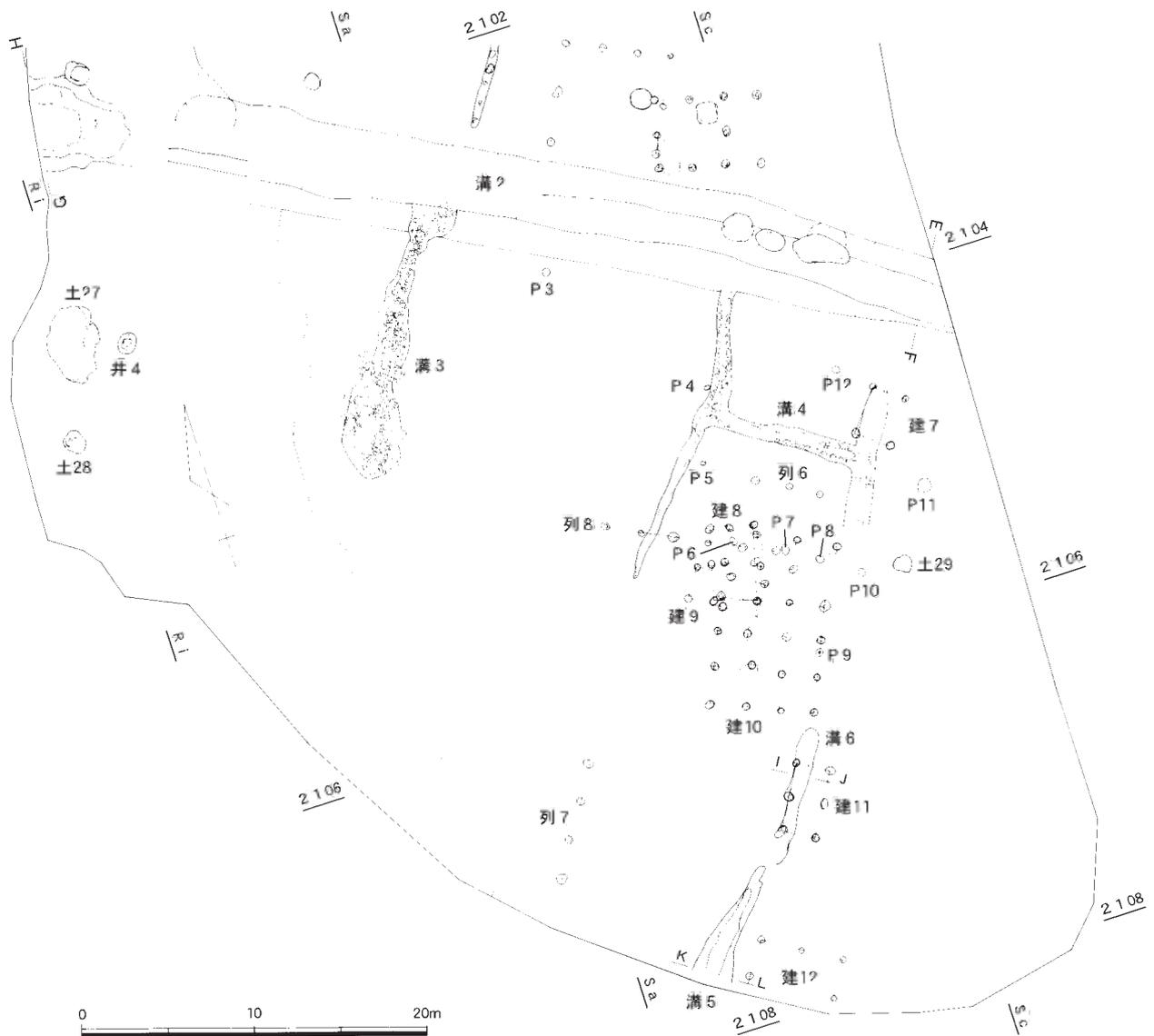
第4図 主要遺構部分図① (1/400)



写真1 河内構遺跡を望む（北上空から）



写真2 溝2発掘作業風景（東から）



第5図 主要遺構部分図② (1/400)

第2節 弥生時代の遺構と遺物

1 土壌

土壌1 (第4・6図)

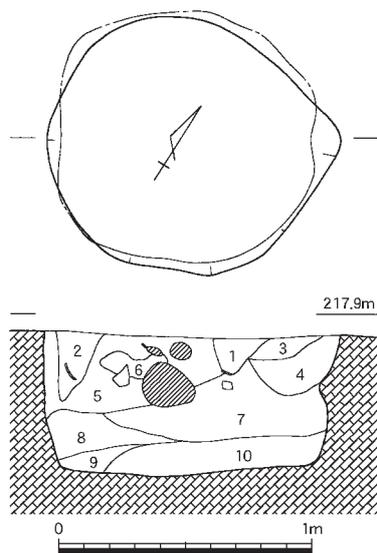
列2の北に位置し、規模は1.16×1m、深さ55cmを測り、平面形態は円形を呈する。北西側の下端は、掘り方よりも外側となる。したがって、壁面が抉るように掘り込まれているのが確認されたことから、袋状の形態を有する土壌と考えられる。

遺物は、半分以上埋没した状態で、おもに1・2・5層から出土している。2の外面調整は、口縁部にナデによる凹部、頸部にタテのハケを用いている。内面調整は、頸部上半に押圧、下半にヨコヘラケズリを用いている。3は口縁端部を肥厚させ、凹線を施す。4は壺の底部破片、5は甕の底部破片である。6は杯部から上方に拡張して、口縁部を形成する。口縁下半には、ナデによる凹部を形成する。(下澤)

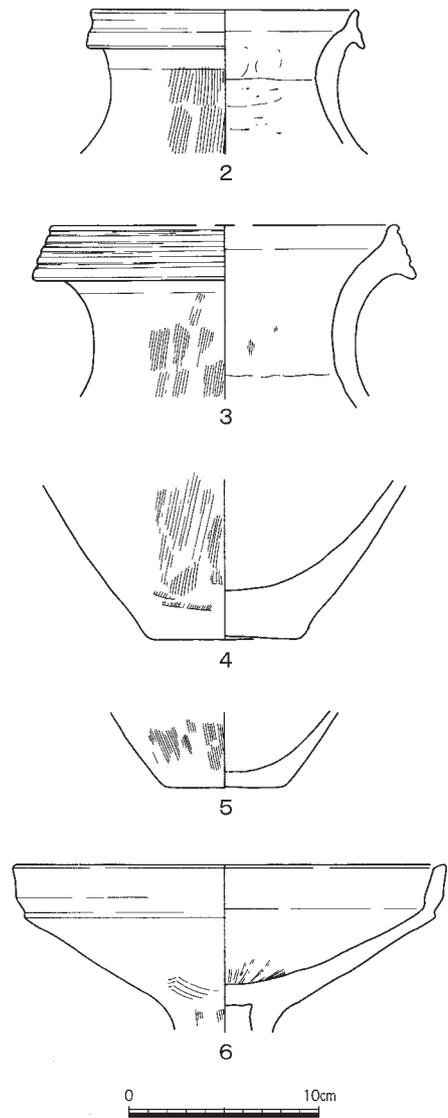
土壌2 (第4・7図、図版5)

土壌2～4は、後述する溝1の南肩斜面で検出したもので、いずれも北半上部を溝1に切られる。約1.8mの間隔をおいて一列に並ぶ袋状土壌で、出土遺物はないが埋土等から弥生時代に属するものと考えられる。

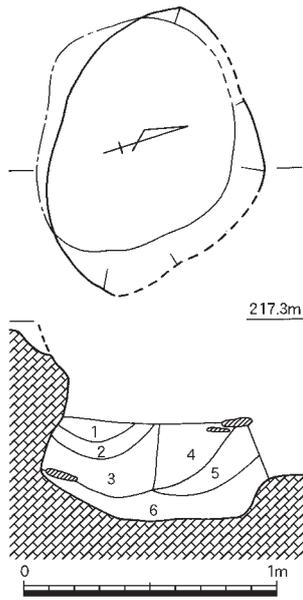
土壌2は、検出時の平面形が不整な楕円形を呈するものである。上面は長軸1.18m、短軸83cm、底面は長軸96cm、短軸75cmを測る。深さは65cmで、底面の海拔高は216.5mを測り、断面形は底に向かって広がる。埋土はブロック状で円礫を含んでいる。(高田恭一郎)



- 1 淡茶褐色土
- 2 淡黄褐色粘土
- 3 茶褐色土
- 4 淡茶褐色土
(黄褐色粘土塊含)
- 5 淡茶褐色土
(4より細かい塊)
- 6 淡灰黄褐色粘土塊
- 7 淡暗茶褐色土
- 8 淡黄褐色粘土・
淡灰黄褐色粘土塊
- 9 暗褐色土
- 10 灰黄色粘質土

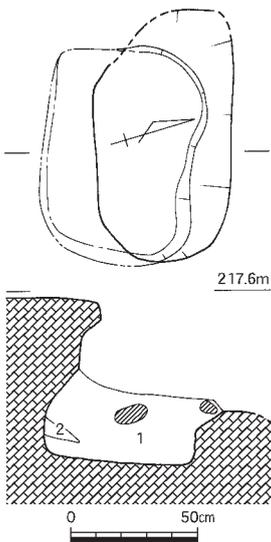


第6図 土壌1 (1/30)・出土遺物 (1/4)



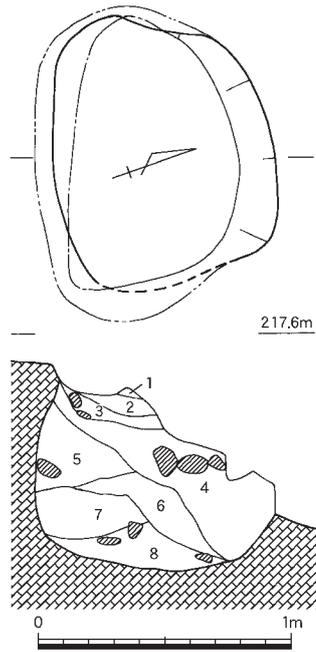
- 1 淡灰褐色粘質砂
(黄色砂塊含)
- 2 暗灰色粘質土
- 3 褐灰色粘質砂
- 4 暗灰黄色粘質砂
~粘質微砂
- 5 褐灰色粘質微砂
(炭・焼土粒多含、
淡褐灰色粘質砂塊含)
- 6 暗灰褐色粘質微砂

第7図 土壌2 (1/30)



- 1 暗灰黄褐色粘質微砂
(炭・焼土粒含、礫含、
淡灰褐色粘質砂含)
- 2 淡灰褐色粘質砂
(壁体崩落土)

第9図 土壌4 (1/30)



- 1 黄灰色粘質微砂塊充填土
- 2 灰色粘質微砂
(炭・焼土粒含、
黄灰色粘質微砂塊含)
- 3 淡灰褐色粘質砂
(黄灰色粘質微砂塊含)
(壁体崩落土)
- 4 暗灰黄褐色粘質微砂
(炭・焼土粒含、礫含、
淡灰褐色粘質砂含)
- 5 淡灰褐色粘質砂
(黄灰色粘質微砂塊含)
(壁体崩落土)
- 6 灰黄色粘質土
(炭・焼土粒少量含)
- 7 灰褐色粘質砂
- 8 暗灰褐色粘質砂
(炭・焼土粒少量含)

第8図 土壌3 (1/30)

土壌3 (第4・8図、図版5)

土壌2の北側に位置し、上面は長軸1.18m、短軸83cm、底面は長軸110cm、短軸57cmを測る。深さは82cm、やや丸底の底面は海拔216.67mを測る。埋土はブロック状で円礫を多く含む。(高田)

土壌4 (第4・9図、図版5)

土壌3の北側に位置する。長楕円形を呈する上面は長軸1.1m、短軸55cm、隅丸方形を呈する底面は長軸78cm、短軸52cmを測る。深さは64cmで、断面形は底に向かって広がっている。平坦な底面は海拔217.02mである。埋土はほぼ1層で円礫を含む。(高田)

土壌5 (第4・10図)

土壌6の北に位置する。底部分には、人頭大から拳大の礫が認められる。これらの礫は、意識的に平たい面を揃えていることが観察された。この上に、7の土器が検出された。

遺物は、7の壺で口縁部と頸部には沈線が施される。(下澤)

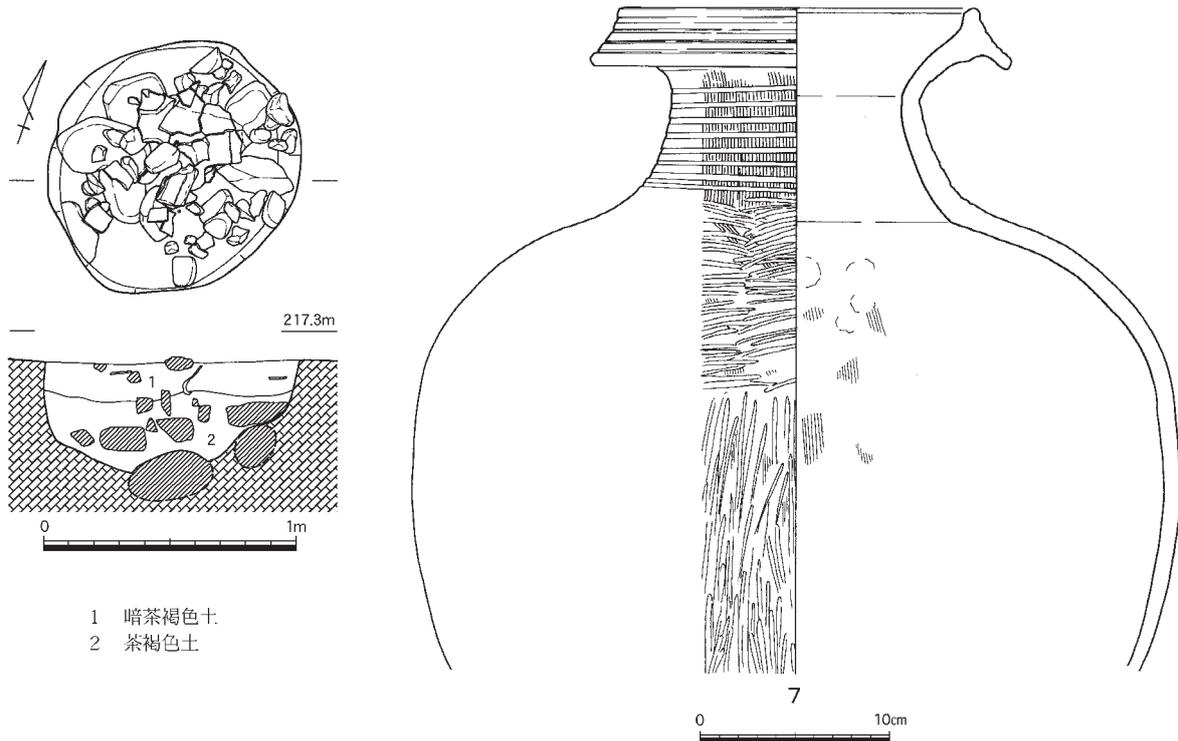
土壌6 (第4・11図)

土壌7の北東側近くに位置する。かなりの削平を受けたと考えられ、深さ10cmほどで確認された。

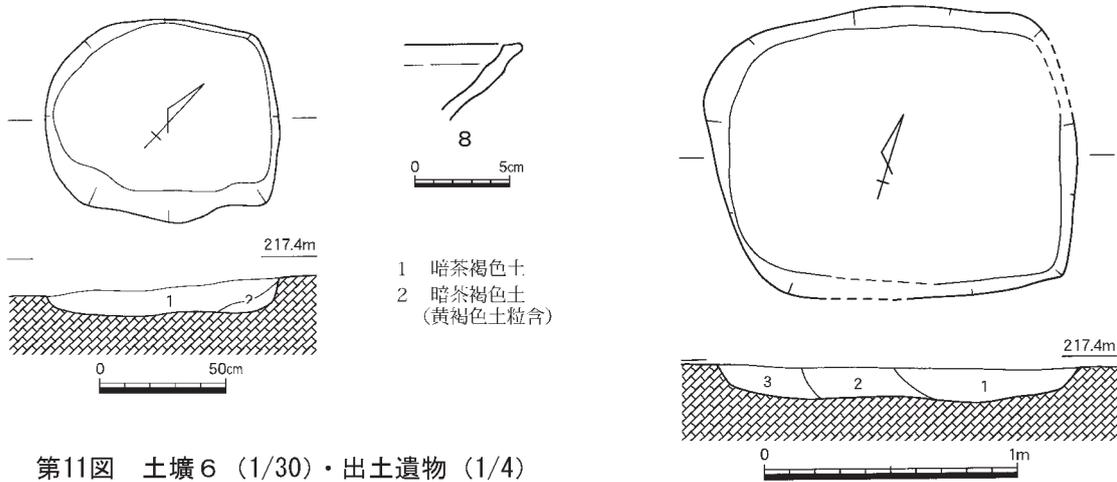
遺物は、8の杯部小片が検出されている。(下澤)

土壌7 (第4・12図)

土壌8の北東側に位置する。土壌6と同じくかなりの削平を受けたと考えられる。断面図の状態から複数の土壌の重複と思考されるが、プラン確認時でそのような状況は確認されなかった。(下澤)



第10図 土壙5 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第11図 土壙6 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙8 (第4・13図、図版7)

土壙7の南に位置する。60×75cmの長方形を呈し、壁面はやや急に立ち上がる。本土壙出土高杯は、土壙6出土高杯と同一個体の可能性がある。(渡邊恵里子)

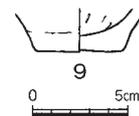
土壙9 (第4・14図)

方形周溝2の北西側で重複して位置する。壁面は、掘り方よりも内側に抉っており、袋状の形態を呈している。埋土は、暗茶褐色土の単純層が観察されている。

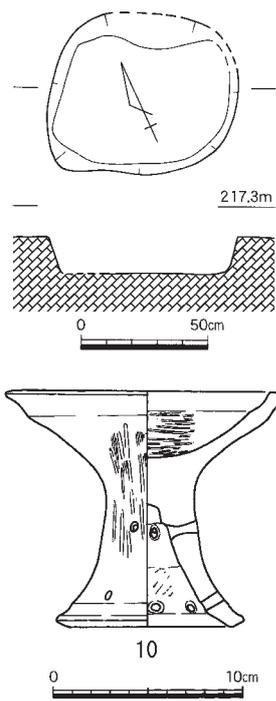
遺物は、端部を肥厚させ凹線を施す甕と高杯の小片が検出されている。

(下澤)

- 1 暗茶褐色土
- 2 黄褐色土
- 3 暗灰褐色土



第12図 土壙7 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第13図 土壙8 (1/30)
・出土遺物 (1/4)

土壙10 (第4・15図)

溝2の北側に位置する。遺存状態は比較的良好、壁面は掘り方よりも内側に抉って袋状の形態を呈する。

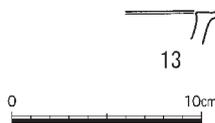
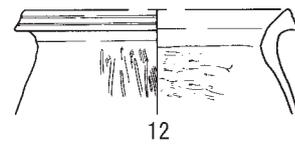
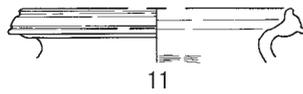
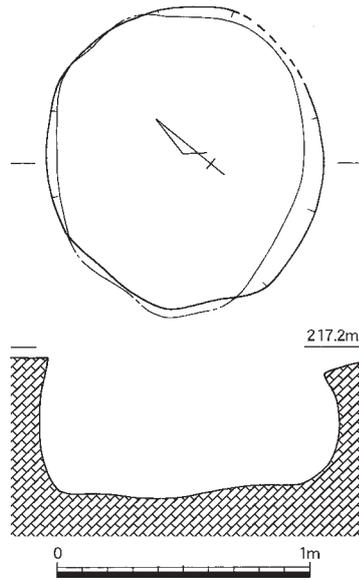
埋土は、暗茶褐色土が主に、土壙中ほどには人頭大の河原石が3個認められた。

遺物は、屈曲する頸部から上方に大きく拡張させる甕である。口縁部外面に凹線など施文はない。(下澤)

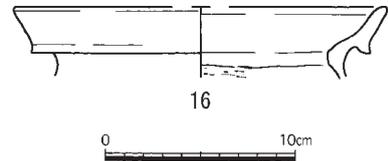
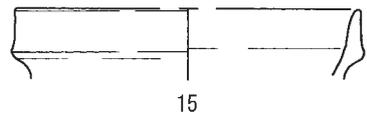
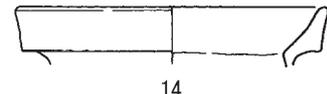
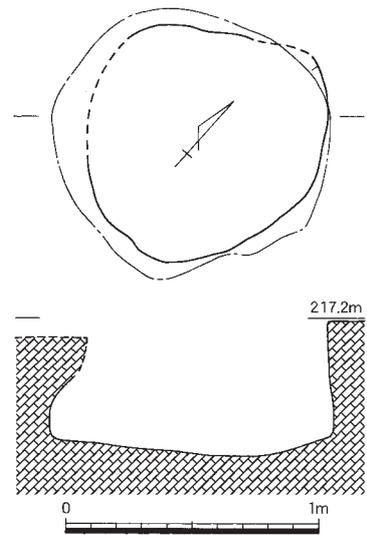
土壙11 (第4・16図)

建物6の北西隅に接して検出した。平面形は1.3×1.2mのほぼ円形、断面形は長方形を呈し、平坦な底面までの深さは20cmを測る。

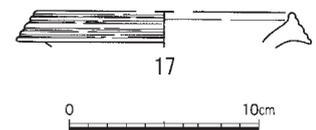
出土遺物は後期だが、後世の可能性もある。(高田)



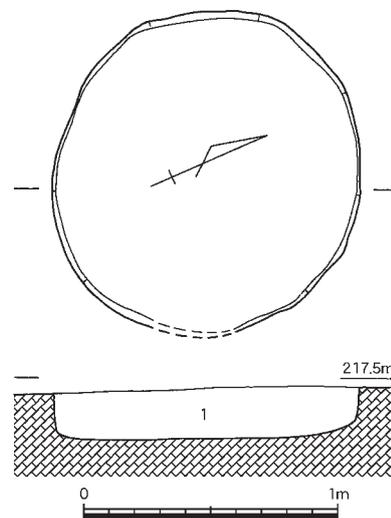
第14図 土壙9 (1/30)
・出土遺物 (1/4)



第15図 土壙10 (1/30)
・出土遺物 (1/4)



1 暗褐灰色粘質微砂



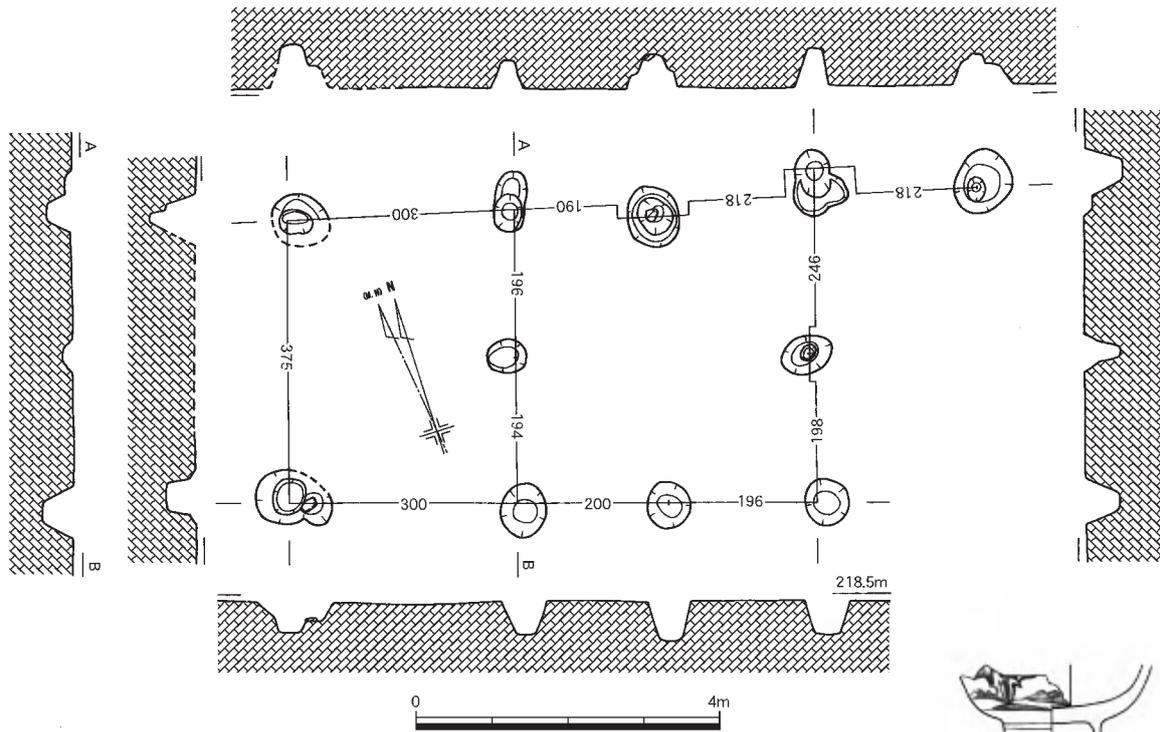
第16図 土壙11 (1/30)
・出土遺物 (1/4)

第3節 中・近世の遺構と遺物

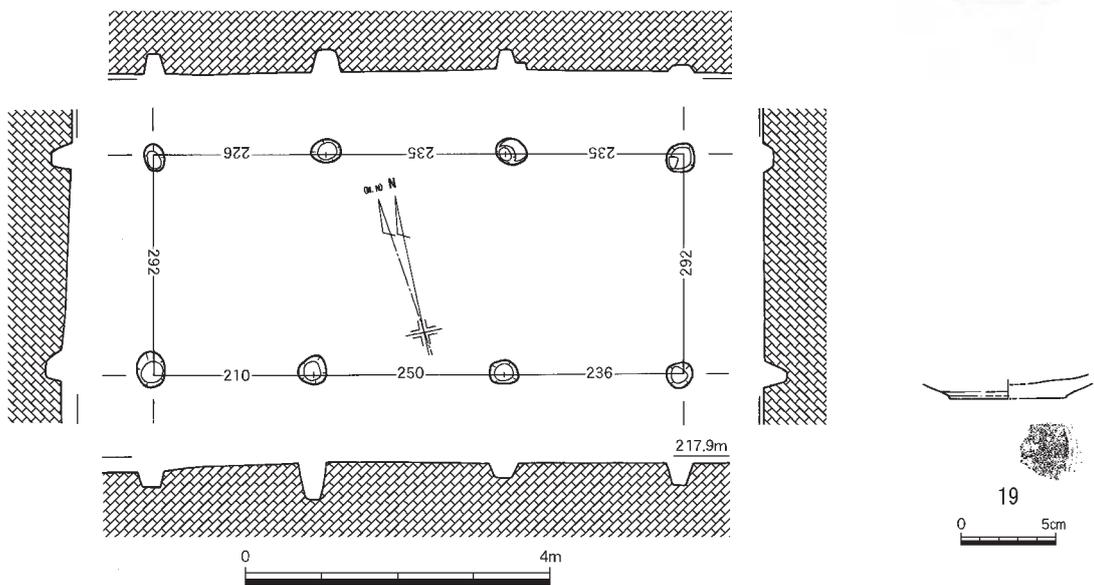
1 掘立柱建物

掘立柱建物 1 (第4・17図)

調査区の北寄りに位置する。3×2間を確認しているが、北側の桁行の東側延長上にも柱穴が存在



第17図 掘立柱建物 1 (1/100)・出土遺物 (1/4)



第18図 掘立柱建物 2 (1/100)・出土遺物 (1/4)

しており、桁行4間以上となるかもしれない。当建物の特徴として、柱穴規模が、他の建物が径40～50cmに比べ、径60～70cmと一回り大きいことが挙げられる。また、溝1より北側で確認された建物は当建物のみであり、他の建物との性格や機能の違いを示唆しているのではないかと考えられる。

南東隅の柱穴内から肥前陶器の碗18が出土しており、近世に属すると考えられる。(渡邊)

掘立柱建物2 (第4・18図、図版1)

掘立柱建物1より、溝1を越えて南側に位置する。溝1とほぼ並行しており、溝1との距離は約3mを測る。柱穴の規模は径30～40cmで、径20cm前後の柱痕を残す柱も確認されている。

北西隅の柱穴から中世～近世と思われる土師器小皿19が出土しているが、掘立柱建物1や溝1との関連は不明である。(渡邊)

掘立柱建物3 (第4・19図)

掘立柱建物2の南に位置する。柱穴は径30～40cmで、径20cm強の柱痕が確認されている。掘立柱建物2と類似した柱穴であるが、両掘立柱建物の間は1mしかなく、主軸方向も若干異なることから、同時期に併存したとは考え難い。

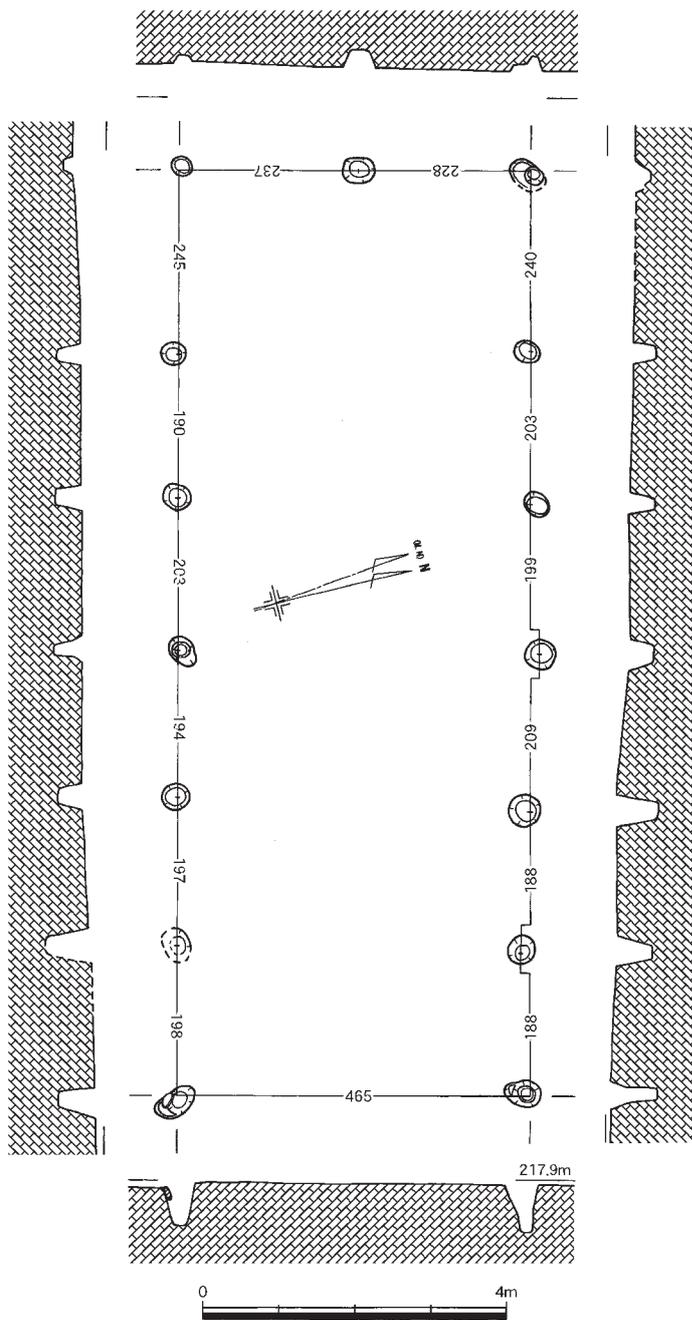
柱穴から遺物は出土していないが、当掘立柱建物の柱穴は窪地1を切っており、早くとも中世後半以降に建てられたと考えられる。(渡邊)

掘立柱建物4 (第4・20図)

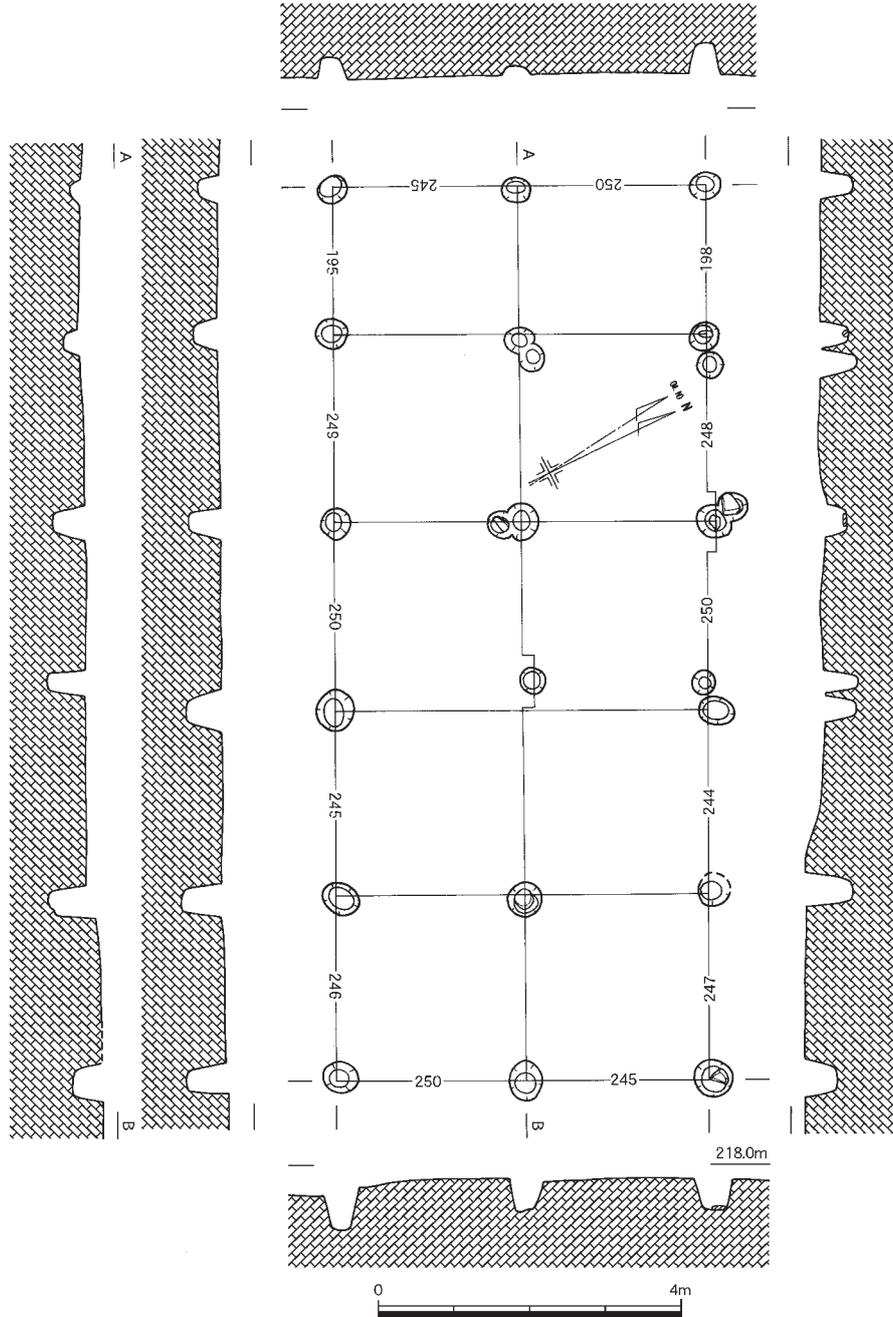
掘立柱建物3の南に位置する。5×2間の総柱の建物である。柱穴の規模は40cm前後で、一部の底面に根石が残されていた。なお、東側4間分の柱間距離はほぼ均一であるが、西端1間のみ50cm近く狭くなっており、西側に縁や庇などを設けていた可能性が考えられる。

時期を特定できる遺物は皆無であるが、掘立柱建物3とは建物間が近接しており、同時期に存在していたとは考え難い。一方、掘立柱建物2との距離は3.8m余りあり、主軸方向もほぼ同じであることから、併存していた可能性は十分に考えられる。

(渡邊)



第19図 掘立柱建物3 (1/100)



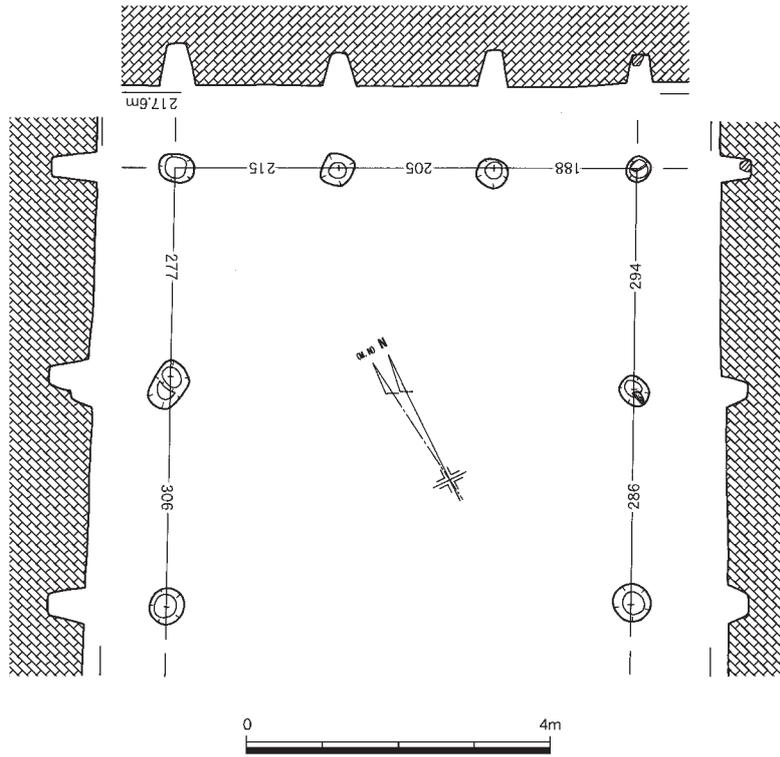
第20図 掘立柱建物4 (1/100)

掘立柱建物5 (第4・21図)

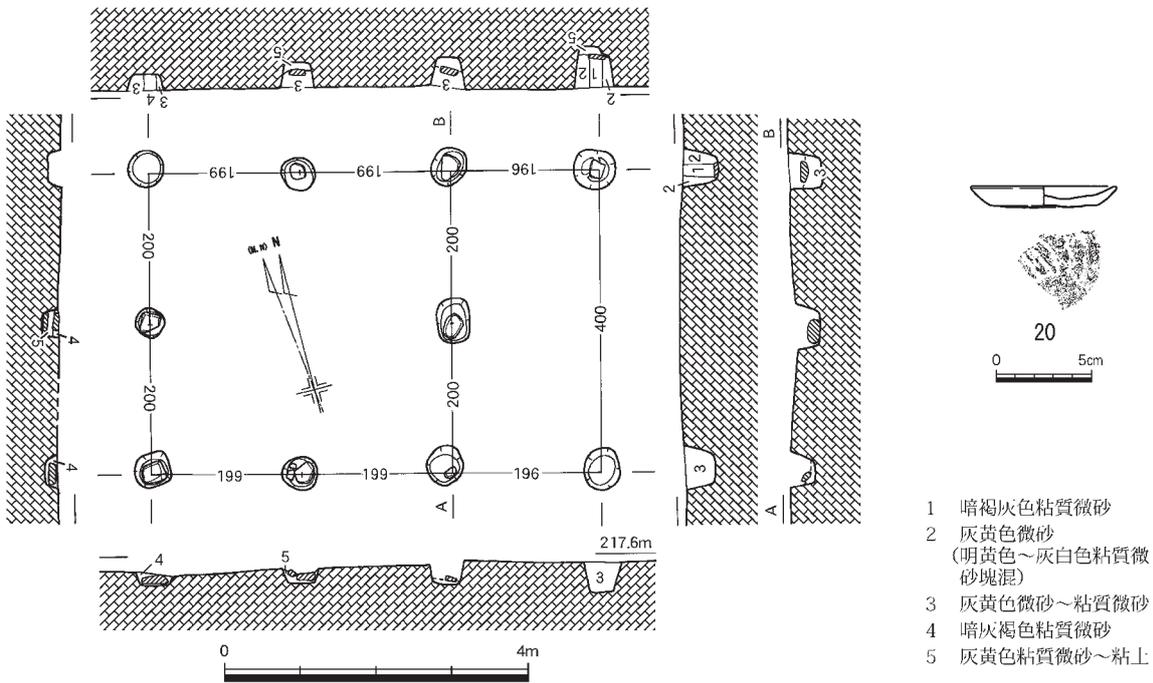
掘立柱建物4の南に位置する。南北2間、東西3間のみ確認しているが、さらに南に延び、長軸を南北方向にとる可能性が高い。この場合、溝2とは同時期に存在していないことになるが、両者の切り合いを確認できておらず、前後関係は不明である。(渡邊)

掘立柱建物6 (第4・22図、図版2)

溝2の北東部で検出した3×2間の掘立柱建物である。桁行全長は5.94m、梁間が4m、床面積は23.8㎡を測る。柱穴の長径は40~60cm、深さは15~55cmと個々の差があるが、扁平な根石をもつことがほぼ共通する。



第21図 掘立柱建物5 (1/100)



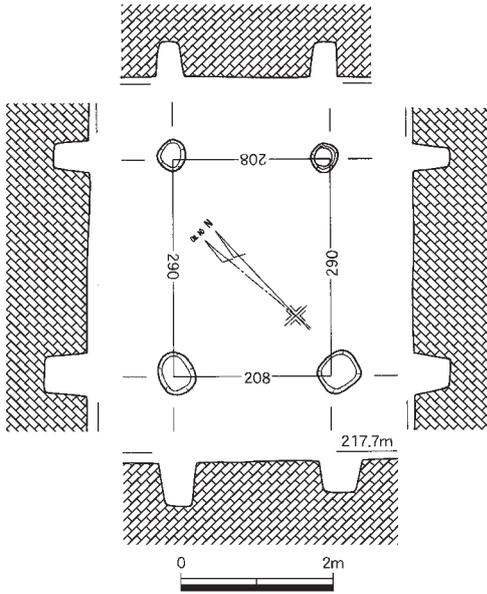
第22図 掘立柱建物6 (1/100)・出土遺物 (1/4)

建物の時期は、図示した土師器の小皿から中世に属するものと考えられる。

(高田)

掘立柱建物7 (第5・23図)

溝4東側の溝の北東側と重複している。規模は、1×1間で面積6㎡を測る。柱間の長さは、それ



第23図 掘立柱建物7 (1/100)

それぞれしく形の整ったプランを呈する。

溝4と重複しているが、その前後関係については掘立柱建物10で記したように把握することができなかった。

(下澤)

掘立柱建物8 (第5・24図、図版2)

掘立柱建物9・10、柱穴列8と重複する2×1間の掘立柱建物で、そのいずれとも棟方向が異なる。桁行全長4.28m、梁間が2.46m、床面積は10.5㎡を測る。柱穴掘り方はほぼ円形で、その長径は45~55cm、深さは20~35cmを測る。南西の柱穴を除いて底面に根石をもつ。なお、南東の柱穴を掘立柱建物10と共有する。

(高田)

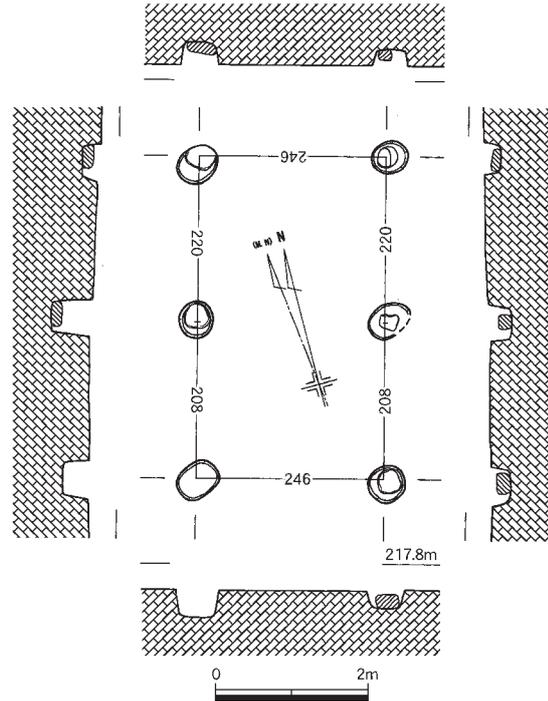
掘立柱建物9 (第5・25図、図版2)

掘立柱建物8および掘立柱建物10と重複して検出された。平面規模は2×1間と小さいが、柱穴は大きいもので径50cmを測り、底面に扁平な根石を有するなど、掘立柱建物8・11と類似した構造をとっている。遺物は皆無であるが、柱穴の類似から、周辺の建物群と大差ないものと考えられる。

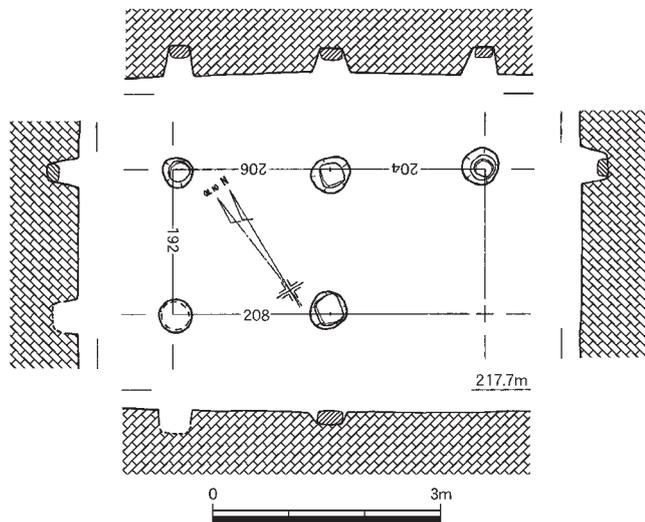
(渡邊)

掘立柱建物10 (第5・26図、図版2)

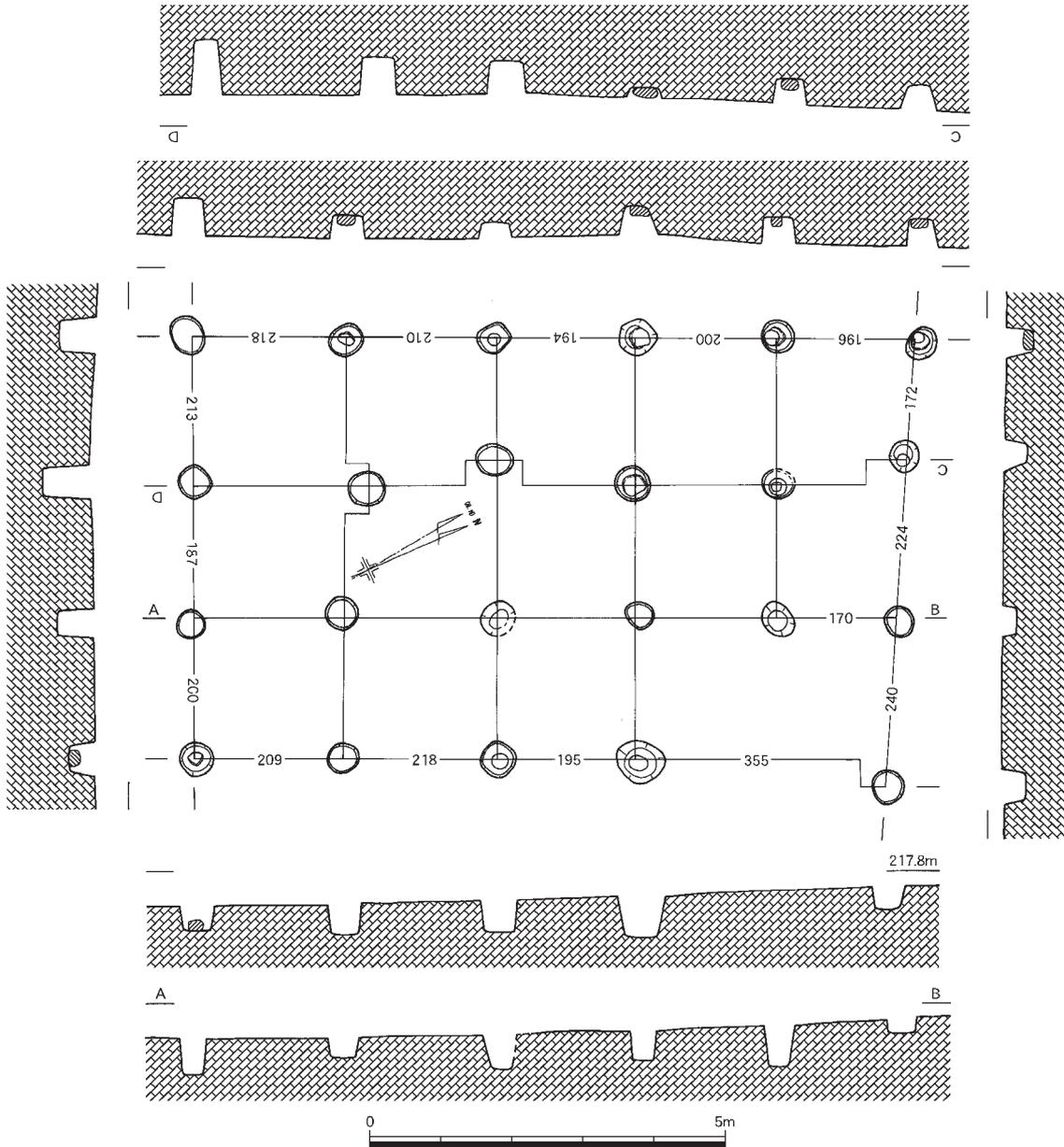
溝4の南側に位置する。規模は、桁行5間、梁間3間の面積61.6㎡で、検出された建物としては最も大きいものである。この掘立柱建物は、桁と梁において直線で通らない部分が認められ、さらに、



第24図 掘立柱建物8 (1/100)



第25図 掘立柱建物9 (1/100)



第26図 掘立柱建物10 (1/100)

掘立柱建物8と柱を共有させることにより想定している。また、礎石の存在する柱が、北側に偏在するなど検討を要する内容を含む遺構である。

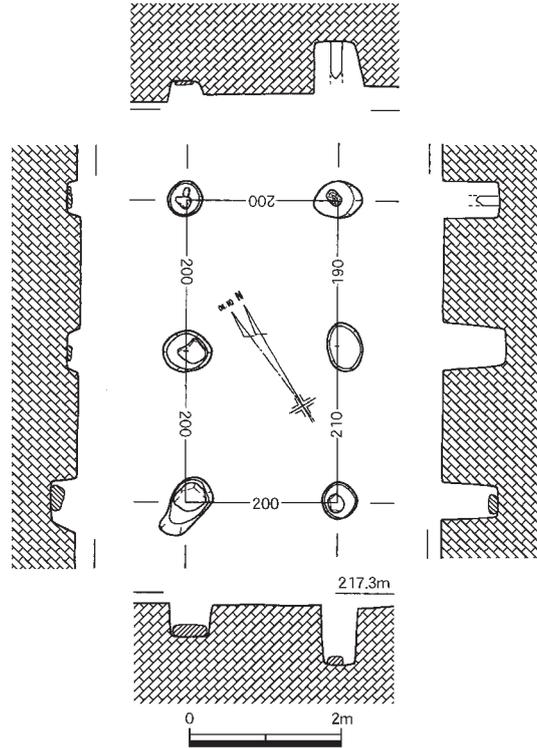
この建物周辺の調査は、2月末から3月初めにかけての気候条件が最悪の時期であり、さらに、応援体制での調査になったため、統括的な遺構の把握が充分にできなかった。(下澤)

掘立柱建物11 (第5・27図)

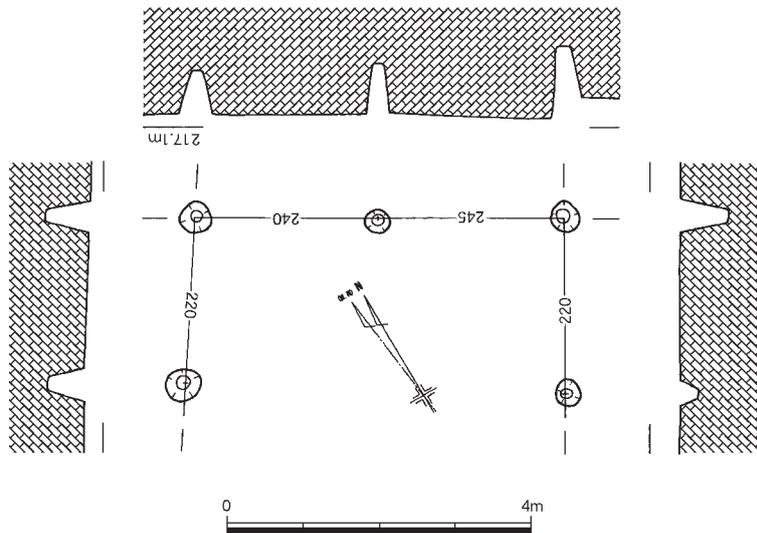
掘立柱建物10の南東に位置し、溝6と重複する2×1間の掘立柱建物である。桁行全長4m、梁間が2m、床面積は8㎡を測る。柱穴掘り方は円形ないし長楕円形を呈し、その長径は45～85cm、深さは10～80cmと個々の差がある。扁平な根石をもつものが多い。(高田)

掘立柱建物12 (第5・28図)

掘立柱建物11の南に位置する。南北1間、東西2間確認しているが、南側の調査区外にさらにのび



第27図 掘立柱建物11 (1/100)



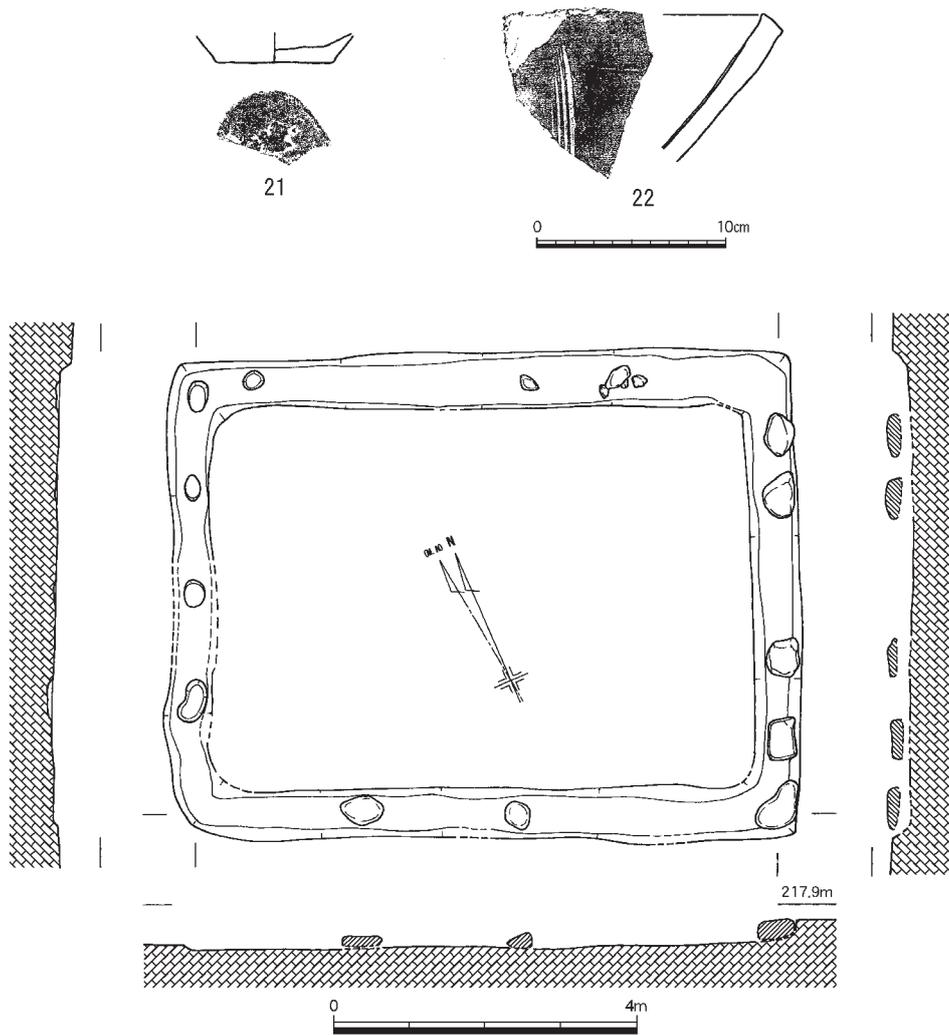
第28図 掘立柱建物12 (1/100)

ると想定される。柱穴は径30~40cmとさして大きくないが、深さは最も深いもので70cmを超えており、本来はかなり規模の大きな掘立柱建物であった可能性も考えられる。(渡邊)

2 方形周溝

方形周溝 1 (第4・29図、図版2)

掘立柱建物5の西側に位置し、方形周溝2と重複している。規模は8.3×6.4m、幅50~76cmで深さ



第29図 方形周溝 1 (1/100)・出土遺物 (1/4)

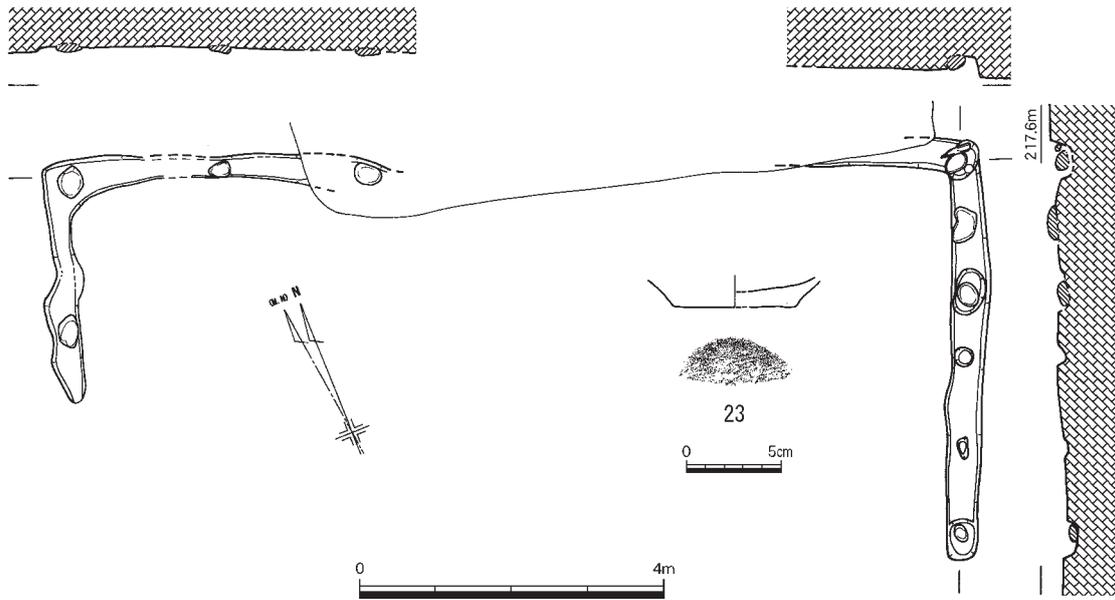
25cm前後の方形に囲む溝である。溝の中には、河原石が9個認められた。これら河原石は、平たい面を上にした状態で遺存していた。とくに、南東側の溝部分において等間隔に存在したことをうかがわせる状況で検出された。さらに、北西側の溝部分では、それらの石を据えたと思われる凹みが確認されている。このようなことから、溝には本来は河原石が等間隔に据えられていたものと考えられる。この遺構の状況から土塀状の構築物を想定させる。

遺物は、22に示すような13世紀代の播鉢を検出しているが、埋土が堅くしまつてなく、ほくほくの柔らかい基盤層混じりの黒色土などの状態から近世以降と思考する。(下澤)

方形周溝 2 (第4・30図、図版2)

掘立柱建物5の西側に位置し、方形周溝1と重複している。規模は $12.24 \times 5.6m + \alpha cm$ 、幅26~50cmで深さ15cm前後の「コ」の字状の溝であるが、本来は、方形周溝1と同様に方形の溝であったと考えるのが妥当である。この遺構も、溝中に8個の河原石が遺存し、それを据えたと思われ凹みも検出されている。このようなことから、方形周溝1と同様な遺構と思考される。

遺物は中世に遡る底部であるが、遺構の内容から方形周溝1と前後する時期と判断される。(下澤)



第30図 方形周溝 2 (1/100)・出土遺物 (1/4)

3 柱穴列

柱穴列 1 (第4・31図)

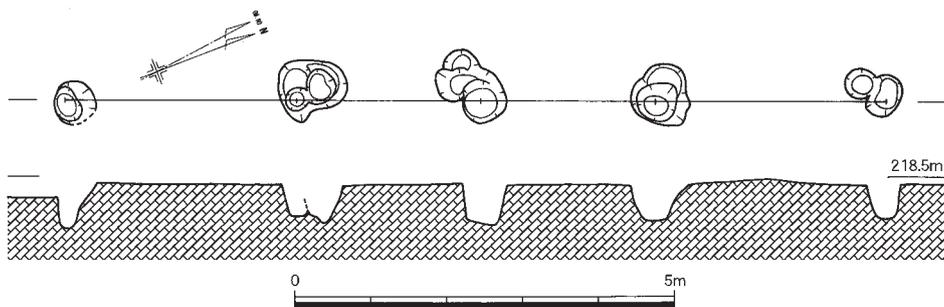
掘立柱建物 1 の西側に位置する、南北方向の柱穴列である。掘立柱建物 1 の西辺との距離は約80cmである。柱穴の規模は径60cm前後、底面の海拔高は217.8~217.9mと掘立柱建物 1 とほぼ同様で、掘立柱建物 1 に付随する、塀などの施設であった可能性が考えられる。(渡邊)

柱穴列 2 (第4・32図)

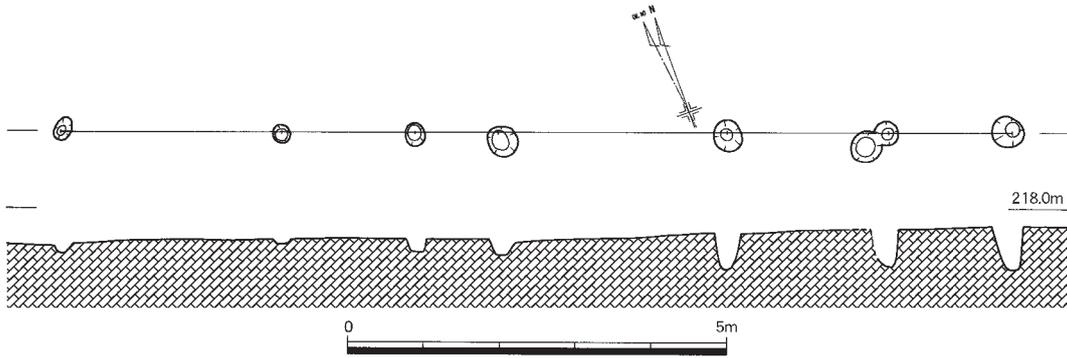
溝 1 の北側約 3 m に位置し、柱穴列 3 ~ 5 と同一の軸方向をもち、溝 1 に平行する。7 本の柱穴からなり、全長は 12.45 m を測る。柱間は 1.06 ~ 2.96 m と不揃いである。(高田)

柱穴列 3 (第4・33図、図版 5)

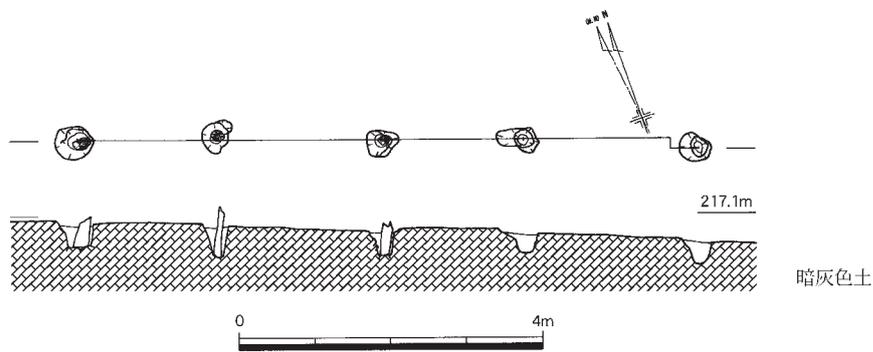
溝 1 の掘り下げ途中で柱根を確認し、溝底を精査して検出した。5 本の柱穴からなり、全長は 8.05 m、柱間は 1.7 ~ 2.3 m を測る。柱穴の長径は 42 ~ 55 cm で、西側 3 本は柱根が遺存する。柱穴底のレベルは周囲のものより 50 ~ 80 cm も深い。溝 1 の埋没後に掘り込まれたものであろう。(高田)



第31図 柱穴列 1 (1/100)



第32図 柱穴列2 (1/100)



第33図 柱穴列3 (1/100)

柱穴列4 (第4・34図)

溝1の南側約5.5mに位置し、柱穴列5とは約7mの間隔をおく。3本の柱穴からなり、全長は3.25mを測る。柱間は1.55mと1.7mである。柱穴掘り方は円形を呈し、径40cm前後を測る。(高田)

柱穴列5 (第4・35図)

溝1の南側約6mに位置し、両者の間は遺構が見られない。5本の柱穴からなり、全長7m、柱間は1.6~1.95mを測る。ほぼ円形の柱穴掘り方で、径30~40cm、深さ15~30cmを測る。(高田)

柱穴列6 (第5・36図)

掘立柱建物10の北側に位置する。柱穴3本分しか検出されておらず、何らかの施設を構成するかどうか明確でない。柱間は1.8~2m、全長3.8mを測る。(渡邊)

柱穴列7 (第5・37図)

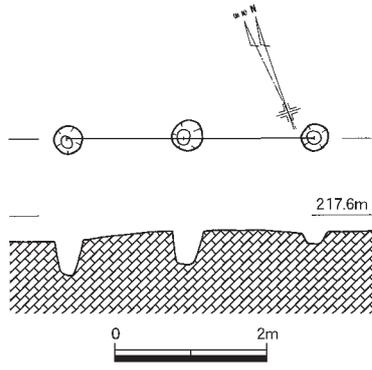
掘立柱建物10の南西に位置する。南北方向にほぼ等間隔で並んでおり、周辺に同規模の柱穴も無いことから、独立した施設と考えた。柱間は2.3~2.4m、全長7mを測る。(渡邊)

柱穴列8 (第5・38図)

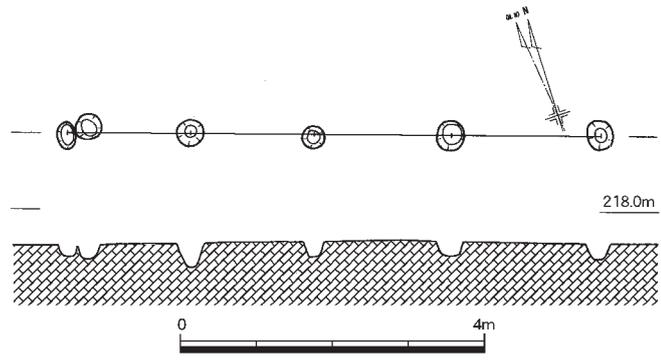
掘立柱建物8・10と重複している、東西方向の柱穴列である。東端の1本を除いて全て柱痕が確認されている。柱間は1.8~2.1m、全長10mを測る。(渡邊)

柱穴列9 (第4・39図)

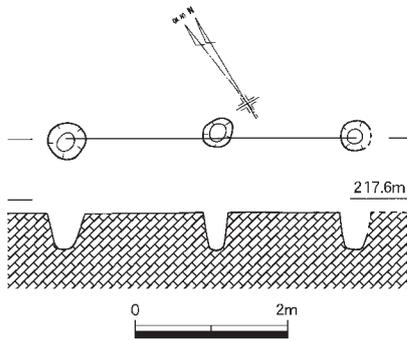
町道の東側で検出した。6本の柱穴からなり、全長10.07m、柱間は両端が2.12と2.19m、内側が1.92~1.98mを測る。柱穴掘り方は円形を呈し、径35~45cm、深さは16~37cmを測る。(高田)



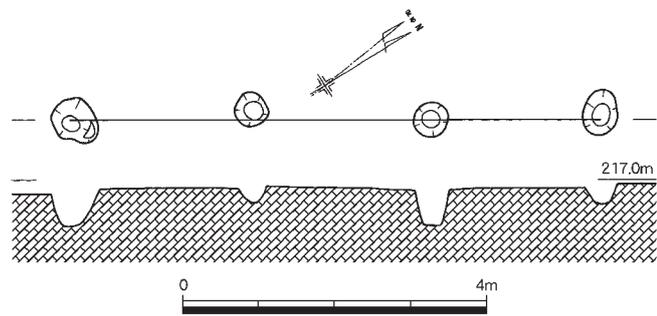
第34図 柱穴列4 (1/100)



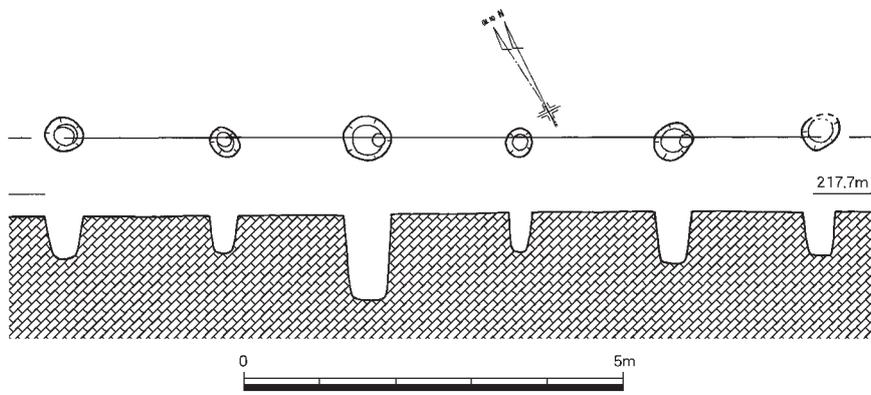
第35図 柱穴列5 (1/100)



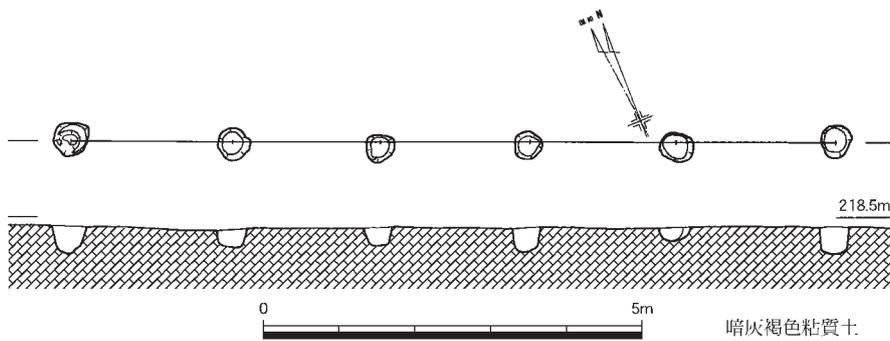
第36図 柱穴列6 (1/100)



第37図 柱穴列7 (1/100)



第38図 柱穴列8 (1/100)



第39図 柱穴列9 (1/100)

4 土壙墓

土壙墓 1 (第4・40図)

調査区北端に位置する。平面形は長軸95cm、短軸86cmの方形で、深さは28cmを測る。ほぼ垂直な壁と平坦な底面をもつ。出土遺物は煙管の火皿と木質が一部付着した鉄製の棺金具3点である。このことから近世の木棺墓と考えられ、他の5基と墓域を形成していたものであろう。(高田)

土壙墓 2 (第4・41図)

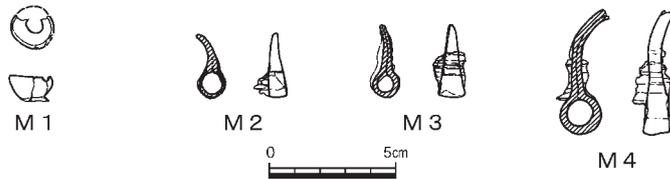
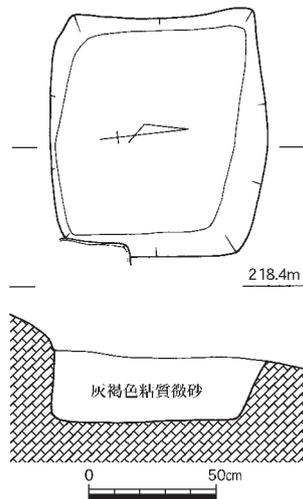
土壙墓 1 に近接する。平面形は長径1m、短径82cmの楕円形で、深さは30cmを測る。断面は逆台形で平坦な底面をもつ。出土遺物はないが、検出状況から近世墓と考えられる。(高田)

土壙墓 3 (第4・42図)

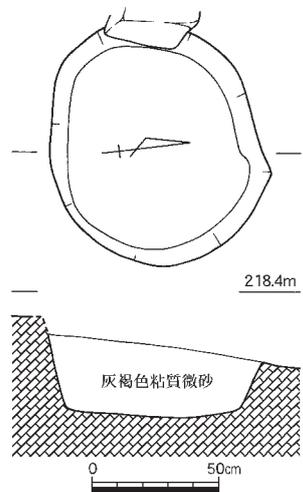
土壙墓 1 の南2.5mに位置する。平面形は径1m前後の円形で、深さ17cmを測る。断面は逆台形で平坦な底面をもつ。出土遺物はないが、検出状況から近世墓と考えられる。(高田)

土壙墓 4 (第4・43図)

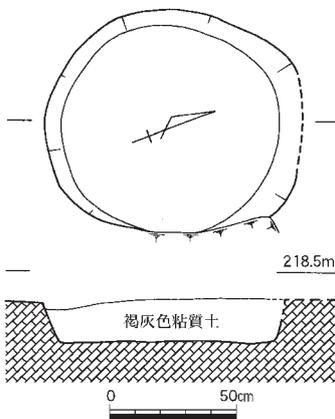
土壙墓 3 の西3mに位置する。平面形は長径1.07m、短径70cmの長楕円形で、深さは30cmを測る。断面形は椀形を呈し、南東底面には地山礫が突出する。出土遺物は「元祐通宝」の銅銭のみ1



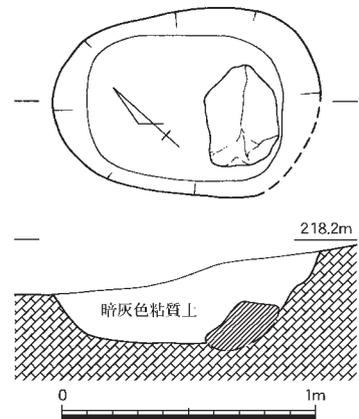
第40図 土壙墓 1 (1/30)・出土遺物 (1/3)



第41図 土壙墓 2 (1/30)



第42図 土壙墓 3 (1/30)



第43図 土壙墓 4 (1/30)
・出土遺物 (1/2)

点だが、検出状況から他例同様に近世墓と考えられる。(高田)

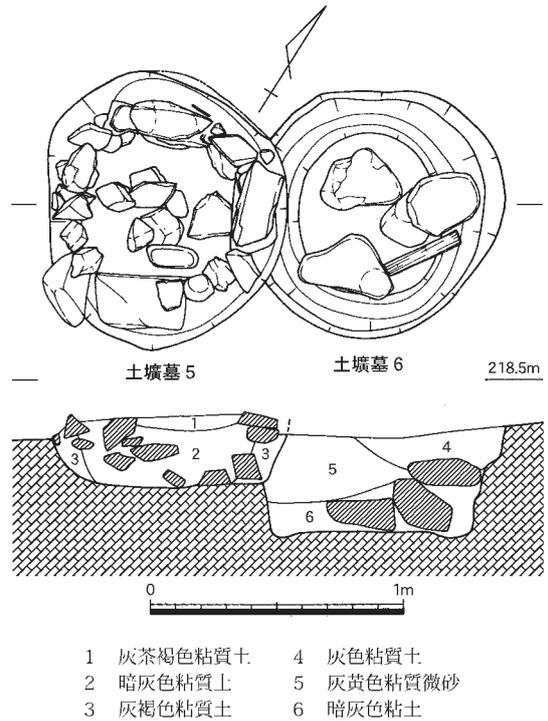
土壙墓 5 (第4・44・45図)

土壙墓6と重複し、それより新しい。平面形は1.1m×95cmのほぼ円形で、深さ28cmを測る。断面は逆台形で平坦な底面をもつ。壁面に沿って10~40cmの角礫を2~3段の環状に組んでいる。

出土遺物には備前焼の甕底部がある。(高田)

土壙墓 6 (第4・44図)

土壙墓5に切られるが、平面形は1.05m×98cmのほぼ円形で、深さ40cmを測る。断面は逆台形で、底面には壁面に沿って浅い溝をもつ。壙内には30cm前後の角礫4個が落ち込んでいたが、出土遺物はない。(高田)

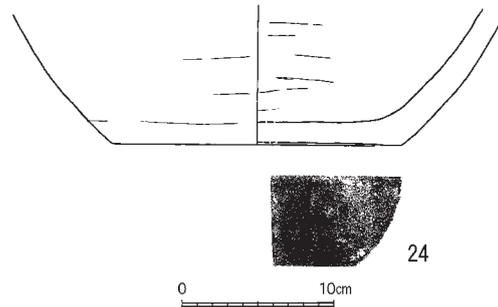


第44図 土壙墓5・土壙墓6 (1/30)

- | | |
|-----------|-----------|
| 1 灰茶褐色粘質土 | 4 灰色粘質土 |
| 2 暗灰色粘質土 | 5 灰黄色粘質微砂 |
| 3 灰褐色粘質土 | 6 暗灰色粘土 |

土壙墓 7 (第4・46・47図、図版3)

溝1の南側、掘立柱建物2の北東に位置する。棺材が比較的良好に依存しており、径約1mの掘り方内に、径約55cmの桶を棺として埋葬している状況が看取される。棺内には人骨の一部も遺存していた。副葬品には古銭のほか、残存状態が悪く図示し得なかったが、朱塗りの椀も出土している。なお、古銭は人骨より下位で出土している。時期は寛永通宝から、18世紀以降と考えられる。(渡邊)



第45図 土壙墓5出土遺物 (1/5)

土壙墓 8 (第4・48図、図版3)

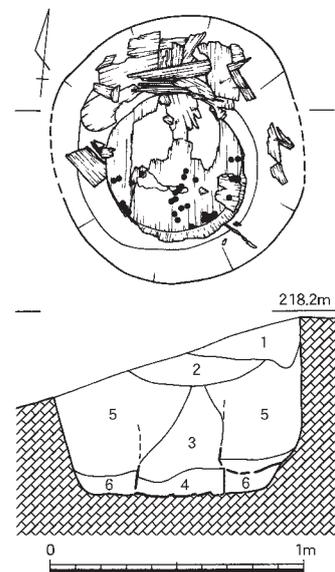
土壙墓7の東に位置する。棺材の遺存状況は良くないが、掘り方の形状や棺痕跡から80×55cmの箱形の棺を想定でき、蓋材の痕跡も確認された。遺物は出土していないが、他の土壙墓同様、近世に属するものと考えられる。(渡邊)

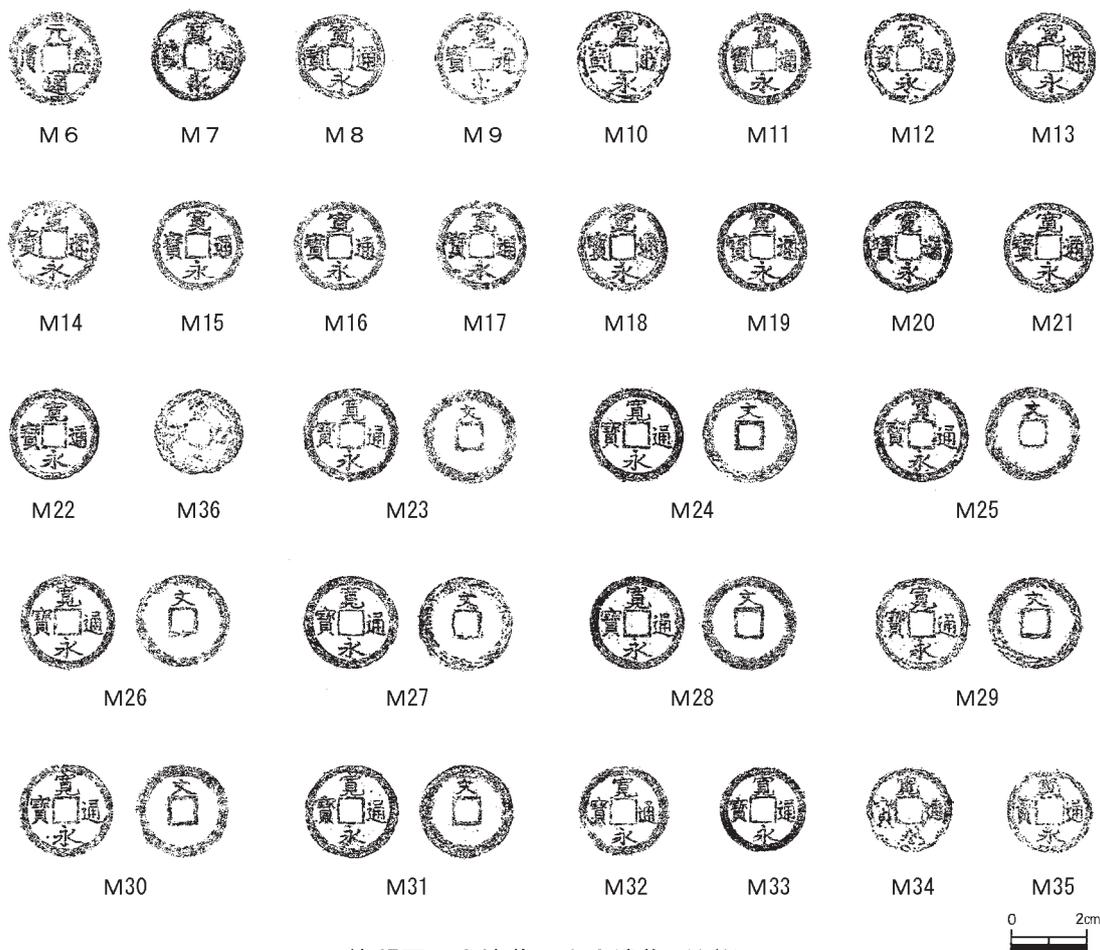
土壙墓 9 (第4・49図)

掘立柱建物3の南に位置する。棺材は遺存しておらず副葬品もみられないが、掘り方の形状や底面に棺の側板痕跡らしき溝が検出されたことから、土壙墓と考えた。掘立柱建物3の柱穴を切っており、これより古く位置付けられる。(渡邊)

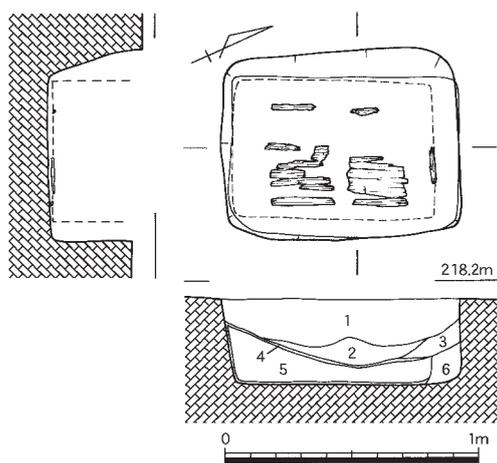
- | |
|----------------------------|
| 1 淡黄灰色砂質土
(灰色粘土少混) |
| 2 褐灰色粘質土
(黄色粘土粒多含) |
| 3 灰色~灰白色細砂
(灰色粘土含) |
| 4 灰色粘土 |
| 5 灰褐色粘質土
(黄色粘土粒・白色細砂粒含) |
| 6 褐灰色粘質土 |

第46図 土壙墓7 (1/30)



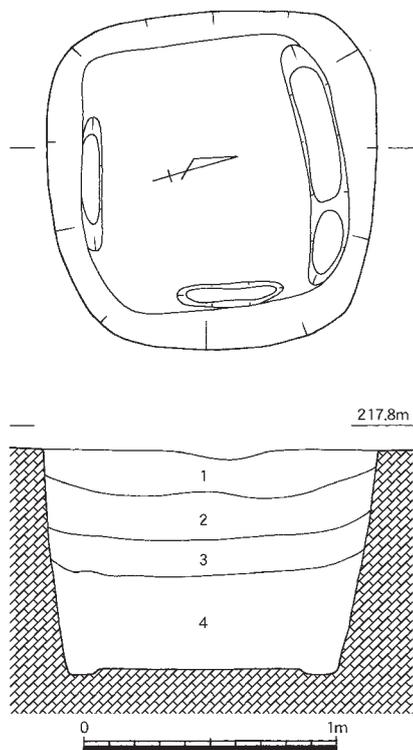


第47図 土壙墓7出土遺物 (1/2)



- | | |
|----------------|----------|
| 1 暗褐色砂質土・黄白色微砂 | 3 灰褐色砂質土 |
| 2 明黄色粘質微砂 | 4 暗灰色粘土 |
| | 5 褐色粘質土 |
| | 6 灰白色砂質土 |

第48図 土壙墓8 (1/30)



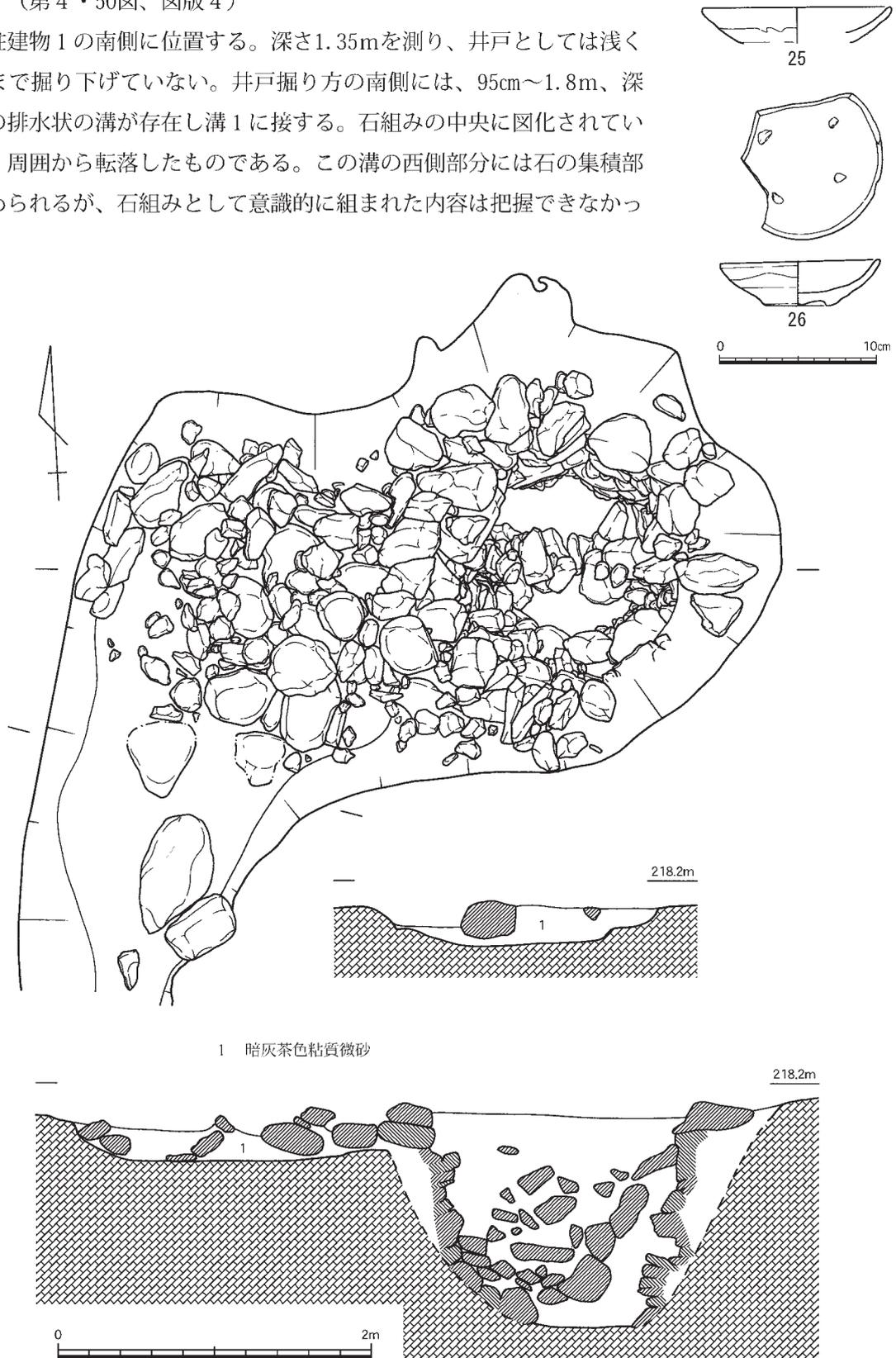
- | |
|-----------|
| 1 黑褐色砂質土 |
| 2 淡茶灰色粘質土 |
| 3 茶灰色砂質土 |
| 4 淡橙灰色細砂 |

第49図 土壙墓9 (1/30)

5 井戸

井戸1 (第4・50図、図版4)

掘立柱建物1の南側に位置する。深さ1.35mを測り、井戸としては浅く湧水層まで掘り下げていない。井戸掘り方の南側には、95cm~1.8m、深さ25cmの排水状の溝が存在し溝1に接する。石組みの中央に圀化されている石は、周囲から転落したものである。この溝の西側部分には石の集積部分が認められるが、石組みとして意識的に組まれた内容は把握できなかった。



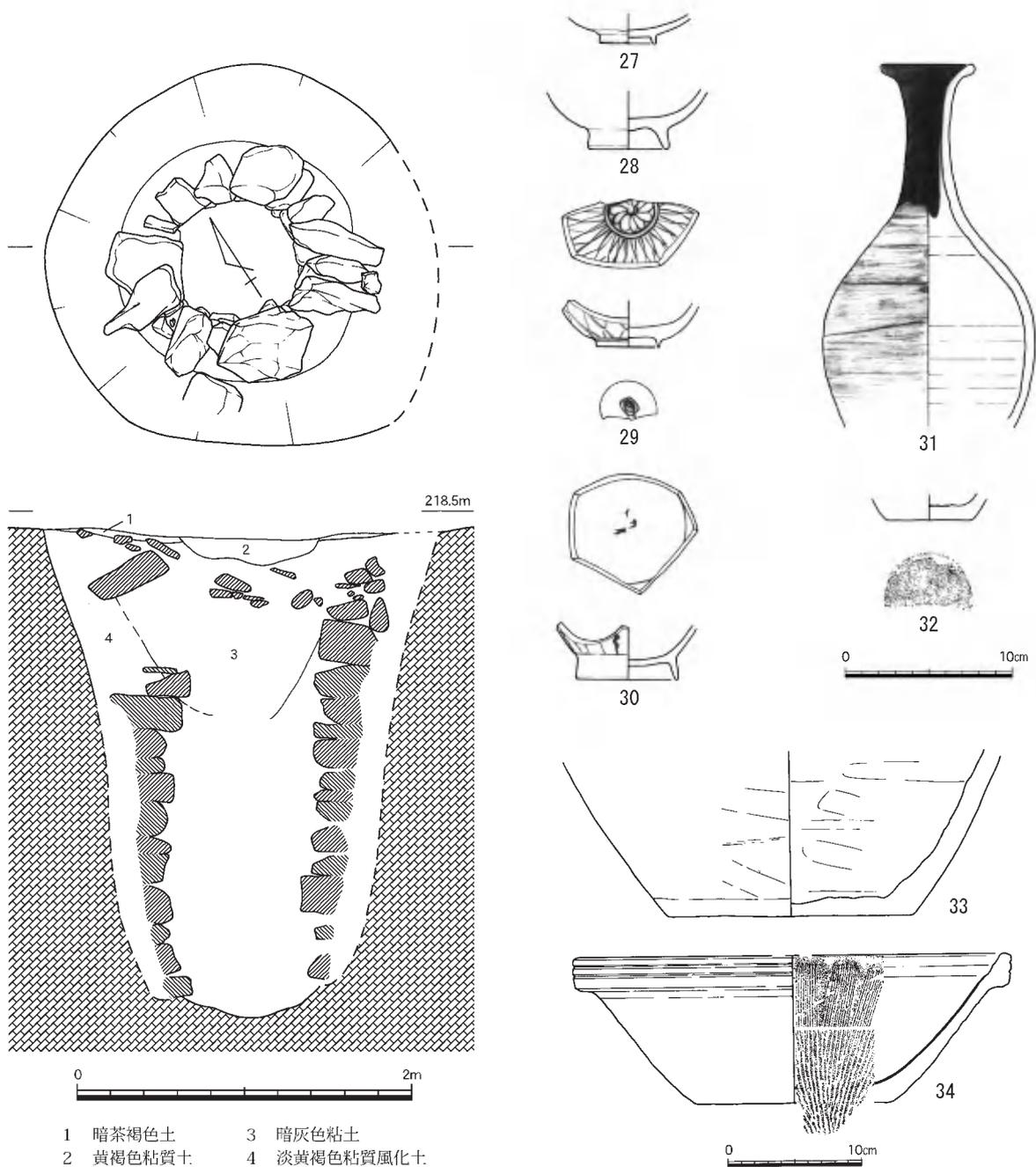
第50図 井戸1 (1/40)・出土遺物 (1/4)

溝1との関係は、明確にできなかったが底の高さの関係から、排水溝と思考される。 (下澤)

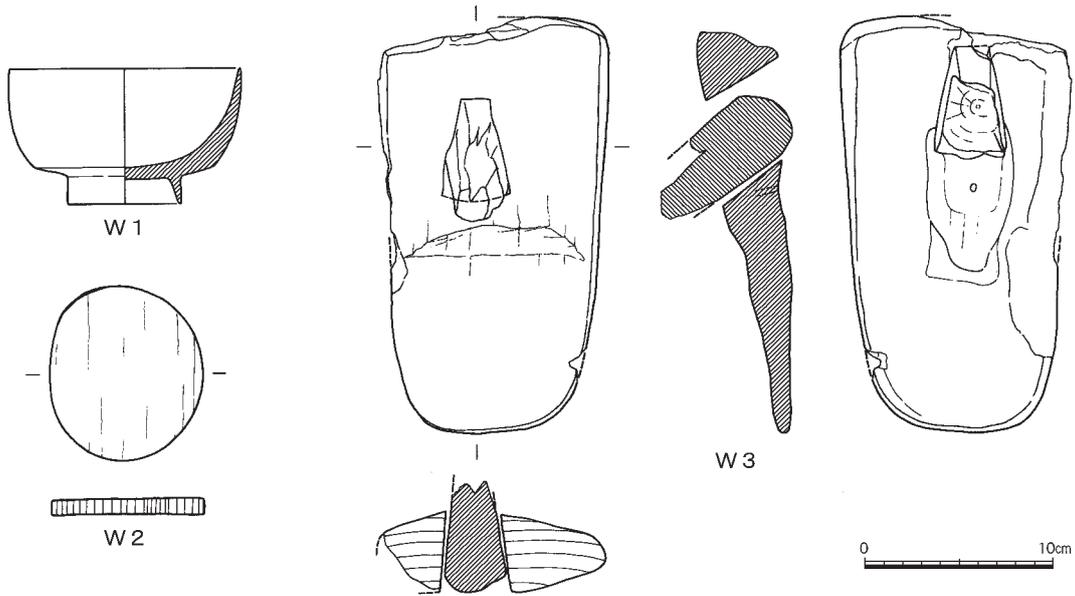
井戸2 (第4・51・52図、図版4)

土壌14の東側に位置する。深さ2.9mを測るが、底は、花崗岩であるため明確な湧水層には掘り込まれていない。しかし、調査中は、井戸の壁面から常時水が出ている状況であった。石組みは、個々の石が面を揃えるということではなく、凹凸が顕著で雑な築き方である。

遺物は、陶器、磁器、木器を検出している。陶器は、27・28と31~34で、32~34は備前焼と考えられ34は6本1組みの播目が施される播鉢である。磁器は、29と30で肥前産と想定され、29の高台内側には簡略化した銘が認められる。これらの遺物の時期は、17世紀末から19世紀代に含まれるものである。



第51図 井戸2 (1/40)・出土遺物① (1/4, 1/5)



第52図 井戸2出土遺物② (1/4)

木器は、3点検出されている。W1は漆塗の碗で、高台内側に墨書が認められる。W2は柄杓で、底と推測される。W3は鍬で、鉄先の装着は認められなかった。(下澤)

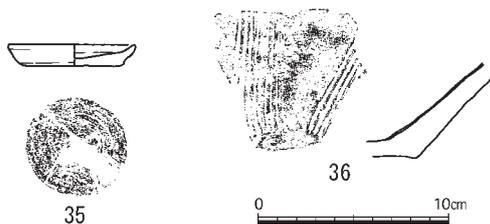
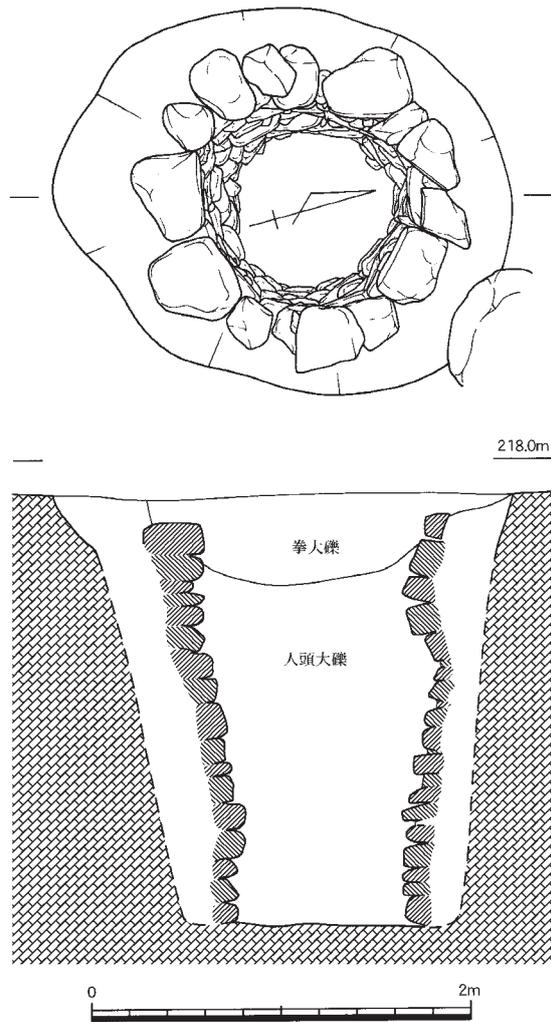
井戸3 (第4・53図、図版4)

建物2・3の東側で検出した井戸で、石組みの井側をもつ。掘り方は2.4×2mの楕円形を呈する。底面の海拔高は215.55m、検出面からの深さは2.3mを測る。井側の内径は上端で1.05m、下端で85cmと底に向かって狭くなる。

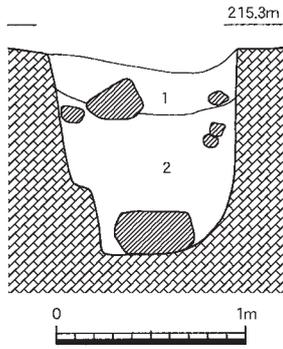
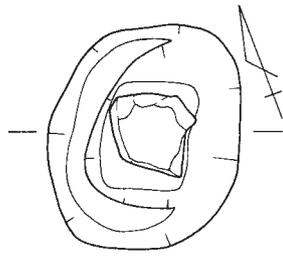
図示した遺物は土師器の小皿35と、備前焼の播鉢底部片である。これらの遺物は室町時代に属するものと考えられる。(高田)

井戸4 (第5・54図)

調査区西側の中央付近、土壇27の東に位置する。検出面では楕円形だが、底部では1.1m×



第53図 井戸3 (1/40)・出土遺物 (1/4)



1 暗茶褐色土 (ローム粒多含) 2 暗茶褐色土

第54図 井戸4 (1/40)

90cmの長方形を呈する。底面は湧水層に達していた。底部に大きな石が入っていたが、土壙27・28にもかなり石が入っており、埋めるために人為的に放り込んだか、もしくは転落石の可能性が考えられる。時期を示す遺物はなにも出土しなかった。(渡邊)

6 土壙

土壙12 (第4・55図、図版7)

調査区北部に位置し、土壙墓5・6の南側に近接する。平面形は北半方形、南半円形を呈し、長軸1.25m、短軸90cmを測る。壁はいずれも緩やかに傾斜する。検出面から底面までの深さは、円形部分で25cmを測り、方形部分がそれより一段高くなる。

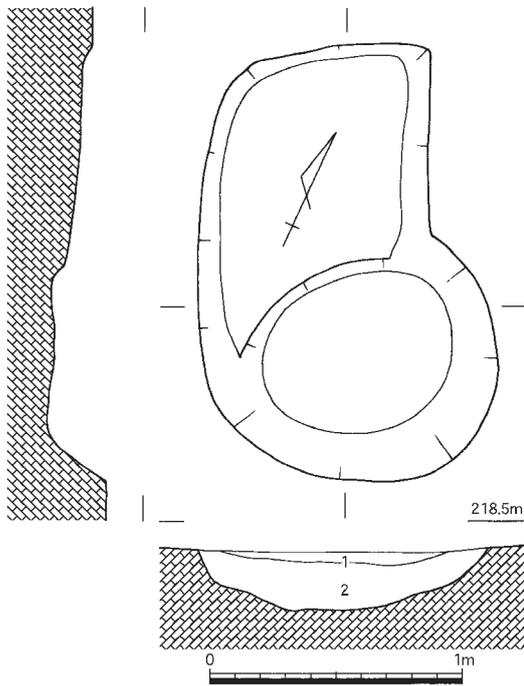
図示した遺物は、肥前陶器碗37と備前焼の壺38である。土壙の時期は、近世と考えられる。(高田)

土壙13 (第4・56図)

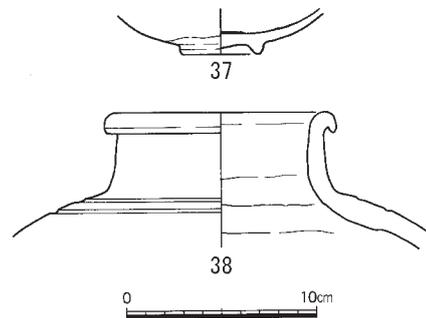
柱穴列の北に位置する。平面形は径1.04mのほぼ円形で、深さ35cmを測る。断面は逆台形で、底面はほぼ平坦となり、海拔高は217.95mである。規模や形態は、土壙墓としたものに類似する。(高田)

土壙14 (第4・57図)

土壙13の南東5mに位置する。平面形は径1m前後のほぼ円形を呈し、深さは30cmを測る。壁はほぼ垂直で、平坦な底面の海拔高は217.95mである。規模や形態は、土壙墓としたものに類似する。(高田)



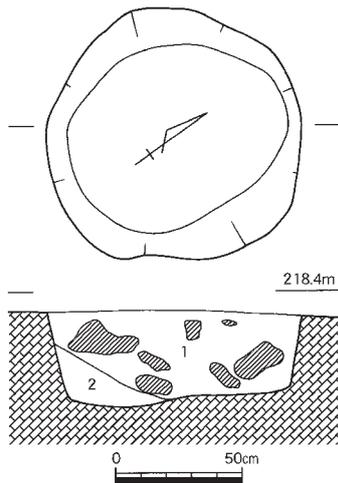
1 暗灰褐色粘質土 2 暗褐色粘質土



第55図 土壙12 (1/30)・出土遺物 (1/4)

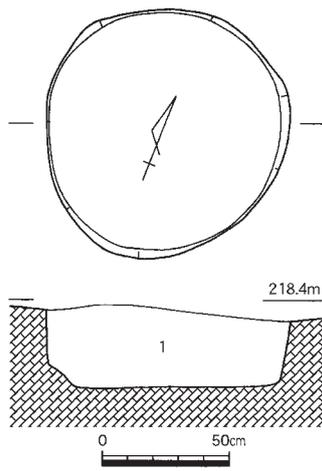
土壙15 (第4・58図)

土壙14の南に位置する。径1m前後のほぼ円形を呈し、検出面よりの深さ35cmを測る。人骨や遺物の出土が無いため土壙として扱ったが、土壙内にやや大きめの河原石が重なるように籠められており、



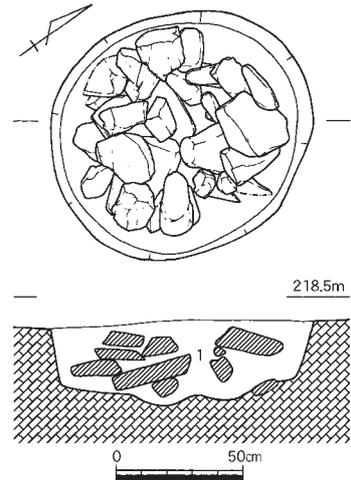
1 茶褐色土
(黄褐色粘土塊含)
2 灰色風化土

第56図 土壌13 (1/30)



1 褐灰色粘質土

第57図 土壌14 (1/30)



1 茶褐色粘質土

第58図 土壌15 (1/30)

土壌墓5・6と形状や埋没状況が類似することから、近世墓の可能性も否定できない。(渡邊)

土壌16 (第4・59図)

平面形は不整形円形を呈し、径1.5m前後を測る。底面はほぼ平坦で検出面からの深さが10cmと浅い。土壌17と重複し、それより新しいことから、近世以降と考えられる。(高田)

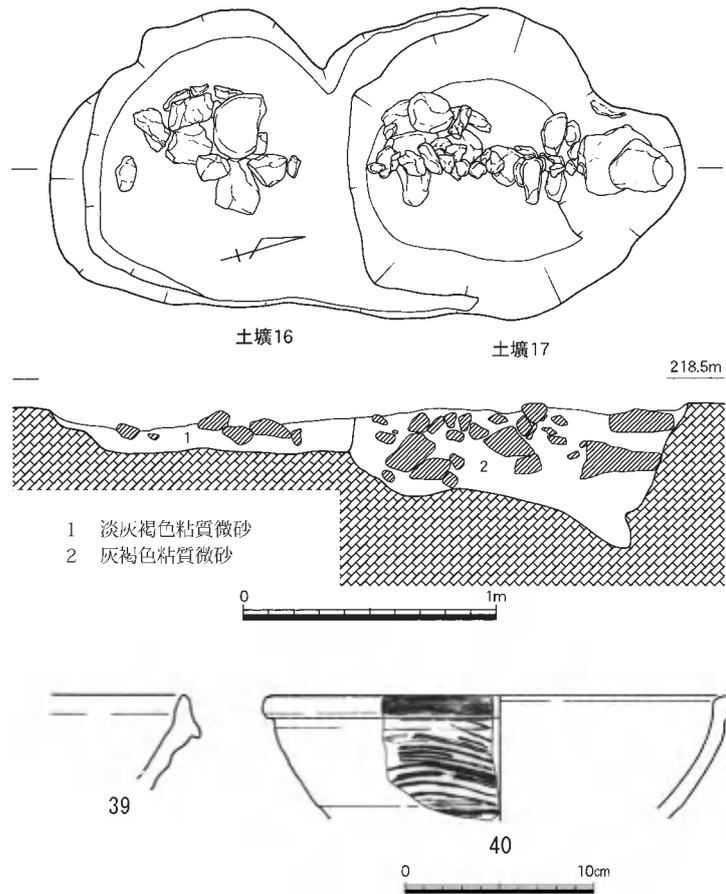
土壌17 (第4・59図)

建物1に重なり、建物の北東隅の柱穴を切る土壌である。平面形は不整形円形を呈し、径1.7m前後を測る。底面は北側に向かって深くなり、検出面からの深さ55cmを測る。壙内は大小の礫で充填されていた。

図示した遺物は、備前焼の播鉢39と肥前陶器の鉢40である。土壌の時期は近世であろう。(高田)

土壌18 (第4・60図)

土壌19の北側に位置する。深さは25cmと浅く、底面は平坦である。土壌内には、人頭大から拳大の



第59図 土壌16・17 (1/30)・土壌17出土遺物 (1/4)

礫が認められた。土壙は、遺存状況から一連の土壙と同じように削平されたと思われる。(下澤)

土壙19 (第4・61図)

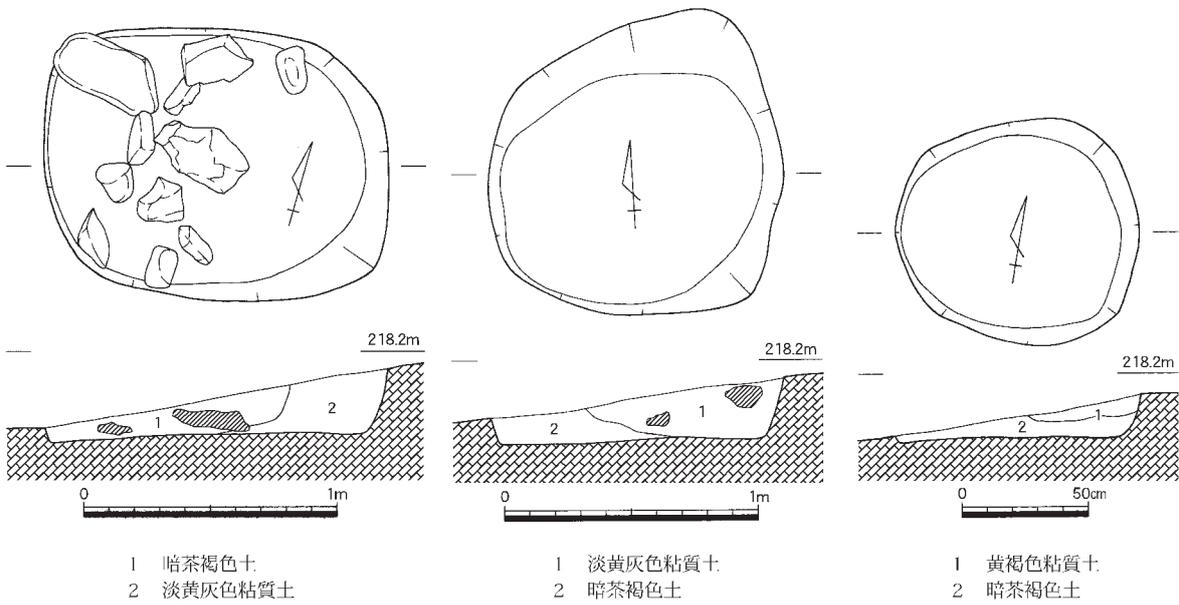
土壙20の北側に接して位置する。深さは25cmと浅く、底面は平坦である。土壙内には、拳大の礫が認められた。時期を示す遺物は、検出されなかった。(下澤)

土壙20 (第4・62図)

土壙21の北側に位置する。深さは15cmと浅く、底面は平坦である。他の土壙に認められた礫は、認められなかった。(下澤)

土壙21 (第4・63図)

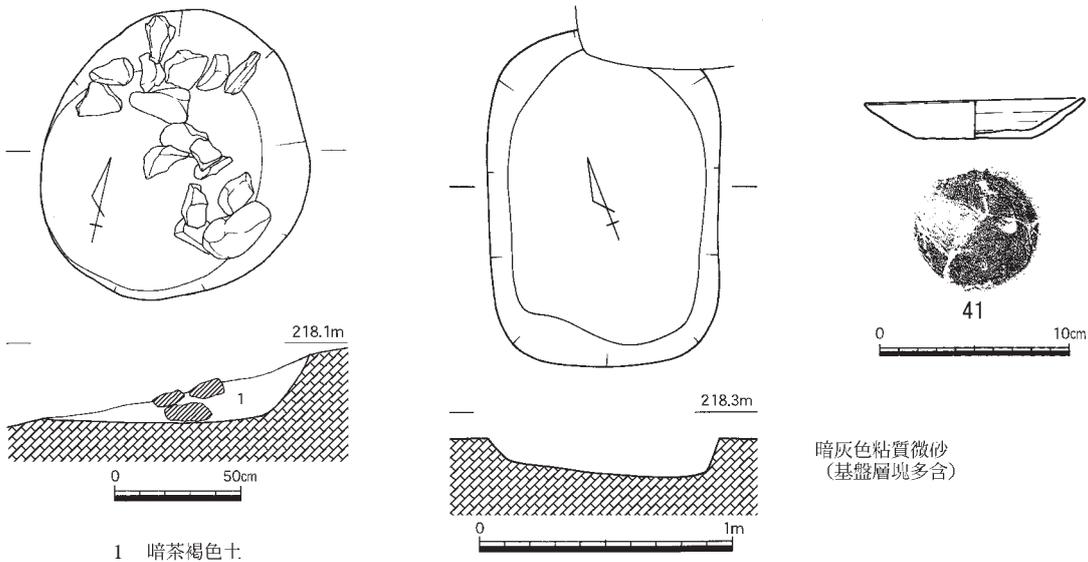
土壙20の南側に位置する。深さは25cmと浅く、底面は平坦である。土壙18のように礫を認めるが、



第60図 土壙18 (1/30)

第61図 土壙19 (1/30)

第62図 土壙20 (1/30)



第63図 土壙21 (1/30)

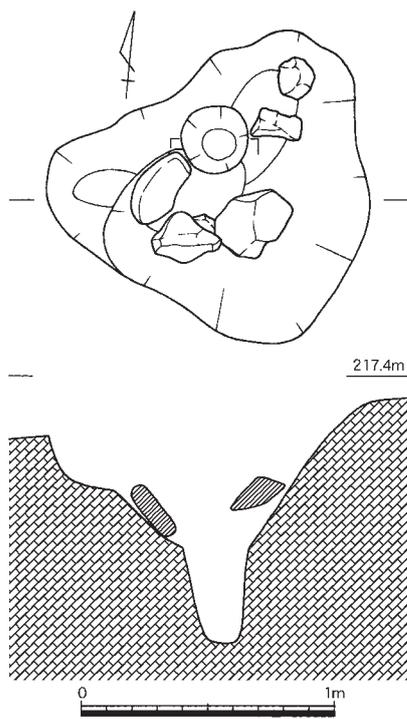
第64図 土壙22 (1/30)・出土遺物 (1/4)

意識的に組んだような状況は認められなかった。

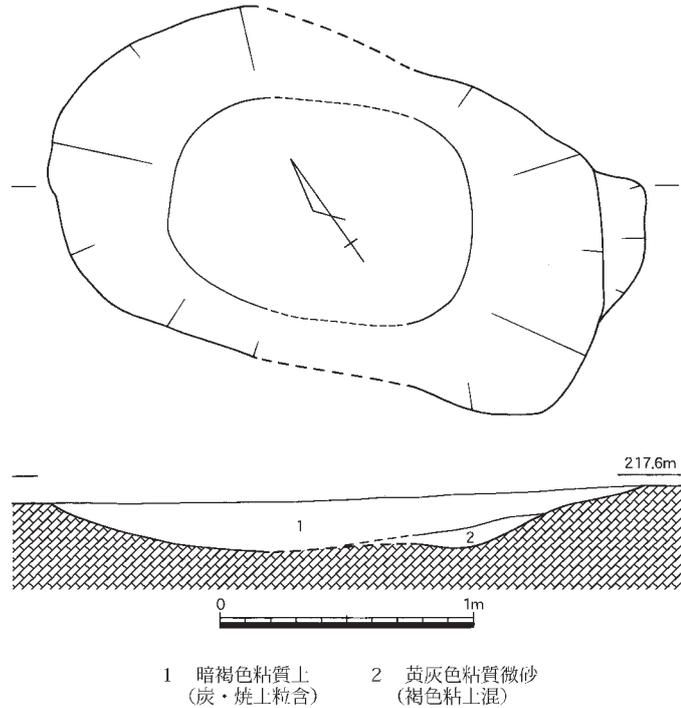
(下澤)

土壙22 (第4・64図)

土壙墓8の南に位置し、北端を土壙墓8に切られている。南北1.35m×東西91cmの楕円形に検出されているが、本来は長方形を呈していたと思われる。底面は東に傾斜しているがほぼ平らである。時期は、土師器小皿41が出土しており、土壙墓8より古いが、近世の範疇と考えられる。(渡邊)



第65図 土壙23 (1/30)



第66図 土壙24 (1/30)

土壙23 (第4・65図)

柱穴列4の南側に位置する。土壙内には、人頭大の礫が認められる。

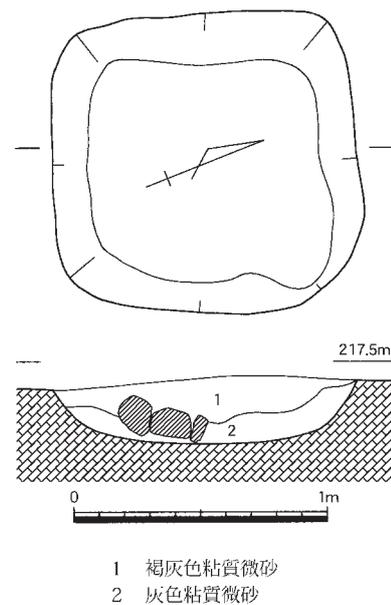
土壙の底面部分には、径27cm、深さ38cmの柱穴状の穴が認められる。検出状況から同一遺構と思考する。(下澤)

土壙24 (第4・66図)

掘立柱建物4の西に位置し、方形周溝1の東辺に、土壙中央部を切られている。2.25m×1.3mのやや不整形な楕円形を呈し、底面も安定していない。出土遺物も無く性格や時期は不明である。(渡邊)

土壙25 (第4・67図)

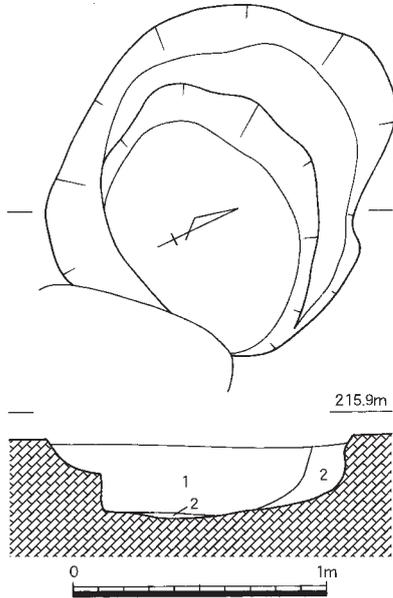
建物6に重なる土壙である。平面形は一辺1.2mの隅丸方形を呈し、深さは26cmを測る。底面の海拔高は217.18mで、壁はほぼ平坦な底面から急斜に立ち上がる。(高田)



第67図 土壙25 (1/30)

土壌26 (第4・68図)

後述する溝2の西端北側に位置する。溝2との切り合い関係から、少なくとも溝2より古いといえ、形状から袋状土壌の可能性もあるが、弥生時代まで遡るかどうかは不明である。(渡邊)



- 1 暗茶褐色粘質土
(黄褐色粘土塊・炭粒含)
- 2 黒茶褐色粘質土
(炭粒含)

第68図 土壌26 (1/30)

土壌27 (第5・69図)

土壌26の南、井戸4の西に位置する。4.5×2.7mのかなり大形の土壌で、長さ1mをこえる大きな石が入っていた。周辺にはこれだけ大きな転石はなく、土壌埋土には地山土であるソフトロームがブロック状に混在していることから、土壌を埋める際に石を放り込んだのではないかと考えられる。(渡邊)

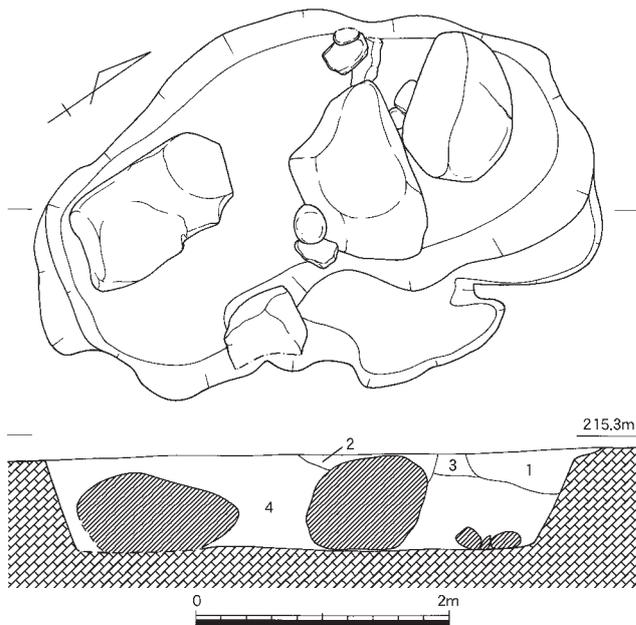
土壌28 (第5・70図)

土壌27の南に位置する。不整形で底面も安定しておらず、人為的に掘削された土壌かどうか不明である。壙内に拳大の円礫が数個みられるが、検出状況から、これらも自然石もしくは転石の可能性が高い。(渡邊)

土壌29 (第5・71図、図版7)

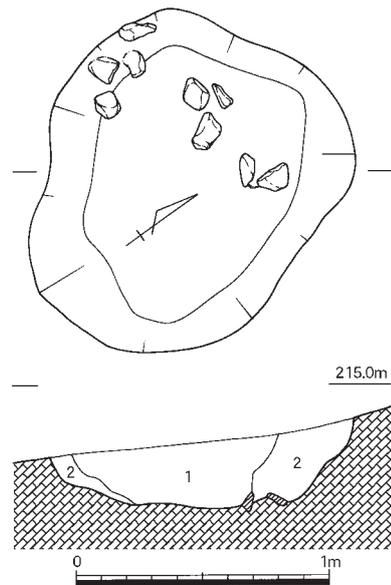
建物10の東約3mに位置する土壌である。平面形は不整形円形を呈し、長軸1.1m、短軸95cm、深さは12cmを測る。遺物は底面からやや浮いた状態で出土している。

図示した遺物は土師器の小皿42~46と杯47~49である。これらのことから土壌の時期は、中世と考えられる。(高田)



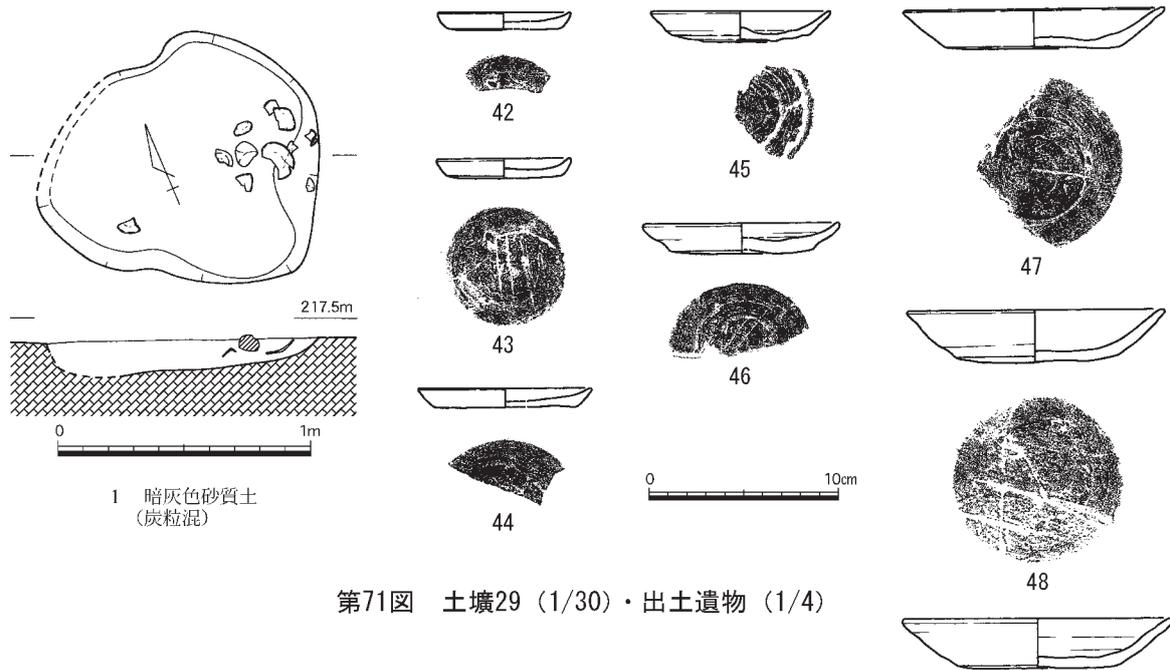
- 1 淡黄褐色土
- 2 暗黄褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 ローム塊

第69図 土壌27 (1/60)



- 1 黒褐色砂質土
- 2 暗灰褐色砂質土

第70図 土壌28 (1/30)

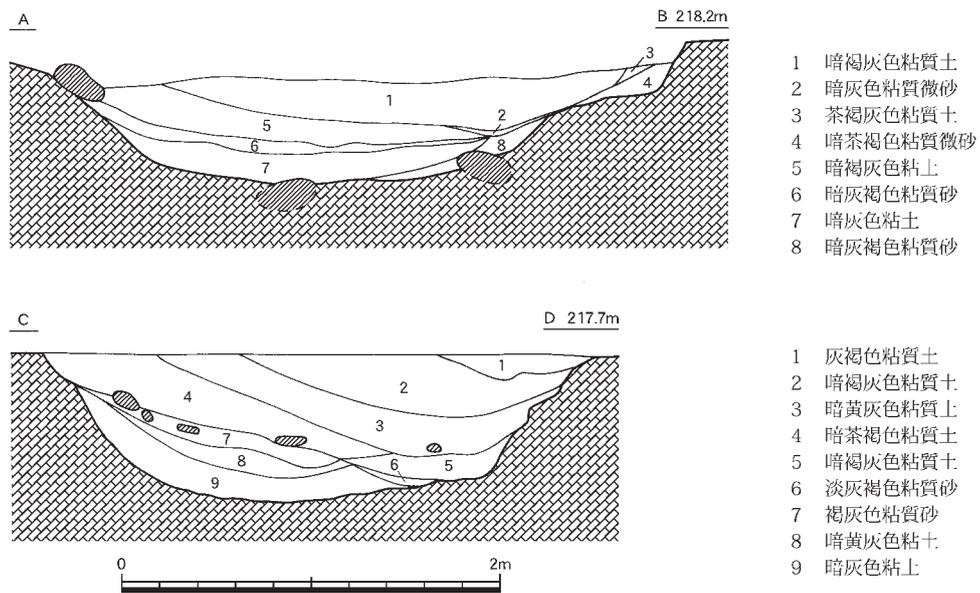


第71図 土壌29 (1/30)・出土遺物 (1/4)

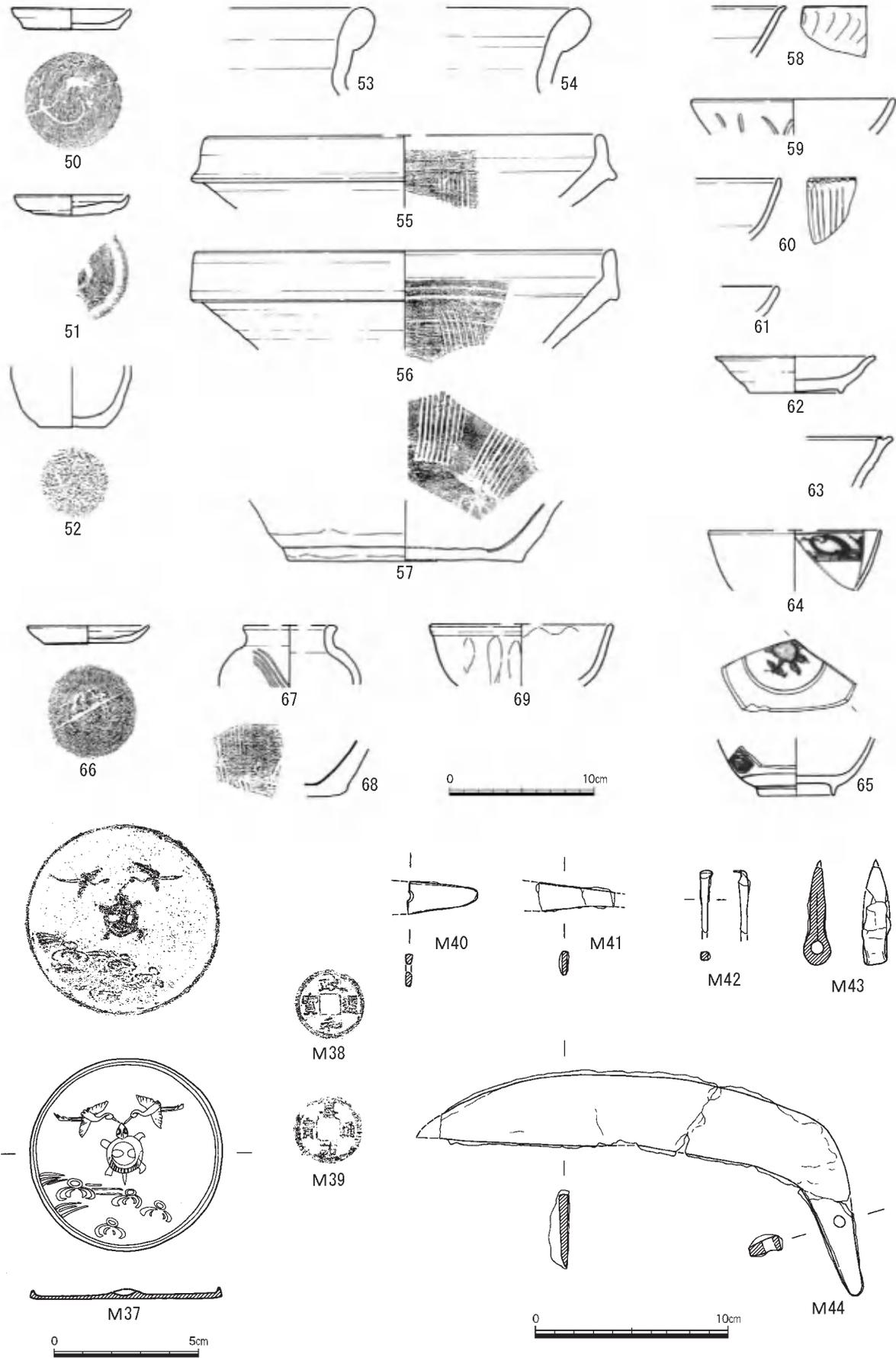
7 溝

溝1 (第4・72~74図、図版5)

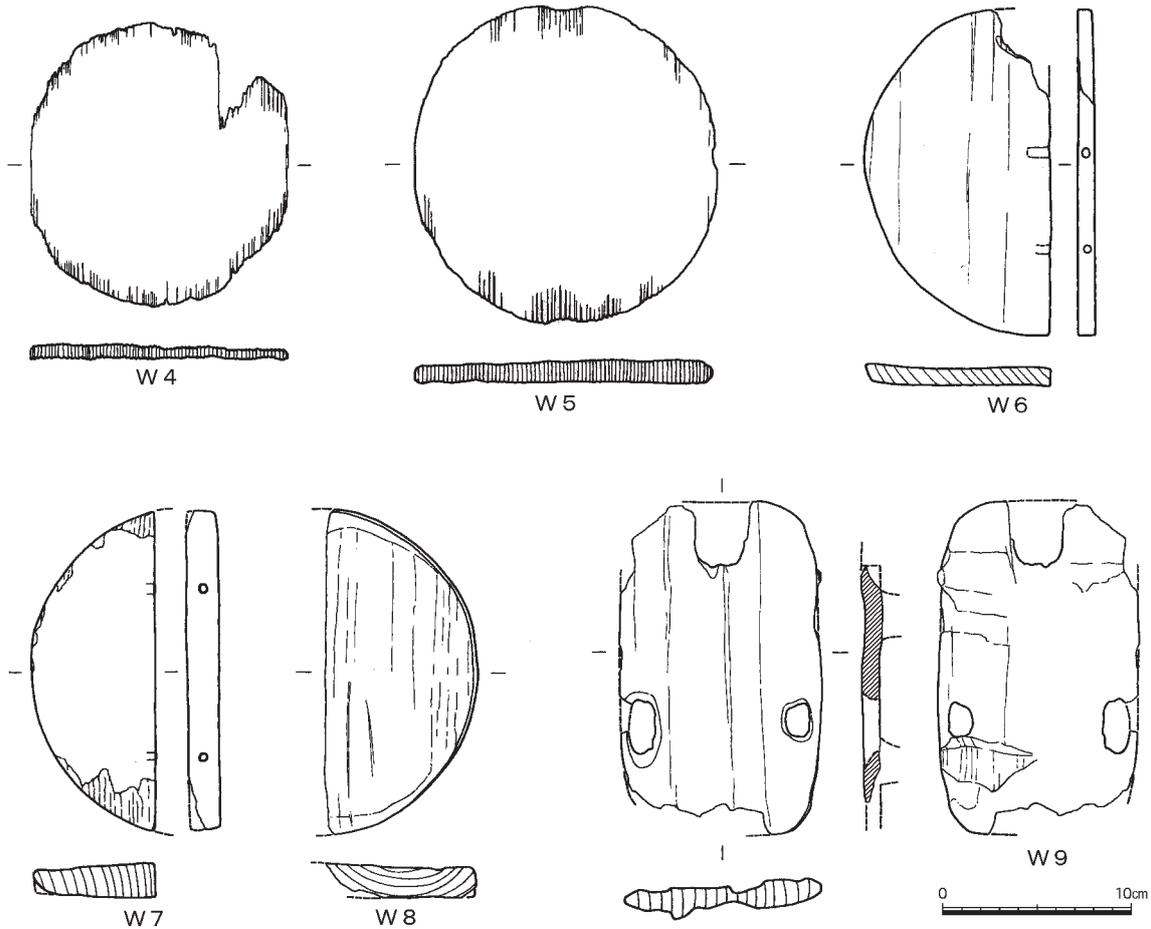
調査区のほぼ中央に位置し、西北西—東南東方向に直線的に流走する溝である。その西端は現代造成で切れ、東端は町道下となる。また、町道の東側の調査区においては、深い谷状地形につながることを確認している。検出面での規模は、幅3m前後、深さ80cm前後を測る。断面の形状は逆台形を呈する。底面の海拔高は216.8~217.4mで、東から西に向かってかなりの急斜で低くなる。埋土は上下二層に大別できる。上層は基盤ブロックを顕著に含むもので、第72図上段の第1~3・5・6層、下段の第1~7層である。下層は上段の第7・8層、下段の第8・9層



第72図 溝1 (1/40)



第73図 溝1出土遺物① (1/4, 1/2, 1/3)



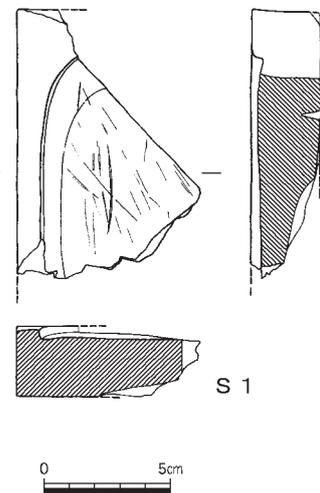
第74図 溝1出土遺物② (1/4, 1/3)

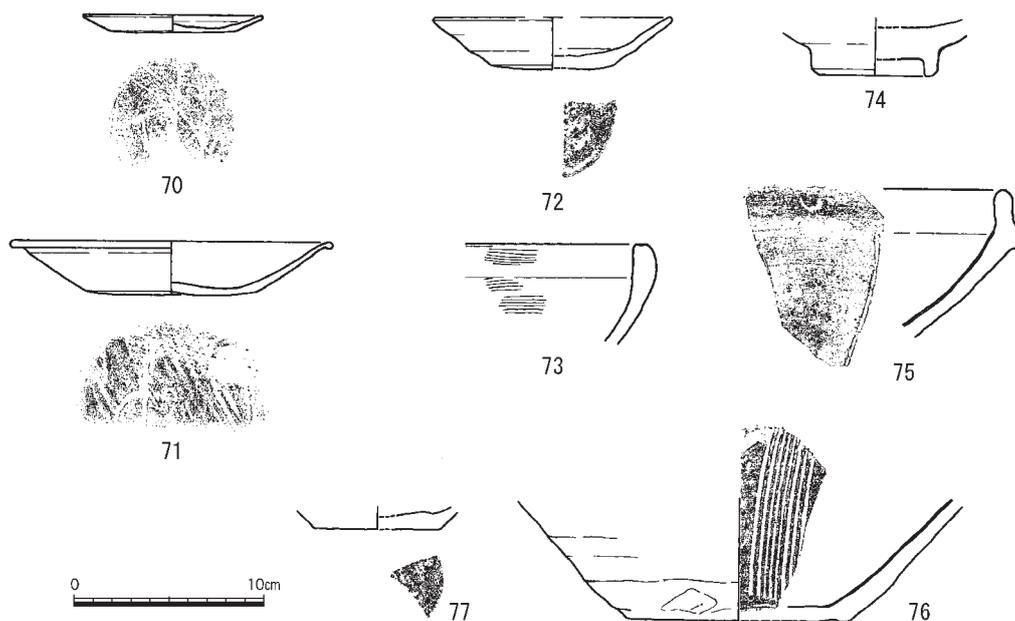
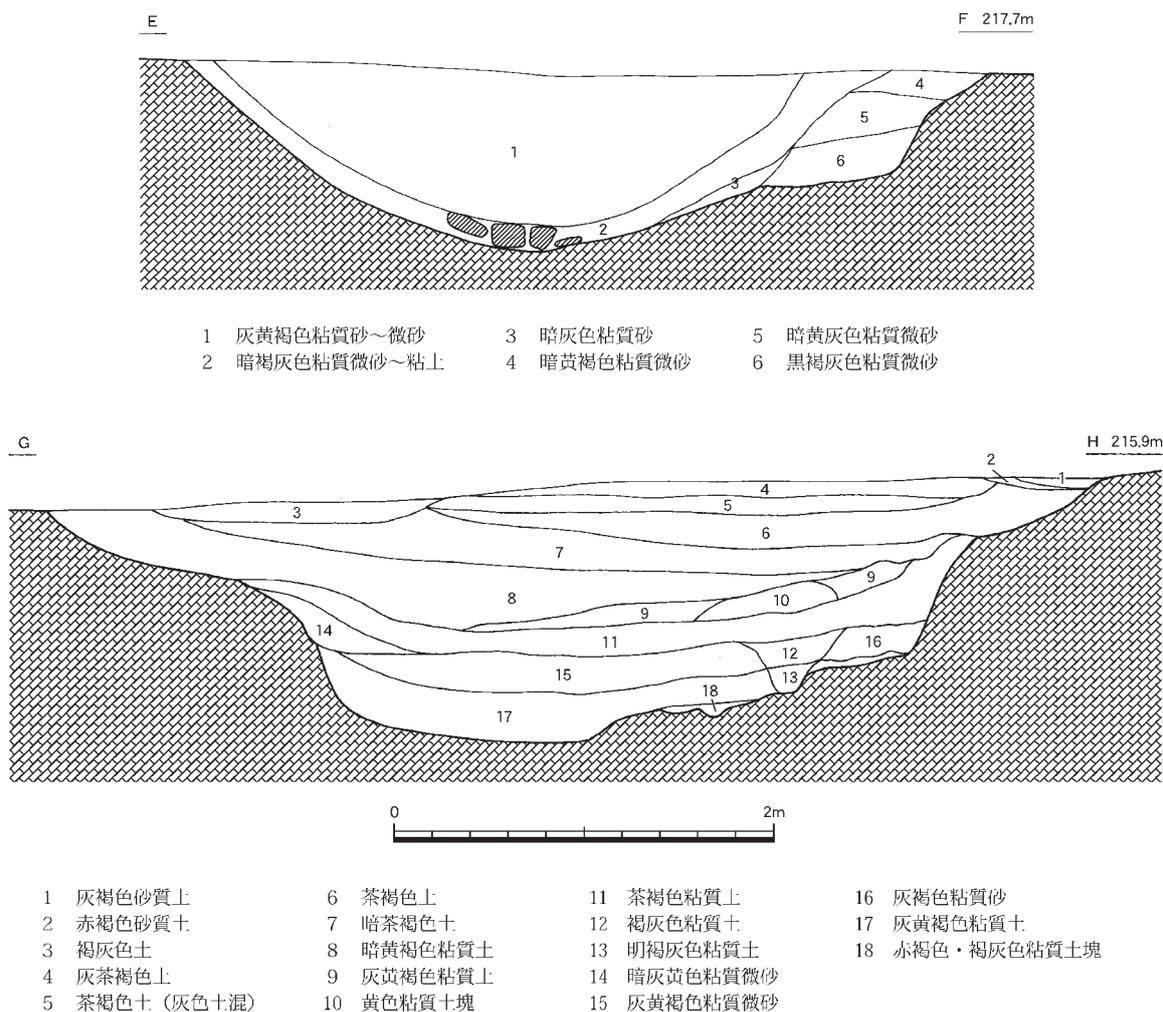
である。堆積状況は、溝の南側から土砂が流入した様子を示している。なお、上段第4層は溝に注ぎ込む小溝の埋土である。

溝と軸線を揃える遺構には、建物2・4、柱穴列2～5等があり、井戸1の排水溝が溝に注いでいる。遺物は、土師器の小皿、備前焼の甕・播鉢・壺・徳利、中国製青白磁・染付の碗、灰釉陶器の皿・鉢、銅鏡、銅銭、刀子、鉄釘、棺金具、鎌、曲物の蓋・底板、下駄、硯である。50～65は上層、66～69は下層からの出土である。溝の時期は、出土遺物と検出状況から中～近世と考えられる。溝と軸線を揃える遺構との関連が指摘される。(高田)

溝2 (第5・75図、図版5・6)

調査区中央のやや南側に位置し、西北西—東南東方向に直線的に流走する溝である。溝1と同様に、その西端は現代造成で切られ、東端は町道下となる。検出面での規模は、幅5.5m前後、深さ1m前後を測る。底面及び断面の形状は複雑で、数度の掘り直し等が推定される。底面の海拔高は、東端付近で216.55mを測り、西に向かって低くなる。そして、西端付近は数段の落ち込みとなり、214.35mと最も低い。南側から溝3・4が取り付き、溝3付近の南壁にはひとかかえ以上もある礫岩を石垣状に配した箇所がある。出土遺物には、土師器、瓦質土器、備前焼、青磁等がある。出土遺物と検出状況から、溝の時期は室町時代後半代と考えられる。(高田)





第75図 溝2 (1/40)・出土遺物 (1/4)

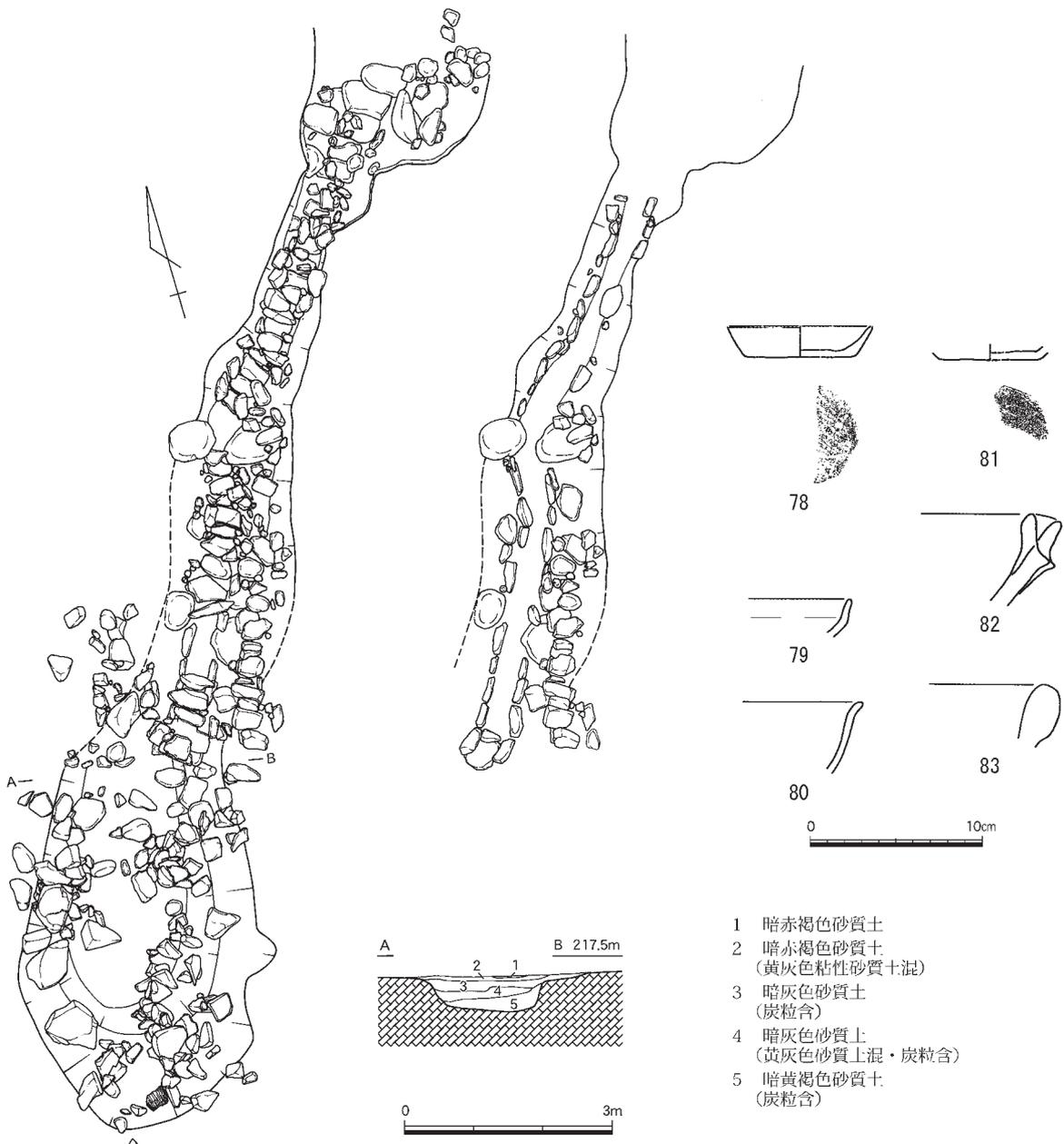
溝3 (第5・76図、図版6)

溝4の東側に位置し、溝2と重複する。溝の形状は、南側の先端部分がやや膨らみを持ち、北に行くにしたがい細い溝の内容を呈する。このことから、長さは16.5m、先端部分の幅は3.5m、細くなる溝部分は85cm~1.8mをそれぞれ測る。先端の膨らみ部分は、基盤層である花崗岩を80cmほど楕円状に掘り窪めてから石組みを行ったと思われる。しかし、明確な石組みの把握は確認できなかった。

北側部分は、基盤層を深さ20cm前後、幅28~36cmに掘り、石を溝に沿わせる。この上に石の蓋をして暗渠としている。暗渠の底は、基盤層を削りだしたままの状態であるが、暗渠が始まる部分は、底石が敷かれている。(下澤)

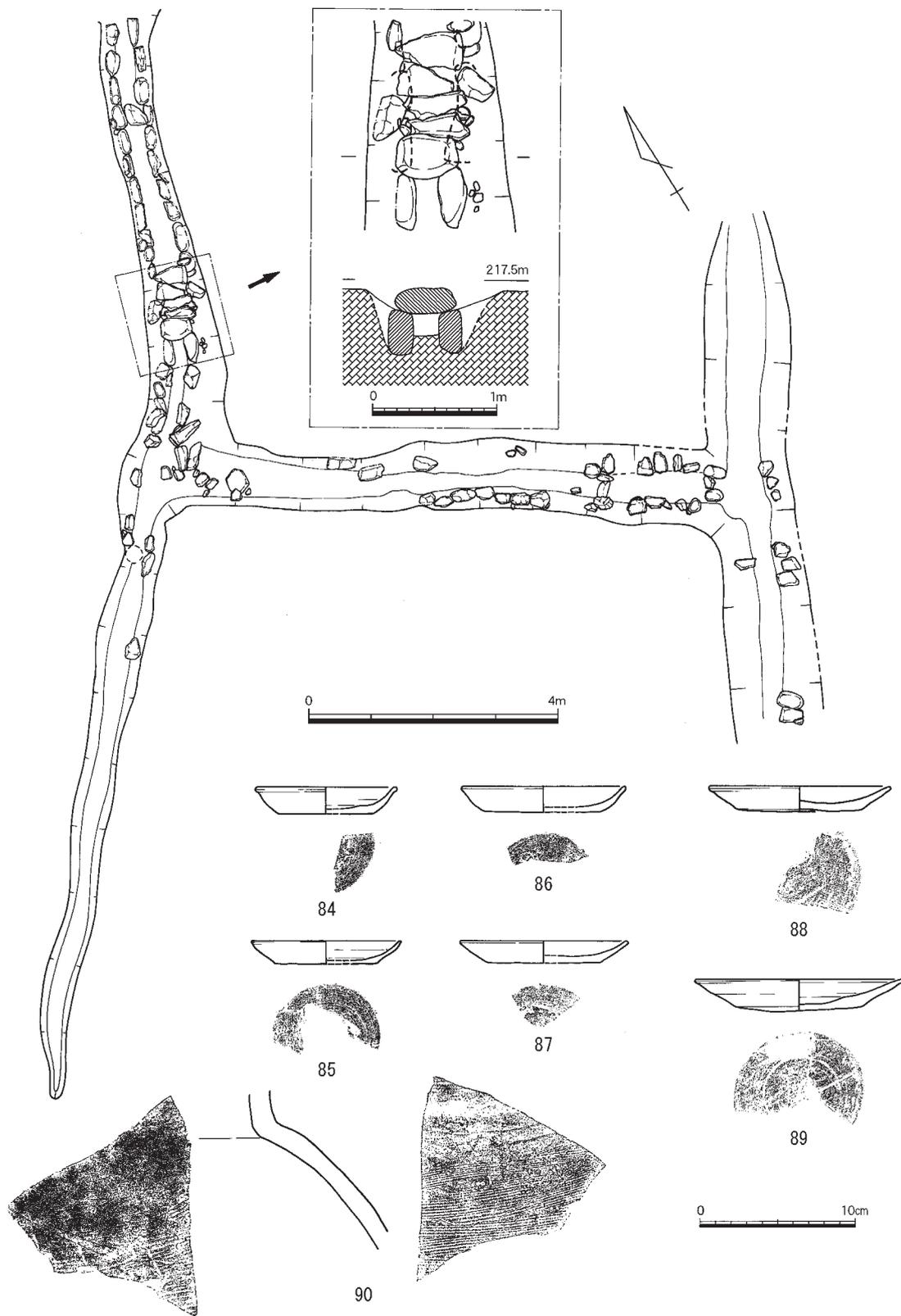
溝4 (第5・77図、図版2・6)

掘立柱建物10の北側に位置する。平面形態は「H」状となる。西溝は長さ17.8mを測り、北側は溝



第76図 溝3 (1/100)・出土遺物 (1/4)

2と重複し、南側は削平を受けている。中央溝は長さ9.9m、幅1.1m前後を測る。東溝は長さ8.5m、幅40cm前後を測る。溝内には、壁に沿うように礫が認められる。この一部においては、図示したように暗渠の状態が看取されるが、全体的に削平が激しく詳細は不詳である。 (下澤)



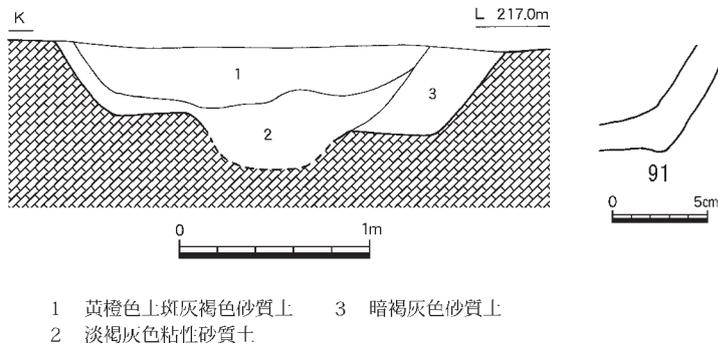
第77図 溝4 (1/100, 1/50)・出土遺物 (1/4)

溝5 (第5・78図)

掘立柱建物12の西側に位置する。北側は、削平を受けたようで立ち上がる。南側は、道路により切られているが、幅2.3mと広がり、深さも60cmと深くなる。溝4の東溝および溝6とは、線上にあることから同一遺構の可能性はある。(下澤)

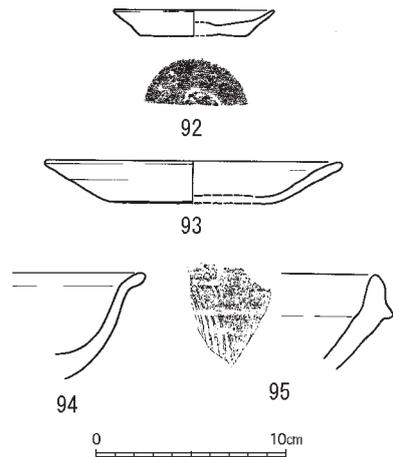
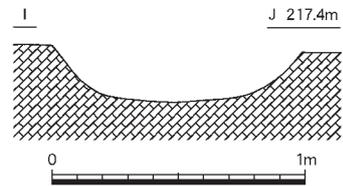
溝6 (第5・79図)

掘立柱建物10の南側に、掘立柱建物11と重複して位置する。規模は、長さ8.2m、深さ13cm前後を測る。両端は削平により、立ち上がる。この溝は、溝4の東溝と溝5との位置関係から同一遺構を構成する可能性がある。(下澤)



1 黄橙色上斑灰褐色砂質土 3 暗褐色灰色砂質土
2 淡褐色灰色粘性砂質土

第78図 溝5 (1/40)・出土遺物 (1/4)

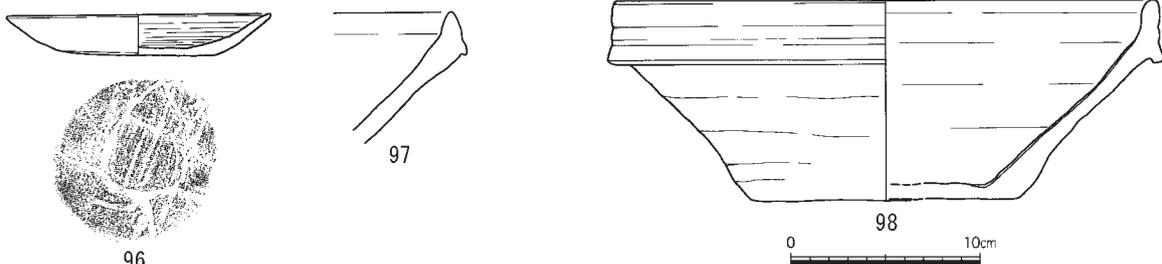
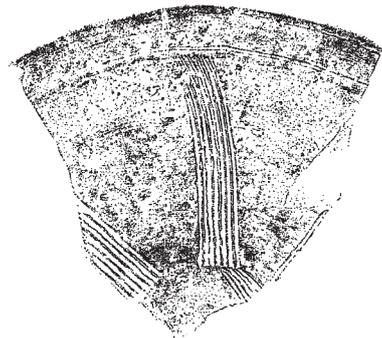


第79図 溝6 (1/30)
・出土遺物 (1/4)

8 窪地

窪地1・2 (第4・80図)

窪地1は掘立柱建物3の北辺東寄り、窪地2は掘立柱建物6の南西隅に位置する。それぞれ掘立柱建物の柱穴に切られている。いずれも深さ10cm足らずの不整形なたわみ状のもので、人為的なものかどうか不明であるが、遺物が出土しているため、窪地としてここで提示している。中世後半以降に属すると考えられる。(渡邊)

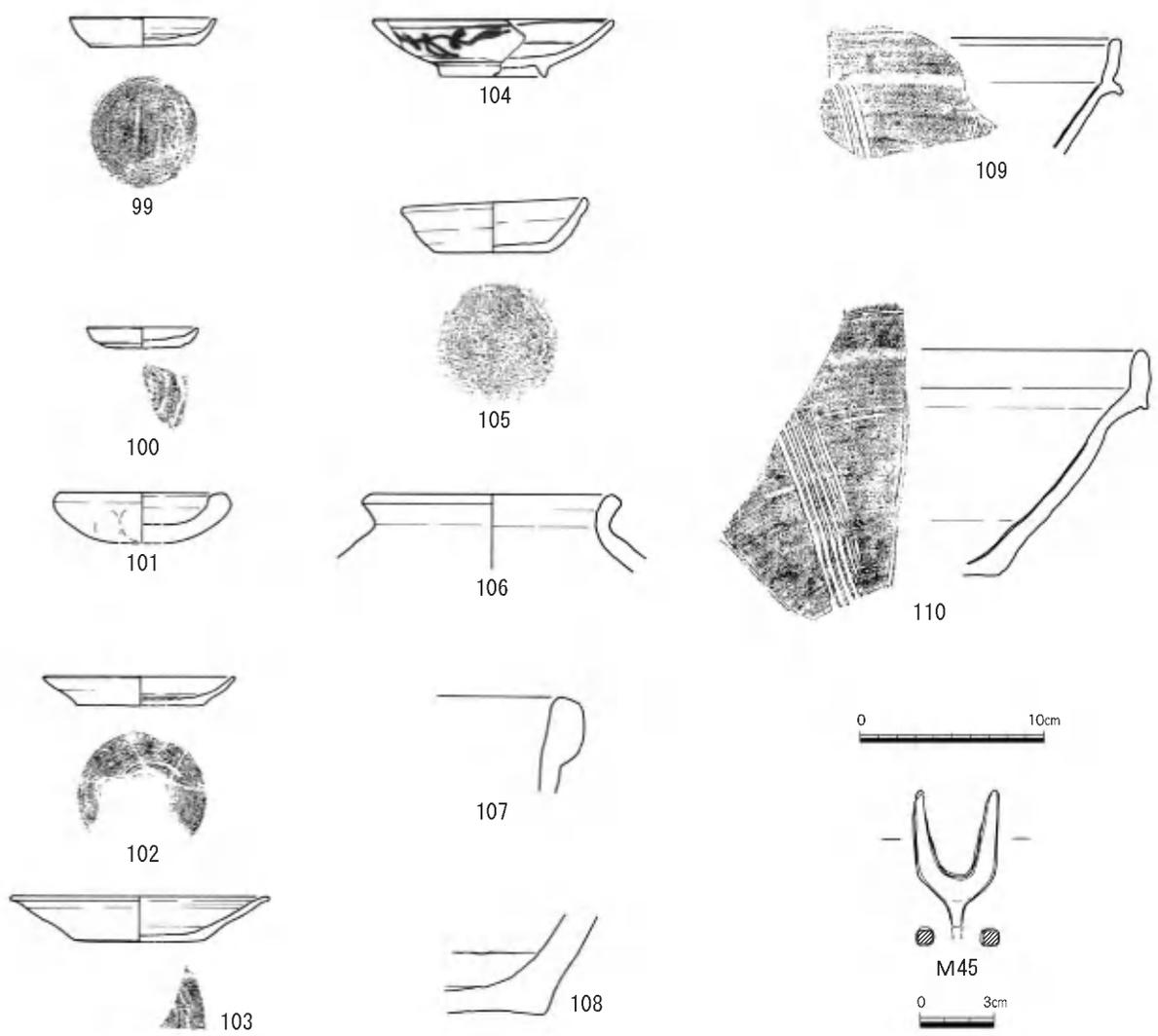
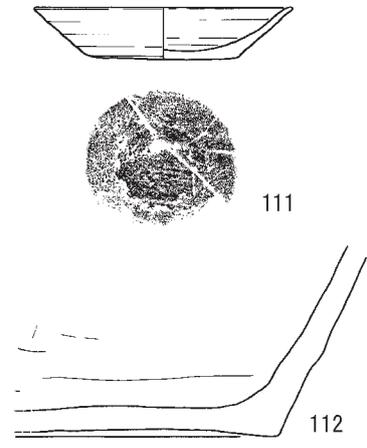


第80図 窪地1・2出土遺物 (1/4)

9 柱穴 (第81図)

本書に掲載した遺構以外に多数の柱穴を検出している。ここでは遺構としてまとめ得なかった柱穴の出土遺物について説明する。なお、掲載した遺物は、105以外すべて溝2以南のものである。99・100・102は土師器の小皿、103・111は杯である。底部の切り離しは、99のみ糸切りで、その他はヘラキリである。111はヘラキリ後板目を施す。101は土師器の坩堝である。104は中国製陶器の皿である。105は備前焼の小皿で内面に漆が付着している。106は壺、107・108・112は甕、109・110は播鉢である。M45は鉄鏃である。

これらの年代観は、備前焼がおおむね室町時代後半代と考えられ、中国製陶器が16世紀第4四半期～17世紀初頭とされる。溝2以南の遺構の時期を反映するものであろう。(高田)



第81図 柱穴出土遺物 (1/4, 1/3)

第4節 小結

検出された遺構の時期は、弥生と中近世である。弥生は、土壙がおもである。土壙は、袋状を呈し遺物を含むものが認められている。時期は、後期中葉から後葉である。このうち土壙10からの出土土器は、県南のそれと異なるものが検出されている。

中近世の検出された遺構は、掘立柱建物、柱穴列、土壙墓、井戸、溝などが主要なものである。溝1と2の間の掘立柱建物2、柱穴列4と5などは、溝にほぼ平行して認められることから、その外側に存在する柱穴列2と同様に有機的関係にあったことがうかがえるのである。また、掘立柱建物1と柱穴列1においても、そのような関係にあると思われる。

溝4の東側の溝は、溝5・6と一連の溝として存在していたと考えられる。この溝に囲まれた掘立柱建物の存在が推測され、報告の通り重複した状態で検出されている。この内容は、柱穴の掘り方も大きく、深くさらに底に石を用いるなど確りとした建物を構築していたことが知られるのである。しかしながら、内容的に伴う可能性の大きい掘立柱建物10は、東側の溝と重複する関係になる。この他の掘立柱建物も同様な状況を示すのである。しかし、溝の外側に位置するが、溝5と掘立柱建物12が重複することなく認められる。以上のように、個々の遺構それぞれが有機的関係の有無について具体的に把握することができなかった。

当遺跡は、先に記したように東丘陵上に所在する河内城跡の関連遺構が想定されていたのである。この河内城跡の年代は、調査から14世紀後半の南北朝期と考えられている。当該時期に相当する遺構は、明確さを欠いている。また、出土遺物を検討すると、方形周溝1、溝1などにおいて14世紀にさかのぼる遺物が検出されている。これらの遺構は、他の伴出遺物及び遺構の埋土の状態から判断して、江戸期以降に属するのが妥当と思われるのである。このようなことから、調査前に想定した河内城跡との具体的な関係については、前述したように明らかにすることができなかった。報告したように時期的には、戦国時代から近世にかけて当該遺跡の主要な内容を構成しているのである。そして、旧河内村には、「河端溝」（『作陽誌』）として河端清次居宅跡との記載が認められることから、河内構遺跡と同一の遺構であることも検討の資料とされるのである。（下澤）

掘立柱建物一覧表

遺構名	規 模			柱間距離 (cm)		面積 (㎡)	棟方向 N°-E・W	柱穴 掘り方	時期	備考
	間数	桁行 (cm)	梁間 (cm)	桁	梁					
掘立柱建物1	3×2	(696)	(375)	300~196	375~194	(28.7)	N-72-W	円形	近世	桁延びる可能性有り
掘立柱建物2	3×1	696	292	236~210	292	20.3	N-78-W			
掘立柱建物3	6×2	1227	465	245~188	465~228	57.1	N-72-W			
掘立柱建物4	5×2	1187	495	250~195	250~245	58.7	N-65-W			
掘立柱建物5	(2)×3	(583)	608	306~277	215~188	-	N-27.5-E			
掘立柱建物6	3×2	594	400	199~196	400~200	23.8	N-76-W		中世	
掘立柱建物7	1×1	290	208	290	208	6.0	N-43-E			
掘立柱建物8	2×1	428	246	220~208	246	10.5	N-15-E			
掘立柱建物9	2×1	410	192	208~204	192	(7.9)	N-60-W			
掘立柱建物10	5×3	1018	636	218~170	240~172	61.6	N-24-E			
掘立柱建物11	2×1	400	200	210~190	200	8.0	N-30-E			
掘立柱建物12	(1)×2	(220)	485	220	245~240	-	N-32-E			

土墳墓一覽表

遺構名	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	人骨	副葬品等	時期	備考
土墳墓1	方形	Ⅱ a	95	86	28	×	煙管1・棺金具	近世	
土墳墓2	楕円形	Ⅲ a	100	82	30	×		近世	
土墳墓3	楕円形	Ⅲ a	100	80	17	×		近世	
土墳墓4	長楕円形	Ⅲ a	107	70	30	×	錢貨1	近世	南床に突出する地山礫
土墳墓5	円形	Ⅱ a	110	95	28	×	備前甕		
土墳墓6	円形	Ⅱ d	105	98	40	×			
土墳墓7	円形	Ⅱ a	105	98	65	骨片	錢貨31	近世	棺材残存
土墳墓8	方形	Ⅱ a	95	75	34	×		近世	棺材残存
土墳墓9	方形	Ⅱ d	135	130	86	×			

井戸一覽表

遺構名	構造	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面海拔高(m)	時期	備考
井戸1	石組み	円形	300	280	135	216.75	近世	排水施設付帯
井戸2	石組み	円形	230	230	290	215.45	近世	
井戸3	石組み	楕円形	240	200	230	215.55	近世?	
井戸4	素掘り	楕円形	120	100	105	214.07		底部に据え石?

土壇一覽表

遺構名	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面海拔高(m)	時期	備考
土壇1	円形	I a	116	100	55	217.28	弥生	袋状土壇
土壇2	不整楕円形	I a	118	83	65	216.50	弥生?	袋状土壇
土壇3	楕円形	I a	118	83	82	216.67	弥生?	袋状土壇
土壇4	長楕円形	I a	110	55	64	217.02	弥生?	袋状土壇
土壇5	円形	Ⅱ b	110	98	45	21.75	弥生?	
土壇6	楕円形	Ⅱ a	93	78	10	217.20	弥生?	
土壇7	方形	Ⅱ a	145	115	12	217.25	弥生?	
土壇8	長楕円形	Ⅱ a	75	60	15	217.03	弥生	
土壇9	円形	I a	120	110	50	216.60	弥生	
土壇10	円形	I a	95	92	50	216.65	弥生	
土壇11	円形	Ⅱ a	130	120	20	217.37	弥生?	
土壇12	不整形	Ⅲ a	125	90	25	218.15	近世	
土壇13	円形	Ⅱ a	104	-	35	217.95		
土壇14	円形	Ⅱ a	102	98	30	217.95		
土壇15	円形	Ⅱ e	106	96	35	218.07		
土壇16	不整円形	Ⅲ a	(150)	-	10	218.21	近世以降	
土壇17	不整円形	Ⅲ e	(170)	-	55	217.82	近世	
土壇18	楕円形	Ⅱ a	136	107	25	217.87		
土壇19	不整方形	Ⅱ a	106	115	25	217.90		
土壇20	不整円形	Ⅱ a	96	88	15	217.95		
土壇21	円形	Ⅲ a	118	105	25	217.79		
土壇22	楕円形	Ⅲ a	135	91	15	218.04	近世	
土壇23	不整三角	Ⅲ b	120	110	50	216.70		中央北寄りに深さ38cmの柱穴?
土壇24	不整楕円形	Ⅲ a	225	130	20	217.31		
土壇25	隅丸方形	Ⅲ a	120	120	26	217.18		
土壇26	不整円形	Ⅱ a	(140)	120	28	215.52		袋状土壇?
土壇27	不整楕円形	Ⅲ a	450	270	70	214.40		
土壇28	不整円形	Ⅱ e	132	110	26	214.50		
土壇29	不整円形	Ⅲ a	110	95	12	217.30	中世	

土器観察表①

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
1	包含層	縄文土器	深鉢				鈍黄橙色(10YR7/2)		楕円形押型文
2	土壇1	弥生土器	壺	13.8			鈍黄橙色(10YR7/2)	復元	頸部内面にヘラケズリ
3		弥生土器	壺	(18.1)			浅黄橙色(7.5YR8/3)		凹線4条
4		弥生土器	壺		8.0		鈍黄橙色(10YR7/2)		
5		弥生土器	甕		6.4		鈍黄橙色(10YR7/2)		
6		弥生土器	高杯	22.6			鈍橙色(5YR6/4)		内面放射線状ヘラミガキ?
7	土壇5	弥生土器	壺	18.6			橙色(5YR7/6)	復元	調整不明瞭。内面にハケメ痕跡
8	土壇6	弥生土器	高杯				鈍黄橙色(10YR7/2)		
9	土壇7	弥生土器	甕		4.6		褐灰色(10YR5/1)		
10	土壇8	弥生土器	高杯	12.9	8.5	12.5	鈍黄橙色(10YR7/2)	復元完形	脚上部穿孔5個、下部9個
11	土壇9	弥生土器	甕	(14.1)			鈍褐色(7.5YR6/3)		
12		弥生土器	甕	(13.9)			鈍黄橙色(10YR7/3)		外面に煤
13		弥生土器	高杯				鈍橙色(5YR6/4)		口縁上面に凹線3条
14	土壇10	弥生土器	甕	16.1			灰黄褐色(10YR6/2)		
15		弥生土器	甕	(18.0)			鈍橙色(5YR6/4)		
16		弥生土器	甕	(19.5)			鈍黄橙色(10YR7/2)		
17	土壇11	弥生土器	壺	13.4			灰白色(10YR8/2)		凹線4条
18	掘立柱建物1	肥前陶器	碗		4.9		灰白色(7.5Y7/1)		陶胎染付 17c後半
19	掘立柱建物2	土師器	小皿		6.0		鈍黄橙色(10YR7/2)		底部ヘラキリ
20	掘立柱建物6	土師器	小皿	7.6	5.6	1.1	灰白色(10YR8/2)		底部ヘラキリ
21	方形周溝1	土師器	小皿		6.2		鈍黄橙色(10YR7/3)		底部ヘラキリ
22		備前焼	搥鉢				灰赤色(2.5YR5/2)		
23	方形周溝2	土師器	小皿		6.5		浅黄橙色(10YR8/3)		底部板目痕
24	土壇墓5	備前焼	甕		19.0		鈍黄橙色(5YR7/3)		底部に「口」の窯印
25	井戸1	肥前陶器	皿	(12.0)			鈍黄橙色(10YR6/3)		釉薬は灰オリーブ(5Y6/2) 16c~17c
26		肥前陶器	皿	10.1	4.0	2.8	鈍褐色(5YR6/4)		釉薬は灰色(10YR6/1) 1590~1610年代
27		関西系陶器	碗		3.3		灰白色(10YR8/2)		薄くて堅緻 18c
28	井戸2	肥前陶器	碗		4.6		灰白色(10YR8/2)		呉器手 17c末~18c前半
29		肥前磁器	碗		3.8		灰白色(2.5YR8/1)		内外に網目、高台内に簡略化した渦「福」銘 18c前半
30		肥前系磁器	碗		5.9		灰白色(7.5Y8/1)		広東形 19c
31		肥前陶器	德利	5.3			黄褐色(2.5YR5/3)		頸部黒色(10YR1.7/1) 18c前半
32		備前焼	德利?		5.2		褐灰色(5YR4/1)		底部に窯印
33	備前焼	甕		18.5		暗赤褐色(2.5YR3/3)			
34	備前焼	搥鉢	(31.7)	(14.7)	16.2	赤灰色(2.5YR5/1)		6本1組の揃目	
35	井戸3	土師器	小皿	5.6	5.3	1.2	鈍橙色(7.5YR6/4)	復元完形	底部回転ヘラキリ
36		備前焼	搥鉢		(21.4)		灰赤色(10R5/2)		内面磨滅 9本1組の揃目
37	土壇12	肥前陶器	碗				灰白色(5Y8/1)		釉薬外面灰オリーブ(5Y6/2) 内面暗オリーブ(2.5GY4/1) 内野山窯
38		備前焼	壺	11.2			鈍赤褐色(5YR4/3)		肩部に沈線2条 内外ナデ
39	土壇17	備前焼	搥鉢				赤褐色(10R4/3)		
40		肥前陶器	片鉢				鈍赤褐色(2.5YR5/4)		釉薬黄灰色(2.5Y6/1) 外面刷毛目
41	土壇22	土師器	小皿	11.5	6.1	2.0	鈍黄橙色(10YR7/2)	復元完形	底部糸切り
42	土壇29	土師器	小皿	7.0	6.5	0.9	鈍黄橙色(10YR7/2)		底部ヘラキリ
43		土師器	小皿	7.0	6.1	1.1	浅黄橙色(10YR8/3)	完形	底部ヘラキリ・板目
44		土師器	小皿	9.1	7.4	1.1	灰白色(2.5YR8/1)		底部回転ヘラキリ
45		土師器	小皿	9.4	7.3	1.7	鈍褐色(7.5YR6/4)		底部回転ヘラキリ
46		土師器	小皿	10.2	7.6	3.0	鈍黄橙色(10YR7/3)	復元完形	底部回転ヘラキリ・板目
47		土師器	杯	13.7	9.4	2.1	鈍黄橙色(10YR7/2)	復元完形	底部回転ヘラキリ
48		土師器	杯	13.5	8.7	2.9	鈍褐色(7.5YR7/3)	復元完形	底部回転ヘラキリ・板目
49		土師器	杯	14.1	8.6	2.7	灰白色(10YR8/1)	復元完形	底部回転ヘラキリ・板目
50	溝1	土師器	小皿	9.2	6.7	1.5	鈍黄橙色(10YR6/3)	完形	上層 底部回転ヘラキリ
51		土師器	小皿	7.8	7.0	1.5	鈍黄橙色(10YR7/2)		上層 底部ヘラキリ 内面に煤
52		備前焼	德利?			4.6	鈍赤褐色(2.5YR5/4)		上層 底部糸切り
53		備前焼	甕				鈍赤褐色(2.5YR5/3)		上層
54		備前焼	甕				灰褐色(5YR4/2)		上層
55		備前焼	搥鉢	(27.0)			赤褐色(10R4/3)		上層 7本1組の揃目
56		備前焼	搥鉢	(28.6)			灰赤色(2.5YR4/2)		上層 8本1組の揃目
57	備前焼	搥鉢		16.1		鈍赤褐色(5YR5/3)		上層 内面磨滅 9本1組の揃目	
58	溝1	白磁	碗				灰白色(N8/0)		上層 釉薬素地同様 見込みに浅い段 外面に線刻 中国製12・13c
59		青磁	碗	13.8			灰白色(N7/0)		上層 釉薬オリーブ灰色(10Y6/2) ヘラ 描き蓮弁文 中国製14c後半~15c前半

土器観察表②

掲載 番号	掲載 遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
60	溝 1	青磁	碗				灰白色(N8/0)		上層 釉薬オリープ灰色(10Y5/2) 剣先蓮弁文 断面に漆接ぎ痕 中国製 14c後半～15c前半
61		瀬戸美濃灰釉	皿				灰白色(2.5Y7/1)		上層 釉薬浅黄色(5Y7/3) 16c
62		瀬戸美濃灰釉	皿	10.9	6.5	2.6	灰白色(5Y7/2)	復元完形	上層 釉薬オリープ灰色(10Y5/2) 16c
63		瀬戸灰釉	鉢				灰白色(7.5Y7/1)		上層 釉薬オリープ黄色(5Y6/3) 14・15c
64		染付	碗	(11.9)			白色(N9/0)		上層 釉薬灰白(N8/0)見込みに「蓮に 鷺」 景德鎮 16c後半
65		染付	碗		5.0		白色(N9/0)		上層 釉薬素地同様 花卉文 景德鎮 16c第4四半期
66		土師器	小皿	8.3	6.1	1.3	灰白色(2.5YR8/2)	完形	下層 底部回転ヘラキリ・板目 口縁 内面に煤
67		備前焼	壺	(6.3)			灰色(N4/0)		下層 肩部にヘラ描き沈線4条
68		備前焼	搦鉢				灰赤色(10R4/2)		下層 内面磨減
69		青磁	碗	(12.4)			灰白色(N7/0)		下層 釉薬オリープ灰色(5GY6/1) 蓮弁文 中国製14c後半～15c前半
70	溝 2	土師器	小皿	9.4	6.6	1.0	鈍黄橙色(10YR7/2)	復元完形	北肩 底部回転ヘラキリ
71		土師器	皿	16.8	9.0	2.9	灰白色(10YR8/2)	復元完形	北肩 底部回転ヘラキリ・板目
72		土師器	杯	(12.3)	6.6	2.8	灰白色(10YR8/2)		下層 ヘラキリ
73		瓦質土器	鍋				暗灰色(N3/0)		下層 外面煤
74		青磁	碗		5.4		灰白色(10Y8/1)		下層 釉薬オリープ灰色(10Y6/2) 龍泉窯14c後半～15c中葉
75		備前焼	搦鉢				暗赤灰色(10R4/1)		最下層 口縁内面に爪による押圧?
76		備前焼	搦鉢		11.6		灰色(N6/0)		下層 内面磨減 8本1組の搦目
77		土師器	杯?		6.6		鈍橙色(7.5YR7/4)		最下層 底部ヘラキリ
78	溝 3	土師器	小皿		6.4		浅黄橙色(10YR8/3)		底部ヘラキリ・板目
79		陶器	碗				灰白色(7.5Y8/1)		釉薬黒色(N1.5/0)天目 中国製13c～15c
80		青磁	碗				灰白(N7/0)		釉薬オリープ灰色(2.5GY6/1) 龍泉窯 14c後半～15c中葉
81		備前焼	皿?		(5.8)		赤褐色(10R5/4)		底部糸切り
82		備前焼	搦鉢				灰赤色(10R5/2)		片口
83	備前焼	甕				褐色(5YR4/1)			
84	溝 4	土師器	小皿	9.0	6.0	1.8	鈍橙色(7.5YR7/3)		底部回転ヘラキリ
85		土師器	小皿	9.5	6.5	1.5	黄灰色(2.5Y5/1)	復元完形	底部回転ヘラキリ 外面底部に煤
86		土師器	小皿	10.4	7.6	1.7	灰白色(10YR8/2)		底部ヘラキリ
87		土師器	小皿	10.7	7.2	1.5	灰白色(10YR8/2)		底部ヘラキリ
88		土師器	皿	12.6	8.0	1.7	浅黄橙色(10YR8/3)		底部回転ヘラキリ・板目
89		土師器	皿	13.3	8.2	2.1	灰白色(2.5Y7/1)	復元完形	底部回転ヘラキリ・板目
90		備前焼	甕				褐色(10YR4/1)		
91	溝 5	備前焼	甕				鈍褐色(7.5YR5/3)		
92		土師器	小皿	8.2	5.6	1.4	灰黄色(2.5Y8/2)		底部ヘラキリ
93		土師器	皿	15.5	8.6	2.3	鈍褐色(7.5YR6/3)		
94	溝 6	青磁	皿?				灰白色(N7/0)		釉薬オリープ灰色(10Y5/2) 龍泉窯 14c後半～15c前半
95		備前焼	搦鉢				灰褐色(5YR4/2)		
96	窪地 1	土師器	皿	19.0	8.2	2.2	褐色(10YR6/1)	復元完形	底部回転ヘラキリ・板目
97		備前焼	搦鉢				灰褐色(7.5YR5/2)		
98	窪地 2	備前焼	搦鉢	(26.3)	12.1	10.5	灰赤色(7.5R4/2)		7本1組の搦目5か所
99	P 12	土師器	小皿	7.8	5.9	1.6	鈍褐色(7.5YR6/4)	完形	底部糸切り
100	P 7	土師器	小皿	6.0	4.4	1.1	鈍橙色(7.5YR7/3)		底部ヘラキリ
101		土師器	埴塼	9.0	2.4	3.8	褐色(10YR5/1)		口縁部に気泡、内面に溶解物付着
102	P 11	土師器	小皿	10.3	6.9	1.7	灰白色(10YR8/2)		底部回転ヘラキリ
103		土師器	杯	13.5	7.0	2.5	灰白色(2.5Y8/2)		底部回転ヘラキリ
104	P 3	陶器	皿	12.9	5.8	3.2	灰黄色(2.5Y7/2)		釉薬灰白色(10Y7/1) 福建省漳州窯 16c第4四半期～17c初
105	P 2	備前焼	小皿	10.0	6.3	2.7	灰赤色(2.5YR4/2)	完形	底部糸切り 内面に漆付着
106	P 4	備前焼	壺	13.0			灰色(N5/0)		
107	P 6	備前焼	甕				鈍赤褐色(2.5YR4/3)		
108	P 5	備前焼	甕				灰褐色(5YR5/2)		
109	P 8	備前焼	搦鉢	(28.7)			灰褐色(5YR5/2)		
110	P 9	備前焼	搦鉢	(27.2)			灰赤色(2.5YR4/2)		6本1組の搦目
111	P 10	土師器	杯	13.6	7.8	2.9	鈍橙色(7.5YR7/3)		底部回転ヘラキリ・板目
112		備前焼	甕		(31.8)		灰白色(2.5Y8/2)		

石製品一覽表

掲載 番号	掲載 遺構名	器種	計測値(mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S 1	溝 1	硯	108.00	72.00	28.50	194.30			

金属器一覽表

掲載 番号	掲載 遺構名	器種	計測値(mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M 1	土墳墓 1	煙管(火皿)	16.80	9.10		0.87	銅	近世	火皿部分のみ
M 2		棺金具	25.85	8.80	10.55	2.60	鉄		
M 3		棺金具	28.90	11.00	11.20	1.80	鉄		
M 4		棺金具	49.90	11.50	15.70	5.05	鉄		
M 5	土墳墓 4	錢貨	23.80			2.10	銅		「元祐通寶」(北宋)1086年初鑄
M 6	土墳墓 7	錢貨	24.86			1.90	銅	近世	「元豊通宝」(北宋)1078年初鑄
M 7			24.74			3.13	銅		
M 8			24.73			2.06	銅		
M 9			24.60			2.49	銅		
M10			24.53			2.08	銅		
M11			24.52			2.51	銅		
M12			24.52			2.39	銅		
M13			24.43			2.58	銅		
M14			24.42			2.41	銅		
M15			24.40			3.24	銅		
M16			24.39			3.07	銅		
M17			24.36			3.16	銅		
M18			24.34			3.24	銅		
M19			24.34			2.65	銅		
M20			24.32			2.61	銅		
M21			24.17			3.42	銅		
M22			24.13			2.82	銅		
M23			25.43			2.63	銅		
M24			25.26			2.61	銅		
M25			25.25			2.14	銅		
M26	25.17			3.25	銅				
M27	25.17			3.05	銅				
M28	25.17			2.65	銅				
M29	25.13			2.69	銅				
M30	25.13			2.56	銅				
M31	24.93			2.41	銅				
M32	23.94			2.44	銅				
M33	22.91			1.95	銅				
M34	22.85			2.41	銅				
M35	22.84			2.03	銅				
M36	23.62			3.06	銅		判読不明		
M37	溝 1	鏡	66.60		2.55	39.12	銅	近世	
M38		錢貨	24.40			2.20	銅		「政和通寶」(北宋)1111年初鑄
M39		錢貨	24.05			1.30	銅		「景祐通寶」(北宋)1034年初鑄
M40		刀子(莖)	37.05	17.15	4.50	13.84	鉄	近世	
M41		刀子(莖)	41.50	15.10	2.37	6.12	鉄		
M42		釘	32.45	7.20	6.60	3.01	鉄		
M43		棺金具?	51.10	12.30	14.25	13.33	鉄		
M44		鎌	225.00	37.10	7.85	105.67	鉄		
M45		P 1	鍬	55.80	34.50	8.30	13.20	鉄	

木器一覧表

掲載 番号	掲載 遺構名	器種	計測値(cm)			樹種	木取り	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
W1	井戸2	椀	7.2	12.0		ブナ属		中世	
W2		柄杓(底板)?	9.3	8.1	0.9	スギ	榫目		
W3		鍬	22.2	12.2	5.1	コナラ属	榫目		
W4	溝1	曲物(蓋)	15.1	13.6	0.8	スギ	榫目		
W5		曲物(蓋)	15.8	16.8	1.2	スギ	榫目		上下にくびれ部(組かけ痕跡?)
W6		曲物(底板)	1.3	9.8	1.1	マツ属	榫目		2か所に木釘
W7		曲物(底板)	16.9	6.5	1.7	マツ属	榫目		2か所に木釘
W8		曲物(底板)	17.2	8.0	1.7	マツ属	板目?		
W9		下駄	17.8	10.7	1.0	ヒノキ	榫目		

第4章 河内城跡

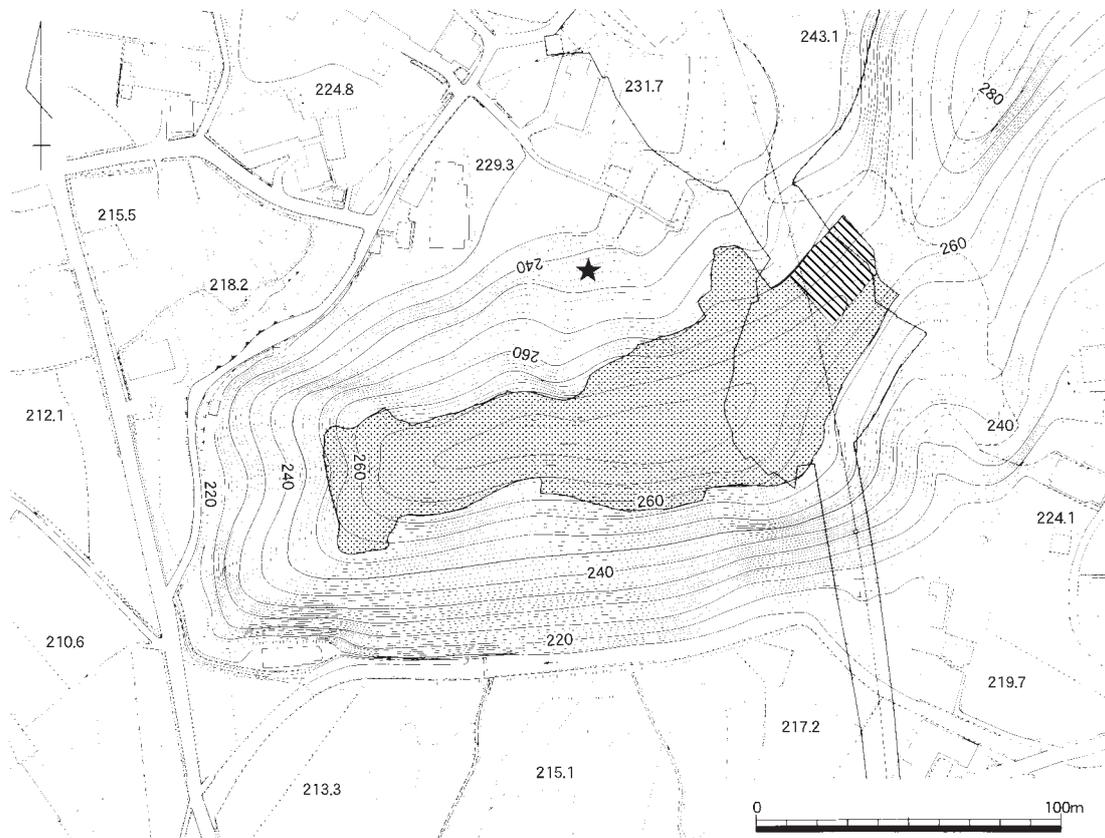
第1節 城郭の立地と調査の概要

河内城跡は、奥津町河内に所在する。奥津町を南北に貫流する吉井川は古来より山陰と山陽を結ぶ主要な交通路をその川筋に付属させており、河内城跡はこの街道筋を西方眼下に見下ろす状況で標高280m、東西約150mにのびる尾根上に構築されていた。

調査はまず樹木の伐採後、城郭の全容把握を目的として詳細な地形測量図の作成から開始した。

この結果、調査前に標高260mより上位に確認されていた堀切・曲輪以外にも、それより下方の斜面部において微地形ながら新たな切岸・曲輪・犬走等の存在が確認され、急遽調査範囲を部分的ながら下方の250m付近まで拡張した。

発掘調査は、主要な曲輪に土層観察用の土手を設定し、これを除く全ての調査区を対象に、表土の除去から開始した。調査の結果、城郭は東側の尾根を2条の堀切で切断し、その西側に曲輪11、土塁6、犬走4、豎堀1、通路2、切岸・土塁1等を配していたことが判明した。また、城郭以外の遺構として、集石墓2、焼成土壙2、さらに炭窯、古道が確認された。 (島崎 東)



第1図 調査位置図 (1/2, 500) [点線] 平成8年度調査 [斜線] 平成9年度調査 ★ 炭窯 1

第2節 城郭を構成する遺構と遺物

1 概要

標高260～280m、周辺低位部との比高60m、長さ約200mを測る尾根上に構築された城である。

城は、東側にのびる尾根筋を2条の堀切によって切断し、これより西側150mを城郭として普請している。堀切の南北両斜面部には堀切の掘開によって出た土砂を利用してそれぞれに土塁を意識したとみられる高まりが2条とその間に1条の豎堀状の窪みを形成して斜面部の防御を一層強固にしている。また、堀切の西側の北やや緩斜面には切岸・土塁、西側先端斜面には切岸と犬走、南側の一部緩斜面には切岸と犬走が造られ、それぞれの緩斜面に防御的配慮がなされている。

城内には城兵もしくは避難した村人が立て籠るであろう曲輪が大小11面存在する。ただし、各曲輪は点在傾向にあり、また面積的にも100㎡前後から10㎡未満の様々な曲輪がそれぞれに役割を分担していた状況で存在していた。中心的な曲輪は、最も高所にあり面積132㎡を測る曲輪2、およびこれに接する曲輪1が考えられる。

なお、城内からは土器等生活道具の出土は多く認められなかった。(島崎)

2 曲輪

曲輪1 (第2・4・5・12図)

城郭の東端、堀切2の西側に設けられた曲輪で、東西11.8m、南北7.2mを測る。尾根の最も高い位置に設けられた曲輪であるが、西側の尾根の最高所は削り残し曲輪には用いていない。平坦面はすべて地山の削り出しによって形成されているが、造成土が曲輪3の上側部分で若干認められる。西端には深さ4cmの浅い溝があり、排水溝の可能性はある。(宇垣匡雅)

曲輪2 (第2・4・6・7・8・29図、図版10)

曲輪1の南側に設けられた規模の大きな曲輪である。一連の曲輪として取り扱ったが、東西7.6m、南北6.0mの曲輪の東に東西16.4m、南北6.2mの曲輪が接続しており、東側が20cm低い。他の曲輪と異なり、この曲輪の平坦面の北縁には細い溝がめぐっており、排水を目的としたものと考えられる。

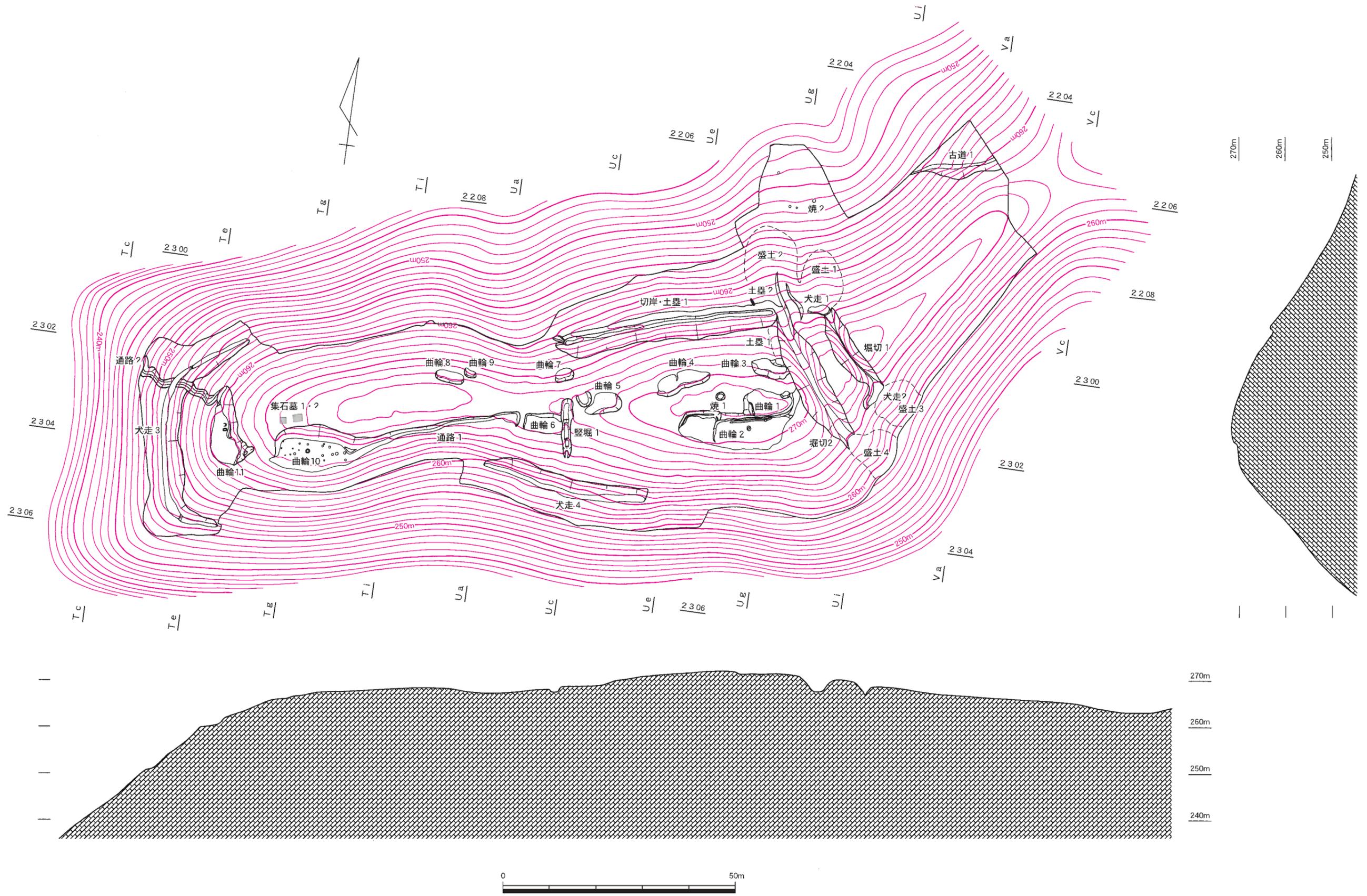
地山を削り出し、その土を南斜面に盛って曲輪平坦面を形成しており、南斜面には斜距離で8.4m、下方4.9mまで造成土が遺存している。曲輪南東端では造成土の下面、旧表土先端部で焼土・炭の散布が認められた。城郭の造成に先立つ樹木の処分等によって形成された可能性が考えられる。

河内城跡の曲輪の中では最も広いが、建物の所在は認められず、柱穴1を検出したにすぎない。柱穴1は径45cm、深さ45cmを測るしっかりしたもので、柱痕部分から白磁皿1が出土した。(宇垣)

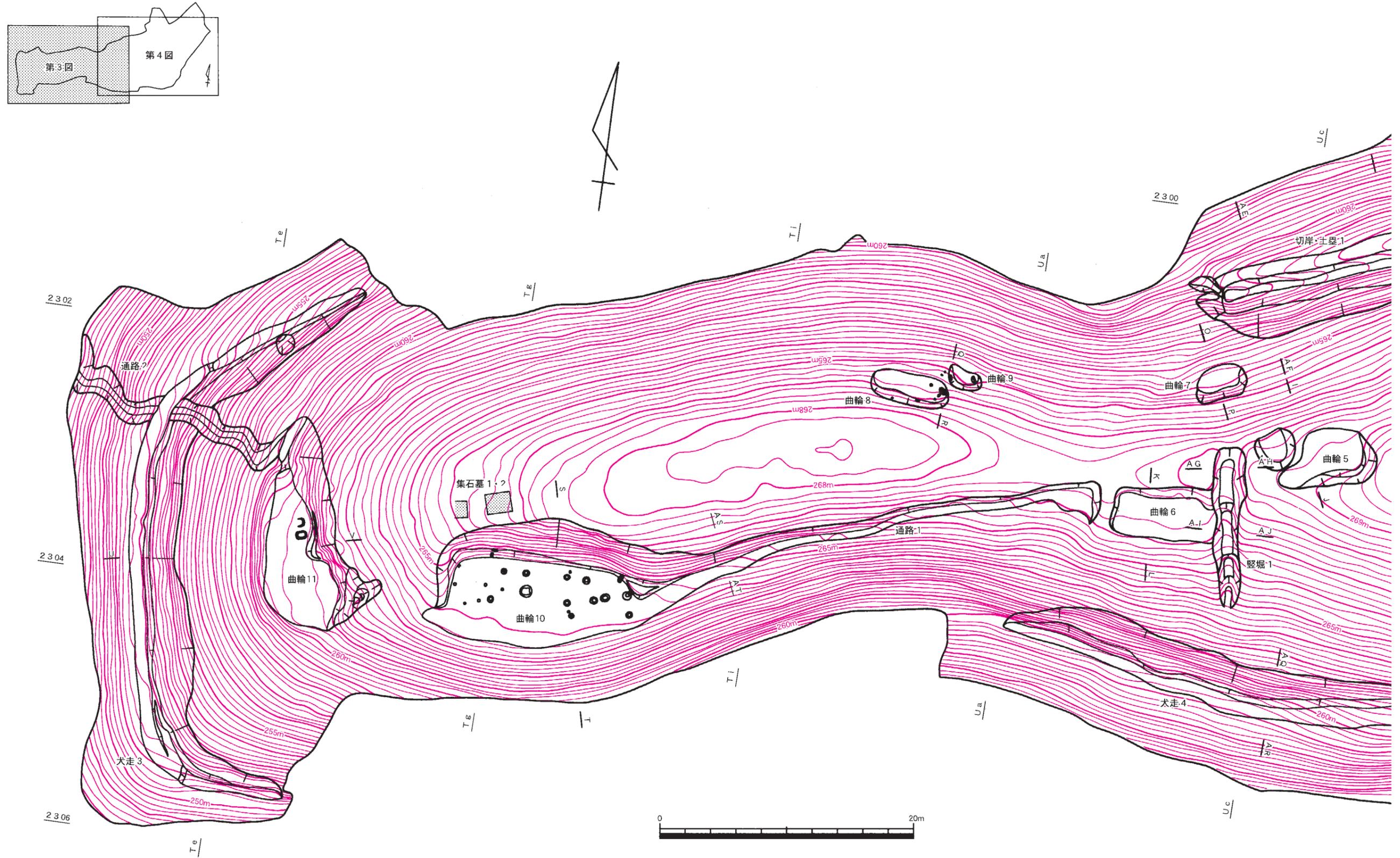
曲輪3～5 (第2・4・9・10・12図、図版10)

城郭東部の北斜面に所在する小規模な曲輪である。曲輪3は東西7.5m、南北2.4m、4は東西11.5m、南北3.4m、5は東西8.9m、南北4.5mを測る。いずれも山(南)側を掘削し、下方に造成して平坦面を形成している。

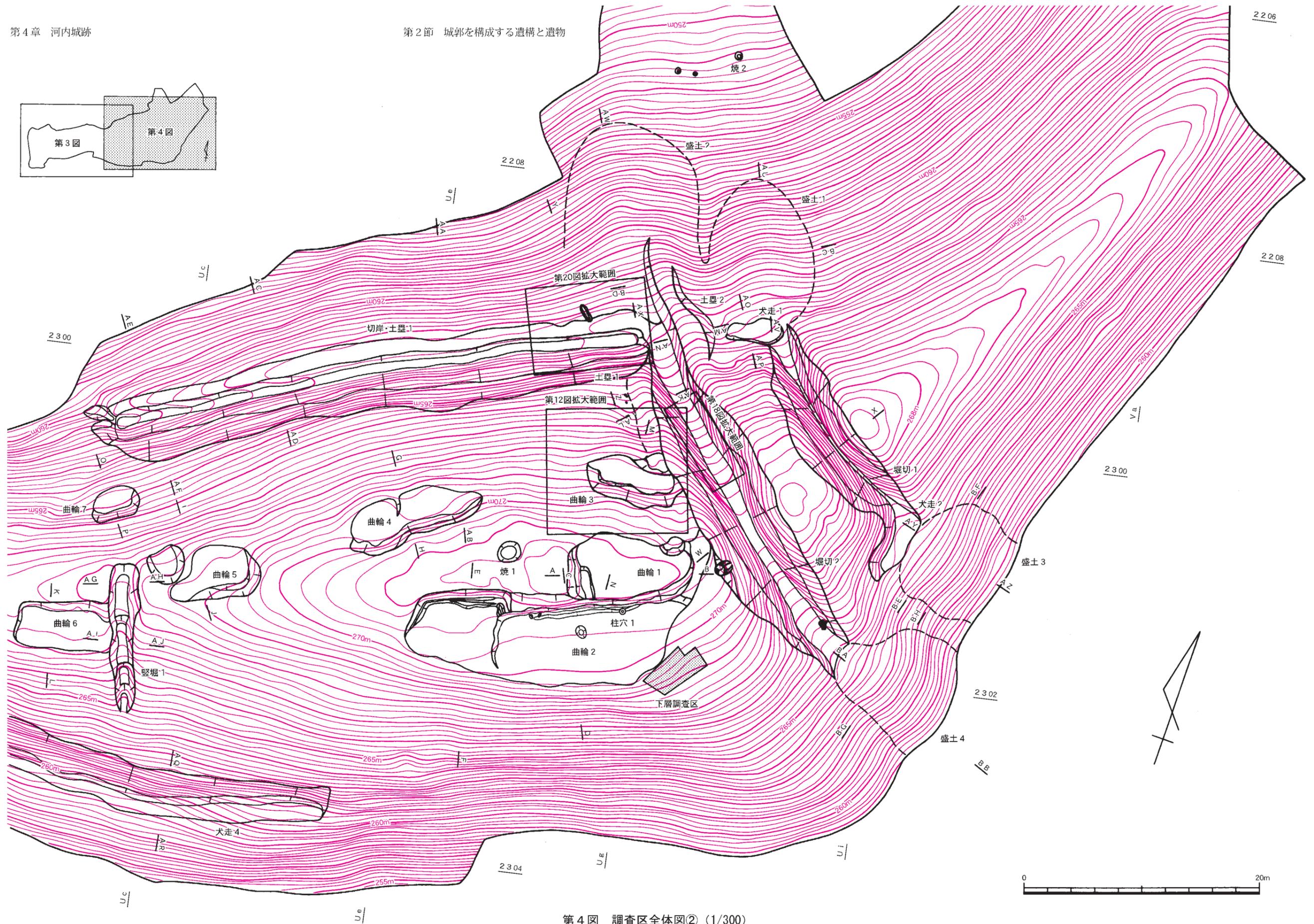
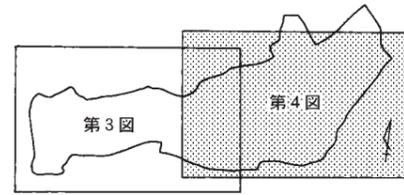
曲輪3平坦部および周辺には、15～30cmの垂角礫や円礫が散在して出土した。曲輪3の上方斜面にも一部が所在することからみて、これらは曲輪3に伴うものではなく、上方の曲輪1に用いられた石



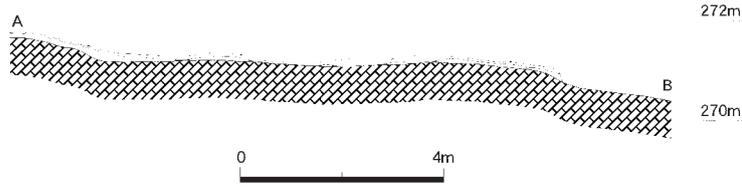
第2図 河内城跡 全体図 (1/800)



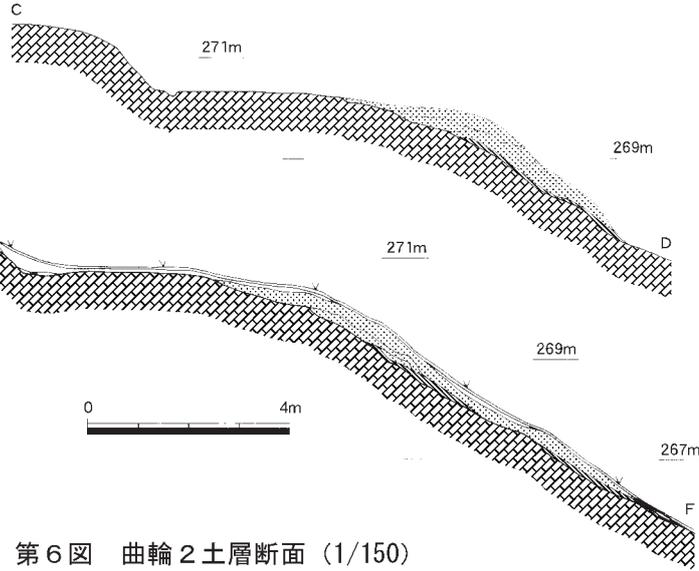
第3図 調査区全体図① (1/300)



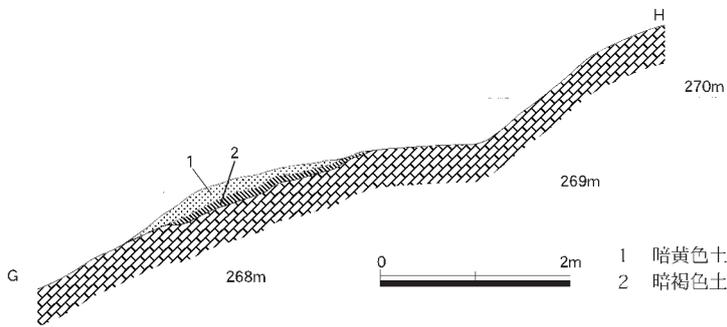
第4図 調査区全体図② (1/300)



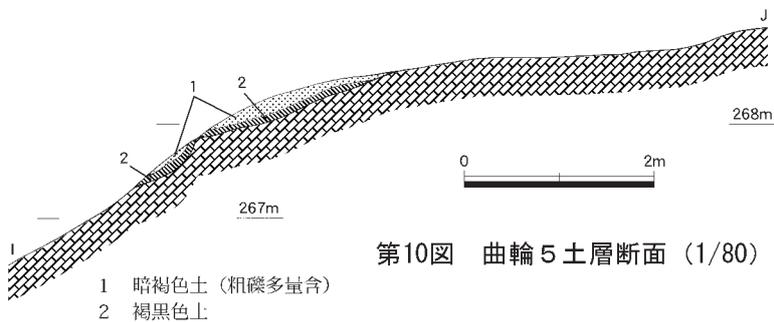
第5図 曲輪1土層断面 (1/150)



第6図 曲輪2土層断面 (1/150)



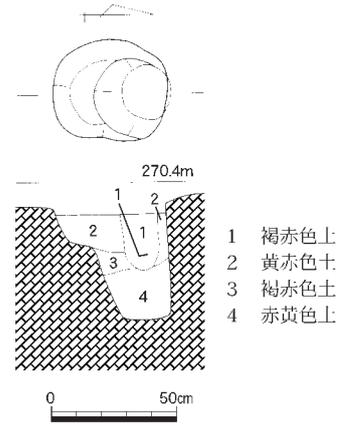
第9図 曲輪4土層断面 (1/80)



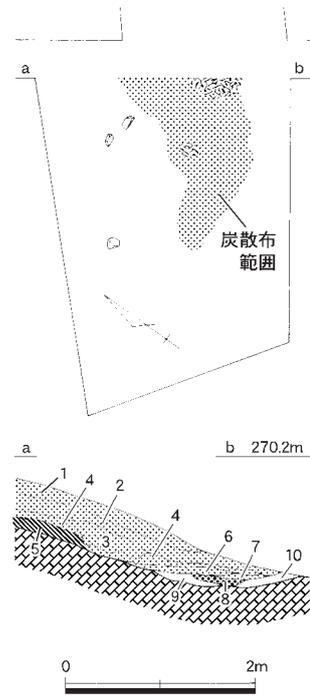
第10図 曲輪5土層断面 (1/80)

- 1 暗褐色土 (粗礫多量含)
- 2 褐黑色土

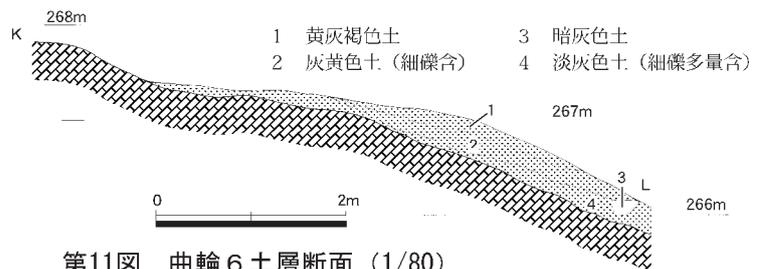
- 表土・堆積土
- 盛土
- 旧表土



第7図 曲輪2柱穴1 (1/30)

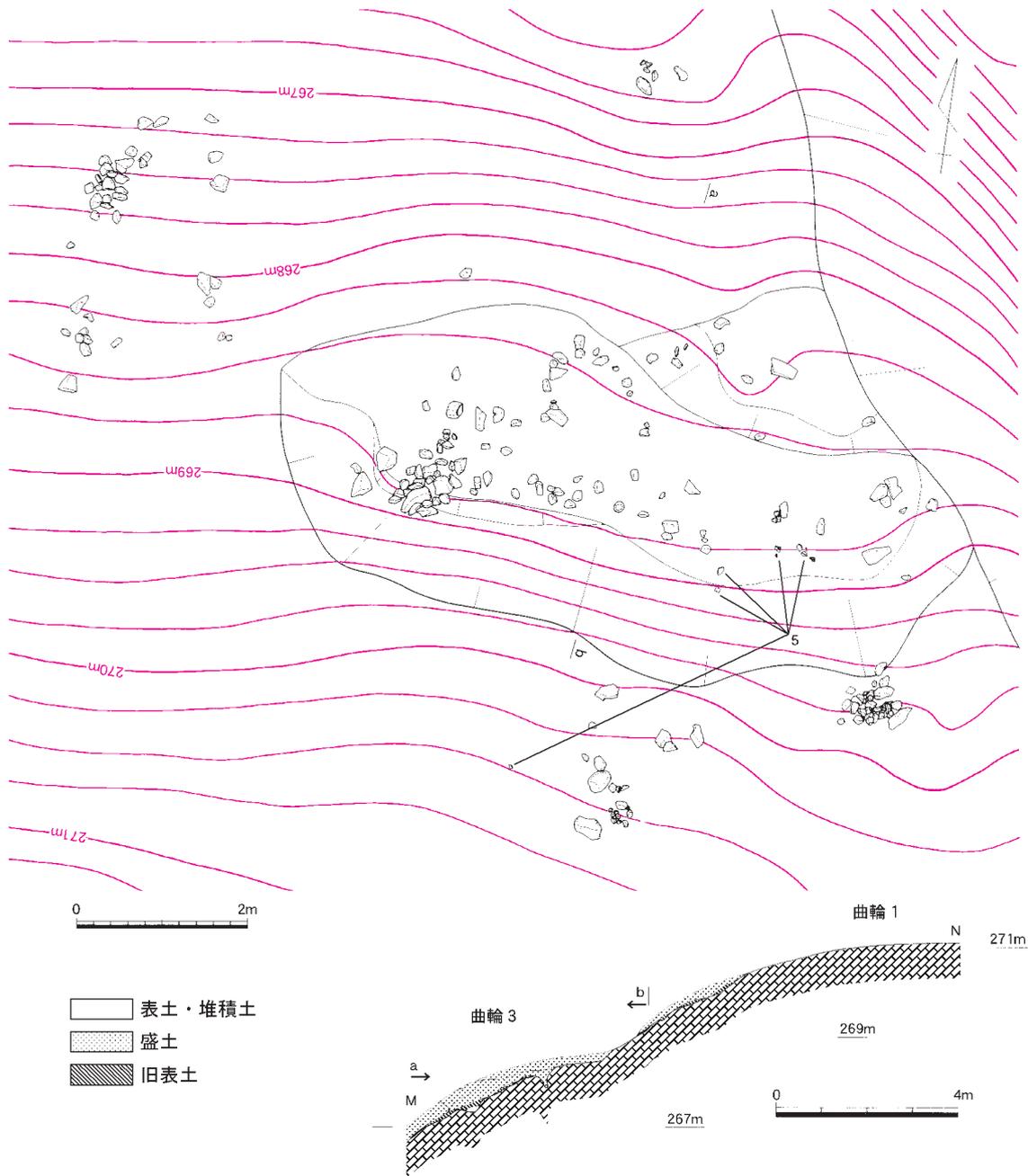


第8図 曲輪2南東下層調査区 (1/80)



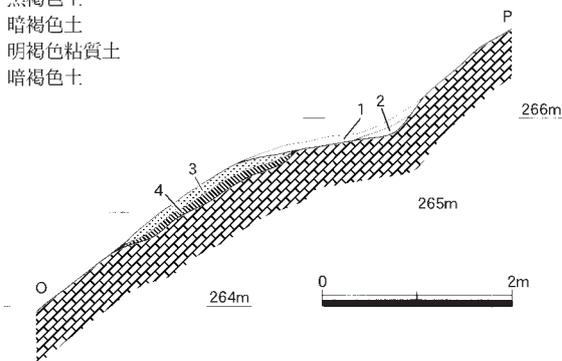
第11図 曲輪6土層断面 (1/80)

- 1 黄灰褐色土
- 2 灰黄色土 (細礫含)
- 3 暗灰色土
- 4 淡灰色土 (細礫多量含)

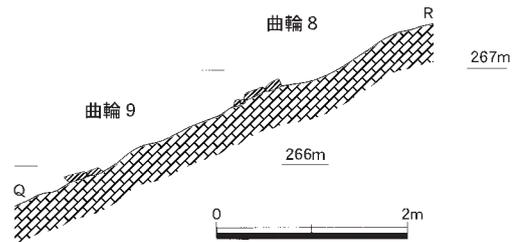


第12図 曲輪3 遺物出土状況・土層断面 (1/80, 1/150)

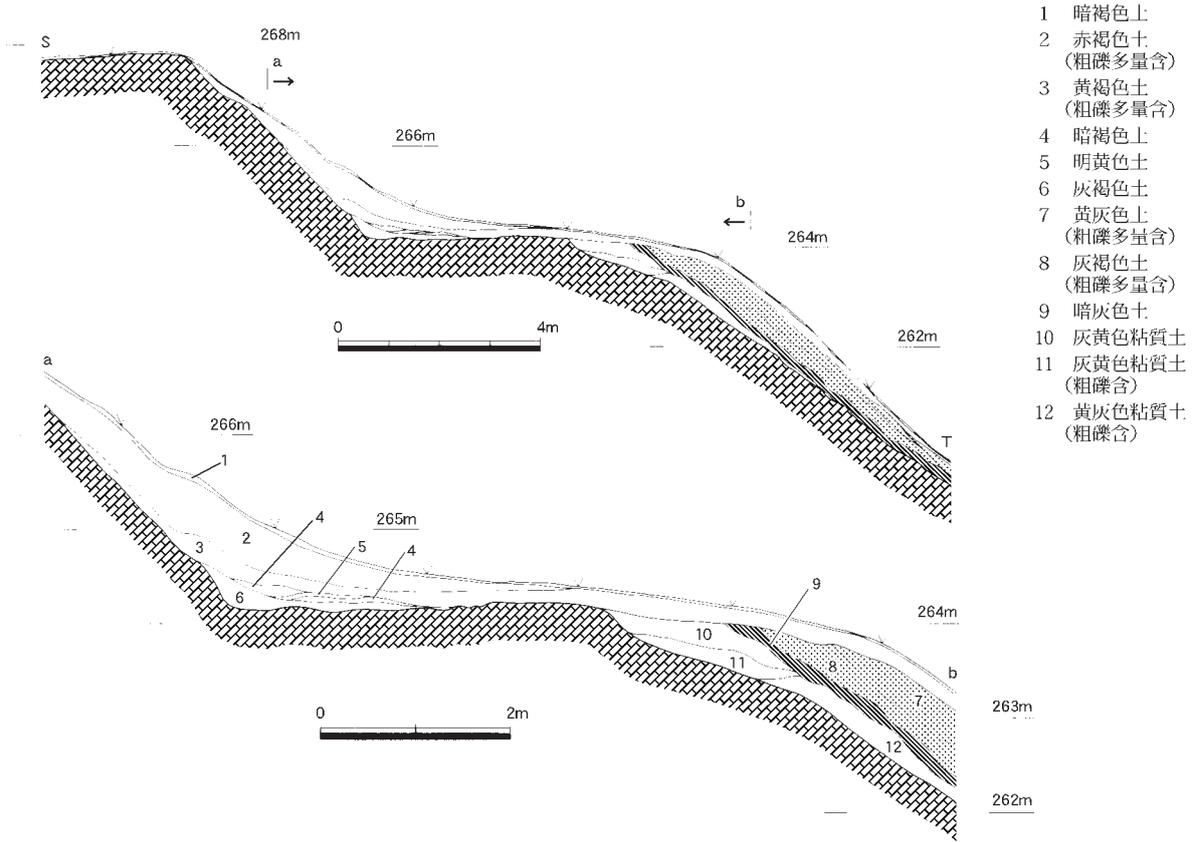
- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 明褐色粘質土
- 4 暗褐色土



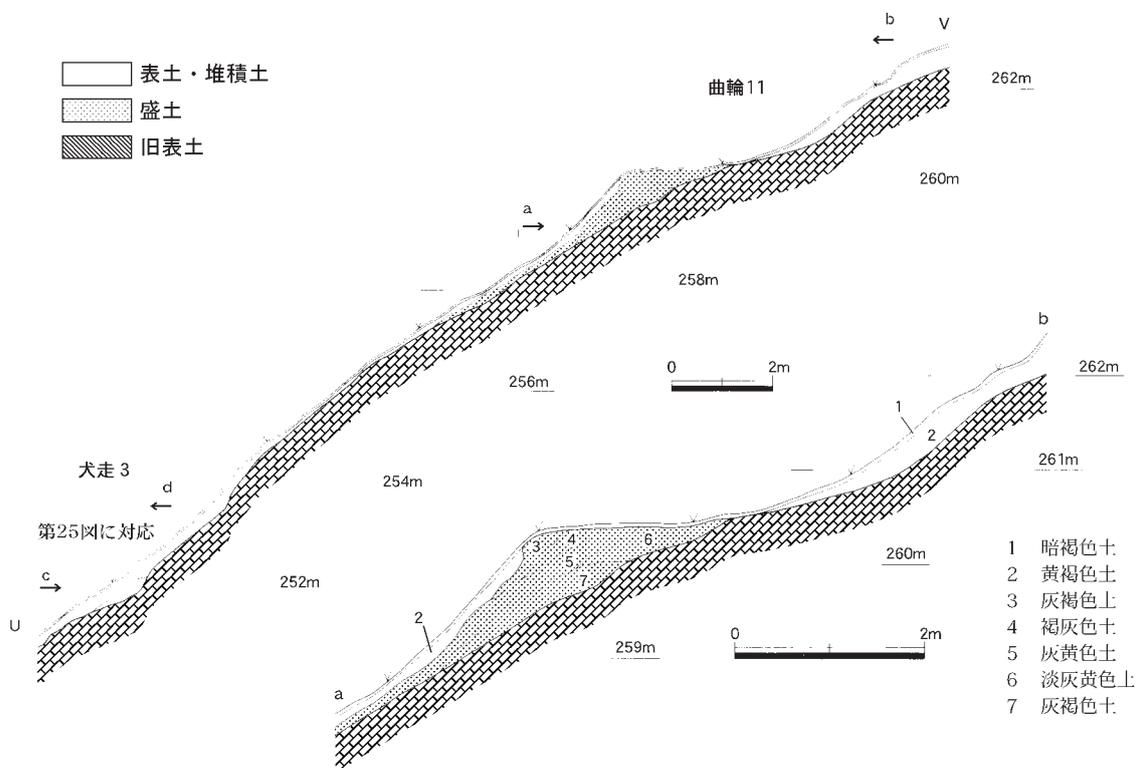
第13図 曲輪7 土層断面 (1/80)



第14図 曲輪8・曲輪9 土層断面 (1/80)



第15図 曲輪10土層断面 (1/150, 1/80)



第16図 曲輪11・犬走3土層断面 (1/150, 1/80)

材あるいはつぶて石のいずれかと推定される。また、それらと共に羽釜5が出土している。

曲輪4は中央北端で26cmの段がついており、山側の平面形からも2つの小平坦面によって形成されるとみられる。曲輪5の西側は径3.1mの浅いくぼみをなすが、本来の形状であるのか流出によるものか確定できない。(宇垣)

曲輪6 (第2～4・11・29図、図版10)

中央部豎堀1の西に接し、南側下方の犬走4を見下ろす位置に存在する。およそ東西8m、南北3.2mの長方形を呈する。北側斜面を約40cm削り出した土砂を南側斜面側に押し出し、曲輪を造成している。西側には削り残された高まりが土塁状に遺存する。刀子M7が出土している。(島崎)

曲輪7 (第2～4・13図)

豎堀1の北側斜面にあって、切岸・土塁1西端部を眼下に望む位置に、南側斜面を長さ4m切って造成された面積6.7㎡の狭い曲輪である。北面防備を目的とした曲輪と考える。(島崎)

曲輪8 (第2～4・14図、図版11)

豎堀1の西側、丘陵頂部やや北に下がった地点に、長さ6mにわたって斜面を切って造成されている。平面形は、6×1.7mの楕円形を呈する。柱穴・遺物等は確認されなかった。(島崎)

曲輪9 (第2・3・14・29図、図版11)

曲輪8の北東約1mに接する。長軸約3m、幅約1m、面積2.5㎡を測り、河内城跡の中にあつて最も規模の小さい曲輪である。鉄鏃M3が出土。曲輪8同様、北面防備のための曲輪と考える。(島崎)

曲輪10 (第2・3・15・29図、図版11)

城郭西半部にあって、91㎡と最大の規模を誇る曲輪である。ほぼ先端近くの南側斜面を大きく切岸することによって、またそれによって出た土砂を南側斜面に押し出すことで、最大幅東西14m・南北7mのほぼ長方形を呈する曲輪を造成している。切岸の最大高は3.7mである。曲輪からは、鉄釘M8～M10が出土し、柱穴も大小21個検出したが、建物・柵等を構成することはできなかった。曲輪底面からは、煮炊きに使用したと思われる羽釜6が小破片ながら確認されている。(島崎)

曲輪11 (第2～4・16図、図版11)

西側丘陵頂部をやや西側に下がった位置に最長17m、北側に丘陵を残した角度で切岸を行い、土砂を西側斜面に押し出して造成された曲輪である。切岸の最大高は約2mである。平面規模12×4～5.5mで約48㎡を測る。中央やや北側に2基の方形土壇を残すが、性格については不明である。またこの曲輪の北側には城道と考えられる道が取り付け、虎口の存在をうかがわせる。(島崎)

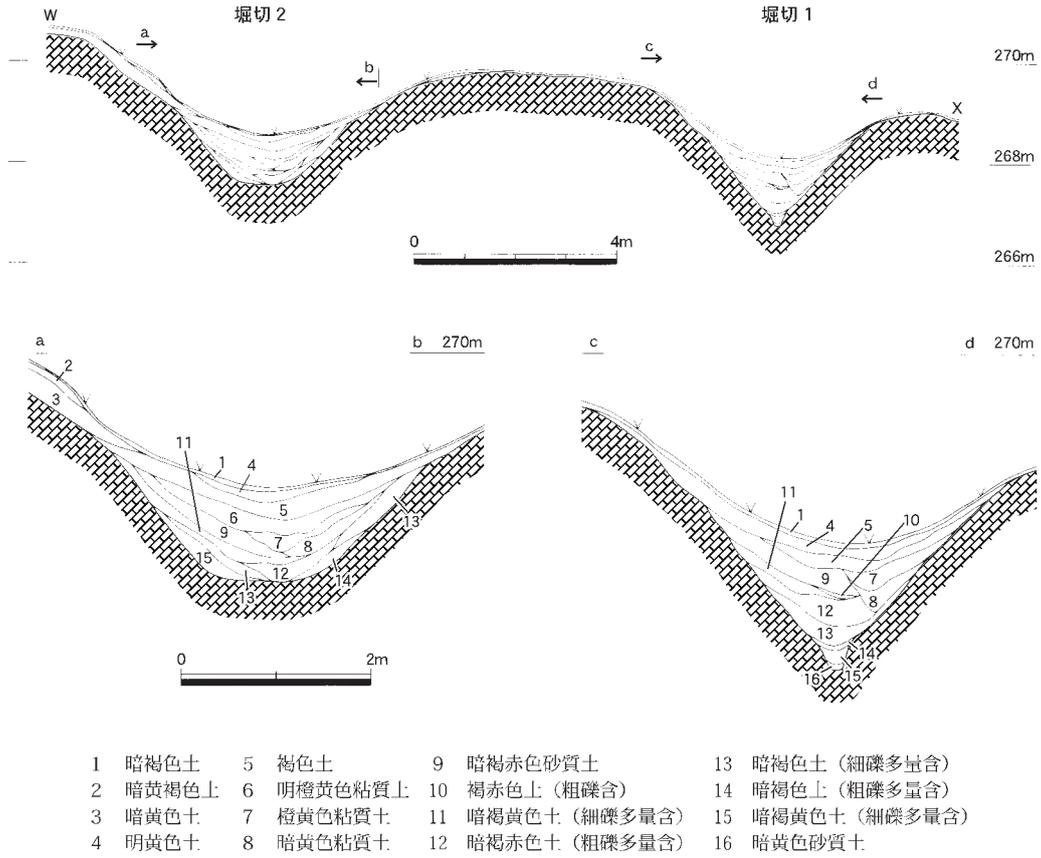
3 堀切

堀切1 (第2・4・17図、巻頭図版3、図版12)

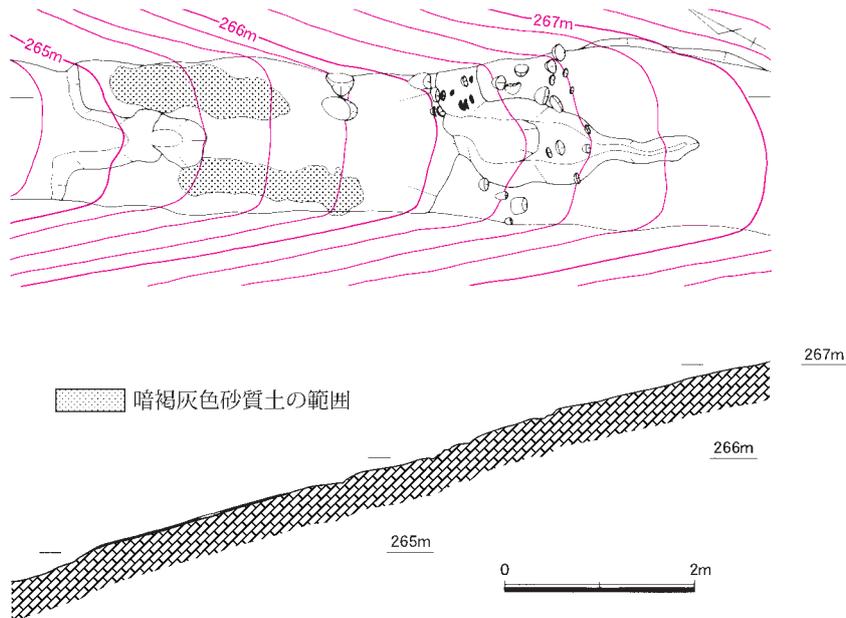
城郭東側には尾根線を切断する二重の堀切が設けられるが、そのうちの東側のものである。上面幅4.5m、長さ20m、深さ2.75mを測る。いわゆる薬研堀で断面はV字形を呈し、砂・礫で埋没している。下端は急角度に掘り込まれ狭い溝状となる。堆積土7・8層は小流路の痕とみられる。(宇垣)

堀切2 (第2・4・17・18図、巻頭図版3、図版12)

堀切1から西へ4m隔てて設けられた、断面逆台形の堀切で、上面幅6.4m、長さ32.4m、深さ2.9mを測る。上部はかなり崩れており、本来の幅は5m前後とみられる。底面の北端は切岸・土塁1の土塁上面に接続する。底面北側では鋤状工具による掘削痕を検出した。また、その北側では長さ2.7



第17図 堀切1・堀切2土層断面 (1/150, 1/80)



第18図 堀切2底面掘削痕跡 (1/80)

mにわたって暗褐灰色砂質土の広がりが認められた。堅くしまっており、少なくともこの付近は底面の整地がなされた可能性が強い。底面南端では長さ50cm前後の角礫2点が近接して出土した。(宇垣)

4 切岸・土塁

切岸・土塁1 (第2～4・19・20・29図、巻頭図版3、図版13)

城郭の東部北斜面に設けられた大規模な遺構で、東西49mを測る。山側に切岸を造り、下方斜面に大規模な盛土を行い、盛土上端に幅2.2mの土塁を設けている。切岸の高さは3.9mを測り、盛土は土塁の下方11.5mに達する。土塁は高さ57cmと低く、内側の切岸側は長さ45.7mの浅い横堀状になる。土塁南側の堆積土のうち1～3層は遺構埋没後に形成された小流路が埋まったものとみられ、これは土塁の西端を切っており、もとは土塁西端は山側に達して閉じた形であったとみてよい。

土塁の東端から西8.5mまでの範囲では土塁内側にそって長さ15～30cmの円礫・角礫の集中が認められた。上部の礫は堆積土中であるが、下部の礫は貼石状に土塁盛土・内底面整地土に埋め込まれており、前者は本来もう少し高かった土塁に埋め込まれた石材が内側に転落したものとみられる。また、土塁の下方側斜面にも礫の散布が見られる。前面にも礫が貼られていた可能性は否定できないが、内側上端から外へ流出した可能性が強いと考える。そのほか、内底面東端では炭薄層の広がりが認められた。この層中から鉄鏃M4が、やや西の堆積土下部から鉄鏃M1が出土した。(宇垣)

5 竪堀

竪堀1 (第2～4・21図、図版10・13)

郭内中央部にあつて、主郭を画するかのよう主に南側緩斜面に直交して掘開されている。最大長12.5m・幅1.5～2.8mを測る。ただし深さは50～80cmと堀切1・2に比較して浅い。溝内からの出土遺物は確認できなかった。(島崎)

6 土塁

土塁1 (第2・4・22図)

曲輪3の下方、堀切2の北西肩部分に設けられ、長さ4.7m、幅2.45m、高さ60cmを測る。土塁盛土は曲輪3の造成土から続いており、もとは曲輪3の平坦面に接続していた可能性がある。(宇垣)

土塁2 (第2・4・23図)

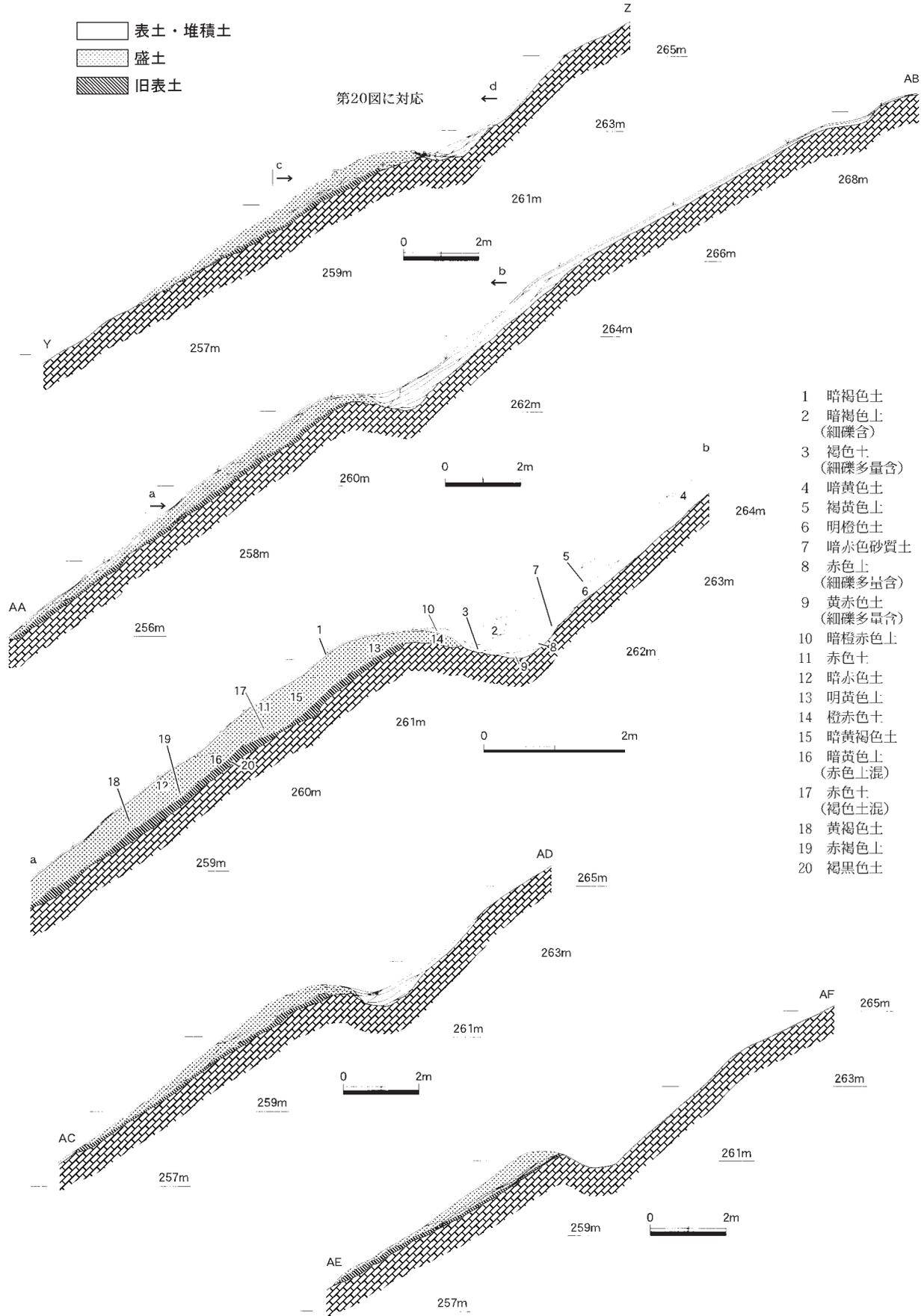
堀切2の北東肩を形成する土塁で、長さ13.4m、幅3.6cm、高さ60cmを測る。盛土によって築かれており、北半は地山上に、南半は後述の盛土2上に築かれている。(宇垣)

7 盛土

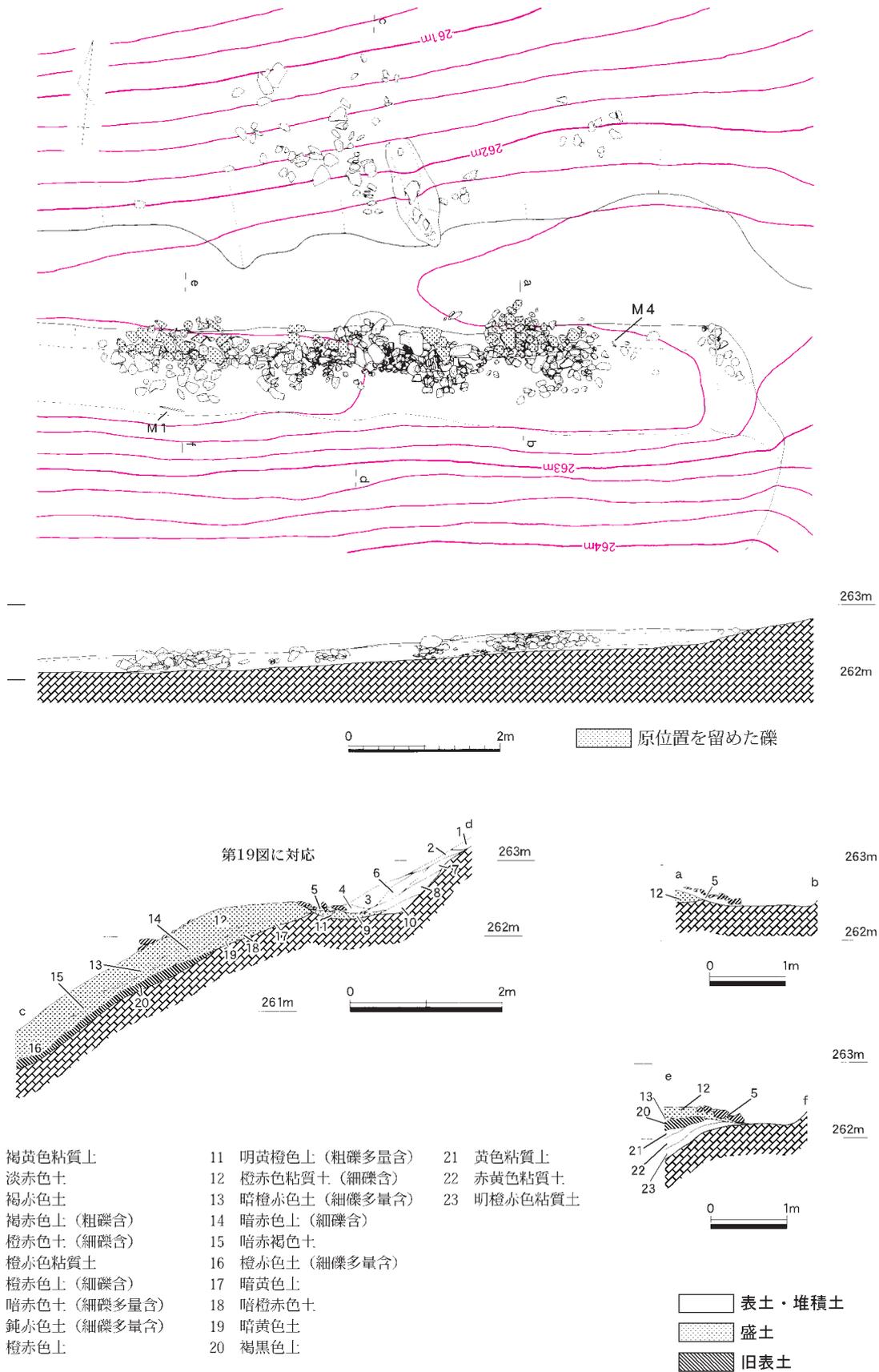
盛土1～4 (第2・4・28図、図版14)

堀切1・2の南北両外側で検出した盛土部分である。堀切2北側の盛土2が最も規模が大きく東西11.5m、南北17.6m、最大厚さ1.15mを測る。この盛土の西側は切岸・土塁1の下方盛土に接続する。他は規模がほぼ等しく東西9m、南北12m、厚さ75cm前後である。

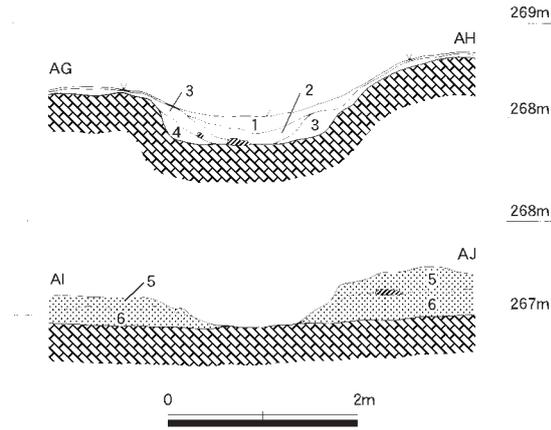
この4か所の盛土は位置や土量、相当量の角礫を含むことなどから堀切の掘削土を盛り出したものとみてよい。目的をもって作り出されたものであるのか排土処理の結果であるのかが問題となるが、



第19図 切岸・土塁1土層断面 (1/150, 1/80)

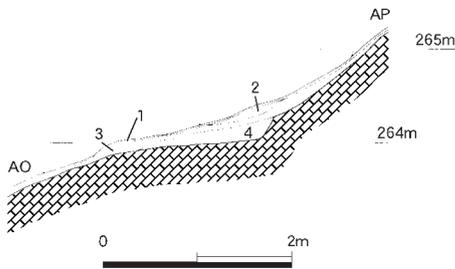


第20図 切岸・土塁1遺物出土状況 (1/80)



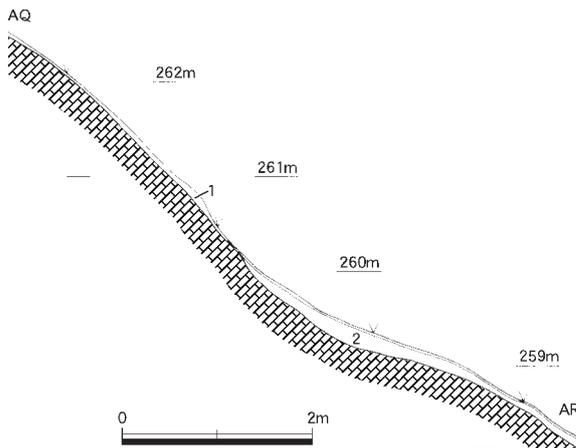
- 1 暗褐色土
- 2 暗黄灰色土
- 3 黄褐色土
- 4 明黄色土
- 5 灰黄色土 (細礫含)
- 6 淡黄色土 (細礫多量含)

第21図 縦堀1土層断面 (1/80)



- 1 暗褐色土
- 2 黄色土
- 3 暗褐色土
- 4 明黄色土

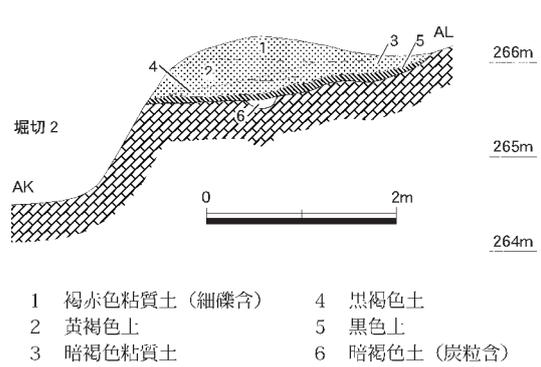
第24図 犬走1土層断面 (1/80)



- 1 暗褐色土
- 2 暗灰褐色土 (細礫含)

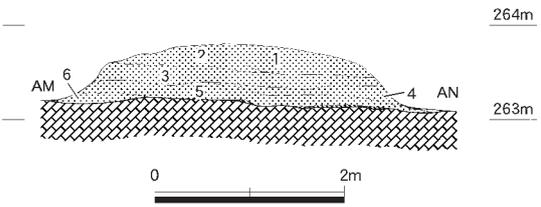
第26図 犬走4土層断面 (1/80)

- 表土・堆積土
- 盛土
- 旧表土



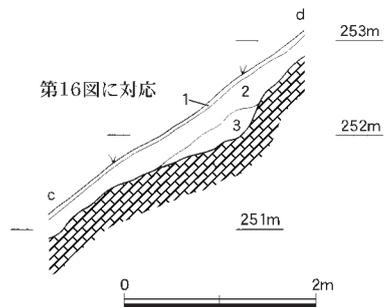
- 1 褐赤色粘質土 (細礫含)
- 2 黄褐色土
- 3 暗褐色粘質土
- 4 黒褐色土
- 5 黒色土
- 6 暗褐色土 (炭粒含)

第22図 土罫1土層断面 (1/80)



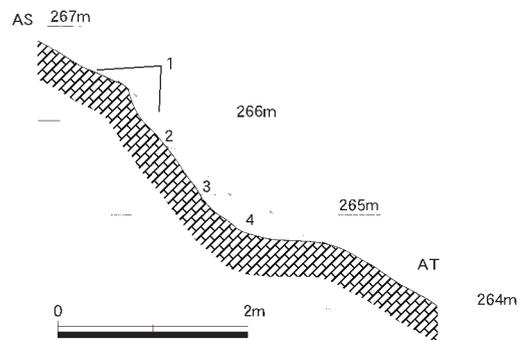
- 1 暗黄褐色土 (細礫含)
- 2 暗黄褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土
- 4 黄赤色粘質土
- 5 黄褐色粘質土
- 6 暗黄褐色粘質土

第23図 土罫2土層断面 (1/80)



- 1 暗褐色土
- 2 黄褐色土
- 3 明黄褐色土 (粗礫含)

第25図 犬走3土層断面 (1/80)



- 1 黄褐色土
- 2 褐色土
- 3 赤褐色土 (細礫含)
- 4 赤褐色土 (粗礫多量含)

第27図 通路1土層断面 (1/80)

土塁2や犬走1・2などの遺構がこれらの上に乗る形で設けられていることや、堀切との位置関係が防御上は適切でないと思われることなどから排土処理によって生じたと考える。(宇垣)

8 犬走

犬走1・2 (第2・4・24図)

犬走1・2は堀切1の南北両端に設けられた小規模な平坦面であり、犬走3・4とは規模が異なり、性格も当然異なるとみられるが、曲輪ではないため一応ここで取り扱う。

犬走1は堀切1の北端底面から25cmの段をつけ東西4.6m、南北2.2mの平坦部を設けたもので、北部は盛土1上となる。犬走2は堀切1南端に設けられた東西5.5m、南北1～2mの平坦部である。犬走1と異なり堀切底はそのまま接続する。(宇垣)

犬走3 (第2・3・16・25図、図版11・14)

曲輪11の西側下方斜面約9～14mにかけて、海拔251～255mの中腹を「コ」字状に切岸することによって幅1～1.5mの犬走が造られている。通路、帯曲輪的な使用も想定される。曲輪11に向かつては、切岸によって傾斜角度が推定旧地表35～45度となり、登坂を不可能としている。(島崎)

犬走4 (第2～4・26図、図版14)

主郭の南側斜面のなかでもやや緩やかな部分に長さ19mにわたって切岸を行い、その結果造り出されたものである。長さ約18m・幅1～2mを測る。(島崎)

9 通路

通路1 (第2・3・27図)

曲輪10と曲輪6、主郭とを結ぶ通路である。西側丘陵部の南側斜面を長さ約18mにわたって高さも約1.6m削り、幅50cm～1mの道幅を確保している。(島崎)

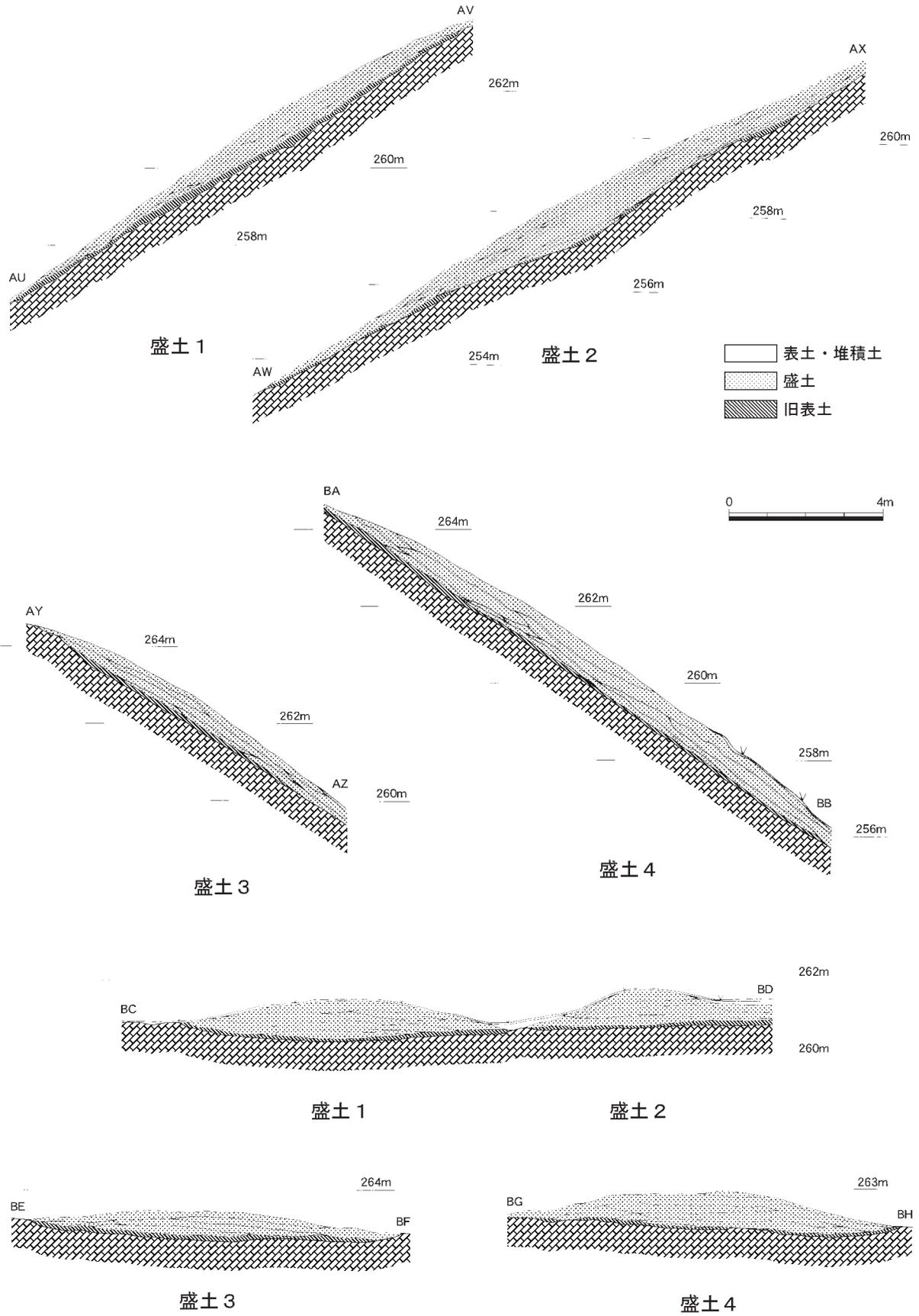
通路2 (第2・3図)

丘陵西北部あって山裾から曲輪11まで続く道である。道は、急斜面につづら折りに掘り窪められたもので、上端幅で1.5～2.5mを測る。現状で他に登坂道が見られないことから、この通路が城への上がり下りの道であろうと考える。(島崎)

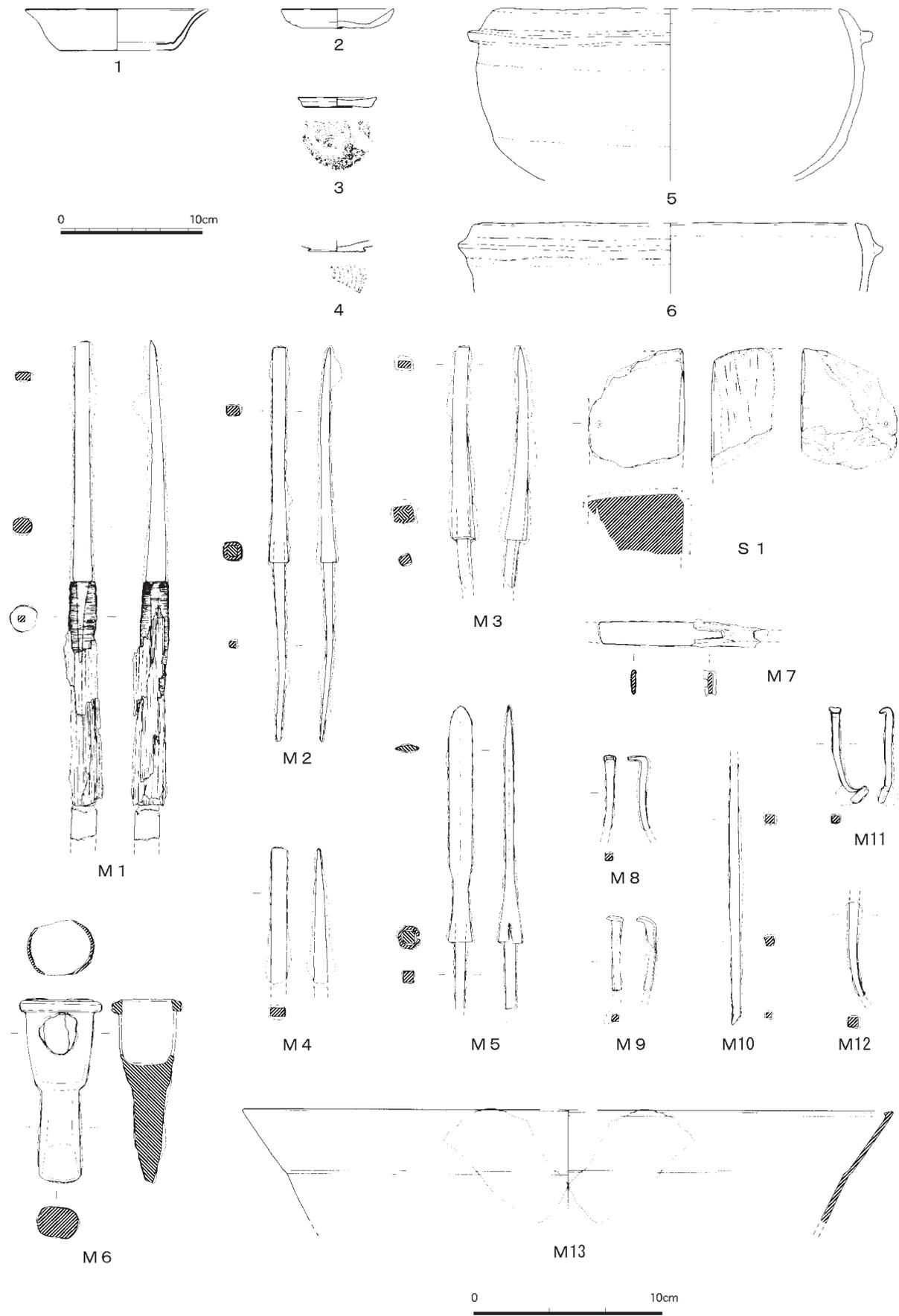
10 出土遺物 (第29図、図版16)

出土遺物のうち、ここでは河内城跡に伴うと考えられるものを掲載している。1は白磁である。口唇部の釉薬を剥いだ、いわゆる口禿の皿で、13世紀中葉～14世紀初頭に位置付けられる。2～4は土師質小皿で、底部へら切りと糸切りの両者がある。5・6は瓦質羽釜である。焼成はやや甘く、鏝部もいびつで、粗雑な印象を受ける。外面には煤の付着が著しい。

M1～M5は鉄鏃で、M1～M4はいわゆる鑿頭形、M5は剣頭形である。いずれも茎に鏃身を巻きつける鍛打技法により製作されている。このうち、M1は矢柄の一部が遺存する貴重な資料である。矢柄は竹製で、根太部に糸を巻いて鏃を固定している。M7は刀子、M8～M12は鉄釘である。M6は鑄造鉄製品で、薙刀の石突と考えられる。M13は鑄造の鉄鍋で、口唇部・体部の形態から14世紀代のもと考えられる。S1は流紋岩製の砥石である。破面に穿孔痕があり、欠損した砥石を再利用しようとしたものと思われる。(佐藤)



第28図 盛土 1～4 土層断面 (1/150)

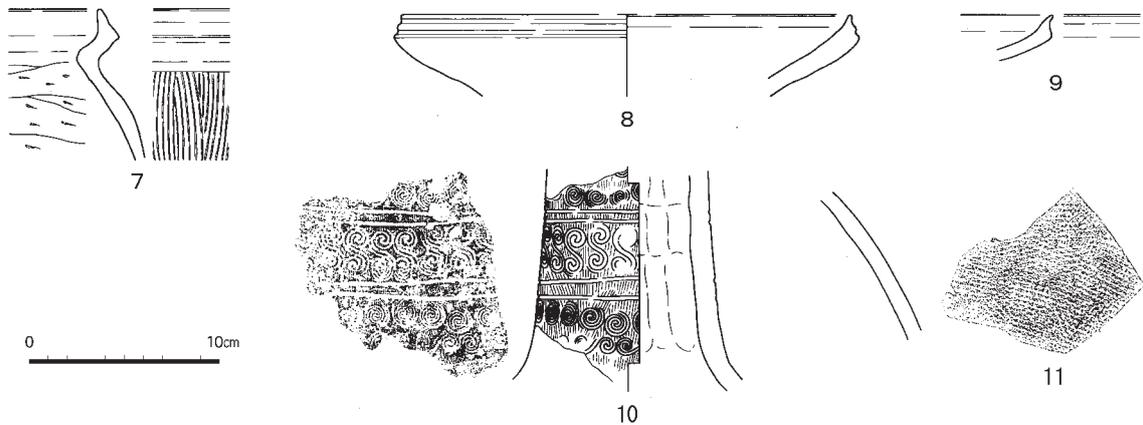


第29図 出土遺物 (1/4, 1/3)

第3節 城郭以外の遺構と遺物

1 弥生時代～古代の遺物 (第30図)

出土遺物のうち、ここでは河内城跡構築以前のものを掲載した。いずれも城郭埋土中から散在的に出土し、原位置は留めていない。7～10は弥生土器で、弥生後期前半に位置づけられる。特筆されるのが、装飾器台の脚柱部と考えられる10である。スタンプによるS字状渦文と陰刻渦文をそれぞれ帯状に連続して施し、同種文様が分布する山陰地域との結び付きを示唆する。また、8は色調・胎土の共通性から、10の口縁部の可能性がある。11は須恵器の甕で、古代のものと考えられる。(佐藤)



第30図 弥生時代～古代の遺物 (1/4)

2 焼成土壇

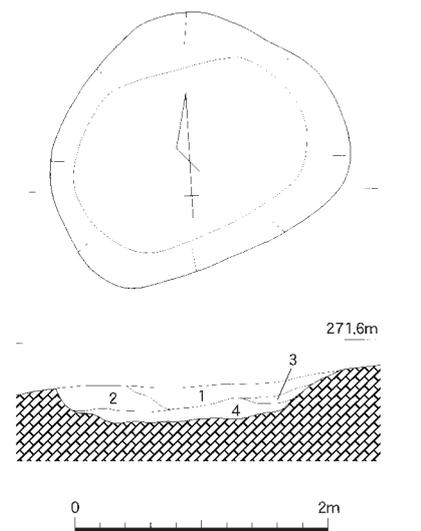
焼成土壇 1 (第31図・図版15)

城郭の最高所、曲輪2北側山頂のやや北より部分で検出した不整楕円形で径2.35m、深さ30cmを測る浅い土壇である。下部には多量の炭と焼土を含む黒褐色土が堆積しており、上部には赤褐色土が入る。

遺物を伴わないため時期を判断し難かったが、出土炭片の¹⁴C年代測定により、7世紀中頃との結果が得られ、当該期の木炭生産施設の可能性が考えられる。(宇垣)

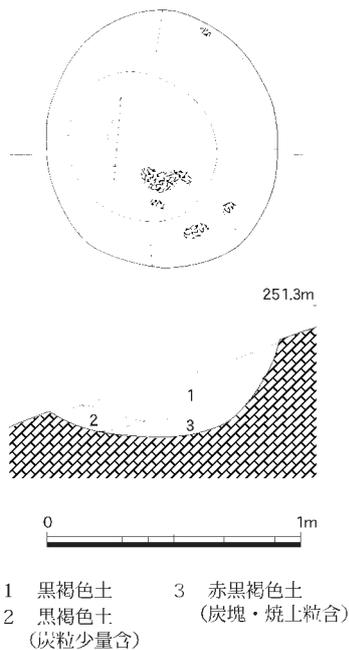
焼成土壇 2 (第32図)

城郭北東の斜面下方で検出した径1.02m、深さ22cmの土壇で、埋上下部に炭・焼土を含む。年代が不明であるためなんともいえないが、上記の焼成土壇1と同種の遺構の可能性もある。(宇垣)



- | | |
|----------------------|---------------------|
| 1 赤褐色土
(炭・焼土粒少量含) | 3 黄褐色土 |
| 2 赤褐色土
(炭・焼土粒含) | 4 黒褐色土
(炭塊・焼土粒含) |

第31図 焼成土壇 1 (1/60)



第32図 焼成土壌 2 (1/30)

- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 (炭粒少量含)
- 3 赤黒褐色土 (炭塊・焼土粒含)

3 集石墓

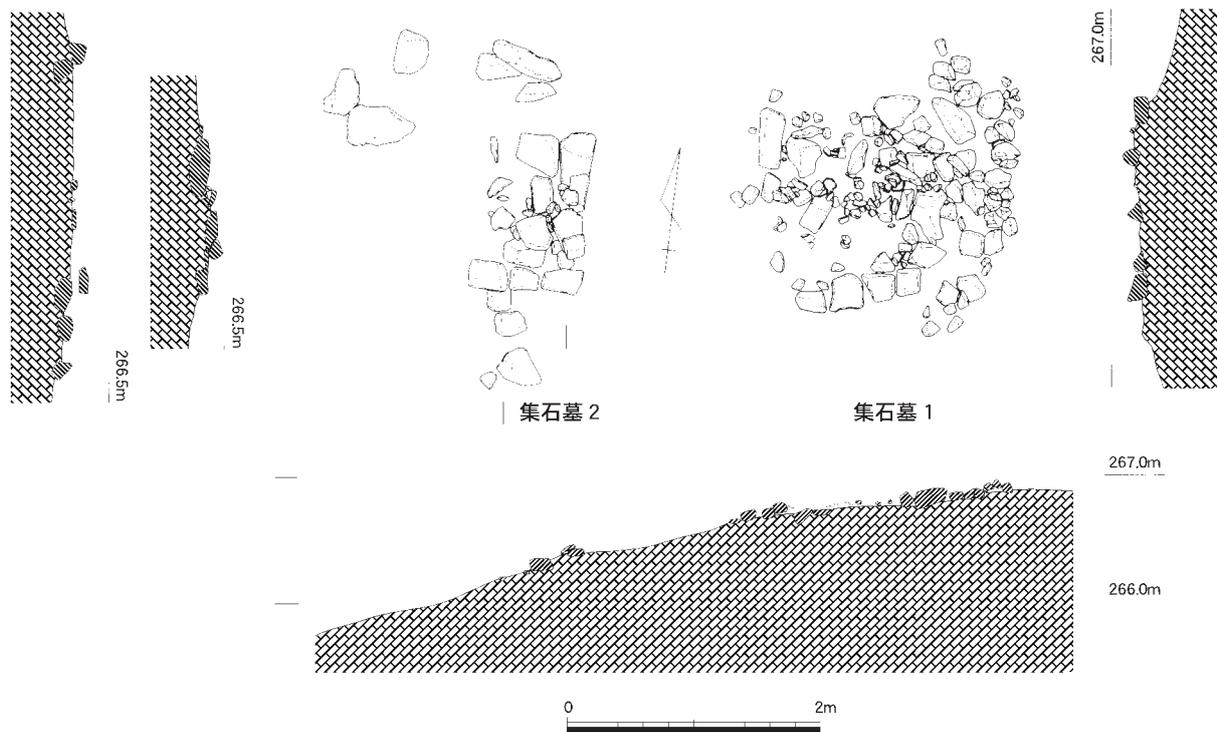
集石墓 1 (第33・34図、図版15)

河内城跡が構築された丘陵尾根筋のほぼ先端に位置する。30cm前後の花崗岩の川原石を用いて基壇を構築している。基壇は、南側の一列がわずかに遺存するのみで、ほとんど壊されており、出土状況から東西2m×南北1.5mの長方形基壇であったと推測される。このほぼ中央部で、備前焼・土師質土器片が散乱した状況で出土した。基壇下部には、土壌など下部構造は確認されなかった。出土遺物には、備前焼の壺12・13、勝間田焼の壺14、土師質のこね鉢15・16の計5点があり、これらが蔵骨器とその蓋である可能性が高い。時期は、備前焼から14世紀中葉～後葉と考える。(島崎)

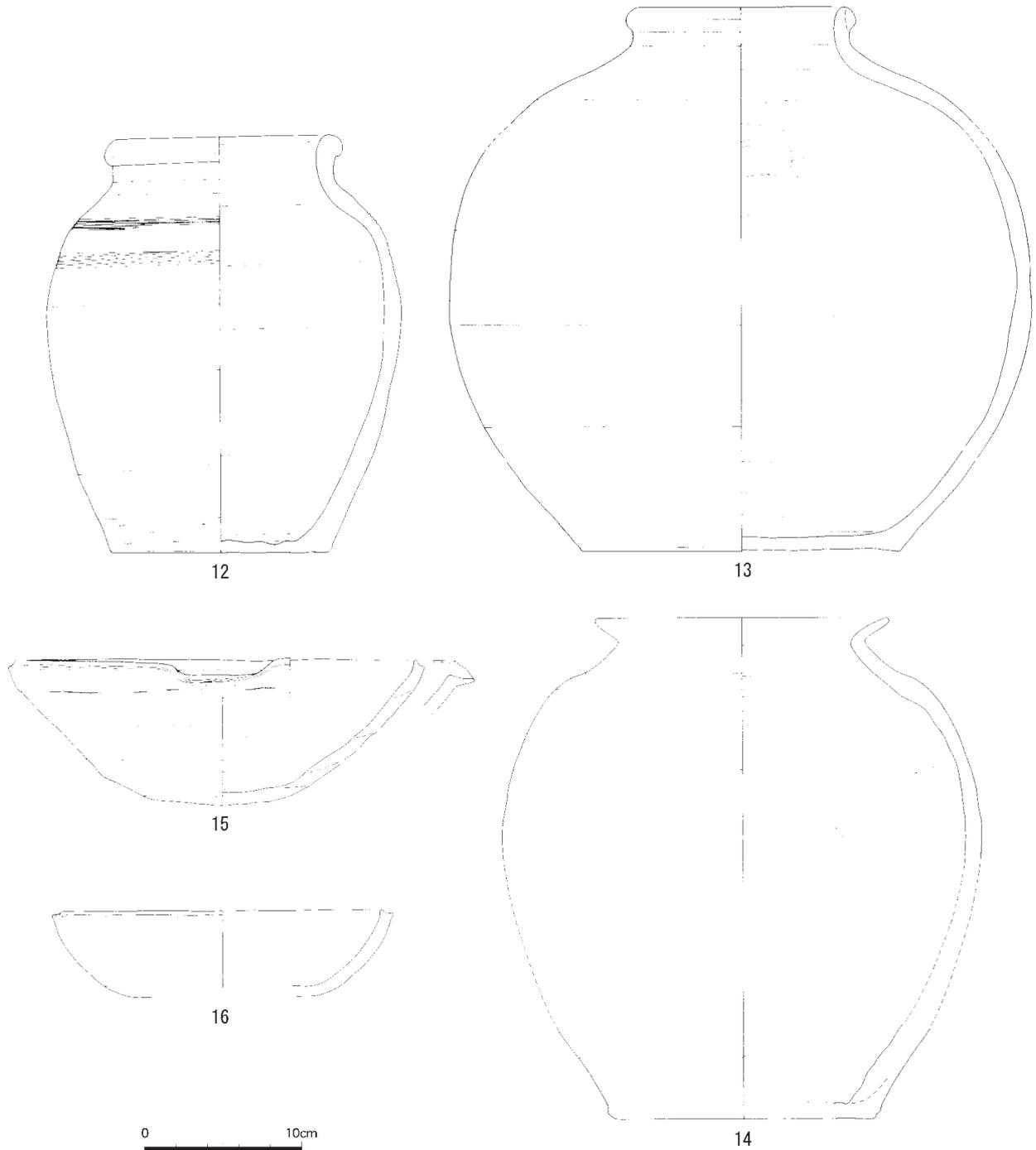
集石墓 2 (第33図、図版15)

集石墓 1 の西側約1.5mに位置する。集石墓 1 と同じく遺存状況は悪く、わずかに西と南側に花崗岩の川原石による配石が基壇痕跡として認められるにすぎない。遺物を伴わないが、集石墓 1 との位置関係から、ほぼ同時期のものとみて差し支えないと考える。

集石墓と河内城跡の前後関係については、出土遺物からはいずれも14世紀中葉～後葉の範疇で考えられ、明言はできない。ただし、曲輪11から犬走3にかけての斜面調査時に花崗岩の礫片を多く確認しており、状況から集石墓に用いられた石を破碎し、それをつぶて石として利用していた可能性が高いと考える。集石墓が河内城に先行して存在していたことを傍証する事例であろう。(島崎)



第33図 集石墓 1・2 (1/60)

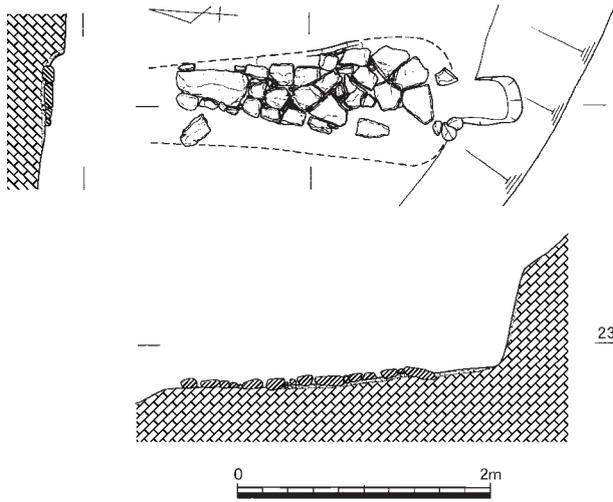


第34図 集石墓1出土遺物 (1/4)

4 炭窯

炭窯1 (第1・35図、図版15)

平成7年10月下旬、河内城跡最高位から北方約50mの山裾で発見された。町道から湖岸道路の路線に至る区間に工事用道路が建設され、たまたま石敷きが露出したものである。すでに工事は完了しており、原状は大きな改変を免れるため、応急的に清掃・写真撮影を行った。また、補足精査ならびに



第35図 炭窯 1 (1/60)

実測作業は、平成9年3月中旬に実施し、すべての記録保存を完了した。

構造は半地下式と考えられ、煙道を含む検出全長は約3mを測り、主軸はほぼ南北方向を示す。床面は緩やかな勾配をもって平坦に造成され、花崗岩を主体とする石を敷き詰め、さらに粘土で被覆している。いずれも高い熱影響を受けて赤変しており、煙道も同様の状況である。

規模や構造は広島県平家ヶ城跡（財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 2001年）で検出されたものと類似しており、中世に操業された炭窯と推定できる。（岡田 博）

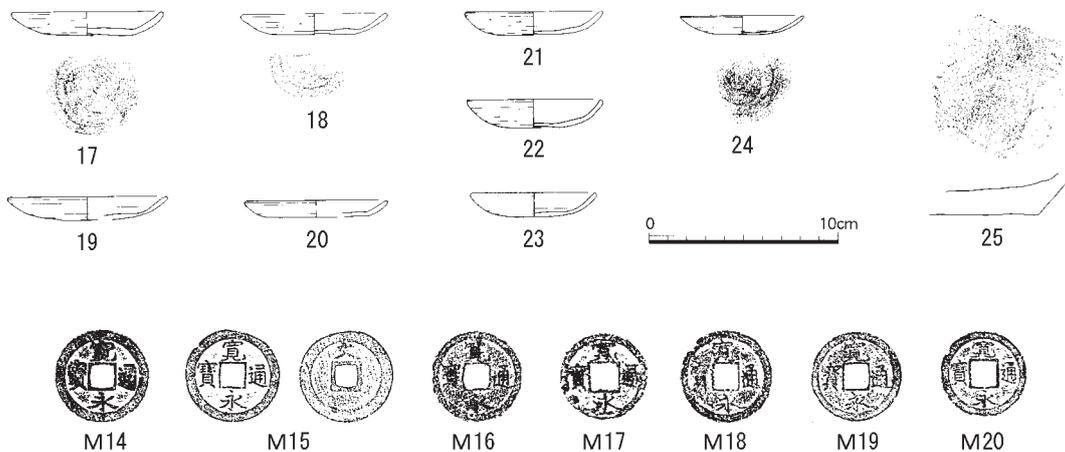
5 古道

古道 1 (第2図)

河内城跡が構築された丘陵の、北西斜面で検出された道路跡である。丘陵斜面を切岸状に掘削し、幅50~80cmの通路を削り出したもので、傾斜角は約20度を測る。時期は特定できないが、位置的に河内城跡との直接的な関係は考えにくく、河内集落と丘陵部とを結ぶ山道と思われる。（佐藤）

6 近世の遺物 (第36図)

出土遺物のうち、ここでは河内城跡廃城後のものを掲載した。17~24は備前焼の小皿で、底部糸切り後、外面を回転ヘラケズリ調整し、薄手に仕上げている。25は播鉢で、焼成はやや甘く、赤色を呈する。底部内面の放射状播目から、明石産と考えられる。M14~M20は寛永通宝で、M14が古寛永、M15が文銭、その他は新寛永である。これら近世の遺物は、河内城跡西側の丘陵先端部周辺から、散在的に出土している。その性格は不明であるが、近世の祭祀・信仰に伴うものと考えられる。（佐藤）



第36図 近世の遺物 (1/4, 1/2)

第4節 小結

河内城跡は、文献に記述がみられない城である。出土遺物から14世紀中葉から後葉にかけて機能していたと考える。構造的にも東側尾根の鞍部を2条の堀切で切り、緩やかな斜面に対しては登坂を困難なものとする急勾配を造り出すための切岸を切るなど、防御面での造作が各所において認められた。しかし、城内に遺存する大小11面の曲輪は、通路で結ばれたものもあるが、ほとんどは点的傾向にあり、戦国期に見る各曲輪が有機的に連結しあって整備された段階のものではない。まだ自然の地形をよく残した、当該期特有な配置といえる。城内へは、西方の山麓から曲輪11にかけてつづら折りに刻まれた通路2を城道とし、城門としての虎口機能を持った曲輪11を通して入るものと考えられる。曲輪11から主郭にかけては、曲輪10、曲輪6が途中にあり、これを経て主郭である曲輪1・2につながると推測される。このうち、曲輪10は主郭外では唯一100㎡近い広さを有し、また柱穴・日常雑器を伴うこと等から防御上重要な拠点としての機能以外に、城兵もしくは「山籠り」した村人の寝食の場として重要な機能を果たしていたことがうかがわれる。主郭は、北側を総延長49mを測る切岸・土塁1、東側を堀切1・2、西側を竖堀1で画された中において、方形を基調とした曲輪の連結によって構成されている。また、主郭中央部の最高部には曲輪1・2を造成する際に意識的に削り出されたと考えられる一辺約5mの方形土壇が存在する。防御的には、東側尾根筋を切る二重堀切と、斜面の登坂を困難なものとする切岸やそれに付随する土塁が主な施設であるが、さらに主郭の北斜面に存在する20㎡未満の曲輪8面はいずれも約10mの距離を保ちながら、しかも下段の切岸や上塁の並びに対応するかのようにならんでいる。籠城の際の段階的な防御線として、切岸や土塁下の敵に対する横矢掛けをねらった様子が看取される。また、曲輪3とこの北側切岸下にかけて、多くのつぶて石が集積された状況で出土しており、この時期の城をめぐる攻防の一端を垣間見ることが出来よう。(島崎)

曲輪一覧表

遺構名	規模(m)			面積 (㎡)	海拔高 (m)	付属 施設	出土 遺物
	最大長	最大幅	外縁長				
曲輪1	11.8	7.2	20.9	43.2	271.00	○	×
曲輪2	24.0	12.2	29.8	132.8	270.25	○	○
曲輪3	7.5	2.4	8.3	18.3	268.50	×	○
曲輪4	11.5	3.4	16.1	28.0	269.50	×	×
曲輪5	8.9	4.5	9.2	19.0	268.75	×	○
曲輪6	8.0	3.2	8.2	25.7	267.25	×	○
曲輪7	3.9	1.8	4.8	6.7	265.00	×	×
曲輪8	6.0	1.7	6.0	10.3	266.75	×	×
曲輪9	3.0	1.0	2.0	2.5	266.00	×	○
曲輪10	14.0	7.0	19.0	91.0	264.00	○	○
曲輪11	12.0	5.5	21.0	48.0	260.50	○	×

堀一覧表

遺構名	規模(m)				傾斜 (°)	断面形	出土 遺物
	長さ	上面幅	底面幅	深さ			
堀切1	20.0	4.5	0.6	2.8	52	V字形	×
堀切2	32.4	6.4	1.2	2.9	52	逆台形	×
竖堀1	12.5	2.8	1.0	0.8	60	逆台形	×

切岸・土塁一覧表

遺構名	規模(m)				傾斜 (°)	出土 遺物
	最大長	最大幅	上塁高	切岸高		
切岸・土塁1	49.0	2.8	0.57	3.9	43	○

土壇一覧表

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔 高(m)	時期	備考
焼成土壇1	不整楕円形	Ⅲ a	235	200	30	271.00	古墳後期	出土木炭の ¹⁴ C年代：7世紀中頃
焼成土壇2	円形	Ⅲ a	102	92	22	250.78	～古代?	壁面・底面に被熱痕跡

土器観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
1	曲輪2柱穴1	白磁	皿	12.9	7.9	3.0	灰白色(2.5GY8/1)		口縁部釉剥ぎ、底面無釉
2	曲輪2	土師器	小皿	8.0	4.8	1.4	橙色(5YR6/6)		底部ヘラキリ後ナデ
3	曲輪2南斜面	土師器	小皿	5.6	4.9	0.7	橙色(5YR6/8)		底部ヘラキリ後一部ナデ
4		土師器	小皿		4.0		鈍橙色(YR6/4)		底部糸切り
5	曲輪3	瓦質土器	羽釜	(24.0)			黒色(2.5Y2/1)		外面煤付着
6	曲輪10埋土	瓦質土器	羽釜	(27.4)			褐灰色(10YR4/1)		外面煤付着
7	北斜面	弥生土器	甕				淡黄色(2.5Y8/4)		胴部外面縦方向のハケメ
8	曲輪10柱穴	弥生土器	器台	(23.4)			橙色(5YR6/8)		10と同一個体?
9	曲輪10	弥生土器	高杯				鈍黄橙色(10YR7/4)		内外面ヨコナデ
10	曲輪10埋土	弥生土器	器台				橙色(5YR6/8)		スタンプのS字状文、S字状渦文、陰刻渦文
11	北斜面	須恵器	甕				灰色(N6/1)		内面ナデ、外面平行叩き
12	集石墓1	備前焼	壺	13.5	13.8	26.4	鈍黄色(2.5Y6/4)	復元完形	肩部に3本1単位の櫛掻き直線文
13		備前焼	壺	13.0	20.2	34.8	暗赤色(7.5R3/6)		肩部上半自然釉付着
14		勝岡田焼	壺	18.4	16.4	32.0	灰黄褐色(10YR6/2)		内外面ヨコナデ
15		土師器	こね鉢	25.5	7.6	9.4	褐灰色(10YR5/1)	復元完形	内外面ヨコナデ、粘土接合痕顕著
16		土師器	こね鉢	20.1	10.8	5.6	灰黄色(2.5Y7/2)		
17	西斜面	備前焼	小皿	7.9	3.3	1.4	赤褐色(10R4.5/5)		底部糸切り後、回転ヘラケズリ
18		備前焼	小皿	(7.5)	(4.5)	1.1	赤褐色(10R4/4)		底部糸切り後、回転ヘラケズリ
19		備前焼	小皿	8.2	5.0	1.3	鈍赤色(7.5YR4/4)		底部糸切り後、回転ヘラケズリ
20		備前焼	小皿	7.4	5.4	0.9	鈍赤褐色(2.5YR4/3)		底部糸切り後、回転ヘラケズリ
21		備前焼	小皿	7.0	4.5	1.5	灰褐色(5YR6/2)	完形	底部糸切り後、回転ヘラケズリ
22		備前焼	小皿	6.4	2.5	1.3	赤褐色(10R5/4)		底部糸切り後、回転ヘラケズリ
23		備前焼	小皿	7.2	4.0	1.2	赤褐色(10R4/4)	完形	底部糸切り後、回転ヘラケズリ
24		備前焼	小皿	6.4	1.7	1.1	赤褐色(10R5/4)		底部糸切り後、回転ヘラケズリ
25	曲輪5	明石焼	搦鉢				赤色(10R5/6)		底面に7本1単位の放射状罫目

石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	計測値(mm)			重量(g)	石材	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S1	北斜面	砥石	64.0	51.5	33.0	148.6	流紋岩	中世	両面に穿孔途中のくぼみあり

金属器一覧表

掲載番号	掲載遺構名	種別	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M1	切岸・土塁1	鉄鏃	266.5	18.0	18.0	57.5	鉄	中世	繊維質の矢柄が遺存、一部漆塗
M2	堀切2	鉄鏃	211.5	11.0	9.0	30.6	鉄	中世	鍛造品
M3	曲輪9	鉄鏃	130.0	13.0	10.5	35.3	鉄	中世	鍛造品
M4	切岸・土塁1	鉄鏃	73.5	8.0	7.0	13.2	鉄	中世	鍛造品
M5	堀切2	鉄鏃	162.0	13.0	13.0	36.2	鉄	中世	鍛造品
M6	丘陵頂部	石突	98.0	43.0	36.5	155.1	鉄	中世	鋳造品
M7	曲輪6	刀子	90.5	16.5	9.0	13.9	鉄	中世?	柄の木質が一部遺存
M8	曲輪10	鉄釘	40.0	6.0	12.0	3.2	鉄	中世?	
M9	曲輪10	鉄釘	40.0	9.5	10.5	2.5	鉄	中世?	
M10	曲輪10	鉄釘	140.0	5.0	5.0	18.9	鉄	中世?	
M11	西斜面	鉄釘	44.5	7.5	7.0	4.3	鉄	中世?	
M12	北斜面	鉄釘	51.0	5.5	5.0	3.6	鉄	中世?	
M13	北斜面	鉄銅	55.0	67.0	4.0	45.0	鉄	中世	口縁部の小片で、推定口径34.6cm
M14	西斜面	銭貨	25.0		1.1	2.9	銅	近世	古寛永
M15	曲輪2		25.0		1.3	2.4	銅		新寛永(文銭)
M16	堀切2		24.3		1.2	2.0	銅		新寛永
M17	堀切2		23.0		1.8	2.4	銅		
M18	西斜面		24.5		1.1	2.3	銅		
M19	西斜面		24.0		1.5	3.3	銅		
M20	西斜面		22.8		1.2	2.2	銅		

第5章 河内遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の概要

吉井川は、杉地区で大きく西に蛇行したあと、川幅を広げながら南流する。遺跡は、この流路が久田原地区で南西に流れを変えていく河岸段丘上に位置する。

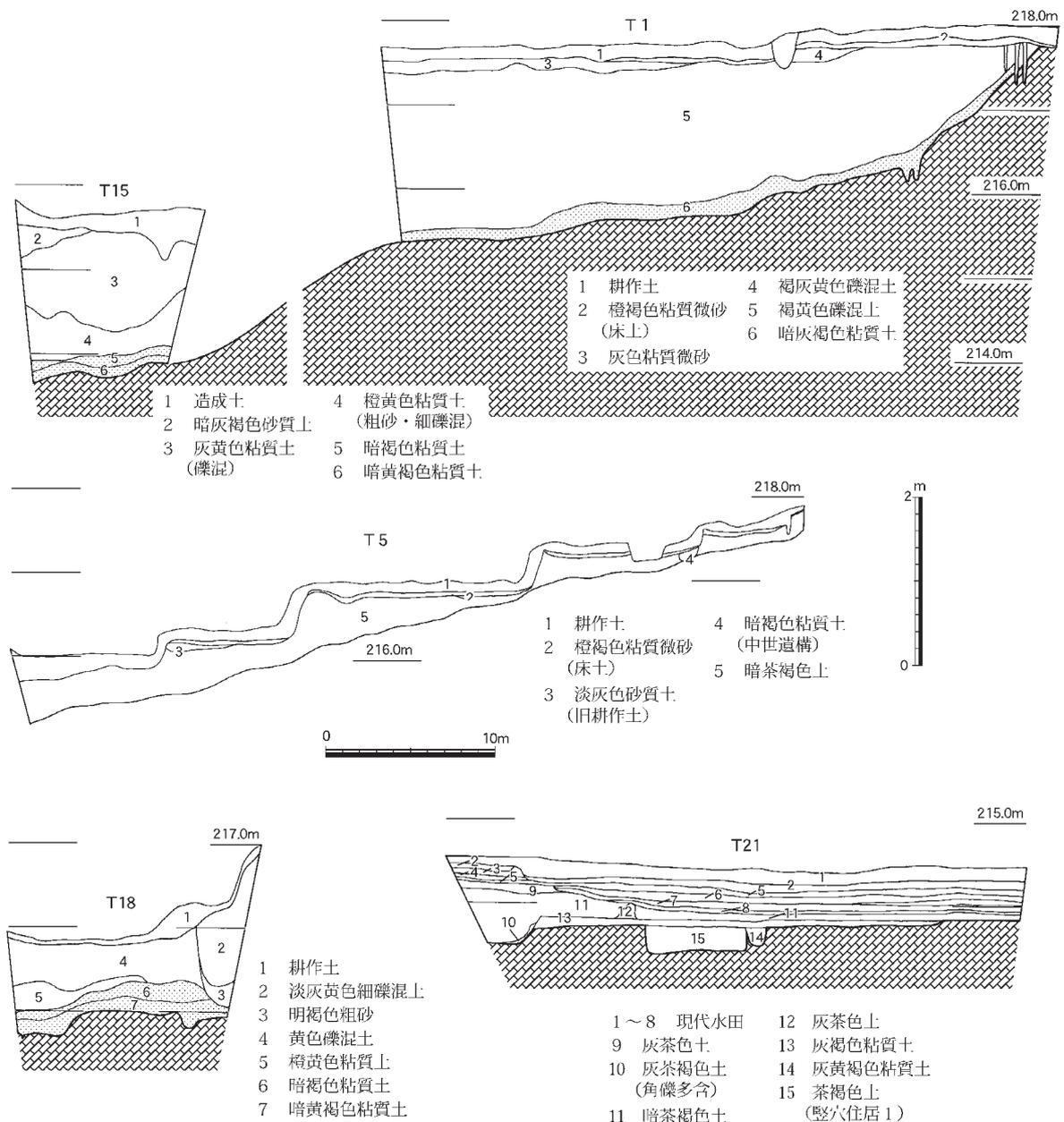
苦田ダム関連の発掘調査は、平成7年度からこの河内遺跡を手始めに開始されたのである。調査対象地は、東側の丘陵部分が水田、その西側に工場跡地（これ以前は久泉中学校）となり、その比高差は最も大きいところで2mほどを測る。当初の遺跡は散布地とされ、どのような内容のものか、まし



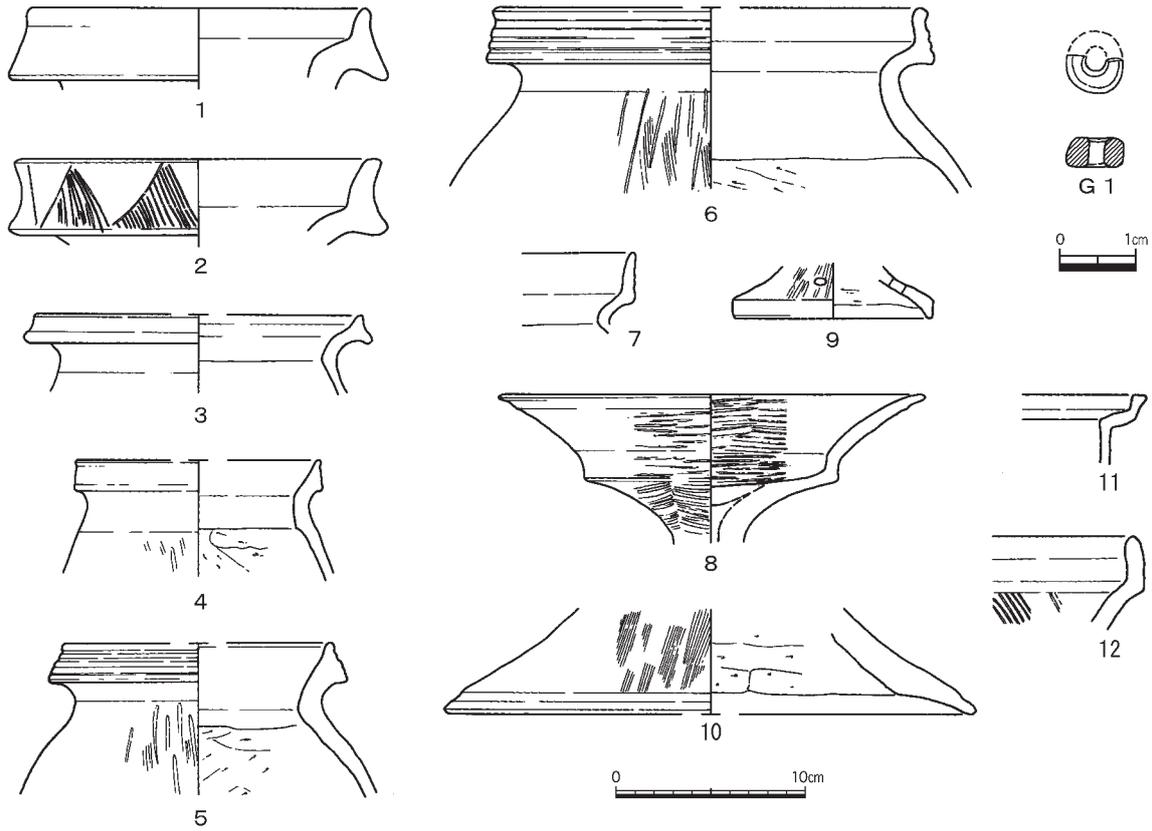
第1図 調査位置図 (1/2,000) ■ 一次調査トレンチ

て遺跡の広がり等については、全く把握されていなかったのである。このようなことから、遺跡の広がり把握のために、トレンチによる一次調査を実施した。トレンチは、第1図に示したように29本設定した。工場跡地から北側に設定したT22～29は、T28とT25の高低差は3mほどである。何れのトレンチにおいても、表土下20cm～1.2mの深さで砂礫及び角礫層になる。この角礫層は、第2図T21の第10層がこれに相当すると思われる。角礫層からは遺物が検出されなかったが、時期の特定については同土層断面図で第14層の弥生包含層を削って堆積していることが確認されている。

工場跡地に設定したT8～19は、関連施設の撤去にともない傷んでいる部分も認められた。第2図T15とT18においては、表土下1.7m～60cm前後で弥生の包含層が確認された。このほかのトレンチにおいては、弥生期の包含層上に角礫層の堆積が認められる。工場跡地の北側にT1～7を設定した地区は、ほぼ平坦な水田となっていた。第2図T1は、表土下20cm前後の第3層が中世面であり、同



第2図 トレンチ断面図 (縦 1/80, 横 1/400)



第3図 トレンチ出土遺物 (1/4, 1/1)

図のT 5においても確認された。遺構の存在が確認された。さらに、最も堆積の厚い個所で1.8mほどの礫混じりの層が存在していることを確認し、その下層において弥生の包含層が認められた。

以上の結果から、第1図に示した2個所について調査対象とした。しかしながら、T21の個所については、北西側に存在する「U」字状の水田の用地問題が未解決のため、調査は中世の遺構を対象とした。

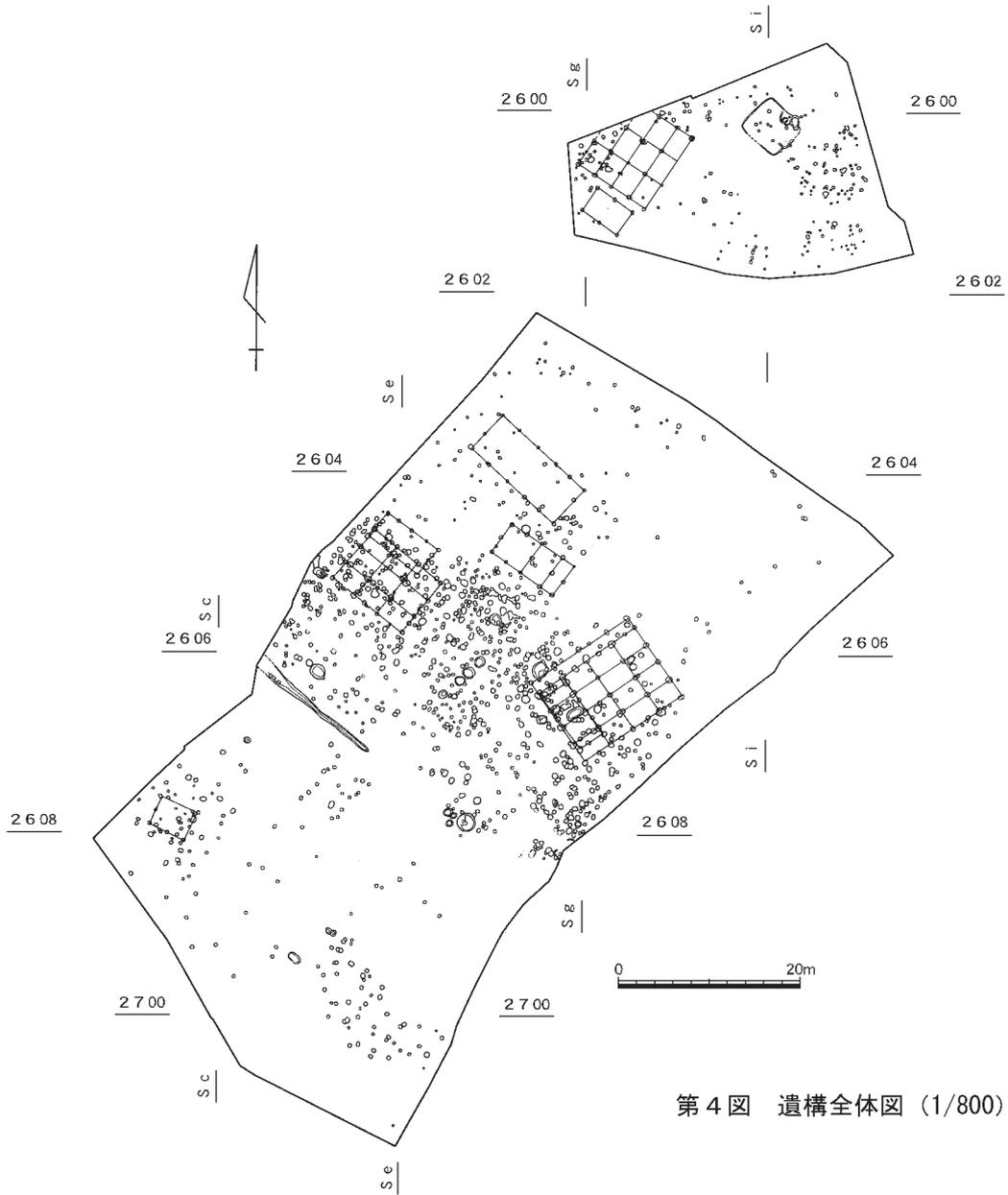
トレンチからの出土遺物は、第3図に示した。第2図のT18における第6層からの出土が、1の壺と9の高杯である。T5では、壺、甕、高杯、G1のガラス小玉などが認められる。T6と12においては、中世の鍋と備前焼の播鉢が検出されている。(下澤)



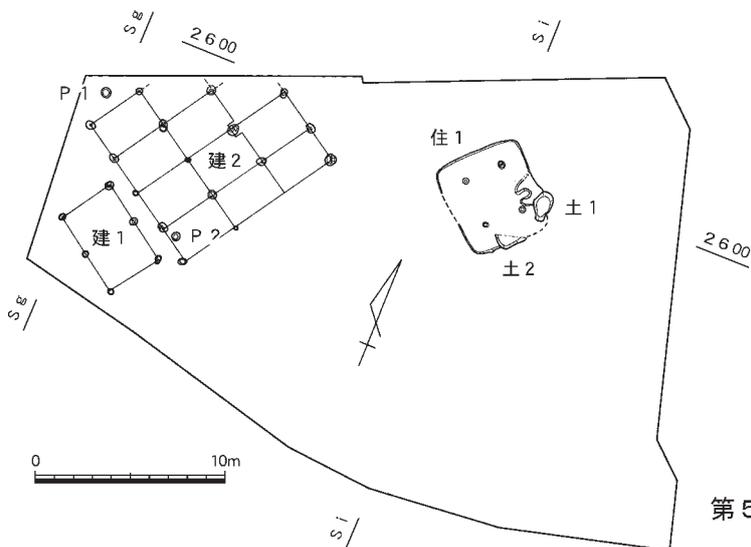
写真1 発掘作業遠景 (北から)



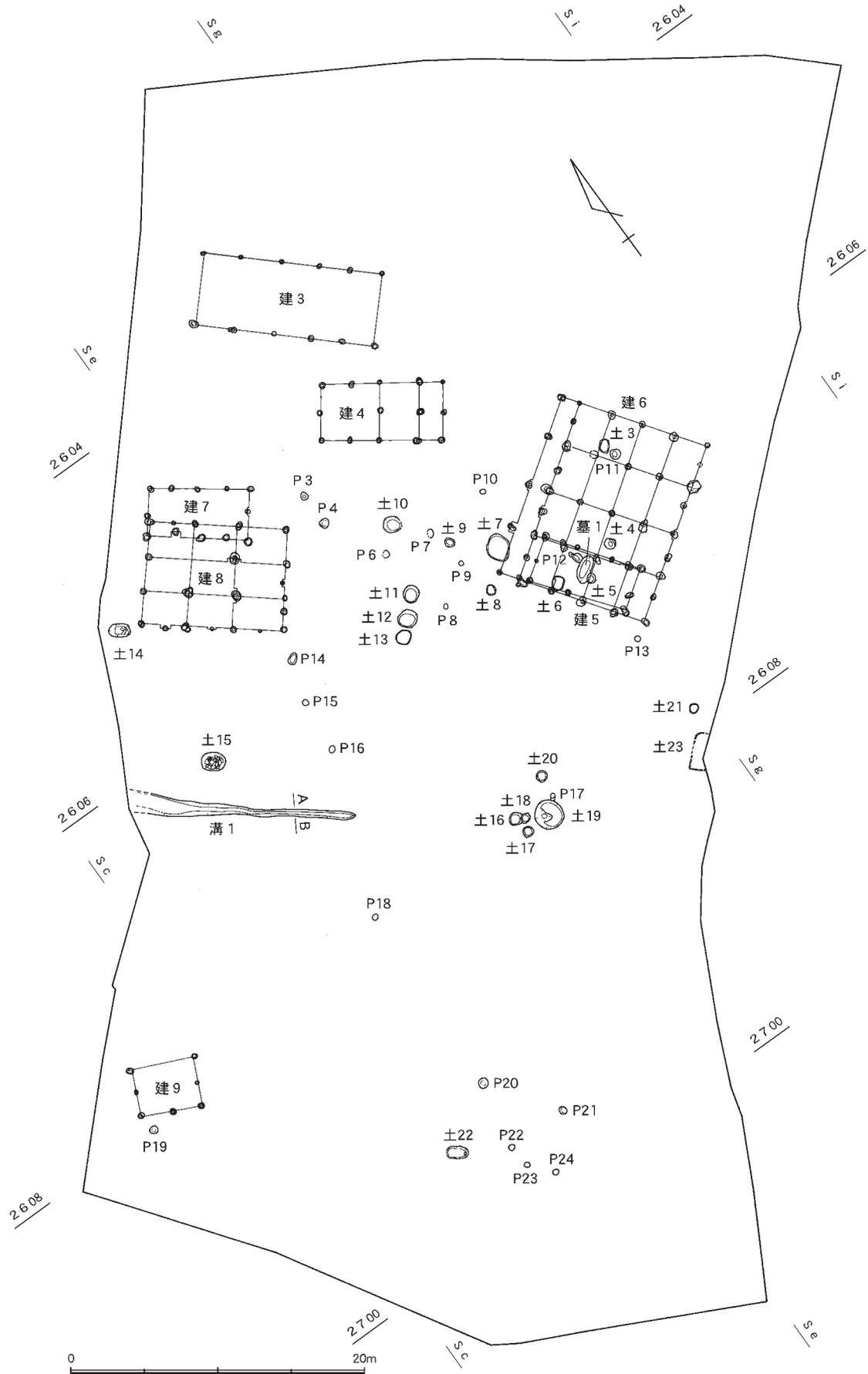
写真2 竪穴住居1作業風景 (南から)



第4図 遺構全体図 (1/800)



第5図 主要遺構部分図① (1/400)



第6図 主要遺構部分図② (1/400)

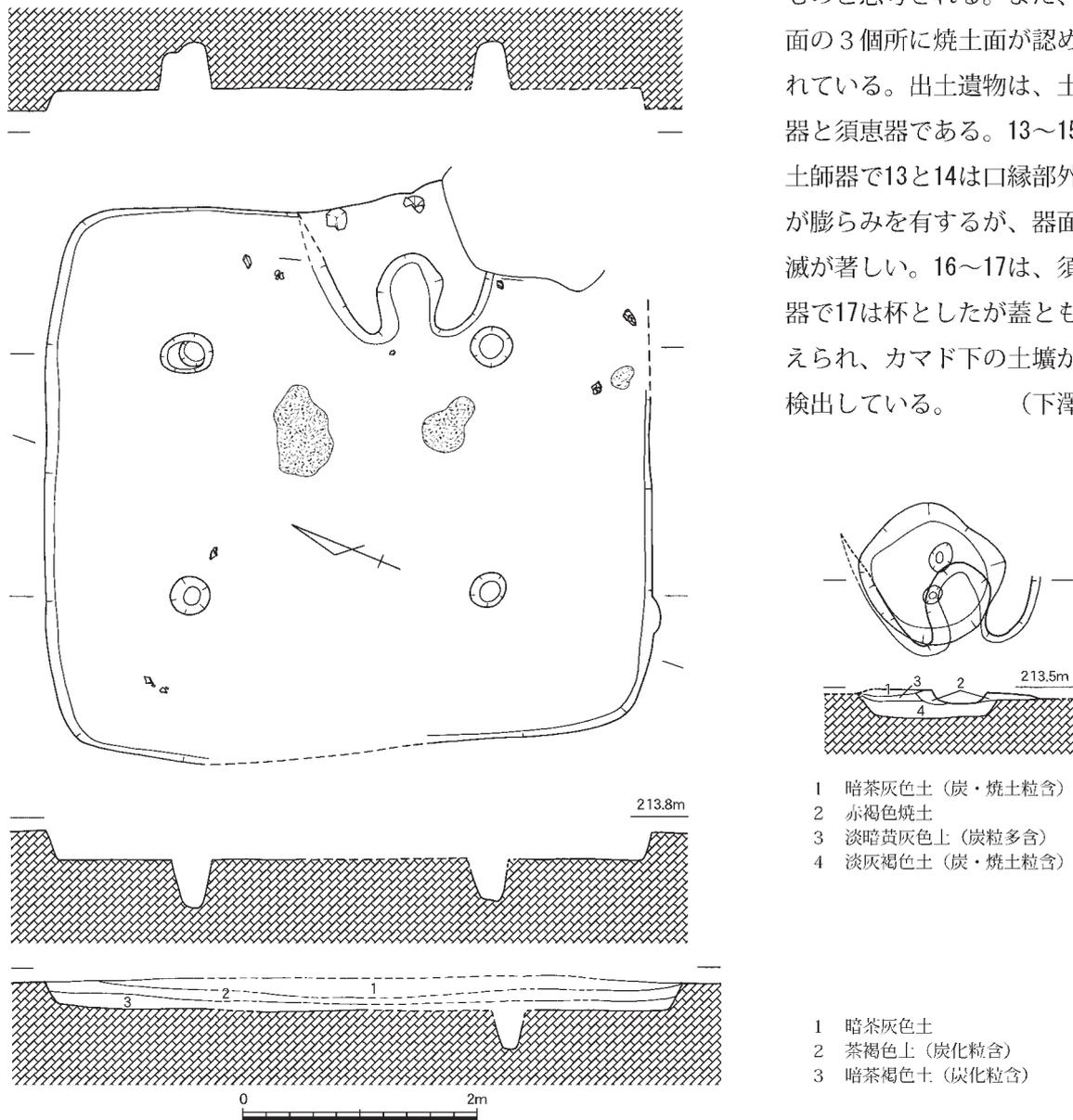
第2節 古墳時代の遺構と遺物

1 竪穴住居

竪穴住居1 (第5・7・8図、写真1、図版18)

竪穴住居は、掘立柱建物1の東側に位置する。規模は5.15×4.8mを測り、平面形態は方形を呈する。竪穴住居の西壁と北東寄りの壁は、確認調査時のトレンチで切り、また、北東隅からカマドにかけて土壌1と重複していた。柱穴は、4本方形を呈する位置に認められた。壁体溝は、確認されなかった。東壁近くでカマドが検出された。焚き口部分は、明瞭に火を受けたと認められなかった。このカマドの下には、1.2×1.1m、深さ28cmほどの隅丸方形の土壌が認められる。埋土の内容からカマドに伴う

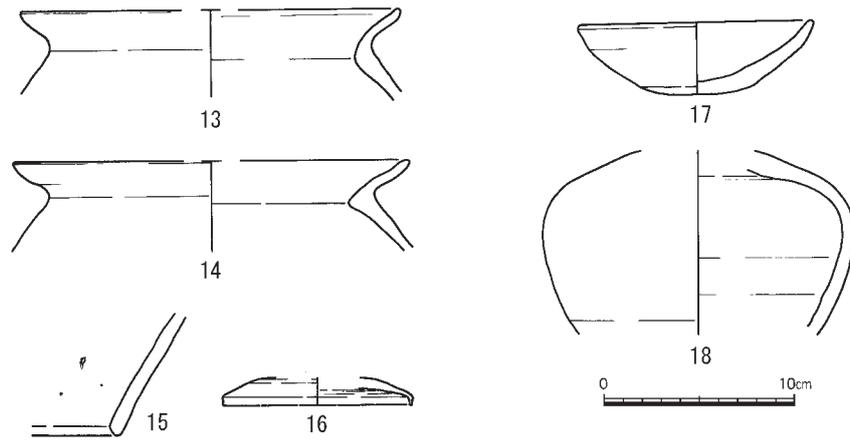
ものと思考される。また、床面の3個所に焼土面が認められている。出土遺物は、土師器と須恵器である。13~15は、土師器で13と14は口縁部外面が膨らみを有するが、器面磨滅が著しい。16~17は、須恵器で17は杯としたが蓋とも考えられ、カマド下の土壌から検出している。(下澤)



- 1 暗茶灰色土 (炭・焼土粒含)
- 2 赤褐色焼土
- 3 淡暗黄灰色土 (炭粒多含)
- 4 淡灰褐色土 (炭・焼土粒含)

- 1 暗茶灰色土
- 2 茶褐色土 (炭化粒含)
- 3 暗茶褐色土 (炭化粒含)

第7図 竪穴住居1 (1/60)



第8図 竪穴住居1出土遺物(1/4)

第3節 中世の遺構と遺物

1 掘立柱建物

掘立柱建物1(第5・9図)

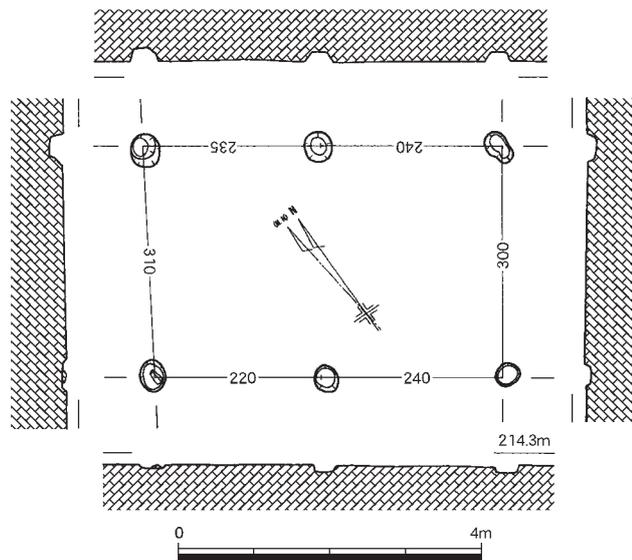
建物2に近接する2×1間の掘立柱建物で、建物4・7・8と棟方向をほぼ揃える。桁行全長4.75m、梁間3.1m、床面積14.3㎡を測る。柱穴掘り方は円形ないし長楕円形を呈し、東端の柱穴のみ底面に根石をもつ。建物の時期は、検出状況等から中世と考えられる。(高田)

掘立柱建物2(第5・10図)

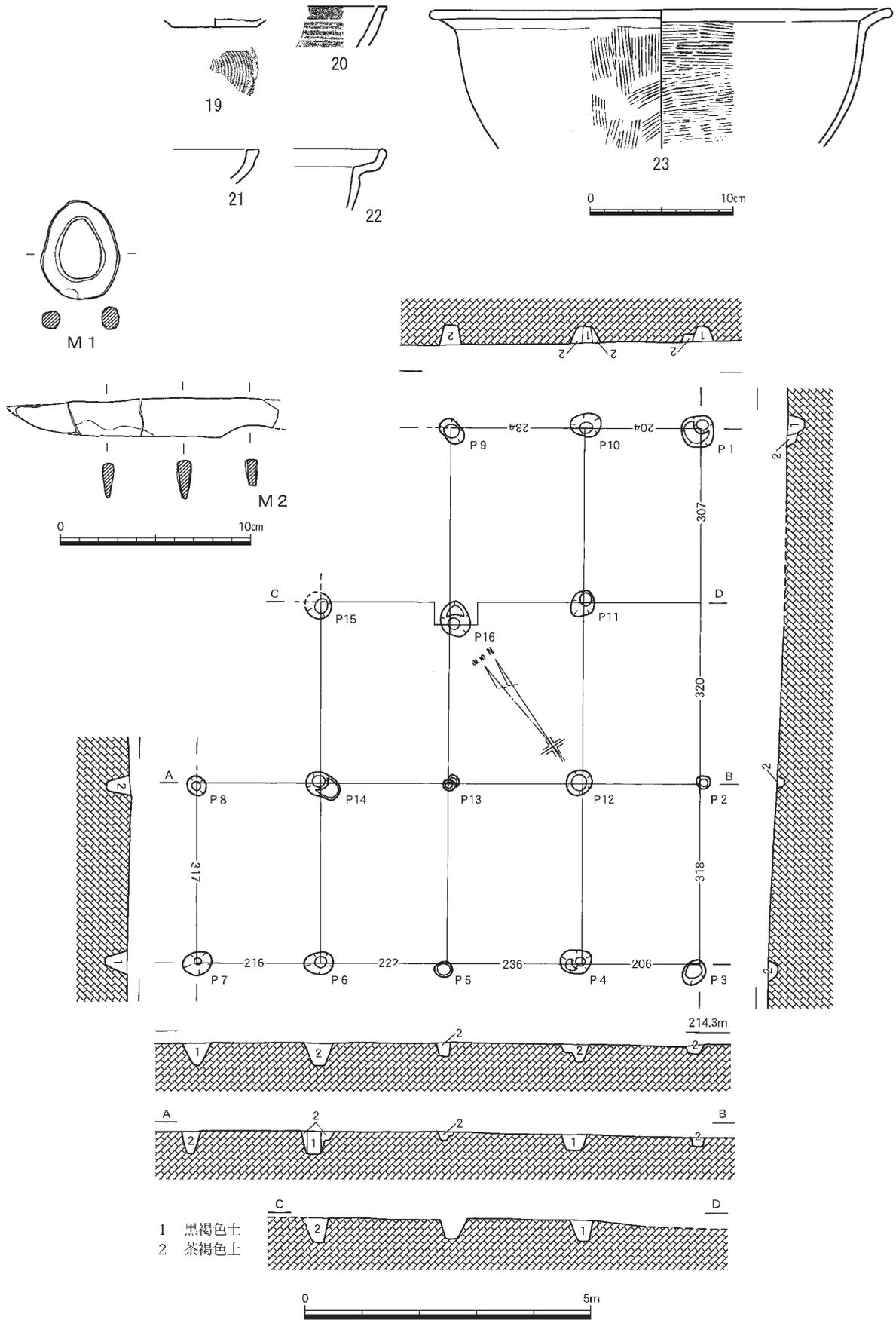
調査区北西端で検出した掘立柱建物で、一部は調査区外へ延びるものと考えられる。先述した建物1や建物4・7・8とは、棟方向が90度振る関係にある。桁行全長9.45m、梁間8.8m、床面積83.2㎡を測る。柱穴の掘り方は円形ないし長楕円形を呈し、長径は25~65cm、深さは12~45cmと個々の差がある。比較的径の大きな柱穴であるP1・4・14・16は、底面が二段に落ち込むことから柱を建て替えた可能性がある。また、P10とP14の2柱穴で柱痕を確認し、その直径は20~25cmを測る。

図示した遺物は、土器と鉄器である。土器は勝間田焼の小皿19と鉢20、土師器の鍋21~23で、鉄器は円環状鉄器M1、刀子M2である。

建物の時期は、出土遺物と検出状況から中世と考えられる。(高田)



第9図 掘立柱建物1(1/100)



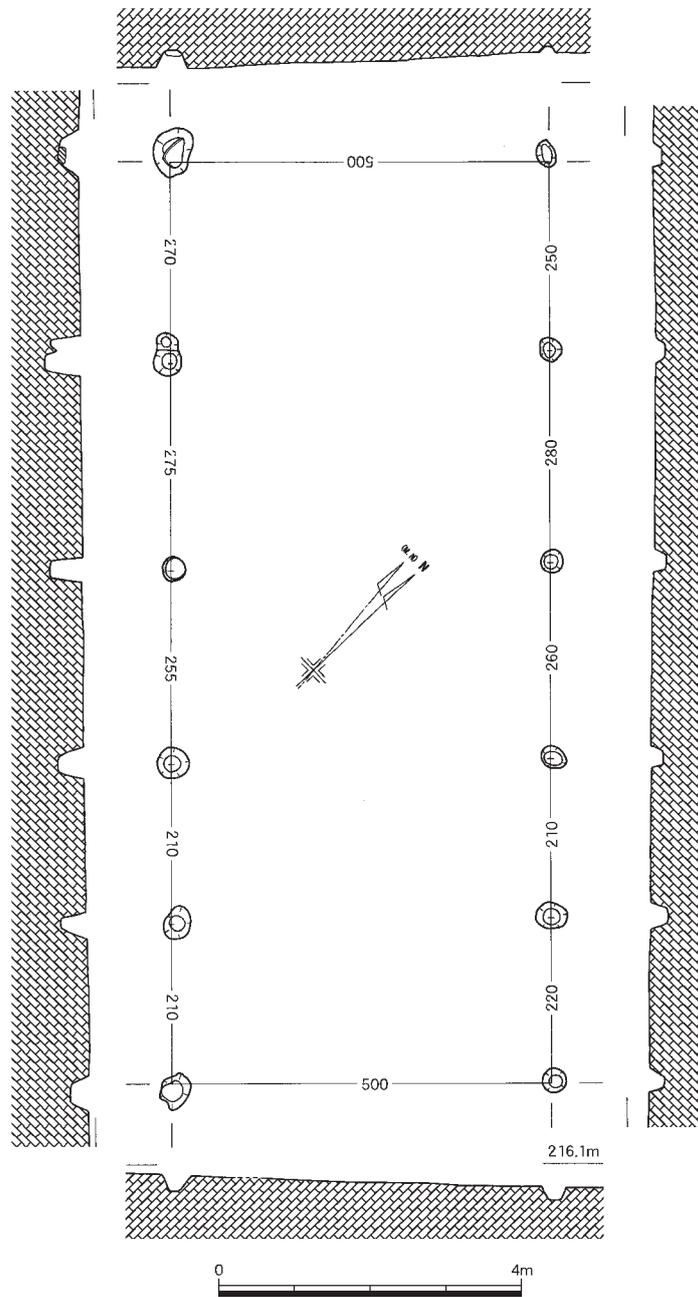
第10図 掘立柱建物2 (1/100)・出土遺物 (1/4, 1/3)

掘立柱建物3 (第6・11図)

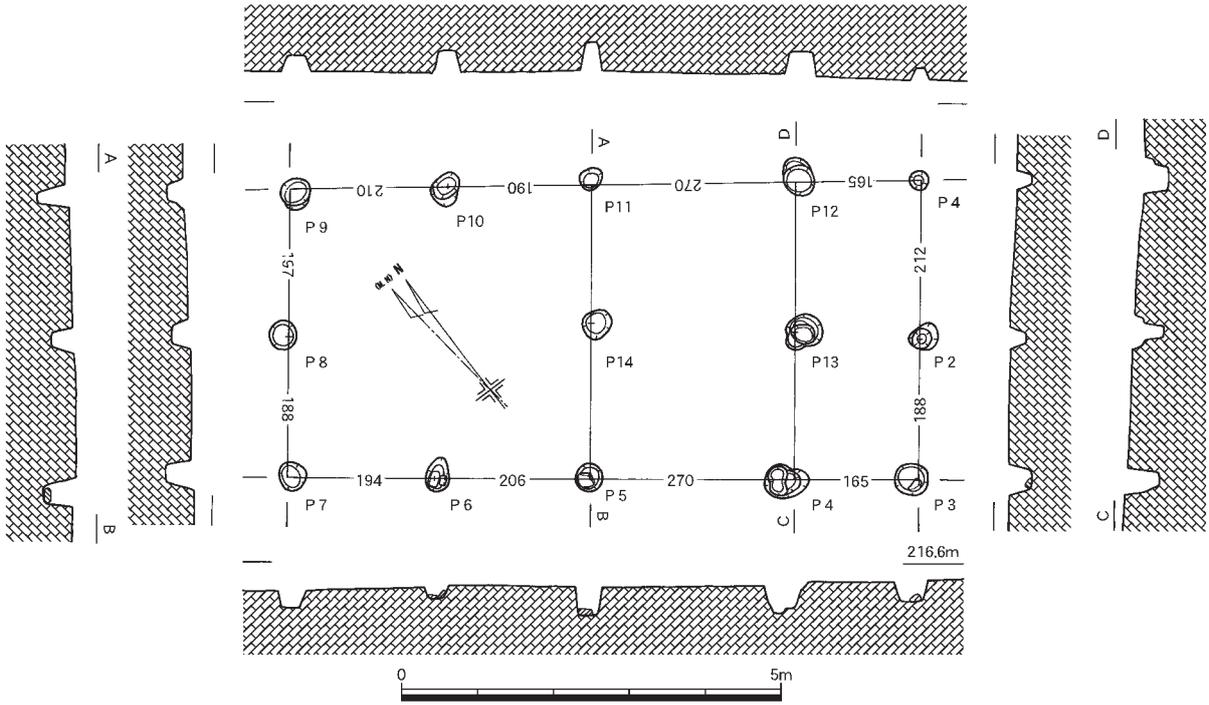
南側の調査区の北端に位置する。おおむね東西方向に主軸をとる5×1間の建物である。梁間が約5mと広いが、束柱は確認されていない。北西隅の柱穴底には根石が残されていた。遺物は出土していないが、検出状況から中世と考えられる。(渡邊)

掘立柱建物4 (第6・12図、図版18)

掘立柱建物3の南に位置する。おおむね東西方向に主軸をとる4×2間の建物である。P3・5・6・7には根石が残されていた。P4から鉄釘M3が、P7から備前焼の甕の口縁部片24が出土しており、中世に属すると考えられるが、掘立柱建物3とは軸方向が若干ずれ、両建物間の距離も約2mと狭いことから、併存していなかったかもしれない。(渡邊)



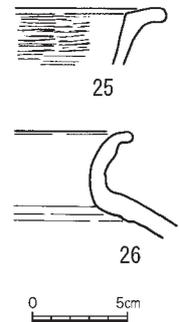
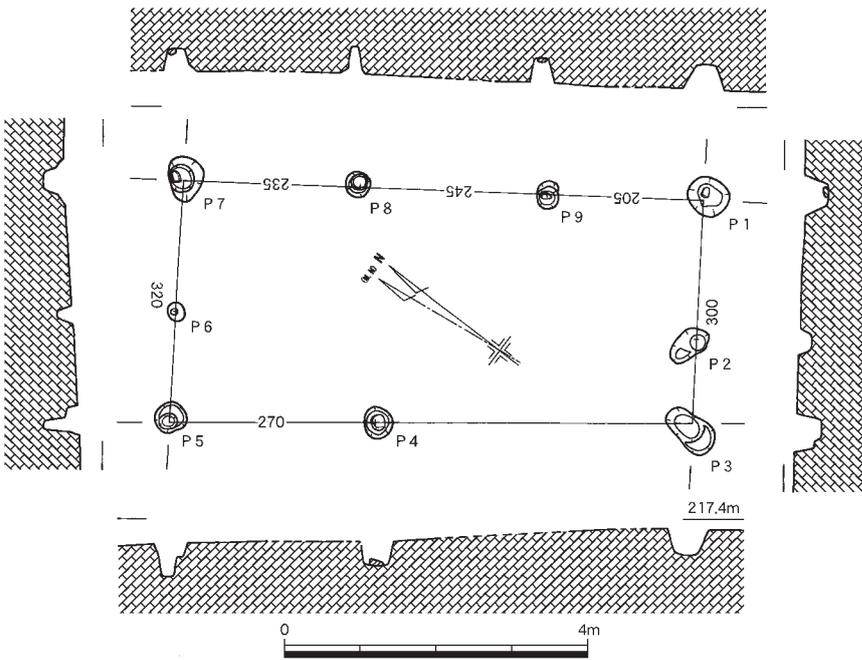
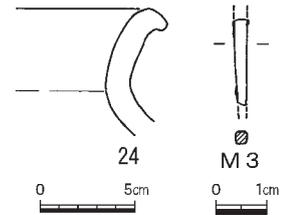
第11図 掘立柱建物3 (1/100)



第12図 掘立柱建物4 (1/100)・出土遺物 (1/4, 1/3)

掘立柱建物5 (第6・13図)

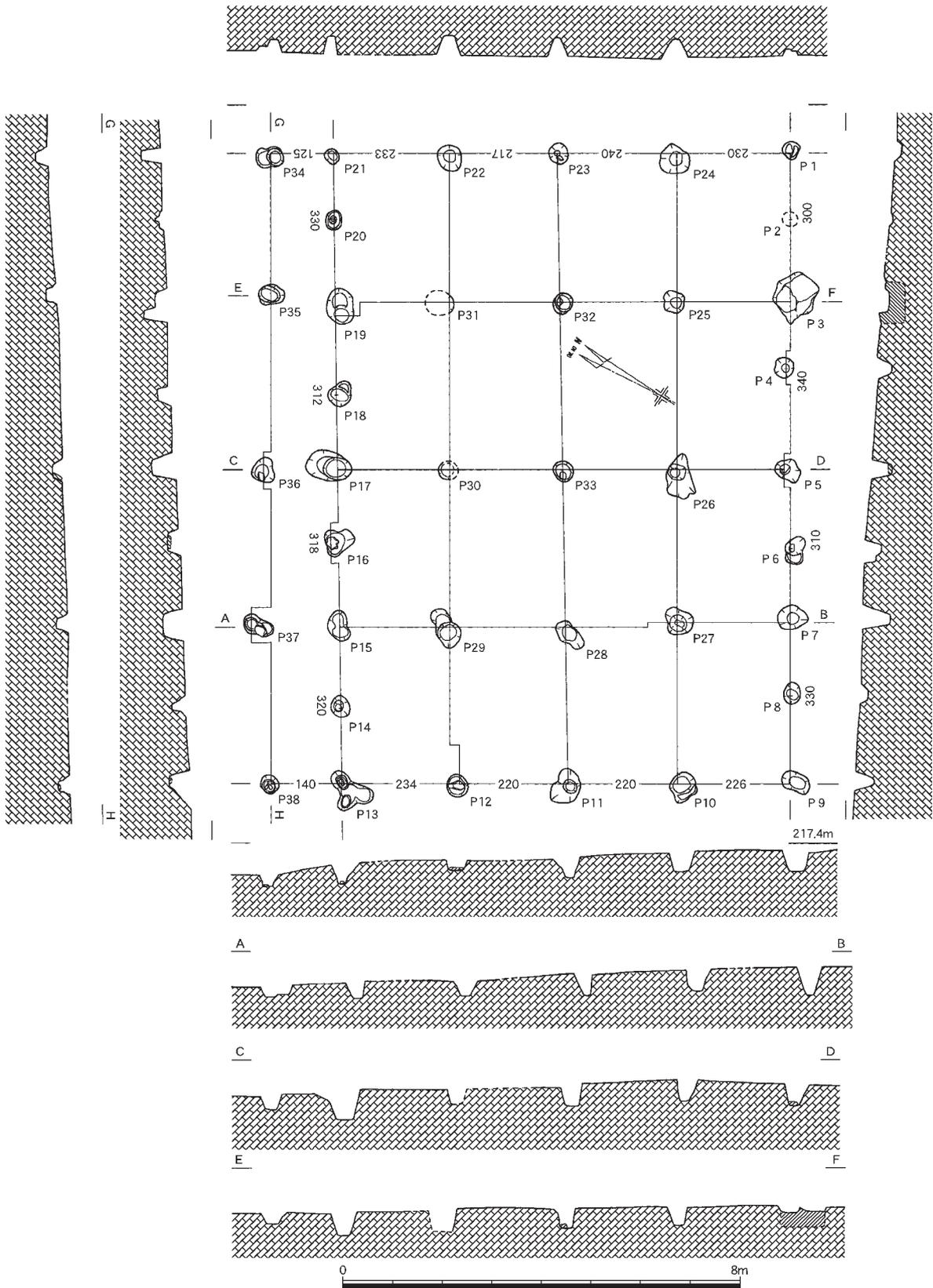
掘立柱建物4の南東に位置する。おおむね東西に主軸をとる3×1間の建物である。P1・4・7には根石が残されていた。P6から土師器鍋25が、P8から勝岡田焼と思われる甕26が出土しており、中世に属すると考えられる。(渡邊)



第13図 掘立柱建物5 (1/100)・出土遺物 (1/4)

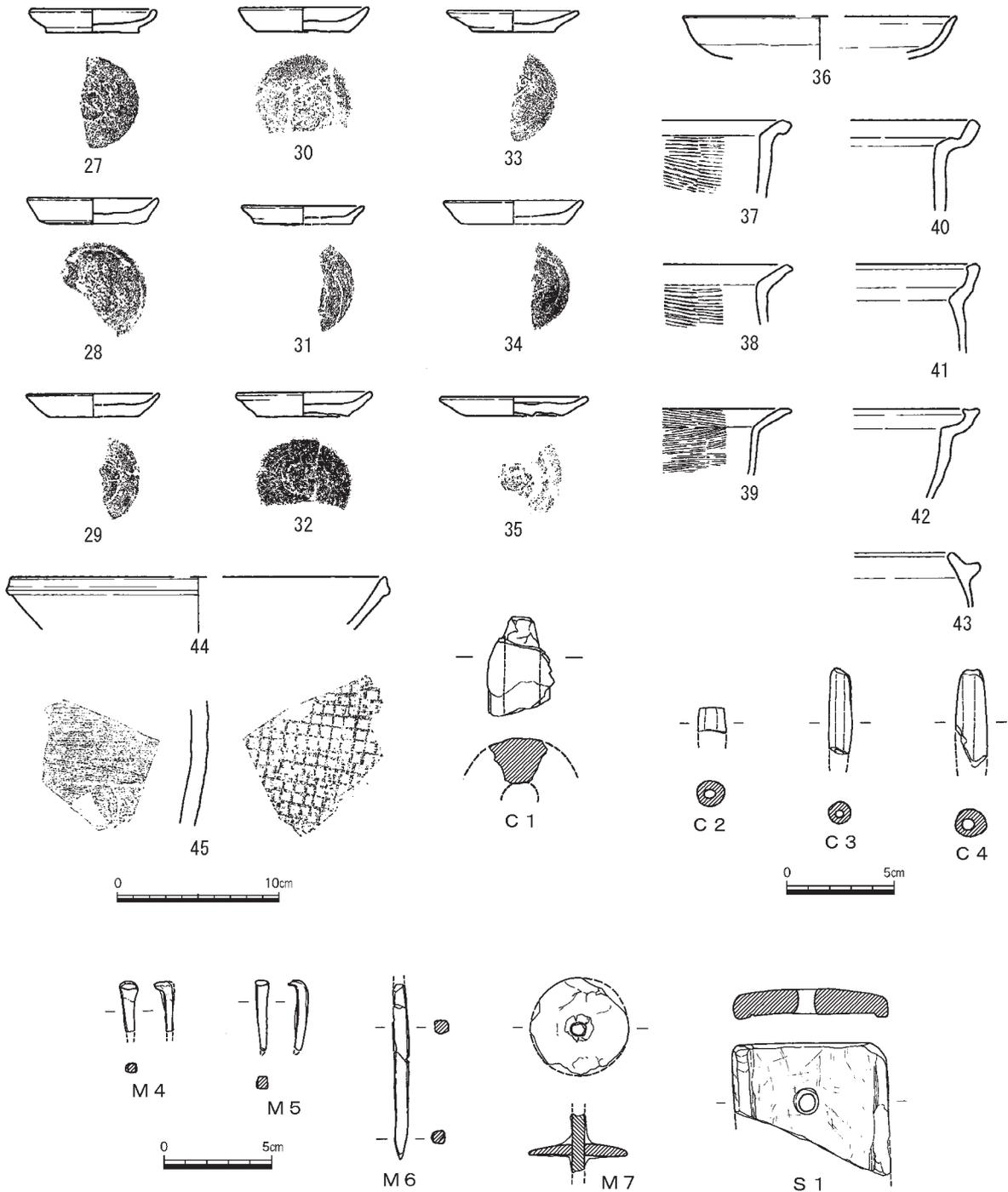
掘立柱建物6 (第6・14・15図、図版19)

掘立柱建物5と重複する4×4間の総柱建物で、桁側にさらに東柱を有する。西側1間分は梁間が



第14図 掘立柱建物6 (1/120)

短く、束柱も見られないことから、縁もしくは底を設けていたと考えられる。主軸は南側調査区内の他の建物群と1棟だけ異なり、直交する方向に設けている。P 5・7・12・13・16・32・36・38には根石が残されていた。P 7から甕の羽口C 1・C 2、P 15から土師器の皿33・鍋39、P 16から土師器の鍋37・40、P 17から土師器の皿27～30・魚住焼のこね鉢44・土錘C 3・紡錘車M 7、P 19から土師器の皿34～36、P 22から土錘C 3・C 4、P 25から土師器の鍋41、P 26から土師器の皿31、P 28から釘M 4、P 29から土師器の鍋38・釘M 5、P 30から勝間田焼の甕45・釘M 6、P 31から土師器の皿32



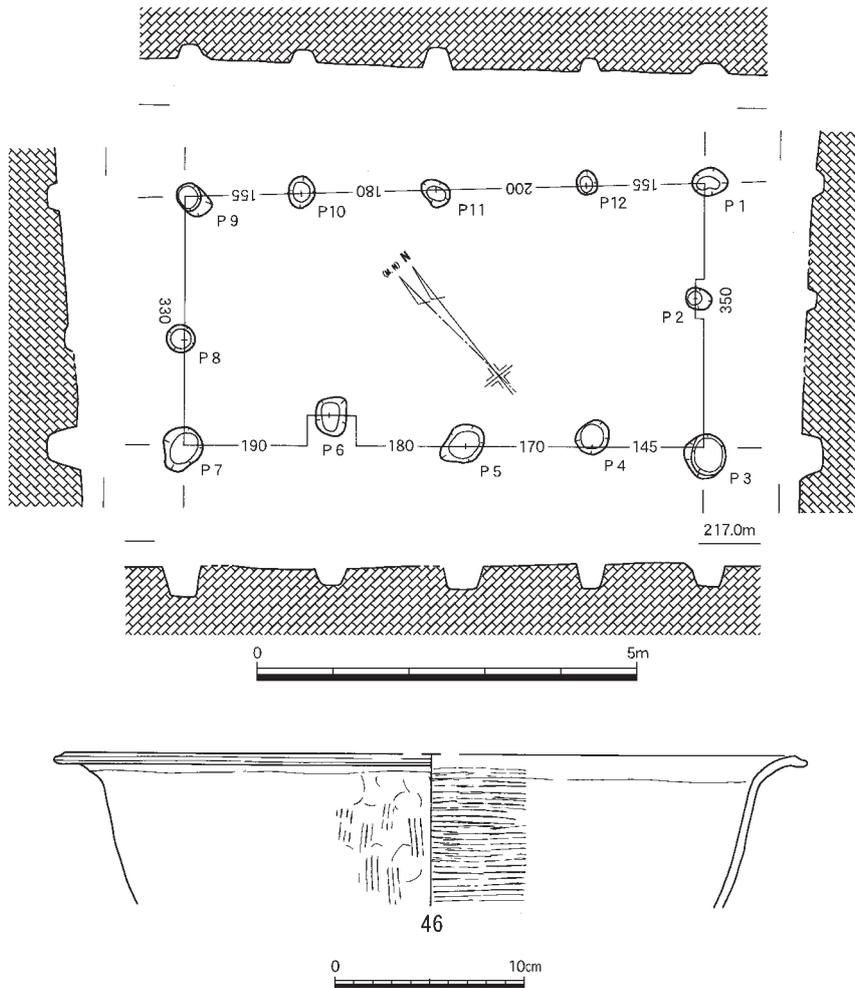
第15図 掘立柱建物6出土遺物 (1/4, 1/3)

・温石S 1、P 36から土師器の鍋42、P 38から土師器の羽釜43が出土している。

建物の規模が大きく総柱構造であること、また日用品とみられる遺物が比較的多く出土していることから、当遺跡の中世期の集落の中でも、中心的位置を占める居館であったと考えられる。（渡邊）

掘立柱建物 7（第6・16図、図版19）

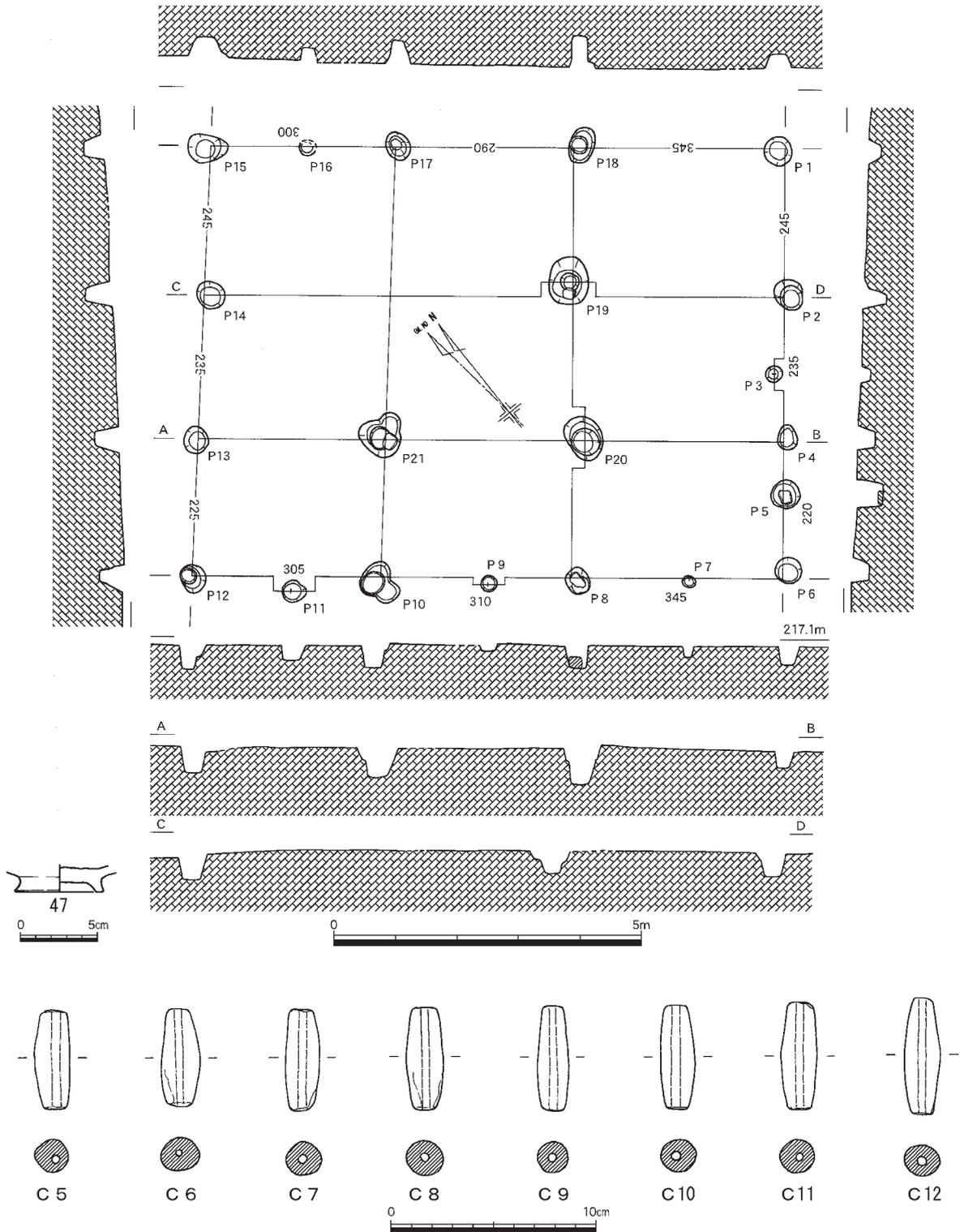
掘立柱建物 4の南西に位置する。建物 4と同一の主軸方向をとる4×1間の建物である。他と比べて柱間が比較的短く、ややいびつな平面形を呈している。P 10から土師器鍋46が出土している。中世に属すると考えられ、掘立柱建物 4と併存していた可能性が高い。（渡邊）



第16図 掘立柱建物 7（1/100）・出土遺物（1/4）

掘立柱建物 8（第6・17図、図版19）

掘立柱建物 7の南に位置する3×3間の総柱建物で、掘立柱建物 7の南側と当建物の北側が重複している。主軸もほぼ同じであるが、若干東に振っている。P 5・8・19・21には根石が残されている。南西隅のP 12からは上錘が8点まとまって出土しているが、全て完形であり、これらが柱穴の底にきれいに並べられていた状況から、人為的に埋納された可能性が高い。またP 1から須恵器杯47が出土しているが、検出状況からみて当建物は中世に属すると考えられる。（渡邊）



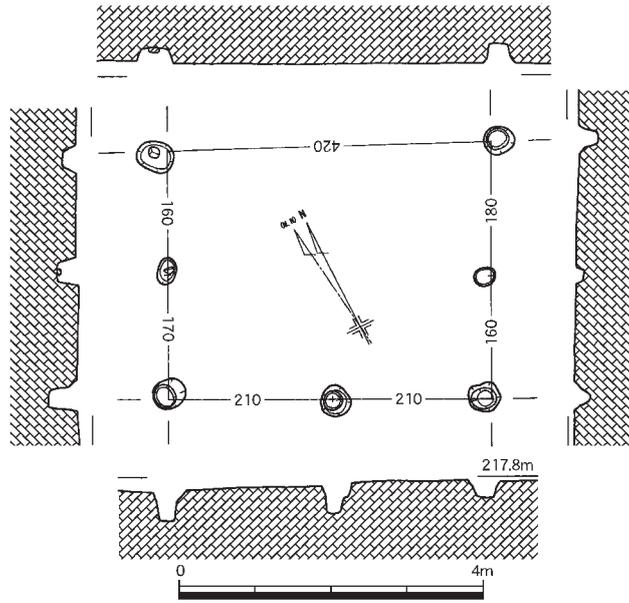
第17図 掘立柱建物8 (1/100)・出土遺物 (1/4, 1/3)

掘立柱建物9 (第6・18図)

調査区西端で検出した2×2間の掘立柱建物である。桁行全長4.2m、梁間3.4m、床面積14m²を測る。柱穴掘り方は円形ないし長楕円形を呈し、底面に根石をもつものがある。

建物の時期は、検出状況等から中世と考えられる。

(高田)



第18図 掘立柱建物9 (1/100)

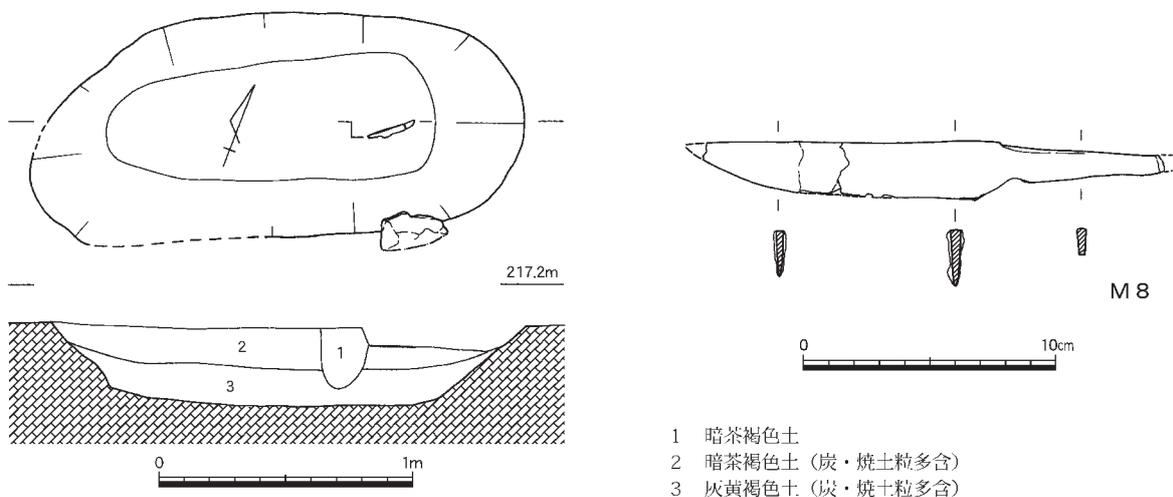
2 土墳墓

土墳墓 1 (第6・19・20図、図版20)

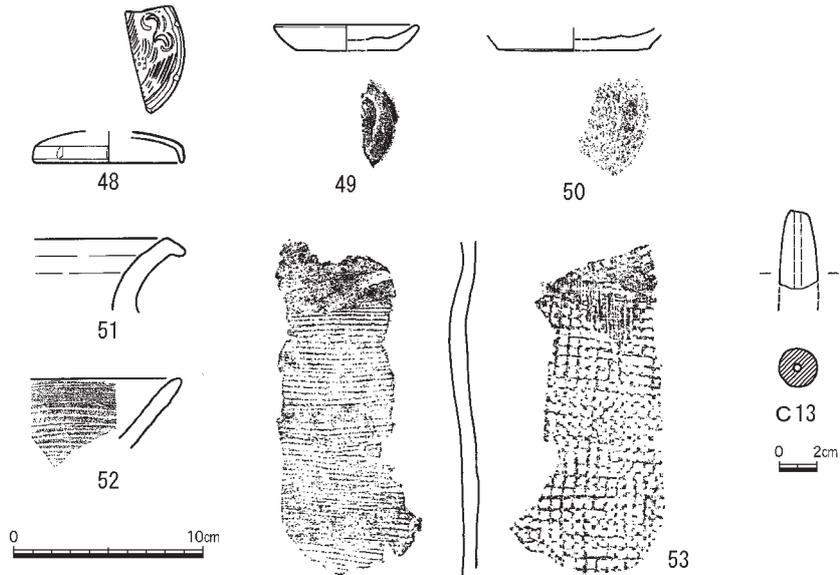
建物5・6と重複する遺構である。土墳5と切り合い関係にあり、本遺構のほうが古い。平面形は長楕円形を呈し、長軸長1.95m、短軸長90cm、深さ32cmを測る。底面はほぼ平坦となり、そこから壁が直線的に急斜に立ち上がる。埋土は2層で、いずれも炭と焼土粒を顕著に包含していた。

図示した出土遺物は、土器と鉄器、土製品である。土器は青白磁の合子48、土師器の小皿49と杯50、須恵器の甕51、勝間田焼のこね鉢52と甕53である。鉄器は刀子M8で、土製品は土錘C13である。遺物の出土状態は、刀子が底面から25cm遊離するなど、埋納時のものとは考えにくい。

本遺構は、その形態や出土遺物から土墳墓と考えられ、時期は中世である。 (高田)



第19図 土墳墓 1 (1/30)・出土遺物① (1/3)



第20図 土壇墓 1 出土遺物② (1/4, 1/3)

3 土壇

土壇 1 (第5・21図)

竪穴住居 1 の東隅に重なるもので、住居のカマドの一部を切っている。平面形は不定な楕円形を呈し、長軸1.65m、短軸98cm、深さ25cmを測る。底面はほぼ平坦となり、海拔高は213.33mである。

埋土等の検出状況から中世に属するものと考えられる。(高田)

土壇 2 (第5・22図)

竪穴住居 1 の南東部に重なるもので、確認時のトレンチに北側を切られている。平面形は長方形を呈するものと考えられ、現存する長軸長1.5m、短軸長1m、深さ8cmを測る。底面はほぼ平坦となり、海拔高は213.66mである。検出状況から中世に属するものと考えられる。(高田)

土壇 3 (第6・23図)

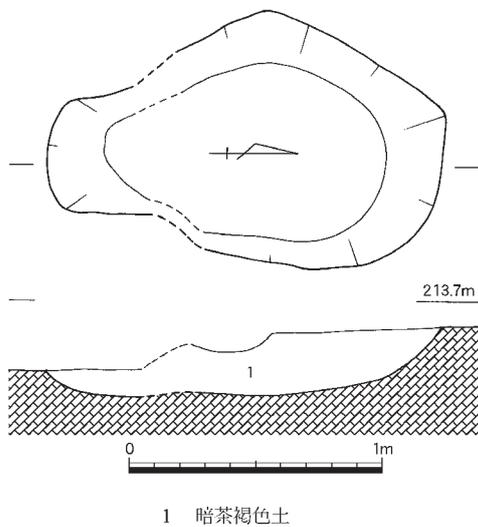
建物 6 に重なる土壇で、平面形は長楕円形を呈し、長軸96cm、短軸66cm、深さ10cmを測る。底面は南西から北東方向に傾斜し、平坦ではない。

出土遺物はないが、土壇の時期は検出状況から中世と考えられる。(高田)

土壇 4 (第6・24図)

建物 6 に重なる土壇である。平面形はほぼ円形を呈し、径72cm前後、深さ18cmを測る。壁は直線的に急斜に立ち上がるもので、東側の一部に段をもつ。底面はほぼ平坦となる。

出土遺物はないが、土壇の時期は検出状況から中世と考えられる。(高田)



1 暗茶褐色土

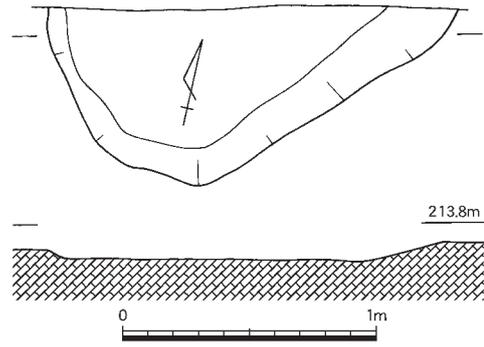
第21図 土壇 1 (1/30)

土壌 5 (第6・25図)

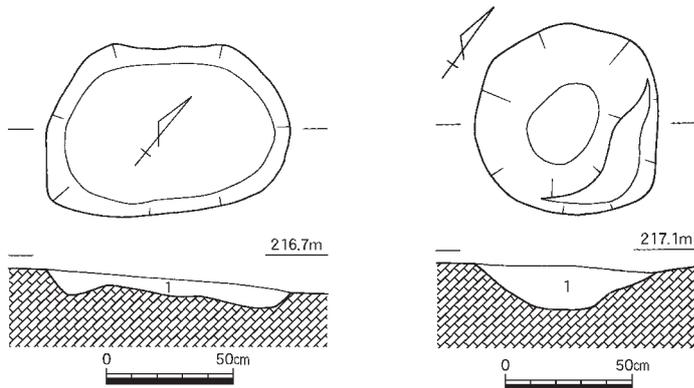
建物 5・6 に重なる土壌で、先述した土壌墓 1 より新しい。平面形は円形を呈するものと考えられ、径 60 cm 前後、深さ 15 cm を測り、底面は緩やかに湾曲する。

遺物はいずれも底面から浮いた状態で出土したもので、図示したものは青磁小皿 54、土師器の小皿 55・56、土師器鍋 57、瓦質土器鍋 58、勝間田焼甕 59 である。

土壌の時期は検出状況から中世と考えられる。(高田)



第22図 土壌 2 (1/30)

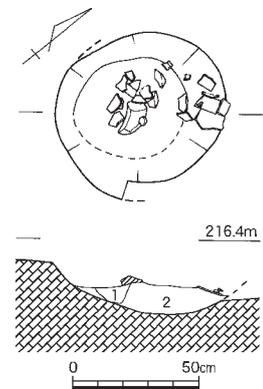


1 暗灰褐色土 (炭・焼土粒含)

1 暗褐色粘質土 (炭・焼土粒含)

第23図 土壌 3 (1/30)

第24図 土壌 4 (1/30)



1 炭 (焼土粒多含)
2 暗茶褐色土 (炭・焼土粒多含)

土壌 6 (第6・26図、図版20)

土壌 5 同様、建物 5・6 に重なる土壌である。平面形は楕円形を呈し、長軸 98 cm、短軸 82 cm、深さ 15 cm を測る。底面は平坦で壁は急斜に立ち上がる。

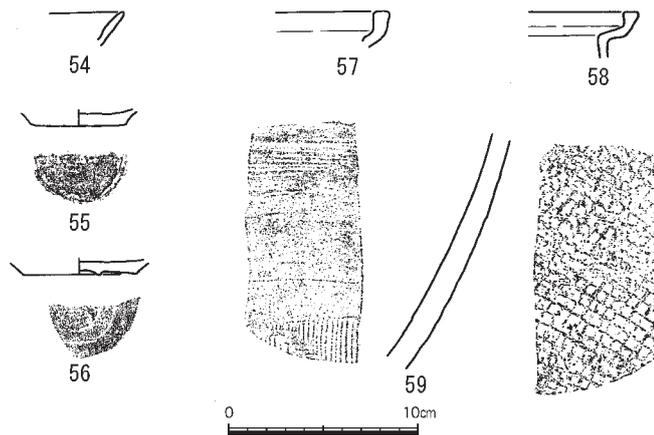
遺物はいずれも底面から浮いた状態で出土している。60~66 は土師器の小皿である。完形の 60~64 の口径は 7.3~7.6 cm、器高 1.3~1.6 cm を測る。小皿の底部は回転ハケののちナデを加えている。67 は勝間田焼のこね鉢か。

遺物の内容は建物 6 に類似し、両者の関連を想起させる。(高田)

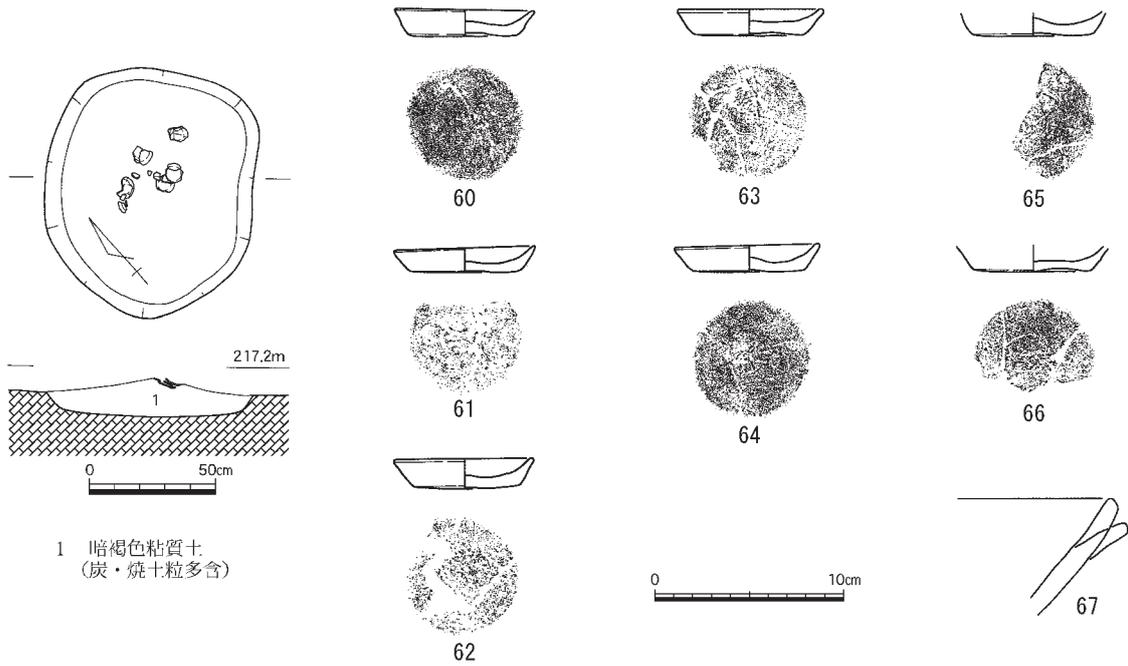
土壌 7 (第6・27図)

平面形が不整円形を呈する土壌で、長径 1.95 m、短径 1.6 m、深さ 12 cm を測る。底面はほぼ平坦で、壁が急斜に立ち上がる。

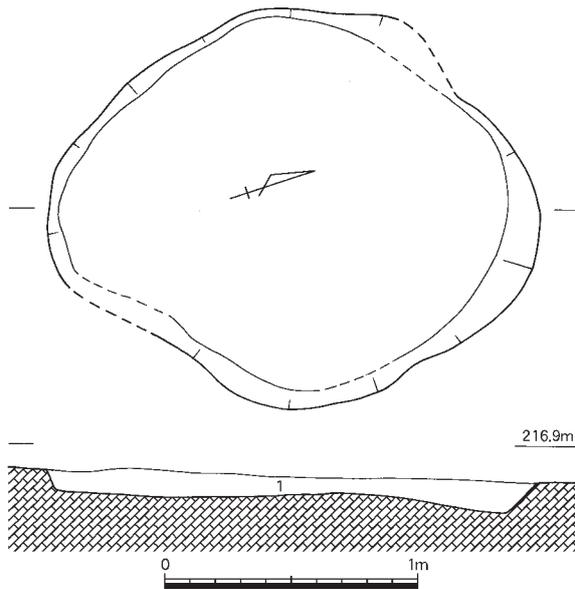
図示した出土遺物は土師器の小皿である。土壌の時期は中世と考えられる。(高田)



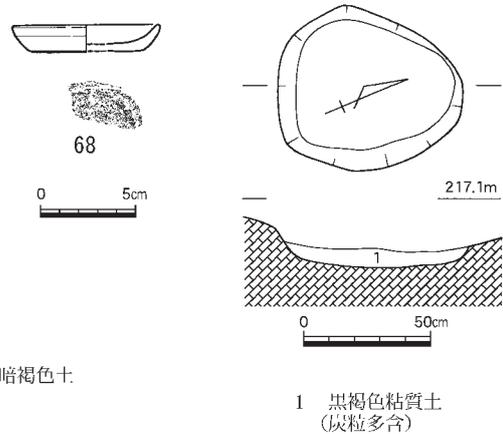
第25図 土壌 5 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第26図 土壌6 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第27図 土壌7 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第28図 土壌8 (1/30)

土壌8 (第6・28図)

平面形が不整円形を呈する土壌で、長径73cm、短径65cm、深さ10cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁が急斜に立ち上がる。

出土遺物はないが検出状況から中世と考えられる。

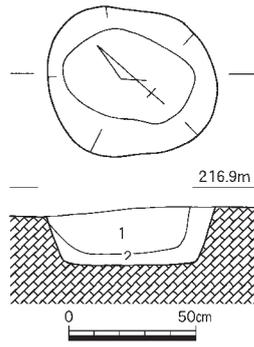
(高田)

土壌9 (第6・29図)

平面形が不整円形を呈する土壌で、長径70cm、短径65cm、深さ23cmを測る。底面は平坦で、壁が直線的に急斜に立ち上がる。

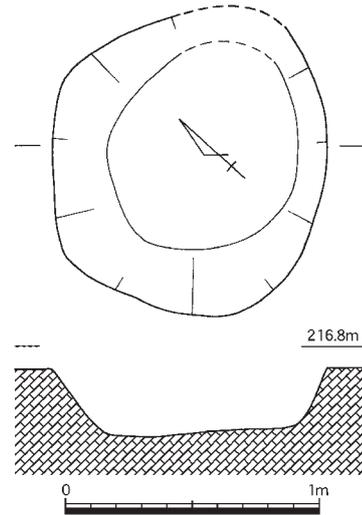
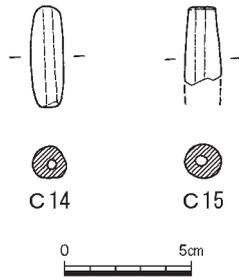
出土遺物には土錘2点がある。土壌の時期は検出状況から中世と考えられる。

(高田)



1 黒褐色土 2 淡黄褐色土

第29図 土壌9 (1/30)・出土遺物 (1/3)



第30図 土壌10 (1/30)

土壌10 (第6・30図)

不整形円形を呈する土壌で、長径1.24m、短径1.08m、深さ25cmを測る。底面は平坦で、壁が急斜に立ち上がる。

出土遺物はないが検出状況から中世と考えられる。

(高田)

土壌11 (第6・31図)

平面形が不整形円形を呈する土壌で、土壌12・13と直線的に並んで検出した。長径1.24m、短径1.02m、深さ7cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物はないが検出状況から中世と考えられる。

(高田)

土壌12 (第6・32図)

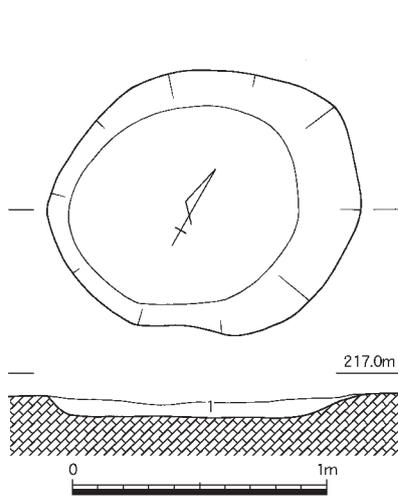
平面形が不整形円形を呈する土壌で、長径1.3m、短径1.2m、深さ6cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物はないが検出状況から中世と考えられる。

(高田)

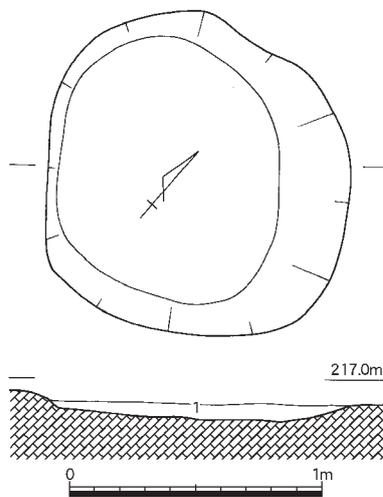
土壌13 (第6・33図)

平面形が円形を呈する土壌で、径1m、深さ8cmを測る。底面は平坦ではなく、壁の立ち上がりも



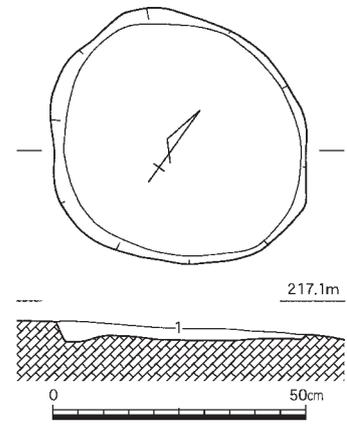
1 暗茶褐色土

第31図 土壌11 (1/30)



1 暗茶褐色土

第32図 土壌12 (1/30)



1 茶褐色土

第33図 土壌13 (1/30)

わずかである。

出土遺物はないが検出状況から中世と考えられる。

(高田)

土壌14 (第6・34図)

掘立柱建物8の南西角に位置する。上面は楕円形を呈するが、底面の北辺が直線的であり、底近くの壁面の立ち上がりが比較的急であることから、本来は長方形の土壌が型崩れを起こしたものと考えられる。埋土は4層に分かれる。底部糸切りの土師器杯69・70、釘M9が出土しており、中世に属すると考えられる。

(渡邊)

土壌15 (第6・35図)

溝1の北西側に位置する土壌である。平面形は楕円形を呈し、長径1.64m、短径1.3m、深さ35cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。壙内は多数の角礫で埋まっていた。

出土遺物は土師器の杯と鉄釘である。71の底部は糸切り痕が残る。

土壌の時期は、出土遺物と検出状況から中世と考えられる。

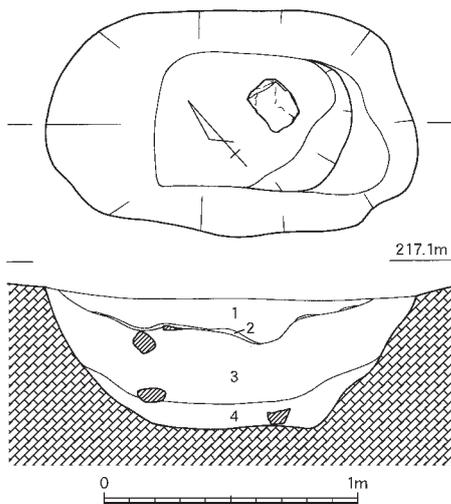
(高田)

土壌16 (第6・36図)

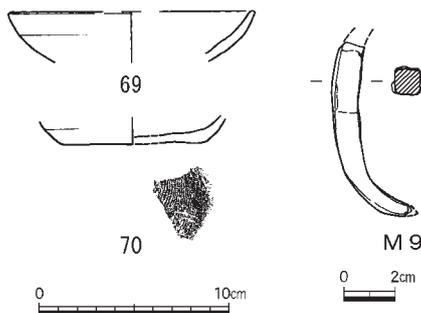
建物6の南西側に集中する土壌のひとつである。平面形は楕円形を呈し、長径95cm、短径85cm、深さ12cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がる。

土壌の時期は検出状況から中世と考えられる。

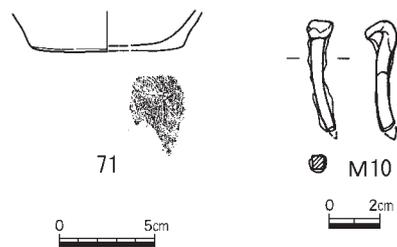
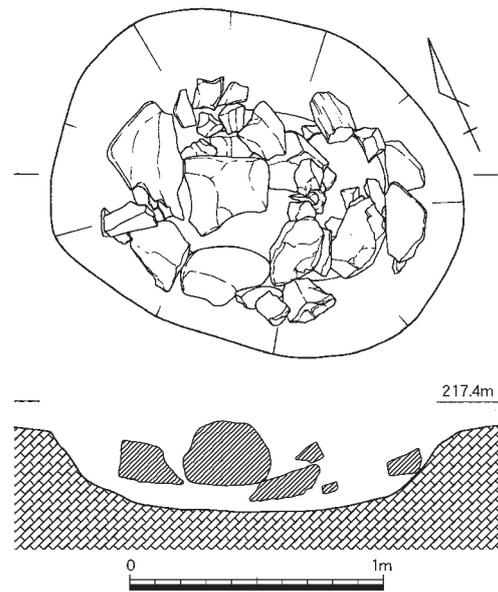
(高田)



- | | |
|----------|----------|
| 1 暗褐色粘質土 | 3 茶褐色粘質土 |
| 2 炭層 | 4 暗褐色粘質土 |



第34図 土壌14 (1/30)・出土遺物 (1/4, 1/3)



第35図 土壌15 (1/30)・出土遺物 (1/4, 1/3)

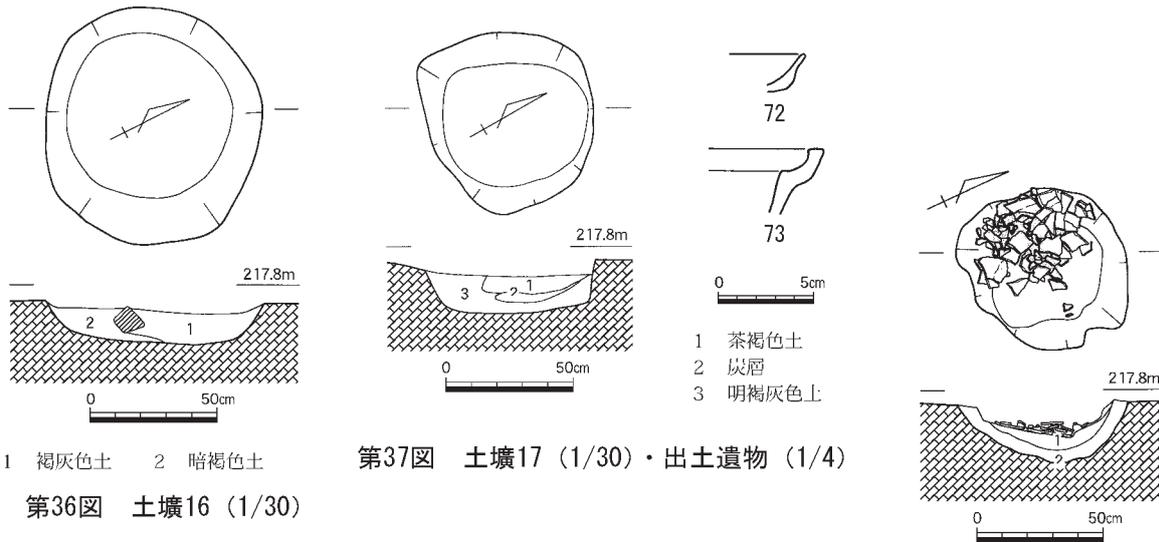
土壌17 (第6・37図)

平面形は不整円形を呈し、長径74cm、短径64cm、深さ20cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直ぎみとなる。層中位には顕著な炭層がある。

出土遺物は土師器の皿と鍋である。土壌の時期は検出状況から中世と考えられる。 (高田)

土壌18 (第6・38図、図版20)

近現代攪乱の清掃時に炭と土器細片の集中部として検出したもので、平面形は不整円形を呈し、長



1 褐灰色土 2 暗褐色土

第37図 土壌17 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第36図 土壌16 (1/30)

1 黒色炭層
2 茶褐色土

第38図 土壌18 (1/30)・出土遺物 (1/5, 1/4)

径70cm、短径60cm、深さ24cmを測る。断面形は楕円形となる。

出土遺物は備前焼の甕と瓦質土器の鍋である。74はやや外反する頸部から玉縁状の口縁部を作り出すもので、胴下部の器表面をナデで整える。

土壌の時期は、出土遺物と検出状況から室町時代と考えられる。 (高田)

土壌19 (第6・39図)

平面形は円形を呈し、径1.95~2.04m、深さ30cmを測る。底面は二段に落ち込み、壁は急斜に立ち上がる。出土遺物は土師器の小皿と鉄釘である。76は推定口径5.9cm、器高1.0cmを測る小型品である。

土壌の時期は、出土遺物と検出状況から中世と考えられる。 (高田)

土壌20 (第6・40図)

平面形は円形を呈し、径72cmから80cm、深さ10cmを測る。底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。出土遺物はないが、土壌の時期は、出土遺物と検出状況から中世と考えられる。 (高田)

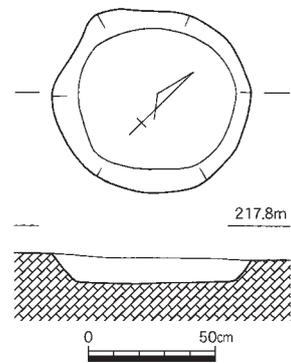
土壌21 (第6・41図)

建物6南西側で検出したもので、平面形は不整形円形を呈し、長径70cm、短径60cm、深さ15cmを測る。底は平坦で、壁は直線的に急斜に立ち上がる。図示した出土遺物77は、土師器の杯と考えられる。

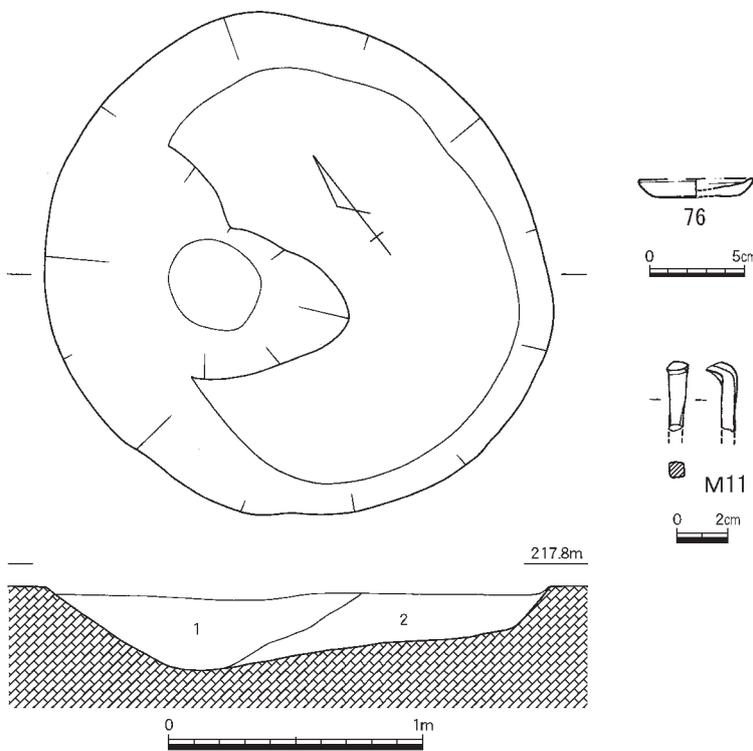
土壌の時期は、中世に属するものと考えられる。 (高田)

土壌22 (第6・42図)

調査区南西側の現代耕作土直下で検出した土壌である。平面形は長楕円形を呈し、長径1.46m、短径84cm、深さ30cmを測る。底はほ

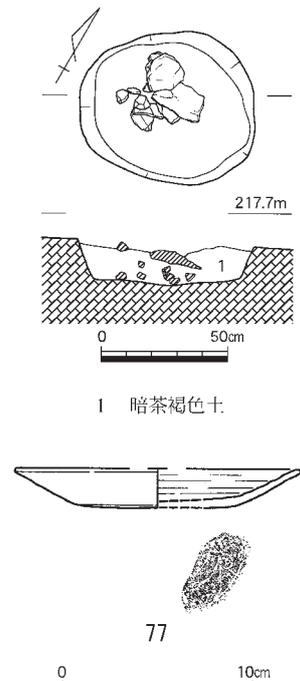


第40図 土壌20 (1/30)



1 茶灰色粘質微砂 2 褐色土 (炭・焼土粒含)

第39図 土壌19 (1/30)・出土遺物 (1/4, 1/3)



第41図 土壌21 (1/30)

・出土遺物 (1/4)

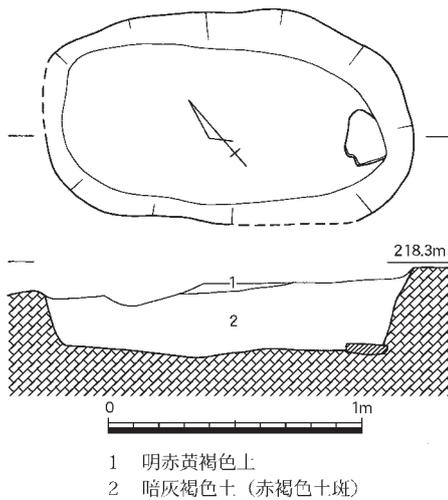
ば平坦で、壁は急斜に直線的に立ち上がる。

周辺の柱穴からは第45図に示した中世の遺物がある。以上の検出状況から、土壌の時期は中世と考えられる。(高田)

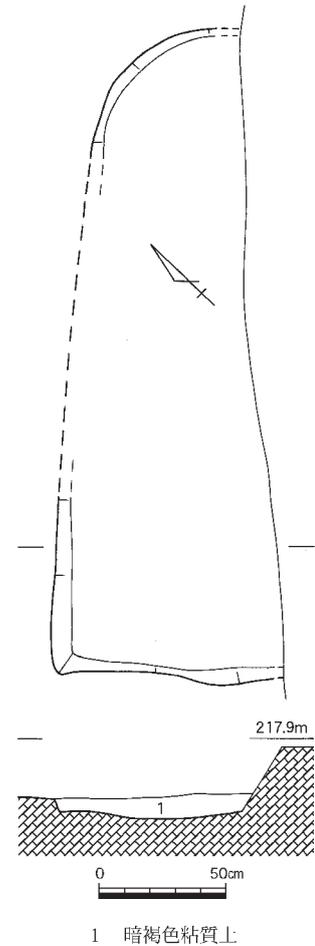
土壌23 (第6・43図)

不整形を呈するもので、中央を確認トレンチで欠失し、南東部は調査区外となる。現状での長軸長2.6m、短軸長90cm、深さ8cmを測る。底は平坦ではない。

検出状況から中世に属するものと考えられる。(高田)



第42図 土壌22 (1/30)



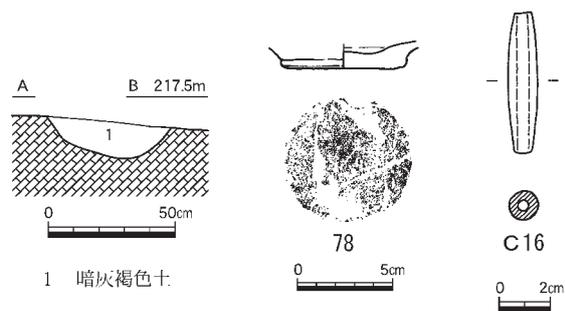
第43図 土壌23 (1/30)

4 溝

溝1 (第6・44図)

南東-北西方向の約14mを検出した溝である。東端は浅くなって閉じ、西端は調査区外に伸びると考えられる。断面形はU字形で、溝1の北側で柱穴等の密度が高い。

図示した遺物は、土師器の杯と土錘である。以上から溝は中世と考えられる。(高田)

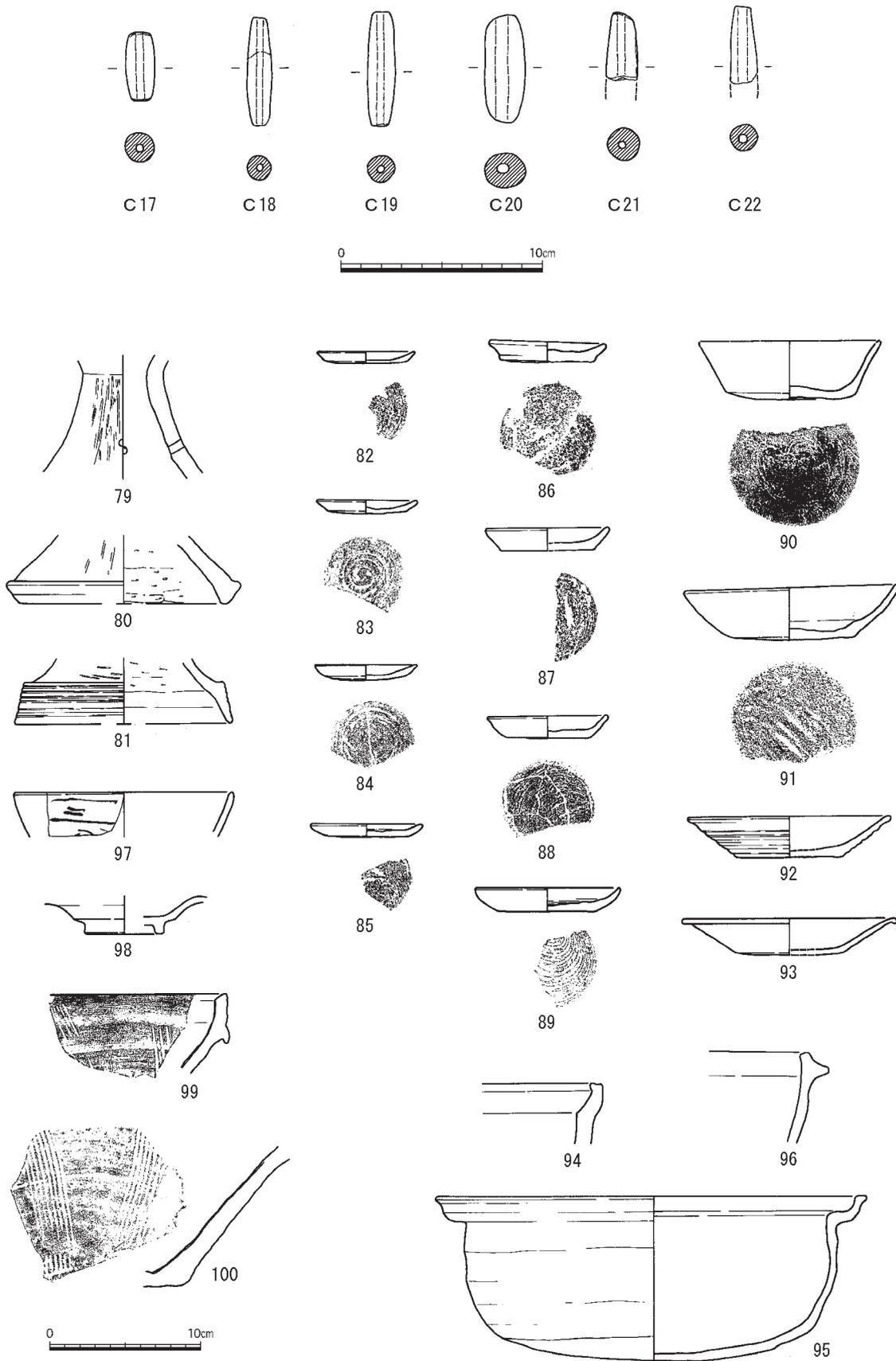


第44図 溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4, 1/3)

5 柱穴

柱穴 (第5・6・45図)

79~81が弥生時代後期であるほか、すべて中世に属する遺物が出土している。弥生土器は3点ともP2から出土しているが、P2は下段にある北側の調査区に位置しており、上段の南側の調査区では弥生時代の包含層が中世面より1~2m深くで確認されたことから、河岸段丘の中でも、低位なテラス上に弥生時代の集落が立地すると想定される。また、土製品は全て管状土錘であるが、掘立柱建物や土壌から同タイプの土錘が比較的多く出土しており、当遺跡内での中世における生業の一端を示唆するものとして興味深い。(渡邊)



第45図 柱穴出土遺物 (1/3, 1/4)

第4節 小結

河内遺跡は、確認のトレンチ調査において、弥生後期の包含層と室町期の遺構面が認められ調査に入ったのである。

北側調査区においては、古墳時代後半期のカマドを有する竪穴住居を検出した。この上層からは、須恵器の蓋が認められているが、この期に相当する遺構は認められていないのである。

北側調査区と南側調査区で検出された主な遺構は、掘立柱建物9棟である。南側の調査区では、掘立柱建物が重複して認められている。庇を有するものは掘立柱建物6であり、検出された建物としては最も規模の大きいものである。この建物の規模を北東と南東の外側1間分を取り除くと、掘立柱建物8と同様な内容を示すのである。とくに庇は認められなかったが、この柱間と同一である。また、北側の調査区で検出された掘立柱建物1は、一辺の1間と庇側の柱間を除けば、ほぼこれに近い規模となるのである。このようなことから、掘立柱建物1・6・8は、有機的関係を持って営まれ、その位置関係からして掘立柱建物2も同様な関係と思考される。なお、掘立柱建物8のP1から検出された高台部の破片から調査時に古代まで遡ると思われたが、作りなどの内容から中世に属するものと判断された。そして、掘立柱建物3～5・7・9は、掘立柱建物9を除いて桁行の長い建物で営まれた時期が想定される。このほかには、土壌が検出されている。一部に掘立柱建物と重複するものも認められるが、それらと距離を持って検出されるものも存在する。

このようなことから、中世段階においては、規模の整った掘立柱建物で構成された営みが確認されたことから、河内構遺跡との関わりでより具体的に把握できる資料を得たのである。(下澤)

竪穴住居一覧表

遺構名	平面形	規模(cm)			長軸の向き N° - E	床面積 (㎡)	海拔高 (m)	主柱	柱間 (cm)	付属施設				時期	備考	
		長さ	幅	深さ						高床部	方形土壇	中央穴	焼土面			カマド
竪穴住居1	方形	515	480	30	N-22-W	(22.5)	213.50	4/4	255~210	—	—	—	3	○	古墳時代後期	

掘立柱建物一覧表

遺構名	規模			柱間距離(cm)		面積 (㎡)	棟方向 N° - E・W	柱穴 掘り方	時期	備考
	間数	桁行(cm)	梁間(cm)	桁	梁					
掘立柱建物1	2×1	475	310	240~220	310~300	14.3	N-53-W	凹形	中世	
掘立柱建物2	3×4	945	880	320~307	236~204	83.2	N-34-E			
掘立柱建物3	5×1	1220	500	280~210	500	61.0	N-46-W			
掘立柱建物4	4×2	835	400	270~165	212~188	32.5	N-52-W			
掘立柱建物5	3×1	690	320	270~205	320~300	21.3	N-38-W			梁間に束柱
掘立柱建物6	4×4	1280	920	340~300	240~217	116.5	N-54-W			北側に庇。南北桁行に束柱
掘立柱建物7	4×1	690	350	190~145	350~330	23.4	N-52-W			梁間に束柱
掘立柱建物8	3×3	960	705	345~290	245~220	66.4	N-50-W			
掘立柱建物9	2×2	420	340	(420~210)	180~160	14.0	N-63-W			

土壌墓一覧表

遺構名	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	人骨	副葬品等	時期	備考
土壌墓1	長楕円形	Ⅲ a	195	90	32	×	刀子・合子	中世	

土壙一覽表

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔 高(m)	時期	備考
土壙1	不定楕円形	Ⅲ a	165	98	25	213.33	中世	
土壙2	長方形	Ⅲ a	(150)	(100)	8	213.66		トレンチで一部削平
土壙3	長楕円形	Ⅲ e	96	66	10	216.50		
土壙4	円形	Ⅲ a	76	72	18	216.86		
土壙5	円形	Ⅲ b	67	60	15	216.12		
土壙6	楕円形	Ⅲ a	98	82	15	217.00		
土壙7	不整円形	Ⅲ a	195	160	12	216.70		
土壙8	不整円形	Ⅲ a	73	65	10	216.82		
土壙9	不整円形	Ⅲ a	70	65	23	216.59		
土壙10	不整円形	Ⅲ a	124	108	25	216.44		
土壙11	不整円形	Ⅲ a	124	102	7	216.82		
土壙12	不整円形	Ⅲ a	130	120	6	216.84		
土壙13	円形	Ⅲ e	100	100	8	216.96		
土壙14	楕円形	Ⅲ a	146	90	52	216.43		
土壙15	楕円形	Ⅲ a	164	130	35	216.95		
土壙16	楕円形	Ⅲ a	95	85	12	217.57		
土壙17	不整円形	Ⅲ a	74	64	20	217.53		
土壙18	不整円形	Ⅱ b	70	60	24	217.30		
土壙19	円形	Ⅲ a	204	195	30	217.38		
土壙20	円形	Ⅲ a	80	72	10	217.57		
土壙21	不整円形	Ⅲ a	70	60	15	217.42		
土壙22	楕円形	Ⅲ a	146	84	30	217.92		
土壙23	不整方形	Ⅱ a	(260)	(90)	8	217.58		南東部調査区外(道路)

土器観察表①

掲載 番号	掲載 遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
1	T18	弥生土器	壺	(17.4)			橙色(7.5YR7/6)		
2	T5	弥生土器	壺	18.5			鈍黄橙色(10YR7/3)		拡張面に鋸歯文
3	T5	弥生土器	甗	17.0			鈍橙色(7.5YR6/4)		
4	T5	弥生土器	甗	(13.4)			灰黄色(2.5Y7/2)		
5	T5	弥生土器	甗	(14.0)			灰黄色(2.5Y6/2)		凹線3条
6	T5	弥生土器	甗	22.2			鈍橙色(5YR6/4)		凹線3条
7	T5	弥生土器	甗				鈍黄橙色(10YR7/2)		
8	T5	弥生土器	高杯	22.1			鈍橙色(5YR6/4)		内面横方向、外面下部蜘蛛の巣状磨き
9	T18	弥生土器	高杯		10.3		鈍黄橙色(10YR7/4)		
10	T5	弥生土器	器台		(27.8)		黄灰色(2.5Y5/1)		
11	T6	土師器	鍋	(26.4)			灰黄色(2.5Y7/2)		
12	T5	備前焼	播鉢				灰色(N6/0)		
13	竪穴住居1	土師器	甗	(19.6)			鈍黄橙色(10YR7/3)		
14		土師器	甗	(20.6)			鈍黄橙色(10YR7/3)		
15		土師器	甗				鈍褐色(7.5YR6/3)		
16		須恵器	蓋	(9.8)			灰色(10Y6/1)		
17		須恵器?	杯(蓋)	12.2	6.0	3.8	黄灰色(2.5Y6/1)	完形復元	蓋? 焼成やや不良
18		須恵器	壺				灰色(N6/0)		
19	掘立柱建物2	勝間田焼	小皿		(6.0)		灰色(N6/0)		底部糸切り P14出土
20		勝間田焼	鉢				灰色(N5/0)		P10出土
21		土師器	鍋				黄灰色(2.5Y4/1)		P2出土
22		土師器	鍋				鈍黄橙色(10YR6/3)		P9出土
23		土師器	鍋	31.9			灰黄褐色(10YR5/2)		P7出土
24	掘立柱建物4	備前焼	甗				灰色(5Y6/1)		焼成不良 P7出土
25	掘立柱建物5	土師器	鍋				鈍黄橙色(10YR7/2)		P6出土
26		勝間田焼?	甗?				灰色(N5/0)		P8出土
27	掘立柱建物6	土師器	小皿	6.6	5.7	1.5	鈍黄橙色(10YR7/3)		底部ヘラキリ P17出土
28		土師器	小皿	7.9	6.6	1.6	鈍褐色(7.5YR6/3)		底部ヘラキリ P17出土
29		土師器	小皿	8.1	5.6	1.5	鈍褐色(7.5YR6/3)		底部ヘラキリ P17出土
30		土師器	小皿	7.9	5.9	1.5	鈍黄橙色(10YR6/3)		底部ヘラキリ P17出土
31		土師器	小皿	7.4	6.0	1.2	鈍黄橙色(10YR7/3)		底部回転ハケ P26出土

土器觀察表②

掲載 番号	掲載 遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
32	掘立柱建物 6	土師器	小皿	8.2	5.7	1.6	灰黄褐色(10YR6/2)		底部回転ハケ P31出土
33		土師器	小皿	7.9	5.2	1.4	鈍褐色(7.5YR6/3)		底部回転ハケ P15出土
34		土師器	小皿	8.2	6.4	1.5	鈍橙色(7.5YR7/3)		底部ヘラキリ P19出土
35		土師器	小皿	9.0	5.9	1.2	鈍橙色(7.5YR7/4)		底部ヘラキリ P19出土
36		土師器	皿	(16.8)			灰黄褐色(10YR6/2)		底部外面ナデ P19出土
37		土師器	鍋				灰黄褐色(10YR5/2)		P16出土
38		土師器	鍋				淡黄色(2.5Y8/3)		P29出土
39		土師器	鍋				淡赤橙色(2.5YR7/4)		P15出土
40		土師器	鍋				灰色(5Y4/1)		P16出土
41		土師器	鍋				鈍橙色(7.5YR7/4)		P25出土
42		土師器	鍋				灰白色(2.5Y7/1)		P36出土
43		土師器	羽釜				灰色(7.5Y6/1)		P38出土
44		魚住窯	こね鉢	(23.0)			灰白色(N7/0)		P17出土
45		勝間田焼	甗				褐灰色(10YR5/1)		P30出土
46		掘立柱建物 7	土師器	鍋	39.5			鈍黄橙色(10YR7/3)	
47	掘立柱建物 8	須恵器	杯		5.8		灰色(N6/0)		P1出土
48	上墳墓 1	青白磁	舍利		7.8		白色(10Y8/1)		釉薬は白色(N9/0)
49		土師器	小皿	7.3	5.3	1.4	鈍橙色(5YR6/4)		底部ヘラキリ
50		土師器	杯?		8.0		鈍黄橙色(10YR6/4)		底部回転ハケ?
51		須恵器?	甗				灰色(N5/0)		胴部外面に平行叩き目痕跡
52		勝間田焼?	こね鉢				黄灰色(2.5Y6/1)		焼成不良
53	勝間田焼	甗				灰白色(10YR8/2)		焼成不良	
54	土墳 5	青磁	皿				灰白色(7.5Y7/1)		釉薬は灰オリーブ色(7.5Y6/2)
55		土師器	小皿		5.0		橙色(7.5YR6/6)		底部ヘラキリ
56		土師器	小皿		6.0		鈍橙色(5YR6/4)		底部ヘラキリ
57		土師器	鍋				鈍黄橙色(10YR7/4)		
58		瓦質土器	鍋				灰白色(10YR8/2)		
59	勝間田焼	甗				灰色(N6/0)			
60	土墳 6	土師器	小皿	7.3	5.8	1.4	鈍橙色(7.5YR7/4)		底部回転ハケ後ナデ?
61		土師器	小皿	7.4	5.8	1.3	鈍黄橙色(10YR7/4)		底部回転ハケ後ナデ?
62		土師器	小皿	7.3	5.6	1.6	鈍橙色(7.5YR7/3)		底部回転ハケ後ナデ?
63		土師器	小皿	7.6	5.9	1.4	鈍橙色(7.5YR6/4)		底部回転ハケ後ナデ?
64		土師器	小皿	7.6	5.9	1.4	鈍黄橙色(10YR6/3)		底部回転ハケ後ナデ?
65		土師器	小皿		6.4		鈍橙色(7.5YR6/4)		底部回転ハケ後ナデ?
66		土師器	小皿		6.3		鈍橙色(7.5YR6/4)		底部回転ハケ後ナデ?
67	勝間田焼?	こね鉢?				灰白色(2.5Y7/1)		焼成不良	
68	土墳 7	土師器	小皿	7.6	6.0	1.4	鈍黄橙色(10YR7/2)		
69	土墳 14	土師器	杯?	(12.7)			鈍黄橙色(10YR7/3)		底部糸切り
70		土師器	杯		(7.6)		鈍橙色(7.5YR6/4)		底部糸切り
71	土墳 15	土師器	杯?		(8.0)		灰白色(2.5Y8/2)		底部糸切り
72	土墳 17	土師器	皿?				鈍黄橙色(10YR7/2)		
73		土師器	鍋				鈍黄橙色(10YR7/2)		
74	土墳 18	備前焼	甗	41.0	33.0		灰色(5Y5/1)		
75		瓦質土器	鍋				灰色(10Y5/1)		
76	土墳 19	土師器	小皿	(5.9)	(4.4)	1.0	鈍黄橙色(10YR7/3)		
77	土墳 21	土師器	杯or皿?	14.8	13.4	2.1	鈍黄橙色(10YR7/2)		
78	溝 1	土師器	杯?		6.6		鈍橙色(7.5YR6/4)		
79	P 2	弥生土器	高杯				橙色(5YR6/6)		
80		弥生土器	高杯		(13.7)		橙色(5YR6/6)		
81		弥生土器	鼓形器台	(14.2)			灰色(7.5YR8/2)		凹線 4 条
82	P 4	土師器	小皿	6.4	5.4	0.8	明赤灰色(2.5YR7/2)		
83	P 23	土師器	小皿	6.5	5.3	0.9	浅黄褐色(10YR8/3)		底部ヘラキリ
84		土師器	小皿	6.7	5.4	1.1	鈍黄褐色(10YR7/2)		底部ヘラキリ
85	P 6	土師器	小皿	7.3	5.5	0.9	灰黄褐色(10YR6/2)		底部ヘラキリ
86	P 3	土師器	小皿	7.5	6.3	1.3	鈍黄褐色(10YR6/3)		底部ヘラキリ
87	P 11	土師器	小皿	8.0	6.2	1.5	鈍橙色(7.5YR6/4)		
88	P 10	土師器	小皿	7.8	5.6	1.6	灰褐色(7.5YR6/2)		底部糸切り
89	P 13	土師器	小皿	9.4	6.5	1.6	灰黄褐色(10YR5/2)		底部糸切り
90	P 18	土師器	杯		8.6		鈍黄褐色(10YR7/2)		底部回転ハケ
91	P 1	土師器	杯	14.1	8.0	3.5	鈍橙色(2.5YR6/4)		底部に板目

土器観察表③

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
92	P 15	土師器	杯	13.4	7.0	2.8	灰白色(10YR8/2)		底部に板目
93	P 23	土師器	杯	14.0	7.0	2.5	明褐色(7.5YR7/1)		
94	P 22	土師器	鍋				灰白色(5Y7/1)		
95	P 9	土師器	鍋	28.4	20.4	11.0	暗灰色(N3/0)		
96	P 14	瓦質土器	羽釜				灰色(N5/0)		
97	P 20	青磁	碗	(16.0)			灰白色(10Y7/1)		釉薬はオリーブ灰色(10Y6/2)
98	P 19	青磁	皿		4.9		灰白色(10Y7/1)		釉薬はオリーブ灰色(10Y6/2)
99	P 24	備前焼	揺鉢				橙色(2.5YR7/6)		
100	P 5	備前焼	揺鉢				鈍橙色(2.5YR6/4)		

土製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	器種	計測値(mm)					色調	時期	特徴・備考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量(g)			
C 1	掘立柱建物 6	輪 羽 1	62.60	41.20	29.65	(22.00)	49.20	鈍橙色(7.5YR7/3)	中世	小片 P 7出土
C 2		土錘	11.90	13.15	-	5.25	1.70	鈍黄橙色(10YR7/2)		小片 P 17出土
C 3		土錘	40.35	10.55	-	3.50	4.50	鈍橙色(5YR6/4)		一部欠損 P 17出土
C 4		土錘	46.15	14.55	-	9.25	6.80	鈍褐色(7.5YR6/3)		一部欠損 P 22出土
C 5	掘立柱建物 8	土錘	48.15	16.85	-	4.55	13.10	鈍黄橙色(10YR7/2)	中世	完形 P 12出土
C 6		土錘	47.80	18.65	-	3.00	14.10	灰黄褐色(10YR6/2)		完形 P 12出土
C 7		土錘	49.30	16.90	-	4.25	12.40	鈍黄橙色(10YR7/3)		完形 P 12出土
C 8		土錘	49.80	17.85	-	3.85	15.20	鈍黄橙色(10YR7/3)		完形 P 12出土
C 9		土錘	51.20	15.25	-	4.10	10.70	鈍黄橙色(10YR7/3)		完形 P 12出土
C 10		土錘	51.20	17.15	-	4.00	13.40	鈍黄橙色(10YR7/3)		完形 P 12出土
C 11		土錘	52.60	17.00	-	4.15	13.50	灰黄褐色(10YR6/2)		完形 P 12出土
C 12		土錘	57.00	7.20	-	4.30	14.30	灰黄褐色(10YR6/2)		完形 P 12出土
C 13	土墳墓 1	土錘	31.25	15.15	-	3.15	6.70	灰黄褐色(10YR6/2)	半欠	
C 14	土墳 9	土錘	39.95	13.30	-	3.80	7.20	鈍橙色(7.5YR6/4)	完形	
C 15		土錘	30.50	14.40	-	4.20	6.30	灰白色(2.5Y8/2)	半欠	
C 16	溝 1	土錘	55.75	11.50	-	4.25	6.10	灰白色(10YR8/2)	完形	
C 17	P 17	土錘	34.00	14.90	-	2.70	7.70	鈍黄橙色(10YR7/2)	完形	
C 18	P 8	土錘	51.70	12.20	-	3.40	7.70	灰白色(2.5Y8/1)	復元完形	
C 19	P 16	土錘	57.00	13.70	-	3.80	10.20	灰白色(2.5Y8/2)	完形	
C 20	P 7	土錘	53.60	20.35	-	6.00	18.60	鈍黄橙色(10YR7/3)	完形	
C 21	P 12	土錘	33.80	16.00	-	4.50	7.30	灰白色(10YR8/2)	半欠	
C 22	P 21	土錘	39.00	13.70	-	4.75	5.30	灰白色(10YR8/2)	半欠	

石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S 1	掘立柱建物 6	温石	(62.50)	73.00	14.00	91.70	滑石	中世	P 31出土

金属器一覧表

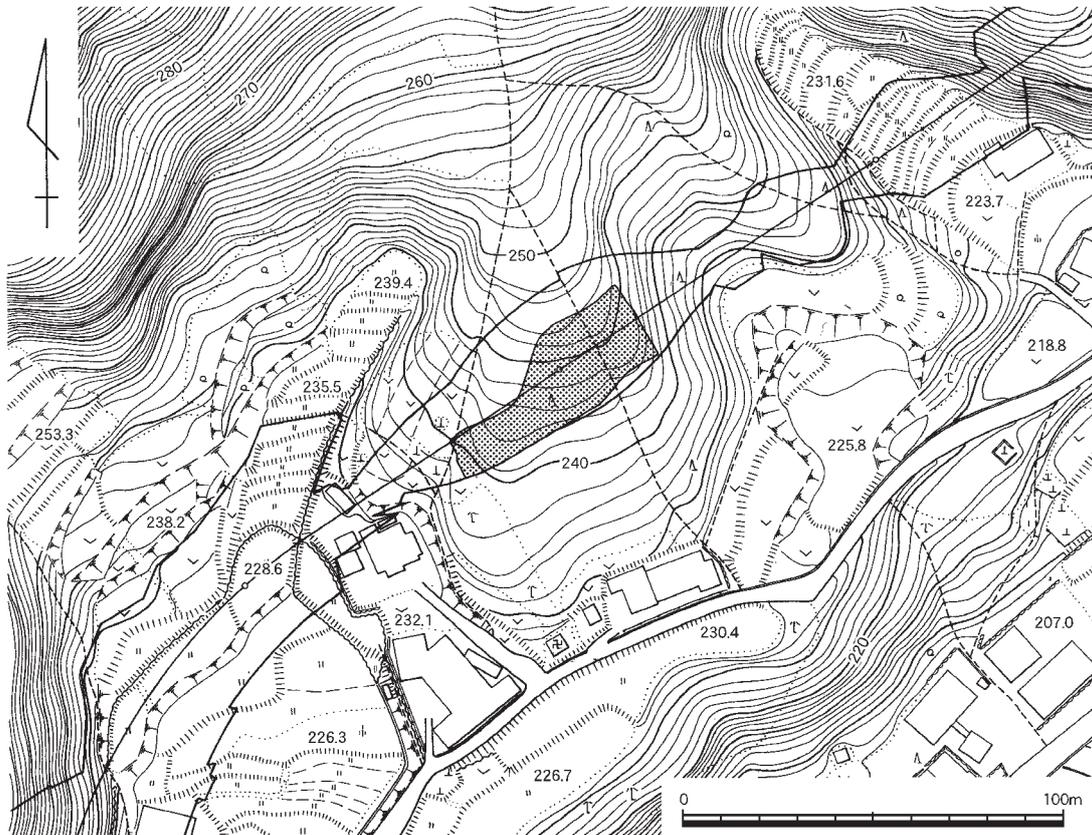
掲載番号	掲載遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M 1	掘立柱建物 2	門環状鉄器	51.85	12.15	13.00	31.35	鉄	中世	P 4出土
M 2		刀子	138.30	20.65	7.10	37.51			P 16出土
M 3	掘立柱建物 4	釘	34.65	6.20	6.50	3.09			P 4出土
M 4	掘立柱建物 6	釘	23.90	8.30	5.10	1.49			P 28出土
M 5		釘	33.10	5.75	5.80	2.37			P 29出土
M 6		釘	79.30	7.05	7.90	8.26			P 30出土
M 7		紡錘巾	28.00	45.00	6.00	19.50			P 17出土
M 8	土墳墓 1	刀子	153.00	23.40	4.50	30.41			
M 9	土墳 14	釘	69.10	12.75	11.50	17.18			
M 10	土墳 15	釘	44.35	7.05	9.55	5.20			
M 11	土墳 19	釘	27.25	7.60	6.90	3.92			

第6章 ナル林遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の概要

ナル林遺跡は、平野部との比高約40mを測る、南向きのなだらかな丘陵上に位置する。平成5年度の分布調査では、この一帯は地表観察が不可能な山林であったため、未踏査のままとなっていた。

平成9年6月上旬、湖岸道路の建設工事中に、オープンカットされた南側法面で3基の土壇（袋状土壇1～3）が発見され、遺跡の存在が明らかとなった。このため、6月6日午後、県文化課に急遽連絡する一方、苫田ダム工事事務所に通報し、未掘削部分の保全を求めた。6月9日午後、遺跡の取り扱いについて、県文化課・苫田ダム工事事務所・県文化財センターの三者で現地協議を行った。その結果、文化財保護法57条の6の規定に基づき、工事未着手部分の発掘調査を実施し、記録保存とすることが決定した。工事計画上、発掘調査の早期着手が望まれたことから、発掘対象範囲を確定するため、翌日から草木の伐採作業に着手した。6月12・13日に、重機による表土の除去を慎重に行い、およそ1,100㎡の調査範囲を確定した。当時、発掘担当班は岡遺跡を調査中で、その終了を待って峪畑遺跡と平行して発掘を実施することとなった。6月下旬に発掘資材の搬入・作業拠点の設営に取りかかり、7月上旬から本格的な遺構検出作業に着手、8月下旬に全ての作業を完了した。



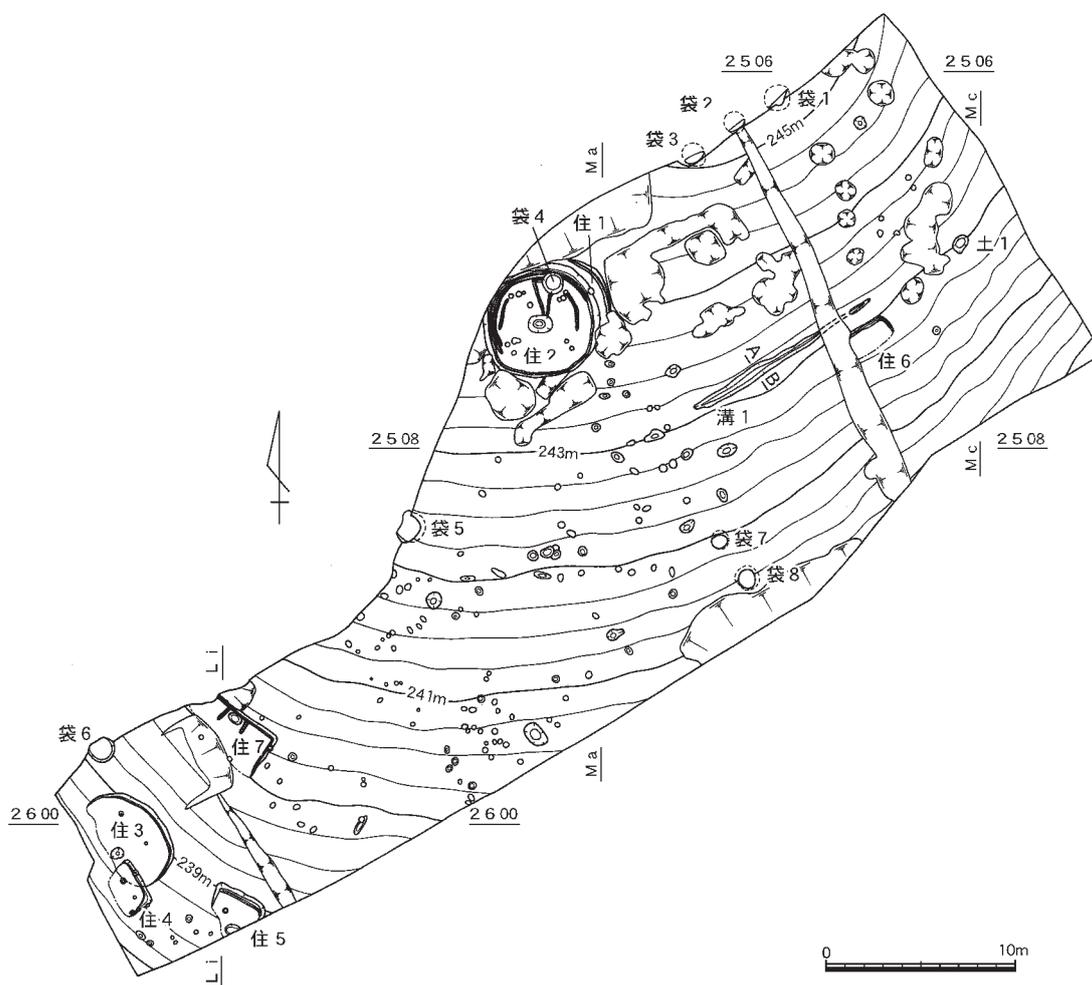
第1図 調査位置図 (1/2,000)



写真1 遺跡発見時の状況（西から）



写真2 発掘調査風景（南西から）



第2図 遺構全体図（1/400）

調査区内は一部近現代の攪乱を受けていたが、黒ボクの二次堆積した旧表土が部分的に遺存し、おおむね旧地形が保たれていた。遺構検出は第三紀層の地山上面で行い、弥生時代後期の竪穴住居6軒・袋状土壇8基・土壇1基・溝1条、古墳時代前期の竪穴住居1軒を検出した。柱穴も多数検出したが、多くは樹根と区別し難いものであった。また、当該期の遺物が整理箱15箱出土した。本報告では、遺構は柱穴を除きすべて掲載し、遺物も図化できたものはほぼすべて掲載している。（岡田・佐藤）

第2節 弥生時代の遺構と遺物

1 竪穴住居

竪穴住居1 (第2～4図、図版23)

調査区北西で検出された円形の住居である。その大部分を竪穴住居2によって削平され、壁体溝と床面の一部が遺存する。残存部分から復元推定すると、直径約7m前後のやや大形の住居と考えられる。柱穴はP1のみ検出されたが、本来この住居に伴うものかどうかは不明である。出土遺物は、床面から壁体溝上面にかけて出土した1の高杯がある。杯部を下にして伏せ置かれたものが潰れた状態で検出され、ほぼ完形に復元される。これより、遺構の時期は後期中葉に比定される。(岡田)

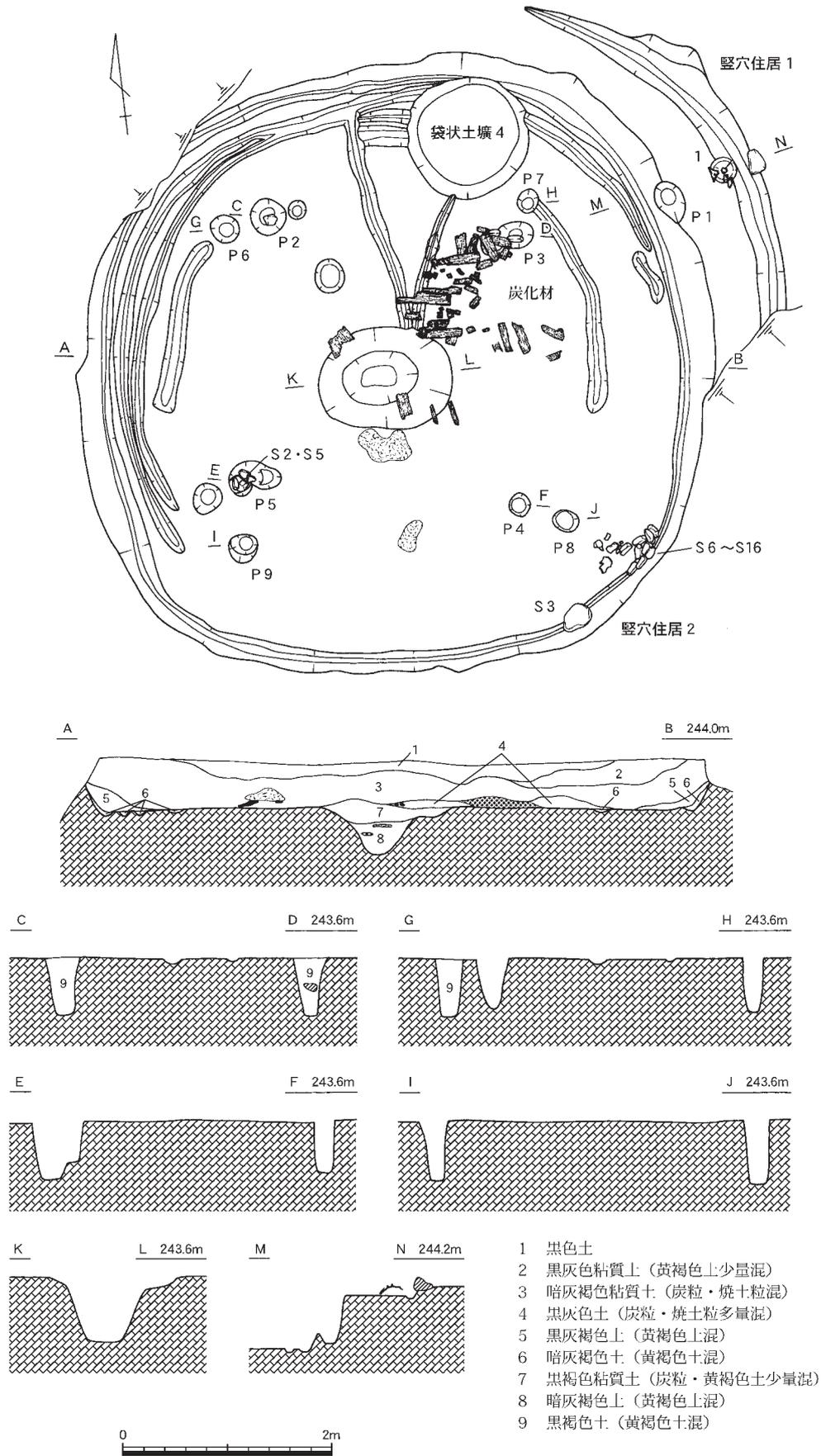
竪穴住居2 (第2～4図、図版23)

調査区北西の、緩やかな斜面がやや平坦になる位置で検出された。ほぼ全容が検出された円形の住居で、直径約6mを測る。竪穴住居1・袋状土壇4と重複し、両者を大きく削平している。床面は地山を成形しており、検出面からの深さ40cmを測る。地山が風化礫を多く含むため、床面は凹凸に富み部分的に貼り床が認められる。主柱穴は4本で、P2～P5・P6～P9の2組を検出した。また、床面の壁体溝痕跡から、少なくとも3回以上の拡張が認められ、当初は直径4m前後であったと考えられる。中央穴は長径1.25mを測り、北部分から壁体溝に向けて2条の溝が延びている。中央穴に被熱痕はないが、床面で2か所の焼上面を検出した。住居北東部の床面で炭化した建築材が出土しており、最終的には小規模な火災によって廃絶したと考えられる。この炭化材の一部について、樹種鑑定と¹⁴C年代測定を実施し、樹種はタブノキ、年代値はA.D. 80±80年との成果が得られた。

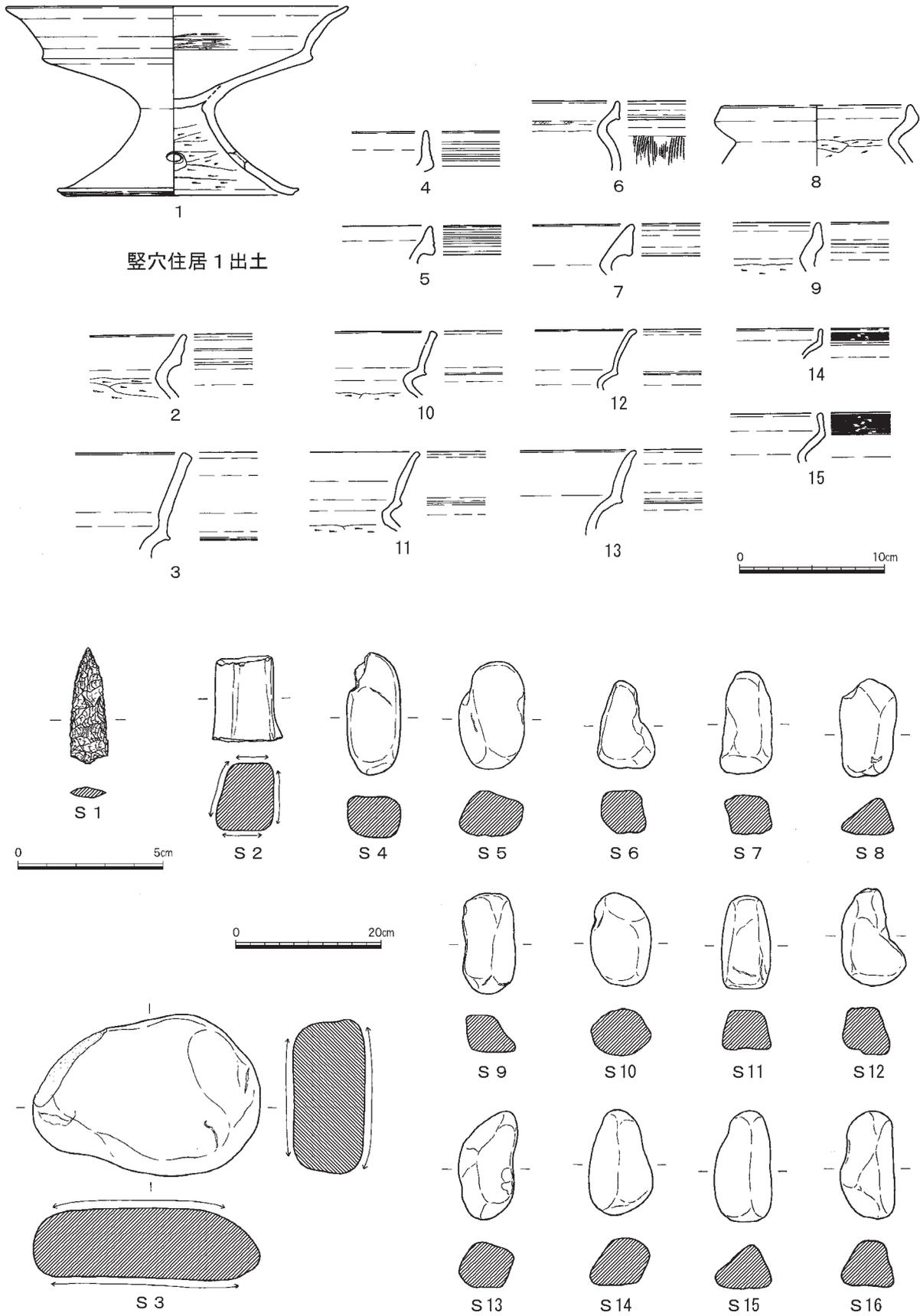
遺物は、土器・石器のほか、混入とみられる縄文時代の石鏃S1が出土している。出土土器は細片がほとんどで、図化できたものの多くは山陰地方の影響を受けた口縁部形態をもつ。中には古式土師器と思える形状を示すものもあるが、時期的には弥生後期末葉に比定できよう。14・15は吉備型甕の口縁部で、県南部からの搬入品と考えられる。S1はサヌカイト製の凸基式石鏃である。完形で、時期的には縄文時代早～前期に比定できる。S2は流紋岩製の砥石で、4面共に平滑な使用痕跡が認められる。S3は作業台で、住居南東部の壁体溝付近で出土した。石材は花崗岩と考えられる。S4～S16は加工礫で、このうち11個が住居北東隅の床面でまとまって出土した。いずれも部分的に平滑面があり、断面形は三角形あるいは四角形を呈する。具体的な用途は分からないが、何らかの研磨作業に用いられた可能性が高い。また、比較的大きさが揃うことから、石錘の可能性も考えられる。以上の出土遺物から、遺構の廃絶時期は後期末葉に比定される。(岡田)

竪穴住居3 (第2・5・6図、図版24)

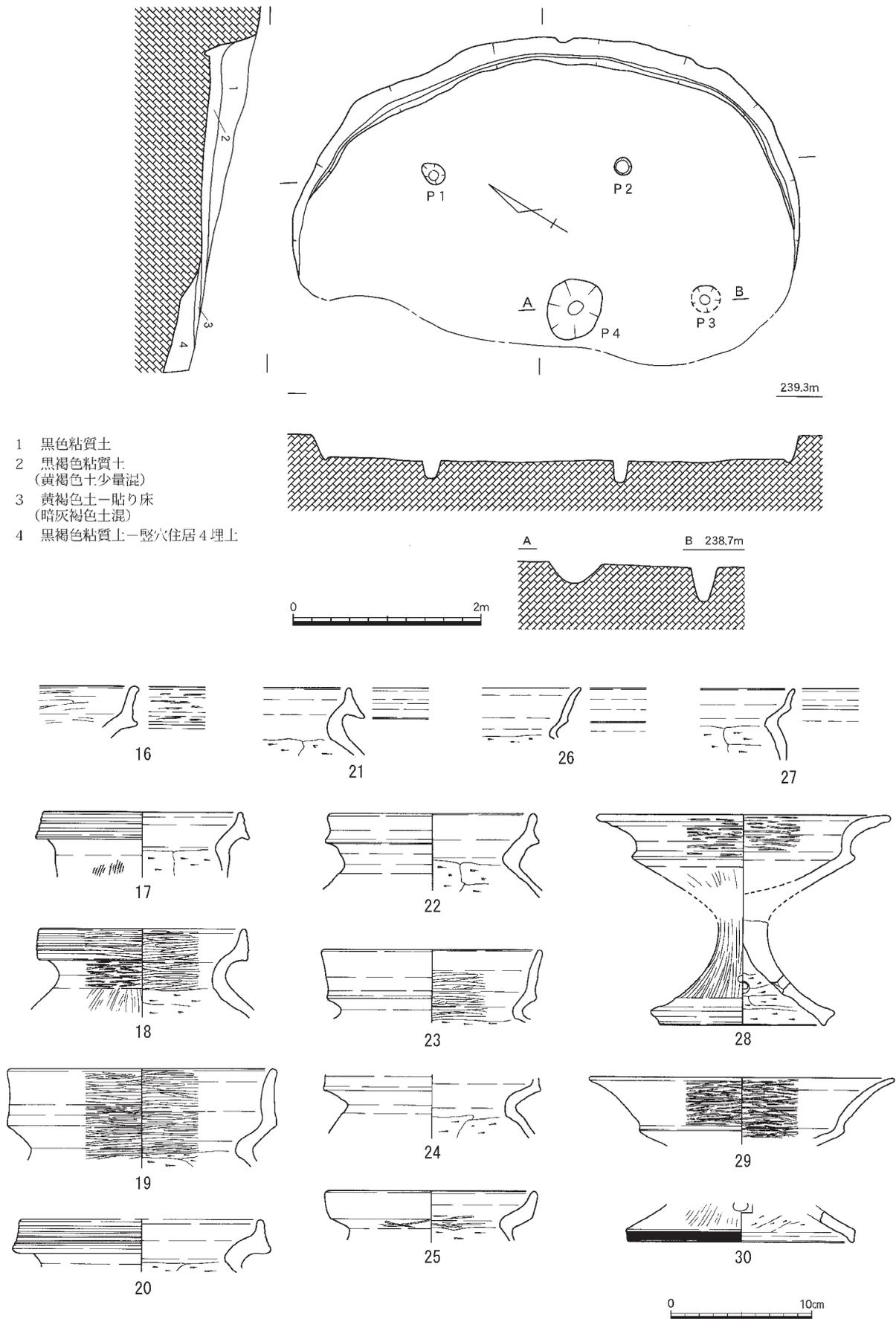
調査区南西端に位置する。上位半分が遺存し下半部を流失するが、本来の規模は直径5.5m前後の円形を呈すと考えられる。下半部は竪穴住居4と重複し、その埋土上面に貼り床して床面を構築している。P1～P3が主柱穴と考えられ、その配置から6本柱構造だったと思われる。中央穴は、直径約60cmの円形で、深さ20cmを測る。被熱の痕跡は、中央穴・住居床面ともに認められなかった。住居埋土中から比較的多くの遺物が出土しているが、多くは細片で住居廃絶後に流れ込んだものと思われる。時期的には後期前葉～後葉までであるが、量的には後期後葉のものが多い。S17は叩き石で、扁平



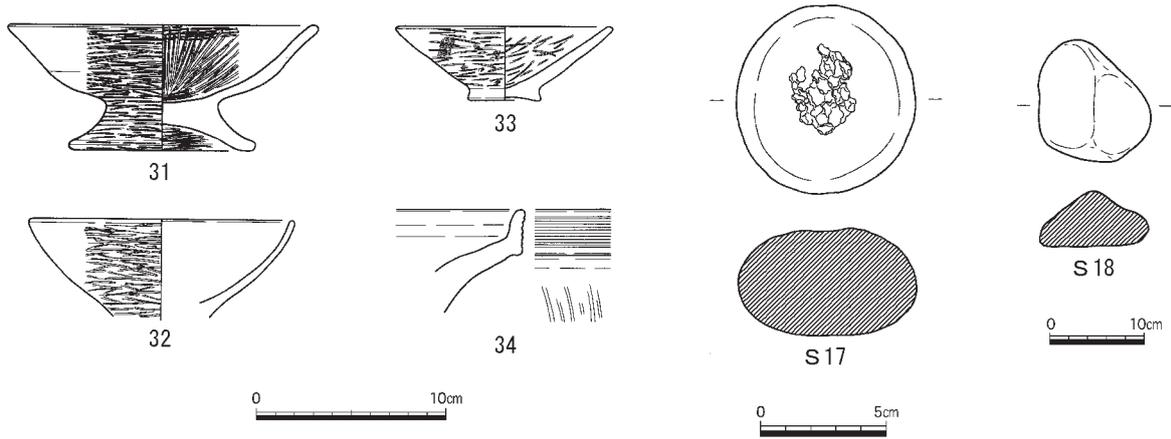
第3図 竪穴住居 1・2 (1/60)



第4図 竪穴住居1・2出土遺物 (1/4, 1/2, 1/8)



第5図 堅穴住居3 (1/60)・出土遺物① (1/4)

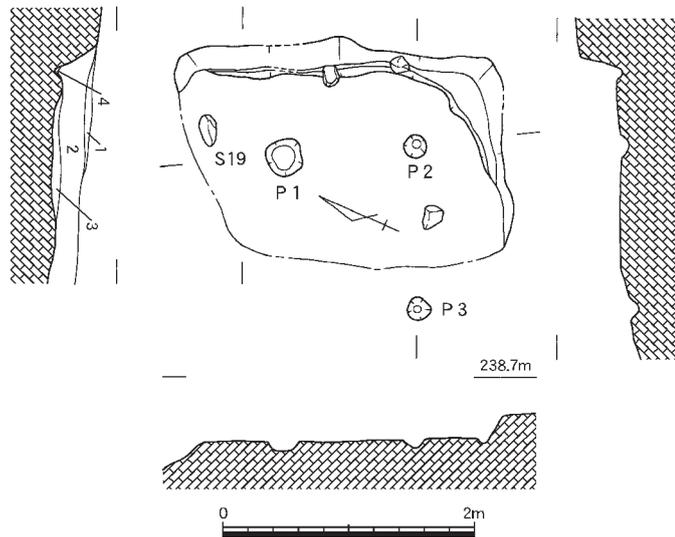


第6図 竪穴住居3出土遺物② (1/4, 1/3, 1/8)

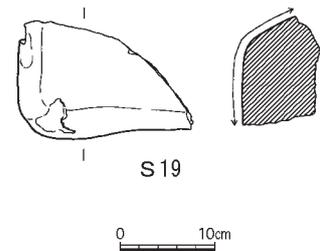
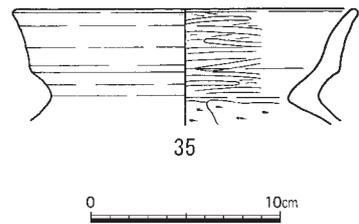
な円礫の中央に敲打痕が認められる。
S18は竪穴住居2でまとまって出土した加工礫と同じ特徴をもつ。これらの遺物や、竪穴住居4の上面に構築されていることから、遺構の時期は後期後葉～末葉と考えられる。(佐藤)

竪穴住居4 (第2・7図)

調査区南西端に位置する。上位半分が遺存し、下半部を流失する。本来の形態は1辺2.5m前後の方形と考えられる。上方の壁体沿いにのみ浅い壁体溝が巡り、床面は凹凸が激しく、部分的に貼り床が認められる。柱穴はP1～P3を検出したが、いずれも小規模で浅く、上屋を支える柱穴ではないと思われる。また、中央穴や焼土面も認められず、通常の竪穴住居とは機能を異にするようである。出土遺物は少なく、図化できたのは甕35と作業台S19のみである。これらから、遺構の時期は後期後葉と考えられる。(佐藤)



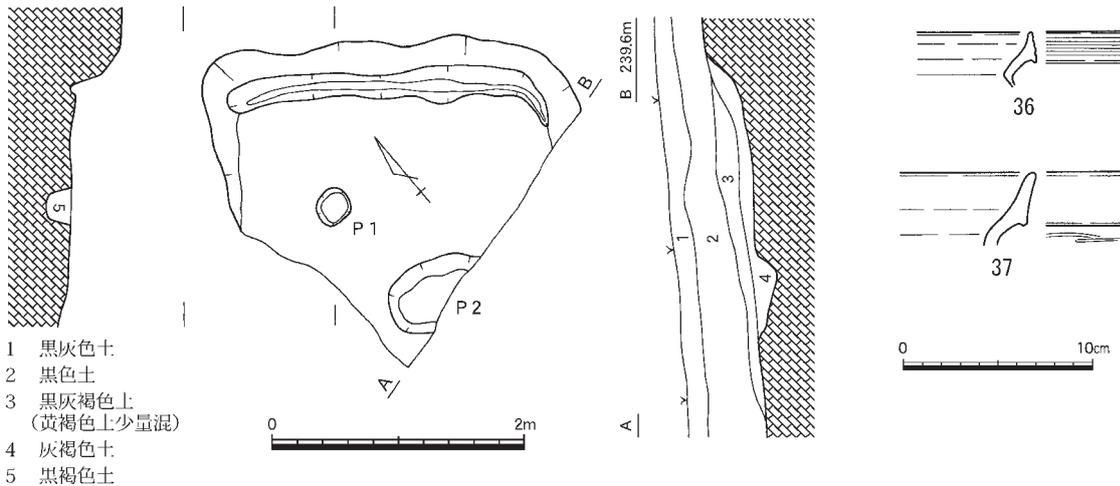
- 1 黄褐色上—竪穴住居3貼り床 (暗灰褐色土混)
- 2 黒褐色粘質土 (炭粒少量含)
- 3 黄灰褐色粘質土—貼り床
- 4 黒褐色粘質土 (黄褐色土混)



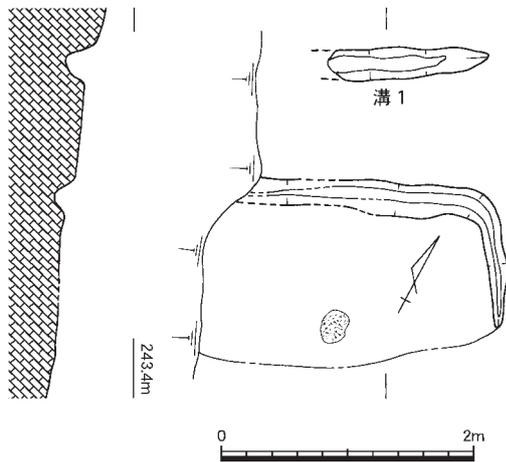
第7図 竪穴住居4 (1/60) ・出土遺物 (1/4, 1/8)

竪穴住居5 (第2・8図)

調査区南西端に位置する。上位半分が遺存し、下半部を流失する。本来の形態は1辺2.5m前後の方形と考えられる。上方の壁体沿いにのみ浅い壁体溝が巡り、床面は凹凸が激しく、部分的に貼り床が認められる。柱穴はP1・P2を検出したが、いずれも小規模で浅く、上屋を支える柱穴ではないと思



第8図 竪穴住居5 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第9図 竪穴住居6 (1/60)

われる。形態的には竪穴住居4と類似しており、同様の機能が想定される。

出土遺物は少なく、図化できたのは甕36・37のみである。これらの遺物や、竪穴住居4との類似から、遺構の時期は後期後葉と考えられる。(佐藤)

竪穴住居6 (第2・9図)

調査区中央やや西よりに位置する。上位半分が遺存するが、下半部を流失し、西半を削平される。本来の形態は小規模な方形と考えられ、壁体に沿って浅い壁体溝が巡る。床面は平坦で、中央に直径20cmほどの焼土面がある。また、中央穴・柱穴は認められない。形態的には竪穴住居4・5と類似しており、

同様の機能が想定される。上方1mに住居壁体と平行して溝1があり、関連があると思われる。

出土遺物はないが、竪穴住居4・5との類似から、遺構の時期は後期後葉の可能性が高い。(佐藤)

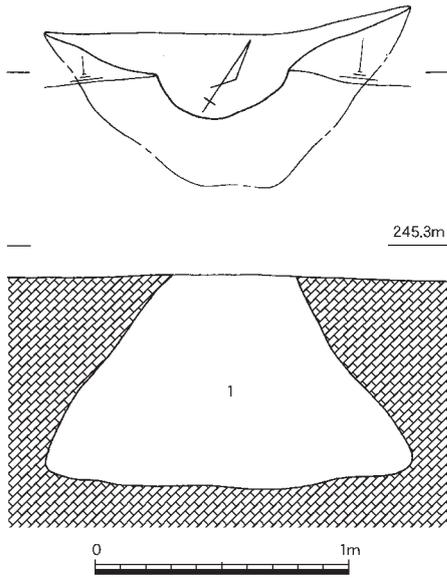
2 袋状土壌

袋状土壌1～3 (第2・10～12図、図版24)

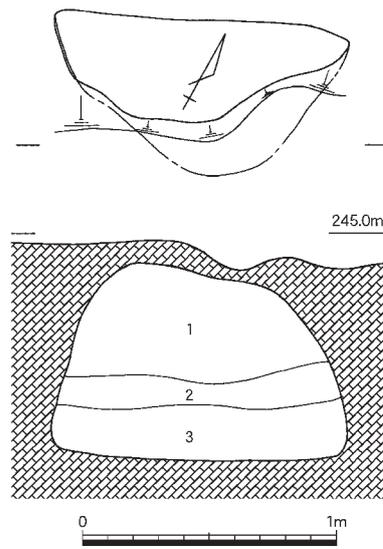
遺跡発見の契機となった遺構で、北半を工事により削平されている。調査区北端に位置し、3基が等高線に沿って約2m間隔で並んで検出された。いずれもほぼ同規模・同形態で、断面形は典型的なフラスコ形を呈する。底面の平面形は、復元値で直径1.2～1.5mの不整形円形を呈し、検出面からの深さ約80cmを測る。3基とも出土遺物は皆無で時期の決め手に欠けるが、周辺遺構の状況から後期中葉の可能性が高い。(佐藤)

袋状土壌4 (第2・3・13図)

調査区中央北よりに位置し、竪穴住居2と重複する。上面を大きく削平され、検出面から底面まで15cmほどが遺存する。底面は平坦で、平面形は直径約1.2mの円形を呈する。底面中央やや北よりで、

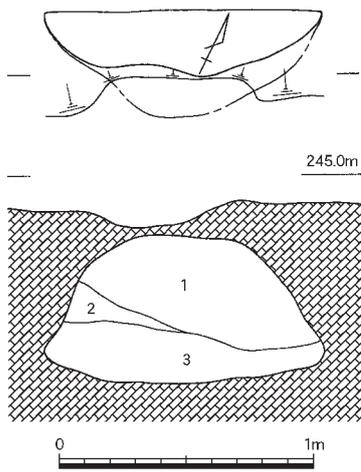


第10図 袋状土坑 1 (1/30)



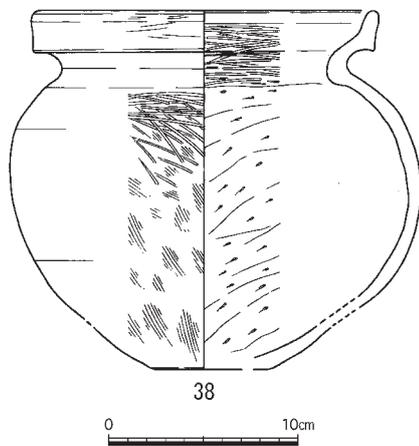
第12図 袋状土坑 3 (1/30)

- 1 黒色土
- 2 黒色土
(黄褐色土混)
- 3 黒褐色土
(黄褐色土混)

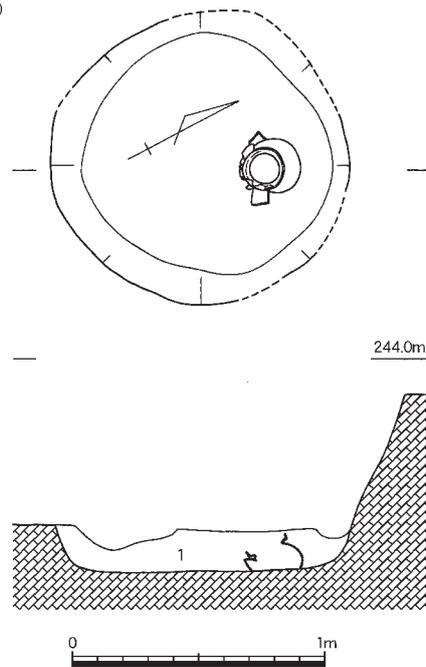


第11図 袋状土坑 2 (1/30)

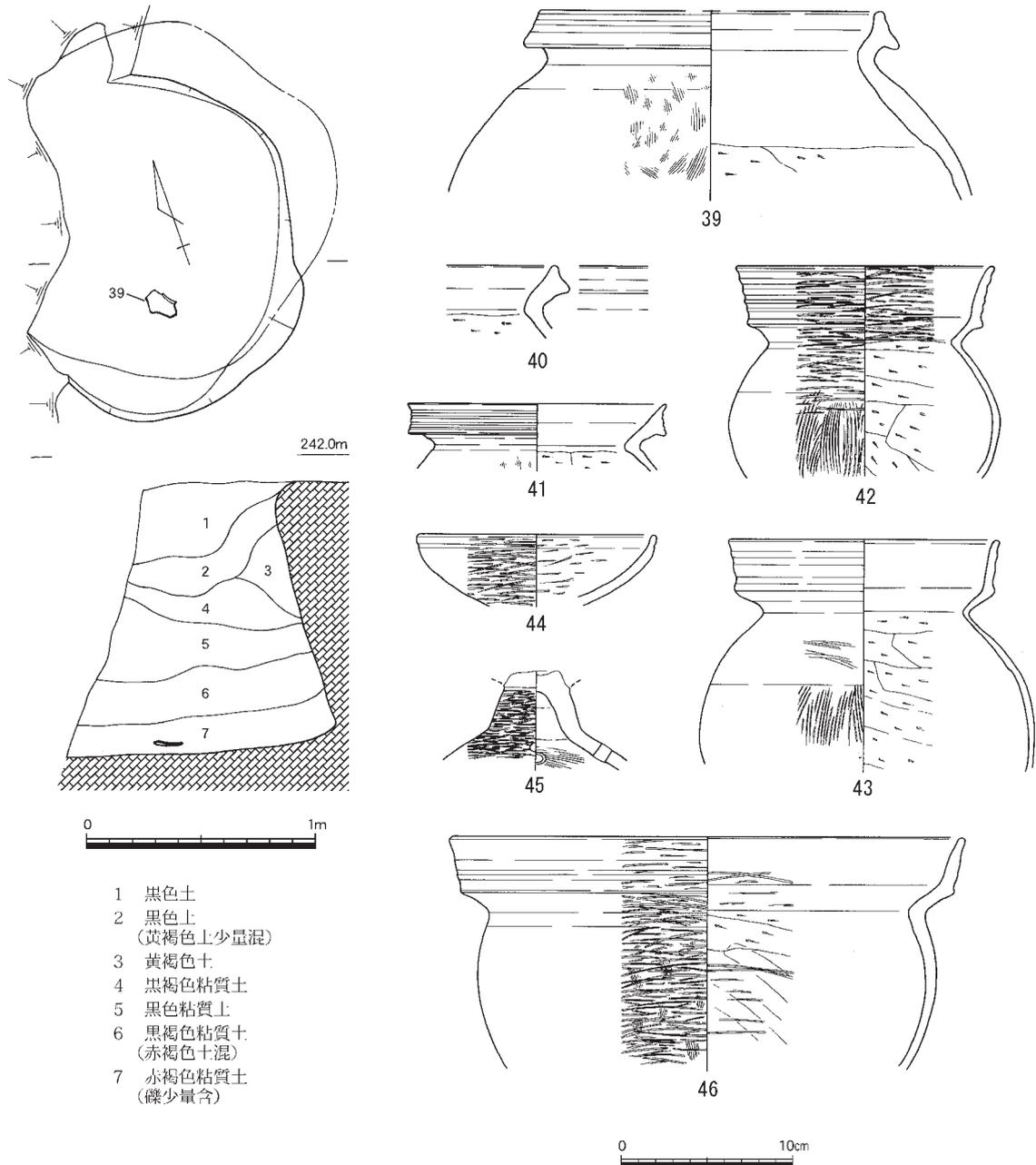
- 1 黒色土
- 2 黒色土
(黄褐色土混)
- 3 黒褐色土
(黄褐色土混)



第13図 袋状土坑 4 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)



- 1 黒褐色土
(黄褐色土混)



第14図 袋状土坑5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

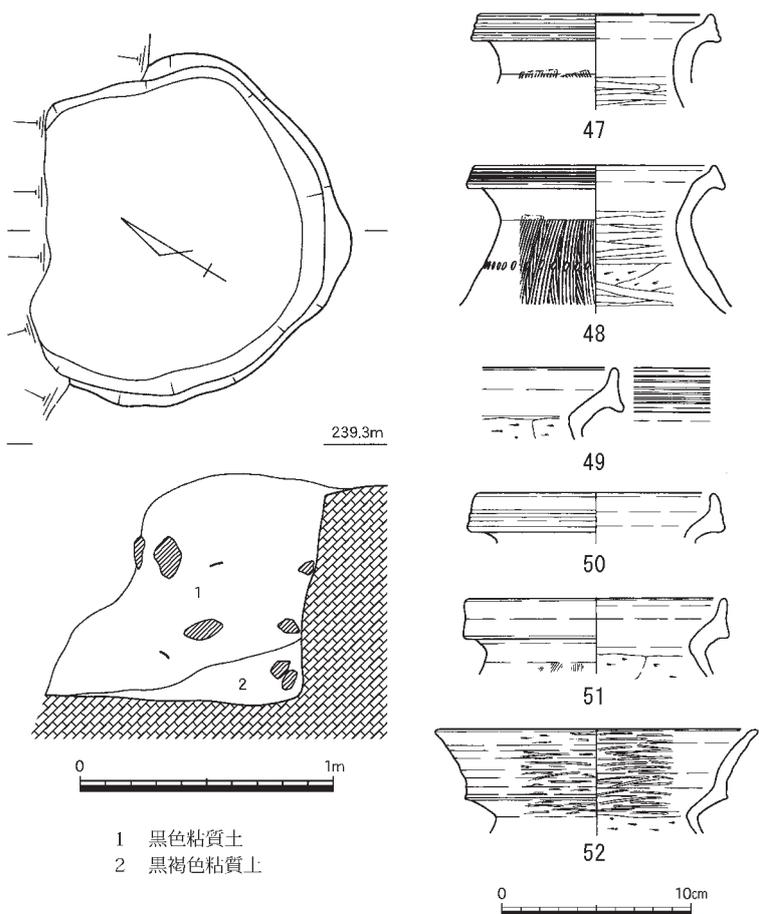
甕38が土圧で押し潰されたような状況で出土している。ほぼ完形に復元でき、貯蔵容器として土坑内に置かれていたものと思われる。これより、遺構の時期は後期中葉と考えられる。(佐藤)

袋状土坑5 (第2・14図、図版25)

調査区中央西よりに位置する大形袋状土坑で、西半を工事により削平される。上面・底面ともに平面形はややいびつな円形を呈し、上面で直径約1.4m、底面で直径1.6mを測る。底面は平坦で、検出面から底面まで深さ1.2mを測る。壁面は直線的に立ち上がり、土坑断面は台形を呈する。埋土は7層に分層でき、土質・色調・堆積状況の観察から、7層は使用時、1～6層は廃棄後の堆積土と判断した。遺物は比較的多く出土している。このうち、39・40は7層から出土した後期前葉のもので、混入と考えられる。遺構の使用・廃絶時期を示すのは41～46で、後期後葉に位置付けられる。(佐藤)

袋状土壇 6 (第2・15図、図版25)

調査区南西に位置する大形袋状土壇で、北側を工事により一部削平される。上面・底面ともに平面形はややいびつな円形で、上面で直径約1.4m、底面で直径約1.2mを測る。底面は平坦で、検出面から底面まで深さ90cmを測る。壁面は、上方に向かってやや広がりながら直線的に立ち上がる。埋土は2層に分かれ、掘削からさほど時間をおかずに埋没したようである。埋土中には、比較的多くの土器細片のほか、10~20cm大の円礫が十数個体認められた。出土土器は、時期的には後期中葉(47~51)と、後期後葉(52)のものがある。このため、遺構の時期決定は難しいが、先述の埋土堆積状況を勘案すると後期中葉の可能性がより高いと思われる。(佐藤)



第15図 袋状土壇 6 (1/30)・出土遺物 (1/4)

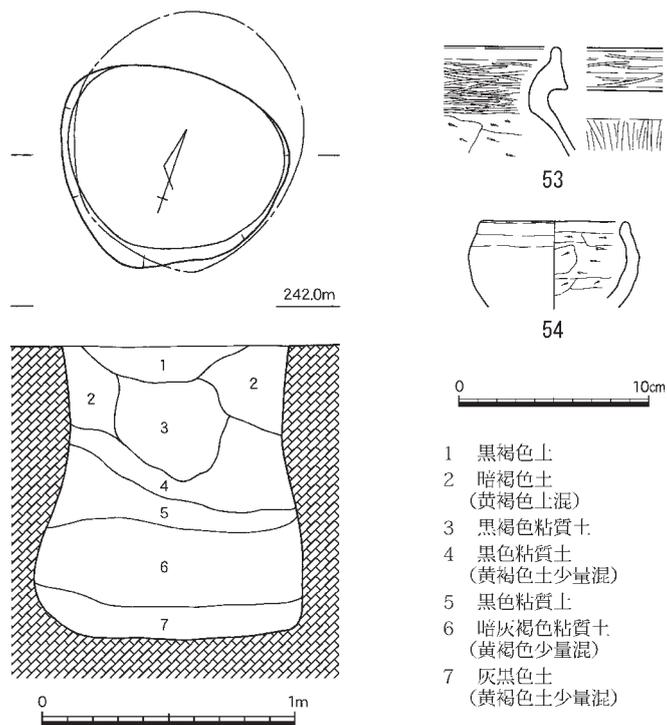
袋状土壇 7 (第2・16図)

竪穴住居2の南東方約12mで検出された。上面の平面形は不整な円形であるが、底面はほぼ円形である。深さは約1.2mを測り、今回検出された袋状土壇の中でも比較的深い方である。

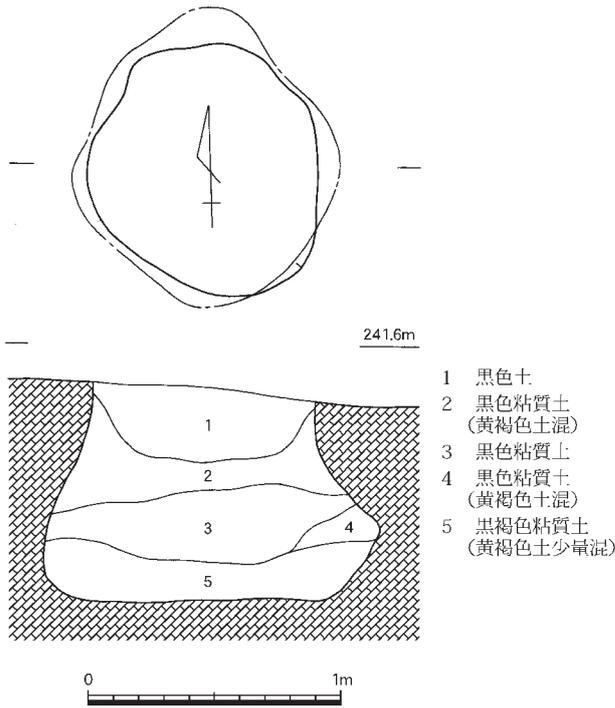
出土遺物には、少量の弥生土器片がみられ、弥生時代後期中葉に比定される。53は甕、54は小形の鉢形土器である。(岡田)

袋状土壇 8 (第2・17図、図版25)

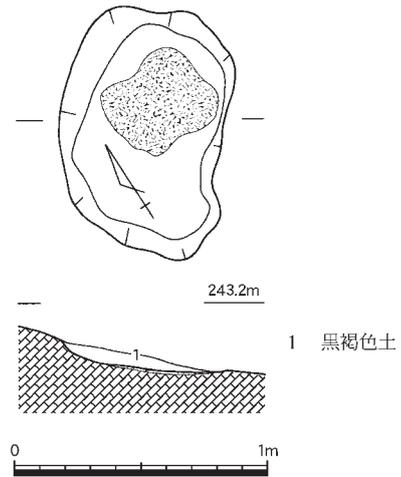
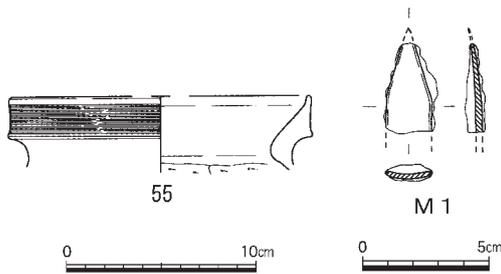
袋状土壇7の南東下方で近接して検出された。平面形、底面ともにいびつな長円形を呈している。埋積土の特徴は袋状土壇7と同じであるが、深さは90cmほどである。



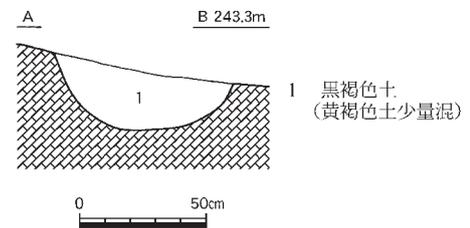
第16図 袋状土壇 7 (1/30)・出土遺物 (1/4)



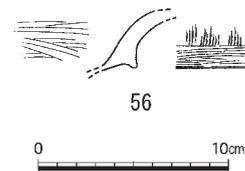
第17図 袋状土壌 8 (1/30)・出土遺物 (1/4, 1/3)



第18図 土壌 1 (1/30)



第19図 溝 1 (1/30)・出土遺物 (1/4)



出土遺物には、少量の弥生土器片のほかにM 1の鉄器がある。反りを持つ特徴的な形状から鉋と推察される。时期的には、弥生時代後期中葉に比定される。(岡田)

3 土壌

土壌 1 (第2・18図)

調査区東端に位置する。平面はいびつな長楕円形で、長径1m・短径70cmを測る。掘方はごく浅く、検出面からの深さ5cmほどである。底面は比較的平坦で、中央に直径40cmのやや強い被熱面が認められた。出土遺物は皆無で時期ははっきりしないが、埋土から当該期の遺構と判断した。(佐藤)

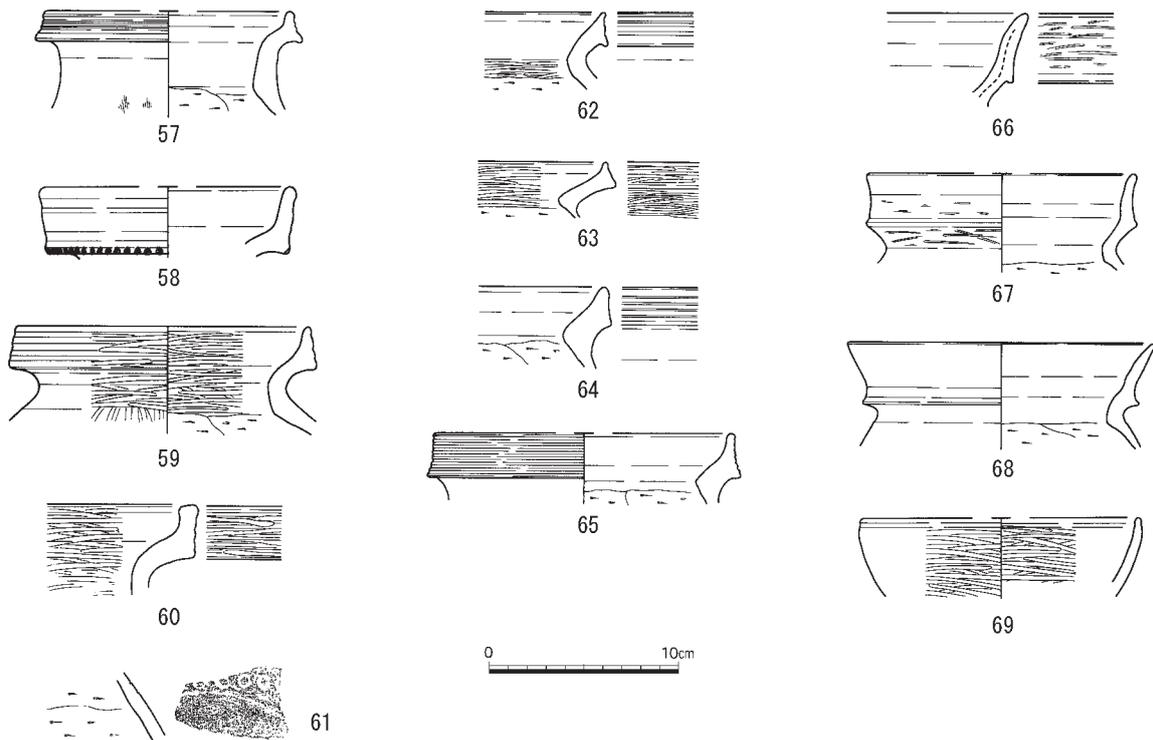
4 溝

溝 1 (第2・19図)

調査区中央に位置する。等高線に平行し、検出面で長さ10.8m・最大幅70cm・深さ20cmを測る。南方1mに位置する竪穴住居6と溝1の東端が揃うことから、両者は一連の遺構と考えられる。出土遺物は少なく、高杯56が唯一図化できた。遺構の時期は、後期後葉と考えられる。(佐藤)

5 遺構に伴わない遺物 (第20図)

調査区内に部分的に遺存する、黒ボク層が二次堆積した旧表土層からは、弥生時代後期の土器片が少量ながら出土している。そのほとんどは細片であったが、わずかに図化できた土器の多くは、山陰地方の影響を受けた口縁部形態をもつ。61は壺の肩部で、竹管による刺突文が巡らされる。このうち、57～65は後期前葉～中葉、66～69は後期後葉～末葉に位置付けられる。(佐藤)



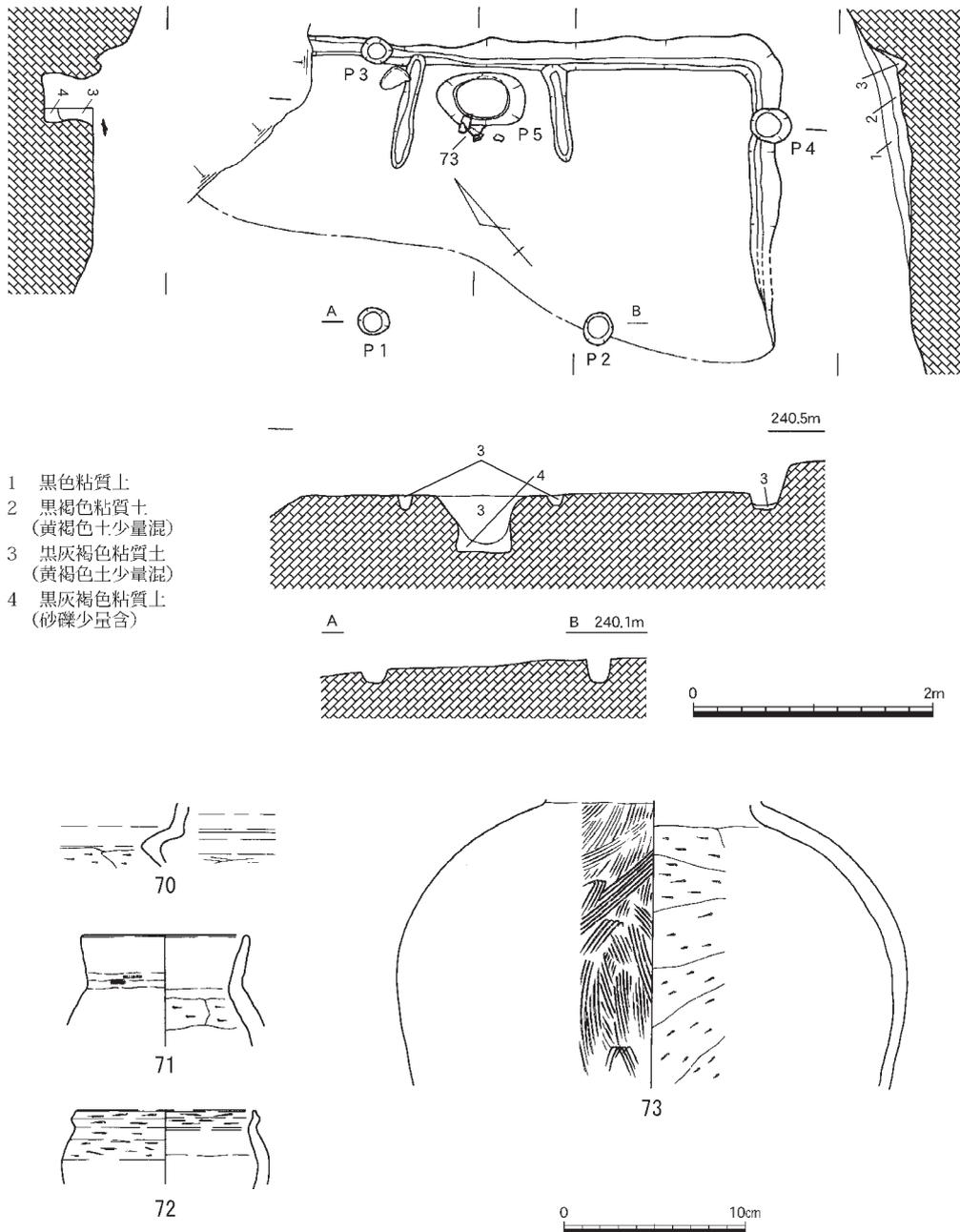
第20図 遺構に伴わない遺物 (1/4)

第3節 古墳時代の遺構と遺物

1 竪穴住居

竪穴住居7 (第2・21図、図版24)

調査区南西に位置する。遺構の残りは悪く、床面下半を流失し、西半部は工事により削平される。遺存部分から推定した本来の規模と形態は、一辺約5mの方形プランと考えられる。床面は比較的平坦で、壁体に沿って浅い壁体溝が巡る。主柱穴は住居中央に位置するP1・P2の2本と考えられ、直径12～15cm・深さ10cm・柱間1.9mを測る。特徴的な遺構として、住居北東の壁体に接して、いわゆるポケットと呼ばれる土壇P5と、これを挟んで2条の溝が設けられている。P5は平面楕円形を呈し、床面で長径70cm・短径40cmを測る。底面は平坦で、床面からの深さ50cmを測る。壁面は上方に向かってややすぼまった後、床面近くでラップ状に大きく開く。内面および埋土中を精査したが、被



第21図 竪穴住居7 (1/60)・出土遺物 (1/4)

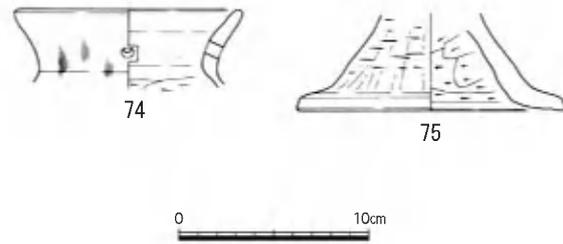
熱の痕跡は認められなかった。また、埋土中の遺物は皆無であったが、床面のレベルで73が出土している。P5を挟む2条の溝は、約1.3mの間隔で平行する。長さ80~90cm・幅15cm・深さ10cmを測り、底面のレベルは壁体溝より高い。溝の断面は逆台形を呈し、ここに板を立てていた可能性も考えられるが、土層断面ではその痕跡は見出せなかった。

遺物は、埋土中から土器細片が少量出土している。わずかに図化できたもののうち、70は二重口縁をもつ甕または壺、71は小形直口壺、72は「く」字状の短い口縁部をもつ鉢である。73は甕で、球形の胴部外面を粗い縦方向のハケメで調整している。これらの出土遺物から、竪穴住居7の時期は古墳時代前期と考えられる。

(佐藤)

2 遺構に伴わない遺物 (第22図)

調査区内に部分的に遺存する旧表土層から、弥生時代後期の土器とともに、古墳時代の土器片がわずかながら出土している。このうち、74は小形直口壺で、頸胴部の境に焼成前の穿孔が認められる。75は高杯の脚部である。いずれも古墳時代前期に位置付けられる。(佐藤)



第22図 遺構に伴わない遺物 (1/4)

第4節 小結

調査の結果、ナル林遺跡は弥生時代後期～古墳時代前期の集落遺跡であることが明らかとなり、おもに弥生後期前葉～中葉・弥生後期後葉～末葉・古墳前期の3時期の遺構・遺物が確認された。以下、発掘調査の成果と、周辺遺跡との関係についてまとめる。

弥生時代については、後期前葉～中葉に集落の形成が始まり、竪穴住居1軒・袋状土壙6基が営まれる。後期後葉～末葉には竪穴住居5軒・袋状土壙2基が営まれ、集落の最盛期を迎える。おもな遺構のうち、竪穴住居については、通常の円形プラン(竪穴住居1～3)と、一辺2.5m前後の小規模な方形プラン(竪穴住居4～6)の二者がある。このうち、小規模方形プランの竪穴住居については、後期後葉に出現し、支柱穴や焼土面をほとんど伴わないことから、住居以外の工房的な機能をもっていた可能性もある。袋状土壙についても、小形(袋状土壙1～4・7・8)と、大形(袋状土壙5・6)の二者がある。このうち、前者は後期前葉～中葉、後者は後期後葉～末葉の時期を示しており、時期が下るにしたがい土壙規模が大きくなることが指摘できる。また、小形のは近接して複数設けられ、大形のは単独で竪穴住居の近隣に設けられる傾向がうかがえる。遺物については、後期全般の土器が比較的多く出土している。小片がほとんどで、遺構出土品についても混入のため一括資料として扱えないという問題はあるが、型式学的に細分は可能で、未だ確立されていない当該地の土器編年を組み立てるうえで、良好な資料となろう。また、竪穴住居2では、県南部で製作されたと考えられる吉備型甕が出土しており、この時期活発となる地域間交流を裏付ける資料として注目される。

古墳時代前期については、竪穴住居1軒を検出したのみで、集落密度が急激に低くなっている。久田原遺跡を始めとする吉井川左岸平野の諸遺跡でも、弥生後期末葉に発生した吉井川の大洪水により、この時期の遺構・遺物はほとんど確認されておらず、不安定な気候や社会変化を反映していることも考えられる。また、竪穴住居7で確認された、壁体沿いの土壙とこれを挟む2条の溝の組み合わせは、山陰地域の玉作工房址でしばしば認められるものと酷似している。今回の調査では、玉作り関係の遺物は出土していないが、地理的に近い山陰地域との強い結び付きがうかがえる。

なお、ナル林遺跡の遺跡範囲は、今回の調査区からさらに南西方向の緩斜面にかけて広がっているものと考えられる。関係機関による協議の結果、この部分については常時満水域より上位に位置し、開発計画もないため、現状保存することとなったことを明記しておく。最後に、発掘調査の実施に際しては、苫田ダム工事事務所はもとより、工事施工業者には排土の処理や衛生設備の借用など多大な御協力を得た。記して深謝の意を表する次第である。(佐藤・岡田)

竪穴住居一覧表

遺構名	平面形	規模(cm)			長軸の向き N° - E	床面積 (㎡)	海拔高 (m)	支柱	柱間 (cm)	付属施設					時期	備考
		長さ	幅	深さ						高床部	方形土壇	中央穴	焼土面	カマド		
竪穴住居 1	円形	—	—	10	—	—	243.85	—	—	—	—	—	—	—	弥生後期	
竪穴住居 2	円形	590	550	40	N-5-E	26.6	243.34	4	240~306	—	—	○	2	—	弥生後期~ 古墳初頭	建て替え 1 回
竪穴住居 3	円形	524	(314)	60	N-56-E	(13.5)	238.64	3/6	167~200	—	—	○	—	—	弥生後期	
竪穴住居 4	方形	(242)	(165)	30	N-64-E	(3.6)	238.20	3/4	106~115	—	—	—	—	—		
竪穴住居 5	方形	(250)	(225)	36	N-40-E	(3.7)	238.68	—	—	—	—	—	—	—		
竪穴住居 6	方形	(230)	(140)	10	N-26-W	(3.0)	242.80	—	—	—	—	1	—	—		
竪穴住居 7	方形	(468)	(255)	35	N-42-E	(8.3)	239.60	4	190	—	—	—	—	—	古墳前期	壁沿いに土壇

袋状土壇一覧表

遺構名	平面形	断面形	計測値(cm)/面積(㎡)				底面海拔 高(m)	時期	備考
			上面径	底面径	深さ	面積			
袋状土壇 1	不整円形	I a	(52)	(145)	84	(0.61)	244.33	弥生後期	工事掘削により半壊
袋状土壇 2	不整円形	I a	—	(110)	72	(0.33)	244.17		
袋状土壇 3	不整円形	I a	—	(118)	87	(0.51)	224.41		竪穴住居 2 により上面削平
袋状土壇 4	円形	(I a)	(118)	98	18	0.71	243.15		工事掘削により半壊
袋状土壇 5	円形	I a	(143)	(160)	120	(1.60)	241.10		
袋状土壇 6	不整円形	II a	(130)	(118)	90	(1.02)	238.28		
袋状土壇 7	不整円形	II a	89	102	116	0.72	240.67		
袋状土壇 8	不整長円形	I a	108	130	87	0.88	240.58		

土壇一覧表

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔 高(m)	時期	備考
土壇 1	不整楕円形	III a	100	70	5	242.94	弥生後期?	中央部に被熱痕。

土器観察表①

掲載 番号	掲載 遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
1	竪穴住居 2	弥生土器	高杯	23.8	15.5	13.1	橙色(2.5YR6/6)	復元完形	杯部底面は皿盤充填
2		弥生土器	壺				灰黄褐色(10YR5/2)		
3		弥生土器	壺				鈍褐色(7.5YR6/3)		
4		弥生土器	甕				鈍橙色(5YR7/4)		口唇部に浅い凹線 4 条
5		弥生土器	甕				浅黄橙色(7.5YR8/3)		口唇部に凹線 4 条、煤付着
6		弥生土器	甕				鈍橙色(2.5YR6/4)		外面に煤付着
7		弥生土器	甕				橙色(2.5YR6/6)		外面に煤付着
8		弥生土器	甕				明褐灰色(7.5YR7/2)		外面に煤付着
9		弥生土器	甕				黒色(N2/1)		外面に煤付着
10		弥生土器	甕				橙色(5Y7/6)		
11		弥生土器	甕				橙色(2.5YR6/6)		外面に煤付着
12		弥生土器	甕				橙色(5YR6/6)		
13		弥生土器	甕				明赤褐色(5YR5/6)		
14		弥生土器	甕				鈍橙色(7.5YR6/4)		古備型甕
15		弥生土器	甕				鈍橙色(7.5YR7/4)		古備型甕
16	竪穴住居 3	弥生土器	壺				鈍橙色(7.5YR7/4)		
17		弥生土器	壺	13.8			鈍橙色(7.5YR7/4)		口唇部に浅い凹線 3 条
18		弥生土器	壺	14.3			橙色(2.5YR7/7)		口唇部に浅い凹線 4 条

土器観察表②

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
19	竪穴住居 3	弥生土器	壺	18.5			鈍黄橙色(10YR7/2)		
20		弥生土器	甕	(16.9)			浅黄橙色(7.5YR8/3)		口唇部に浅い凹線5条
21		弥生土器	甕				浅黄橙色(7.5YR8/3)		外面に煤付着
22		弥生土器	甕	14.3			鈍橙色(7.5YR7/4)		外面に煤付着
23		弥生土器	甕	15.2			浅黄橙色(7.5YR8/3)		外面に煤付着
24		弥生土器	甕				明赤褐色(2.5YR5.5/8)		外面に煤付着
25		弥生土器	甕	13.5			鈍橙色(7.5YR7/3)		外面に煤付着
26		弥生土器	甕				橙色(5YR5/6)		
27		弥生土器	甕				橙色(5YR7/6)		
28		弥生土器	高杯	20.4	11.5	(15.0)	橙色(5YR7/6)		
29		弥生土器	高杯	21.4			橙色(5YR7/6)		
30		弥生土器	台付鉢		15.7		橙色(7.5YR7/6)		脚端部に櫛描文
31		弥生土器	台付鉢	15.9	9.0	6.8	赤褐色(2.5YR4/8)	復元完形	
32		弥生土器	高杯	13.7			橙色(5YR6/6)		
33	弥生土器	鉢	11.1	3.6	4.0	浅黄橙色(7.5YR8/3)			
34	弥生土器	器台				鈍黄橙色(10YR7/2)		口唇部に櫛描文	
35	竪穴住居 4	弥生土器	甕	17.8			浅黄色(7.5YR8/3)		
36	竪穴住居 5	弥生土器	甕				赤色(10YR5/6)		口唇部に凹線3条、内外面丹塗り
37		弥生土器	甕				明赤褐色(2.5YR5/6)		外面に煤付着
38	袋状土壇 4	弥生土器	甕	17.5		19.1	鈍黄橙色(10YR7/3)	ほぼ完形	
39	袋状土壇 5	弥生土器	甕	(19.6)			橙色(2.5YR6/8)		口唇部に浅い凹線2条
40		弥生土器	甕				鈍橙色(7.5YR7/3)		
41		弥生土器	甕	14.7			鈍橙色(5YR7/3)		口縁部に櫛描文
42		弥生土器	甕	14.7			橙色(2.5YR6/6)		
43		弥生土器	甕	15.4			橙色(2.5YR6/6)		口唇部に浅い凹線2条
44		弥生土器	椀	13.6			橙色(2.5YR7/8)		
45		弥生土器	高杯				褐灰色(10YR6/1)		
46	弥生土器	鉢	29.5			灰白色(7.5YR8/2.5)			
47	袋状土壇 6	弥生土器	壺	12.1			橙色(5YR6/6)		口唇部に凹線3条
48		弥生土器	壺	12.5			橙色(5YR6/6)		頸部に棒状工具による刺突文
49		弥生土器	甕				明褐灰色(7.5YR6.5/2)		口唇部に櫛描文
50		弥生土器	甕	12.3			浅黄色(7.5YR8/6)		口唇部に浅い凹線2条
51		弥生土器	甕	13.4			鈍褐色(7.5YR6/3)		
52		弥生土器	甕	16.7			橙色(2.5YR7/6)		外面に煤付着
53	袋状土壇 7	弥生土器	甕				鈍橙色(5YR7/4)		
54		弥生土器	小型鉢	7.4			灰白色(10YR8/2)		
55	袋状土壇 8	弥生土器	甕	(15.7)			灰黄褐色(10YR6/2)		口唇部に櫛描文
56	溝 1	弥生土器	高杯				橙色(7.5YR7/6)		
57	包含層	弥生土器	壺	(12.7)			鈍橙色(7.5YR7/4)		
58		弥生土器	壺	(13.0)			橙色(2.5YR6/6)		口縁部下端に刺突文
59		弥生土器	壺	14.7			橙色(2.5YR6/6)		
60		弥生土器	壺				浅黄橙色(10YR8/3)		
61		弥生土器	壺				鈍黄褐色(10YR7/2)		肩部に凹形竹管文
62		弥生土器	甕				鈍橙色(5YR7/4)		口唇部に擬凹線
63		弥生土器	甕				橙色(2.5YR6/6)		
64		弥生土器	甕				浅黄橙色(7.5YR8/3)		口唇部に擬凹線
65		弥生土器	甕	(15.5)			浅黄橙色(10YR8/3)		口唇部に櫛描文
66		弥生土器	甕				浅黄橙色(7.5YR8/4)		
67		弥生土器	甕	(13.8)			灰褐色(7.5YR6/2)		
68	弥生土器	甕				橙色(2.5YR7/6)			
69	弥生土器	椀	(14.5)			鈍橙色(5YR6/4)			
70	竪穴住居 7	土師器	甕				鈍橙色(7.5YR7/3)		
71		土師器	直口壺	9.0			橙色(2.5YR6/6)		
72		土師器	鉢	(9.7)			鈍黄橙色(10YR7/2)		
73		土師器	甕				鈍橙色(7.5YR7/4)		
74	包含層	土師器	直口壺	11.6			淡橙色(5YR8/3)		
75		土師器	高杯		13.7		浅黄橙色(7.5YR8/3)		

石製品一覧表

掲載 番号	掲載 遺構名	器種	計測値(mm)			重量 (g)	材質	時期	備考	
			最大長	最大幅	最大厚					
S 1	竪穴住居 1	石鏃	40.5	13.0	4.0	1.8	サヌカイト	縄文	全体あるいは部分的に平滑な面が認められ、何らかの研磨作業に用いられたと想定される。石錘の可能性もある。	
S 2		砥石	119.5	96.5	98.0	1,887.2	流紋岩	弥生後期末 ~古墳初頭		
S 3		作業台	310.5	224.0	105.0	11,000.0	花崗岩			
S 4		加工礫		170.0	73.0	59.0	1,155.6			花崗斑岩
S 5				150.5	90.0	69.5	1,142.2			花崗斑岩
S 6				123.0	79.0	60.0	768.1			花崗斑岩
S 7				143.0	72.0	55.0	858.8			花崗斑岩
S 8				137.5	78.5	52.5	687.4			花崗斑岩
S 9				140.0	72.5	54.0	724.6			花崗斑岩
S 10				129.0	82.5	66.5	915.8			花崗斑岩
S 11				129.5	67.5	57.5	908.9			斑れい岩
S 12				186.5	89.0	69.0	976.0			流紋岩質溶結凝灰岩
S 13				150.5	80.0	64.0	1,000.6			花崗斑岩
S 14			146.5	87.5	67.0	1,221.0	花崗斑岩			
S 15			154.5	79.0	66.5	1,030.1	花崗斑岩			
S 16			150.0	75.0	67.0	963.2	角閃ひん岩			
S 17	竪穴住居 3	叩石	75.5	71.5	43.0	288.0	角閃ひん岩	弥生後期		
S 18		加工礫	130.0	118.0	60.5	1,155.5	花崗斑岩			
S 19	竪穴住居 4	作業台	185.0	125.5	81.0	2,650.0	花崗岩			

金属器一覧表

掲載 番号	掲載 遺構名	種別	計測値(mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M 1	袋状土壙 8	鉋	3.5	1.9	2.0	9.9	鉄	弥生後期	

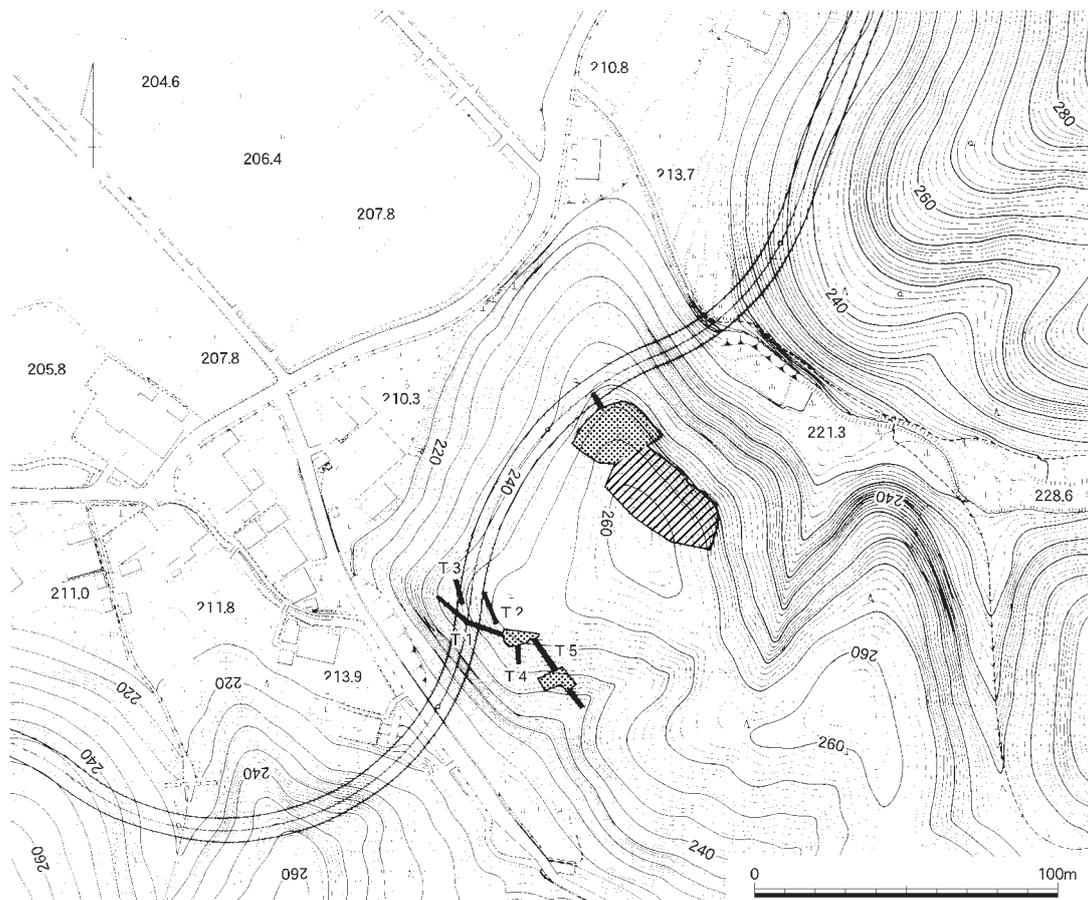
第7章 久田上原城跡

第1節 城郭の立地と調査の概要

城跡は、吉井川が南流する東の丘陵上に位置する。ここは、城跡から1kmほど南下すると夏栗の所で狭くなる地勢を示し、反転した上流側は広がりのある流域を見通すことができるか所にある。

久田上原城跡の調査は、岡遺跡の一次調査に引き続き10月16日～11月14日に当該遺跡の調査を実施した。当初計画の掘削では、郭と腰曲輪が含まれていた。しかしながら、極力掘削の法面を考慮することで、前記の遺構部分と曲輪3に対する影響を最小限にとどめたのである。このことから、切岸・土塁および曲輪3の先端部の面的な調査とトレンチによる調査であり、城跡にはほとんど影響の与えないものであった。しかし、翌年6月の長雨の影響から湖岸道路の法面が崩落したのである。これは、さきに記したように城跡に影響を与えることを極力避けたことによる法面の処理が原因であった。このことから、設計を再検討した結果、城跡の北半を大幅に掘削をせざるを得なくなり、7月から調査に入ったのである。

(下澤)



第1図 調査位置図 (1/2,500)

▨ 平成7年度調査

▨ 平成9年度調査

第2節 城郭を構成する遺構と遺物

1 概要

久田上原城跡は、丘陵上に配された3つの曲輪とそれより低い尾根筋に設けられた切岸・土塁、さらに尾根を断ち切る3条の堀切からなる。標高261mの丘陵頂部に配された曲輪1は南北34.8m、東西19.4mの規模をもち、中央を土壇状に削り残している。それより4mほど低い位置には幅4.8mの曲輪2をめぐらせている。曲輪3は西へ派生した標高250mの尾根上にあり、曲輪1・2とは堀切3によって隔てている。また、南へ続く尾根筋には堀切1・2を掘削して断ち切り、曲輪1・2から北へ下る尾根筋には標高249mの位置に切岸を設けて土塁を構築している。遺物は曲輪1・2を中心に、土師器小皿や青磁碗、白磁皿、備前焼甕、勝間田焼壺、鉄釘などが出土しており、15世紀前半に機能したものと考えられる。(亀山行雄)

2 曲輪

曲輪1 (第2・4図、図版29)

標高261mの丘陵頂部に位置し、この城郭の中心となる曲輪である。南北34.8m、東西19.4mを測る不整な方形を呈し、平坦に整えられた曲輪の中央には、地山を整形してつくり出した南北12.5m、東西8.3m、高さ80cmの平面方形をなす土壇状遺構1を検出した。しかし、土壇上はもちろん曲輪の上面においても、建物の存在をうかがわせるような遺構は今回の調査による限り検出できなかった。

土壇状遺構の東側から斜面にかけて、土師器の小皿1～3、白磁の皿4、備前焼の甕5・6、鉄釘M1が出土している。(亀山)

曲輪2 (第2・4図、図版30)

曲輪1の4mほど下を帯状にめぐる曲輪で、尾根筋にあたる南と北は幅4.8mと広く、斜面にあたる東・西では幅1.3m～80cmと狭くなっている。高さ2mほどの斜面を切り崩して造成しているが、切岸との間に溝などの施設は認められなかった。曲輪2およびその斜面からは、上方から転落したと見られる青磁碗7・8が出土している。(亀山)

曲輪3 (第2・3図、図版28)

曲輪3は、堀切3の西側に認められた。規模は長さ約20m、幅は堀切寄りで4mで先端側で6mほどを測る。曲輪の平面は、比較的平坦な状態を呈していた。調査対象は、先端部のみであり他の部分についての掘り下げは対象外であった。表土直下から拳よりやや大きめの河原石の集積が認められたが、基盤層での掘り込みは認められなかった。内容から、祠が祀られていたと思考される。(下澤)

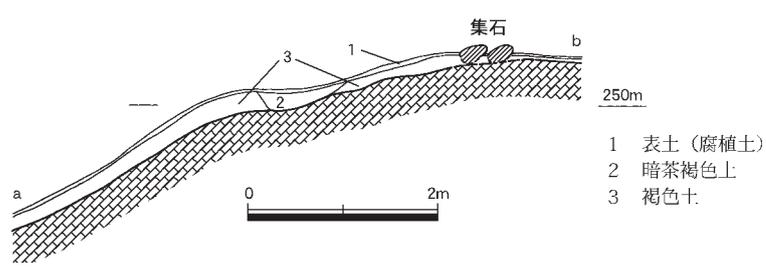
3 土壇状遺構

土壇状遺構1 (第2・4図、図版29)

曲輪1の中央で検出した高さ80cmほどの土壇状をなす高まりで、調査前は瓦質の小祠が祭られていた。曲輪1の造成に際し、地山の岩盤を壇状に削り残すことでつくられており、南北12.5m、東西8.3mの平面方形をなす。土壇上は平坦に整えられているものの礎石や柱穴などは見られず、また遺



第2図 久田上原城跡 全体図 (1/800)



第3図 曲輪3 関連断面図 (1/80)

物も出土していないことから、その性格は明らかではない。

(亀山)

4 堀切

堀切1 (第2図)

城郭を南の尾根から切り離すように北東から南西にかけて掘削された堀切で、全長20m以上、上幅は最大で6.5mを測る。深さは未掘のため明らかではないが、現状では2mほどある。掘削によって出た土砂は城内側に盛り上げられ、上幅2.3m、高さ30cmの土塁状を呈している。

(亀山)

堀切2 (第2図)

堀切1の南東に4～7mの距離を保って掘削された堀切で、全長22.3m、上幅4.9mと堀切1より小規模である。未掘のため深さは明らかではないが、現状では1.5mほどある。

(亀山)

堀切3 (第2図)

曲輪3の立地する尾根を切り離すように、北西から南東にかけて掘削された堀切で、全長27.8m、上幅4.7mを測り、現状の深さは2.1mほどある。南西の肩口には幅1.4mの土塁状の高まりが認められ、掘削に伴う排土を積み上げたものと見られる。また、北東の肩口に接して長さ13.3m、幅1.1m、深さ30cmの溝が走り、結果として城内側も土塁状をなしている。

(亀山)

5 切岸・土塁

切岸・土塁1 (第2・4～6図、図版27)

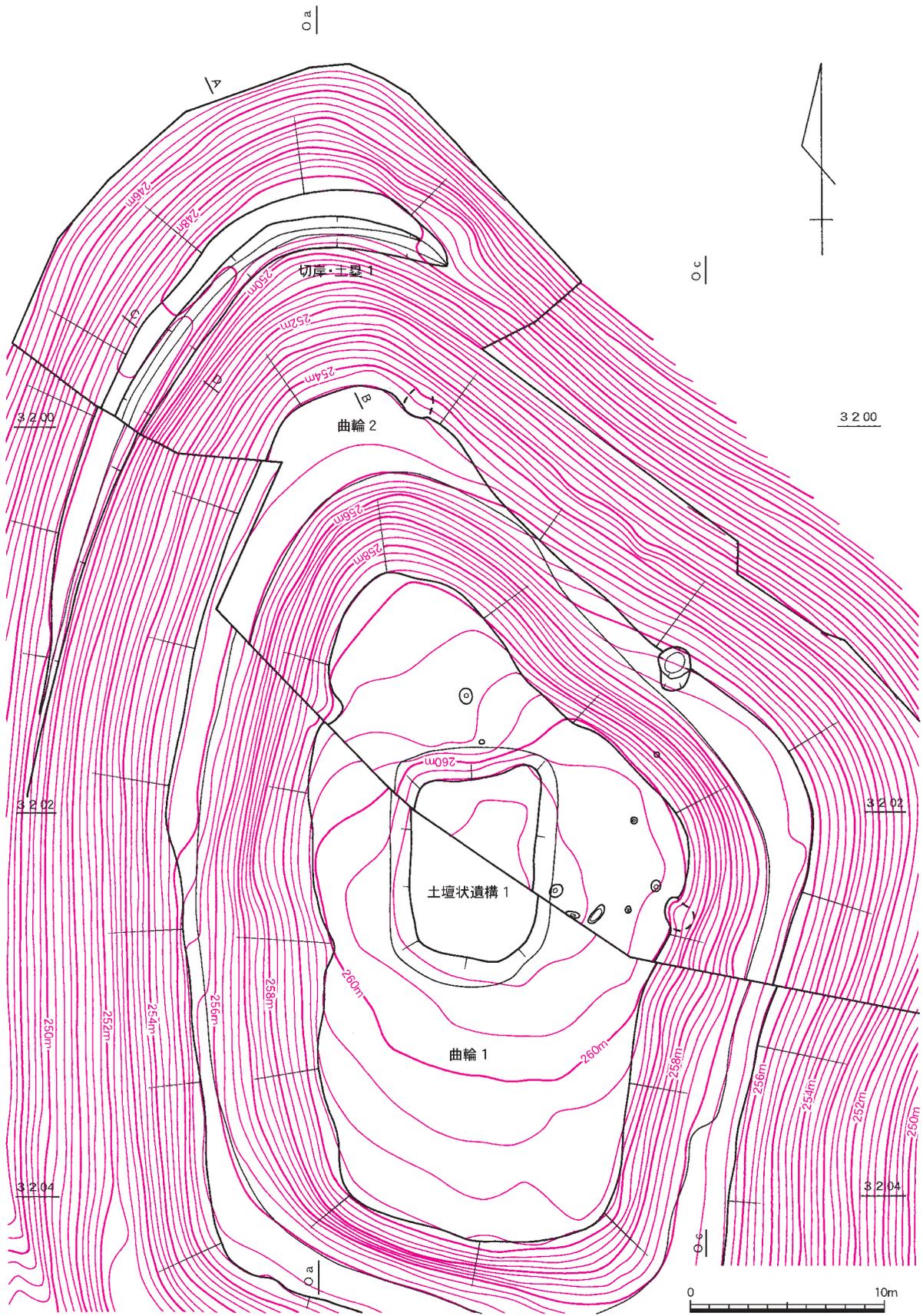
北西部に位置する。調査区では約23mを検出しているが、さらに西側にかけて20m程度伸び、曲輪2の下部を1/4周するものと考えられる。曲輪2との比高差は約6mで、曲輪3の標高に近い。曲輪側の切岸は幅2m前後の溝状を呈し、底面にはつぶて石とみられる10～20cm大の礫多数を検出した。切岸を掘削・整形後、その排土を盛り上げて土塁を構築したものと考えられる。

(高田)

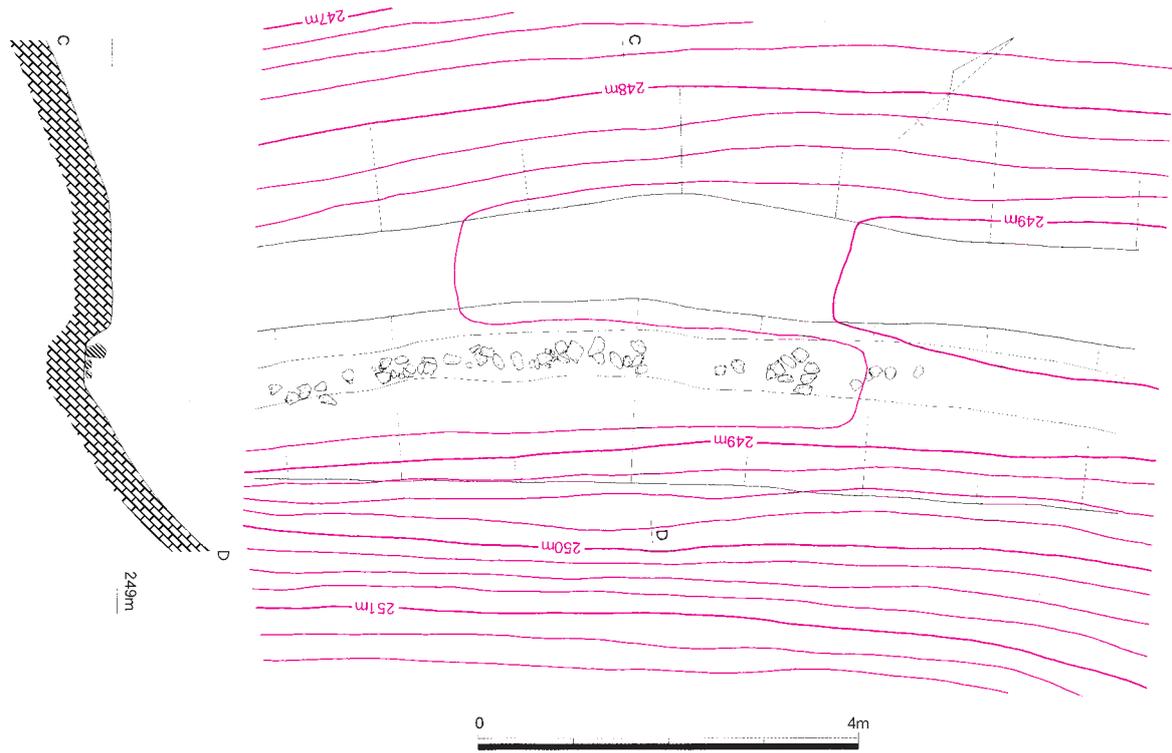
6 出土遺物 (第7図、図版30)

1～6は曲輪1およびその斜面から出土した。土師器の小皿1～3は口径7.3～8.1cm、器高1.4～1.5cmとやや小振り、底面にはいずれも糸切りの痕を残すことから、谷部のものより新しい傾向を示す。4は白磁の皿で、口縁部を欠いているものの、13世紀中葉から15世紀前半までの時期幅が考えられる。5・6は備前焼の甕の底部で、褐灰色をなす器表をナデで調整している。7・8は曲輪2の斜面で出土した龍泉窯系の青磁碗で、いずれも外面に蓮弁文を飾っており、やはり13世紀後半～15世紀前半のものと思われる。9・10は曲輪3西端部の集石周辺で出土したもので、勝間田焼の壺と考えられる。集石は30cm前後の川原石を乱雑に集めたもので、明確な遺構とは認められなかった。11～19は曲輪3の南側に設定したトレンチ5下部で出土したものである。これは堀切1の南西に位置する谷部にあたる。11・12はいずれも土師器の底部で11は杯、12は高台杯と考えられる。13～17は土師器の小皿で、14～16は口径8.2～8.6cm、器高1.4～1.6cmを測る。13～15の底部にはヘラキリ痕が残る。18・19は椀と考えられ、底部に糸切り痕が残る。11～19は上方から谷部に流れ込んだ遺物と考えられるが、曲輪から出土した上記1～10の遺物よりも古い年代観が与えられ、築城以前の遺物の可能性がある。鉄釘M1～M4のうち、曲輪1の斜面から出土したM1は長さ2.6cmと短く、板材などを打ち付けるのに用いられた可能性がある。

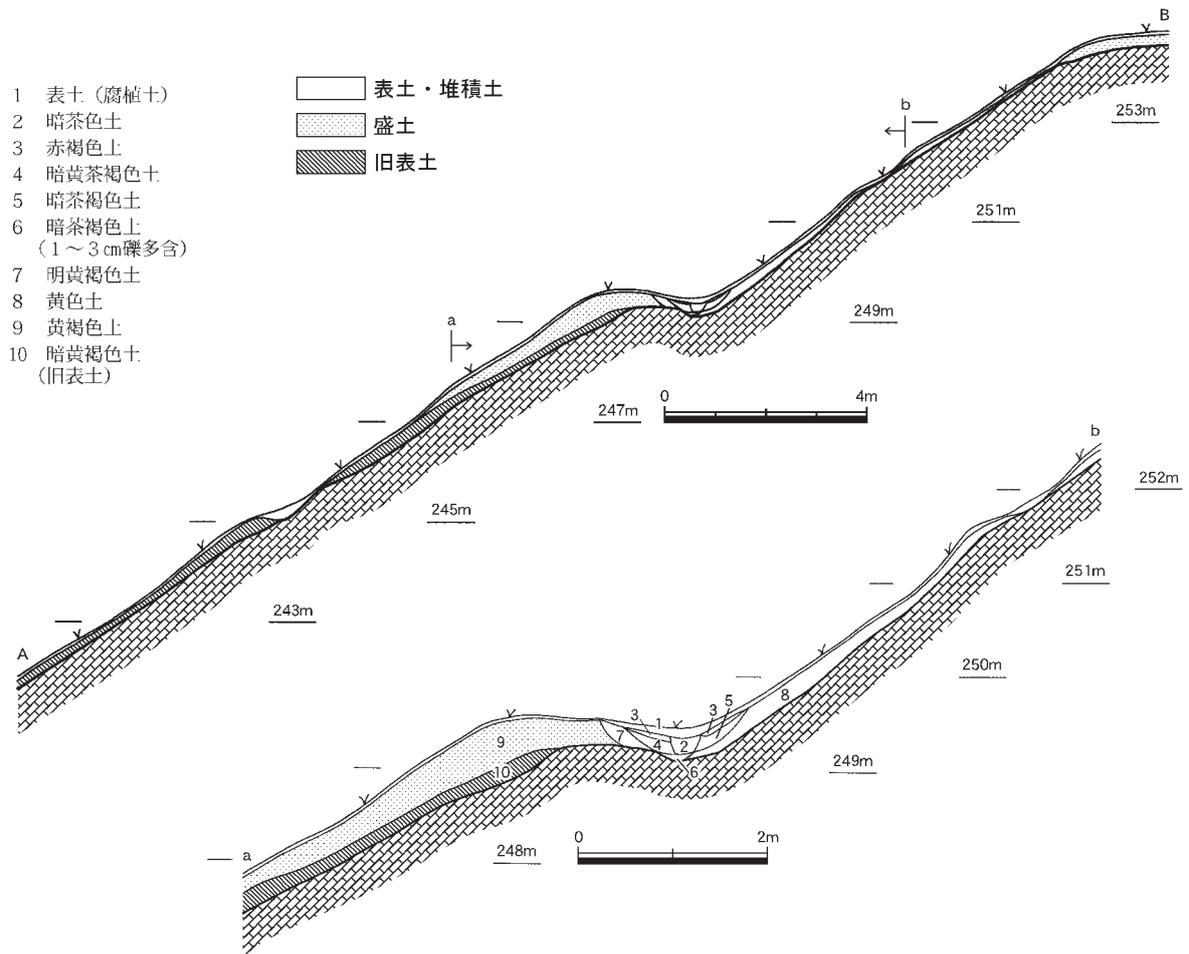
(亀山・高田)



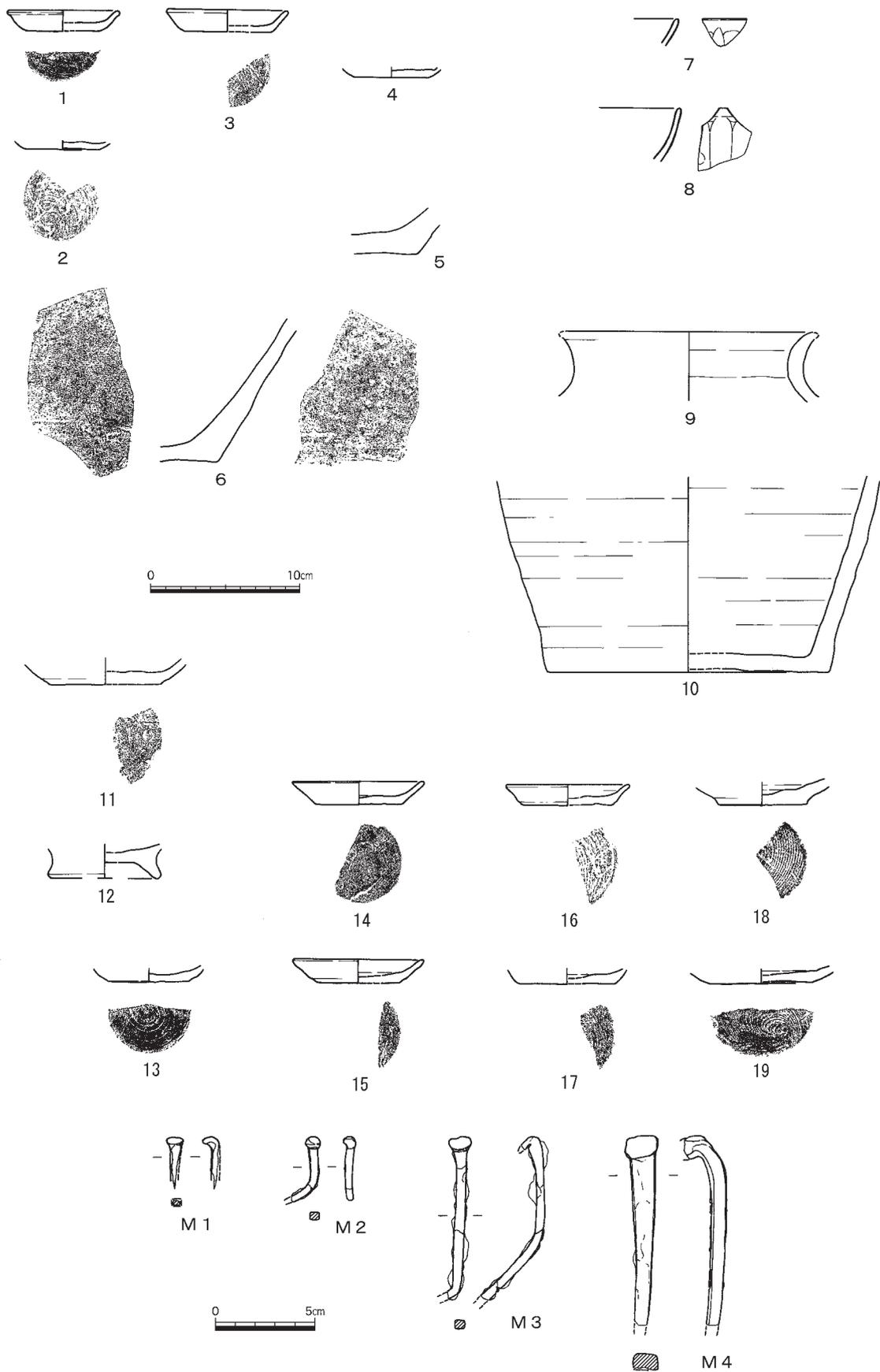
第4図 北部主要遺構図 (1/300)



第5図 切岸・土塁1 (1/80)



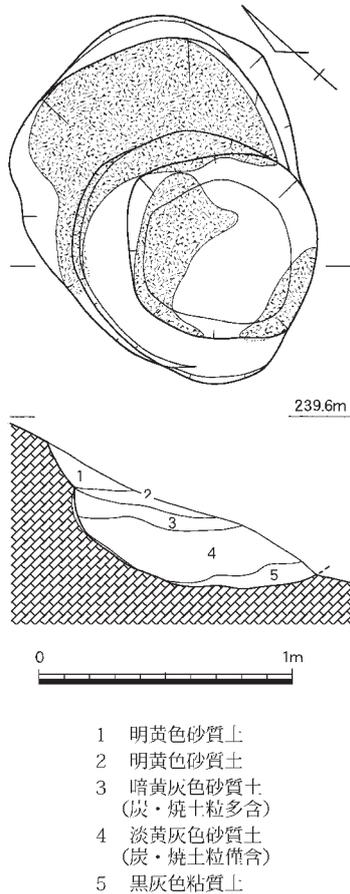
第6図 切岸・土塁1 断面図 (1/150, 1/80)



第7図 出土遺物 (1/4, 1/3)

第3節 城郭以外の遺構

1 焼成土壌



第8図 焼成土壌 1 (1/30)

焼成土壌 1 (第2・8図、図版28)

曲輪3の南下方、谷部に至る斜面に位置する。底部最下面が方形を呈するが、斜面を横方向に穿った横穴で、断面図の第1・2層は天井部の崩落土にあたる。底面および奥壁面が非常によく焼けており、この横穴内で火を焚いて使用したと思われるが、出土遺物も無く、時期・用途は不明である。ただ、斜面部とはいえ谷底に近い位置にもかかわらず、現表土直下で検出されていることから、城とは無関係の、比較的新しい時期に使用された焚き火跡の可能性も考えられる。(渡邊)

第4節 小結

久田上原城跡の遺構の範囲は南北92m、東西73mと発掘された4城の中で最も小さいが、2条の堀切をもつ点で共通している。さらに、曲輪が平坦に造成されている点や一段低い位置に帯曲輪がめぐる点、さらには中心となる曲輪に土壇状遺構を設ける点などは比丘尼ヶ城跡と類似し、河内城跡や城峪城跡よりも新しく位置付けられる可能性がある。出土遺物についても、城峪城跡では底部をヘラキリする土師器の杯や小皿が主であるのに対し、久田上原城跡では糸切りの小皿のみであり、やはり新しい様相を示している。

比丘尼ヶ城跡は久田上原城跡の北東1.7kmにあるが、その間を高い丘陵に隔てられ直接的に見通すことは難しい。しかし、両者の中間にある東山城跡の存在を考えれば情報の伝達は可能であり、おそらくは久田上原より上流域の動静を久多庄の中心である久田下原へ伝達する役割を担っていたものと推察される。

なお、城跡の近傍に地元有志による顕彰碑が建てられている。それによれば、天正十年に上野四郎友宗なる城主が四郎ヶ峪の地で討ち死にを遂げたとある。しかし、上野四郎友宗なる人物は文献に見えず、かつまたこの城が天正年間に使用された痕跡は認められないことからすると、城ヶ峪(しろがさこ)という地名が転じることによって生じた俗説ではなかろうか。(亀山)

曲輪一覽表

遺構名	規模(m)			面積 (㎡)	海拔高 (m)	付属 施設	出土 遺物
	最大長	最大幅	外縁長				
曲輪1	34.8	(19.4)	(90.3)	(330.1)	260.00	○	○
曲輪2	—	(4.8)	(140.7)	(206.1)	256.00	—	○
曲輪3	(20.0)	(6.0)	(53.3)	(125.3)	250.00	—	—

堀一覽表

遺構名	規模(m)				傾斜 (°)	断面形	出土 遺物
	長さ	上面幅	底面幅	深さ			
堀切1	(30.0)	(6.5)	(0.6)	(2.0)	(30)	V字形	—
堀切2	(22.3)	(4.9)	(0.8)	(1.5)	(18)	V字形	—
堀切3	(27.8)	(4.7)	(0.5)	(2.1)	(38)	V字形	—

切岸・土塁一覽表

遺構名	規模(m)				傾斜 (°)	出土 遺物
	最大長	最大幅	土塁高	切岸高		
切岸・土塁1	(43.0)	2.0	0.3	2.5	40	○

土壌一覽表

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔 高(m)	時期	備考
焼成土壌1	不整形	Ⅲ a	102	98	32	238.9	不明	横穴状を呈し、天井部崩落 壁面・底面に被熱痕跡

土器観察表

掲載 番号	掲載 遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
1	曲輪1 東斜面	土師器	小皿	7.3	5.0	1.4	鈍橙色(7.5YR6/4)		底部糸切り
2		土師器	小皿		5.0		鈍黄橙色(10YR6/3)		底部糸切り
3		土師器	小皿	8.1	5.8	1.5	鈍橙色(7.5YR6/4)		底部糸切り
4	曲輪1 北東斜面	白磁	皿		5.0		灰白色(7.5Y8/1)		釉薬は灰白色(10Y8/1) 光沢あり、貫入なし
5	曲輪1 北東	備前焼	甕				褐灰色(10YR5/1)		
6	曲輪1 北東斜面	備前焼	甕				灰黄褐色(10YR6/2)		内面横方向のナデ
7	曲輪2 北東	青磁	碗				褐灰色(7.5YR5/1)		釉薬は緑灰色(7.5GY6/1) 蓮弁文
8	曲輪2 北斜面	青磁	碗				淡黄色(2.5Y8/3)		釉薬は緑灰色(10GY6/1) 蓮弁文
9	曲輪3 集石	勝間田	壺	16.7			灰黄褐色(10YR5/2)		同一個体の可能性大
10		勝間田	壺		18.9		灰黄褐色(10YR5/2)		
11	T5 拡張区	土師器	杯		7.5		鈍黄橙色(10YR7/4)		
12		土師器	高台杯		7.2		浅黄橙色(10YR8/4)		
13	T5 谷部	土師器	小皿		5.4		鈍黄褐色(10YR6/3)		底部回転ヘラキリ
14		土師器	小皿	8.6	5.8	1.5	鈍橙色(7.5YR7/4)		底部ヘラキリ
15		土師器	小皿	8.6	5.6	1.6	褐灰色(10YR5/1)		底部ヘラキリ?
16		土師器	小皿	8.2	5.3	1.4	鈍褐色(7.5YR5/4)		底部回転ハケ?
17		土師器	小皿		6.4		明赤褐色(2.5YR5/6)		底部回転ハケ?
18		土師器?	椀?		6.0		鈍黄褐色(10YR6/3)		底部糸切り 勝間田の焼成不良品?
19		土師器	椀?		6.8		鈍橙色(7.5YR6/3)		底部糸切り

金属器一覽表

掲載 番号	掲載 遺構名	器種	計測値(mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M1	曲輪1	釘	26.00	5.90	3.10	0.80	鉄	中世	東斜面出土
M2	T5	釘	32.30	5.00	4.45	1.60			谷部出土
M3		釘	82.50	5.85	4.50	8.70			
M4		釘	95.70	12.80	8.30	27.90			

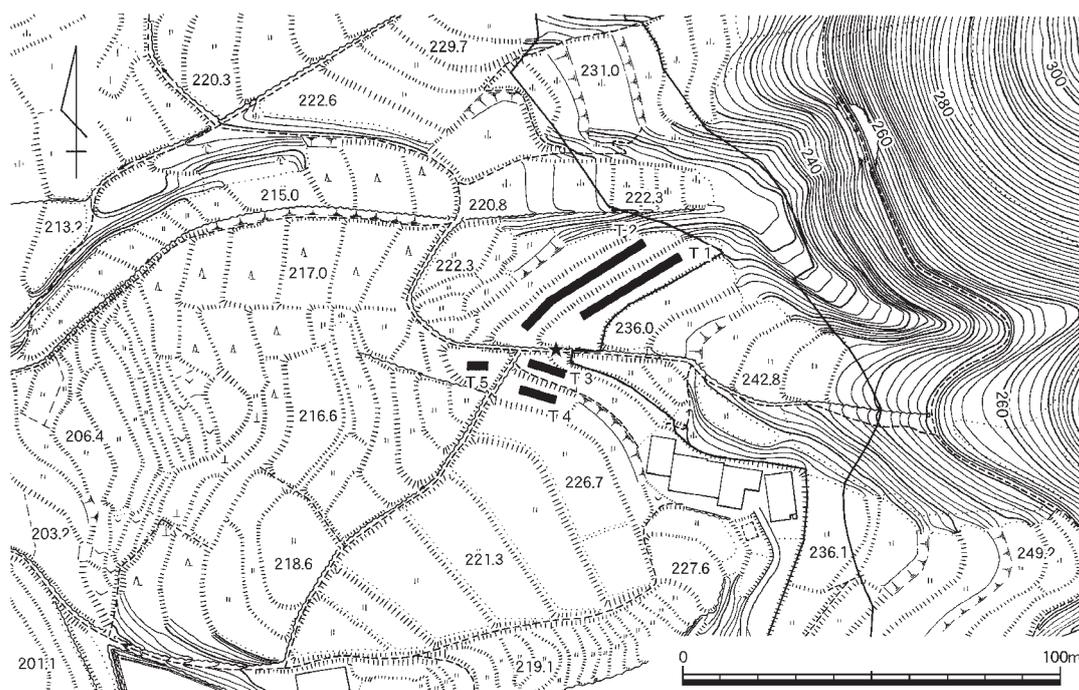
第8章 北条高下遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の概要

北条高下遺跡は、久田下原字北条高下に所在する。吉井川の東岸に連なる山塊から西に向かって緩やかに延びる幅50mほどの細長い丘陵上に位置する。昭和初期に行われた圃場整備に際して出土した備前焼の壺が地元で保管されており、蔵骨器として使用された可能性が高いことから中世の墳墓跡と想定され、久田下原A散布地として周知されてきた。出土地は、かなりの高低差をもって水田が階段状に連なり、遺構の存在をうかがわせるものは見当たらなかったが、標高235mの位置に人頭大の円礫を積み上げた集石があり、石塔の部材（S1～S6）も認められたことから、その周辺に5本のトレンチを設けて掘り下げを行った。

北西斜面に設定したT1・2では耕作土下に地山ないしは造成土が広がるものの、北西側には旧表土と見られる黒褐色土がわずかに残り、そこから土師器の細片が出土した。南斜面に設定したT3・4は、耕作土下が地山となり遺物も出土していない。丘陵の先端に設定したT5では、厚い造成の下から西へ傾斜する地山が現れたが、遺構・遺物ともに認められなかった。

以上のことから、遺構は圃場整備によって削平され消滅したものと思われるが、採集された遺物からすると室町時代（15世紀前半～16世紀末）の積石墓のほか、古墳時代前期の集落が展開していた可能性がある。（亀山）



第1図 調査位置図 (1/2,000)

★ 集石

第2節 出土遺物 (第3図、図版32)

1 土器

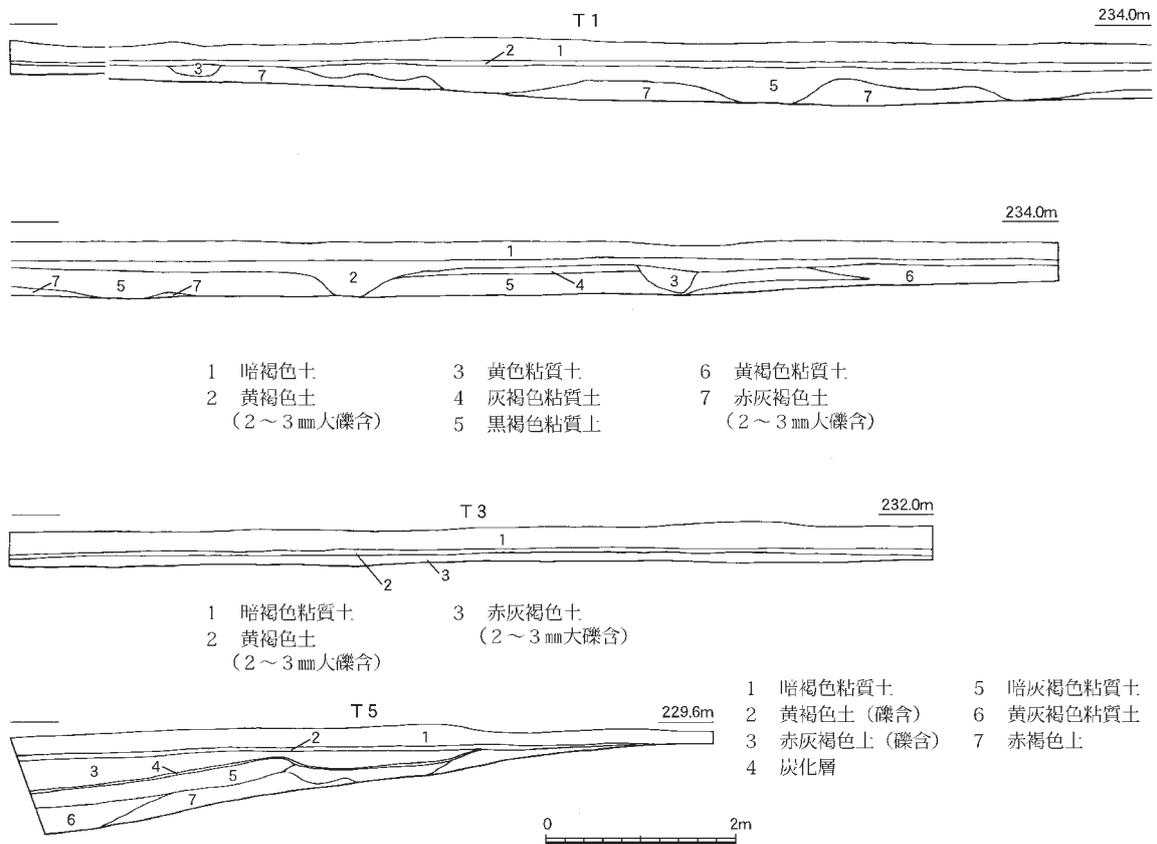
1は湖岸道路建設に伴う排土から出土したもので、本来は丘陵斜面に残存していた包含層に由来するものと考えられる。土師器の鉢の口縁部で、外面をヨコナデ、内面をヘラミガキで調整する。

2・3は開墾時に出土した備前焼の壺である。2は玉縁をなす口縁部をもち、なだらかな肩部には櫛状工具により2条の沈線を施す。3は三角形につぶれた玉縁をなす口縁部をもち、張りのある肩部には3耳を添付する。(亀山)

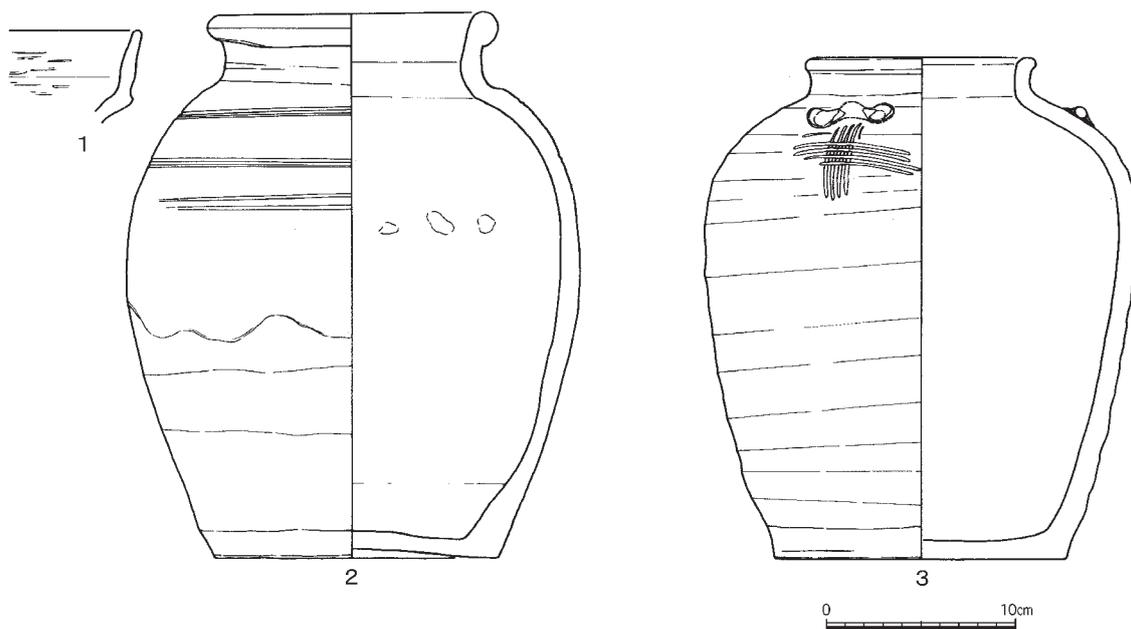
2 石塔

S1～S4は宝篋印塔の一部で、いずれも安山岩を素材とする。相輪には、最大径を下半にもつ宝珠と6弁を刻みこんだ請花からなるS1、圏線を刻み九輪を表すS2がある。S3・S4は笠の一部で、隅飾りは外方へ強く傾斜し、軒裏を薄くつくるなど蒜山式宝篋印塔の特徴を備えている。

S5・S6は花崗岩製の五輪塔である。S5は偏球形の石材の中央を帯状に窪ませて空風輪を分ける粗雑なつくりで、下部には衲をつくりだしている。S6は直径の割に高さが低く鈍重な感じを受ける水輪で、平面形はやや歪な円形をなす。(亀山)

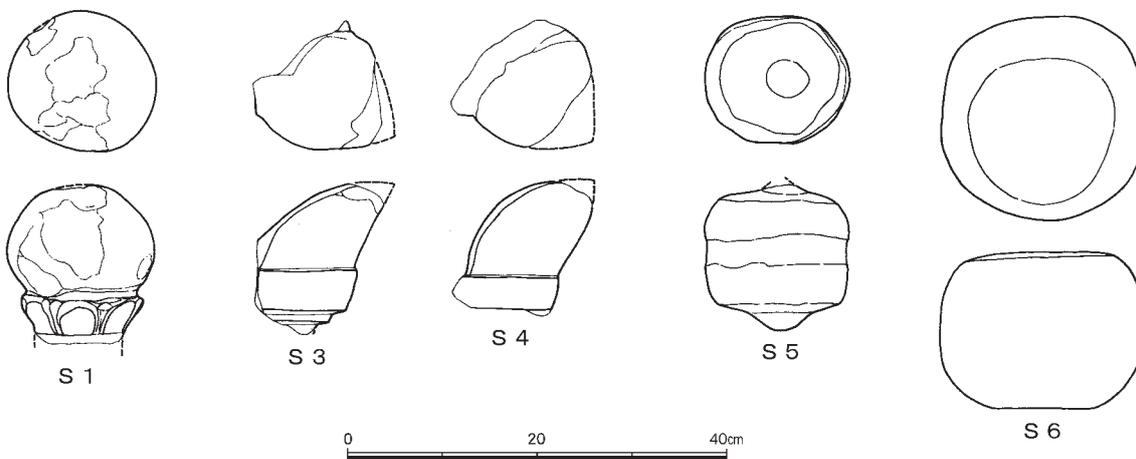


第2図 トレンチ土層断面図 (1/80)



土器観察表

掲載番号	掲載遺物名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
1		土師器	鉢				鈍橙色(7.5YR6/4)		工事中に採集
2	採集遺物	備前焼	壺	14.1	15.0	29.0	鈍赤褐色(2.5YR4/4)	完形	田圃の改善時に出土したらしい。
3		備前焼	壺	11.0	15.4	26.7	鈍赤褐色	完形	奥津町教育委員会保管



石製品一覧表

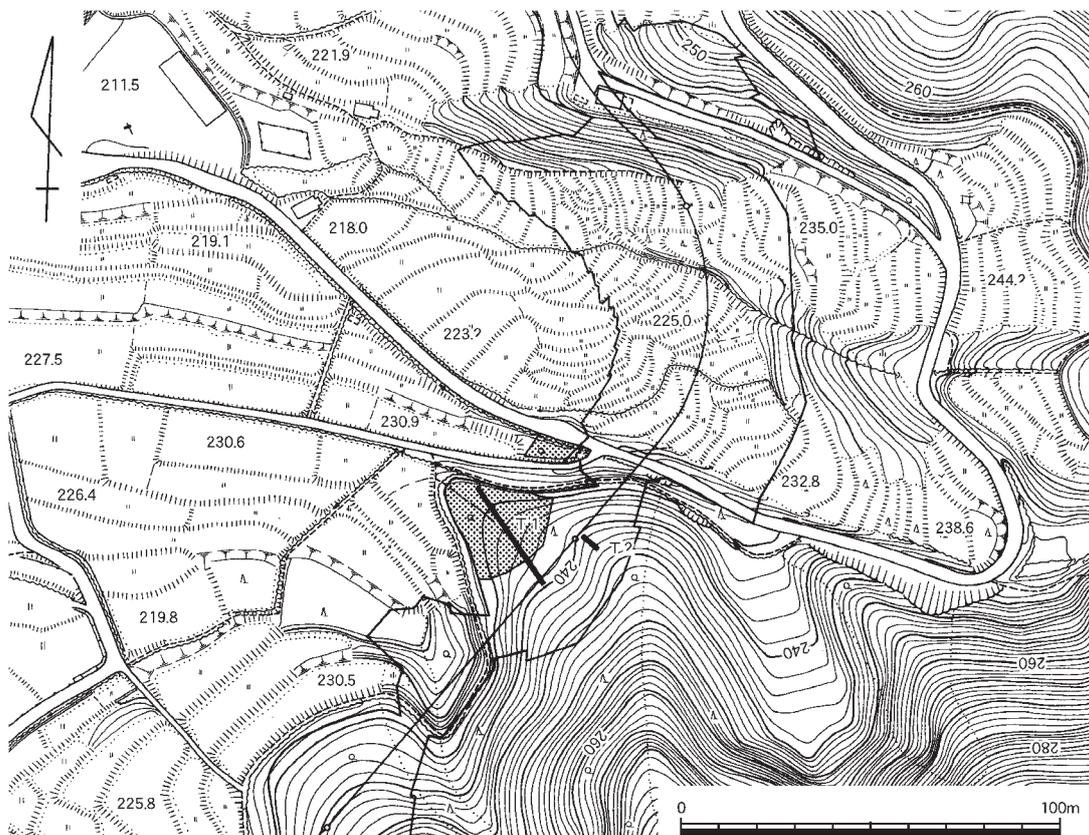
掲載番号	出土地点	器種	部位	計測値(mm)		石材	時期	備考
				残存長	残存幅			
S 1	集石か所	宝篋印塔	相輪	17.90	15.50	安山岩	中世	
S 2			相輪	14.00	11.80			
S 3			笠 隅飾	15.30	14.80			
S 4			笠 隅飾	15.80	13.70			
S 5		五輪塔	空風輪	15.55	15.25	花崗岩		
S 6			水輪	16.70	21.40			

第3図 遺跡周辺出土遺物 (1/4, 1/8)

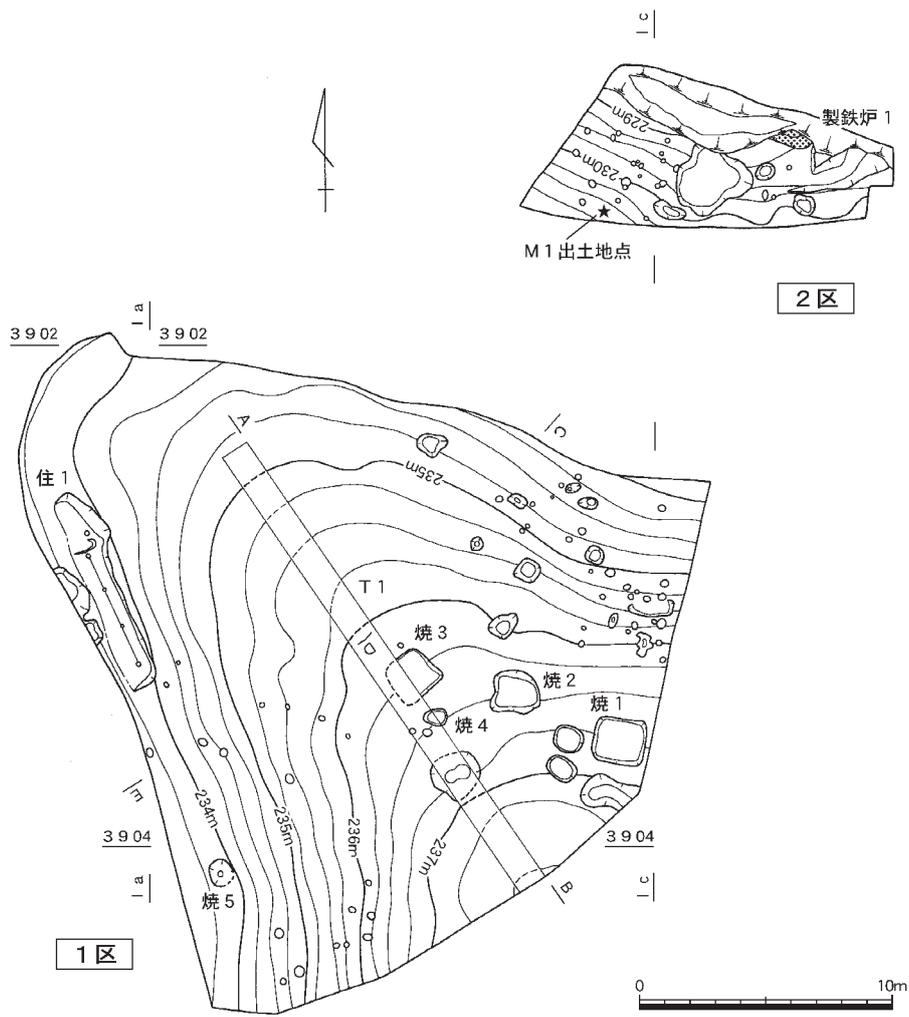
第9章 峪畑遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の概要

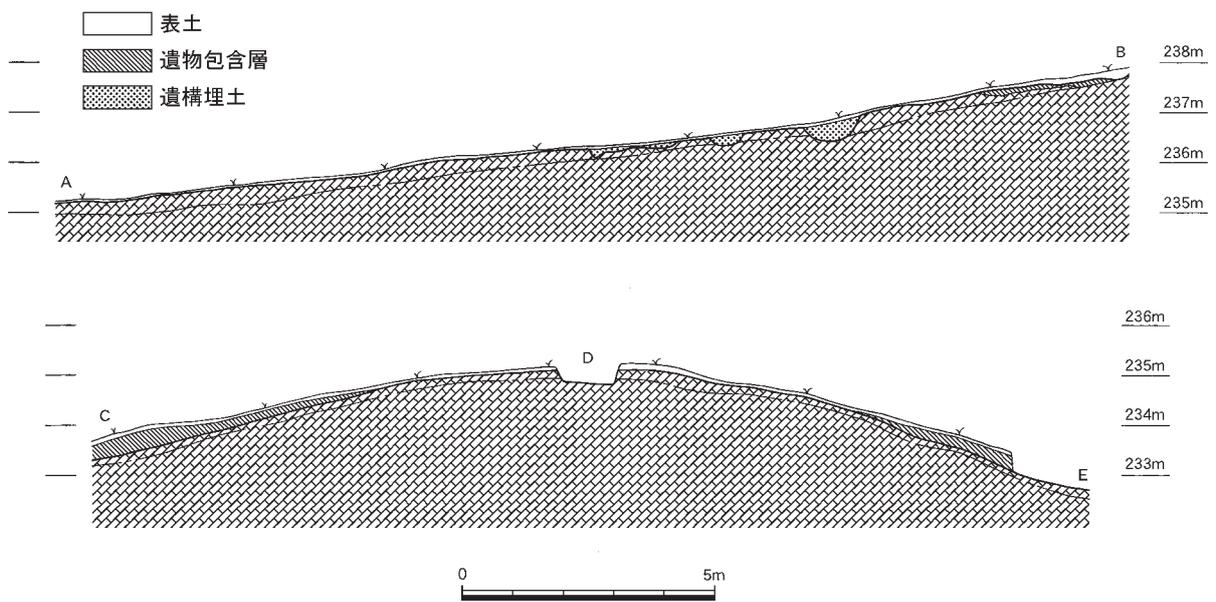
峪畑遺跡は、吉井川左岸の谷底平野に向かって樹枝状に張り出した丘陵上に所在する。位置的には、平野部から谷筋に沿って250mほど山中に入った場所にあたり、比高40～50mを測る。平成5年度の分布調査で、道路法面に炉壁や鉄滓を含む炭層の露出（製鉄炉1）が確認されたことによって遺跡の存在が明らかとなり、製鉄遺跡として久田下原B遺跡の名称で登録された。さらに、隣接する湖岸道路予定地内にも、地形的に遺跡の広がることが予想されたことから、平成7年度に計2本（60㎡）のトレンチを設定して一次調査を実施した。その結果、T1で土壘・柱穴を検出し、製鉄遺跡とそれに関連する集落遺跡の存在が想定された。この成果を受け、平成9年度に全面調査を実施し、遺跡名も小字から峪畑遺跡と変更した。調査は、丘陵尾根上の1区と炭層露出地点の2区に分けて行った。その結果、弥生時代の竪穴住居1軒、古代の製鉄炉1基とその関連施設、古代の可能性が高い焼成土壘5基を検出した。柱穴も多数検出したが、多くは樹根と判別し難いものであった。出土遺物のうち、弥生時代のもはわずかであるが、銅剣の鋒を加工転用したとみられる銅鏃M1が注目される。一方、製鉄関連遺物は総量約77kgと多量に出上し、その一部について金属学的調査を実施した。（岡田・佐藤）



第1図 調査位置図（1/2,000） 一次調査トレンチ



第2図 遺構全体図 (1/300)



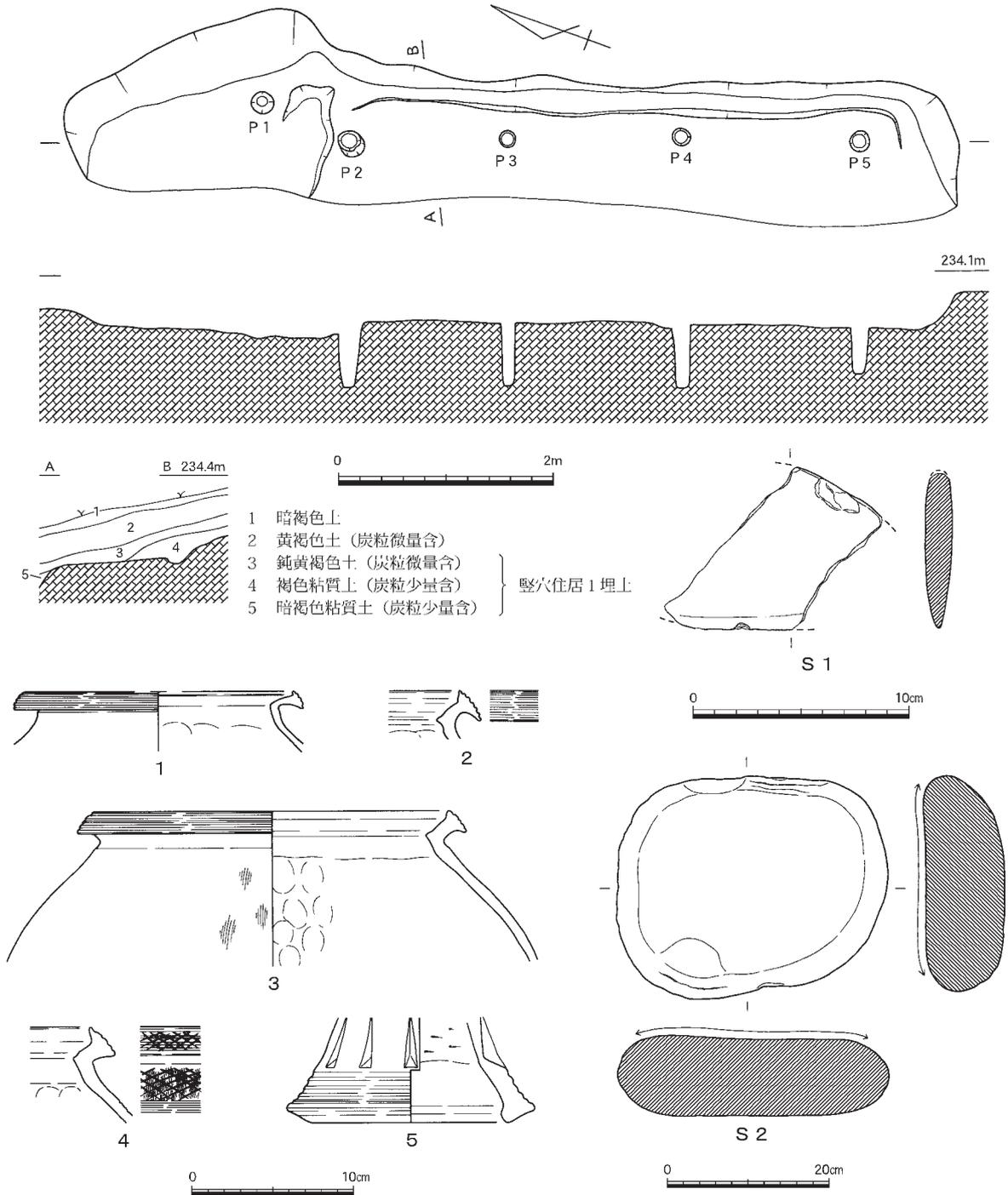
第3図 1区土層断面図 (1/150)

第2節 弥生時代の遺構と遺物

1 竪穴住居

竪穴住居 1 (第2・4図、図版33)

1区のもっとも下位で検出された竪穴遺構の一部で、「段状遺構」と呼称される、丘陵斜面に段切

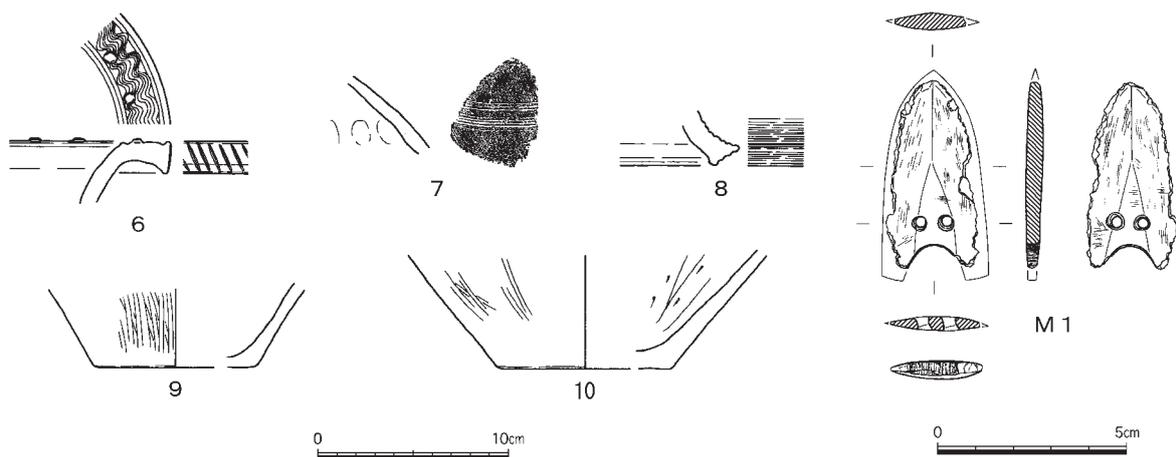


第4図 竪穴住居 1 (1/60)・出土遺物 (1/4, 1/2, 1/8)

り造成された住居と考えられる。壁際には浅い壁溝が掘りこまれている。床面ではP 2～5の4本の柱穴が直線的に検出され、柱間は1.45～1.65mを測る。出土遺物には1～5の弥生土器のほか、S 1の石包丁（ひん岩）の一部とS 2の作業台と見られる平石がある。時期的には弥生時代中期後葉～末葉に比定される。なお北端の張り出した部分は、小形の別の竪穴遺構が重複しているものと推察され、P 1が伴う柱穴と考えられる。（岡田）

2 遺構に伴わない遺物（第5図、巻頭図版6、図版35）

丘陵斜面にあたる1区北東・南西部、2区には包含層が形成されており、当該期の遺物がわずかながら出土している。6・7・9は壺、8は高杯または器台、10は甕で、中期後葉～末葉の特徴をもつ。M 1は銅剣の先端を加工転用したとみられる銅鏃で、2区南壁で出土した（第6図★）。重量は約26gを量り、鏃としてはかなり重い。周縁部は相当傷んでいるが鏃身の表面は鈍い光沢を放ち、研磨痕跡が明瞭に観察される。2箇所の穿孔は両面から行われ、回転穿孔具が使われた痕跡もみられる。出土当初は、単体製作された東海地方の有孔銅鏃の可能性も考えられたが、最終的に銅剣の先端である可能性が高まった。（岡田）



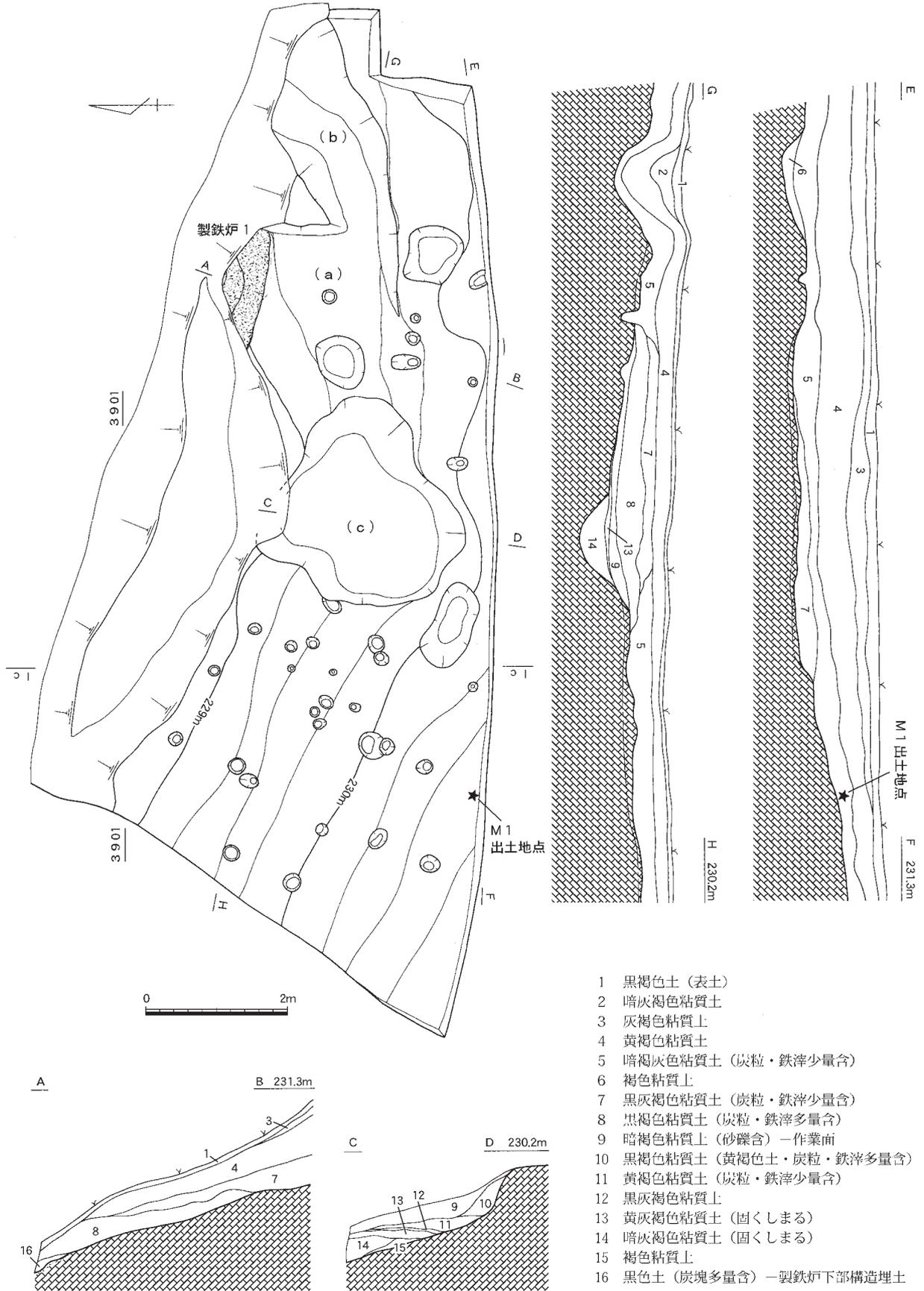
第5図 遺構に伴わない遺物（1/4, 1/2）

第3節 古代以降の遺構と遺物

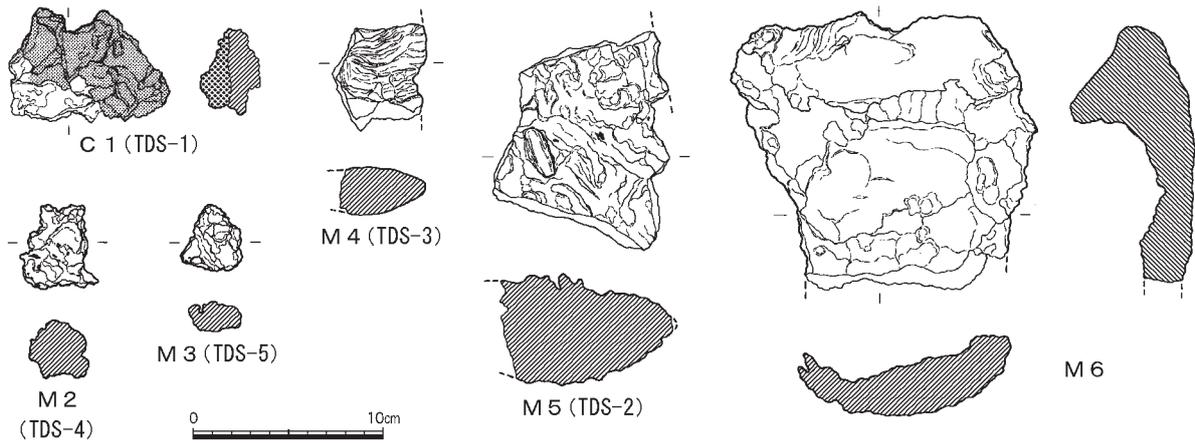
1 製鉄炉

製鉄炉 1（第6・7図、巻頭図版5、図版34）

2区東半の北向き丘陵斜面に位置する。表土下1～1.5mの厚さで流土が堆積し、このうちG-Hラインの7・8層に多量の炉壁・鉄滓が包含されていた。この流土を除去した地山の第三紀層上面で、製鉄炉1とその関連施設と思われる平坦面(a)、溝(b)、土壇(c)を検出した。製鉄炉1は、すでに大部分が破壊されており、地下構造の南東部分がわずかに遺存していた。地下構造は、素掘りの土壇を焼き締め、中に木炭を充填したものである。本来の形態は少なくとも南北1m・東西2m以上の長方形プランであったと思われる。製鉄炉本体の構築状況や排滓溝は確認できず、炉壁片や各種鉄滓が



第6図 2区遺構全体図・土層断面図 (1/80)



第7図 2区出土遺物 (1/4)

流土中から散在的に出土するに留まった。平坦面(a)は、製鉄炉1の南辺に沿った幅1.6mほどの緩斜面部で、作業場の可能性が高い。溝(b)は、幅1~1.4m、深さ10~40cmを測り、埋土や位置関係から排水溝兼作業道と思われる。土壙(c)は、直径2~2.5m、深さ40~50cmを測る不整形な土壙で、炉壁粘土を採取した粘土採掘穴の可能性が考えられる。遺構の時期を示す土器は皆無であったが、2区全体で炉壁16.2kg、流出滓43.6kg、炉内滓9.4kg、含鉄滓8kgが出土した。このうち、M1~M5の5点について金属学的調査を実施し、砂鉄原料による製鉄であることが判明した(付載1参照)。M6は流出滓で、排滓穴の幅が約15cm、排滓溝の幅は約11cmであったことを示す。また、下部構造に充填された木炭から3点を抽出し、樹種鑑定と¹⁴C年代測定を実施した。その結果、樹種はコナラ属コナラ亜種コナラ節とヒノキ、年代はA. D. 800±60年、A. D. 990±60年、A. D. 1030±60年の数値を得た。これらの成果から、製鉄炉1は9~10世紀に操業された長方形箱形炉と考えられる。なお、2区西半は自然地形のまま、柱穴25個を検出したがいずれも樹根と区別し難いものであった。(佐藤)

2 焼成土壙

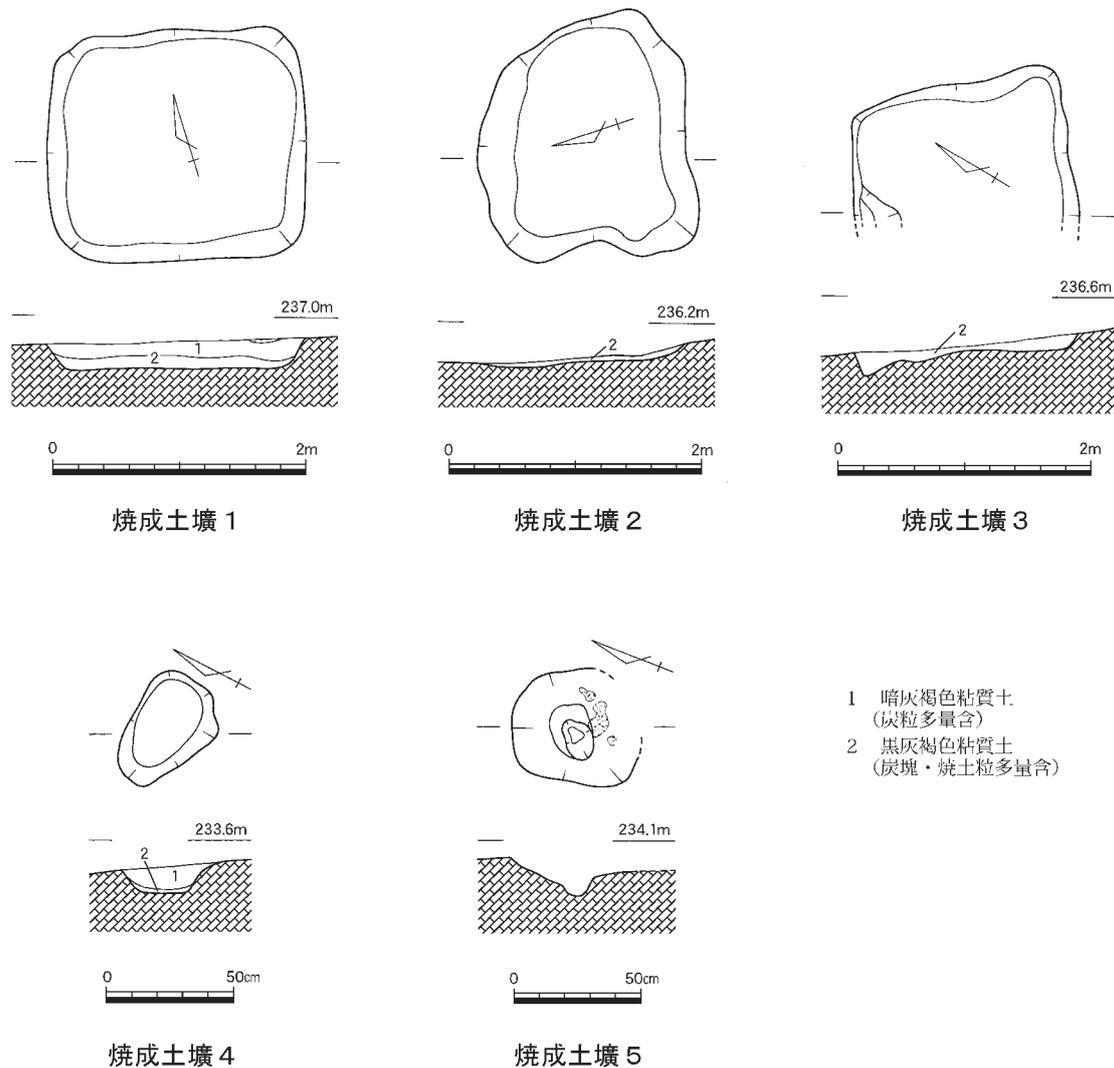
焼成土壙1~5 (第2・8図、図版34)

丘陵頂部から斜面に位置し、平面形から一辺約2mの大形長方形(焼成土壙1~3)と、直径約50cmの小形円形(焼成土壙4・5)に分類できる。両者とも深さ5~10cmと浅く、底面は比較的平坦で、壁面に弱い被熱痕が認められる。埋土は炭粒・焼土を多く含み、しまりに欠ける。これらの特徴から、いわゆる伏せ焼きにより木炭を生産した土壙と考えられる。出土遺物が無いので時期は不明であるが、製鉄炉1との関係や、河内城跡で検出された焼成土壙1との類似から、古代の可能性が高い。(佐藤)

第4節 小結

調査の結果、岨岨遺跡は弥生時代の集落および古代の製鉄遺跡であることが明らかとなった。

弥生時代の遺構・遺物はわずかであったが、特筆すべきものとして銅剣の鋒を転用したと考えられる銅鏃M1がある。その特徴として、①出土時の状況から、本来の形態はいわゆる凹基式で、最大長55mm・最大幅28mm前後と推定される。②先端から鏃身中央にかけて明瞭な鑄が走り、断面菱形で最大



第8図 焼成土壌 1～5 (1/60, 1/30)

厚5mmを測る。③鍔身中央から基部にかけて平坦面を研ぎ出し、そこに両面から2穴を回転穿孔する。④基部中央の、円弧状を呈す割り込みの裁断面には、鑿状の工具で面取りしたような細かな削痕が認められる。⑤銅質が極めて良好である。一などが挙げられる。こうした通例の銅鍔とは異なる形態の特徴や観察結果から、銅剣の鋒を加工転用した可能性が極めて高いと判断した。さらに、各種銅剣との比較検討から、もとなつた銅剣は大幅な改変を想定しない限り、主に山陰地域に分布する中細型銅剣C類である可能性が最も高い。これは所属時期が、伴出土器より中期後葉～末葉に比定されることや、峪畑遺跡が所在する奥津町の地理的環境とも矛盾しない。なお、蛍光X線分析を実施した結果、銅13.0889%：スズ67.1453%：ヒ素2.0181%：鉛8.1296%：鉄0.8451%：ケイ素2.6304%：アルミニウム4.6714%：アンチモン1.4712%という成分値が得られた。弥生時代青銅器の成分値としては例外的であるが、非破壊による表層部分の解析であり、その数値は確定的ではないことを明記しておく。

古代の製鉄関連遺構のうち、製鉄炉1は9～10世紀に操業された長方形箱形炉と考えられ、原料は砂鉄であることが判明した。周辺では、城峪城跡下層と久田原遺跡で、古墳時代後期～古代の製鉄炉が検出されている。また、焼成土壌1～5は、古代の木炭生産施設の可能性が指摘できる。(佐藤)

竪穴住居一覧表

遺構名	平面形	規模(cm)			長軸の向き N° -E・W	床面積 (㎡)	海拔高 (m)	支柱	柱間 (cm)	付属施設					時期	備考
		長さ	幅	深さ						高床部	方形土壇	中央穴	焼上面	カマド		
竪穴住居1	方形	810	105	32	N-70-E	8.4	233.60	4	145~165	-	-	-	-	-	弥生中期	

土壌一覧表

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔 高(m)	時期	備考
焼成土壇1	長方形	II a	205	185	22	236.56	古代?	壁面・底面に被熱痕跡
焼成土壇2		II a	196	164	14	235.88		
焼成土壇3		II a	172	(110)	12	236.16		
焼成土壇4	円形	III a	46	34	12	233.40		
焼成土壇5		III b	50	45	14	233.88		

土器観察表

掲載 番号	掲載 遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
1	竪穴住居1	弥生土器	甕	(16.6)			浅黄橙色(10YR8/4)		口唇部に凹線4条
2		弥生土器	甕				浅黄橙色(10YR8/3)		口唇部に凹線6条
3		弥生土器	甕	21.8			橙色(2.5YR6/8)		口唇部に凹線4条
4		弥生土器	壺				灰黄色(2.5YR6/2)		口唇部凹線4条、口唇部・肩部斜格子文
5		弥生土器	高杯		12.0		鈍黄色(2.5YR6/3)		脚部三角形透し(未貫通)
6	包含層	弥生土器	壺				鈍黄橙色(10YR6/4)		口縁部上面に櫛描波状文・円形浮文、口唇部に刺突文
7		弥生土器	壺				黒褐色(5Y3/1)		肩部に櫛描波状文
8		弥生土器	高杯				橙色(5YR6/6)		器台?
9		弥生土器	壺		8.4		黒褐色(2.5Y3/1)		
10		弥生土器	甕		8.8		橙色(5YR6/6)		

石製品一覧表

掲載 番号	掲載 遺構名	種別	計測値(mm)			重量 (g)	石材	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S1	竪穴住居1	石包丁	67.5	51.0	8.5	26.3	ひん岩	弥生中期	
S2		石皿	333.0	278.0	100.0	15,500.0	花崗岩	弥生中期	

金属器および製鉄関連遺物一覧表

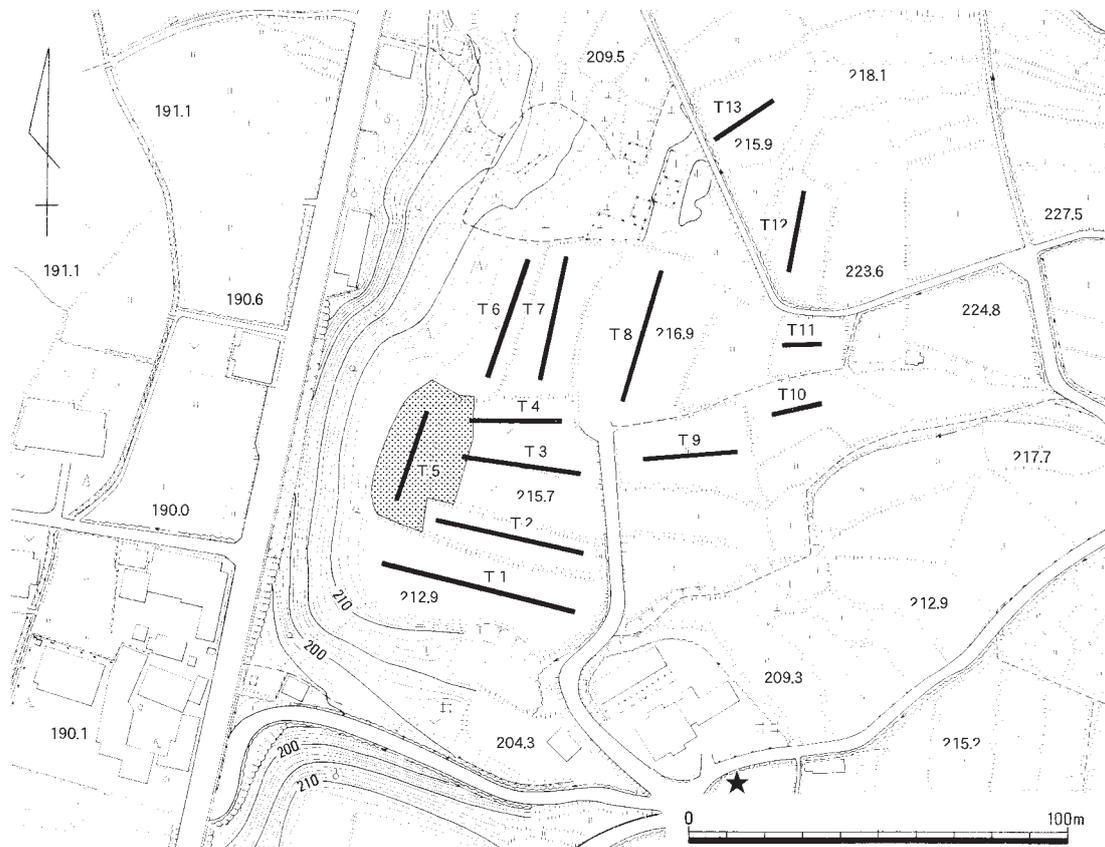
掲載 番号	掲載 遺構	種別	計測値(mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M1	包含層	銅鏃	(55.0)	(28.0)	5.0	26.3	銅	弥生中期	銅剣の鋒を加工転用した可能性が高い
C1	製鉄炉1	炉壁	84.5	60.5	-	117.0	-	古代	付載1 大澤報告参照
M2		鉄塊系遺物	45.0	41.0	32.5	60.0	鉄		
M3		鉄塊系遺物	36.0	32.0	16.0	21.6	鉄		
M4		炉外流出滓	57.5	50.0	30.0	116.6	鉄		
M5		炉底塊	116.5	93.0	67.0	794.9	鉄		
M6		炉外流出滓	149.0	162.0	72.0	1,223.3	鉄		

第10章 岡 遺 跡

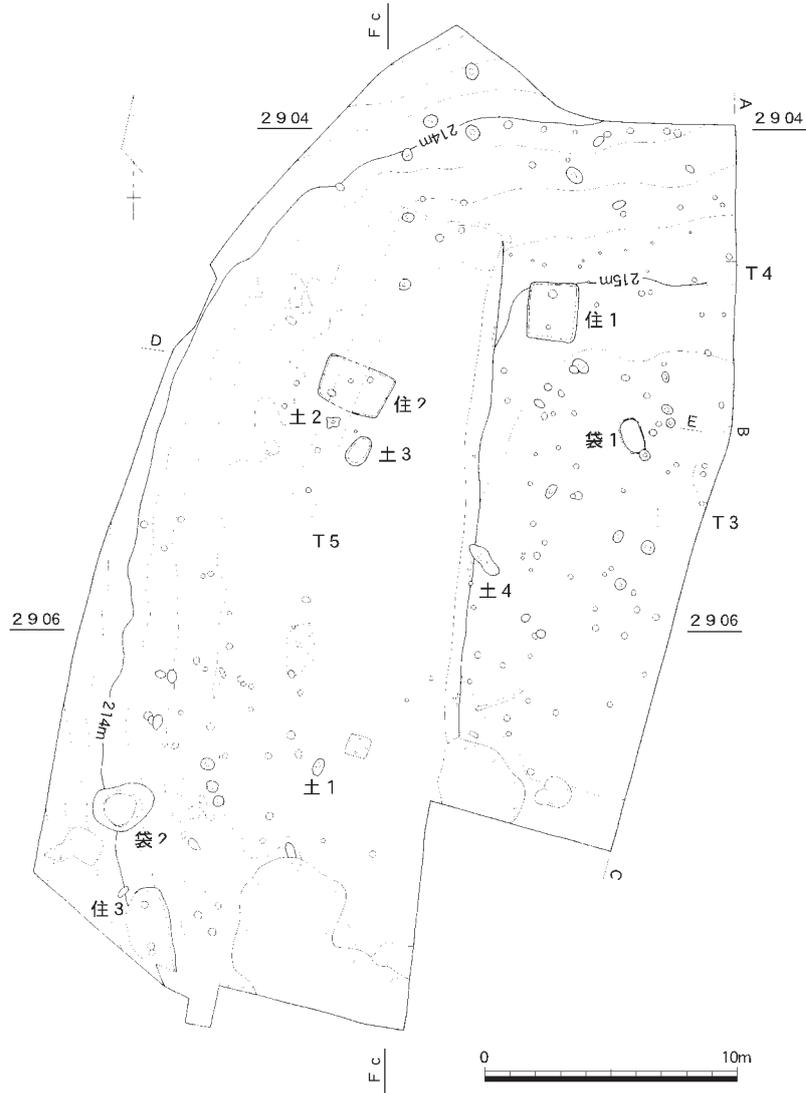
第1節 遺跡の位置と調査の概要

岡遺跡は、吉井川左岸の谷底平野に向かって樹枝状に張り出した丘陵上に位置する。調査地はこの丘陵の西端にあたり、すぐ西側は急峻な崖となっている。平野部との比高は約25mを測り、眼下に久田原遺跡を見下ろすことができる。

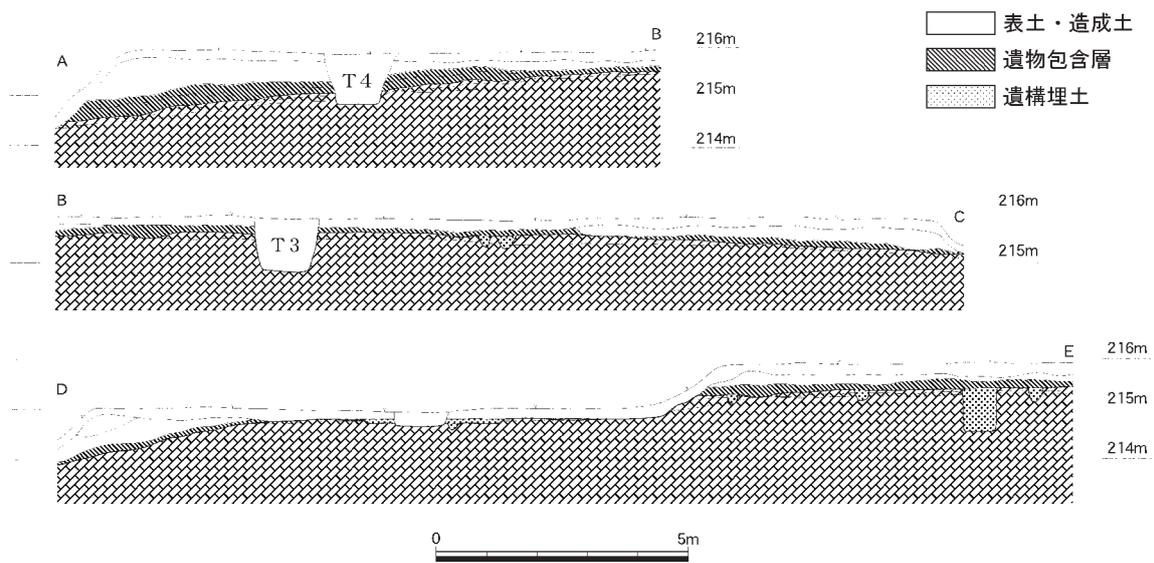
岡遺跡は、平成5年度の分布調査で新規に発見された遺跡で、久田下原C遺跡として登録されていた。遺跡推定域が水没範囲内にあることから、平成7年度、地形や遺物分布から遺跡の存在が予想される範囲について、計13か所（540㎡）のトレンチを設定して一次調査を実施した。その結果、ほぼ全域が近代以降の耕地開発による大規模な地形改変を受けており、遺跡の大部分がすでに消滅していることが判明した。唯一、T5において竪穴住居2を検出し、丘陵先端部周辺のみは削平を免れ、遺跡が遺存していると予想された。この成果を受け、平成9年度に全面調査を実施し、遺跡名も小字から岡遺跡と変更した。当初の調査予定面積は丘陵先端部の約520㎡であったが、発掘調査の進展に伴い東側に新たなトレンチを設定したところ、袋状土壌1の一部を検出した。このため、さらに200㎡あまり発掘区を東に拡張して調査を実施した。調査区内は、大規模な地形改変を免れたとはいえ、開墾



第1図 調査位置図 (1/2,000) ■ 一次調査トレンチ ★ 五輪塔集積



第2図 遺構全体図 (1/300)



第3図 調査区土層断面図 (1/150)

による削平や土取りを受けていた。特に丘陵頂部は大きく削平されており、等高線が乱れている。遺跡の基本層位は、上から表土→造成土→旧表土→基盤層である。このうち、旧表土は黒ボクが二次堆積した黒褐色土で、この層と基盤層を押し出した造成土中に多くの遺物が含まれていた。遺構検出は、旧表土上面での検出が困難であるため、基盤層まで掘り下げて行った。基盤層では、丘陵頂部では第三紀層が露出していたが、丘陵斜面部では、部分的にソフトローム層が遺存していた。

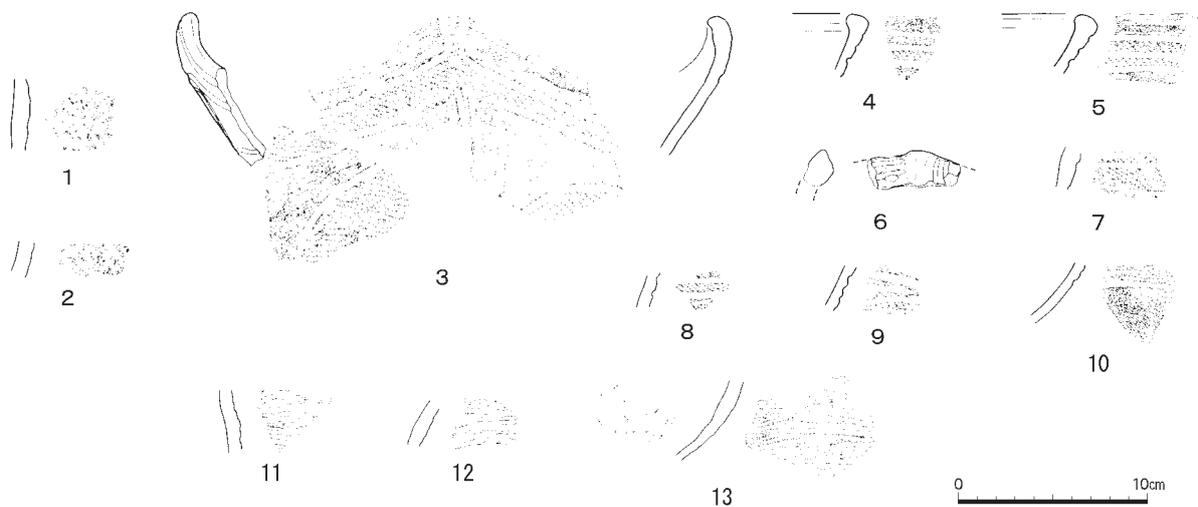
調査の結果、丘陵頂部から斜面部にかけて、竪穴住居3軒・袋状土壇2基・土壇4基・柱穴多数を検出した。このうち、柱穴については樹根と区別し難いものがほとんどで、柱穴と確定できるものはわずかであった。遺物は、縄文～弥生時代の土器・石器が整理箱9箱出土した。

本報告では、調査時に遺構と認定したものについては、すべて掲載している。また、遺物についても実測可能なものは出来るだけ図化に努め、そのほぼすべてを掲載している。 (岡田・佐藤)

第2節 縄文時代の遺物

縄文土器 (第4図、図版38)

縄文時代の土器は、遺物包含層および造成土中から弥生土器などと共に散在的に出土し、原位置を留めたものは認められなかった。また、当該期の遺構も、その存在を念頭において精査したが、確認できなかった。1・2は、外面に山形押型文を施文する深鉢の小片で、同一個体と考えられる。3～10は、精製の深鉢または浅鉢の口縁部～胴部下半である。3は波状口縁で、口縁部を若干肥厚している。文様構成は破片のため明らかにしえないが、波頂部から垂下する磨消縄文帯に鉤状J字文らしき突出部がある。4・5は水平口縁で、口縁部内面を肥厚し、外面を3条沈線+磨消縄文で飾る。6は波状口縁で、波頂部を肥厚により突出させ、口唇部に沈線文を施すが、文様構成は剥落のためはっきりしない。7～10も外面に磨消縄文を施すが、小片のため文様構成は不明である。これらの磨消縄文は、いずれもRLの縄文で、これを縁取る沈線は幅2～3mmと細く浅い。11～13は、粗製深鉢の胴部上半～底部で、外面を二枚貝条痕、内面をナデまたはケズリで仕上げている。以上のうち、1・2は早期、3～10は後期前葉(福田K II式)、11～13は後～晩期に位置付けられる。 (佐藤)



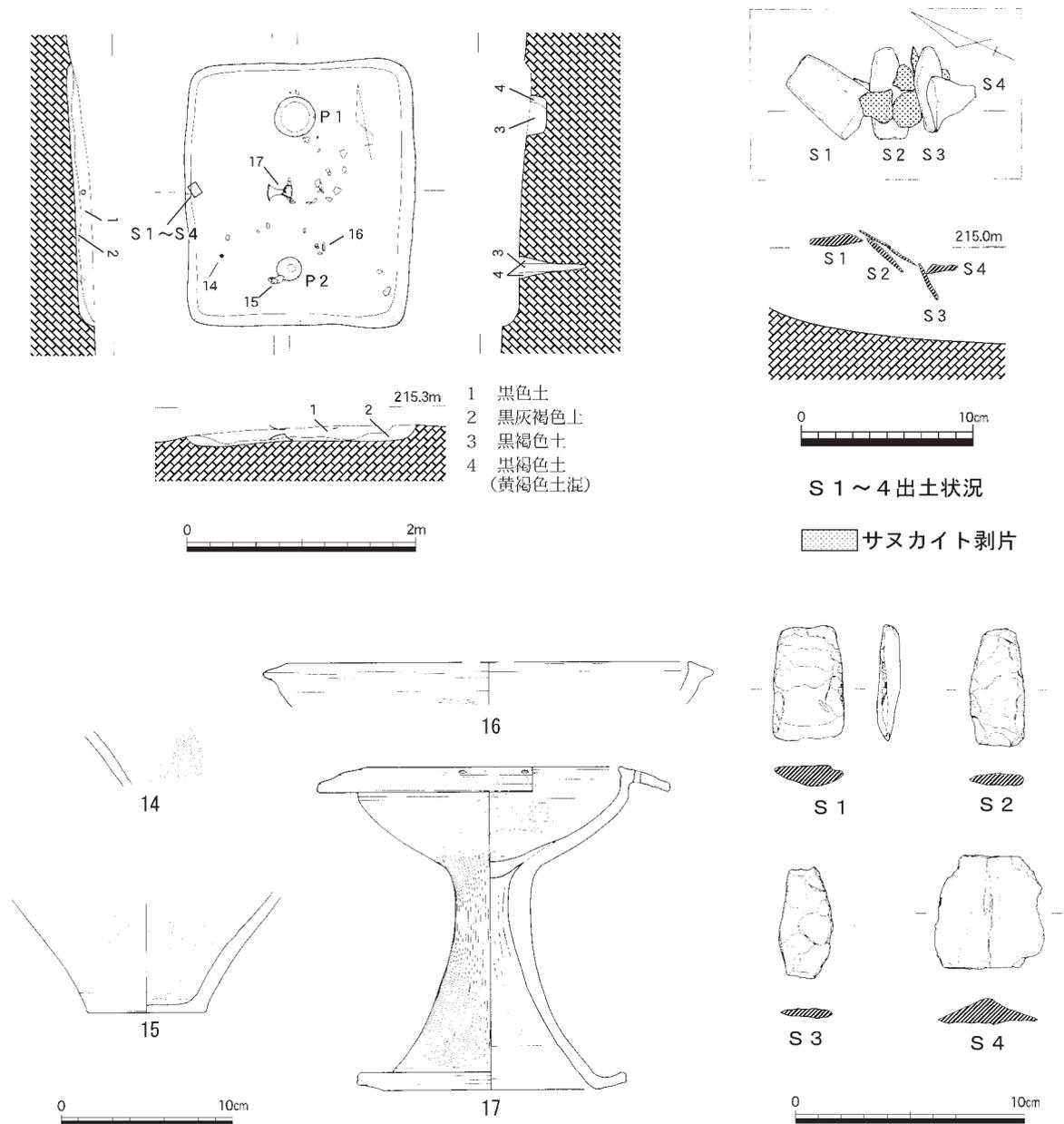
第4図 縄文土器 (1/4)

第3節 弥生時代の遺構と遺物

1 竪穴住居

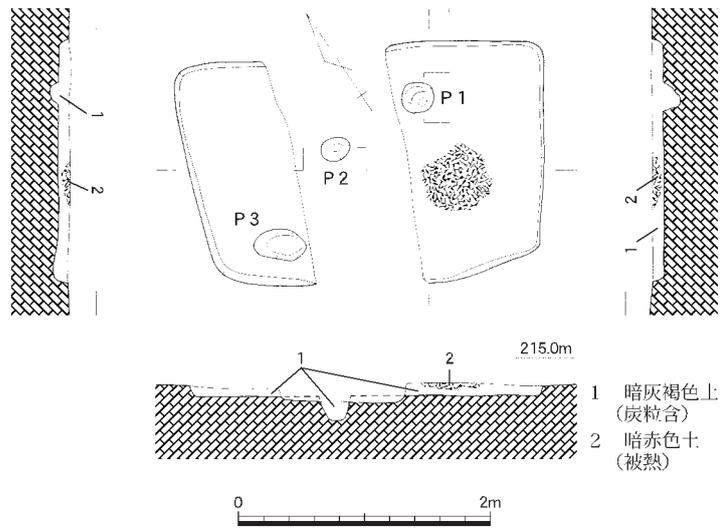
竪穴住居 1 (第2・5図、図版36)

平面形は隅丸長方形を呈し、長辺2.3m・短辺2m・床面積4.6㎡と小規模な住居である。床面までの深さも15cm弱と浅いが、周囲の遺構の状況から、上面の削平のためではなく本来的に掘り込みが浅いと考えられる。床面で柱穴2基を検出したが、規模が大きく違い、両者とも上屋を支える柱穴とは考え難い。出土遺物のうち、17の高杯は住居中央に倒置された状況で出土しているが、ほとんどは埋



第5図 竪穴住居 1 (1/60, 1/4)・出土遺物 (1/4, 1/3)

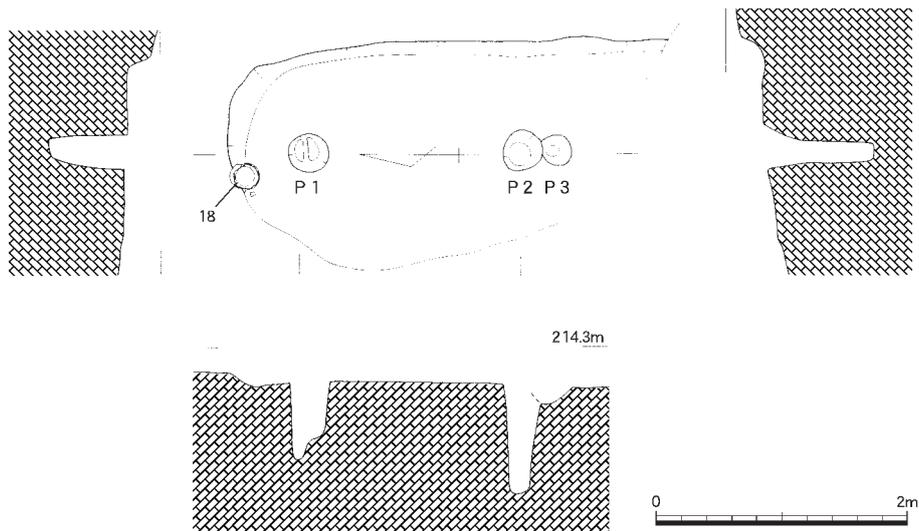
没過程で廃棄あるいは流入した状況で出土している。S1～S4はサヌカイト剥片と重なり合った状況で、住居西側壁面から出土した。S1は敲打剥離面を多く残す粗雑な造りの扁平片刃石斧、S2～S4は全体に剥離調整を施した石器未成品で、出土状況から、まとめて保管されていたものと考えられる。また、住居埋土中からもサヌカイト剥片が少量出土している。これらから、遺構の時期は中期後葉と考えられる。(佐藤)



第6図 竪穴住居2 (1/60)

竪穴住居2 (第6図、図版37)

規模・形態とも竪穴住居1と類似

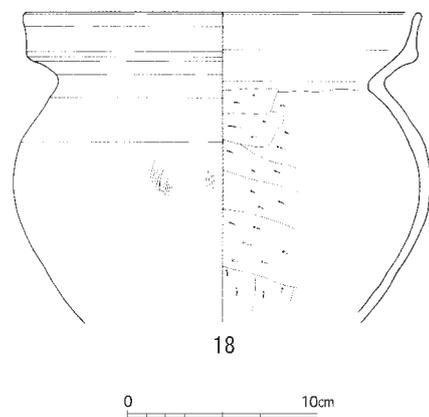


第7図 竪穴住居3 (1/60)・出土遺物 (1/4)

する。埋没途中で被熱を受けており、埋土上面が直径約50cmの範囲で赤色化している。埋土中から弥生土器が出土しているが、細片で図化できなかった。遺構の時期は、竪穴住居1との類似から中期後葉と考えられる。(佐藤)

竪穴住居3 (第2・7図、図版37)

住居北西部が残存する。壁体は直線的で、本来の平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。壁体溝は不明瞭で、壁体際の床面がわずかに傾斜するのが観察された。北側壁体沿いで、倒立して出土した18から、遺構の時期は後期後葉に比定される。(岡田)



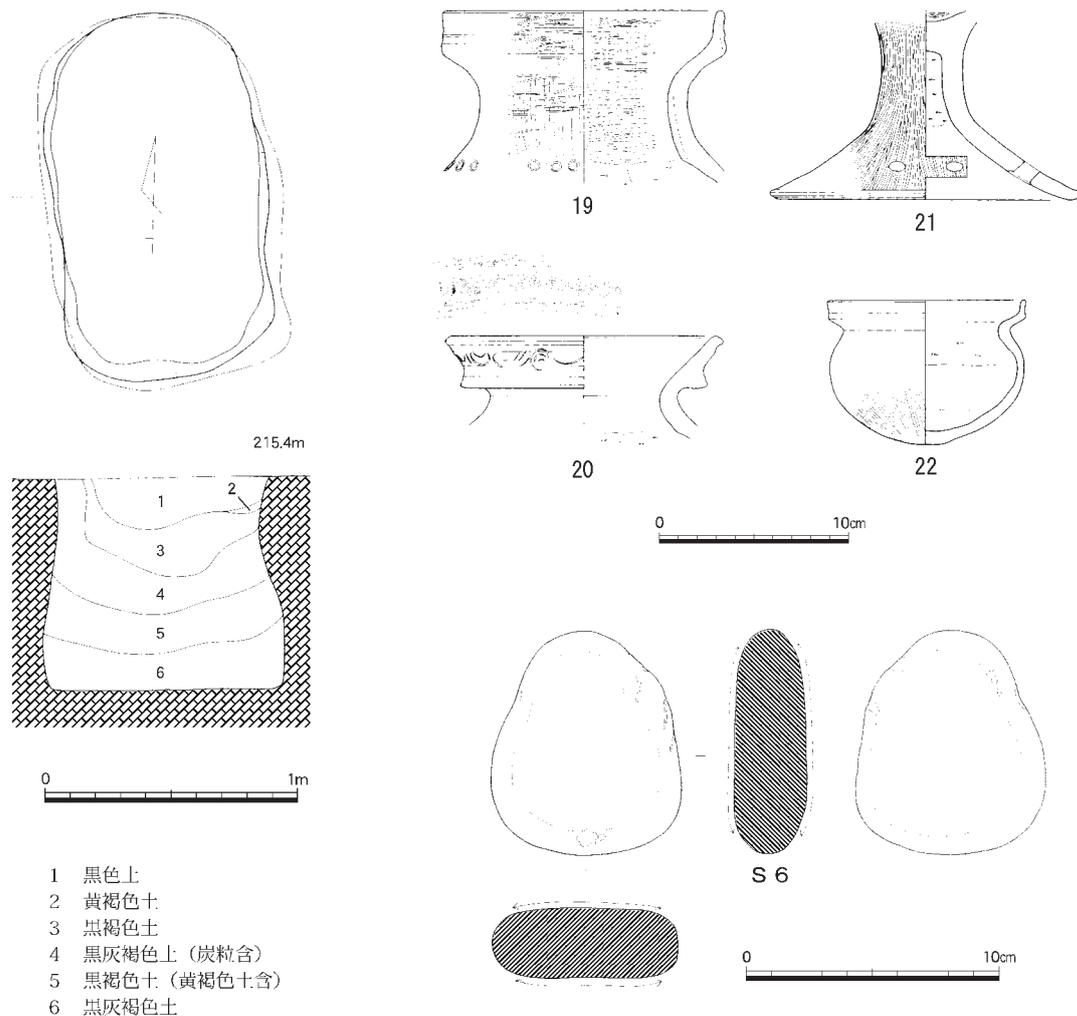
2 袋状土壇

袋状土壇 1 (第2・8図、図版38)

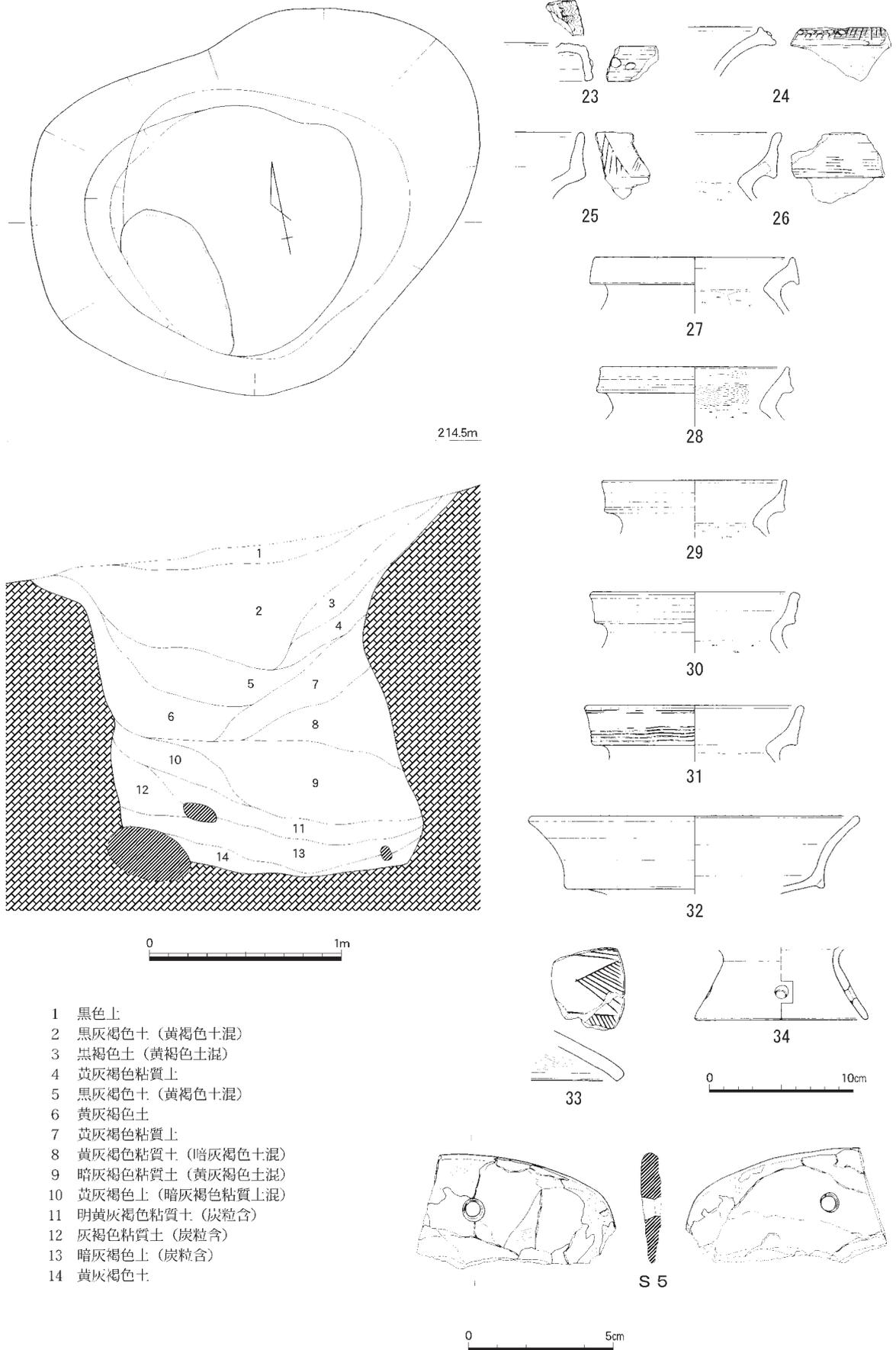
検出面で長径1.45m、短径84cm、深さ85cmを測る。平面形は、上面・底面とも比較的整った長楕円形を呈する。断面形は上方に向かってややすぼまるフラスコ形で、底面は極めて平坦である。出土遺物のうち、19の壺は口縁部外面を凹線文状にヨコナデ後、細かなヘラミガキを施す。また、肩部には3個1単位の円形竹管文を飾る。20の壺口縁部には、ヨコナデによりナデ消された横位のS字状スタンプ文が認められる。S6はひん岩製の磨石で、両面とも使用により平滑である。これらの出土遺物から、遺構の時期は後期後葉に比定される。(岡田)

袋状土壇 2 (第2・9図、図版38)

検出面で長径約2.5m・短径約1.8m、底面までの深さ約2mを測る、大形の袋状土壇である。平面形は上面・底面とも不整形円で、断面形は上方に向かってややすぼまった後、上面で大きく広がる。底面は比較的平坦で、自然石が露出している。埋土の観察から、11~14層まで徐々に堆積し、10層以上は比較的短期間に堆積した状況がうかがえる。出土遺物のうち、遺構の使用・廃絶時期を示すのは

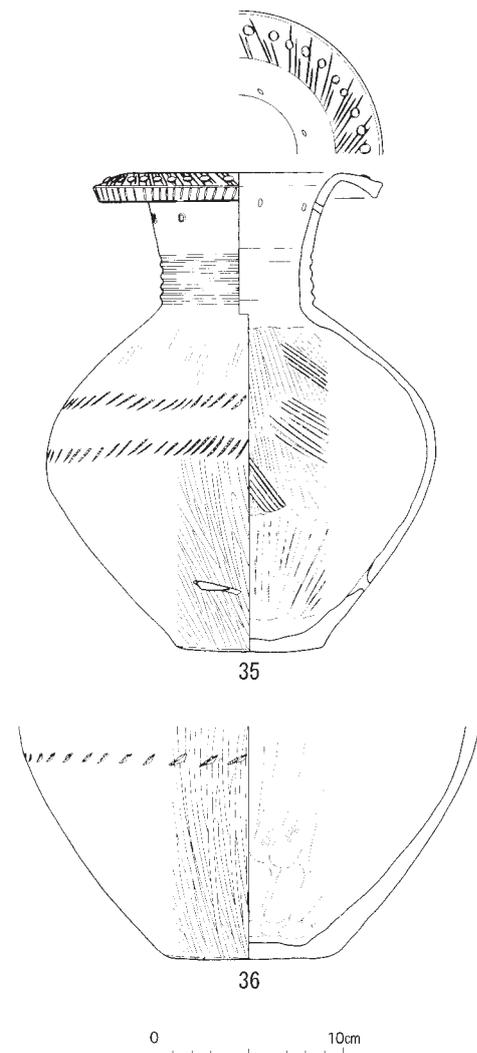
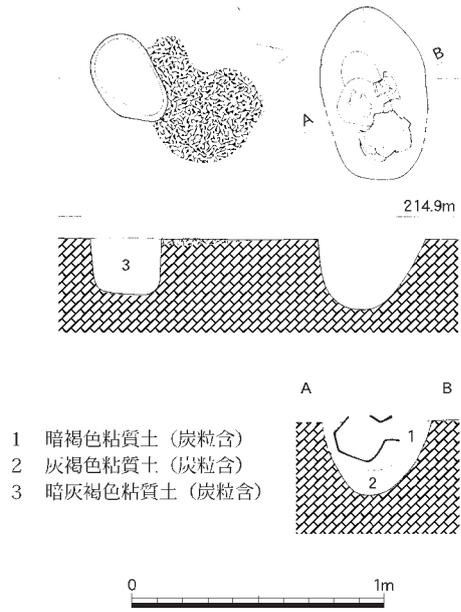


第8図 袋状土壇 1 (1/30)・出土遺物 (1/4, 1/2)



- 1 黒色土
- 2 黒灰褐色土 (黄褐色土混)
- 3 黒褐色土 (黄褐色土混)
- 4 黄灰褐色粘質土
- 5 黒灰褐色土 (黄褐色土混)
- 6 黄灰褐色土
- 7 黄灰褐色粘質土
- 8 黄灰褐色粘質土 (暗灰褐色土混)
- 9 暗灰褐色粘質土 (黄灰褐色土混)
- 10 黄灰褐色土 (暗灰褐色粘質土混)
- 11 明黄灰褐色粘質土 (炭粒含)
- 12 灰褐色粘質土 (炭粒含)
- 13 暗灰褐色土 (炭粒含)
- 14 黄灰褐色土

第9図 袋状土坑2 (1/30)・出土遺物 (1/4, 1/2)



第10図 土壌 1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

25～34で、23・24は混入と考えられる。26～31は、山陰地域の影響を受けた直立口縁の甕で、口縁部の形態・調整・施文にバラエティがある。また、25の壺口縁部や33の高杯脚裾部の線刻鋸歯文は、岡山県南部の影響と推察される。S5は緑色片岩製の磨製石包丁欠損品で、第9層から出土している。これらの出土遺物から、遺構の時期は後期後葉に比定される。(岡田)

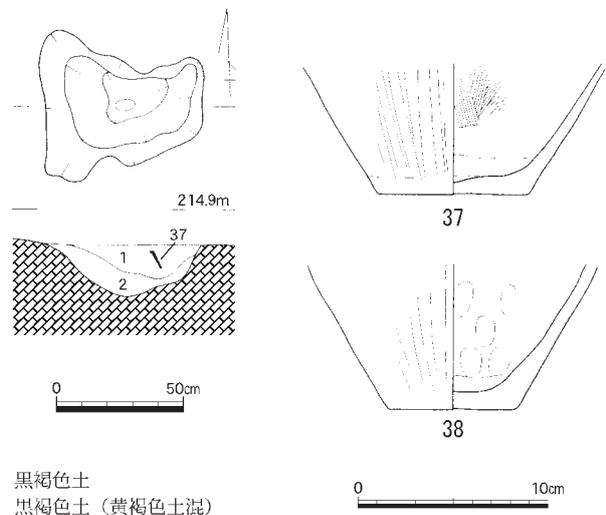
3 土壌

土壌 1 (第2・10図、図版37)

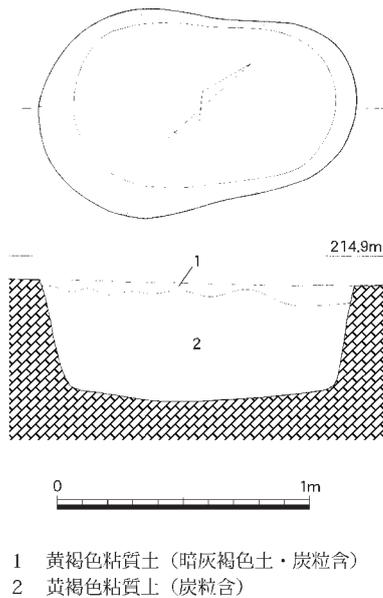
平面形は楕円形を呈し、長径70cm、短径40cmを測る。断面は半円形で、深さ30cmを測る。検出面のレベルで、ほぼ完形の壺35が倒置された状態で出土した。35の胴部下半には、外面からヘラ状道具による穿孔が行われており、内部に破片が残っていた。また、すぐ横で出土した壺36も大きな破片で、本来2個体が埋設されていた可能性もある。遺構の性格ははっきりしないが、上記の出土状況から、土器棺墓あるいは祭祀遺構の可能性も考えられる。また、近接して直径50cmほどの焼上面があるが、その関係ははっきりしない。遺構の時期は、出土遺物から中期後葉に位置付けられる。(佐藤)

土壌 2 (第2・11図)

いびつな平面形を呈し、断面も不整形である。一応、土壌として取り扱ったが、樹根の可能性もある。埋土中から中期後葉の甕37・38が出土している。(佐藤)

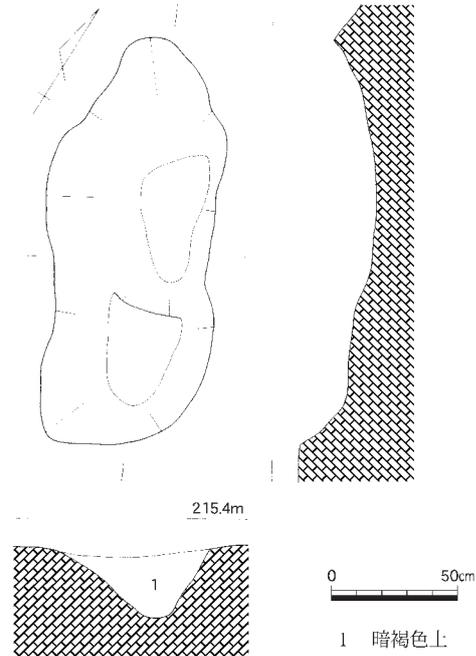


第11図 土壌 2 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 黄褐色粘質土 (暗灰褐色土・炭粒含)
2 黄褐色粘質土 (炭粒含)

第12図 土壌 3 (1/30)



1 暗褐色土

第13図 土壌 4 (1/30)

土壌 3 (第 2・12図)

平面形は楕円形を呈し、長径1.25m・短径75cmを測る。底面は平坦に掘削され、検出面からの深さ48cmを測る。埋土はきれいな黄褐色粘質土で、炭粒をわずかに含む。出土遺物は皆無であるが、埋土から当該期の遺構と判断した。その形態から、土壌墓の可能性も考えられる。(佐藤)

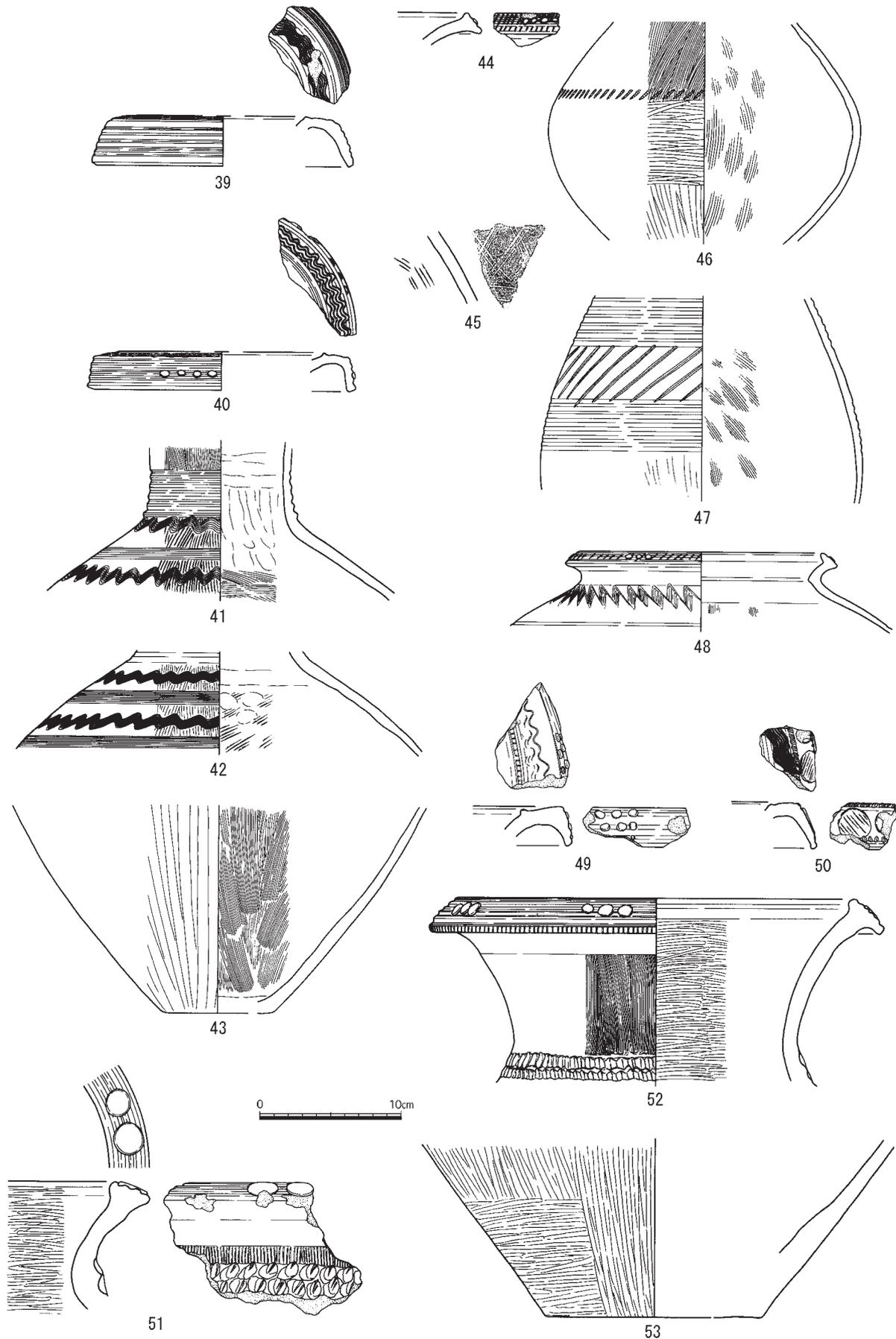
土壌 4 (第 2・13図)

平面形は不整楕円形を呈し、長径1.6m・短径70cmを測る。底面は、南から北に階段状に低くなり、最深部で深さ30cmを測る。出土遺物は無いが、埋土から当該期の遺構と判断した。(佐藤)

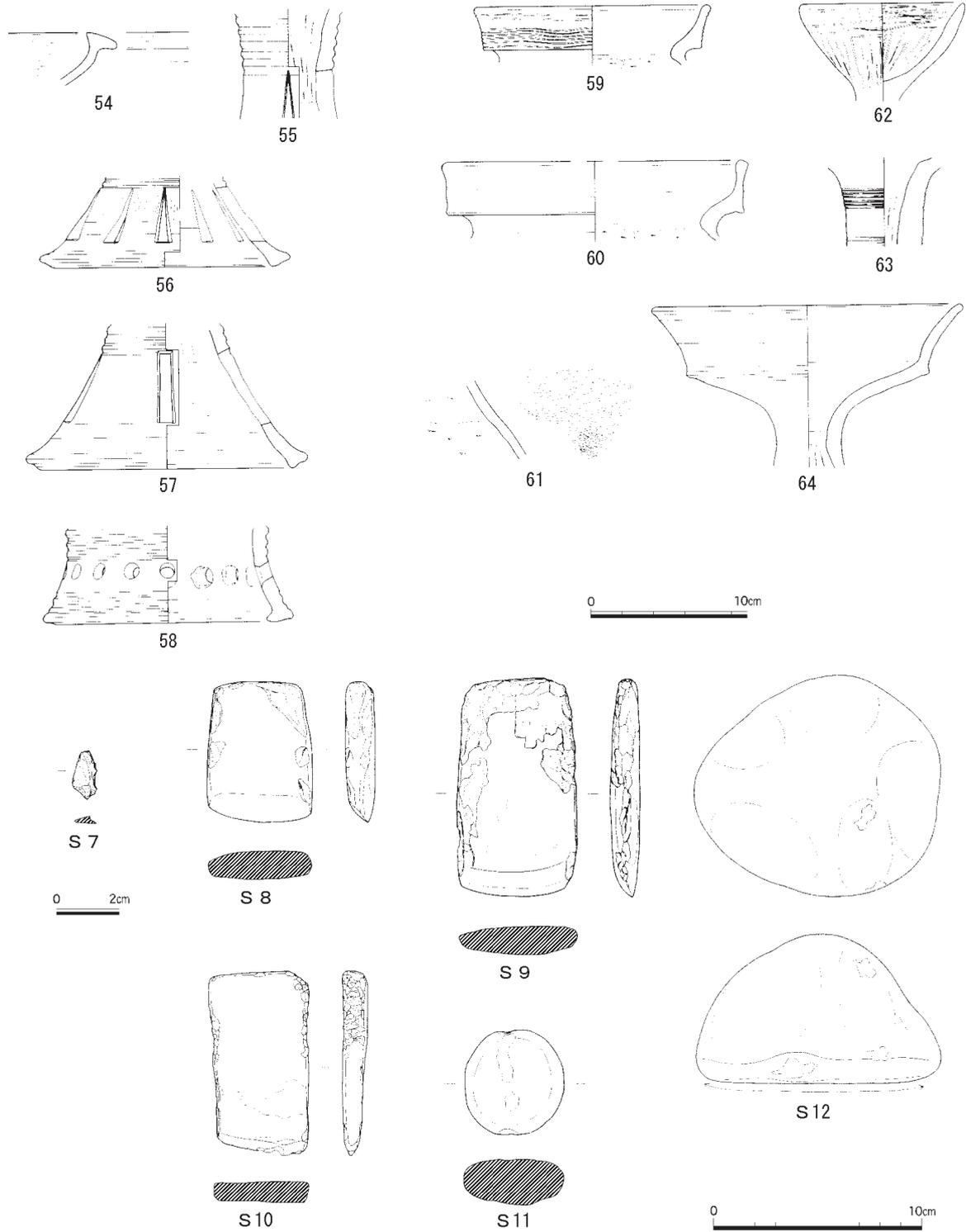
4 遺構に伴わない遺物 (第14・15図、図版39)

旧表土および造成土から出土した弥生時代の遺物は、遺構と同じく大きく2時期に分けられる。1つは39～58で、中期後葉に位置付けられる。また、石器もS7を除きこの時期のものである可能性が高い。もう1つは59～64で、後期後葉に位置付けられる。数量的には前者の方がかなり多い。

39～46は中形壺である。垂下あるいは上下に拡張する口縁部の上面・外面を、櫛描波状文、凹線文、円形浮文、斜線文で飾る(39・40・44)。直立する頸部下半には凹線文を数条巡らし、倒卵形の胴部上半には櫛描波状文・櫛描直線文(41・42)や、半截竹管による斜格子文(45)、ヘラ状工具による列点文を施す(46)。いずれも、胴部内面の調整はハケメあるいはナデで、ヘラケズリ手法は認められない。47は胴部が紡錘形を呈し、古い形態的特徴をもつ。また、胴部上半には凹線文とヘラ描きによる浅い斜線文を施す。焼成は堅緻で器壁も薄く、色調は暗褐色を呈する。他の土器とは一見して異質で、搬入品の可能性もある。48は美作地域に多くみられる算盤玉形の胴部をもつ壺である。49～53は大形壺である。口縁部が垂下するものと(49・50)、拡張するもの(51・52)があり、中形壺と同じく各種文様で飾る。頸胴部の境には指頭押捺文を二重に巡らす。53は胴部下半で、縦方向のヘラミガキと横方向のヘラミガキが切り合っている。54～57は高杯、58は台付鉢の脚部である。59・60は山



第14図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



第15図 遺構に伴わない遺物② (1/4, 1/3, 1/2)

陰地域の影響を受けた直立口縁甕である。59の口縁部外面には櫛描直線文を巡らす。61は壺の胴部上半で、櫛描波状文を2条接して巡らせている。62は鉢形の高杯、64は高杯形の器台である。

S7は黒曜石の剥片で、色調から隠岐産と考えられる。ここでは一応弥生時代の遺物として取り扱ったが、縄文時代に属する可能性もある。S8～S10は中～大形の扁平片刃石斧である。研磨により

鋭利な片刃を研ぎ出しているが、基部・側面周辺には敲打剥離面が未研磨のまま多く残されている。また、全体的に細部の仕上げが甘く、形態的にも弛緩したものとなっている。S10の側面には、縄掛けの敲打調整が細かく施されている。S11は石錘である。扁平な円礫に縄掛けの敲打調整が施されており、重さ80.3gを量る。S12は重さ1325gを量る大形の磨石である。円錐形を呈す体部には、数か所に窪みがあって握りやすい。よく使用されており、底面は平滑である。(佐藤)

第4節 小結

発掘調査の結果、岡遺跡は縄文～弥生時代の集落遺跡であることが明らかになった。以下、一次調査・全面調査の成果と、周辺遺跡との関係についてまとめる。

調査地一帯は、第1節でも述べたように近現代以降の耕地開発により大きく地形改変を受けていたが、広範に実施した確認調査の成果から、ある程度旧地形を復元することができる。T10-T9-T3-T5にかけて、東から西に向かって舌状に丘陵が延びており、全面調査区はその先端に位置する。その一方、T6～T8・T11は浅い谷地形、T1の南側は急峻な谷となっている。これより、岡遺跡の領域は、谷地形に挟まれた丘陵尾根上を中心とする東西に細長い範囲であったと想定され、全面調査区は遺跡西端部にあたると考えられる。

岡遺跡では、縄文早期、縄文後期、弥生中期後葉、弥生後期後葉の4時期の遺構・遺物を確認した。

縄文早期については、わずか2点の土器片が出土したのみで、具体的な状況は分からない。同時期の遺物は、近接する河内構遺跡、札ノ尾遺跡、箱E遺跡でわずかながら出土しているが、いずれも長期の生活痕跡は認められず、小集団が短期間のうちに移動を繰り返していた状況を示している。縄文後期については、遺構は確認できなかったものの10数点の土器片が出土した。土器表面はさほど摩耗しておらず、この一帯で小規模ながら定住的な生活が営まれていたことをうかがわせる。また、久田原遺跡、久田堀ノ内遺跡、夏栗遺跡でも当該期の遺物が出土しており、吉井川左岸に形成された微高地とその周縁の低丘陵上に、小規模集落が点在していたと考えられる。

弥生中期後葉については、竪穴住居2軒、土壙2基を検出した。また、比較的多くの遺物が出土しており、岡遺跡の主体となる時期といえる。このうち竪穴住居については、平面方形で規模が小さく、支柱穴・焼土面もないことから、通常の円形竪穴住居とは機能を異にする可能性もある。近隣では、北方300mに位置する峪畑遺跡のほか、城峪城跡、札ノ尾遺跡で同時期の遺構・遺物を確認しており、調査地周辺の丘陵上には当該期の集落が点在していたものと思われる。一方、久田原遺跡では、これら丘陵部の諸遺跡に若干先行して集落形成が始まっており、規模・内容とも秀でている。こうした状況から、岡遺跡は久田原遺跡から派生した分村的な集落と考えられ、この一帯に久田原遺跡を中核とする集落群が形成されていた状況が想定される。

弥生後期後葉については、竪穴住居1軒、袋状土壙2基を検出した。遺物量は少なく、前代に比べ集落密度は薄くなっているが、同時期の遺構・遺物は、丘陵部では河内構遺跡・ナル林遺跡・北条高下遺跡・城峪城跡、平野部では久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡・夏栗遺跡で確認されており、集落域の拡散が指摘できる。

なお、調査地周辺で五輪塔の集積が認められた(第1図★)。かつてこの一帯にあったものが、耕地開発で移動・集積されたと思われるが、調査では中世の遺構・遺物は確認できなかった。(佐藤)

竪穴住居一覧表

遺構名	平面形	規模(cm)			長軸の向き N° - E	床面積 (㎡)	海拔高 (m)	支柱	柱間 (cm)	付属施設					時期	備考
		長さ	幅	深さ						高床部	方形土壇	中央穴	土上面	カマド		
竪穴住居1	隅丸長方形	230	200	15	N-10-E	4.6	213.50	4	255~210	—	—	—	3	—	弥生中期後葉	
竪穴住居2	方形	282	192	10	N-60-W	4.8	214.70	—	—	—	—	—	1	—		
竪穴住居3	方形	(332)	(172)	20	N-82-W	(4.3)	214.02	2	167~200	—	—	—	—	—	弥生後期後葉	

袋状土壇一覧表

遺構名	平面形	断面形	計測値(cm)/面積(㎡)				底面海拔 高(m)	時期	備考
			上面径	底面径	深さ	面積			
袋状土壇1	長楕円形	Ⅱ a	145	146	85	1.2	214.45	弥生後期	
袋状土壇2	不整楕円形	Ⅱ a	250	148	200	1.6	212.24		

土壇一覧表

遺構名	平面形	断面形	計測値(cm)			底面海拔 高(m)	時期	備考
			長径	短径	深さ			
土壇1	不整楕円形	Ⅲ b	70	40	30	214.53	弥生中期	
土壇2	不整楕円形	Ⅲ b	62	36	20	214.58		
土壇3	楕円形	Ⅱ a	125	75	48	214.32	弥生中～ 後期	
土壇4	不整楕円形	Ⅲ b	160	70	30	215.02		

土器観察表①

掲載 番号	掲載 遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
1	包含層	縄文土器	深鉢				鈍橙色(7.5YR7/4)		外面に山形押型文、内面ナデ
2		縄文土器	深鉢				鈍橙色(7.5YR7/4)		外面に山形押型文、内面ナデ
3		縄文土器	深鉢	(27.7)			鈍褐色(7.5YR5/4)		波状口縁 外面にR Lの磨消縄文、内面ナデ
4		縄文土器	深鉢				橙色(7.5YR6/6)		外面にR Lの磨消縄文、内面ナデ
5		縄文土器	深鉢				鈍橙色(7.5YR5/4)		外面にR Lの磨消縄文、内面ナデ
6		縄文土器	深鉢				黒色(2.5Y2/1)		波状口縁 口縁端部に沈線文
7		縄文土器	深鉢				鈍橙色(7.5YR7/3)		外面にR Lの磨消縄文、内面ナデ
8		縄文土器	深鉢				鈍橙色(7.5YR7/4)		外面にR Lの磨消縄文、内面ナデ
9		縄文土器	深鉢				鈍橙色(7.5YR6/4)		外面にR Lの磨消縄文、内面ナデ
10		縄文土器	深鉢				鈍褐色(7.5YR6/3)		外面にR Lの磨消縄文、内面ナデ
11		縄文土器	深鉢				鈍黄橙色(10YR7/3)		外面二枚貝殻条痕、内面ナデ
12		縄文土器	深鉢				鈍橙色(5YR7/4)		外面二枚貝殻条痕、内面ナデ
13		縄文土器	深鉢				鈍橙色(7.5YR6/3)		外面二枚貝殻条痕、内面ケズリ
14	竪穴住居1	弥生土器	壺				暗灰色(N3/1)		肩部に櫛描直線文・波状文、沈線文
15		弥生土器	甗		9.0		鈍橙色(5YR7/4)		
16		弥生土器	高杯	(23.2)			鈍黄橙色(10YR7/4)		
17	弥生土器	高杯	14.7	12.0	19.0		鈍橙色(7.5YR6.5/4)	完形	鈿部に2個1組の円孔、杯部底面は凹殻充填
18	竪穴住居3	弥生土器	甗	20.5			鈍橙色(5YR7/4)		
19	袋状土壇1	弥生土器	壺	14.4			鈍褐色(7.5YR6/3)		肩部に円形竹管文
20		弥生土器	壺	13.8			橙色(2.5YR5/6)		口縁部にS字状スタンプ文
21		弥生土器	高杯		15.6		鈍橙色(5YR7/5)		
22		弥生土器	鉢	10.1	1.4	7.7	鈍黄橙色(10YR7/2)		
23	袋状土壇2	弥生土器	壺				鈍橙色(7.5YR6/4)		口縁部に凹線、櫛描波状文、円形浮文
24		弥生土器	壺				橙色(5YR6/6)		口唇部に凹線、刻目、円形浮文
25		弥生土器	壺				橙色(2.5YR7/6)		口縁部外面に鋸歯文

土器観察表②

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
26	袋状土壇 2	弥生土器	甗				鈍橙色(5YR7/4)		口縁部外面に櫛描直線文
27		弥生土器	甗	13.6			鈍橙色(7.5YR7/4)		
28		弥生土器	甗	12.8			褐灰色(10YR6/1)		
29		弥生土器	甗	12.5			橙色(7.5YR7/6)		
30		弥生土器	甗	14.0			鈍橙色(7.5YR7/3)		
31		弥生土器	甗	14.6			鈍橙色(7.5YR7/4)		口縁部外面に線刻鋸歯文
32		弥生土器	器台	22.4			鈍橙色(7.5YR7/4)		
33		弥生土器	高杯				灰黄褐色(10YR6/2)		脚端部に鋸歯文
34		弥生土器	器台		11.7		橙色(5YR7/6)		脚部に4個1組の円孔
35	上壇 1	弥生土器	壺	9.0	7.5	25.4	浅黄褐色(10YR8/3)	完形	頸部に凹線文4条、口縁部に斜線文、刺突文、円形浮文 胴部に焼成後穿孔
36		弥生土器	壺		9.0		鈍赤褐色(5YR5/4)		胴部に刺突文
37	土壇 2	弥生土器	甗		9.0		灰褐色(7.5YR8/8)		
38		弥生土器	甗		6.2		鈍橙色(5YR6/4)		
39	包含層	弥生土器	壺	15.6			灰黄褐色(10YR6/2)		口縁部に凹線文、櫛描波状文
40		弥生土器	壺	14.4			鈍橙色(7.5YR6/4)		口縁部に波状文、凹線文、円形浮文
41		弥生土器	壺				鈍褐色(7.5YR6/3)		頸部に凹線5条、胴部に櫛描波状文・直線文
42		弥生土器	壺				鈍黄褐色(10YR7/2)		胴部に櫛描波状文・直線文
43		弥生土器	壺		8.0		鈍橙色(7.5YR7/4)		
44		弥生土器	壺				鈍橙色(5YR6.5/4)		口唇部に凹線文、刻目文、円形浮文
45		弥生土器	壺				鈍橙色(7.5YR6/4)		肩部に半截竹管の斜格子文
46		弥生土器	壺				鈍橙色(5YR6/4)		胴部に列点文
47		弥生土器	壺				鈍橙色(5YR6/4)		胴部に凹線文、へら描斜線文 搬入品の可能性
48		弥生土器	壺	17.0			鈍橙色(5YR7/4)		口唇部に刺突文、凹線文、円形浮文肩部に櫛描波状文
49		弥生土器	壺				鈍褐色(7.5YR7/4)		口縁部に波状文、円形浮文
50		弥生土器	壺				鈍褐色(7.5YR6/4)		口縁部に波状文、円形浮文
51		弥生土器	壺				鈍褐色(5YR6/4)		口縁部に凹線文、円形浮文 頸部に指頭片痕文
52		弥生土器	壺	28.0			鈍褐色(5YR6.5/3)		口縁部に凹線文、円形浮文 頸部に指頭片痕文
53		弥生土器	壺		15.3		鈍褐色(5YR6/4)		
54		弥生土器	高杯				鈍褐色(7.5YR5/2)		
55	弥生土器	高杯				鈍褐色(7.5YR7/3)		脚部に三角形透かし	
56	弥生土器	高杯	13.6			鈍褐色(7.5YR6/4)		脚部に三角形透かし	
57	弥生土器	高杯		16.0		鈍褐色(7.5YR6/3)		脚部に長方形透かし	
58	弥生土器	台付鉢		14.3		灰褐色(7.5YR5/2)		脚部に凹線、円形透かし	
59	弥生土器	甗	14.6			鈍褐色(7.5YR7/4)		口縁部に櫛描直線文	
60	弥生土器	甗	18.5			鈍褐色(7.5YR7/4)			
61	弥生土器	壺				鈍褐色(7.5YR7/4)		胴部に櫛描波状文	
62	弥生土器	高杯	10.2			褐色(2.5YR6/6)			
63	弥生土器	高杯				鈍赤褐色(5YR5/4)		脚部に沈線	
64	弥生土器	器台	19.4			褐色(5YR7/6)			

石製品一覧表

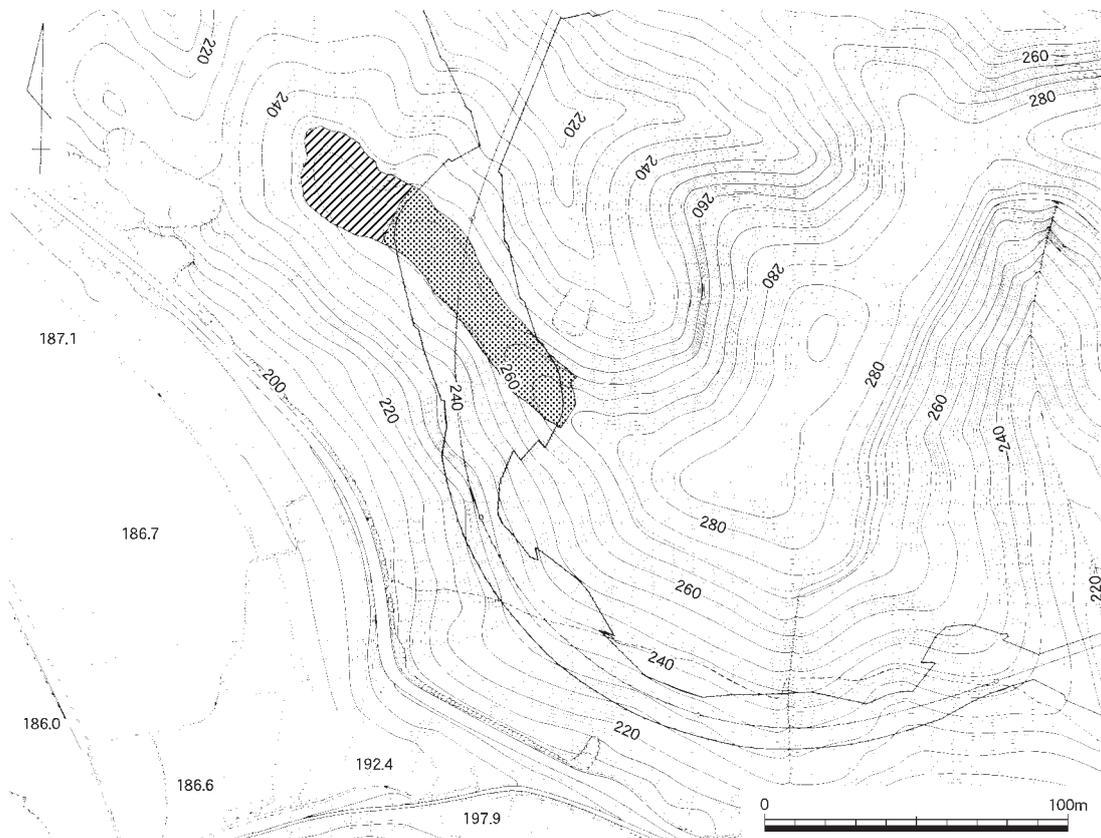
掲載番号	掲載遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S 1	竪穴住居 1	扁平片刃石斧	51.0	30.5	10.0	21.3	流紋岩	弥生中期	
S 2		未成品	50.0	48.5	13.5	26.0	流紋岩	弥生中期	
S 3		未成品	52.0	24.0	7.0	10.9	流紋岩	弥生中期	
S 4		未成品	48.0	23.5	5.8	7.4	流紋岩	弥生中期	
S 5	袋状土壇 2	磨製石包丁	69.0	40.0	6.8	24.0	緑色片岩	弥生	
S 6	袋状土壇 1	磨石	89.5	75.0	30.0	332.7	ひん岩	弥生後期	
S 7		剥片	16.0	8.0	2.0	0.2	黒曜石	縄文～弥生	推定隠岐産
S 8	包含層	扁平片刃石斧	68.0	50.5	14.0	94.2	流紋岩	弥生	
S 9		扁平片刃石斧	106.0	58.0	14.0	152.3	サヌカイト	弥生	
S 10		扁平片刃石斧	89.5	48.0	12.0	81.9	流紋岩	弥生	
S 11		石錘	51.0	48.0	22.0	80.3	角閃ひん岩	弥生	
S 12		磨石		117.0	74.0	1,325.0	斑れい岩	弥生	

第11章 比丘尼ヶ城跡

第1節 城郭の立地と調査の概要

比丘尼ヶ城跡は、吉井川流域を眼下に見下ろす、標高287mの山頂に築かれた山城である。『作陽誌』では、「下原堡」として「同村（久田下原村を指す）に在り。或いは比丘尼城と名づく。山北に弥谷有りて水流出して西の渠溝に入る。山南二丁余も亦故壘（城峪城跡を指す）在り。共に何人の住むやを知らず。」と記載されているが、本報告では周知の遺跡名「比丘尼ヶ城跡」の表記に従う。

平成5年度の分布調査により、城郭の位置と主要な縄張りは把握されていたが、その後の現地踏査で、山頂から北西方に派生する尾根筋上に、堀切状の窪みが発見された（堀切3）。この尾根筋は、湖岸道路建設地と久田神社移転候補地となっていたため、平成9年度と10年度の2回にわたり発掘調査を実施した。平成9年度はおもに湖岸道路路線内の発掘調査を実施し、山頂の城郭本体の測量調査にも着手した。さらに11月には、ヘリコプターによる空中撮影と航空測量を併せて実施し、久田原遺跡などを含めた俯瞰写真は貴重な記録写真となった。平成10年度は久田神社移転候補地である路線西側部分の精査に着手するとともに、城郭全容の測量作業を完了させた。発掘調査では地形的に高い場所にもかかわらず、横口付炭窯が発見されるなど、大きな成果を挙げることができた。（岡田・佐藤）



第1図 調査位置図 (1/2,500) ■■■■■ 平成9年度調査 ▨▨▨▨▨ 平成10年度調査

第2節 城郭を構成する遺構

1 概要

標高287.5m、平野部との比高約100mを測る丘陵山頂に築かれた山城である。基本的な縄張りは、中心となる曲輪の周囲に防御施設を配置するシンプルなものである。城郭の中心は、最高所に位置し、最も規模が大きい曲輪1である。その中央には、城郭の中核的施設と考えられる土壇状遺構1がある。曲輪1の周囲には、背後の山塊から延びる尾根筋を分断する2条の堀切（堀切1・2）と、「コ」字状に曲輪1を囲繞する曲輪2を配置し、防御を固めている。さらに、丘陵先端部から左右に派生する尾根筋に、それぞれ曲輪3・堀切3を配している。城内への進入路はこの尾根筋と考えられ、曲輪1南西部と曲輪3南辺沿いにあるつづら折りの古道（第2図a・b）は、これを踏襲している可能性が高い。城郭の時期を示す出土遺物は皆無であるが、つぶて石の可能性のある円礫1点を曲輪2で採集している。石材は斑れい岩で、長さ10.5cm・幅7.9cm・厚さ6.4cm・重さ80gを測る。（佐藤）

2 曲輪

曲輪1（第2図、図版41）

城郭の中心となる曲輪で、全長約76m・幅8.0～24.2m・外縁長180.9m・面積1036.0㎡を測る。曲輪内はほぼ平坦であるが、旧地形の影響で北東から南西に向かってやや傾斜しており、その比高は約50cmを測る。地表観察の限り、曲輪内には土壇状遺構1のほかに構造物は認められない。（佐藤）

曲輪2（第2図、図版41）

曲輪1の周囲を「コ」字状に囲繞する細長い曲輪で、外縁長174.0m・幅1.5～5.4m・面積486.6㎡を測る。丘陵斜面を切岸することで狭長な平坦面を確保したと考えられ、曲輪1－曲輪2間は傾斜角約40°、平面距離4～6m・比高4～5mを測る。曲輪南西部は上下2段に分かれており、上段（c）と下段（d）との比高は最大2mを測る。この場所は、城内への進入路を踏襲した可能性が高い古道（b）の前面にあたり、防御機能を強化する目的で2重構造にしたと考えられる。（佐藤）

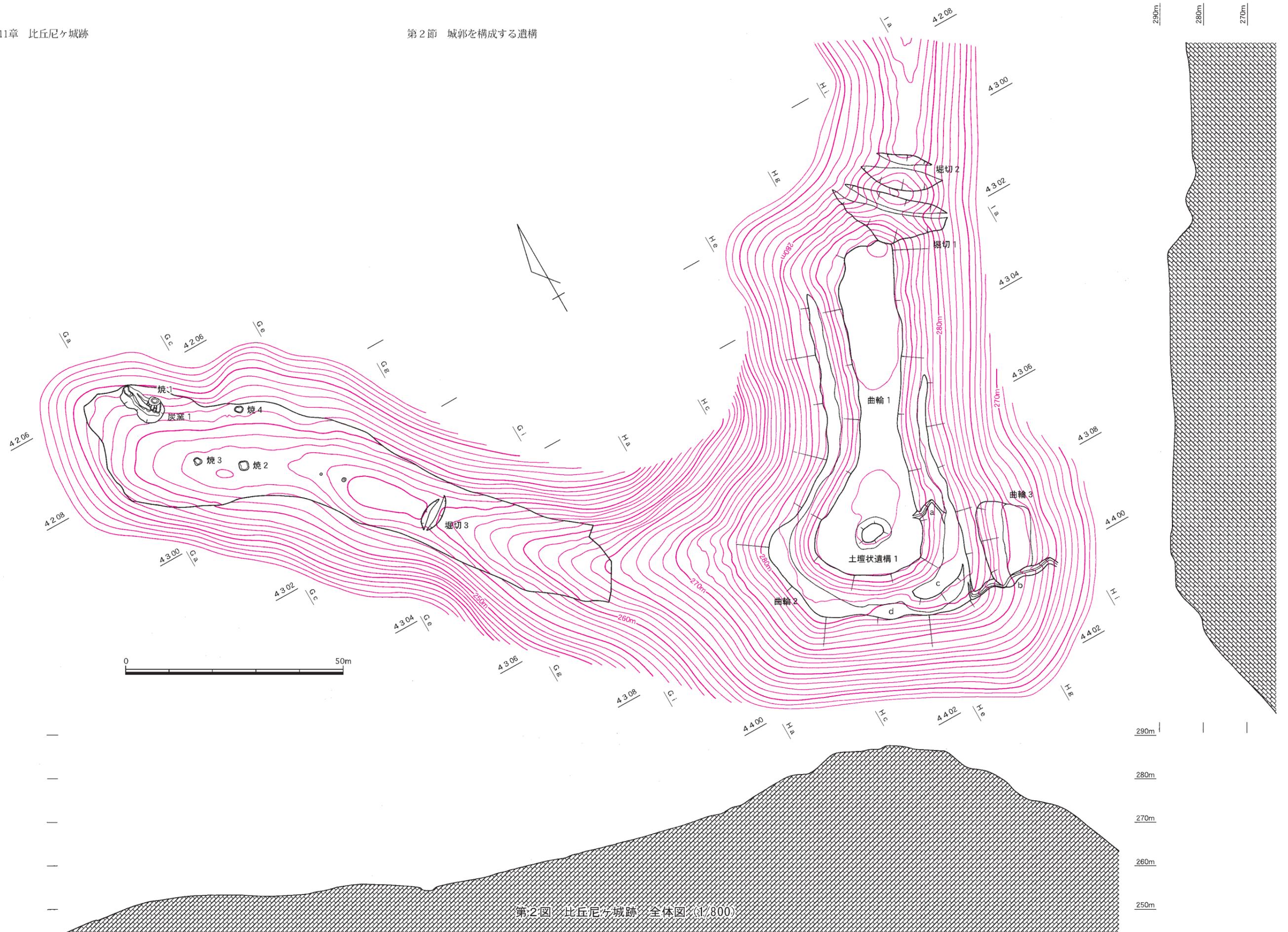
曲輪3（第2図）

曲輪1から南東方向に派生する尾根上に設けられた曲輪である。丘陵斜面をL字状にカットし、長さ約16.2m・幅約6.2m・面積89.2㎡を測る方形平坦面を作り出している。曲輪2－曲輪3間は、傾斜角約40°・平面距離約9m、比高5～7mを測る。（佐藤）

3 堀切

堀切1・堀切2（第2図、図版41）

北西の山塊から延びる尾根筋を分断し、城郭を独立した要害とすると共に、背後の防御の要となる堀切である。現状で、堀切1は長さ28m・上面幅10.8m・底面幅60cmで断面V字形を呈し、堀切2は長さ19m・上面幅8.0m・底面幅80cmで断面U字形を呈する。堀切自体の深さは2m弱であるが、曲輪1との比高は約6mと絶壁をなし、その傾斜も30～40°を測る。堀切1と堀切2の間隔は、肩口間で1.3m・堀底中心間で10.2mを測る。地表観察の限り、付随する土塁などは確認できない。（佐藤）



第2図 比丘尼ヶ城跡 全体図 (1/800)

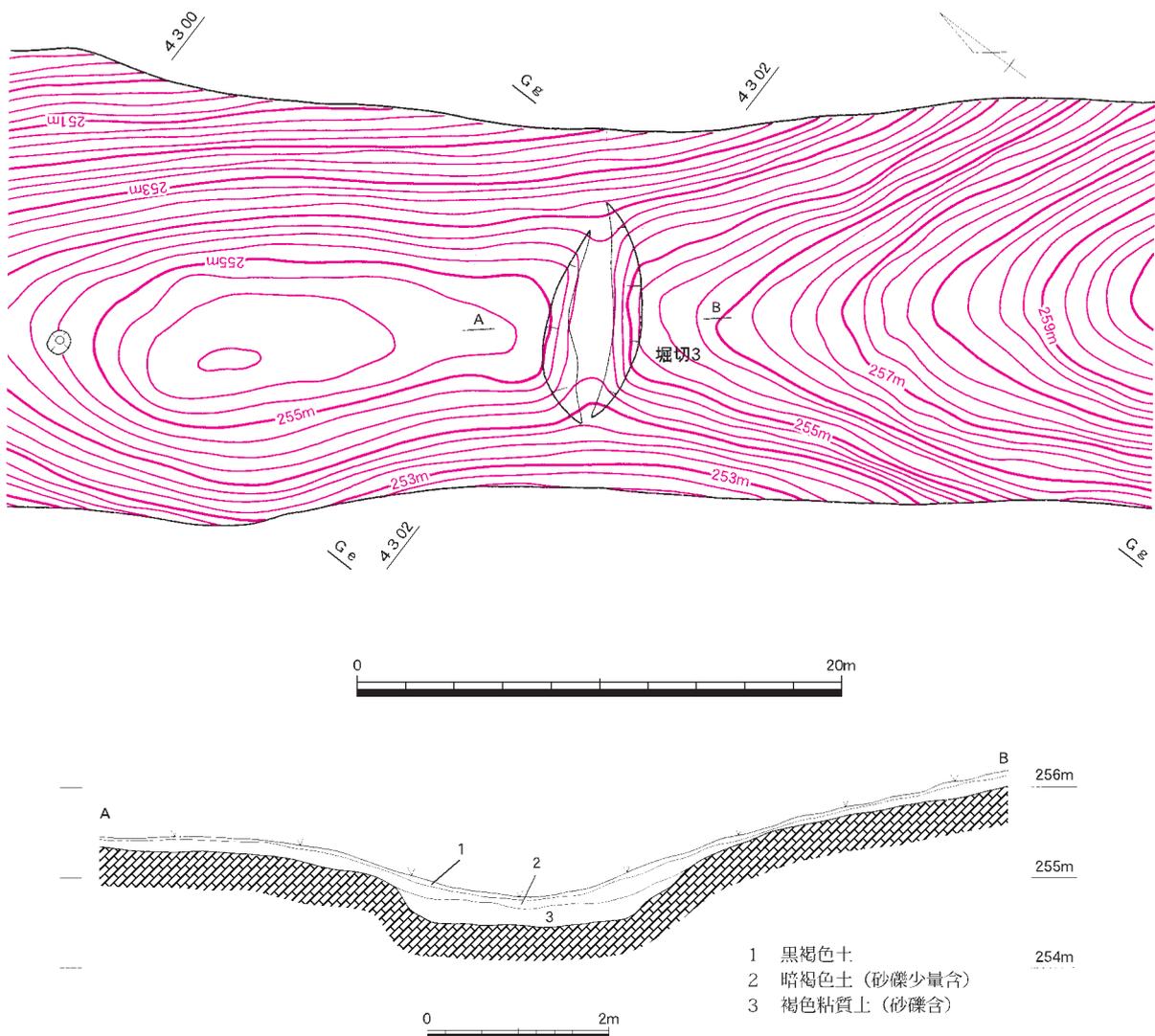
堀切3 (第2・3図、図版41)

曲輪1から北西方向に派生する痩せ尾根を分断する堀切である。曲輪1からの平面距離は約100mで、比高約33mを測る。その規模は、長さ8.5m・上面幅3.9m・底面幅2.2m・深さ50~60cmを測り、断面形は浅く幅広い逆台形を呈す。付随する柱穴や土塁は認められず、出土遺物も皆無であった。遺構の性格について、単なる防御施設とするにはあまりに小規模で、実際の戦闘で有効なものとは考え難い。むしろ、尾根筋の傾斜変換点に位置することから、城域を区画する役割をもっていた可能性が考えられる。なお、堀切3以西の比較的平坦な尾根筋について、城郭に関係する遺構は認められなかったものの、自然地形を活かして曲輪として利用していた可能性は十分考えられる。(佐藤)

4 土壇状遺構

土壇状遺構1 (第2図)

曲輪1の南西部、城郭全体のほぼ中央かつ最高所に位置する。遺構自体は、高さ50cmほどの低平な土壇状の高まりで、曲輪1を造成する際にこの部分だけ削り残したものと考えられる。平面形は上面



第3図 堀切3 (1/300, 1/80)

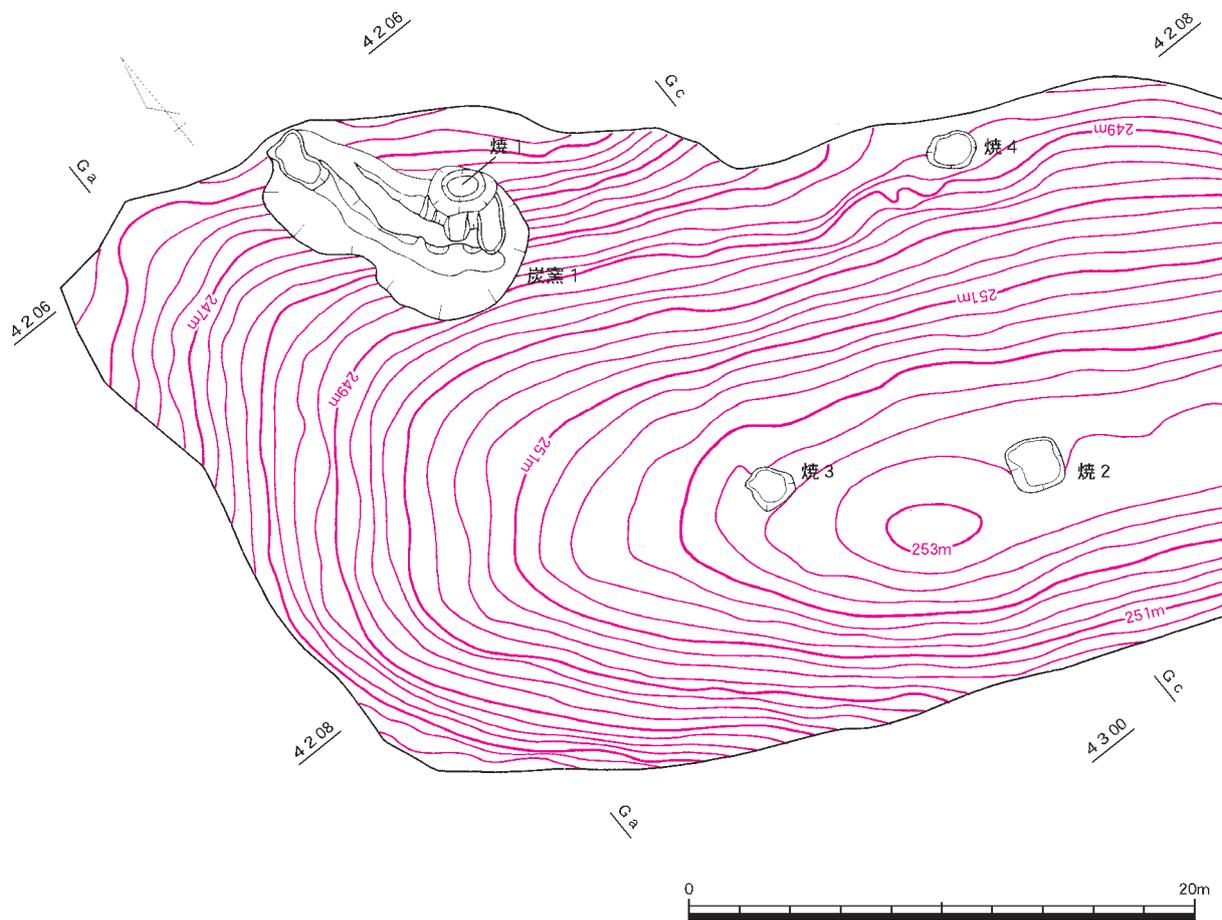
・底面とも不整楕円形を呈し、現状で上面は5.0×3.5m、底面は8.5×6.5mを測る。上面は比較的平坦で、中央に近世以降とみられる石製の祠1基が遺存している。発掘調査を行っていないため、建物など上部施設の有無は不明である。このため遺構の性格もはっきりしないが、地表観察の限りでは建物基壇や防御施設の可能性は低い。むしろ、城郭の中心に位置することや、後代とはいえ祠が祀られていることを勘案すると、城郭の精神的な拠り所、いわゆる城八幡などの信仰に関わる施設の可能性も考えられる。なお、同様の遺構が近接する久田上原城跡にもあり、相互の関連を示唆する。(佐藤)

第3節 城郭以外の遺構と遺物

1 炭窯

炭窯 1 (第2・4～6図、巻頭図版5、図版42・43)

炭窯 1 は南東から派生する尾根の北側緩斜面上に立地し、主軸を等高線に対してやや斜め方向に構築されている。窯体は緩やかな弧状を呈し、地山を掘りくぼめて築いている半地下式である。規模は長さ10.9m、幅6.4mほどを測る。地山カット面から横口側作業面までの比高差は約3.5mである。この炭窯では焚き口は残存しておらず、また煙道は後に述べる焼成土壙 1 のトレンチにより破壊されている。そのため、焚き口は被熱範囲の北端、煙道は窯体の南端と想定して記述していることを断って



第4図 炭窯 1・焼成土壙 1～4 配置図 (1/300)

おく。

焼成部の長さは、焚き口と煙道が破壊されているため明確に判じがたいが、被熱範囲から6.1mと想定される。幅は最大値75cm、高さは焼成部山側で90cm～1.3m、谷側で最大80cmを測る。煙道側壁面はほぼ垂直に立ち上がっているが、焚き口側壁面は緩やかに上方に拡張している。壁面は強い熱影響により赤化・硬化し、また床面から最大60cmの高さまでタールが付着している。床面は焚き口から煙道に向けて約18°傾斜し、比高差約1.1mを測る。床面も壁面と同様に赤化・硬化し、タールが付着している。床面直上層では炭塊・焼土塊が多量に含まれている。焼土塊には明確に天井部と認められるものは存在していなかった。埋土中には地山のものと考えられる10cm大の角礫が多数含まれている。

焚き口から北側には平坦面が続き、これが焚き口作業面と考えられる。長さ1.9m、床面最大幅90cm、壁面は焼成部と比べて低く約20cmを測る。床面には貼り床等の整地はされていない。床面上にはおそらく掻き出したものと思われる炭片が堆積していた。この作業面の北側には、焚き口における何らかの作業に使われたものと考えられる、長さ2.4m、幅1.4m、深さ20cmの土壙が確認されている。埋土は炭粒・焼土粒を含む黄褐色土である。

横口は焼成部南側に2か所確認されている。南側は高さ82cm、幅62cmの楕円形を呈し、北側は高さ46cm、幅42cmの円形である。横口は地山を掘り抜いて作られている。いずれの横口も天井部から底面にかけて被熱痕跡が認められる。横口谷側の作業面は後世に削平を受けて操業当時の姿をとどめていないが、現状で幅約70cmの平坦面を形成している。この平坦面北側では貼り床等の床面整形は認められなかったが、南側では貼り床と考えられる層（17層）を確認している。

炭窯1の時期は、焚き口作業面北側の土壙から出土した須恵器杯身1から、7世紀後半を想定したい。なお、炭窯1から出土した炭片について樹種鑑定を行ったところ、コナラ属アカガシ亜属とクマシデ属イヌシデ節との鑑定結果が出されている。（小嶋善邦）

2 焼成土壙

焼成土壙1～4（第2・4～7図）

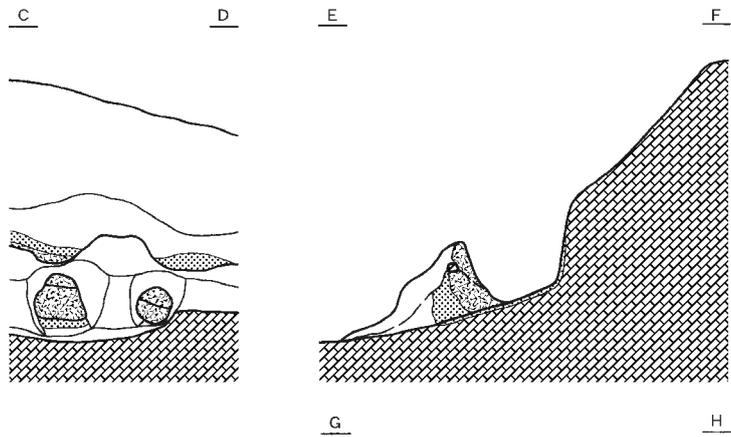
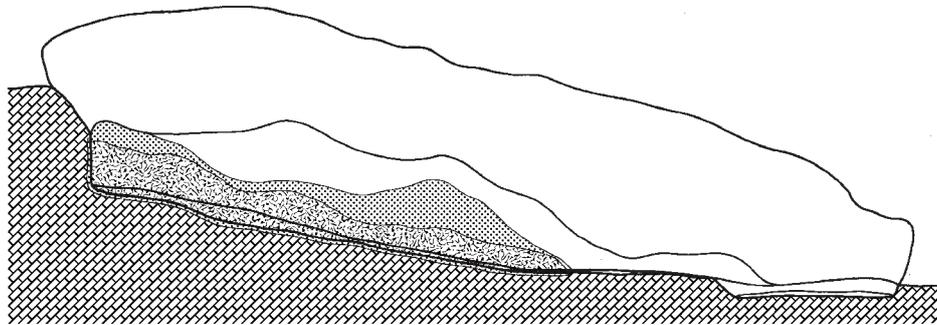
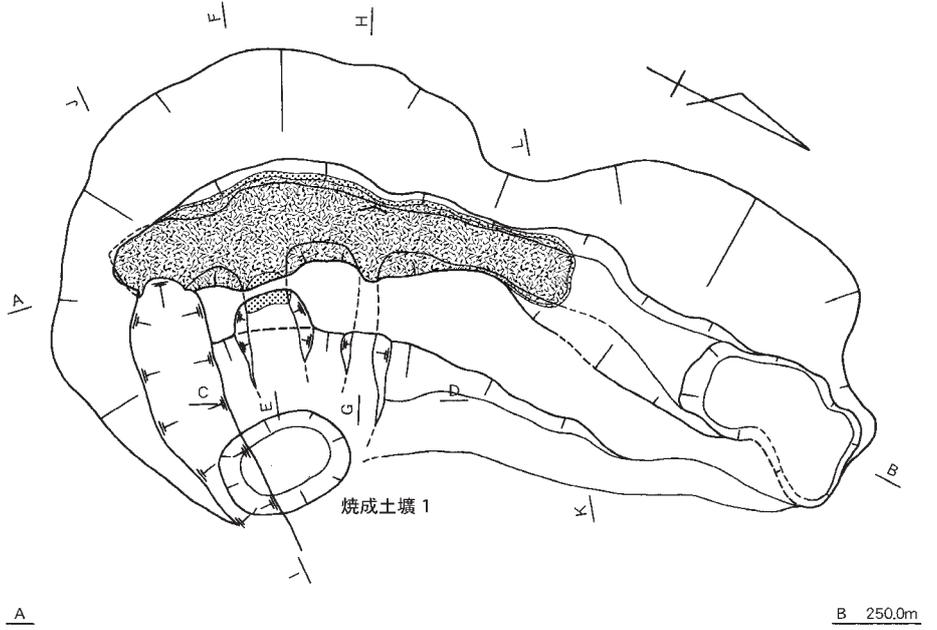
焼成土壙1は、炭窯1の横口から約1m北東側に位置している。長さ約1.7m、幅約1.3mの楕円形を呈し、深さは検出面から約70cmを測る。埋土最下層の第7層はカーボンベッドと考えられる層で、その上層の第6層が床面と考えられる。この床面上部は強い熱影響が認められた。遺物は鉄塊系遺物M1が出土しているのみで、時期が特定できるものはない。なお、炭窯1廃棄後に堆積した地山風化土（第6図8・9層）を切っていることから、炭窯1より後出である。

焼成土壙2は、尾根頂部の平坦面に位置している。一辺約2.1mを測る隅丸方形を呈し、底面は平坦で、検出面からの深さは約15cmを測る。埋土にはすべて炭が含まれていた。

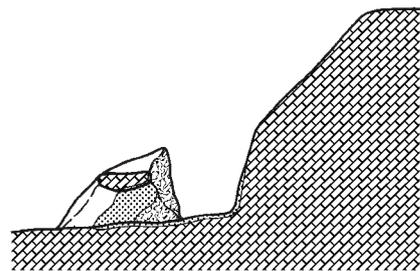
焼成土壙3は、尾根平坦面の西端、焼成土壙2から約8m北西に位置している。不整楕円形を呈し、長径約2m、短径約1.6m、深さ約15cmを測る。

焼成土壙4は、尾根北側の等高線が緩やかになっている所に位置している。長径1.92m、短径1.5mの不正楕円形を呈している。検出面から深さ約20cmを測る底面は平坦で、北東側を除き強い熱影響を受けている。底面直上の第3層はカーボンベッドとも考えられる層である。

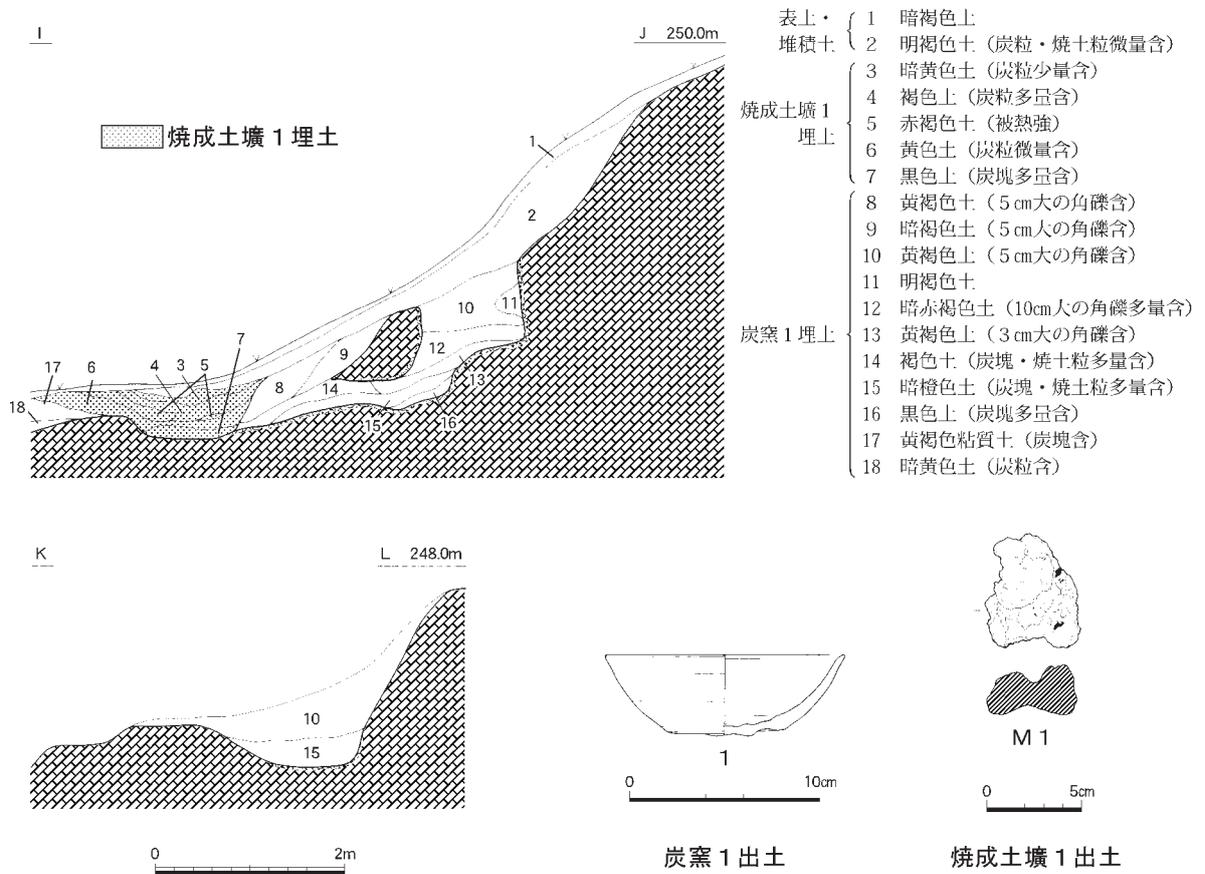
これらの焼成土壙の性格は不明であるが、埋土にはすべて炭を含んでいることと、焼成土壙1から鉄塊系遺物M1が出土していることから、製炭や製鉄に関係していると推測される。（小嶋）



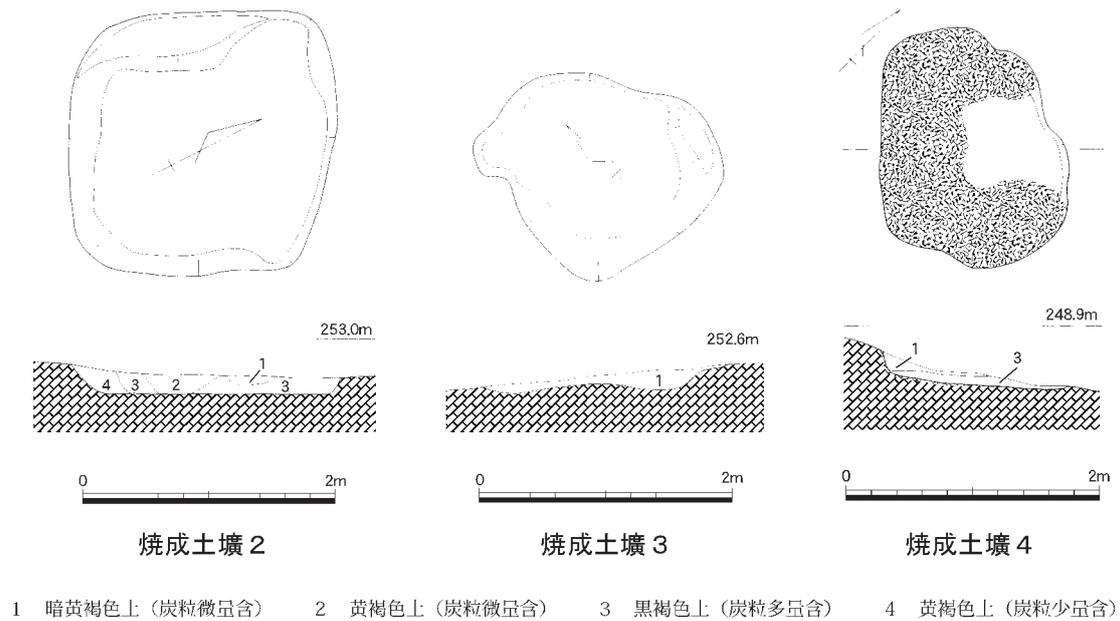
 被熱範囲
 タール付着範囲



第5図 炭窯 1・焼成土壌 1① (1/100)



第6図 炭窯1・焼成土壙1② (1/80)・出土遺物 (1/4)



第7図 烧成土壙2~4 (1/60)



第8図
遺構に伴わない遺物 (1/4)

3 遺構に伴わない遺物 (第8図)

2は須恵器杯身の小片である。調査区北西部の表土中から出土しており、原位置は留めていない。口径13.1cm・底形9.2cm・器高3.4cmを測り、底部はヘラキリ後ナデ調整する。これらの特徴から9世紀前半に位置付けられ、焼成土壌1～4の時期を示唆する。(佐藤)

第4節 小結

発掘調査・測量調査の結果、比丘尼ヶ城跡の概要と、古墳時代後期～古代の製鉄関連遺構の存在が明らかとなった。比丘尼ヶ城跡の時期は、出土遺物が無いため明確にできないが、近接する河内城跡・久田上原城跡・城峪城跡の発掘成果から、ある程度推測可能である。これら4城に共通する特徴として、尾根筋を2条の堀切で分断すること、斜面部に切岸と細長い平坦面を巡らすことが挙げられる。こうした縄張りの共通性から、その築城時期にも大きな隔たりは無いと考えられ、14世紀後半～15世紀前半代に位置付けられよう。製鉄関連遺構のうち、横口付炭窯については、近接する城峪城跡下層で検出されたものと類似しており、その関連が注目される。焼成土壌については、類似の遺構が河内城跡・峪畑遺跡・城峪城跡で検出されており、古代の木炭生産施設の可能性が考えられる。(佐藤)

曲輪一覧表

遺構名	規模(m)			面積 (㎡)	海拔高 (m)	付属 施設	出土 遺物
	最大長	最大幅	外縁長				
曲輪1	(76.0)	(24.2)	(180.9)	(1036.0)	(287.50)	○	—
曲輪2	—	(5.4)	(174.0)	(486.6)	(283.00)	—	—
曲輪3	(16.2)	(6.2)	(23.4)	(89.2)	(275.00)	—	—

堀一覧表

遺構名	規模(m)				傾斜 (°)	断面形	出土 遺物
	長さ	上面幅	底面幅	深さ			
堀切1	(28.0)	(10.8)	(0.6)	(5.8)	(40)	V字形	—
堀切2	(19.0)	(8.0)	(0.8)	(1.8)	(30)	U字形	—
堀切3	8.5	3.9	2.2	0.6	50	逆台形	×

土壌一覧表

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔 高(m)	時期	備考
焼成土壌1	楕円形	Ⅲ a	170	130	70	245.92	古墳後期 ～古代?	壁面・底面に被熱痕跡 鉄塊系遺物出土
焼成土壌2	隅丸方形	Ⅲ a	210	210	15	252.57		
焼成土壌3	不整楕円形	Ⅲ a	200	160	15	252.30		
焼成土壌4	不整楕円形	Ⅲ a	192	150	20	248.45		壁面・底面に被熱痕跡

土器観察表

掲載 番号	掲載 遺構	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
1	炭窯1	須恵器	杯身	12.6	6.2	4.3	灰白色(5Y7/1)		底部ヘラキリ後ナデ
2	包含層	須恵器	杯身	(13.1)	(9.2)	3.4	黄灰色(2.5Y6/1)		底部ヘラキリ後ナデ

製鉄関連遺物一覧表

掲載 番号	掲載 遺構	種別	計測値(mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
M1	焼成土壌1	鉄塊系遺物	60.5	50.0	38.0	115.4	鉄	古墳後期～古代?	磁着度8、木炭付着、一部ガラス質

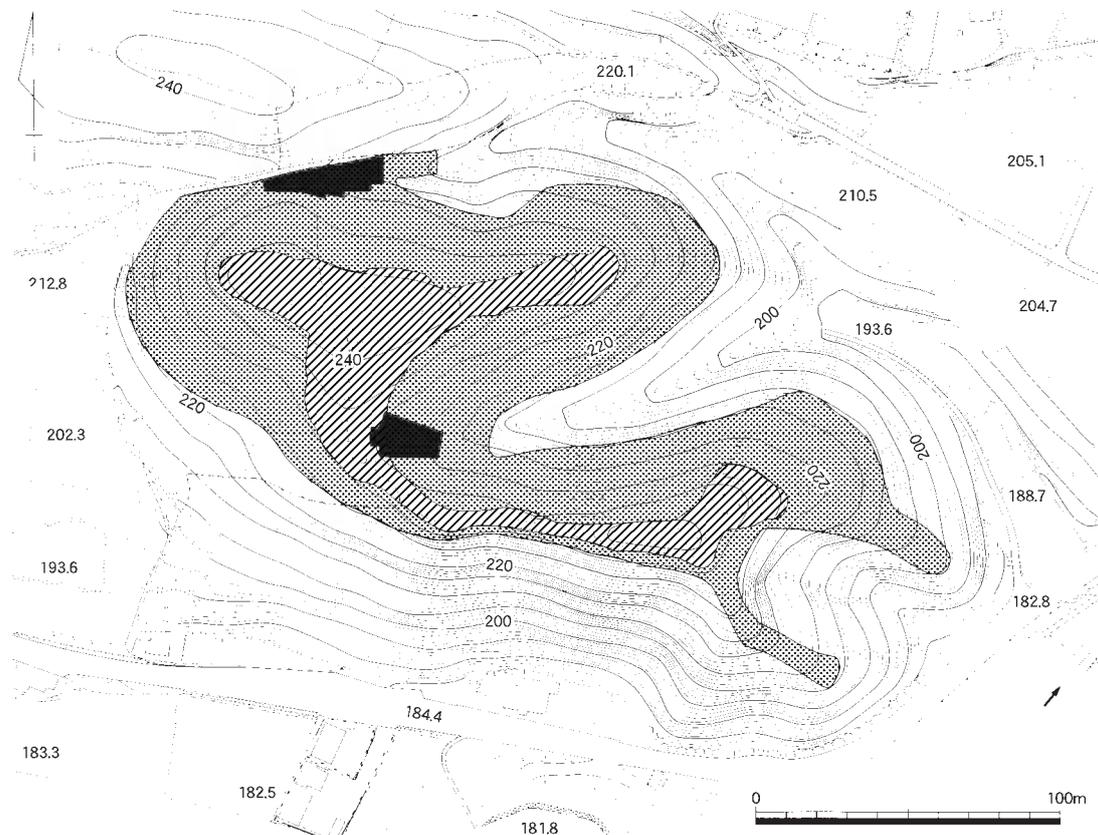
第12章 城峪城跡

第1節 城郭の立地と調査の概要

城峪城跡は、久田下原字城峪の独立丘陵上に築かれた南北朝期の山城である。なだらかな河岸段丘を東に見ながら南流した吉井川が大きく蛇行して東に向きを変える位置にあり、北接する丘陵を挟んで比丘尼ヶ城と対峙する。

東西310m、南北180mを測るこの丘陵の中央には東から谷が入りこみ、北から南に連なる尾根筋はあたかも馬蹄形をなす。北側の尾根は標高242mを測るものの、北接する丘陵とは深さ10mほどの谷によって隔てられるにすぎず、また西側には緩やかな丘陵斜面が広がっていて、見かけ上その高さを減じている。一方、南に派生した尾根は標高235mとやや低いものの、その山脚は吉井川に迫って川幅を狭めるとともに、斜面は急峻な傾斜をなし、防御に適した地形となっている。

江戸時代に編纂された作陽誌には「(比丘尼城の) 山南二丁余も亦故壘有り。共に何人の住むやを知らず。」とあり、由来不詳の砦跡と認識されていたことが知られる。その後、平成5年度の分布調査で城ヶ峪城跡として改めて周知されたが、苫田ダム建設に伴いこの場所に資材置き場が計画されたことから、平成8年4～12月、平成9年4～10月の2次にわたり発掘調査を実施した。(亀山)



第1図 調査位置図 (1/2,500) 平成8年度調査 平成9年度調査 下層調査区

第2節 城郭を構成する遺構と遺物

1 概要

この城の中心となる曲輪は標高242mの丘陵頂に位置し、東西68.3m、南北16.1mの規模をもつ。西へ延びる尾根や南に派生する尾根との間はそれぞれ2条の堀切で分断するとともに、北縁から西縁を切り崩して斜面に盛り上げ、土塁を構築している。切岸と土塁の間は横堀状を呈し、つぶて石と見られる円礫の集積が認められた。同様の施設は北斜面を中心に2段にわたって設けられており、豎堀も3カ所にわたって掘削されている。この曲輪では自然地形を多く残しており、造成が及んでいる範囲はさほど広くはない。この曲輪からは建物は見つかっていないが、南に続く緩斜面を段状に加工して建物を設けており、遺物もこの周辺から集中して出土している。また、西へ延びる尾根や南に派生する尾根の先端には狭小な曲輪が1～3段にわたって造成されている。(亀山)

2 曲輪

曲輪1 (第2・3・14図)

標高242.8mの丘陵頂に位置し、この城の中心をなす。北から西は切岸・土塁1で、また東は堀切2によって区切られるものの、南は緩やかに傾斜して斜面と連続している。このため、曲輪の規模は必ずしも明瞭ではないが、平坦面の広さに限って言えば東西68.3m、南北16.1mとなる。北辺の中央には階段状の掘りこみがあり、そこから西へ向かって通路と考えられる幅1.8mほどの浅い窪みが延びている。白磁・青磁(碗)や土師器(杯・皿・鍋)、備前焼(播鉢・甕)、勝間田焼(甕)、土錘、砥石、石硯、刀子、鉄釘など遺物の多くはここから出土している。また、その東側には東西8.5m、南北4.5mの範囲で厚さ80cm余りの造成土が広がっており、その下層から土壙1～3を検出したが、出土遺物に明瞭な時期差は認められず短期間のうちに埋めこまれたものと推定される。(亀山)

曲輪2 (第2～4図)

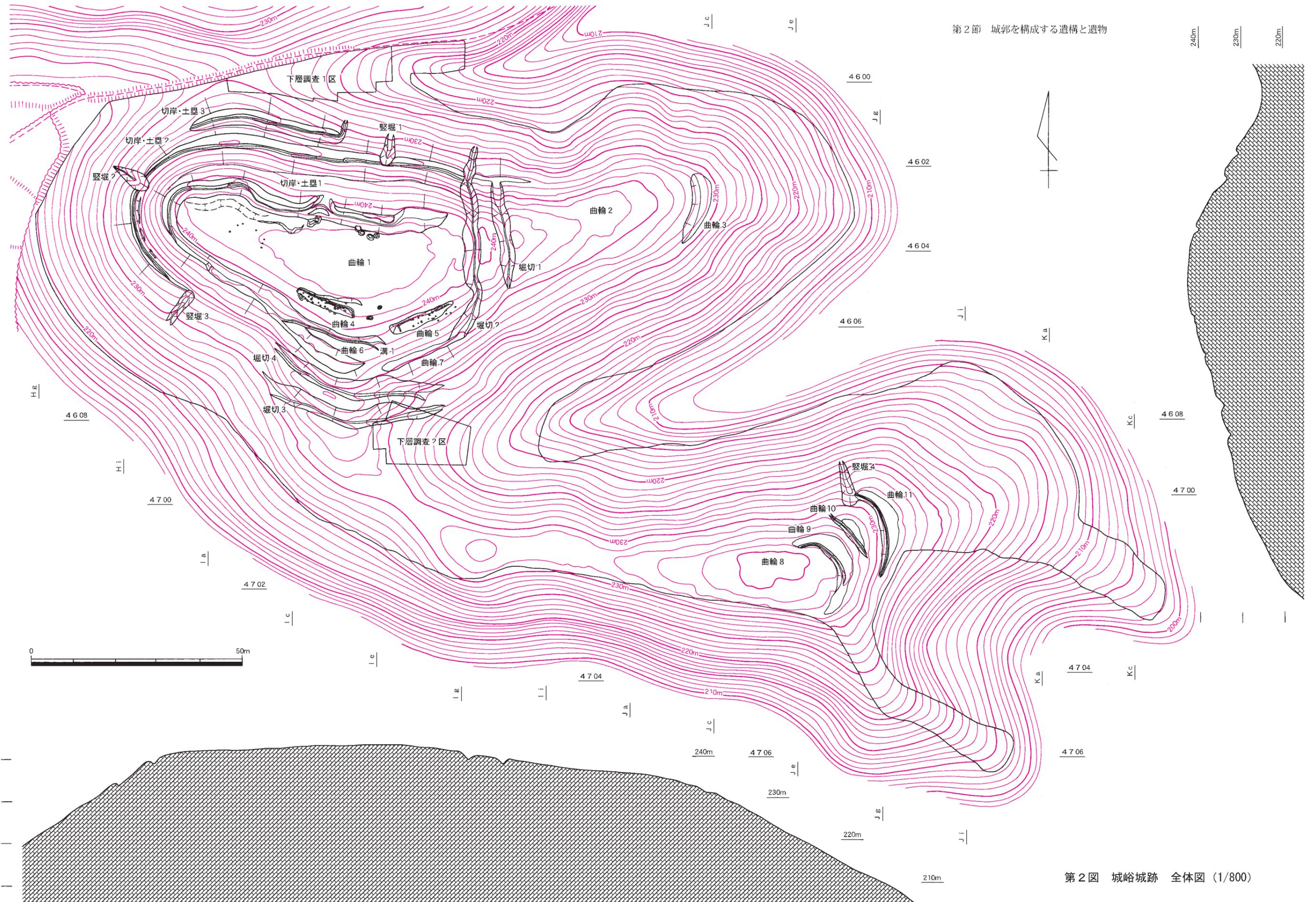
曲輪1から東に向けて緩やかに下る、標高233～239m、東西44m、南北12mほどの尾根筋を利用したもので、曲輪1とは堀切1・2によって区切られている。削平や造成が行われた痕跡はなく曲輪とする根拠に乏しいが、曲輪3との関係も考慮してここでは一応曲輪として扱っておく。(亀山)

曲輪3 (第2・4図)

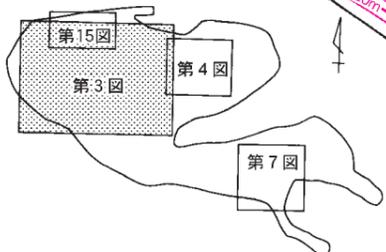
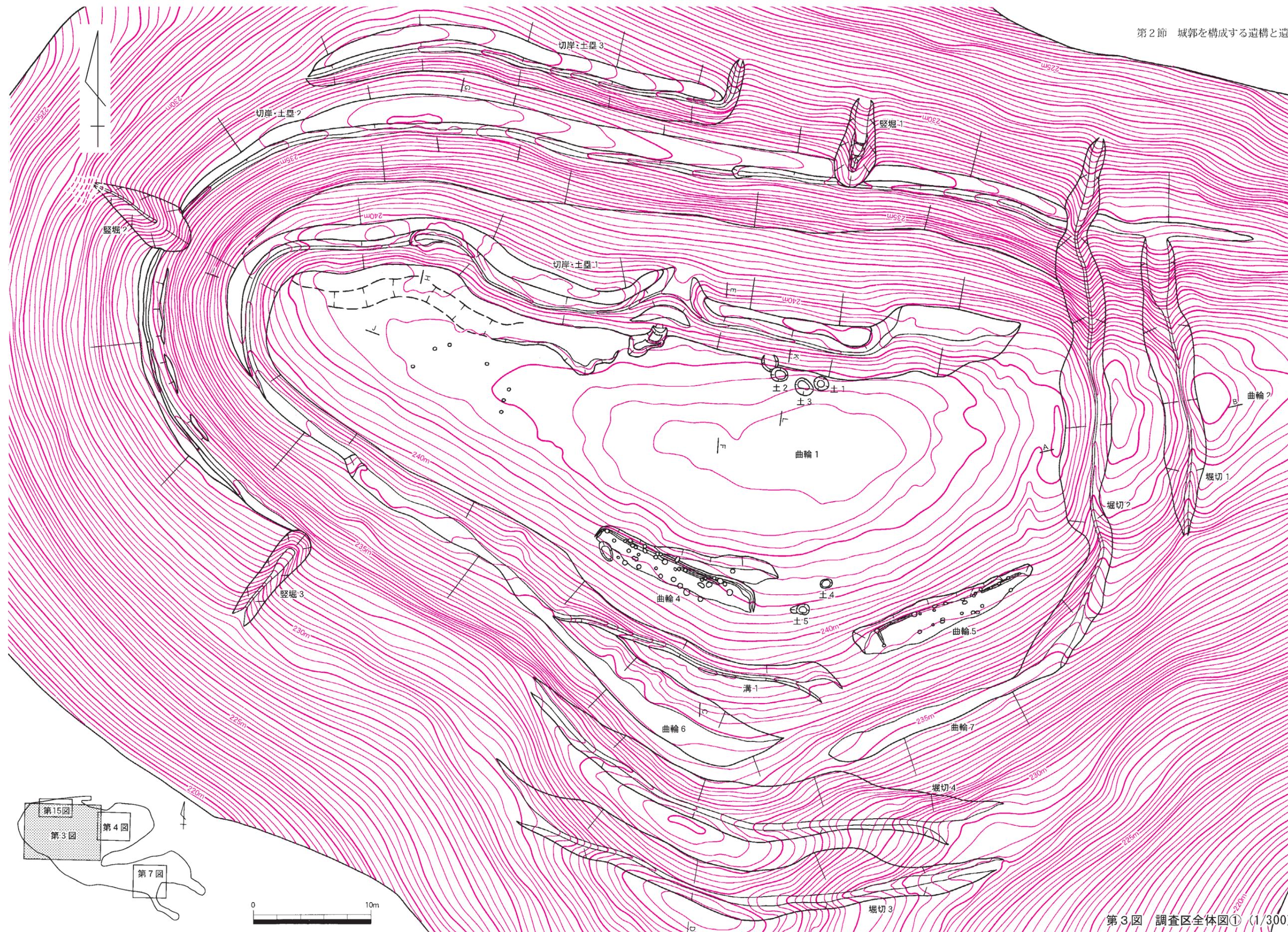
曲輪2の東に設けられた曲輪で、標高232m辺りの尾根の先端を高さ1mほど切り崩して斜面に押し出し、南北16.7m、東西2.8mの平坦面を造成している。しかしその平坦化はあまく、かつ曲輪9～11に見られる切岸際の溝もないなど総じて簡略なつくりとなっている。(亀山)

曲輪4 (第2・3・5図)

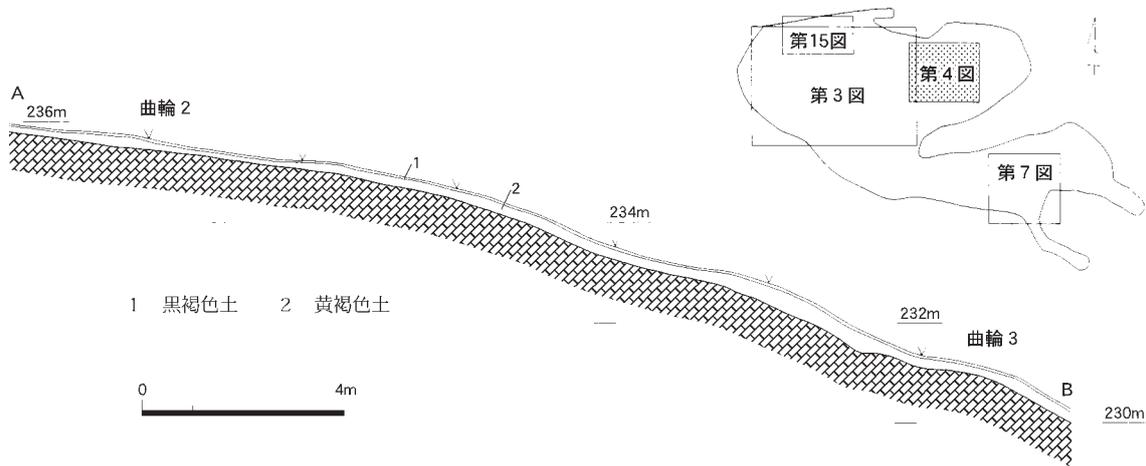
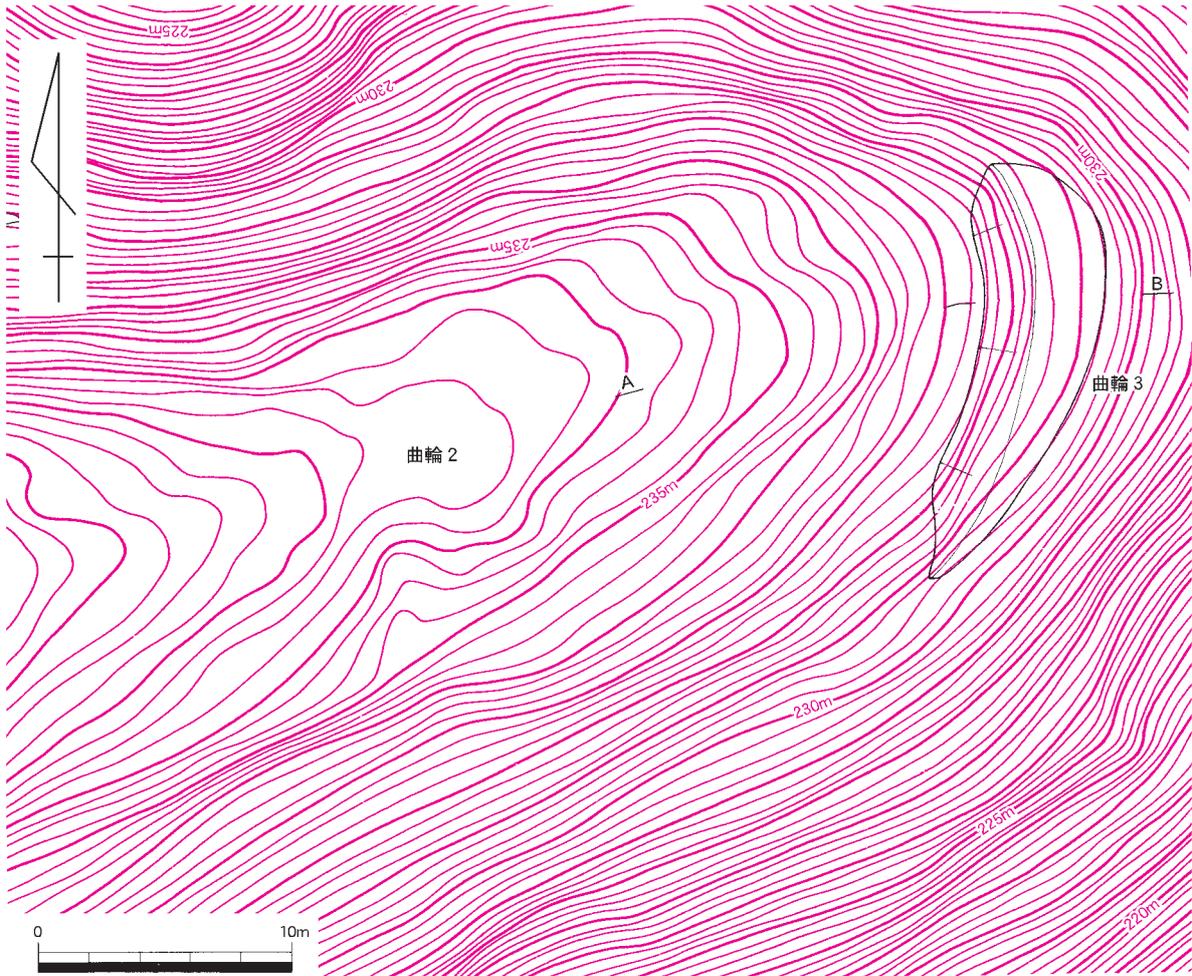
曲輪1の南縁に設けられた曲輪で、標高241mの緩斜面をコ字形に掘りこんで2期にわたり平坦面をつくり出している。古段階の平坦面は東西11m以上、南北1.3mあり、桁行4.75m、梁間1.85mを測る1×1間の建物が検出された。新段階は東西15m、南北2.2mあり、切岸際には2時期にわたって溝をめぐる。桁行5.75m、梁間1.5mの3×1間の建物を想定したが、なお多くの柱穴が東西11.5m、南北2.2mの範囲に分布しており、その規模や棟数については明確にできなかった。



第2図 城峯城跡 全体図 (1/800)



第3図 調査区全体図① (1/300)

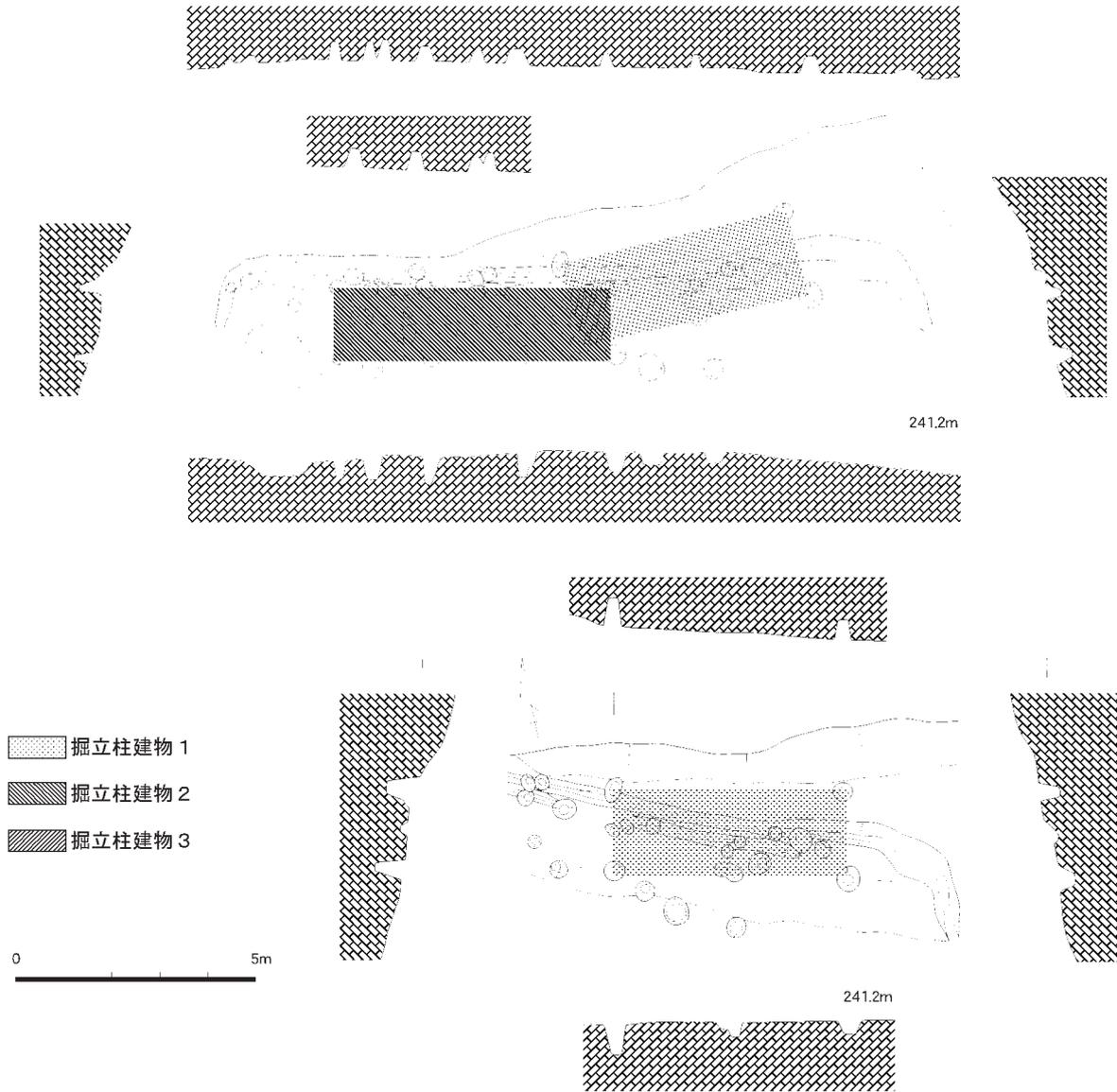


第4図 調査区全体図② (1/300, 1/150)

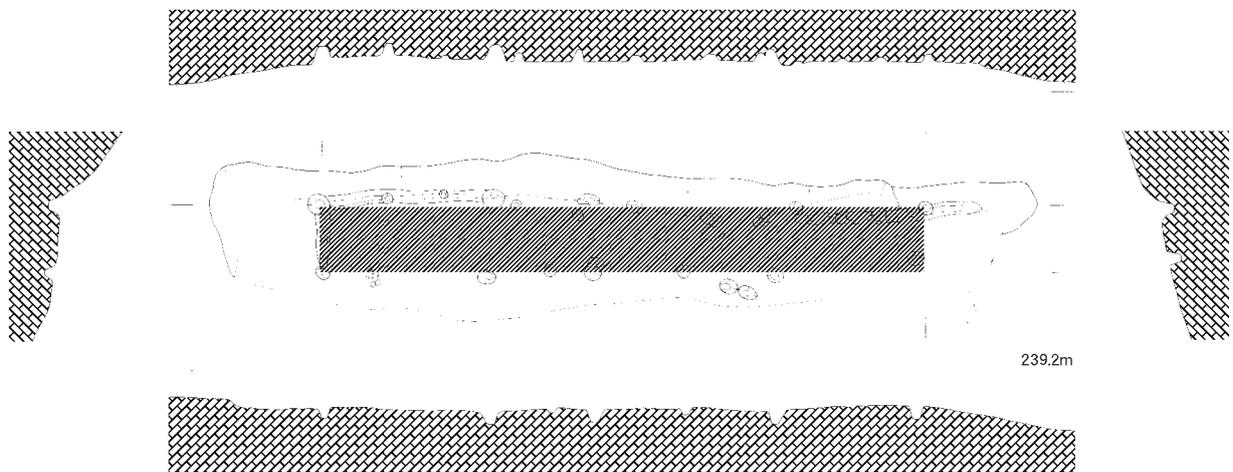
出土遺物は多く、土師器杯・皿、備前焼播鉢、鉄釘、温石、土錘などがある。 (亀山)

曲輪 5 (第2・3・6図、図版45)

曲輪 1 の南東、標高239mの斜面に設けられた曲輪である。コ字形に掘りこんで造成された平坦面は東西15.2m、南北2.5mを測り、西8.5mの位置にある曲輪 4 と類似した規模をもつ。東西の切岸際には長さ3.5mの溝が走り、その西端は柱穴列を結ぶように南へ折れ曲がる。柱穴は東西12m、南北



第5図 曲輪4 (1/150)



第6図 曲輪5 (1/150)

1.6mの範囲にまとまるが、その並びは不揃いで単一の建物かどうか明らかではない。埋土からは土師器杯・皿、備前焼播鉢、勝間田焼甕、鉄釘など比較的多くの遺物が出土している。(亀山)

曲輪6 (第2・3図、図版45)

曲輪4から南へ10mほど下った位置にあり、堀切4の北に接している。標高237mの斜面を切り崩して斜面に押し出し、東西22m、南北2.7mの平坦面を造成している。その西端は切岸・土塁1へと連続し、通路として機能した可能性がある。出土遺物には土師器杯・皿、備前焼播鉢、勝間田焼甕、鉄釘M47などがある。(亀山)

曲輪7 (第2・3図、図版46)

標高235mの斜面に設けられた東西17m、南北2.3mを測る平坦面で、曲輪5の南5.5mに位置する。東端は堀切2と連続し、西端は曲輪6と緩斜面を介して繋がっており、通路として利用されたものと考えられる。埋土から土師器小皿28や備前焼播鉢5、金具M5、鉄釘M60～M65などが出土している。(亀山)

曲輪8 (第2・7図、図版46・47)

吉井川に向かって張り出した南側の尾根の頂部に位置し、その標高は235mを測る。幅9m余りの平坦な尾根筋が長さ16mにわたって続いているが、自然地形と区別する積極的根拠に乏しい。ここでは曲輪9～11との関係から曲輪として扱っておく。(亀山)

曲輪9 (第2・7図、図版46)

曲輪8の北東斜面を高さ1.2mほど切り崩して造成した曲輪で、標高233.8mの位置にある。長さ18m、幅4.1mの弧状を呈し、切岸際には幅1.1m、深さ50cmの断面V字形をなす溝をめぐらす。この溝が開放する南側は緩斜面を介して曲輪8と繋がる。(亀山)

曲輪10 (第2・7図、図版46)

曲輪9の北東、標高231.5mの位置にあり、長さ8.1m、幅1.9mを測る。斜面を高さ1.5mほど切り崩して造成しているが、下方に押し出された土砂の大半は流出している。曲輪9と同様に切岸際には長さ13.7m、幅1.1m、深さ40cmの断面V字形をなす溝が掘られている。(亀山)

曲輪11 (第2・7図、図版46)

曲輪10の北東斜面が緩やかに傾斜を変える標高228.8mの位置にある。このため、切岸は高さ80cmと低いにもかかわらず、その規模は長さ20.8m、幅3.5mと広い。しかし、切岸際の溝は幅90cm、深さ30cmと小さく、その断面形もU字形をなす点で曲輪9・10と異なる。(亀山)

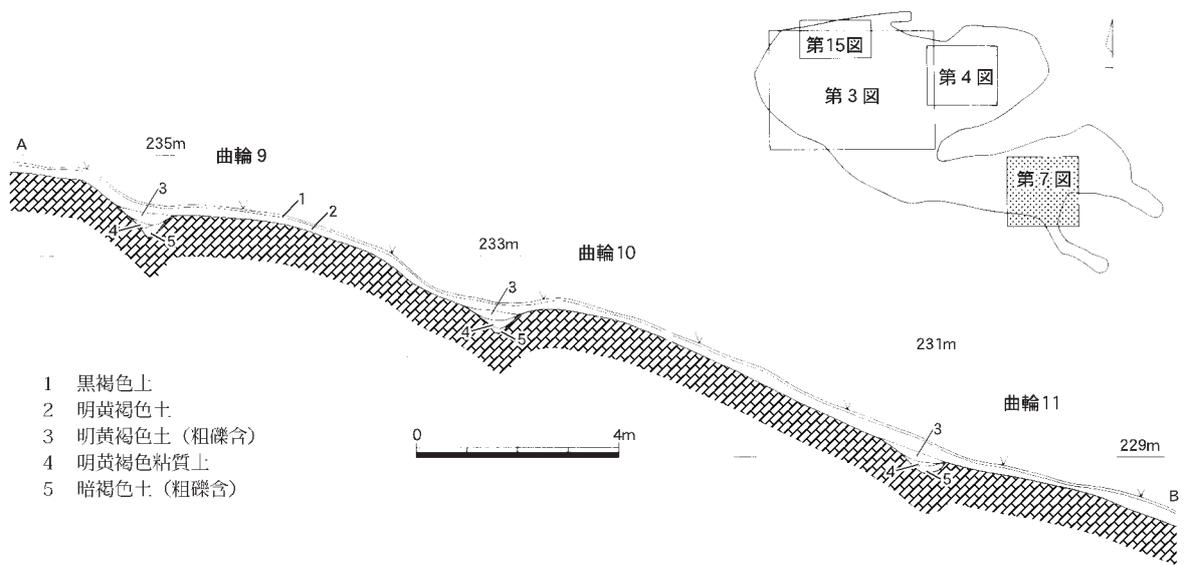
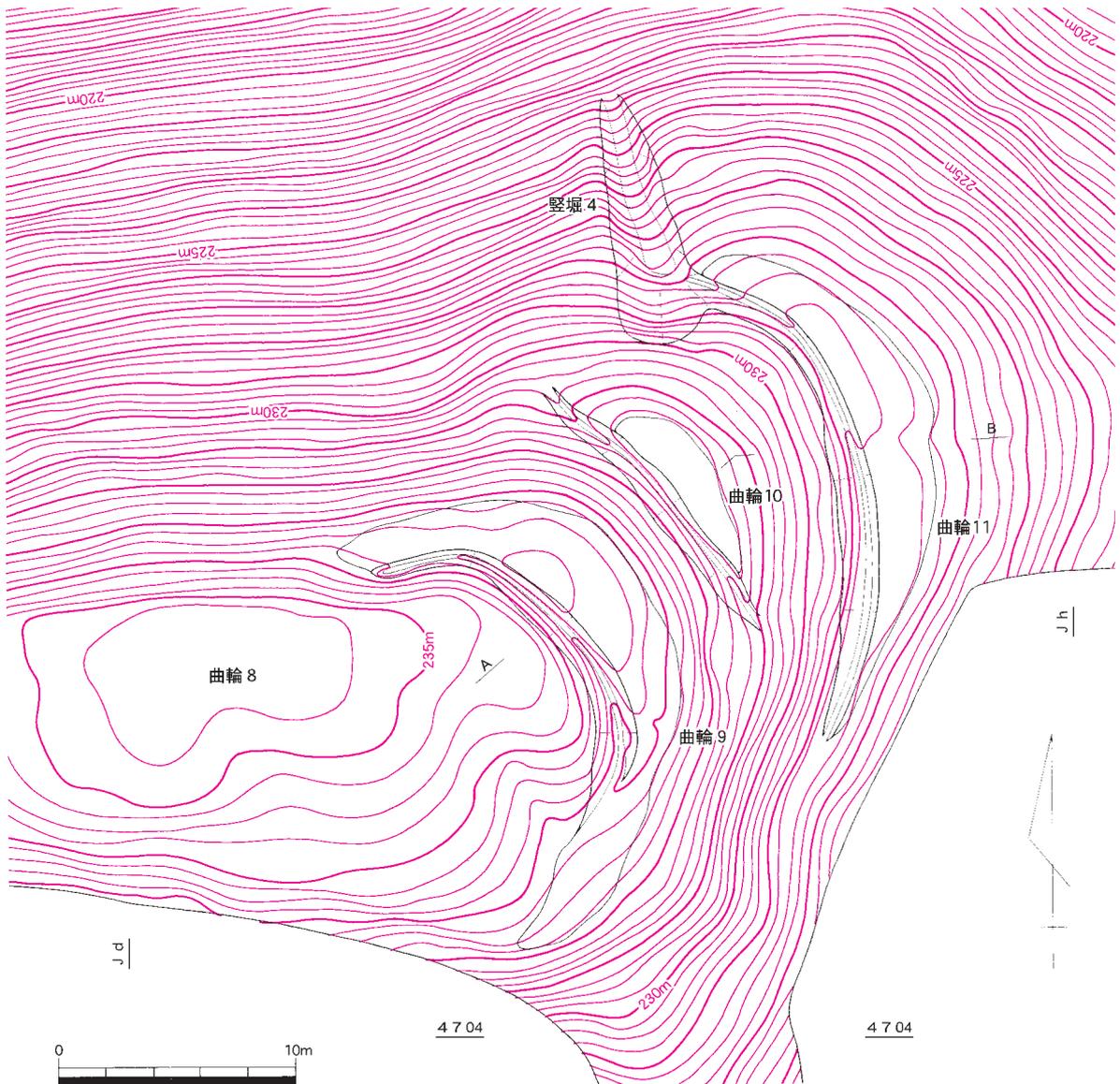
3 堀切

堀切1 (第2・3・8図、図版47)

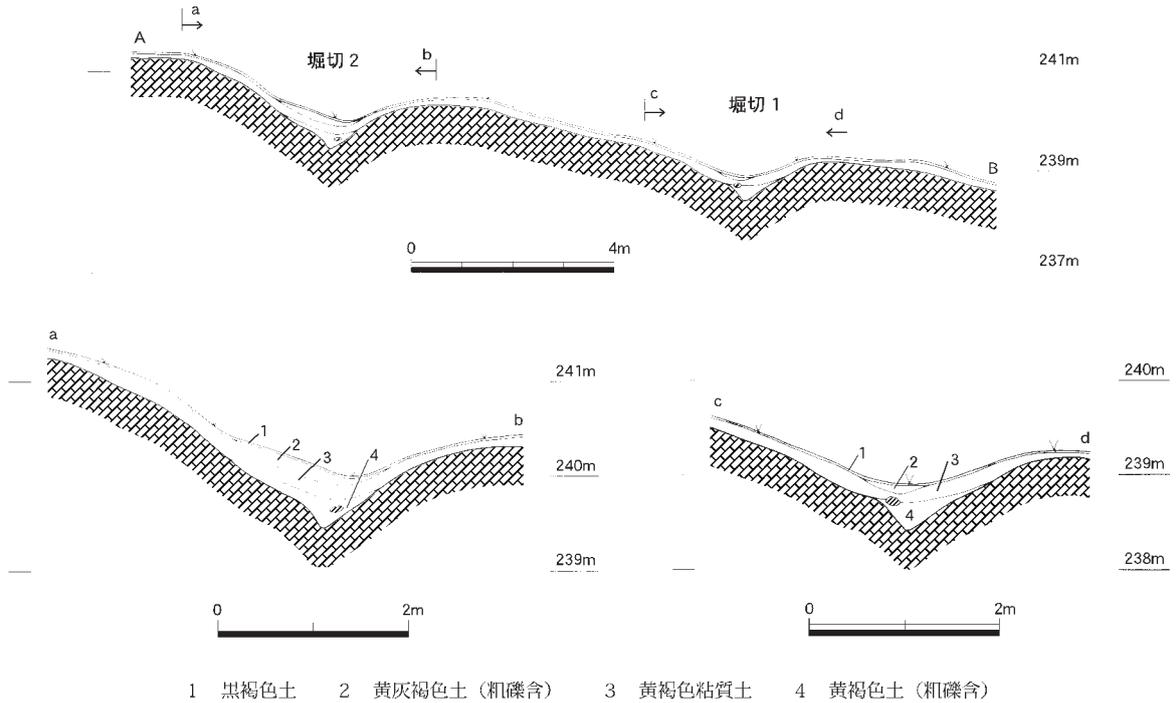
曲輪2の西端を区切るように南北に掘削された全長25.3mの堀で、上幅4.0m、深さ80cmを測る断面V字形をなす。南端は標高236m付近で収束するものの、北端は標高233mの切岸・土塁2にまで達している。堀底は238.4mにあり、堀切2とは1.2m、曲輪1とは4.4mほどの比高差がある。(亀山)

堀切2 (第2・3・8図、図版47)

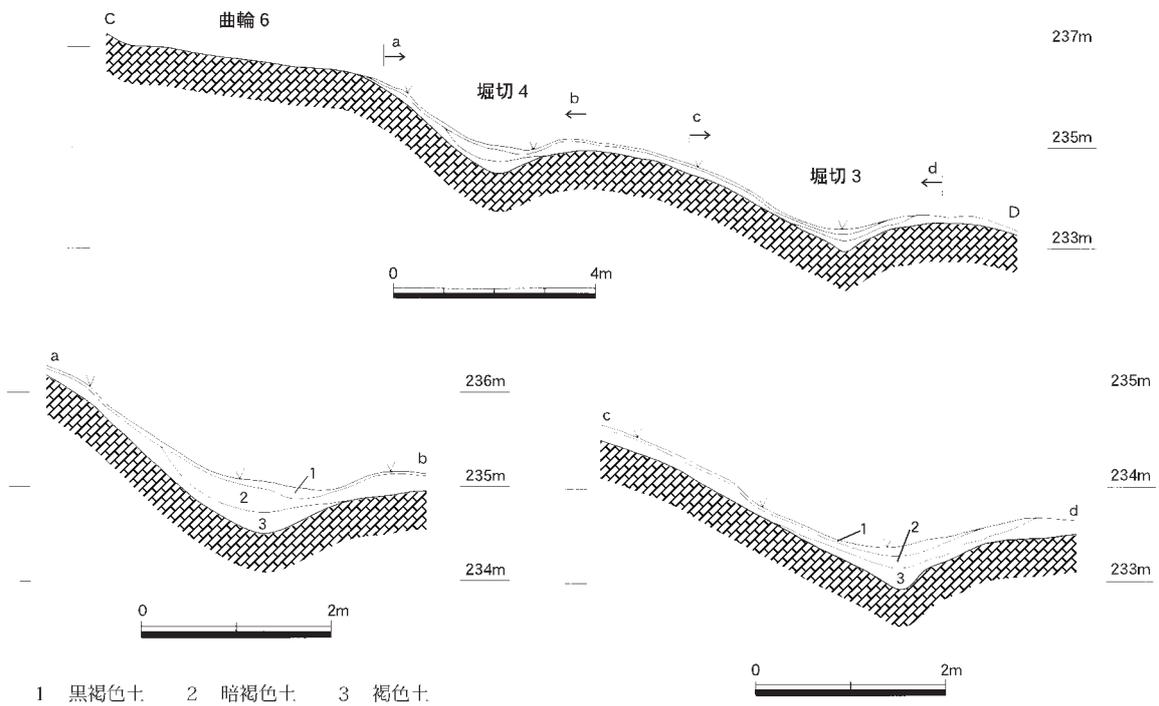
曲輪1の東端に設けられた堀で、東側の堀切1とは芯心で6.5～8.1mの距離を保って南北に並走する。長さ46.1m、上幅3.9mを測り、深さ90cmの断面はV字形をなす。北端は切岸・土塁2を分断して標高228.5mまで延び、南端は標高253mで開放して曲輪7に接続する。(亀山)



第7図 調査区全体図③ (1/300, 1/150)



第8図 堀切1・2土層断面 (1/150, 1/80)



第9図 堀切3・4土層断面 (1/150, 1/80)

堀切3 (第2・3・9図、図版47)

曲輪6・7の南側を東西に掘削された堀で、その南を並走する堀切4と対をなす。標高234.6mにある堀底は曲輪1と8.2mほどの比高差がある。長さ41.3m、上幅5.0mを測り、深さ50cmの断面は緩やかなV字形をなす。(亀山)

堀切4 (第2・3・9図、図版47)

堀切3の南を芯心で4.5～8mの距離を保ちながら東西に並走する堀で、長さ44m、幅5.1mを測る。深さは60cmあり、その断面は上方へ大きく開くV字形をなす。堀底は標高232.9mにあつて、堀切3とは1.5m、曲輪1とは9.9mほどの比高差がある。埋土から備前焼の播鉢6が出土している。(亀山)

4 豎堀

豎堀1 (第2・3・10・12図、図版48)

切岸・土塁2の北辺を分割する。平面長7.6m・最大幅3.5m、深さ最大1.4mを測る。底面は段状に掘削され、約28度で傾斜する。横断面は、上半V字形・下半逆台形で、40度の傾斜をなす。(佐藤)

豎堀2 (第2・3・10・12・13図、図版48)

切岸・土塁2の西辺を分割する。平面長約9.5m・最大幅4.2m、深さ最大1.5mを測る。底面の傾斜は下半で25度、上半で40度を測る。横断面はV字形で、38度の傾斜をなす。(佐藤)

豎堀3 (第2・3・10図、図版48)

切岸・土塁2の南西端に位置する。平面長約9.3m・最大幅2.6m、深さ最大90cmを測る。底面の傾斜は26度とゆるやかである。横断面は、上半逆台形・下半V字形で、40度の傾斜をなす。(佐藤)

豎堀4 (第2・10図)

曲輪11の北端から北に向かって標高224～230mの斜面を下る堀で、長さ10.7mを測る。断面は上幅3.5m、深さ50cmの浅いU字形をなし、V字形の豎堀1～3とはやや異なる。曲輪11の切岸際をめぐる溝がこの位置で開放していることからすれば、流水による崩壊痕の可能性も排除できない。(亀山)

5 切岸・土塁

切岸・土塁1 (第2・3・11・13・14図、巻頭図版5・図版49)

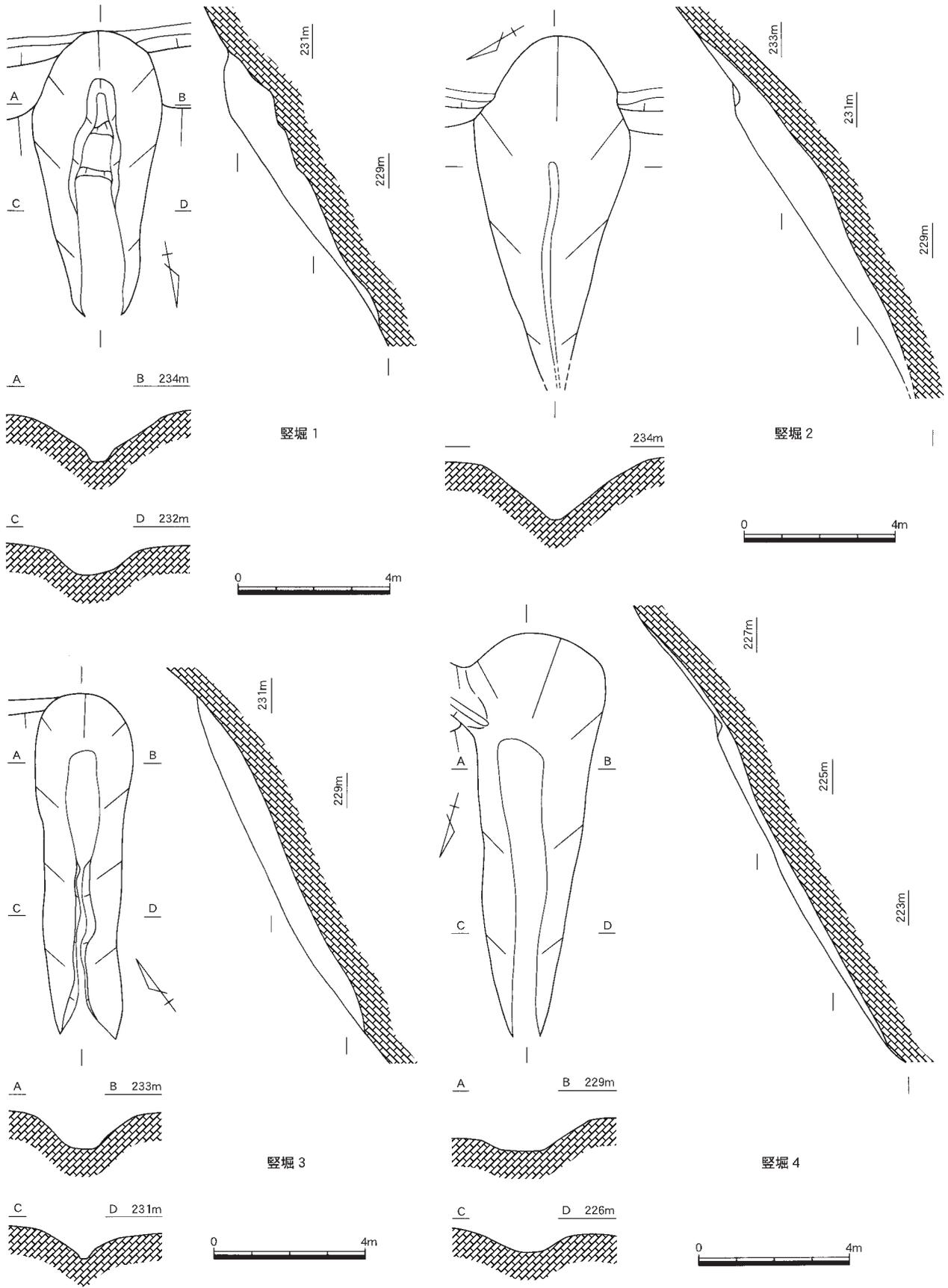
曲輪1の周縁を北から西にかけて切り崩し、その土を斜面側に盛り上げて上幅1.7mの土塁を46mにわたりめぐらせている。この結果、切岸と土塁の間は幅1～2m、深さ50cmほどの溝状をなすが、この溝は北辺の中央で曲輪1の張り出しに対応するように途切れて斜面へと開放し、出入り口として機能したものと推定される。溝内からは土師器杯・小皿や土錘、砥石、銅銭、鉄釘が出土したほか、円礫を主体とするつぶて石307個(533.4kg)の集積が5か所に分かれて認められた。(亀山)

切岸・土塁2 (第2・3・12・13・15図、図版49・50)

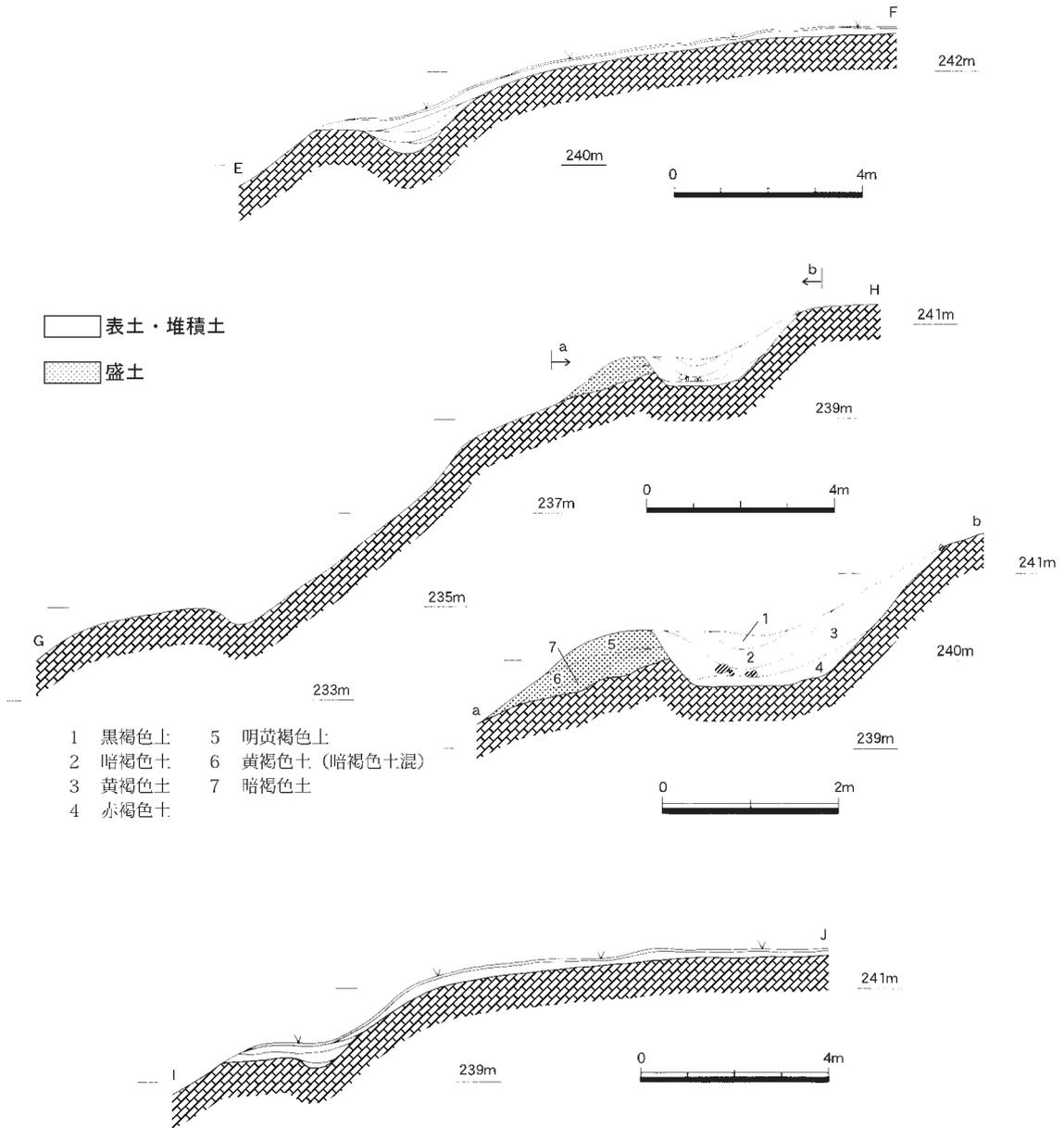
切岸・土塁1の下方の斜面を、標高236～238mの辺りから切り崩して高さ4m余りの切岸を設け、その土を斜面側に盛り上げて上幅2.7mほどの土塁を構築している。この土塁は豎堀1～3、堀切によって分断されているものの、その全長は99mを測る。切岸と土塁の間の溝は、幅1.5m、深さ50cmほどで、土塁の内縁に沿うように並ぶつぶて石94個(163.7kg)が検出された。(亀山)

切岸・土塁3 (第2・3・12・15図、図版50)

切岸・土塁2から80cmほど北へ下った斜面を、長さ36mにわたって切り崩して高さ90cmほどの切岸を設けるとともに、その土を斜面側に盛り上げて上幅1.5mほどの土塁を構築している。切岸と土塁の間は幅1.2m、深さ30cmの溝状を呈し、その東端は折れ曲がって斜面下方へ延び標高229m辺りで終息する。土塁の内縁にはやはりつぶて石が並んで検出されたが、その数は9個(15.6kg)と切岸・土塁1、2に比べはるかに少ない。(亀山)

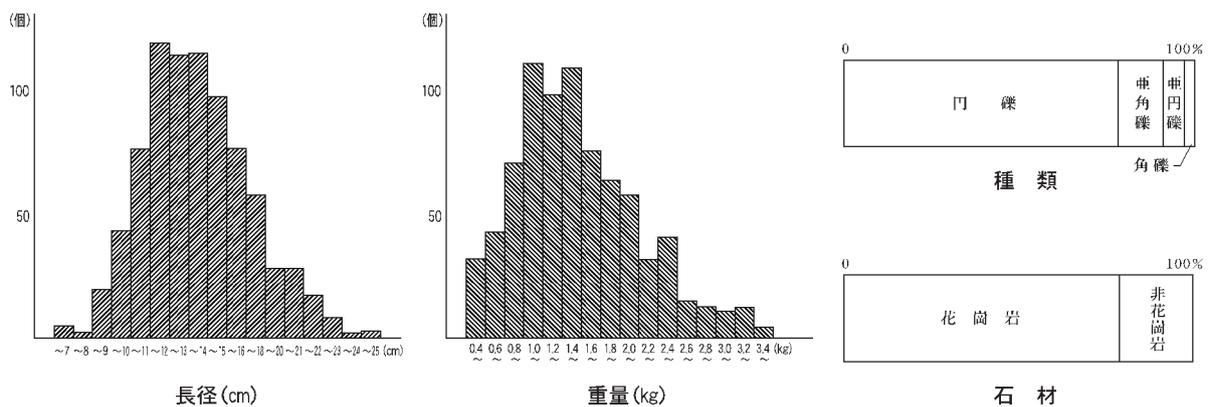


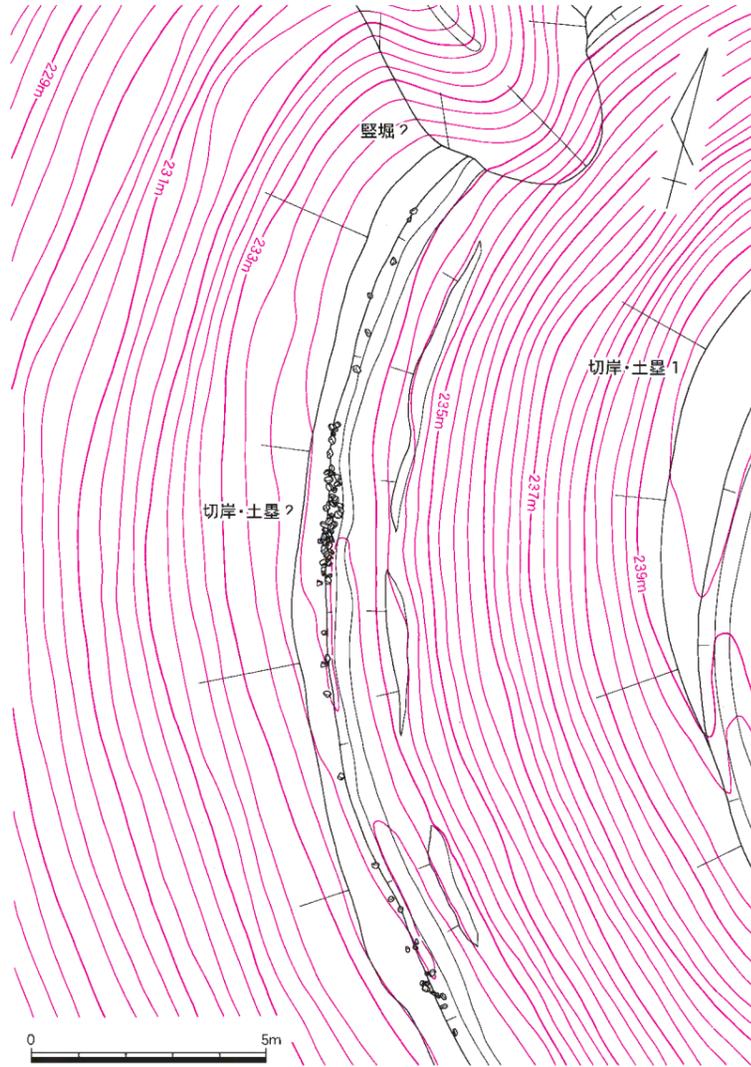
第10図 堀 1～4 (1/150)



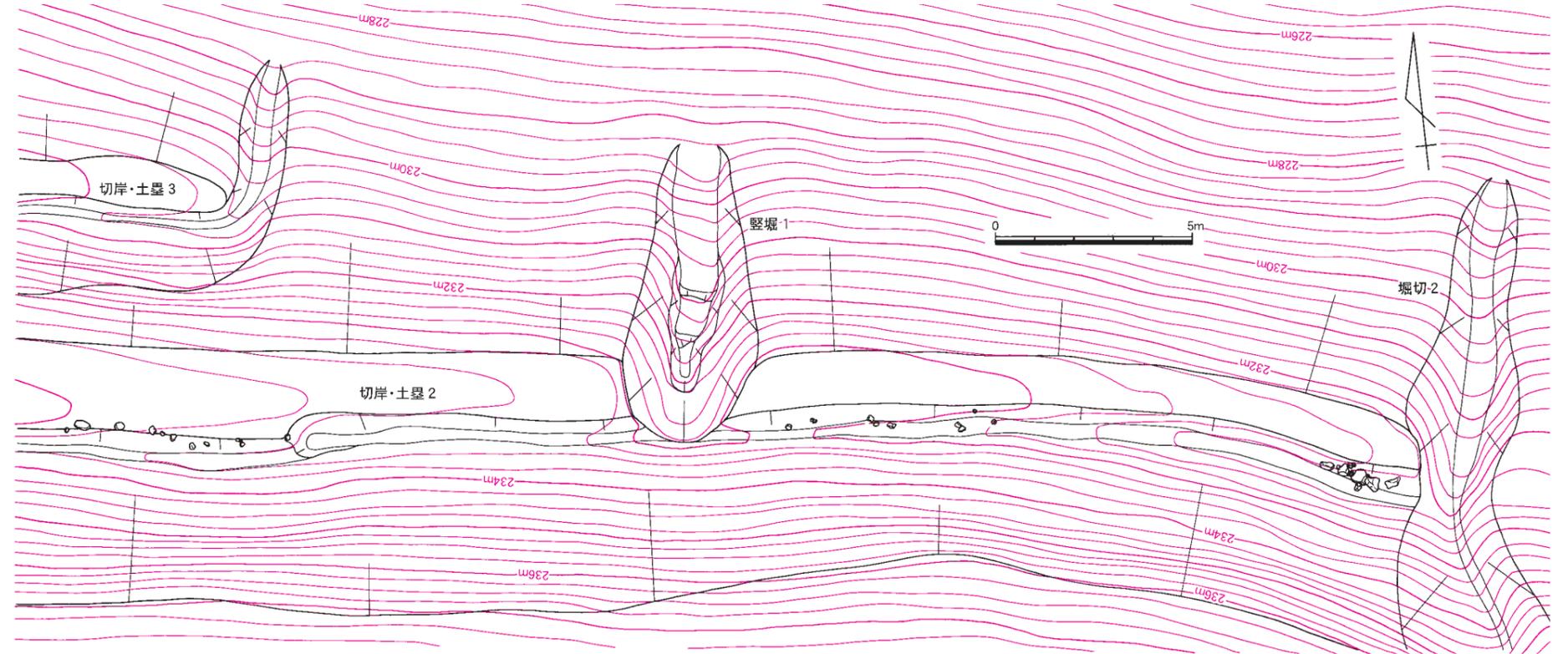
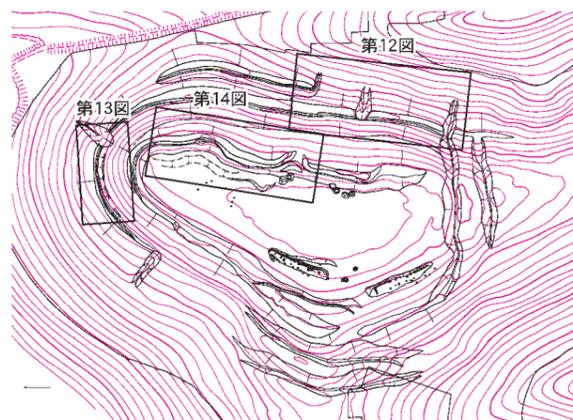
第11図 切岸・土塁1土層断面 (1/150, 1/80)

切岸・土塁1～3出土つづて石の計測値および構成表

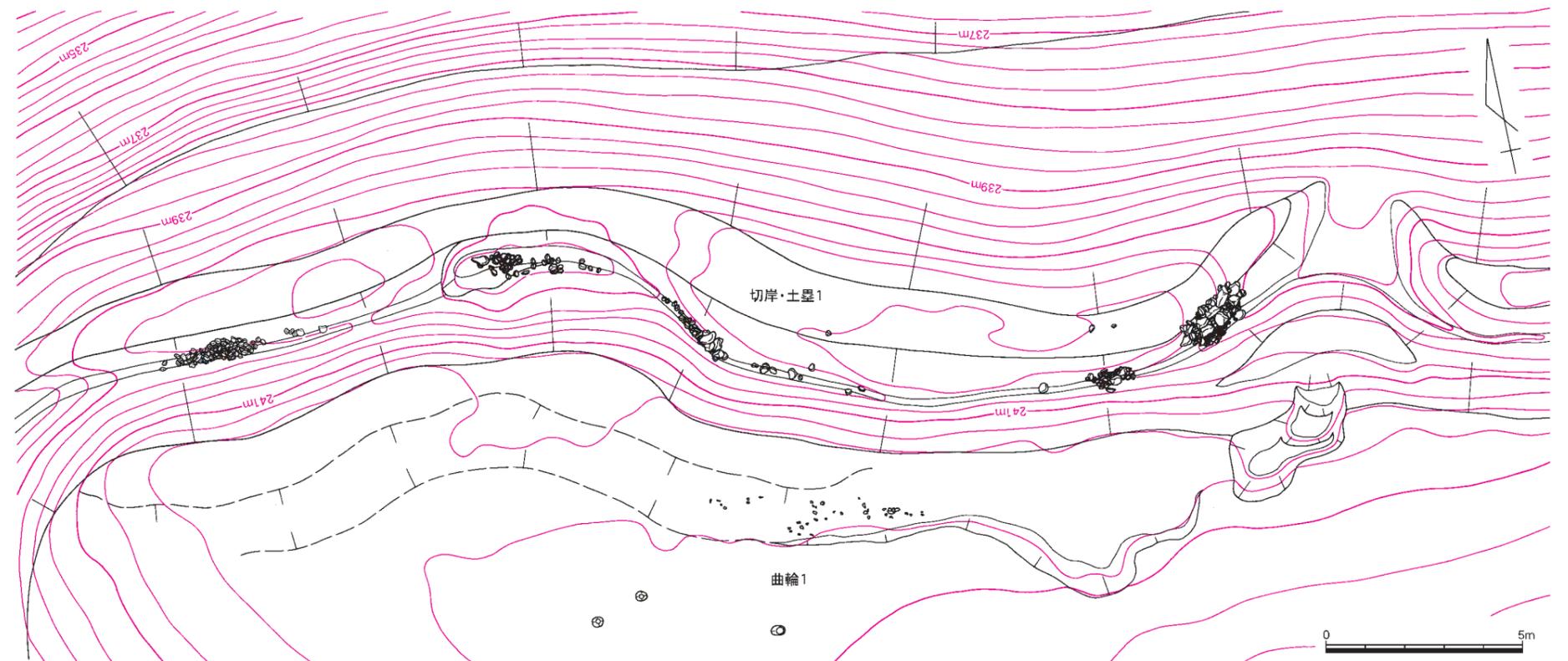




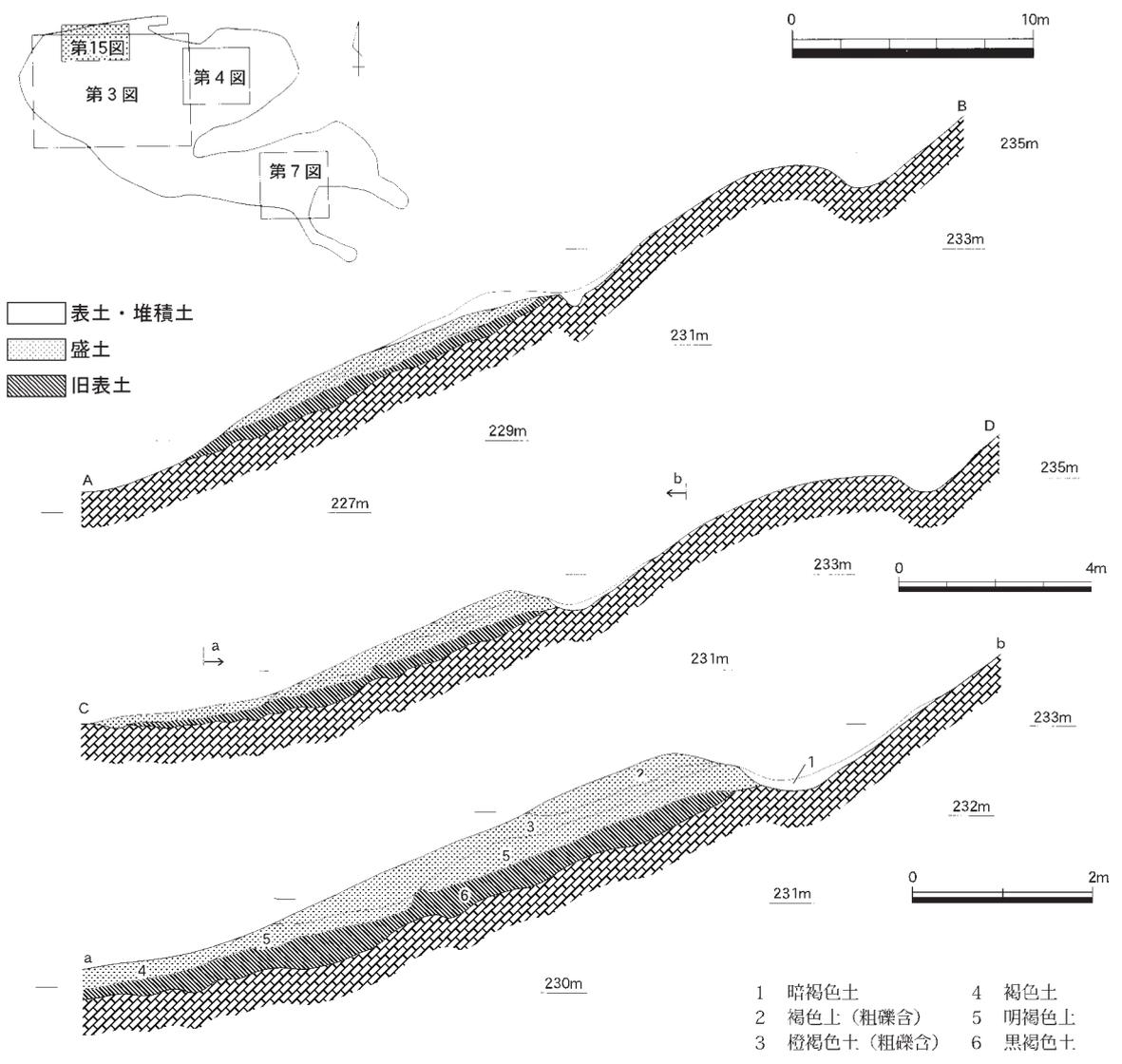
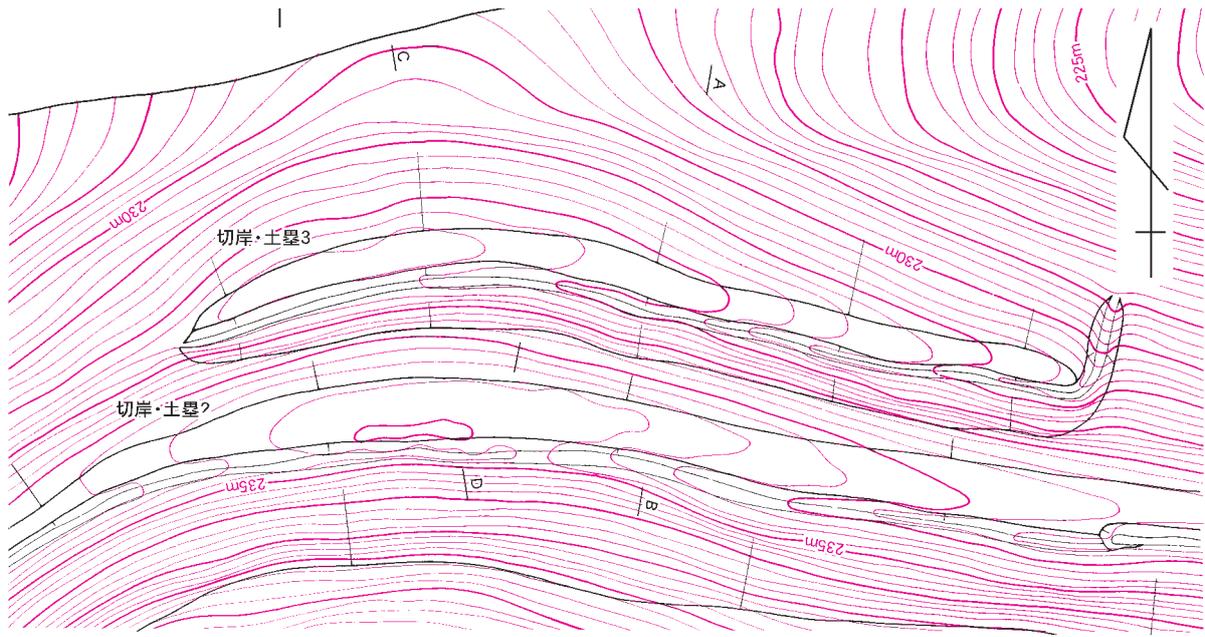
第13図 切岸・土塁2つづて石出土状況② (1/150)



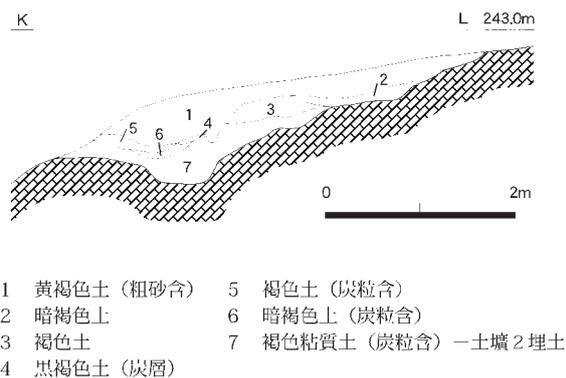
第12図 切岸・土塁2つづて石出土状況① (1/150)



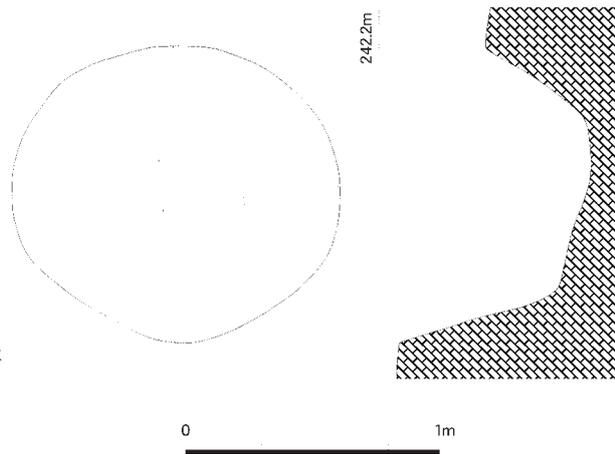
第14図 切岸・土塁1つづて石出土状況 (1/150)



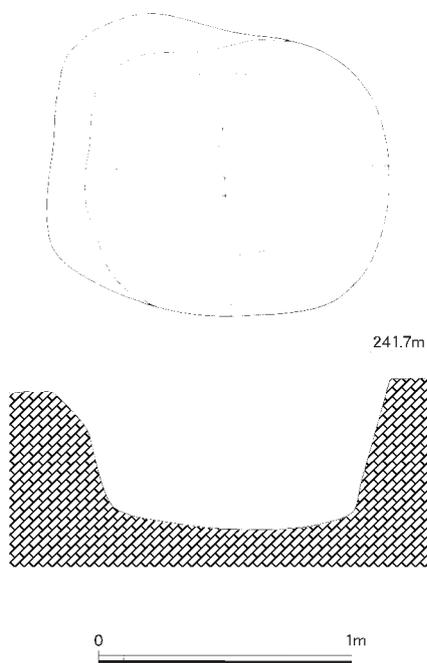
第15図 調査区全体図④ (1/300, 1/150, 1/80)



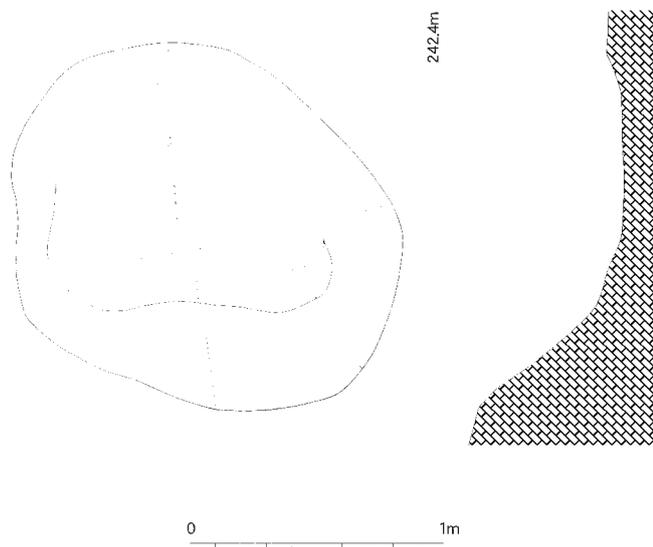
第16図 曲輪1土層断面 (1/80)



第17図 土壙1 (1/30)



第18図 土壙2 (1/30)



第19図 土壙3 (1/30)

6 溝

溝1 (第2・3図、図版45)

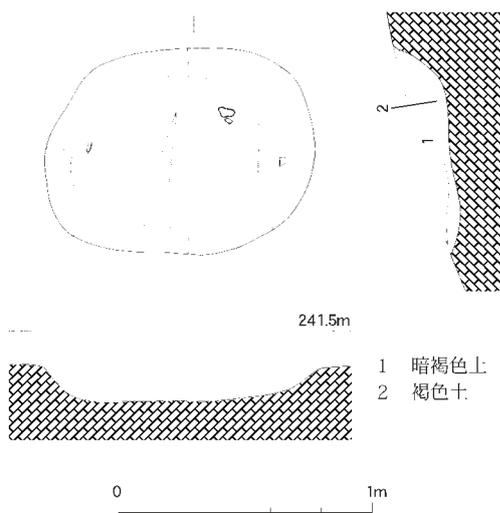
曲輪6の北を東西に走る溝で、長さ24m、幅2.0m、深さ1.0mを測る。その西端は曲輪6に合流し東端は曲輪5の西で開放することから、曲輪5・6を結ぶ通路と見られる。埋土からは備前焼の播鉢6や石突M4、鉄釘M15～M19などが出土している。(亀山)

7 土壙

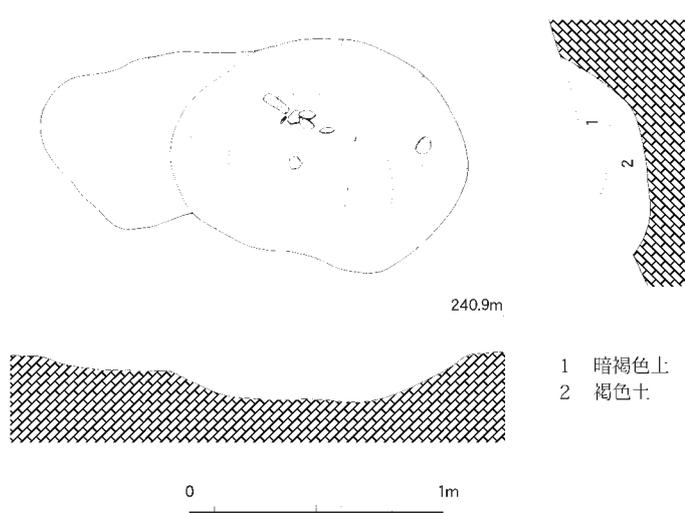
土壙1 (第3・17図)

曲輪1の北東に位置する土壙で、土壙2・3とともに造成土下で検出した。長さ1.28m、幅1.17m、深さ73cmの円形を呈し、埋土から底部ヘラキリの土師器杯10・13や鉄釘M10～M14が出土した。(亀山)

土壙2 (第3・18図)



第20図 土壌4 (1/30)



第21図 土壌5 (1/30)

長さ1.19m、幅1.13mの
 方形をなす土壌で、土壌1
 の西2.2mに位置する。深さ
 は58cmあり、褐色を呈する
 埋土には炭粒を含んでいる。

(亀山)

土壌3 (第3・19図)

土壌1に接して検出した
 長さ1.67m、幅1.33mの楕
 円形を呈する土壌で、深さ
 は56cmを測る。(亀山)

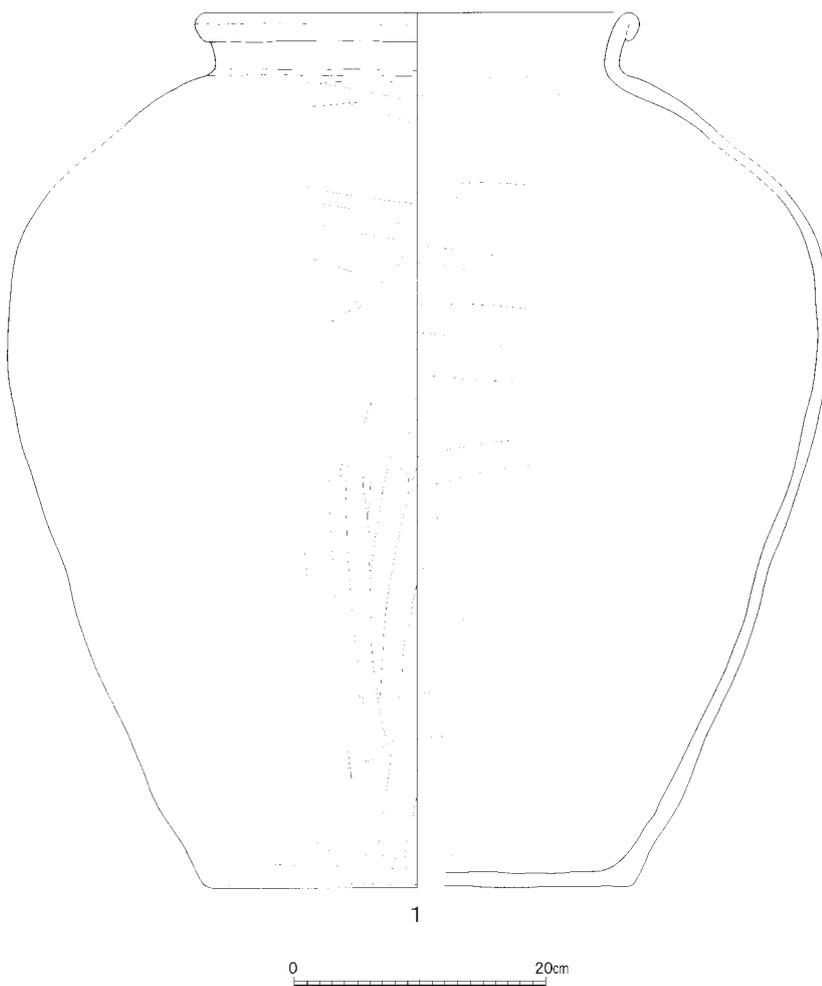
土壌4 (第3・20図)

曲輪4の西3.5mで検出
 した楕円形の浅い土壌で、
 長さ1.07m、幅82cm、深さ
 15cmを測り、埋土から土師
 器の小皿25・26が出土した。

(亀山)

土壌5 (第3・21図)

長さ1.17m、幅88cm、深
 さ23cmを測る楕円形の土
 壌で、土壌4の南西2mに位
 置する。埋土から土師器杯
 15・16、小皿22・35が出土
 した。(亀山)

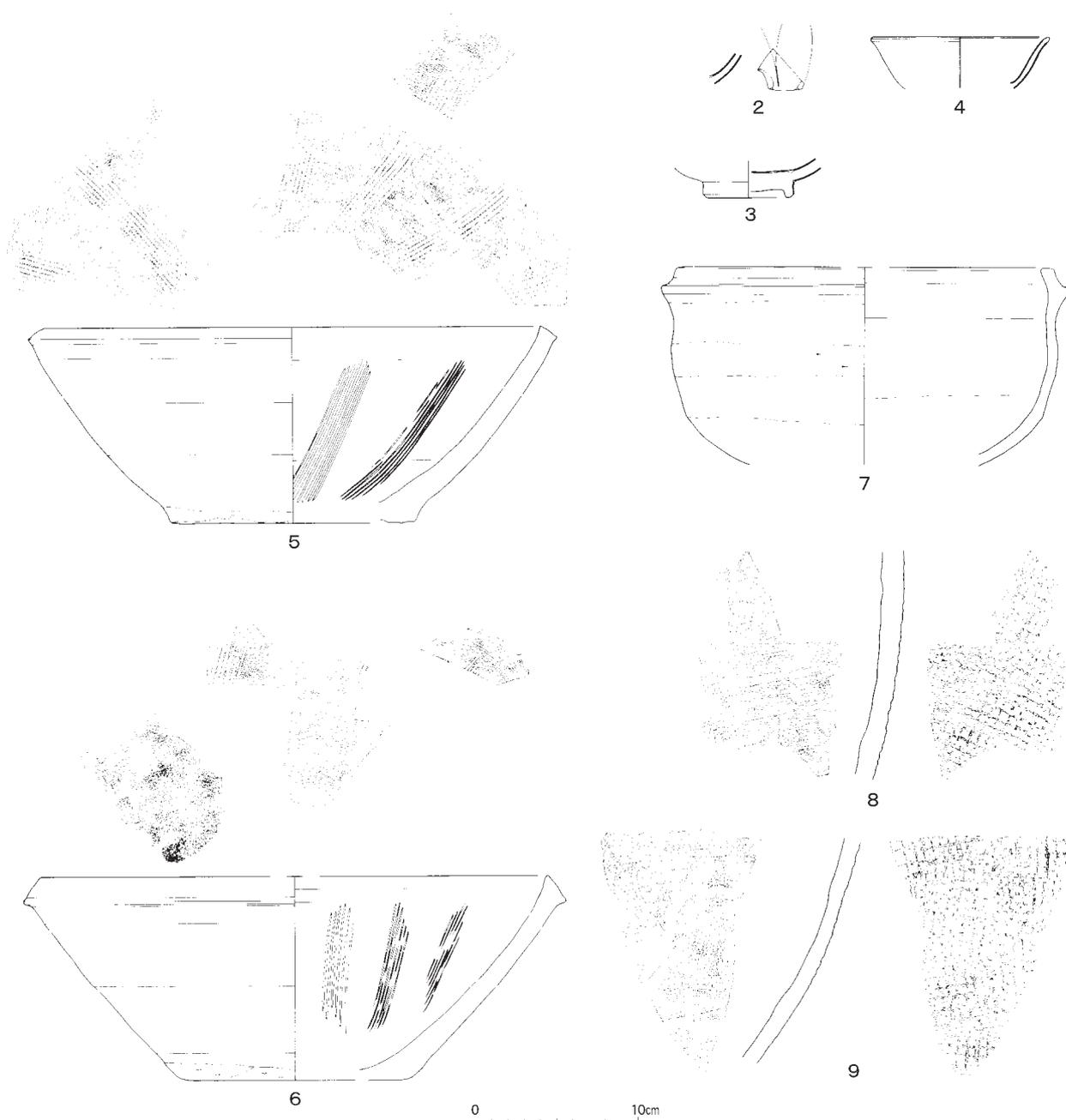


第22図 出土遺物① (1/6)

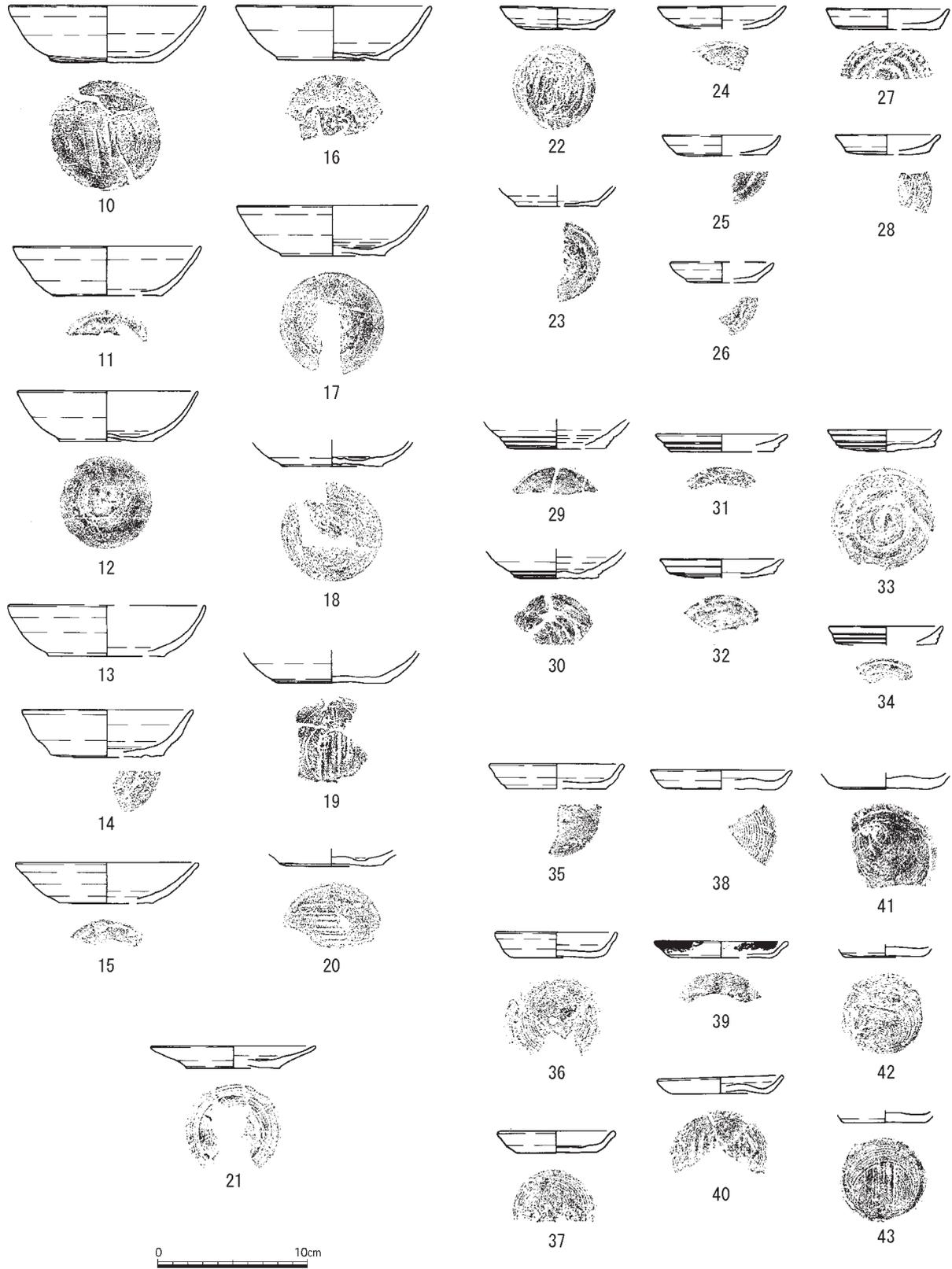
8 出土遺物 (第22~27図、図版53・54)

出土遺物には磁器(白磁・青磁)、陶器(備前焼・勝間田焼)、土師器のほか、土製品、石製品、金属製品がある。

磁器には蓮弁文を飾る竜泉窯系の青磁碗2、白磁の端反碗4がある。備前焼には甕と播鉢がある。わずかに外傾し玉縁をなす口縁部と肩の張る体部をもつ甕1は草戸千軒町遺跡S K1370¹⁾の資料に類似する。播鉢5・6のうち、外傾する口縁端部をわずかに上方へつまみあげる6は5に比べやや新しい様相を示すものの間壁編年IV期前半²⁾の範疇で理解できる。土師器には杯、皿、鍋がある。口径11.0~13.2cm、器高2.8~3.8cmを測る杯10~19は、底部をへらキリする。小皿には底部をへらキリする22~

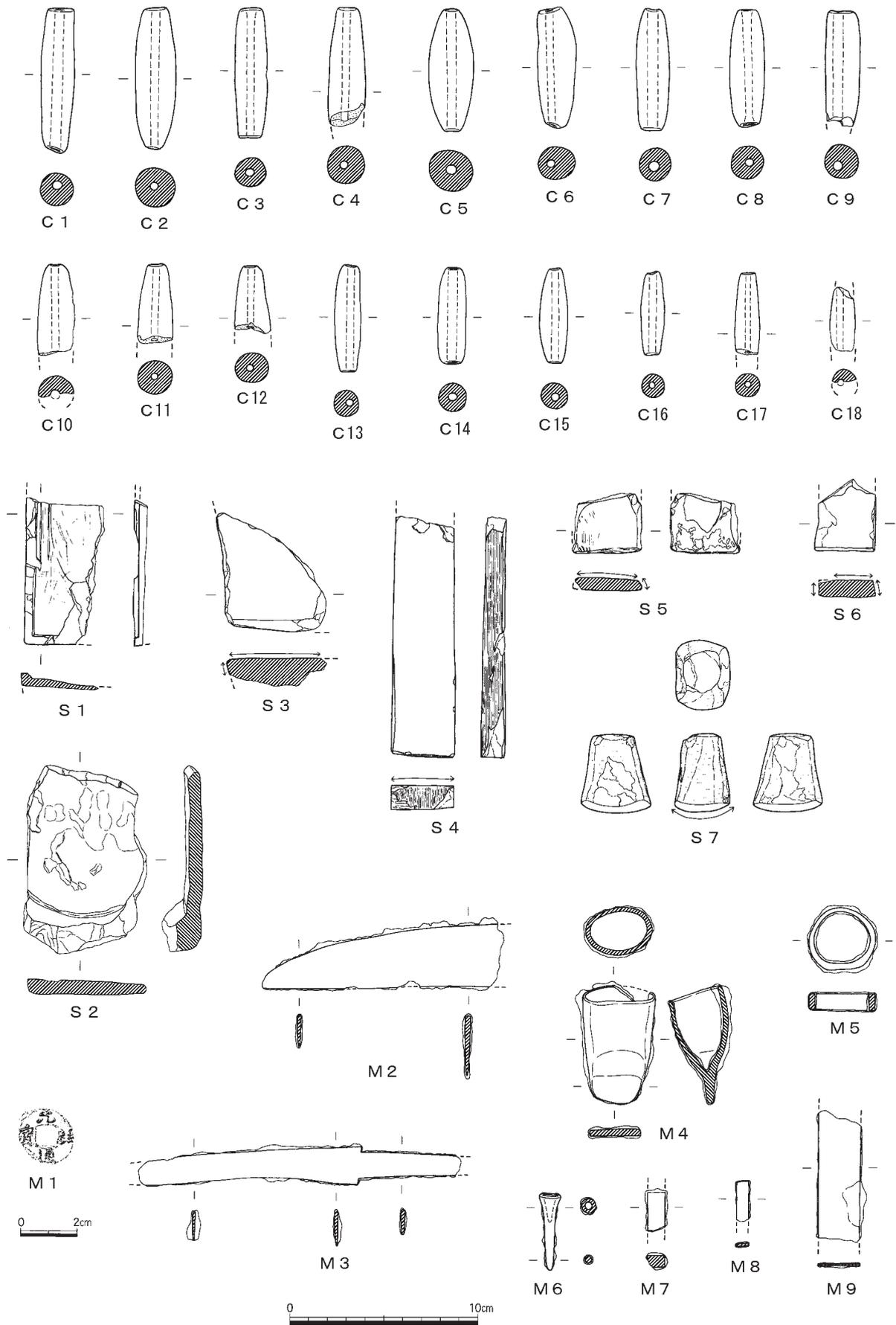


第23図 出土遺物② (1/4)

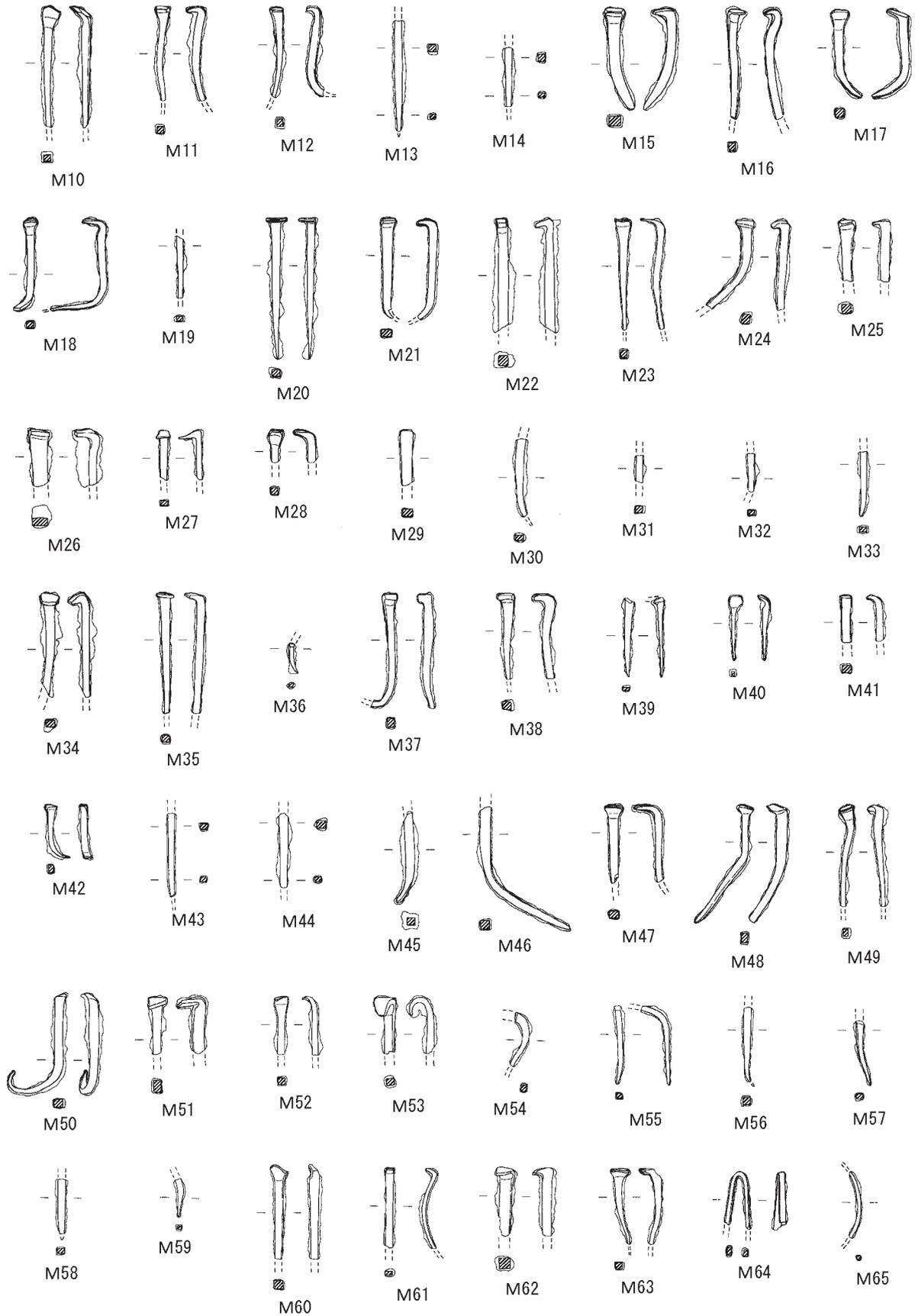


曲輪 1 (11, 12, 19, 21, 24, 32, 34, 39) 曲輪 1 土壇 1 (10, 17) 曲輪 4 (20, 26, 30) 曲輪 5 (33, 36, 37, 40)
 曲輪 7 (28) 曲輪 8 (29) 竪堀 1 (38, 41, 42, 43) 切岸・土塁 1 (14, 27, 31) 土壇 4 (23, 25) 土壇 5 (18, 22, 35)
 包含層 (15)

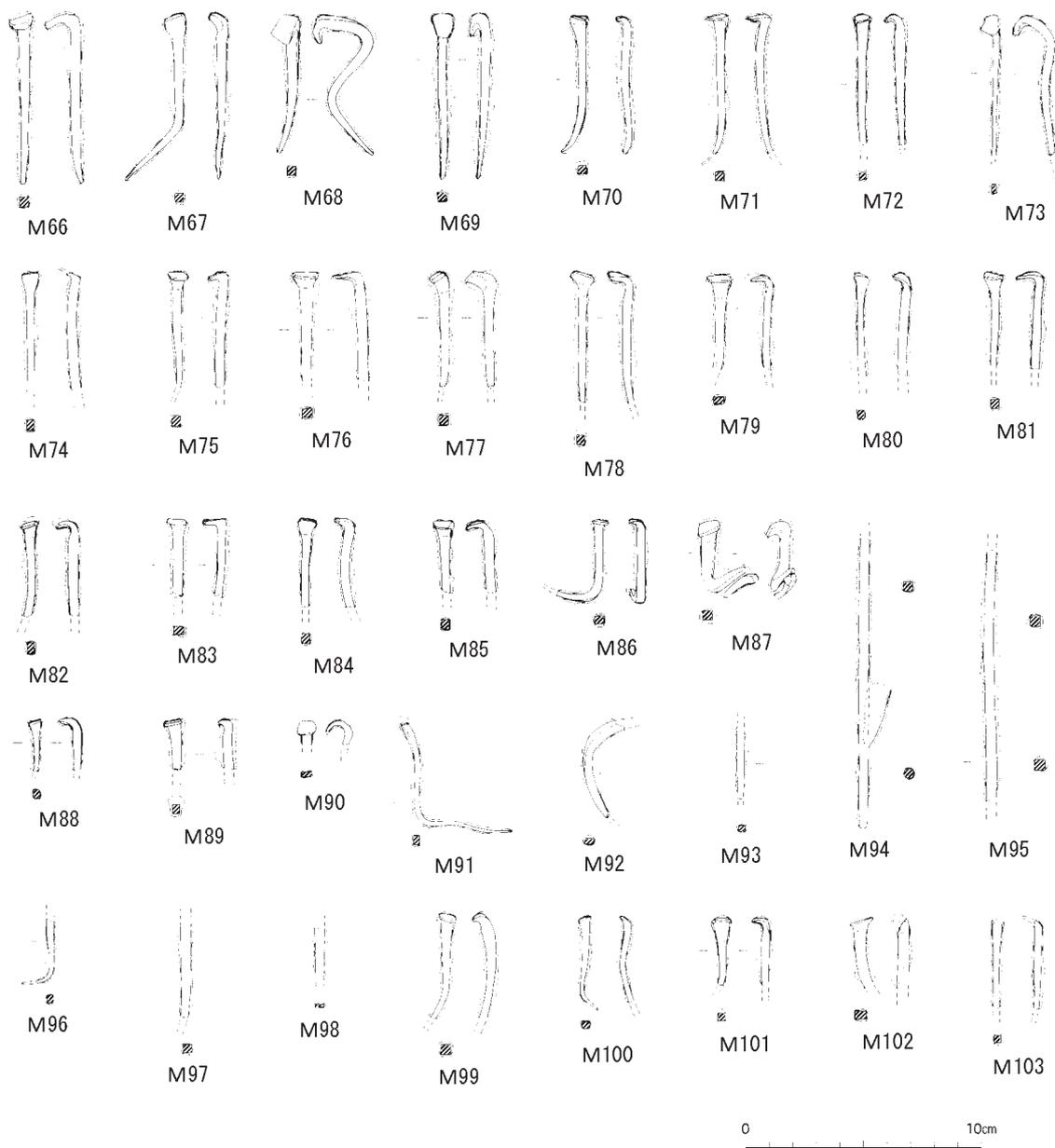
第24図 出土遺物③ (1/4)



第25図 出土遺物④ (1/3, 1/2)



第26図 出土遺物⑤ (1/3)



第27図 出土遺物⑥ (1/3)

35と糸切りする36~43とがあり、造成土下で検出された土壌1の小皿がいずれもヘラキリであることからして前者が先行するものと思われる。

C1~C18は土錘で、その多くは長さ4.4~7.7cm、径1.3~2.1cm、重量6~31gの円筒形をなすが、C5のように紡錘形を呈するものもある。石製品には長方形硯S1や滑石製石鍋の底部片を転用した温石S2、携帯に適した小形の砥石S3~S6、石杵S7のほかつづて石がある。つづて石は曲輪1や切岸・土塁1~3で822点(総重量2,150kg)ほど出土しており、その出土状況から土塁の内壁を固めるために持ち込まれたとも考えられるが、第12図に示したとおりこれらはつづて石に相応しい一定の法量を有しており、つづて石の一時的な保管形態と理解しておきたい。金属製品は北宋銭M1や刀子M3、石突M4などがあるが、その大半を占める鉄釘は長さ2.8~7.3cmと総じて小ぶりで、大形の部材を繋ぎ留めるというよりはむしろ板材などを打ち付けるのに用いられたのかもしれない。(亀山)

第3節 城郭以外の遺構と遺物

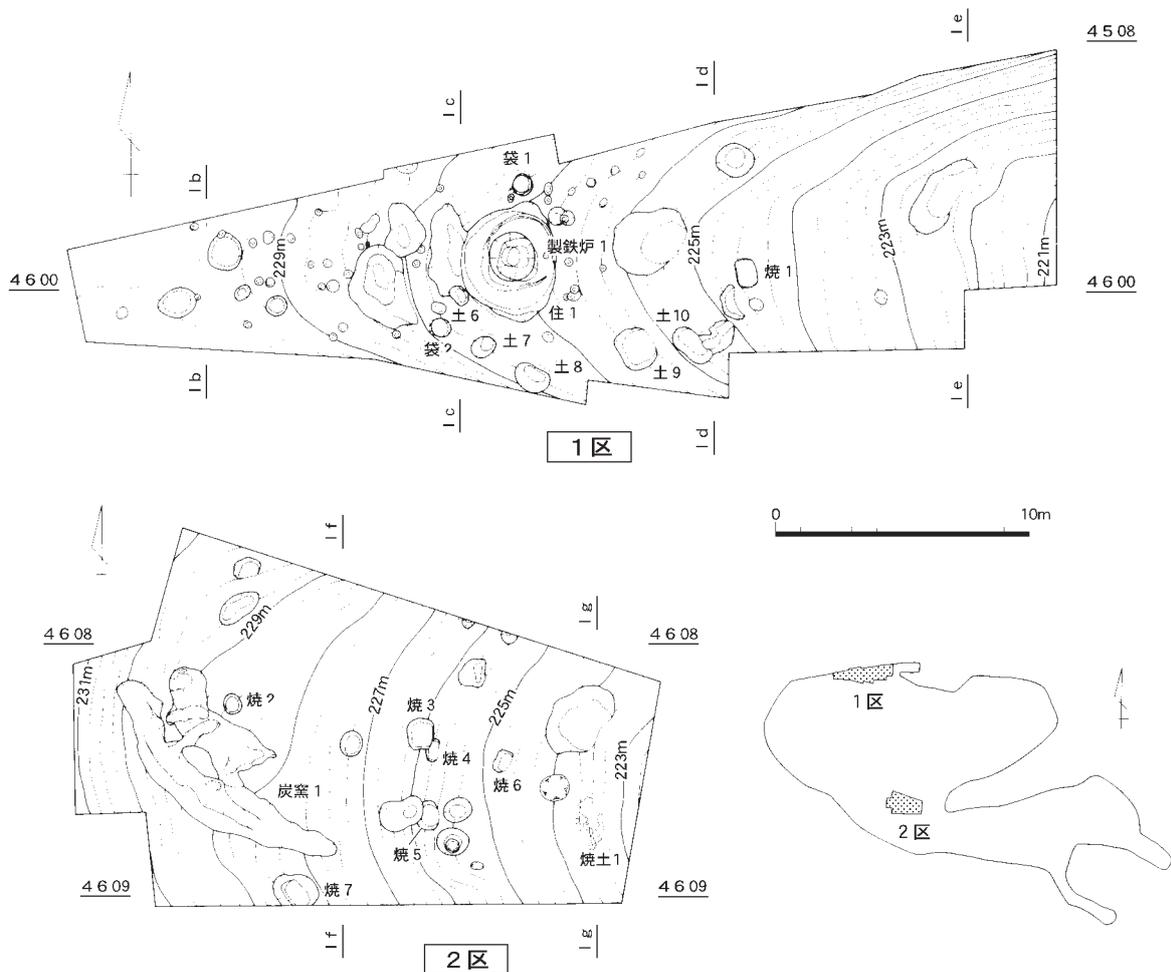
1 概要

城峪城跡が構築された独立丘陵は馬蹄形を呈し、城郭の北側と中央部には東から谷筋が入り込んでいる。城郭調査の過程で、この谷筋の最上部に築城以前の遺構・遺物が埋没していることが判明し、北側を1区、中央部を2区として、下層部分の調査を実施した。その結果、弥生時代の遺構・遺物のほか、古墳時代後期～古代と考えられる製鉄炉と横口付炭窯などの製鉄・製炭関連遺構を検出した。また、城郭部分の調査でも、築城以前・廃城以降の遺物がわずかながら出土している。（佐藤）

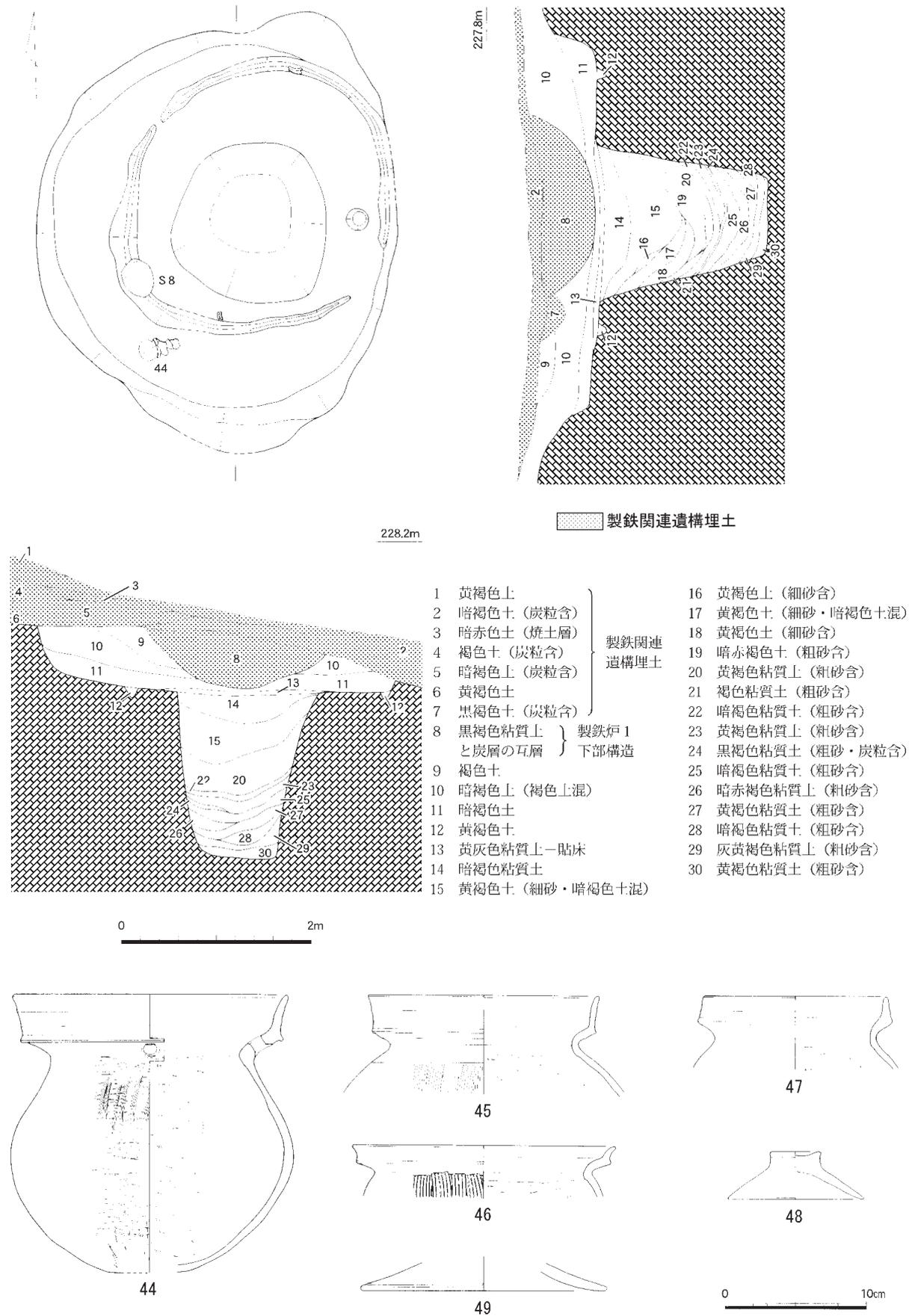
2 縄文～弥生時代の遺構と遺物

竪穴住居 1（第28・29・30図、図版51）

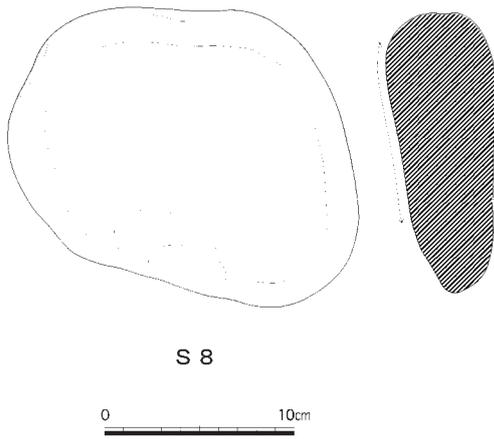
1区中央部に位置する。直径3.8～4.1mの楕円形を呈し、支柱穴は認められない。中央の深さ1.7mを測る大形土壇は貯蔵穴と考えられ、上面を貼床粘土（13層）で封じられる。この大形土壇と周囲を巡る壁体溝痕跡が組み合うと考えられ、当初は小竪穴と貯蔵穴であったものを、最終的に貯蔵穴を



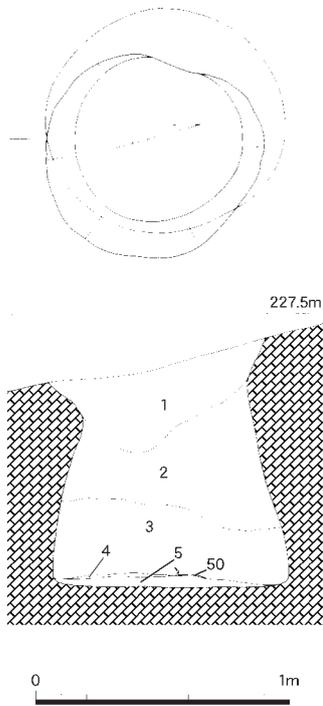
第28図 下層調査1・2区全体図 (1/300)



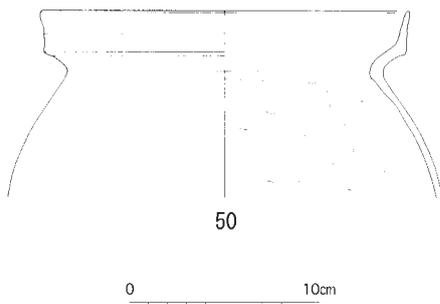
第29図 竪穴住居1 (1/60)・出土遺物① (1/4)



第30図 竪穴住居 1 出土遺物② (1/8)



- 1 褐色土
- 2 褐色土 (黄褐色土混)
- 3 暗褐色土 (炭粒含)
- 4 炭層
- 5 明褐色粘質土



第31図 袋状土壌 1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

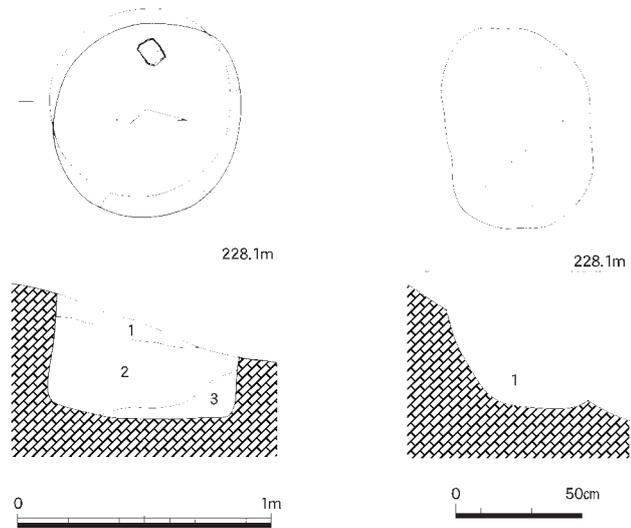
埋めて住居として拡張したと想定される。出土遺物から、遺構の時期は後期後葉である。(佐藤)

袋状土壌 1 (第28・31図)

竪穴住居 1 の北方 1 m に位置する。上面・底面ともほぼ円形で、底面径 90 cm を測る。断面形は上端がラッパ状に開放するフラスコ形で、検出面から底面まで 90 cm を測る。4・5 層は使用中、1～3 層は廃棄後の埋土と考えられる。4 層上面から出土した 50 から、遺構の時期は後期後葉である。(佐藤)

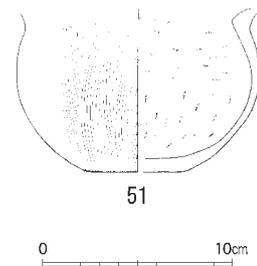
袋状土壌 2 (第28・32図)

竪穴住居 1 の南西 2 m に位置する。上面を流失し、検出面から底面まで 40 cm を測る。底面は平坦で、直径 75 cm の円形を呈する。壁体はやや内傾しつつ直立する。図化しえなかったが、底面近くから弥生土器片が出土している。周囲の状況を勘案すると、遺構の時期は後期後葉の可能性が高い。(佐藤)

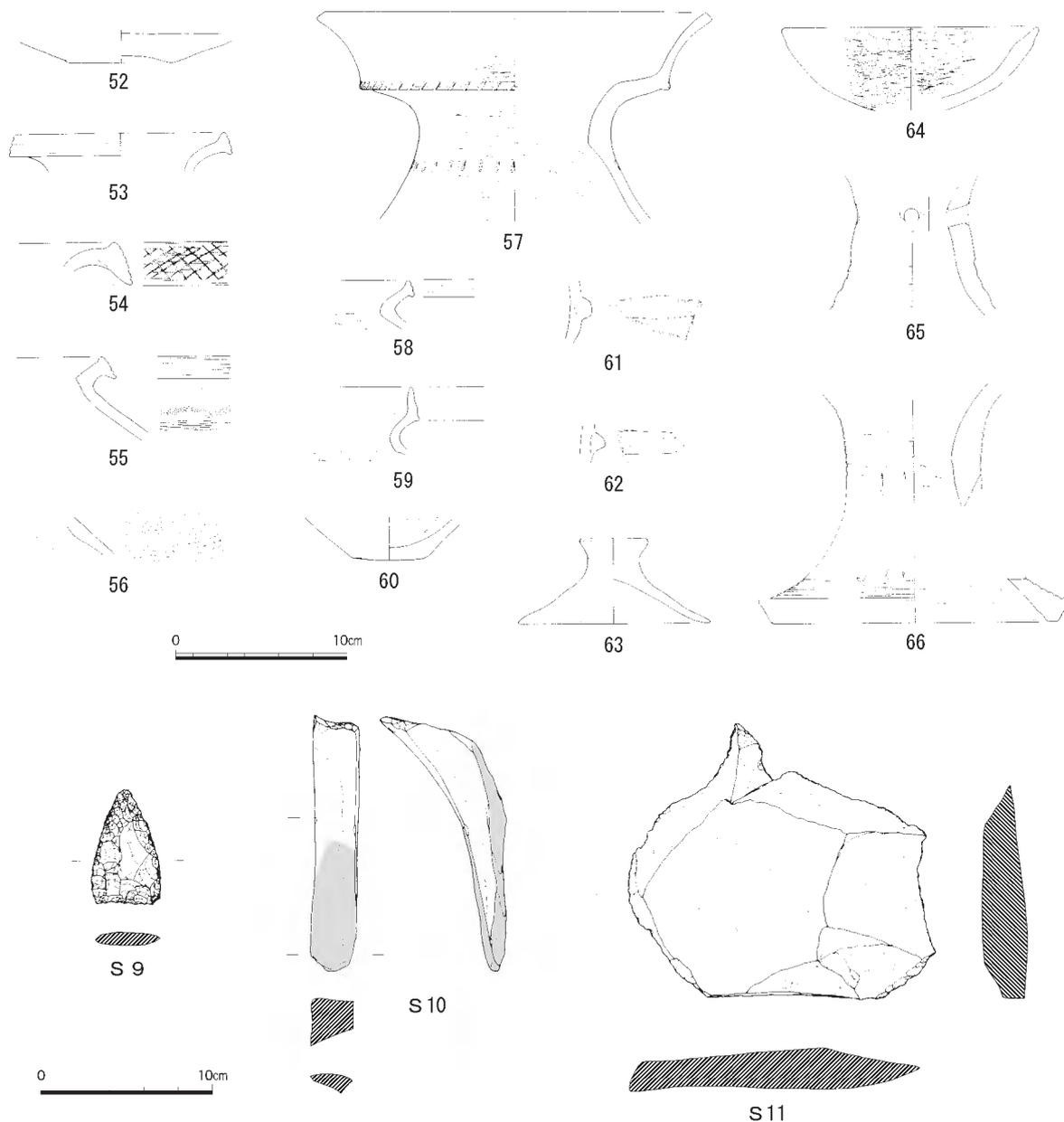


- 1 褐色土 (炭粒含)
- 2 暗褐色土
- 3 明褐色土

第32図 袋状土壌 2 (1/30)



第33図 土壌 6 (1/30)
・出土遺物 (1/4)



第34図 遺構に伴わない遺物 (1/4, 1/3)

土壌 6 (第28・33図)

竪穴住居1のすぐ北側に位置する。検出面で、80×56cmの平面楕円形を呈する。上半を流失し、検出面から底面まで40cmを測る。出土した小形甕51から、遺構の時期は後期後葉と考えられる。(佐藤)

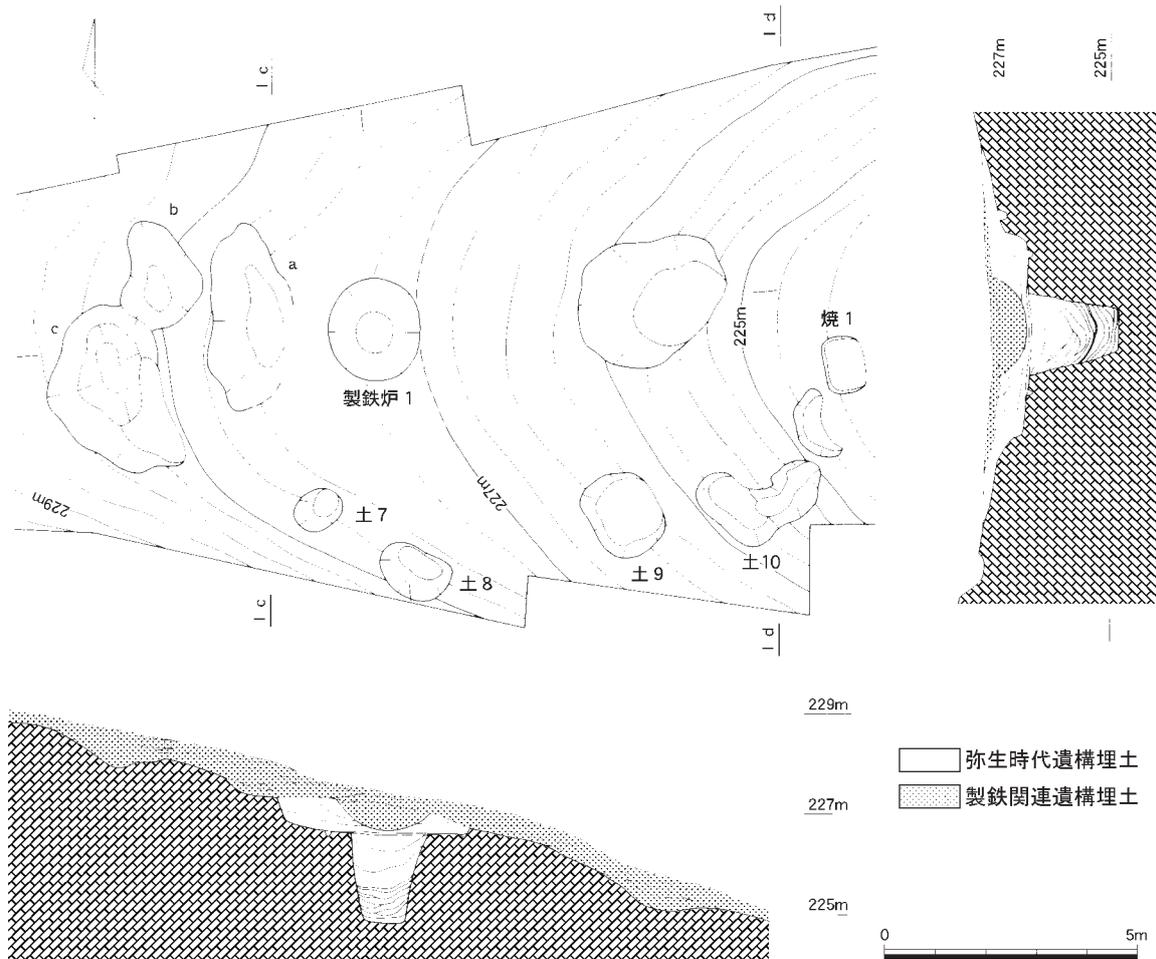
遺構に伴わない遺物 (第34図、図版53・54)

1・2区および丘陵部から、当該期の遺物がわずかながら出土している。52は縄文晩期の浅鉢底部と考えられる。54～56は弥生中期後葉、53・57～66は後期前葉～後葉に位置付けられる。61・62は同一個体の可能性が高く、特殊壺などの装飾壺の胴部突帯部分と考えられる。胎土・焼成は他の土器と共通する。64は高杯で、口縁部形態に山陰東部の影響が認められる。S9はサヌカイト製の平基式石鏃で、丘陵斜面から出土した。S10はサヌカイト製のいわゆるスレ石で、部分的に強い研磨痕が認められる。S11はサヌカイトの石核で、周縁部を数か所にわたり打ち欠いている。(佐藤)

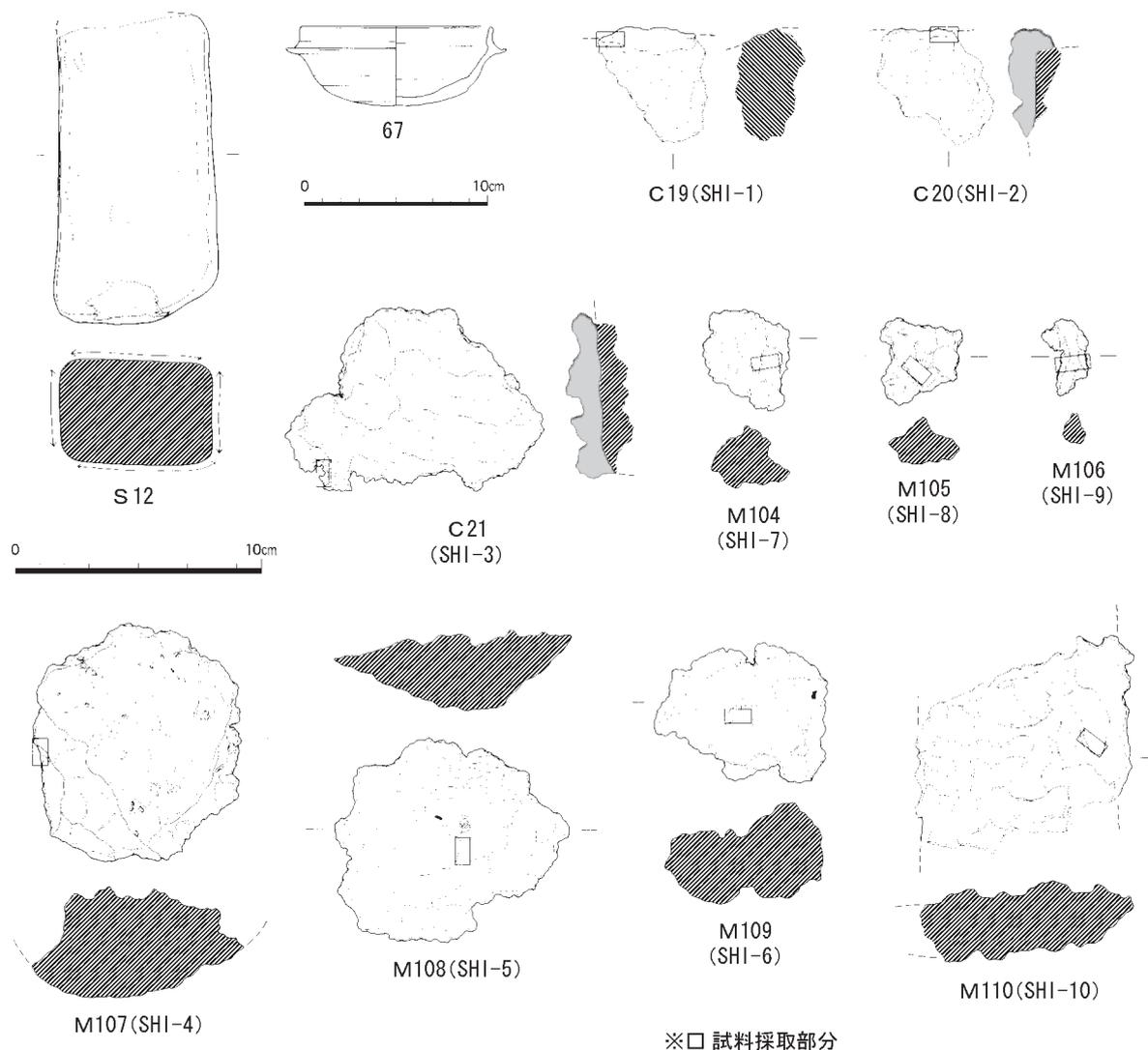
3 古墳時代以降の遺構と遺物

製鉄炉 1 (第28・35・36図、巻頭図版5、図版51)

1区中央部に位置する。製鉄炉1周辺は、表土下20~50cmの厚さで鉄滓・炭粒を含む流土が堆積しており、これを除去した段階で、竪穴住居1埋土中に掘り込まれた製鉄炉下部構造を検出した。下部構造は素掘りの土窟で、平面楕円形・断面半円形を呈し、検出面で2.0×1.8m・底面までの深さ50cmを測る。埋土は粘質土と木炭層の粗い互層で、ここから須恵器杯身67・砥石S12が出土した。製鉄炉については、炉壁片が散在的に出土しただけで詳細は不明であるが、下部構造の平面形から円筒炉と考えられる。また、排滓溝についても確認できず、下方の谷に直接排滓した可能性が高い。上方斜面には、長径2.0~3.5m・短径1.5mほどの不整形な浅い窪みが3箇所あり(a~c)、輪座など製鉄関連施設の可能性もある。上屋の存在は確認できなかった。なお、製鉄原料は金属学的調査の結果、砂鉄と判明した(付載2参照)。また、下部構造に充填された木炭から3点を抽出して、樹種鑑定と¹⁴C年代測定を実施した結果、樹種はコナラ属コナラ亜属クヌギ節、クマシデ属イヌシデ節、コナラ属アカガシ亜属、年代はA.D. 770±70年、A.D. 560±70年、A.D. 430±60年との成果を得た。製鉄炉1の時期は、下部構造の規模、¹⁴C年代測定結果、周辺遺構の状況から、7世紀代と考えられる。(佐藤)



第35図 製鉄炉1周辺全体図(1/150)



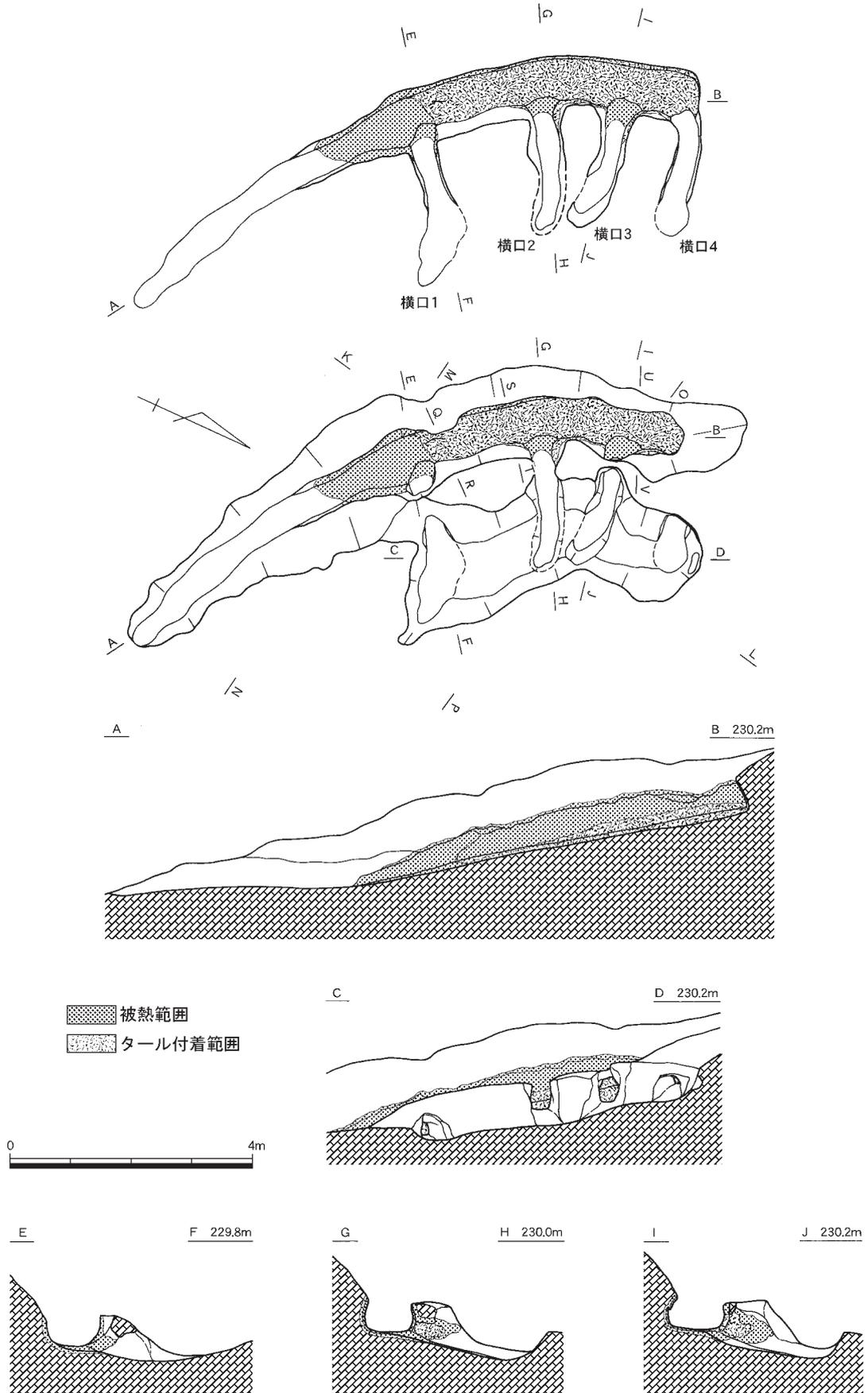
第36図 製鉄炉 1 周辺出土遺物 (1/4, 1/3)

炭窯 1 (第28・37・38図、巻頭図版5、図版52)

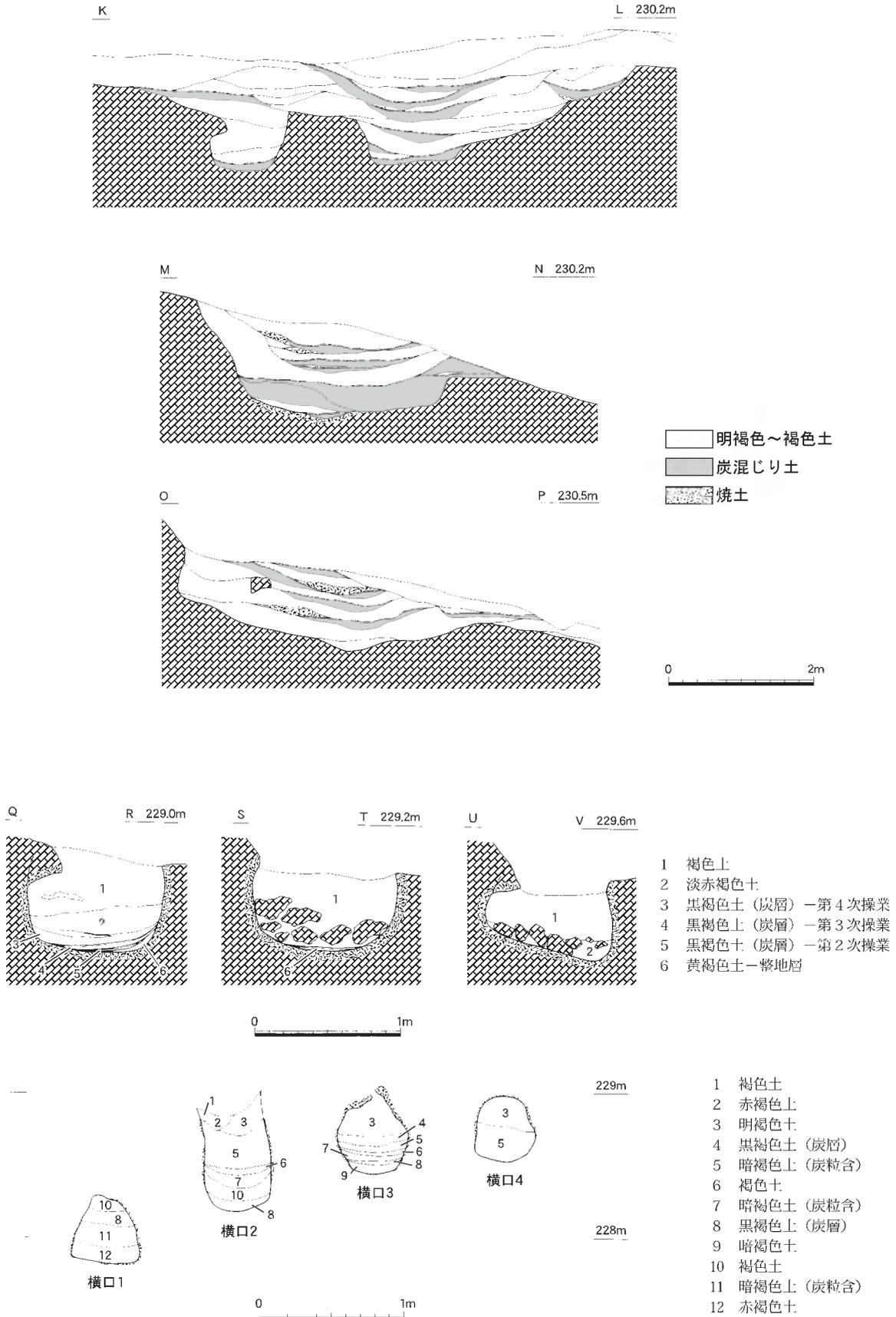
2区の上方で検出した横口式の炭窯である。堀切3から2mほど東へ下った斜面を利用して築かれており、窯体とそれに至る通路、横口前面に設けられた窪みからなる。

窯体は、斜面を削りこんで築かれたためか弧状をなし、南東から北西へと延びている。焼成室は長さ6.45m、幅98cmを測り、高さは現状で57cmある。11°の傾斜をもつ床面には3次にわたる補修が認められる。4つの横口が取り付く長さ4.6mの範囲にタールの付着が認められるが、それ以上の壁面は硬質に還元され灰色をなす。焚口には特別な施設を設けていないが、幅が60cmと狭まるとともに、傾斜をもって下ってきた床面がここで水平に延びる長さ3.98m、幅55cmの通路と接続する。

4つある横口は長さ1.17~1.37m、幅40~47cm、高さ45~56cmあり、90cm~1.7mと不揃いな間隔で設けられている。壁面は赤褐色を呈するものの、奥壁よりに設けられた横口にはタールが付着し、煙道の役割を果たしたものと推定される。横口の前面には長さ4.8m、幅1.5mの窪みが検出された。横口の底面はこの窪みに向かって傾斜しており、炭を掻き出す作業場として機能したと思われる。しかし、その北壁に穿たれた径38cm、奥行き10cmの円形をなす窪みは煙道を予定した痕跡と考えられ



第37図 炭窯 1 (1/100)



第38図 炭窯1土層断面 (1/80, 1/40)

ることから、この窪みが本来窯体を構築する目的で掘削されたものと思われる。

この炭窯からは時期を示すような遺物は出土していないが、窯体の検出段階で須恵器の蓋が出土しており、その退化した構造からしても8世紀まで下る可能性がある。なお、木炭の¹⁴C年代測定では、A. D. 570年の値が得られている。(亀山)

土壙7 (第28・39図)

製鉄炉1の南2.2mで検出した土壙で、標高227.8mの斜面に掘りこまれている。長さ97cm、幅80cmの楕円形を呈し、深さ12cmを測る掘り方内には木炭が充満していた。遺物は出土していない。(亀山)

土壙8 (第28・40図、図版51)

土壙7の南東1m、製鉄炉1の南3.2mに位置する土壙で、切岸・土塁3の造成土下で検出した。長さ1.37m、幅93cm、深さ14cmの不整な円形をなし、3層に分かれる埋土の中層からは木炭が層をなして出土した。出土遺物には炉壁C22や製錬鉄滓がある。このうちM111は含鉄流動滓、M112は流出溝滓に分類される。詳細な時期については明らかでないが、木炭の¹⁴C年代測定ではA. D. 670年という結果が得られている。(亀山)

土壙9 (第28・41図)

切岸・土塁3の造成土下で検出した土壙で、製鉄炉1の南東4.2mに位置する。長さ1.71m、幅1.39m、深さ13cmの方形をなし、深さ13cmにある底面は北東に向かって傾斜する。少量の木炭が出土したのみで詳細な時期は不明である。(亀山)

土壙10 (第28・42図)

土壙9の東1mに位置する土壙で、切岸・土塁3の造成土下で検出した。長さ1.8m、幅93cm、深さ22cmの楕円形をなす土壙と、それから南東に延びる幅1.01m、深さ19cmの溝からなり、内部からは製錬鉄滓50.9kgや炉壁片4.8kgが出土した。(亀山)

焼成土壙1 (第28・43図)

製鉄炉1の東7.9mで検出した土壙で1区の遺構としては最も低い場所にある。長さ1.17m、幅81cm、深さ8cmの方形をなし、壁面や底面の一部に被熱痕跡が認められる。遺物は出土していない。(亀山)

焼成土壙2 (第28・44図)

炭窯1の横口に接して設けられた窪みの北東30cmで検出した。長さ82cm、幅75cm、深さ11cmの不整な円形を呈し、標高229.0mを測る底面の北半に広く被熱痕跡が認められる。遺物は出土していないが、炭窯1と近似した時期が想定される。(亀山)

焼成土壙3 (第28・45図)

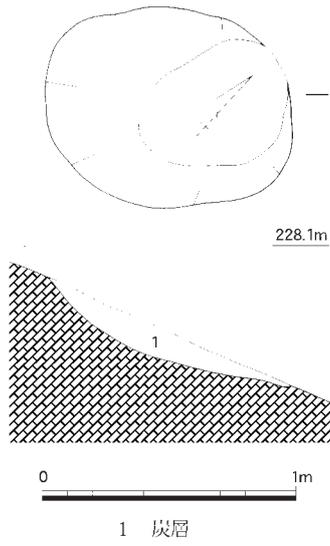
焼成土壙2の東6.6mで検出した土壙で、これより3.4mほど低い位置にある。長さ1.25m、幅1.11m、深さ31cmの隅丸方形をなし、壁面には被熱痕跡が認められる。出土遺物はなく、時期は不明。(亀山)

焼成土壙4 (第28・46図)

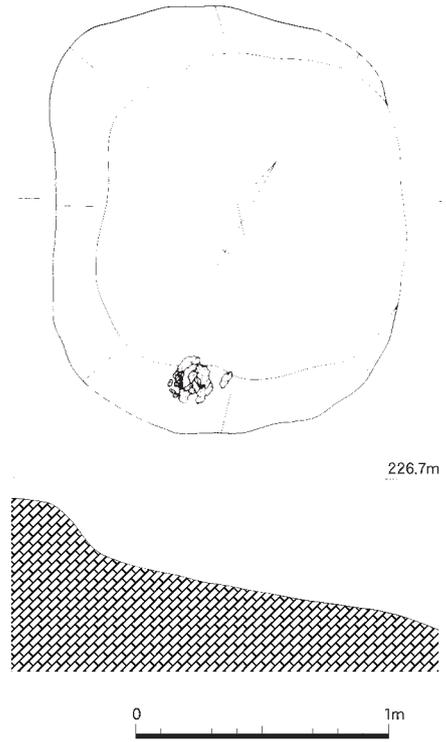
焼成土壙3の南東で重複して検出した、長さ90cm、幅47cm、深さ10cmを測る方形の土壙で、北西側に被熱痕跡が認められる。焼成土壙3に先行するものの、出土遺物はなく時期は不明である。(亀山)

焼成土壙5 (第28・47図)

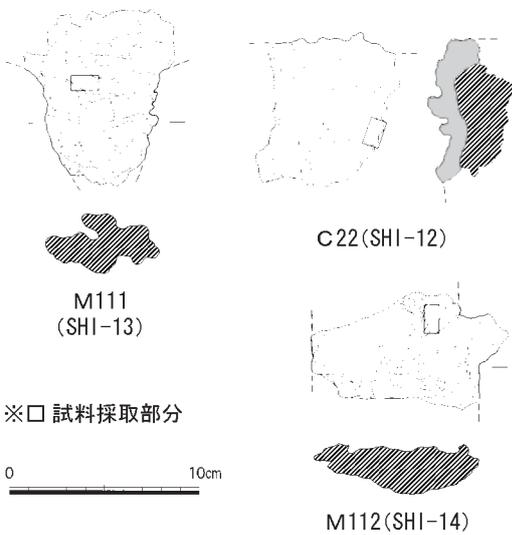
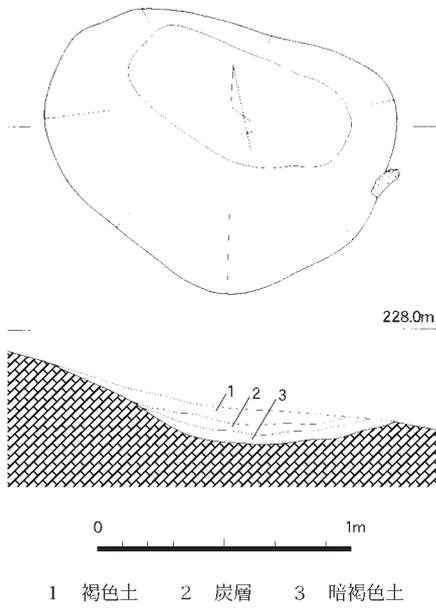
長さ1.16m、幅81cm、深さ28cmを測る楕円形の土壙で、焼成土壙4の南1.5mで検出した。土壙内は炭層が褐色土と互層をなして堆積し、底面と壁面には被熱痕跡が部分的に認められたが、出土遺物はなく時期については明らかでない。(亀山)



第39図 土壌 7 (1/30)



第41図 土壌 9 (1/30)

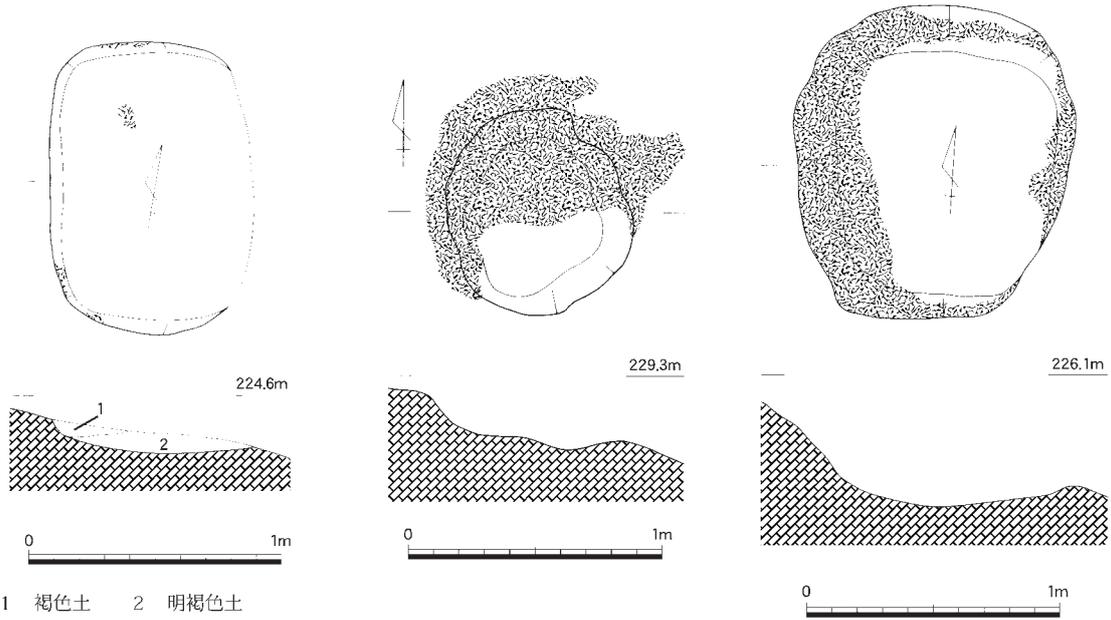


第42図 土壌 10 (1/30)

※□ 試料採取部分

0 10cm

第40図 土壌 8 (1/30)・出土遺物 (1/4)

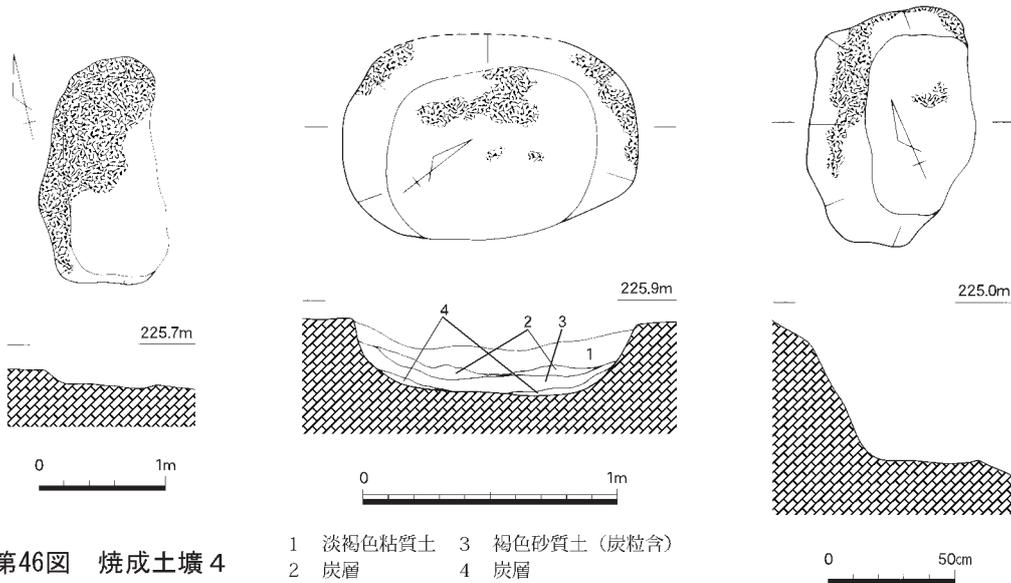


1 褐色土 2 明褐色土

第43図 焼成土壌 1 (1/30)

第44図 焼成土壌 2 (1/30)

第45図 焼成土壌 3 (1/30)



第46図 焼成土壌 4
(1/30)

1 淡褐色粘質土 3 褐色砂質土(炭粒含)
2 炭層 4 炭層

第47図 焼成土壌 5 (1/30)

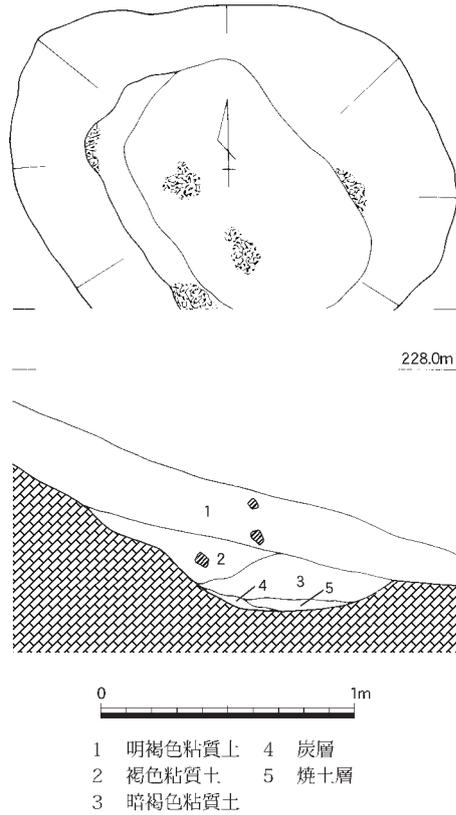
第48図 焼成土壌 6 (1/30)

焼成土壌 6 (第28・48図)

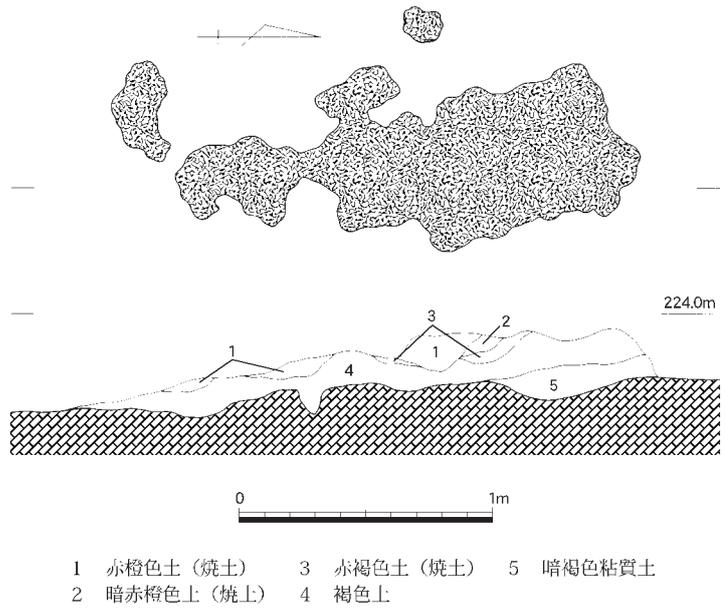
焼成土壌 4 の東 2.1m で検出した土壌で、焼成土壌 4 より 90cm 低い位置にある。長さ 94cm、幅 66cm の方形を呈し、深さは 45cm と焼成土壌の中では最も深い。遺物は出土していないが、底面と壁面の一部に被熱痕跡が認められる。(亀山)

焼成土壌 7 (第28・49図)

炭窯 1 の通路南側、標高 227m の位置で検出した不整形円形を呈する土壌で、長さ 1.76m、幅 1.57m、深さ 25cm と焼成土壌としては最も大形である。下層には炭と焼土が堆積しており、底面には所々被熱痕跡が認められる。遺物は出土していない。(亀山)



第49図 焼成土壌 7 (1/30)



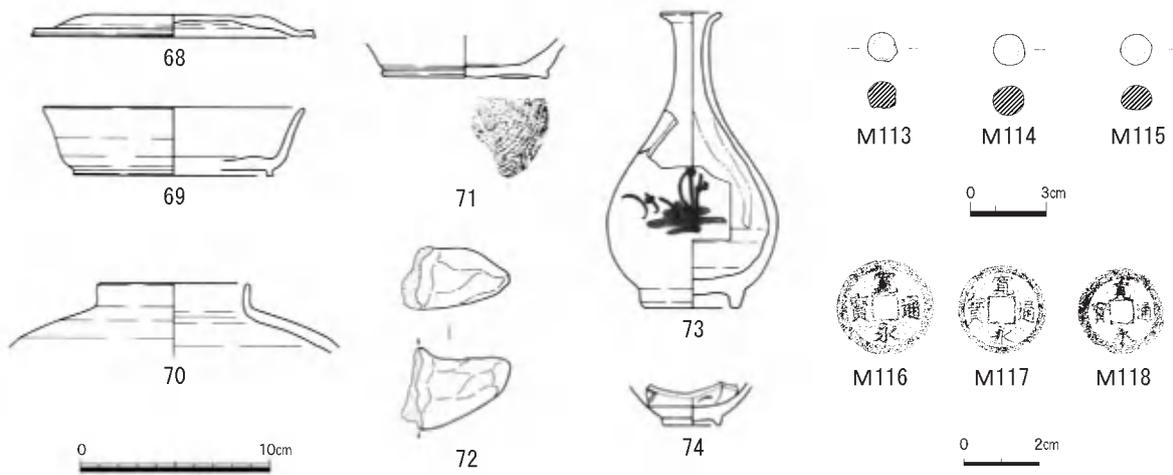
第50図 焼土 1 (1/30)

焼土 1 (第28・50図)

焼成土壌 5 の南 5.5m、標高 223.5m の位置で、南北 2.1m、東西 98cm の範囲に分布する厚さ 10cm 前後の焼土塊が認められたが、その時期や性格を知る手掛かりは得られなかった。(亀山)

遺構に伴わない遺物 (第51図、図版54)

遺構に伴わない遺物には、須恵器の蓋 68 や杯 69、短頸壺 70、土師器の把手 72、勝間田焼の椀 71 がある。須恵器は曲輪 1 の南斜面から炭窯 1 の上層で、土師器や勝間田焼は 1 区から出土しており、製鉄や製炭に関わる遺物と考えられる。また、染付 73・74 や鉛弾 M113~M115、寛永銭 M116~M118 は近世以後の利用に関わるものであろう。(亀山)



第51図 遺構に伴わない遺物 (1/4, 1/3, 1/2)

第4節 小結

城峪城跡は南から東へ大きく蛇行する吉井川の北岸に位置し、下流側へ眺望が開けた立地をとる。その遺構の範囲は東西200m、南北108mと広く、中心となる曲輪も東西68.3m、南北16.1mと比丘尼ヶ城跡に次ぐ規模をもつ。しかし、曲輪には自然地形を多く残しており、その造成による改変を受けた範囲は比較的狭いものと思われる。また、この曲輪を独立させるように掘りこまれた2条の堀切は、それぞれの規模が小さく浅いうえに、その間隔も10mほどある他の3城に比べ7m余りとかなり狭くなっている。また、北斜面を中心に3段にわたって設けられた切岸・土塁や、それらを分断するように掘りこまれた4条の豎堀は、標高242mと4城の中で最も低い位置にあることと無関係ではない。

このように、城峪城跡は久田庄の中心に位置する城として相応しい規模と構造をもち、諸城の中核をなしていたものと想定される。しかし、吉井川に向かって張り出した低い丘陵上に立地するために、上流側への眺望が効かず防御にも不都合が生じたであろうことは、その厳重なる構造から逆に推察される。その結果、近接したより高い丘陵上に比丘尼ヶ城跡が築かれたのではなかろうか。こうした両城の時間差は、比丘尼ヶ城跡と構造的に類似点の多い久田上原城跡が糸切り底の小皿を出土するのに対し、城峪城跡は底部ヘラキリの杯や小皿が主体となることからもうかがえる。(亀山)

築城以前の製鉄関連遺構のうち、製鉄炉1については平面円形の下部構造から円筒炉の可能性が考えられる。円筒炉については付載2のとおり中国山地～山陰に類例があり、箱形炉とは別の技術系譜として伝播した可能性と、箱形炉が時期が下がるとともに弛緩して円筒炉に移行した可能性が考えられる。製鉄炉周辺の土壌からは鉄滓・炉壁が出土し、製鉄炉で生成された鉄塊の小割りや選別が行われたと想定される。製鉄炉1の時期については、下部構造の規模が古代の製鉄炉下部構造の規模よりやや小さめの数値を示すこと³⁾や、下部構造から出土した須恵器杯身67⁴⁾から、7世紀代の可能性が高い。

炭窯1については、その形態的特徴として焼成部が短く横口数が少ないこと、焼成部床面が急傾斜であること、焼成部奥壁に煙道が無く最奥部の横口を煙道としていること、焼成部上方の排水溝が無いことが挙げられ、いずれも横口付炭窯の時期的変遷の中で新しい様相を示している⁵⁾。遺構に伴う出土遺物が無く、時期については周辺の遺構・遺物の状況から7～8世紀代の幅で考えざるを得ないが、近隣に所在し、構造・規模が類似する比丘尼ヶ城跡の横口付炭窯が7世紀代に比定されることや、先述の製鉄炉1とのセット関係を重視するならば7世紀まで遡る可能性が考えられよう。

焼成土壌については、周辺では峪畑遺跡・比丘尼ヶ城跡・河内城跡・久田上原城跡などいずれも丘陵頂部から斜面部で検出されており、遺構や埋土の状況から伏せ焼きによる木炭生産施設の一形態と考えられる。時期については、周囲の遺構・遺物の状況や出土木炭の¹⁴C年代から7～9世紀代が想定される。横口付炭窯との機能差や時期差の解明が今後の課題として挙げられるが、実体が不透明な古代木炭生産を検討する上で重要な資料になると考えられる。(佐藤)

註

- 1) 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994年
- 2) 間壁忠彦・間壁霞子「備前焼研究ノート1～4」『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18 1966・1968・1984年
- 3) 河瀬正利『たたら吹製鉄の技術と構造の考古学的研究』溪水社 1995年
- 4) 67は受部が古相を示すが、口径と器高の比率(10.3×4.3cm)や底部調整から7世紀前半に比定される。
- 5) 上椋 武「横口付窯跡の基礎的研究」『たたら研究』第41号 たたら研究会 2001年

曲輪一覽表

遺構名	規模(m)			面積 (㎡)	海拔高 (m)	付属 施設	出土 遺物
	最大長	最大幅	外縁長				
血輪 1	68.3	16.1	158.0	800.0	243.00	○	○
曲輪 2	44.0	(12.0)	—	—	236.00	×	×
曲輪 3	16.7	2.8	18.0	30.0	231.00	×	×
曲輪 4	15.0	2.2	19.0	46.0	241.00	○	○
血輪 5	15.2	2.5	15.0	37.0	238.75	○	○
曲輪 6	22.0	2.7	32.0	86.0	236.75	×	○
曲輪 7	17.0	2.3	22.0	44.0	235.00	×	○
曲輪 8	16.0	(9.0)	—	—	235.00	×	×
血輪 9	18.0	4.1	35.0	87.0	233.75	○	×
曲輪 10	8.1	1.9	9.5	8.0	231.50	○	×
曲輪 11	20.8	3.5	26.0	55.0	258.75	○	×

堀一覽表

遺構名	規模(m)				傾斜 (°)	断面形	出土 遺物
	長さ	上面幅	底面幅	深さ			
堀切 1	25.3	4.0	—	0.8	37	V字形	×
堀切 2	46.1	3.9	—	0.9	35	V字形	×
堀切 3	41.3	5.0	—	0.5	35	V字形	×
堀切 4	44.0	5.1	—	0.6	38	V字形	○
竪堀 1	7.6	3.5	1.2	1.4	40	逆台形	○
竪堀 2	9.5	4.2	0.2	1.5	38	V字形	×
竪堀 3	9.3	2.6	0.8	0.9	40	逆台形	×
竪堀 4	10.7	3.5	1.0	0.5	30	逆台形	×

切岸・土塁一覽表

遺構名	規模(m)				傾斜 (°)	出土 遺物
	最大長	最大幅	土塁高	切岸高		
切岸・土塁 1	46.0	2.0	0.5	1.5	48	○
切岸・土塁 2	99.0	3.4	0.5	4.0	38	○
切岸・土塁 3	36.0	2.7	0.3	0.9	35	○

竪穴住居一覽表

遺構名	平面形	規模(cm)			長軸の向き N° - E	床面積 (㎡)	海拔高 (m)	支柱	柱間 (cm)	付属施設					時期	備考
		長さ	幅	深さ						高床部	方形土壇	中央穴	焼土面	カマド		
竪穴住居 1	楕円形	410	380	14	N-5-E	3.8	215.00	—	—	—	—	—	—	—	弥生後期	建て替え 1 回

袋状土壇一覽表

遺構名	平面形	断面形	計測値(cm)/面積(㎡)				底面海拔 高(m)	時期	備考
			上面径	底面径	深さ	面積			
袋状土壇 1	円形	I a	88	90	90	0.64	226.42	弥生後期	
袋状土壇 2	円形	II a	76	75	40	0.43	227.50		

土壇一覽表

遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔 高(m)	時期	備考
土壇 1	円形	III a	128	117	73	241.38	中世	
土壇 2	方形	III a	119	113	58	241.00		
土壇 3	楕円形	III a	167	133	56	241.68		
土壇 4	楕円形	III a	107	82	15	241.24		
土壇 5	楕円形	III a	117	88	23	240.56		
土壇 6	楕円形	III a	80	56	40	227.56	弥生後期	
土壇 7	楕円形	III b	97	80	12	227.58	古墳後期 ~ 古代	
土壇 8	不整形	III b	137	93	14	227.55		
土壇 9	長方形	III a	171	139	13	226.50		
土壇 10	楕円形	III a	180	93	22	225.58		
焼成土壇 1	長方形	III a	117	81	8	224.38		
焼成土壇 2	不整形	III b	82	75	11	229.00		
焼成土壇 3	隅丸方形	III a	125	111	31	225.58		
焼成土壇 4	長方形	III a	90	47	10	225.54		
焼成土壇 5	楕円形	III a	116	81	28	225.54		
焼成土壇 6	長方形	III a	94	66	45	224.38		
焼成土壇 7	不整形	III a	176	157	25	227.02		

土器観察表①

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
1	曲輪 1	備前焼	甕	33.5	34.0	(695.0)	橙色(5YR6/6)	復元完形	板状工具によるナデ
2		青磁	碗				灰褐色(7.5YR5/2)		
3		青磁	碗		5.0		灰白色(N7/1)		
4		白磁	碗	10.8			灰白色(N8/1)		11唇部を釉剥ぎ
5	曲輪 7	備前焼	播鉢	30.4	15.0	12.2	鈍褐色(7.5YR6/3)	復元完形	7本1組の播目
6	堀切 4 溝 1	備前焼	播鉢	(27.6)	10.9	12.6	鈍黄褐色(10YR7/4)	復元完形	6本1組の播目
7	曲輪 1	上師器	鍋	(22.0)			鈍橙色(10YR7/4)		
8		勝間田焼	甕				灰色(N5.5/1)		
9		勝間田焼	甕				灰色(N5.5/1)		
10	曲輪 1 土壇 1	土師器	杯	13.2	7.4	3.8	橙色(7.5YR6/6)	復元完形	底部ヘラキリ
11	曲輪 1	土師器	杯	12.4	7.2	3.3	橙色(2.5YR6/6)		底部ヘラキリ
12		上師器	杯	12.0	6.3	3.4	鈍黄褐色(10YR7/4)		底部ヘラキリ
13	上壇 1	土師器	杯	(11.7)	8.1	3.4	鈍黄褐色(10YR7/3)		底部ヘラキリ?
14	切岸・土塁 1	土師器	杯	13.0	9.1	3.2	鈍橙色(7.5YR6/4)		底部ヘラキリ
15	上壇 5	土師器	杯	12.2	6.3	2.8	鈍橙色(7.5YR6/4)		底部ヘラキリ
16		土師器	杯	12.9	7.4	3.7	鈍黄褐色(10YR6/4)		底部ヘラキリ
17	曲輪 1 土壇 1	土師器	杯	12.8	6.8	3.4	橙色(5YR6/6)		底部ヘラキリ
18	上壇 5	土師器	杯		6.7		鈍黄褐色(10YR7/4)		底部ヘラキリ
19	曲輪 1	土師器	杯		7.6		橙色(5YR7/8)		底部ヘラキリ
20	曲輪 4	土師器	杯		6.9		鈍橙色(7.5YR6/4)		底部ヘラキリ・板目
21	曲輪 1	土師器	皿	11.0	6.2	1.5	橙色(2.5YR6/6)	復元完形	底部ヘラキリ
22	土壇 5	土師器	小皿	7.6	5.5	1.5	鈍黄褐色(7.5YR6/4)	復元完形	底部ヘラキリ・板目
23	上壇 4	土師器	小皿		5.4		鈍褐色(7.5YR6/4)		底部ヘラキリ
24	曲輪 1	土師器	小皿	8.5	(4.8)		橙色(5YR7/6)		底部ヘラキリ
25	土壇 4	土師器	小皿	(7.8)	6.0	1.4	橙色(5YR6/6)		底部ヘラキリ
26	曲輪 4	土師器	小皿	(6.9)	4.8	1.4	鈍褐色(7.5YR6/4)		底部ヘラキリ
27	切岸・土塁 1	土師器	小皿	8.1	7.0	1.4	橙色(7.5YR7/6)	復元完形	底部ヘラキリ
28	曲輪 7	土師器	小皿	6.8	5.2	1.1	鈍褐色(7.5YR6/4)		底部ヘラキリ
29	曲輪 6	土師器	小皿		6.6		灰白色(2.5Y8/1)		底部ヘラキリ
30	曲輪 4	土師器	小皿		5.7		灰白色(2.5Y8/2)		底部ヘラキリ
31	切岸・土塁 1	土師器	小皿	8.7	7.0	1.2	浅黄色(2.5Y7/3)		底部ヘラキリ
32	曲輪 1	土師器	小皿	8.3	6.8	1.3	浅黄褐色(10YR8/3)		底部ヘラキリ
33	曲輪 5	土師器	小皿	7.6	6.2	1.5	灰白色(2.5Y8/2)	復元完形	底部ヘラキリ
34	曲輪 1	土師器	小皿	7.6	6.7		鈍黄褐色(10YR7/2)		底部ヘラキリ
35	土壇 5	土師器	小皿	8.9	6.6	1.7	鈍褐色(7.5YR6/4)		底部ヘラキリ
36	曲輪 5	土師器	小皿	8.1	5.6	1.8	鈍褐色(7.5YR6/4)		底部糸切り
37		土師器	小皿	7.8	5.4	1.5	鈍褐色(7.5YR6/4)		底部糸切り後ナデ
38	竪堀 1	土師器	小皿	9.2	7.5	1.3	鈍黄褐色(10YR7/4)		底部糸切り
39	曲輪 1	土師器	小皿	9.0	6.4	1.2	橙色(5YR6/6)		口縁部に煤付着
40	曲輪 5	土師器	小皿	8.2	6.4	1.3	鈍褐色(7.5YR6/4)		底部糸切り・板目
41	竪堀 1	土師器	小皿		6.5		鈍黄褐色(10YR6/3)		底部糸切り
42		土師器	小皿		5.4		鈍褐色(7.5YR7/4)		底部糸切り・板目
43		土師器	小皿		5.5		鈍褐色(7.5YR7/3)		底部糸切り・板目
44		弥生土器	鉢	19.2	(5.2)	(19.6)	鈍褐色(7.5YR7/3)	復元完形	頸部に2個1対の円孔 外面煤付着
45	竪穴住居 1	弥生土器	甕	16.0			橙色(2.5YR6/6)		
46		弥生土器	甕	18.4			橙色(7.5YR7/6)		
47		弥生土器	甕	12.8			橙色(2.5YR6/8)		
48		弥生土器	蓋		9.6	3.3	橙色(5YR6/6)		
49		弥生土器	高杯		17.1		鈍褐色(7.5YR6/4)		脚端部に凹線1条
50	袋状土壇 1	弥生土器	甕	19.2			黄褐色(7.5YR7/8)		
51	土壇 6	弥生土器	甕		(4.8)		橙色(5YR7/8)		
52	包含層	縄文土器	浅鉢		6.0		褐色(7.5YR4/4)		
53		弥生土器	壺				鈍黄褐色(10YR7/4)		11唇部に凹線3条
54		弥生土器	壺				灰黄褐色(10YR5/2)		口唇部に凹線5条、斜格子文
55		弥生土器	甕				橙色(5YR7/6)		口唇部凹線、肩部櫛描波状文・直線文
56		弥生土器	壺				鈍黄褐色(10YR5/3)		肩部に凹線文、櫛描波状文
57		弥生土器	壺	21.2			浅黄褐色(10YR8/4)		口縁部下端・頸部に刺突文
58		弥生土器	甕				橙色(2.5YR6/6)		11唇部に凹線2条
59		弥生土器	甕				橙色(5YR7/6)		
60	弥生土器	甕		4.3		灰黄褐色(10YR6/2)			

土器観察表②

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
61	包含層	弥生土器	特殊壺?				橙色(5YR6/6)		突帯部分 胎土は集落土器と同じ
62		弥生土器	特殊壺?				鈍褐色(7.5YR5/3)		突帯部分 胎土は集落土器と同じ
63		弥生土器	蓋		11.0	5.0	浅黄橙色(10YR8/4)		
64		弥生土器	高杯				浅黄色(2.5Y7/3)		
65		弥生土器	器台				鈍褐色(7.5YR5/3)		脚部に凹形透かし 4
66		弥生土器	器台		8.4		鈍黄橙色(10YR6/3)		凹線間に方形透かし
67	製鉄炉 1	須恵器	杯身	10.3		4.3	灰色(5Y6/1)		底部回転ヘラケズリ後ナデ
68	包含層	須恵器	蓋	14.6		1.2	灰色(N4.5/1)		つまみ無し
69		須恵器	杯	13.6	10.5	3.6	灰色(N5/1)		底部ヘラキリ
70		須恵器	短頸壺	7.5			灰色(N5.5/1)		
71		勝間田焼	椀		8.6		灰色(N6.5/1)		底部糸切り
72		土師器	把手				鈍黄橙色(10YR7/3)		
73		染付	瓶	2.9	4.9	15.7	灰白色(N8/1)		肥前産 外面に草花 18世紀後半
74		染付	小碗		3.0		白色(9/0)		肥前産 17世紀後半

土製品および製鉄関連遺物一覧表

掲載番号	掲載遺構名	器種	計測値(mm)				色調	時期	特徴・備考
			最大長	最大幅	孔径	重量(g)			
C 1	曲輪 1	土錘	77.0	18.0	5.5	26.2	灰黄褐色(10YR5/2)	中世	完形
C 2	切岸・土塁 1	土錘	76.0	21.0	4.0	31.1	鈍黄橙色(10YR7/4)		完形
C 3	曲輪 1	土錘	70.0	17.0	4.0	20.1	灰黄褐色(10YR6/2)		完形
C 4	切岸・土塁 1	土錘	(62.0)	20.0	4.0	22.8	黒褐色(10YR3/1)		半欠
C 5		土錘	65.0	24.0	5.0	28.2	褐灰色(10YR6/1)		完形
C 6	曲輪 1	土錘	64.0	21.0	4.0	23.0	褐灰色(10YR5/1)		完形
C 7		土錘	65.0	18.0	6.0	19.2	鈍黄橙色(10YR6/3)		完形
C 8	曲輪 4	土錘	63.0	18.0	4.0	21.4	鈍黄橙色(10YR7/3)		完形
C 9		土錘	(61.0)	18.0	5.5	20.8	鈍黄橙色(10YR6/4)		一部欠損
C 10	曲輪 1	土錘	(46.0)	20.0	4.0	10.2	褐灰色(10YR6/1)		半欠
C 11		土錘	(42.0)	19.0	3.8	13.5	褐灰色(10YR4/1)		半欠
C 12		土錘	(33.0)	19.0	3.5	9.3	褐灰色(10YR4/1)		半欠
C 13		土錘	57.0	14.0	4.0	9.7	褐灰色(10YR6/1)		完形
C 14		土錘	51.0	15.0	5.0	12.4	褐灰色(10YR4/1)		完形
C 15		土錘	51.0	14.0	4.0	9.6	褐灰色(10YR4/1)		完形
C 16		曲輪 6	土錘	44.0	13.0	3.5	5.9		鈍赤褐色(5YR5/4)
C 17	曲輪 1	土錘	(43.0)	13.0	3.0	7.0	明赤褐色(2.5YR5/8)		半欠
C 18		土錘	(34.0)	13.0	3.5	3.1	鈍赤褐色(2.5YR5/4)		半欠
C 19	製鉄炉 1 周辺	炉壁	62.0	58.0	32.0	80.0		古墳後期~古代	付載 1 大澤報告参照
C 20		炉壁	64.0	57.0	28.0	68.0			
C 21		炉壁	140.0	94.0	32.0	375.0			
C 22	土塋 8	炉壁	77.0	69.0	41.0	160.0			

石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S 1	曲輪 1	硯	79.0	42.0	8.0	23.20	頁岩	中世	石鍋の破片を転用 側面に鏝による裁断痕 裏面に漆膜付着
S 2	曲輪 4	温石	101.0	65.5	21.0	99.90	滑石		
S 3	曲輪 1	砥石	60.5	61.5	17.0	60.40	流紋岩		
S 4		砥石	129.0	33.5	13.5	98.00	頁岩		
S 5		砥石	32.5	37.0	7.5	14.50	頁岩		
S 6	切岸・土塁 1	砥石	32.0	38.5	10.0	17.60	頁岩		
S 7	曲輪 1 土塋 1	石杵	42.0	37.0	29.0	65.60	流紋岩		
S 8	竪穴住居 1	石皿	365.5	315.5	113.5	19000.00	花崗岩	弥生後期	
S 9	包含層	石鏃	34.0	20.0	4.0	3.14	サヌカイト	弥生	
S 10		スレ石	80.0	30.5	13.0	20.90	サヌカイト		
S 11		石核	89.0	81.0	14.5	89.50	サヌカイト		
S 12	製鉄炉 1	砥石	127.0	67.0	45.0	758.40	安山岩	古墳	

金屬器および製鉄関連遺物一覽表①

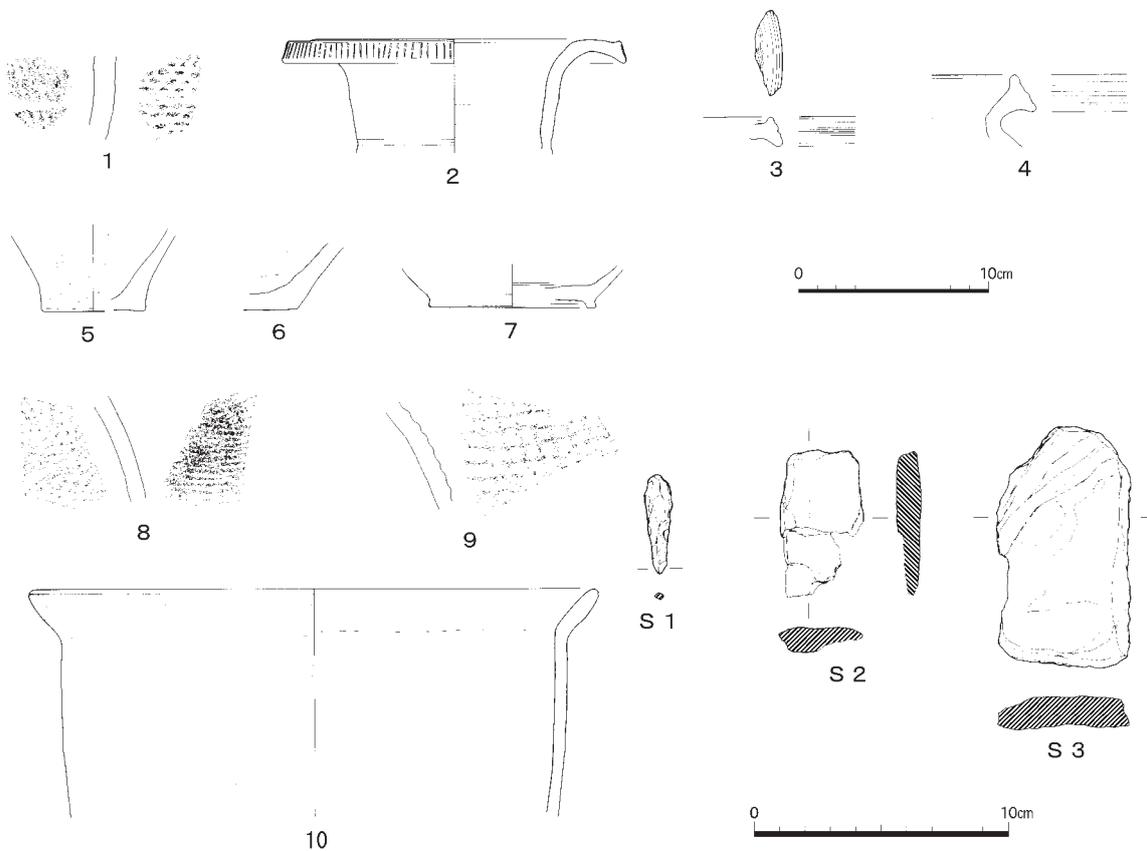
掲載 番号	掲載 遺構名	器種	計測値(mm)				材質	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚	重量(g)			
M 1	切岸・上塁 1	元祐通宝	21.5		1.2	1.0	銅	中世	北宋銭、1086年初鑄 孔径7.0mm
M 2	曲輪 1 土塙 1	鎌	128.5	34.0	3.0	28.6	鉄		
M 3		刀子	171.5	20.5	2.5	21.9	鉄		
M 4	溝 1	石突	64.0	(39.0)	(6.0)	55.3	鉄	中世？	鍛造品
M 5	曲輪 7	環状鉄製品	35.5	4.5	8.0	11.3	鉄		
M 6	切岸・上塁 1	塞栓状鉄製品	41.0	12.0	12.0	3.6	鉄	中世？	
M 7	曲輪 1	棒状鉄片	22.5	(9.5)	(6.5)	5.1	鉄		
M 8	曲輪 5	板状鉄片	22.0	7.0	2.0	1.0	鉄	中世？	
M 9		板状鉄片	71.0	23.0	(1.5)	10.0	鉄		
M10	曲輪 1 上塙 1	釘	63.0	4.5	4.0	5.2	鉄	中世	
M11		釘	49.0	4.0	4.0	3.5	鉄		
M12		釘	47.0	4.0	4.5	2.9	鉄		
M13		釘	57.5	4.0	4.0	4.3	鉄		
M14		釘	30.5	4.0	4.0	1.9	鉄		
M15		釘	53.0	6.5	5.0	10.4	鉄		
M16	溝 1	釘	57.0	4.0	5.0	5.1	鉄	中世	
M17		釘	46.0	5.0	4.5	4.5	鉄		
M18		釘	47.5	4.0	4.5	4.3	鉄		
M19	釘	33.5	3.5	2.5	1.1	鉄	中世		
M20	曲輪 1	釘	73.0	4.5	3.5	4.9			鉄
M21		釘	52.5	5.5	4.5	6.1			鉄
M22		釘	59.5	5.0	5.5	12.6			鉄
M23		釘	57.5	4.5	4.0	3.2			鉄
M24		釘	45.5	5.0	4.5	5.2			鉄
M25		釘	32.5	5.0	5.0	3.3			鉄
M26		釘	30.0	8.5	4.0	5.8			鉄
M27		釘	26.0	4.0	3.0	1.5			鉄
M28		釘	17.5	4.0	4.0	1.3			鉄
M29		釘	29.5	7.0	4.0	2.4			鉄
M30		釘	40.5	(5.0)	(3.0)	1.8			鉄
M31		釘	14.5	3.5	3.0	0.5			鉄
M32		釘	20.5	4.0	2.5	0.6			鉄
M33		釘	34.0	3.5	2.5	1.2	鉄		
M34	曲輪 4	釘	53.0	5.0	4.0	4.5	鉄	中世	
M35		釘	63.5	5.0	4.0	4.7	鉄		
M36		釘	15.5	(2.0)	(2.5)	0.4	鉄		
M37		釘	59.0	4.0	5.0	4.4	鉄		
M38		釘	44.5	5.5	5.0	3.8	鉄		
M39		釘	41.5	4.5	3.0	1.4	鉄		
M40		釘	34.0	(2.5)	(3.5)	1.0	鉄		
M41		釘	26.0	4.5	4.0	2.0	鉄		
M42		釘	28.5	3.5	3.5	1.5	鉄		
M43		釘	44.0	4.0	3.5	1.7	鉄		
M44	釘	39.0	5.0	3.5	2.5	鉄			
M45	釘	47.0	5.0	4.0	5.6	鉄			
M46	釘	64.5	5.5	4.5	9.5	鉄			
M47	曲輪 6	釘	40.5	5.0	5.0	4.1	鉄	中世	
M48	曲輪 5	釘	62.0	4.0	6.0	4.1	鉄		
M49		釘	53.0	3.5	5.0	2.6	鉄		
M50		釘	52.5	4.5	5.0	5.9	鉄		
M51		釘	30.0	5.0	6.5	5.2	鉄		
M52		釘	30.5	4.0	3.5	1.8	鉄		
M53		釘	29.5	4.0	3.0	3.5	鉄		
M54		釘	28.5	5.0	4.0	1.4	鉄		
M55		釘	41.0	3.5	3.5	3.5	鉄		
M56		釘	39.0	4.0	4.0	1.7	鉄		
M57		釘	34.0	4.0	3.0	1.1	鉄		
M58		釘	28.5	4.5	3.0	1.3	鉄		
M59		釘	20.0	3.5	2.5	0.4	鉄		
M60		曲輪 7	釘	49.5	4.5	5.0	3.4		

金属器および製鉄関連遺物一覧表②

掲載 番号	掲載 遺構名	器種	計測値(mm)				材質	時期	備考	
			最大長	最大幅	最大厚	重量(g)				
M61	曲輪7	釘	41.5	4.0	2.0	2.1	鉄	中世		
M62		釘	34.5	6.0	5.0	4.4	鉄			
M63		釘	40.0	3.5	4.0	1.8	鉄			
M64		釘	30.0	4.0	2.0	2.4	鉄			
M65		釘	34.5	2.0	2.5	1.2	鉄			
M66		切岸・土塁1	釘	72.5	5.5	5.0	7.1		鉄	
M67			釘	71.5	4.0	4.0	4.5		鉄	
M68	釘		60.0	4.5	4.5	6.1	鉄			
M69	釘		71.5	4.0	4.0	4.9	鉄			
M70	釘		57.5	3.5	4.0	3.1	鉄			
M71	釘		60.0	4.0	3.5	3.1	鉄			
M72	釘		55.5	4.0	5.0	3.2	鉄			
M73	釘		60.5	2.5	4.0	2.8	鉄			
M74	釘		51.5	3.5	4.5	3.3	鉄			
M75	釘		49.5	3.5	4.5	2.8	鉄			
M76	釘		47.0	5.0	5.0	5.5	鉄			
M77	釘		50.0	4.5	4.0	4.4	鉄			
M78	釘		55.5	4.0	4.5	4.9	鉄			
M79	釘		41.0	5.5	3.5	3.7	鉄			
M80	釘		44.0	3.0	4.5	2.6	鉄			
M81	釘		41.0	4.0	4.0	2.9	鉄			
M82	釘		40.5	4.0	4.5	2.8	鉄			
M83	釘		33.0	4.0	3.5	2.6	鉄			
M84	釘		37.5	3.5	4.0	2.2	鉄			
M85	釘		31.0	4.0	5.0	2.3	鉄			
M86	釘		35.5	4.0	3.5	3.0	鉄			
M87	釘		(33.0)	5.5	4.5	5.6	鉄		錆で2個体が付着	
M88	釘		22.0	3.0	3.5	0.9	鉄			
M89	釘		21.0	4.5	4.0	1.9	鉄			
M90	釘		11.0	4.0	3.5	1.4	鉄			
M91	釘		47.0	3.0	4.0	2.9	鉄			
M92	釘		42.5	4.5	2.5	3.7	鉄			
M93	釘	31.0	3.0	3.0	1.2	鉄				
M94	釘?	124.0	4.5	4.5	10.0	鉄				
M95	釘?	107.5	5.0	4.5	12.0	鉄				
M96	釘	28.0	3.5	3.5	1.1	鉄				
M97	釘	40.0	4.5	3.5	1.9	鉄				
M98	釘	22.5	4.2	1.5	0.4	鉄				
M99	包含層	釘	45.0	4.5	5.0	3.2	鉄	中世?		
M100		釘	37.5	3.5	3.0	1.3	鉄			
M101		釘	29.0	3.5	4.0	2.1	鉄			
M102		釘	31.0	5.0	4.0	2.7	鉄			
M103		釘	38.5	4.0	3.2	2.1	鉄			
M104	製鉄炉1周辺	含鉄鉄滓	54.0	47.0	32.0	75.0	鉄	古墳後期 ~古代	付載2 大澤報告参照	
M105		含鉄鉄滓	48.0	45.0	26.0	42.0				
M106		鉄塊系遺物	42.0	14.0	21.0	10.0				
M107		炉底塊	129.0	113.0	60.0	1303.0				
M108		含鉄炉底塊	128.0	108.0	42.0	722.0				
M109		含鉄炉底塊	94.0	77.0	52.0	405.0				
M110		炉外流出滓	116.0	98.0	49.0	598.0				
M111	土壇8	含鉄流動滓	94.0	61.0	41.0	278.0	近世	古寛永 新寛永 新寛永		
M112		流出溝滓	88.0	62.0	23.0	220.0				
M113	包含層	鉄砲玉	12.0		11.0	8.5			鉛	
M114		鉄砲玉	13.0		12.0	9.6			鉛	
M115		鉄砲玉	12.0		10.0	9.6			鉛	
M116		銭貨	26.0		1.5	3.8			銅	
M117		銭貨	23.5		1.3	1.9			銅	
M118		銭貨	23.2		1.2	1.8			銅	

第2節 縄文時代～中世の遺物

旧表土層および造成土中から、縄文～中世の遺物がわずかに出土している。いずれも小片で摩耗も激しく、原位置は留めていない。1は横長楕円の押型文土器で、縄文早期に位置付けられる。2～6は弥生土器で、弥生中期後葉に比定できる。7・8は須恵器で古代前半と考えられる。9は勝間田焼の甕である。10は土師器の甕で、古代の可能性が高い。石器はいずれも弥生時代の可能性が高く、S1は石錐、S2は石鋤または扁平片刃石斧未成品、S3は扁平片刃石斧未成品と考えられる。(佐藤)



第2図 縄文時代～中世の遺物 (1/4, 1/3)

第3節 近世の遺構と遺物

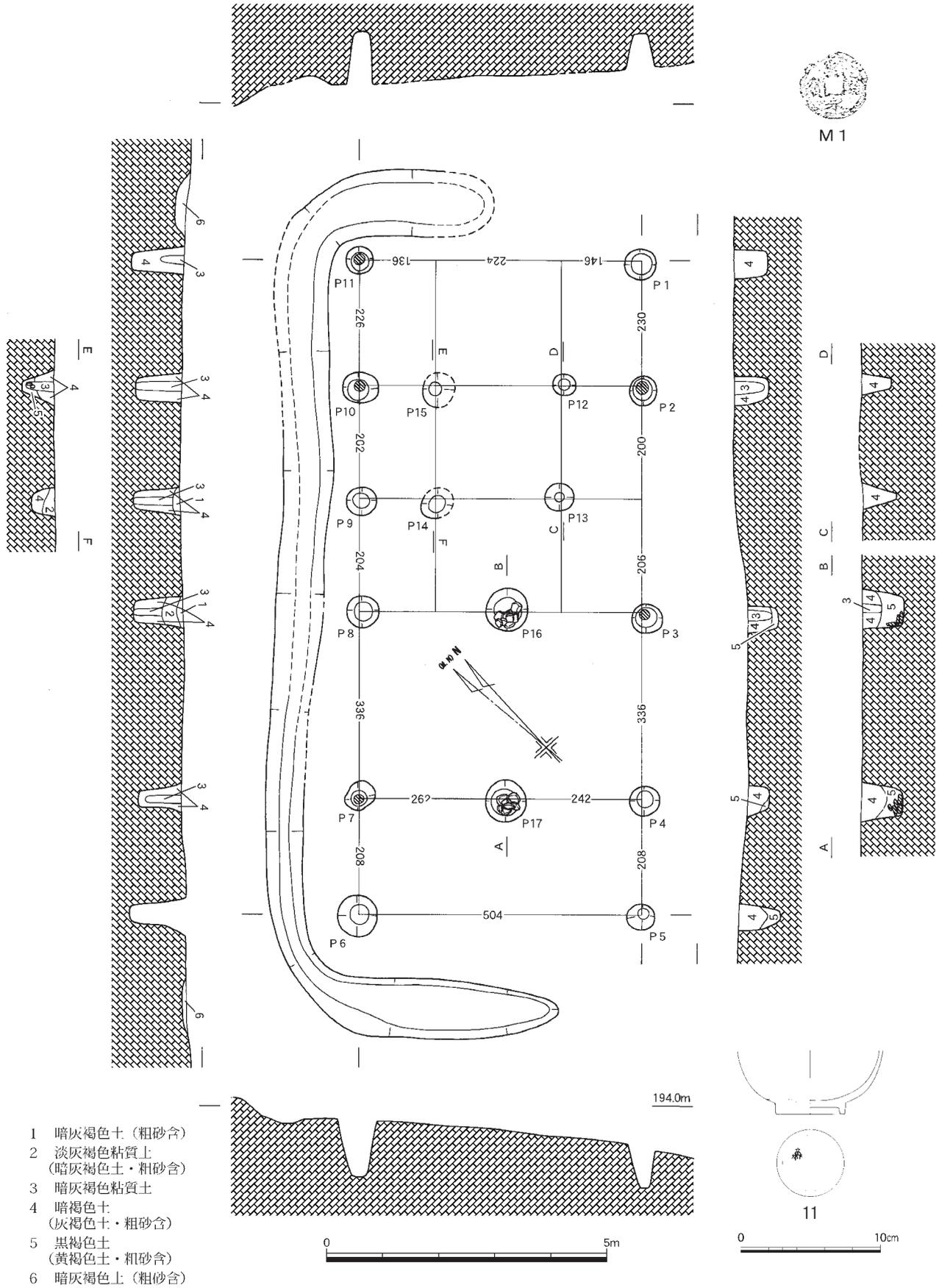
1 掘立柱建物

掘立柱建物1 (第3・4図、図版55)

1区西端に位置する。桁行5間×梁間1間、面積59.8㎡を測る比較的大形の掘立柱建物である。主軸を等高線と平行にとり、上方側柱に沿って浅く幅広い雨落溝がコ字状に巡る。雨落溝や柱穴の切り合いから、複数回の改築・拡張が考えられ、第4図はその最終段階を図示している。柱穴は平面円形



第3図 遺構全体図 (1/300) ※土層断面図水平方向は1/600

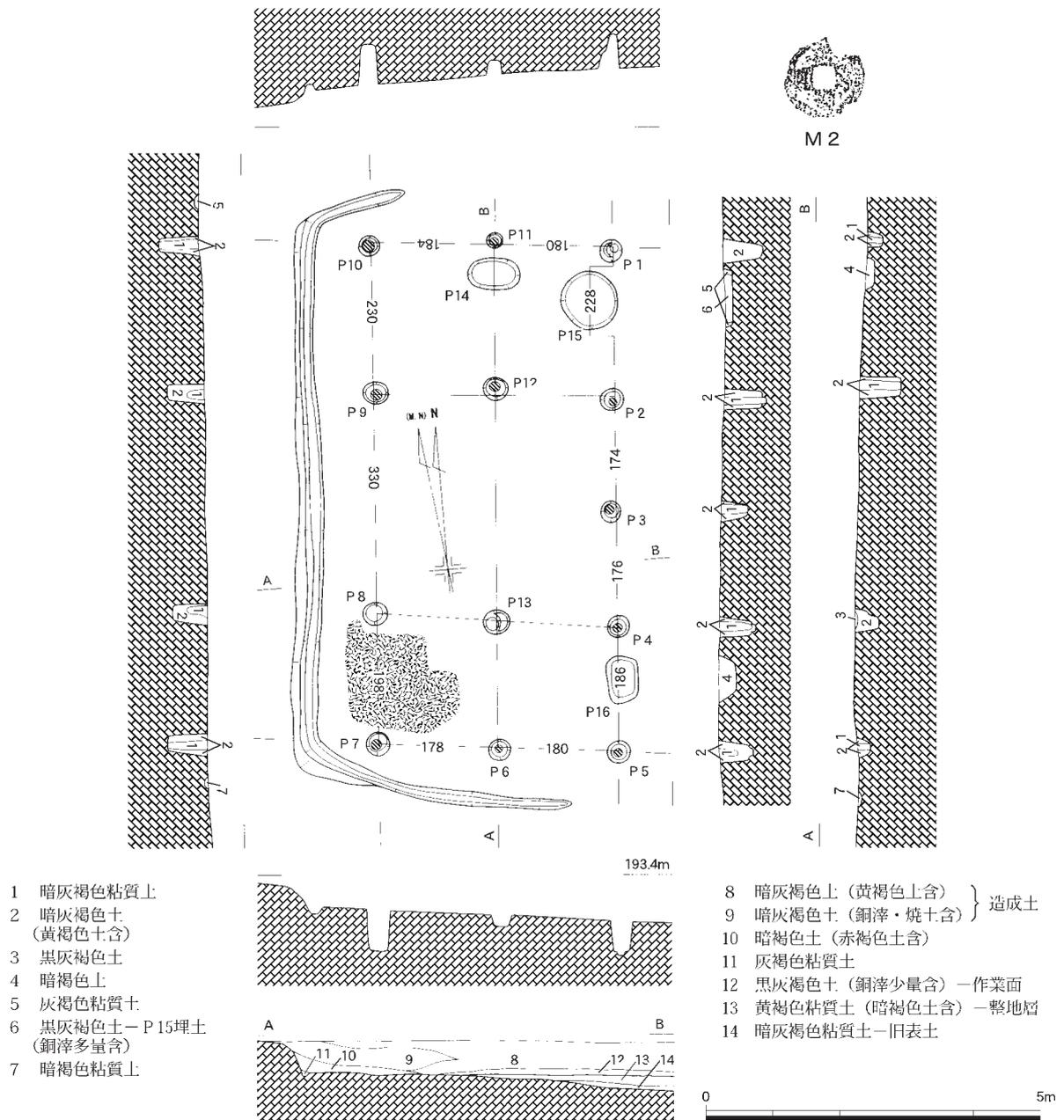


第4図 掘立柱建物1 (1/100)・出土遺物 (1/4, 1/2)

で、直径38～82cm、深さ45～92cmのしっかりしたものである。特にP16・P17は大形で、底面には裏込石と考えられる拳大の円礫数点を充填している。柱穴配置から、建物構造はP3－P16－P8を境に北が板張、南が土間と想定される。出土遺物は少ないが、P8から寛永通宝M1、肥前産の京焼風陶器碗11が出土している。11は削出し高台内に「木下弥」の印銘があり、1660～80年代に比定される。これらの遺物や周辺の状況から、遺構の時期は17世紀後葉～18世紀前半と考えられる。（佐藤）

掘立柱建物2（第3・5図、図版56）

2区北端に位置する。桁行4間×梁間2間、面積27.6㎡を測る掘立柱建物である。主軸を等高線と平行にとり、上方側柱に沿って雨落溝がコ字状に巡る。柱穴は平面円形で、直径22～38cm、深さ15～65cmを測る。建物東半は整地されており、床面は土間と考えられる。床面南西部には、一辺約1.5m



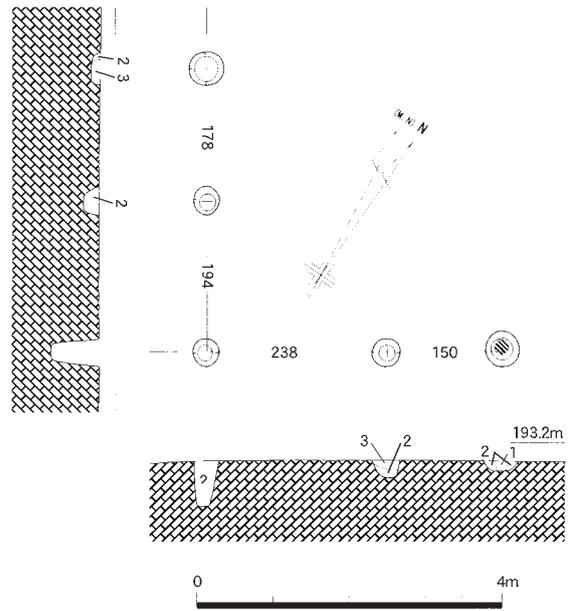
第5図 掘立柱建物2 (1/100)・出土遺物 (1/2)

の方形の焼土面がある。また、P15埋土や遺構上面の造成土中に、多量の銅滓と焼土が含まれていた。遺物は、P14から寛永通宝M2が出土したのみである。周辺の状況から、遺構の時期は17世紀後葉～18世紀前半と考えられる。(佐藤)

2 柱穴列

柱穴列 1 (第3・6図)

1区北西に位置する。5基の柱穴からなり、その配置はL字形を呈す。周辺は削平が激しく、本来の規模・形態は分からないが、掘立柱建物の一部である可能性もある。時期も不明であるが、近世のものと考えられる。(佐藤)



- 1 暗灰褐色粘質土
- 2 暗褐色土(灰褐色土含)
- 3 灰褐色土(粗砂含)

第6図 柱穴列 1 (1/100)

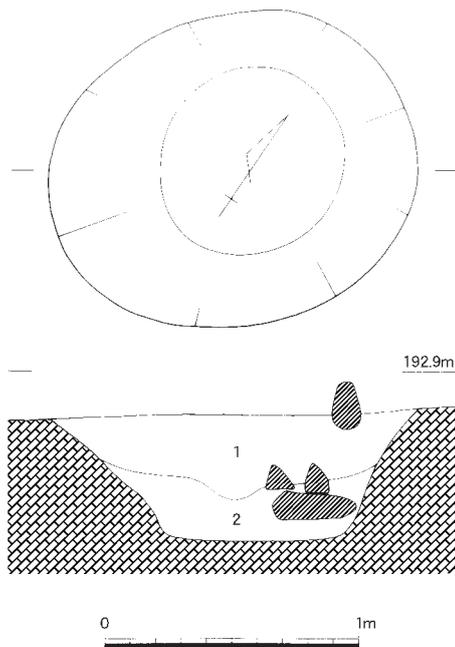
3 土壙墓

土壙墓 1 (第3・7図)

1区中央やや西よりに位置する。平面は楕円形で、上面径1.25～1.45m、底面径1.1～1.3mを測る。断面は逆台形で、検出面からの深さ50cmを測る。土壙墓2と組み合わせ可能性が高く、遺構の時期は17世紀後葉～18世紀代と考えられる。(佐藤)

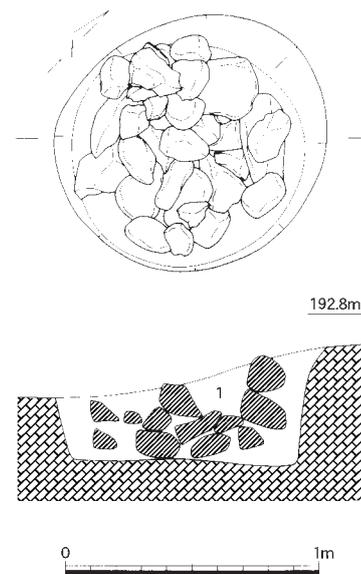
土壙墓 2 (第3・8図)

土壙墓1に近接する。平面は円形で、上面径1～1.1mを測る。底面は平坦で、検出面からの深さ



- 1 暗灰褐色粘質土(粗砂含)
- 2 暗褐色粘質土(粗砂含)

第7図 土壙墓 1 (1/30)



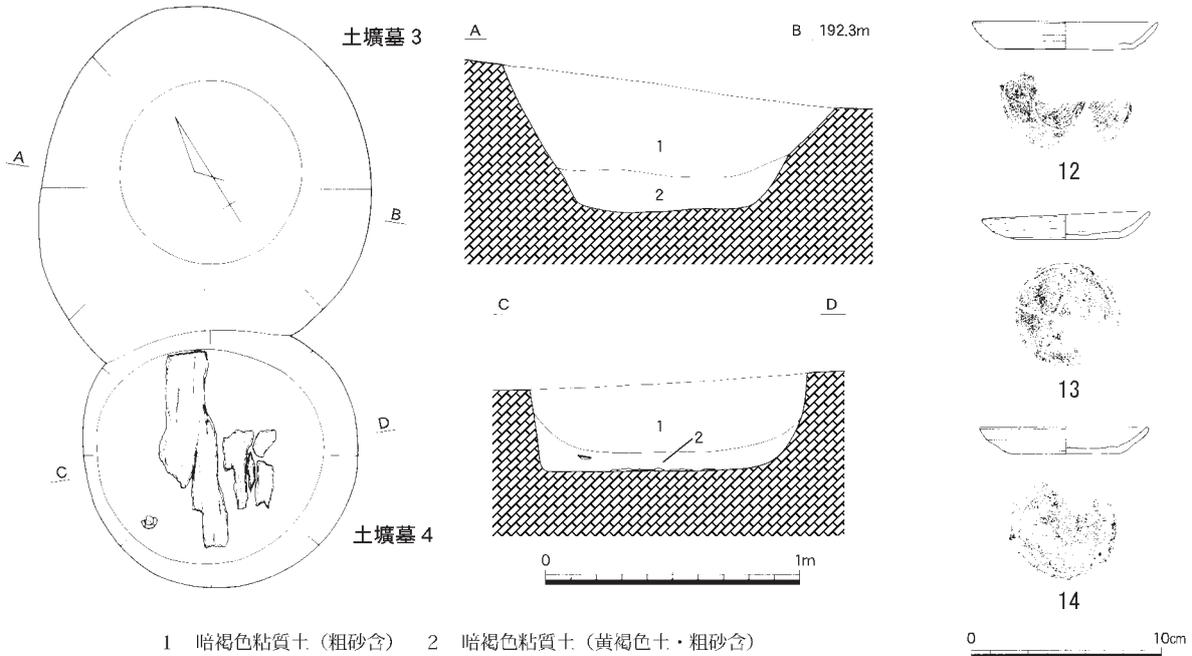
- 1 暗灰褐色粘質土(粗砂含)

第8図 土壙墓 2 (1/30)

40cmを測る。埋土中に、土壌上面に積まれていたと思われる拳～人頭大の円礫が多数落ち込んでいる。土壌墓1と組み合わせる可能性が高く、遺構の時期は17世紀後葉～18世紀代と考えられる。(佐藤)

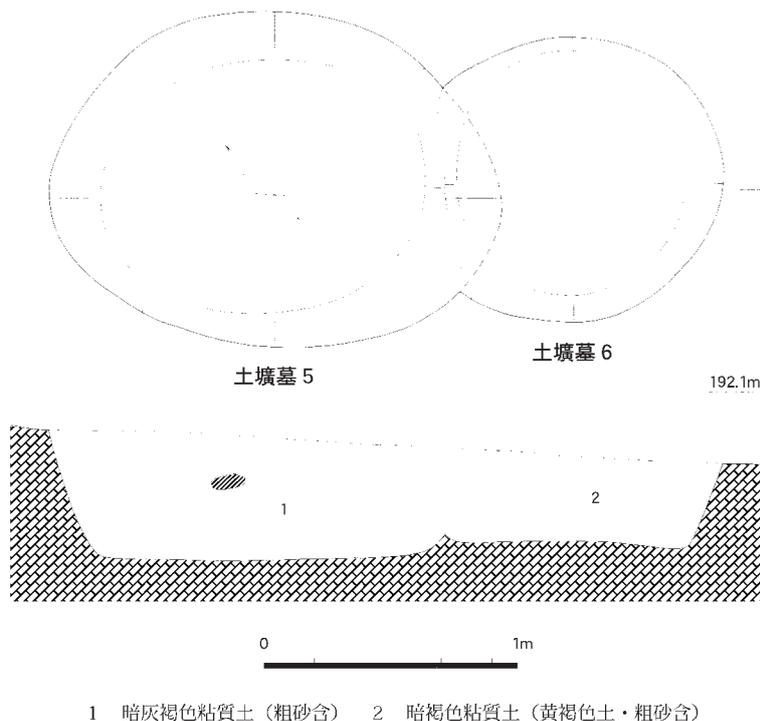
土壌墓3・土壌墓4 (第3・9図、図版56)

1区中央やや西よりに位置する。2基の土壌墓が接するが、前後関係は不明である。土壌墓3は平面楕円形で、上面径1.3～1.4m、底面径70～74cmを測る。断面は逆台形で、深さ50cmを測る。土壌墓



1 暗褐色粘質土(粗砂含) 2 暗褐色粘質土(黄褐色土・粗砂含)

第9図 土壌墓3・4 (1/30)、土壌墓4出土遺物 (1/4)



1 暗灰褐色粘質土(粗砂含) 2 暗褐色粘質土(黄褐色土・粗砂含)

第10図 土壌墓5・土壌墓6 (1/30)

4は平面円形で、上面径1.1m、底面径85cm、深さ35cmを測る。底面は平坦で、早桶の底板が一部遺存する。土壌墓4から底部糸切りの土師器小皿12～14が出土しており、時期は、両者とも17世紀後葉～18世紀代と考えられる。(佐藤)

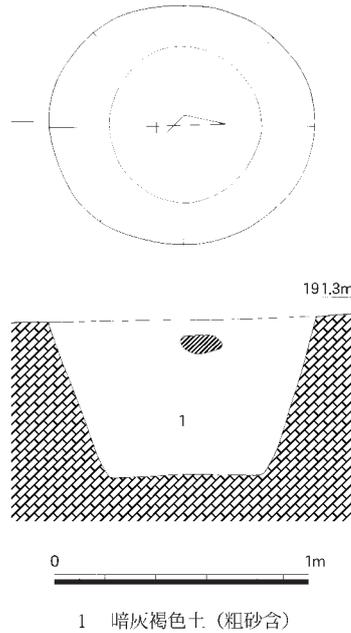
土壌墓5・土壌墓6 (第10図)

1区中央やや西よりに位置する。2基の土壌墓が接しており、その前後関係は、土層から土壌墓6→土壌墓5である。土壌墓5は平面楕円形で、上面径1.32～1.8m、底面径1～1.28mを測る。断面は逆台形で、深さ48

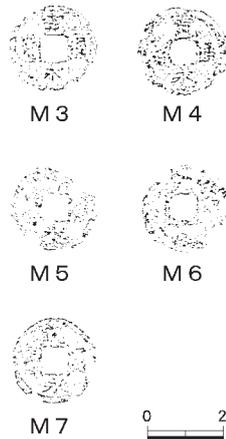
cmを測る。土墳墓6は平面円形で、上面径約1.14m、底面径90~94cmを測る。底面は平坦で、深さ34cmを測る。ともに出土遺物は無いが、周囲の状況から、遺構の時期は17世紀後葉~18世紀代と考えられる。(佐藤)

土墳墓7 (第3・11図、図版56)

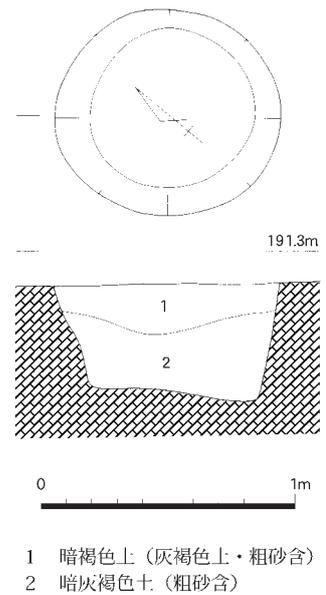
1区中央に位置し、土墳墓8~10と組み合うと考えられる。平面は円形で、上面径95cm~1.05m、底面径60~62cmを測る。断面は逆台形で、深さ62cmを測る。早桶の痕跡は認められず、寛永通宝M3~M7が、埋土中から出土した。時期は、17世紀後葉~18世紀代と考えられる。(佐藤)



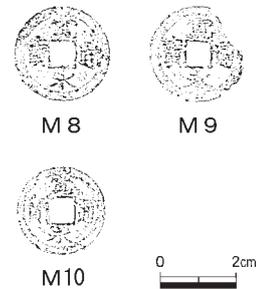
1 暗灰褐色土 (粗砂含)



第11図 土墳墓7 (1/30)
・出土遺物 (1/2)



1 暗褐色土 (灰褐色土・粗砂含)
2 暗灰褐色土 (粗砂含)



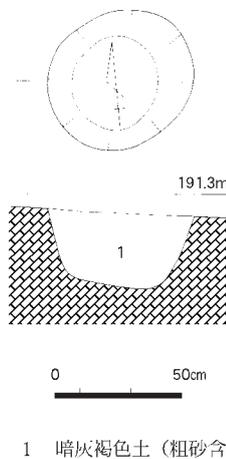
第12図 土墳墓8 (1/30)
・出土遺物 (1/2)

土墳墓8 (第3・12図、図版56)

1区中央に位置し、土墳墓7・9・10と組み合うと考えられる。平面は円形で、上面径82~89cm、底面径64cm前後を測る。底面は平坦で、深さ42cmを測る。早桶の痕跡は認められず、寛永通宝M8~M10が、埋土中から出土した。時期は17世紀後葉~18世紀代と考えられる。(佐藤)

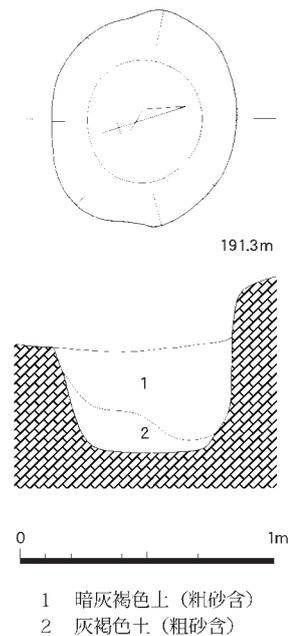
土墳墓9 (第3・13図、図版56)

1区中央に位置し、土墳墓7・8・10と組み合うと考えられる。平面は円形で、上面径52~59cm、底面径32~38cmを測る。底面は平坦で、深さ29cmを測る。早桶の痕跡は認められず、出土遺物も皆無である。周囲の状況から、時期は、17世紀後葉~18世紀代と考えられる。(佐藤)



1 暗灰褐色土 (粗砂含)

第13図 土墳墓9 (1/30)

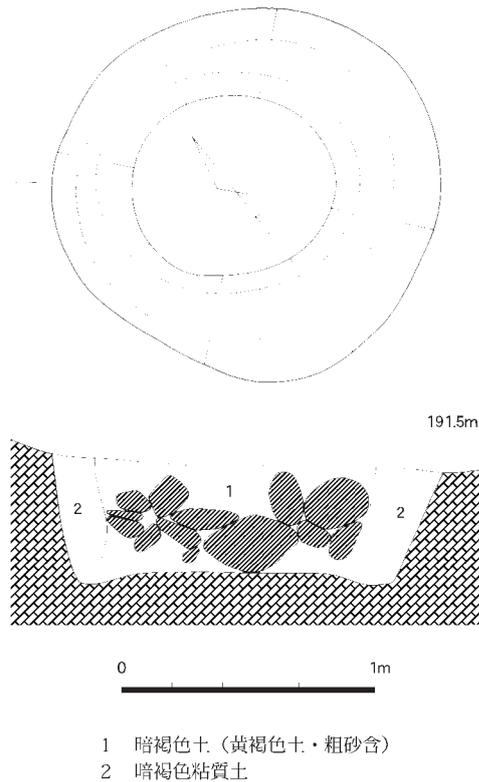


1 暗灰褐色土 (粗砂含)
2 灰褐色土 (粗砂含)

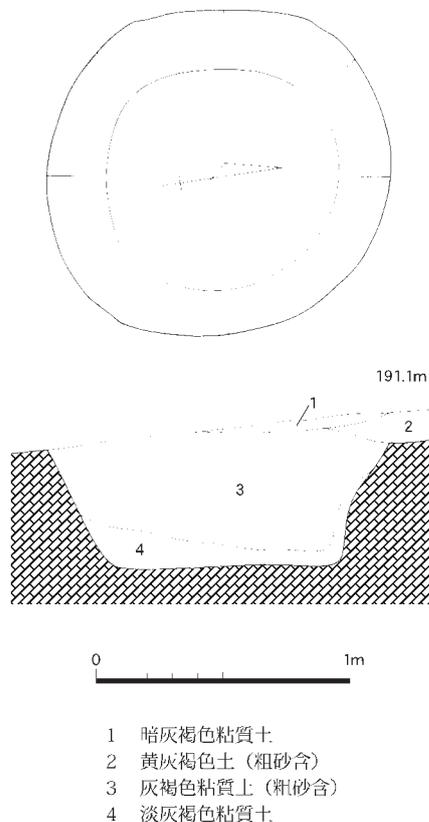
第14図 土墳墓10 (1/30)

土墳墓10 (第3・14図、図版56)

1区中央に位置し、土墳墓7~9と組み合うと考えられる。平面は円形で、上面径73~87cm、底面径48cm前後を測る。底面は平坦で、深さ41



第15図 土壙墓11 (1/30)



第16図 土壙墓12 (1/30)

cmを測る。早桶の痕跡は認められず、出土遺物も皆無である。周囲の状況から、遺構の時期は17世紀後葉～18世紀代と考えられる。(佐藤)

土壙墓11 (第3・15図)

1区中央に位置する。平面は円形で、上面径1.44～1.53m、底面径1.2～1.24mを測る。底面は平坦で、深さ42cmを測り、壁体沿いに幅20～25cmの浅い溝が巡る。土層で早桶の痕跡が確認でき、埋土から早桶上面に積まれていたと思われる拳～人頭大の円礫が多数出土した。出土遺物は皆無であるが、周囲の状況から遺構の時期は17世紀後葉～18世紀代と考えられる。(佐藤)

土壙墓12 (第3・16図)

1区中央に位置する。平面は円形で、上面径1.29～1.35m、底面径86～90cmを測る。断面は逆台形で、深さ55cmを測る。早桶の痕跡は認められない。また、出土遺物も皆無であるが、溝5に上面を削平されることや周囲の状況から、遺構の時期は17世紀後葉～18世紀前半と考えられる。(佐藤)

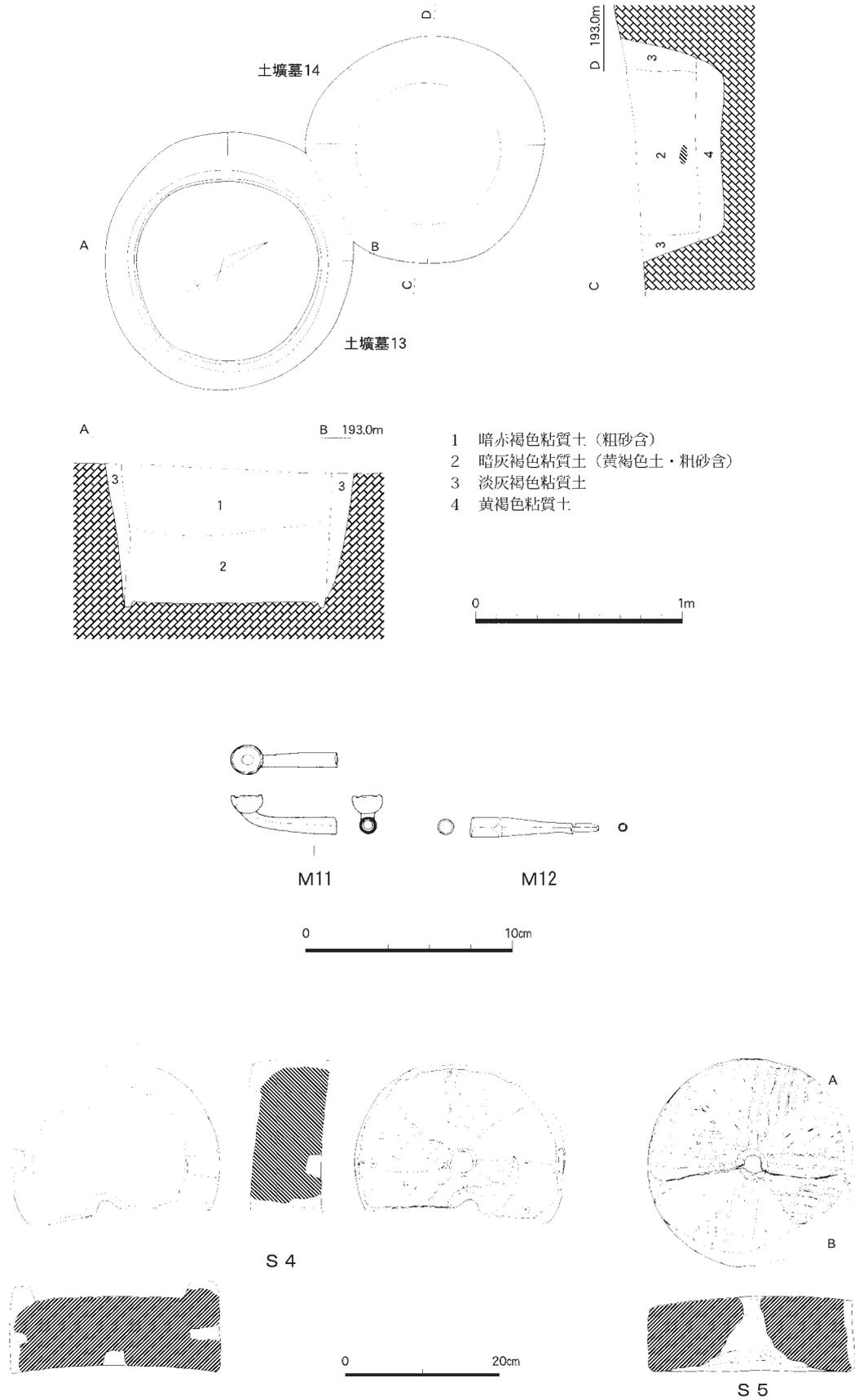
土壙墓13・土壙墓14 (第3・17図、図版56)

3区南東端に位置する。2基の土壙墓が接するが、その前後関係は不明である。土壙墓13は、平面円形を呈し、上面径約1.2m、底面径約90cm、深さ66cmを測る。底面は平坦で、壁体に沿って幅約5cmの溝が巡る。土層から、この溝に早桶側板を埋設したと考えられる。土壙墓14は平面円形で、上面径約1.1m、底面径約70cm、深さ40cmを測る。底面直上の4層はきれいな粘質土で、底面保護を意図している可能性もある。土層から、これより上位に早桶を埋設したと考えられる。遺物は、土壙墓13から煙管の雁首M11と吸口M12、粉挽き白の上白S4と下白S5Bが出土している。また、土壙墓14から粉挽き白の下白S5Aが出土している。これらの出土遺物や周囲の状況から、遺構の時期は17世紀後葉～18世紀代と考えられる。(佐藤)

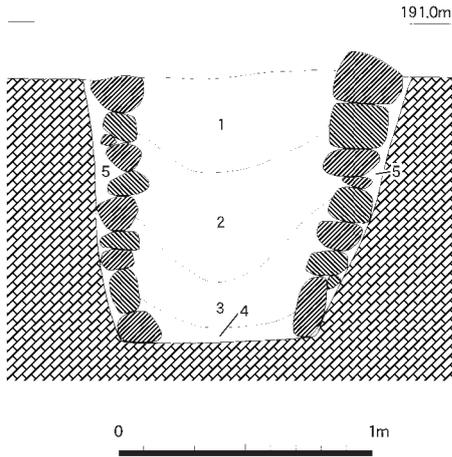
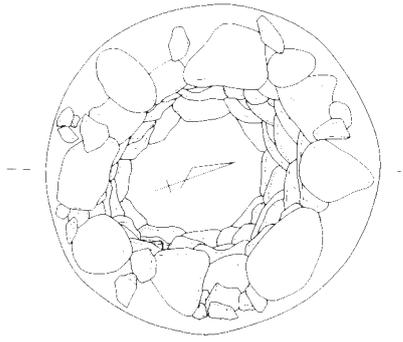
4 井戸

井戸1 (第3・18図、図版56)

1区中央南端の谷筋に位置する。井戸掘り方は、平面円形を呈し、上面径1.3m、底面径85cm、深さ1.06

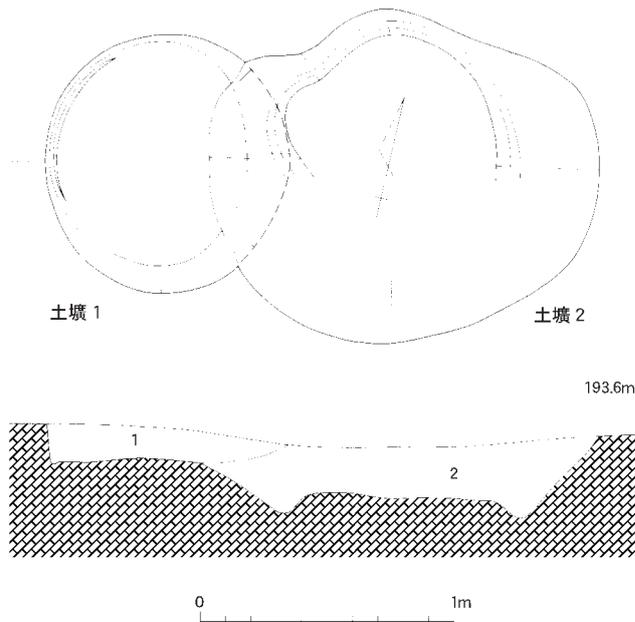


第17図 土墳墓13 (1/30)・出土遺物 (1/3, 1/8)、土墳墓14 (1/30)・出土遺物 (1/8)



- 1 黒灰褐色粘質土（粗砂含）
- 2 暗灰褐色粘質土（粗砂含）
- 3 暗灰色粘質土（粗砂含）
- 4 黒灰色粘質土（粗砂含）
- 5 暗青灰色粘質土

第18図 井戸 1 (1/30)



- 1 暗褐色粘質土（粗砂含）
- 2 暗褐色粘質土（灰褐色土・粗砂含）

第19図 土壌 1・土壌 2 (1/30)

mを測る。底面は平坦で、ここから側壁に沿って井戸枠を構築している。井戸枠には拳～人頭大の川原石を用い、これを水平かつ縦方向の目地を違えて組み上げており、8～9段が遺存する。出土遺物は皆無だが、包含層出土遺物や周囲の状況から、遺構の時期は17世紀後葉～19世紀前半と考えられる。（佐藤）

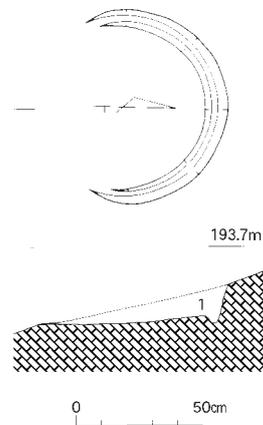
5 土壌

土壌 1・土壌 2 (第3・19図)

1区北西部、掘立柱建物1の北東3mに位置する。2基の土壌が重複しており、その前後関係は土壌2→土壌1である。土壌1は平面楕円形で、上面径98cm～1.02m、底面径78～88cm、深さ14cmを測る。土壌2も平面楕円形で、上面径1.32～1.54m、底面径1m前後、深さ20cmを測る。両者とも底面は平坦で、側壁に沿って溝が巡っており、桶状のものが埋設されていた可能性もある。出土遺物は皆無だが、周囲の状況から、近世中頃の遺構と考えられる。（佐藤）

土壌 3 (第3・20図)

1区北西部、土壌2のすぐ東に位置する。平面円形で、上面径約80cm、深さ20cmを測る。底面は平坦で、側壁に沿って溝が巡り、桶状のものが埋設されていた可能性もある。出土遺物は皆無だが、周囲の状況から、近世中頃の遺構と考えられる。（佐藤）

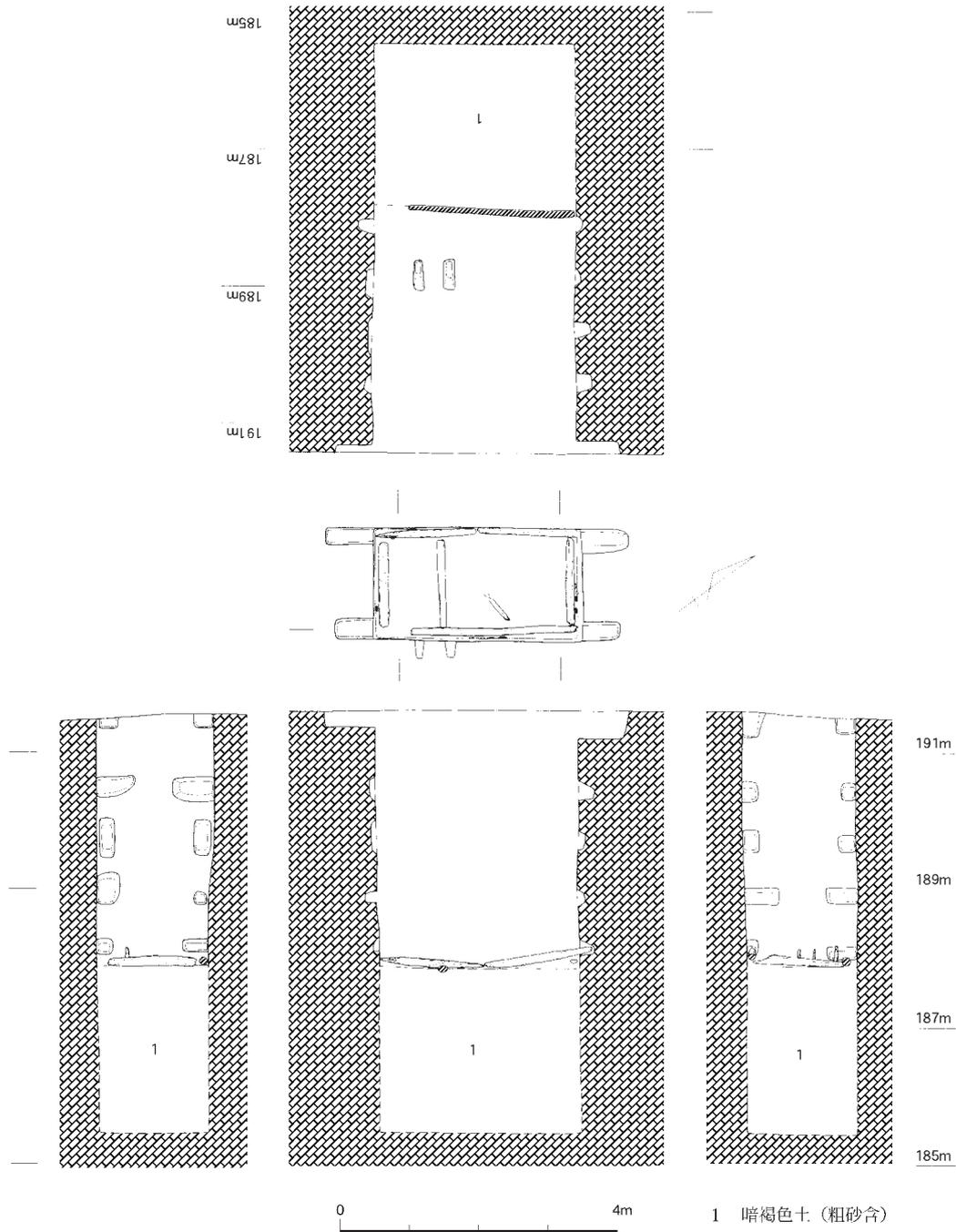


- 1 暗褐色粘質土（細砂含）

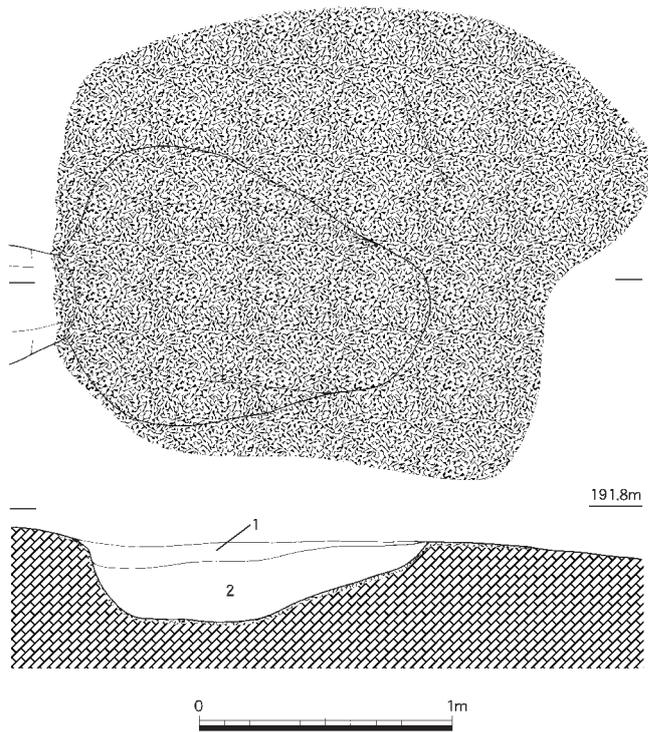
第20図 土壌 3 (1/30)

土壌 4 (第3・21図、図版56)

1区中央北端に位置する。平面長方形で、長辺3m、短辺1.6mを測る。検出面から底面まで6mを測り、当初人力で掘り下げたが、最終的に重機で掘削して底面を確認した。壁面はほぼ垂直で、短辺側壁面の両端に、約80cm間隔で穴がある。L=188mで、壁面に沿って丸太材が出土したことから、この穴に丸太材の両端を差し込んだと考えられる。また、壁面と丸太材の間には、部分的に板材が遺存していた。土壌内は人為的に一気に埋めており、出土遺物も皆無である。機能・時期ともに不明であるが、札ノ尾遺跡の性格から、近代以降の土質調査の試掘穴である可能性も考えられる。(佐藤)

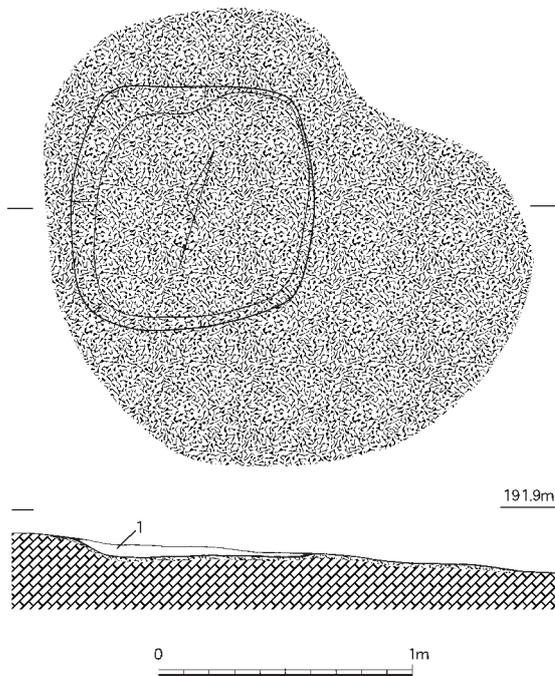


第21図 土壌 4 (1/100)



1 暗灰褐色粘質土 2 暗赤褐色土（粗砂含）

第22図 土壌5 (1/30)



1 暗赤褐色土（粗砂・炭粒含）

第23図 土壌6 (1/30)

土壌5（第3・22図、図版56）

1区中央北よりに位置する。溝1の先端に接続し、一連の遺構と考えられる。平面楕円形で、上面径1.1~1.4m・深さ30cmを測る。土壌内面および土壌周辺は強い被熱を受けている。出土遺物は皆無で、遺構の時期は不明である。（佐藤）

土壌6（第3・23図、図版56）

1区中央北より、土壌5のすぐ南に位置する。平面方形で、検出面で一辺95cm、深さ5cmを測る。土壌内面および土壌周辺は強い被熱を受ける。出土遺物は皆無で、遺構の時期は不明である。（佐藤）

土壌7・土壌8（第3・24図）

1区中央北端に位置する。土壌2基が重複するが、前後関係は不明である。土壌7は平面円形で、上面径1.4~1.5m、底面径48cm、深さ90cmを測る。土壌8も平面円形で、上面径1.15m、底面径38~58cm・深さ15cmを測る。出土遺物は皆無で、遺構の時期は不明である。（佐藤）

土壌9（第3・25図）

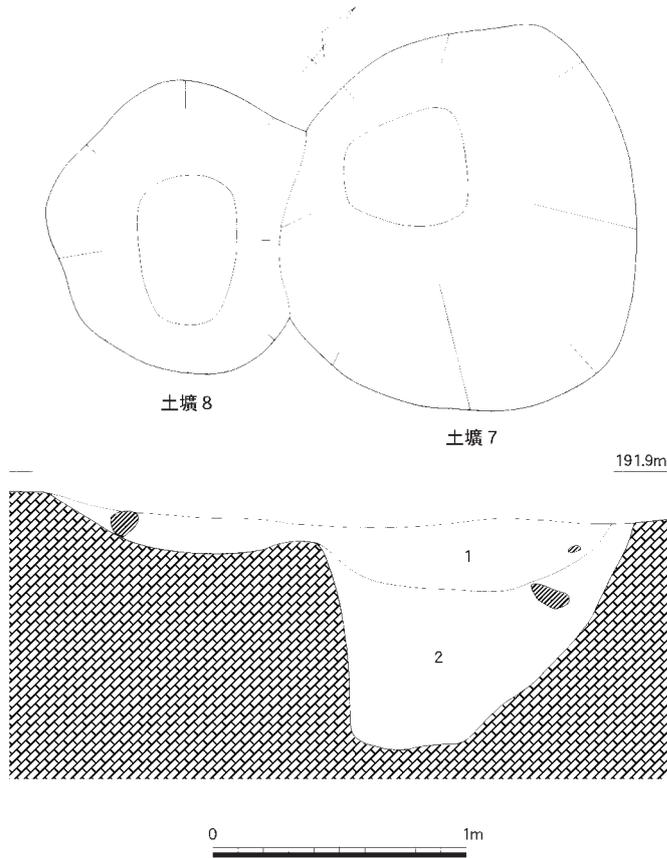
1区中央南端の谷部に位置する。平面円形で、上面径1.3m、底面径50cmを測る。断面は逆台形で、深さ58cmを測る。出土遺物は皆無で、遺構の時期は不明である。井戸の可能性もある。（佐藤）

土壌10（第3・26図）

1区中央南よりに位置する。平面円形で、上面径98cm~1.24m、底面径78~85cm、深さ64cmを測る。出土遺物は皆無で遺構の時期は不明である。井戸の可能性もある。（佐藤）

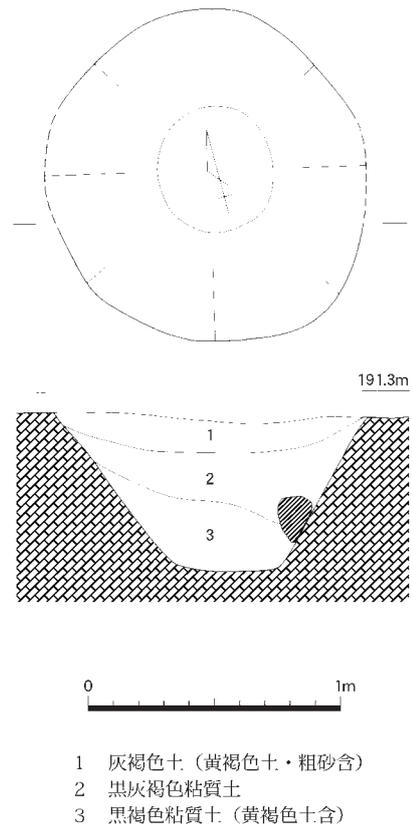
土壌11（第3・27図）

1区中央南よりに位置する。平面円形で、上面径1.06~1.1m、底面径78~86cm、深さ22cmを測る。出土遺物は皆無で、遺構の時期は不明である。（佐藤）

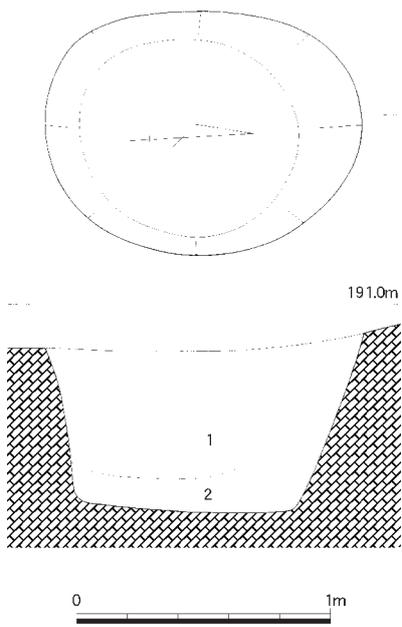


1 暗灰褐色粘質土 2 暗褐色土 (粗砂含)

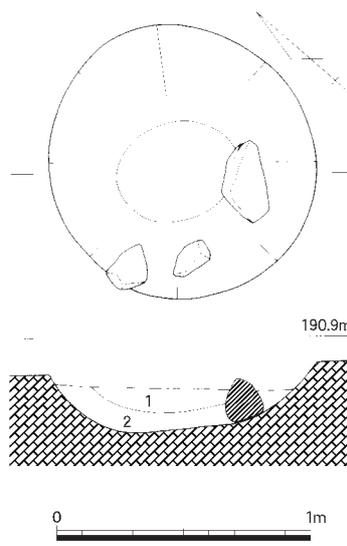
第24図 土壌7・土壌8 (1/30)



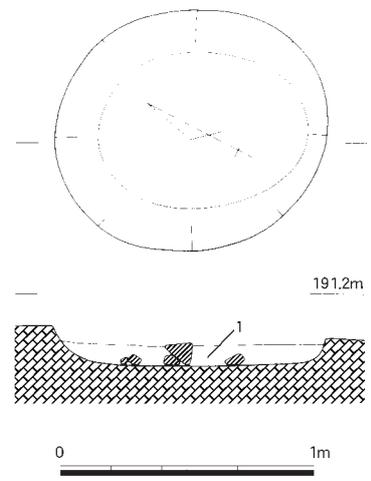
第25図 土壌9 (1/30)



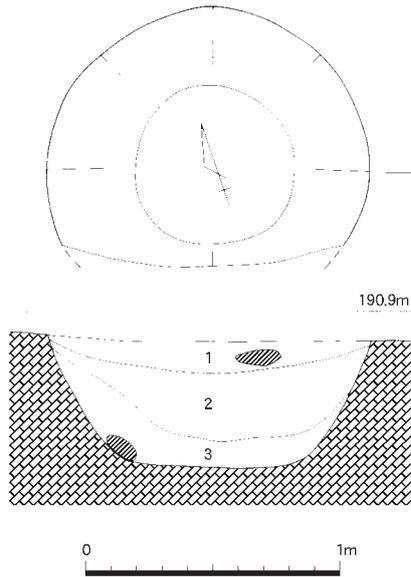
第26図 土壌10 (1/30)



第27図 土壌11 (1/30)

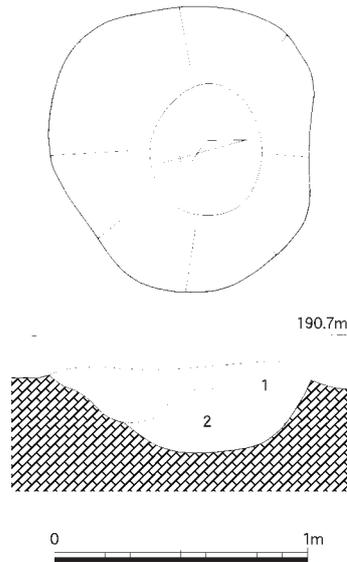


第28図 土壌12 (1/30)



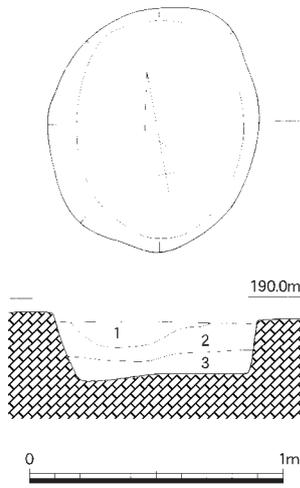
1 暗赤灰褐色土 2 暗褐色土 (灰褐色土含)
3 淡灰褐色粘質土

第29図 土壌13 (1/30)



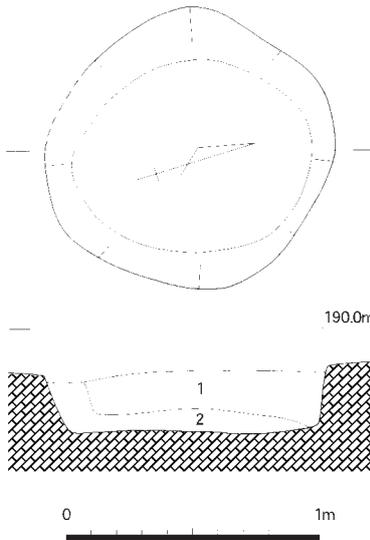
1 暗褐色土 (赤褐色土含)
2 淡灰褐色粘質土 (赤褐色土含)

第30図 土壌14 (1/30)



1 暗褐色土 (褐色土含) 2 褐色土 (暗褐色土含)
3 灰褐色土

第31図 土壌15 (1/30)



1 暗灰褐色土 (粗砂含)
2 暗褐色土 (粗砂含)

第32図 土壌16 (1/30)

1区中央に位置する。平面円形で、上面径1.11~1.13m、底面径76~92cmを測る。底面は平坦で、検出面からの深さ28cmを測る。出土遺物は無いが、周辺の状態から、近世の遺構と考えられる。(佐藤)

土壌17 (第3・33図)

1区中央東よりに位置する。円形の土壌2基を併設した遺構である。両土壌とも平面円形で、上面径1.2~1.32m、底面径90cm~1.08m、深さ48~72cmを測る。底面は平坦で、側壁に沿って溝が巡っており、土層からも桶を埋設していたと考えられる。これらの特徴から、野壺の可能性が高い。底部系切りの土師器小皿15が出土しており、遺構の時期は18世紀代と考えられる。(佐藤)

土壌12 (第3・28図)

1区中央南よりに位置する。平面楕円形で、上面径96cm~1.08m、底面径62~82cm、深さ14cmを測る。出土遺物は無く、時期は不明である。

(佐藤)

土壌13 (第3・29図)

1区中央南よりに位置する。平面楕円形で、上面径1.28m、底面径62cm、深さ52cmを測る。出土遺物は皆無で、遺構の時期は不明である。井戸の可能性もある。(佐藤)

土壌14 (第3・30図)

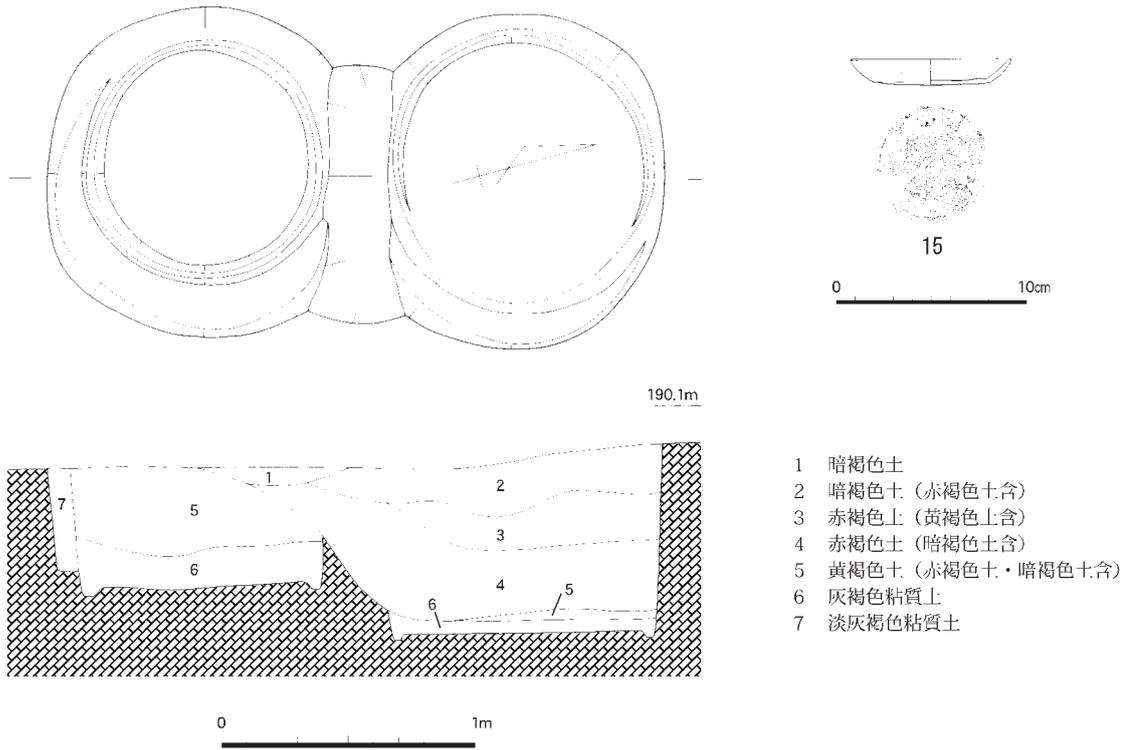
1区中央に位置する。平面円形で、上面径1.04~1.12m、底面径44~52cm、深さ30cmを測る。出土遺物は無いが、周囲の状態から、近世の遺構と考えられる。(佐藤)

土壌15 (第3・31図)

1区中央に位置する。平面円形で、上面径82~98cm、底面径66~84cmを測る。底面は平坦で、検出面からの深さ24cmを測る。出土遺物は無いが、周囲の状態から、近世の遺構と考えられる。(佐藤)

土壌16 (第3・32図)

1区中央に位置する。平面円形で、上面径1.11~1.13m、底面径76~92cmを測る。底面は平坦で、検出面からの深さ28cmを測る。出土遺物は無いが、周辺の状態から、近世の遺構と考えられる。(佐藤)

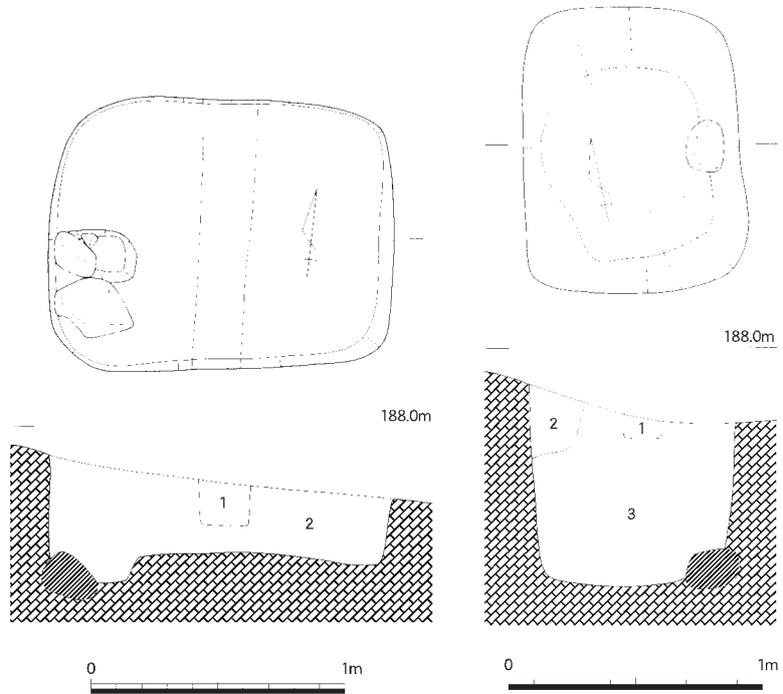


- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土（赤褐色土含）
- 3 赤褐色土（黄褐色土含）
- 4 赤褐色土（暗褐色土含）
- 5 黄褐色土（赤褐色土・暗褐色土含）
- 6 灰褐色粘質土
- 7 淡灰褐色粘質土

第33図 土壌17 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌18 (第3・34図)

1区東端に位置する。平面長方形で、長径1.34m、短径1.04mを測る。底面は平坦で、深さ28cmを測る。底面西端に、直径20cm、深さ10cmほどの小穴があるが、性格は分からない。出土遺物は皆無で、遺構の時期も不明であるが、近代以降の可能性が高い。(佐藤)

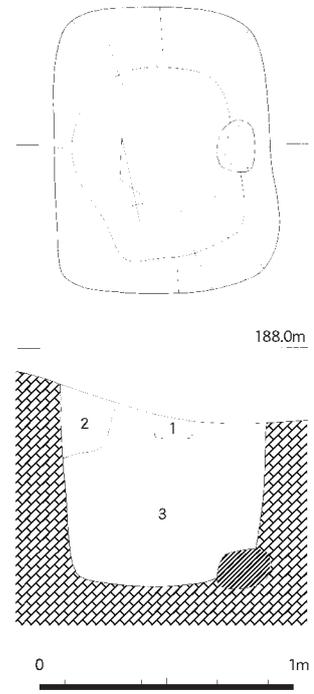


- 1 暗褐色土
- 2 黄褐色土（黒褐色土含）

第34図 土壌18 (1/30)

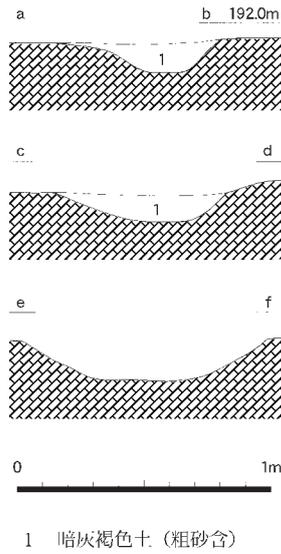
土壌19 (第3・35図)

1区東端に位置する。平面長方形で、長径1.13m、短径84cmを測る。底面は平坦で、深さ66cmを測る。埋土は土壌18と同じで、黄褐色土と黒褐色土が混じる造成土に近い土である。出土遺物は皆無で、時期不明であるが、近代以降の可能性が高い。(佐藤)

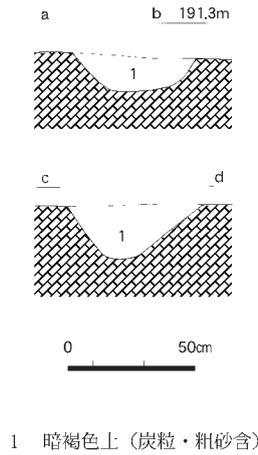


- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土（黒褐色土含）
- 3 黄褐色土（黒褐色土含）

第35図 土壌19 (1/30)



第36図 溝1 (1/30)



第37図 溝2 (1/30)

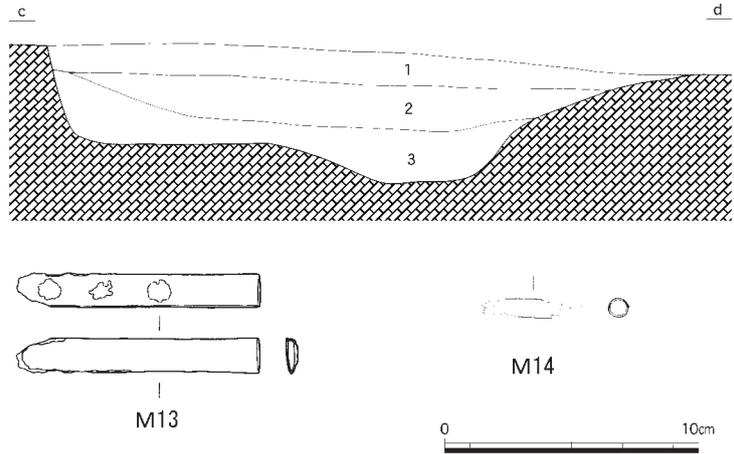
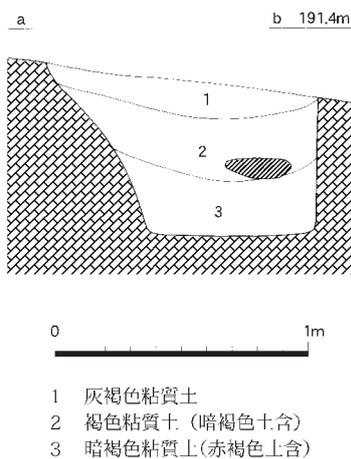
6 溝

溝1 (第3・36図、図版56)

1区中央北よりに位置する。南側を削平され、平面L字形を呈する。底面は、a-bからe-fに向けてゆるやかに傾斜しており、最終的に土層5に接続する。機能や時期は不明だが、近代以降の可能性が高い。(佐藤)

溝2 (第3・37図)

1区中央北端に位置する。平面形は直線的で、東側が調査区外へと続く。底面は西から東へゆるやかに傾斜している。時期は不明だが、近代以降の可能性が高い。(佐藤)



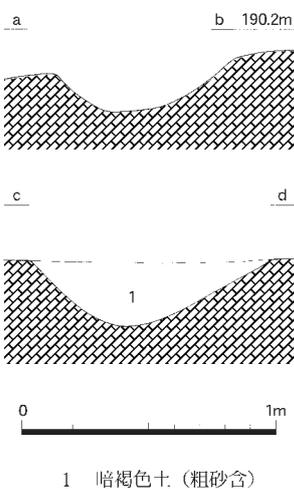
第38図 溝3 (1/30)・出土遺物 (1/3)

溝3 (第3・38図)

1区中央やや北よりに位置する。南北に主軸をとり、南側で溝5に接続する。検出面で、長さ約7m、最大幅2m、底面までの深さ40~60cmを測る。底面は平坦ながら傾斜に凹凸があり、溝の肩口・断面形ともに不整形であることから、用排水路とは考えにくい。機能・時期とも不明であるが、埋土から刀子の小柄M13、煙管の吸口M14が出土しており、近世中頃の遺構と考えられる。(佐藤)

溝4 (第3・39図)

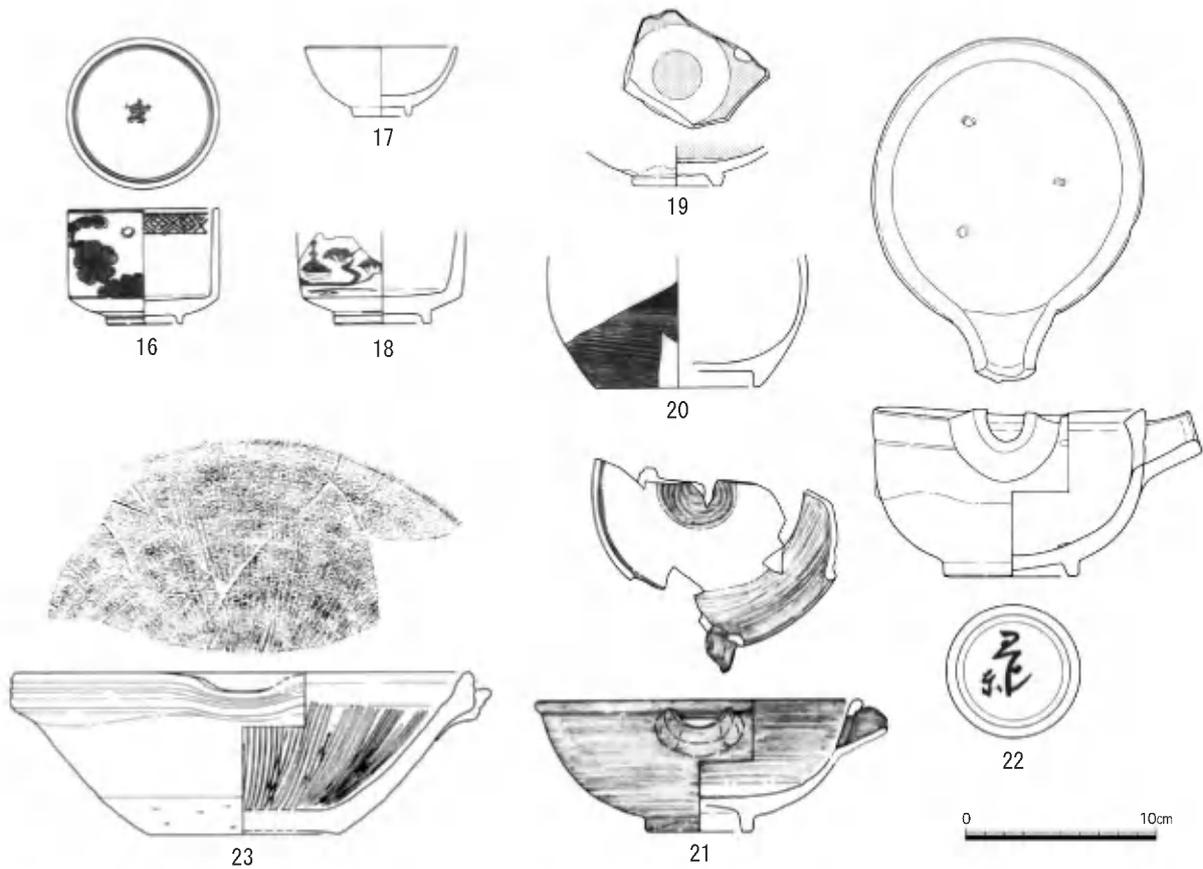
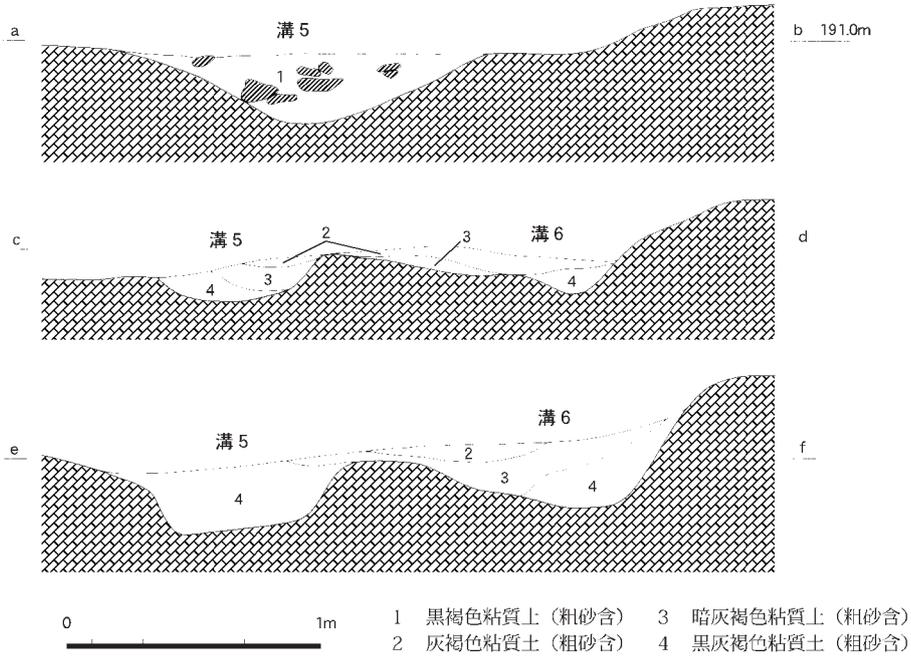
1区中央やや東よりに位置する。東西に主軸をとり、西側は溝5に接続し、東側は削平を受ける。検出面で、最大幅2m、底面までの深さ20~30cmを測る。底面は西から東に向かってなだらかに傾斜する。出土遺物はないが、近世の遺構と考えられる。(佐藤)



第39図 溝4 (1/30)

溝5・溝6 (第3・40図)

1区中央に位置する。丘陵裾部に沿って2条平行しており、ほぼ同時期に掘削・利用された用排水路と考えられる。その規模は、溝5が上幅65cm～1.4m、深さ15～28cm、溝6が上幅40cm～1m、深さ



第40図 溝5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

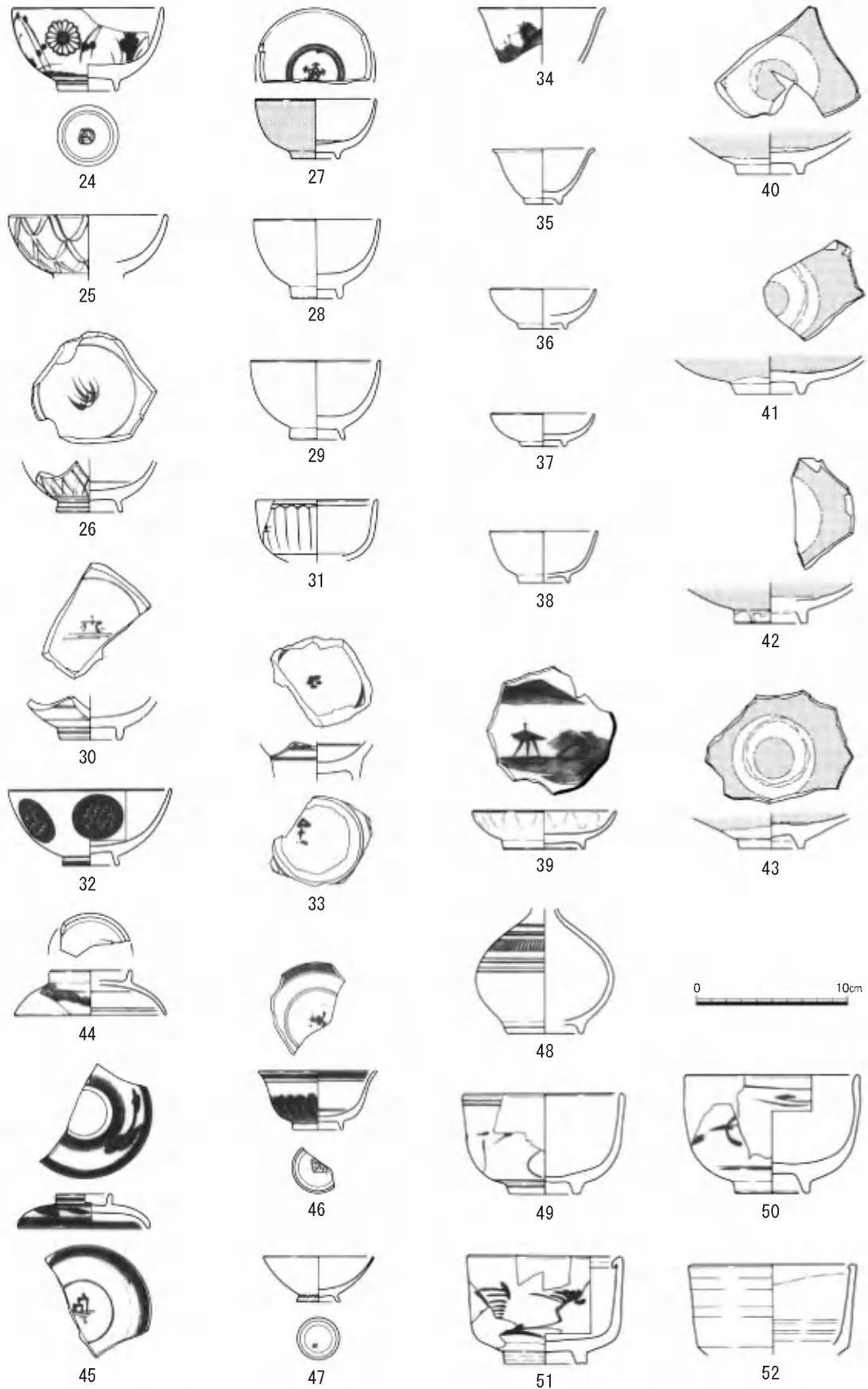
10～30cmとばらつきがあり、断面形も場所によってU字形・逆台形を呈し一定しない。遺物は、溝5埋土中から少量出土している。このうち、16～21は肥前産陶磁器である。16・17は磁器で、16は染付筒形碗、17は波佐見の白磁小杯である。18は陶胎染付の碗である。19～21は施釉陶器で、19は内野山窯産の皿、20は瓶、21は片口鉢である。22は関西産の片口鉢で、灰褐色の胎土に銅緑釉薬を厚く掛ける。外面下半は露胎で、高台内には屋号と思われる墨書がある。23は備前焼播鉢で、内面から外面口唇部まで化粧土を塗布し、内面播目はその上から施す。これらの遺物は、18世紀前半に位置付けられることから、溝5・溝6の埋没時期は18世紀中～後葉と考えられる。(佐藤)

7 遺構に伴わない遺物(第41～45図、図版57・58)

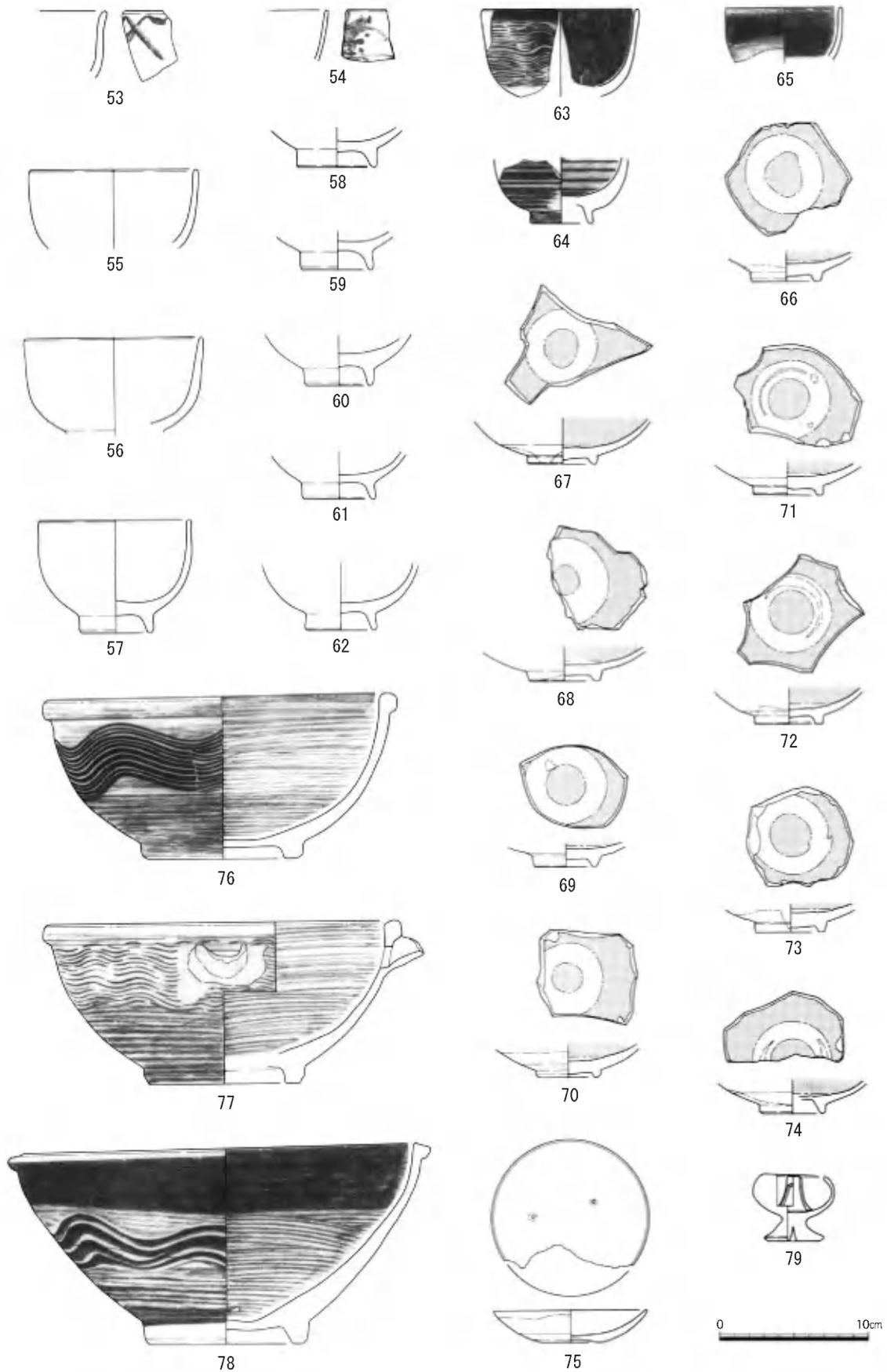
今回の調査では、整理箱にして計15箱の遺物が出土したが、その大部分は旧表土層および造成土中から、遺構に伴わない状態で出土している。このうち、土器72点・石器2点・土製品1点を抽出して掲載した。また、3区を中心に、銅滓・炉壁・羽口など銅製錬関連遺物が大量に出土したが、いずれも造成土中から出土した細片で、計量的分析に耐えないことや、頁数の関係から、炉壁2点・羽口4点・銅滓5点を抽出して掲載した。なお、掲載資料とは別に、銅製錬関連遺物5点を抽出して理化学的分析調査を行っているので、併せて参照されたい(付載3)。

掲載土器のうち、24～44・48は肥前産磁器である。このうち、24～27・30～34・39・44は染付、48は色絵、28・29・35～38は白磁、40～43は白～青白磁である。器種別では、24～33は碗、34～38は小杯、40～43は皿、44は蓋、48は油壺である。24は外面をコンニャク印判による菊花、手描きの草花で飾り、高台内には渦「福」の銘款がある。25・26は外面に二重網目を描く。27は外面に銅緑釉を施し、見込みにコンニャク印判の五弁花を飾る。30は端反碗で、見込みに帆掛船を描く。31は外面に菊花を描く。32は銅版転写による青海波文、七宝文を飾る。33は広東碗で、高台内に焼継印が認められる。34は外面に東屋、網干など山水を描く。39は型成形で、内面に東屋など山水を描き、口唇部を口紅で飾る。40～43は見込みに蛇の目釉剥ぎする。45～47は瀬戸美濃産の染付である。45は蓋で、外面に鳥、内面に帆掛船を描く。46は小碗で、外面に蓮弁を描く。47は小杯で、高台内に「田」の銘款がある。49～52は肥前産の陶胎染付である。49・50は碗で、外面に唐草を描く。51・52は火入で、外面のみ施釉する。53～65は肥前産陶器でいずれも碗である。54は京焼風陶器で、外面に山水を描く。55～62はいわゆる呉器手である。63・64は内外面を刷毛目で飾る。65は天目である。66～74は内野山窯の皿で、内面の銅緑釉を蛇の目釉剥ぎする。75は関西産の皿で、内面～口縁部を施釉する。76～78は肥前産の片口鉢である。内外面を白刷毛目と鉄釉で飾り、その上から透明釉を施す。口唇部は無釉で、高台は内部の削りが深く、外側を斜めに削り落とす。79は関西産のひょうそくで、底面を除く全面に透明釉を施す。80～90は焼き締め陶器である。このうち、80～84・86・87・89・90は備前焼で、80が茶入、81～84・86・87が播鉢、89が大甕、90が甕である。85・88の播鉢については、内面播目の上端を口縁部ヨコナデでナデ消すこと、見込みの播目を十字形に入れること、色調が橙褐色を呈すことから、堺焼の可能性が高い。91は肥前産の甕で、外面には縄状突帯、内面には叩き締めの縄目痕が認められる。92～95は土師器である。このうち、92は焙烙、93～95は底部糸切りの小皿である。

これらの出土土器の年代は、17世紀後半～18世紀代を主体とし、19世紀前半まで認められる。個々の計測値や特徴、年代については、土器観察表を参照願いたい。また、時期毎の種類・器種・産地の構成や変遷については、第4節で述べることとする。



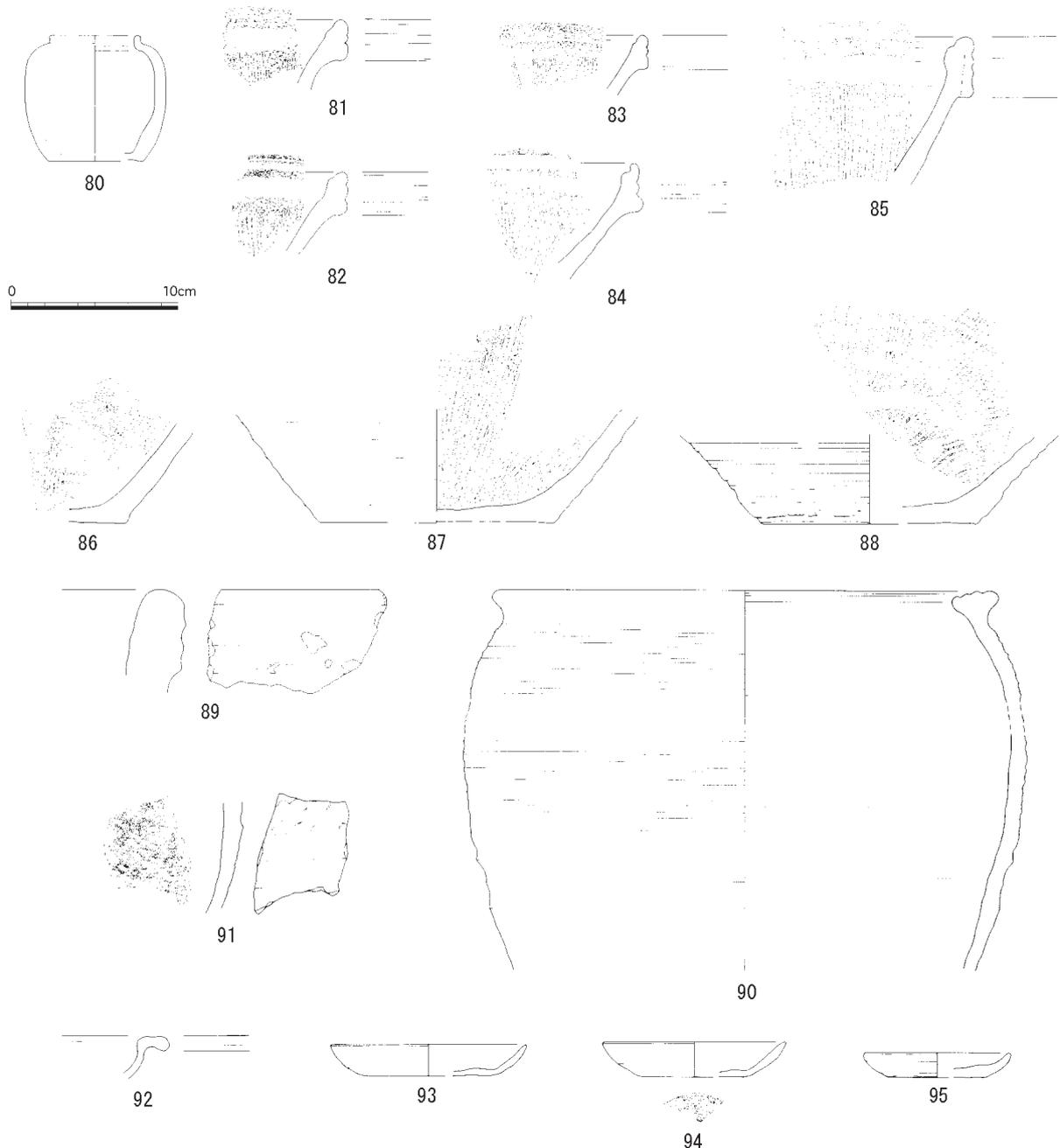
第41図 包含層出土遺物① (1/4)



第42図 包含層出土遺物② (1/4)

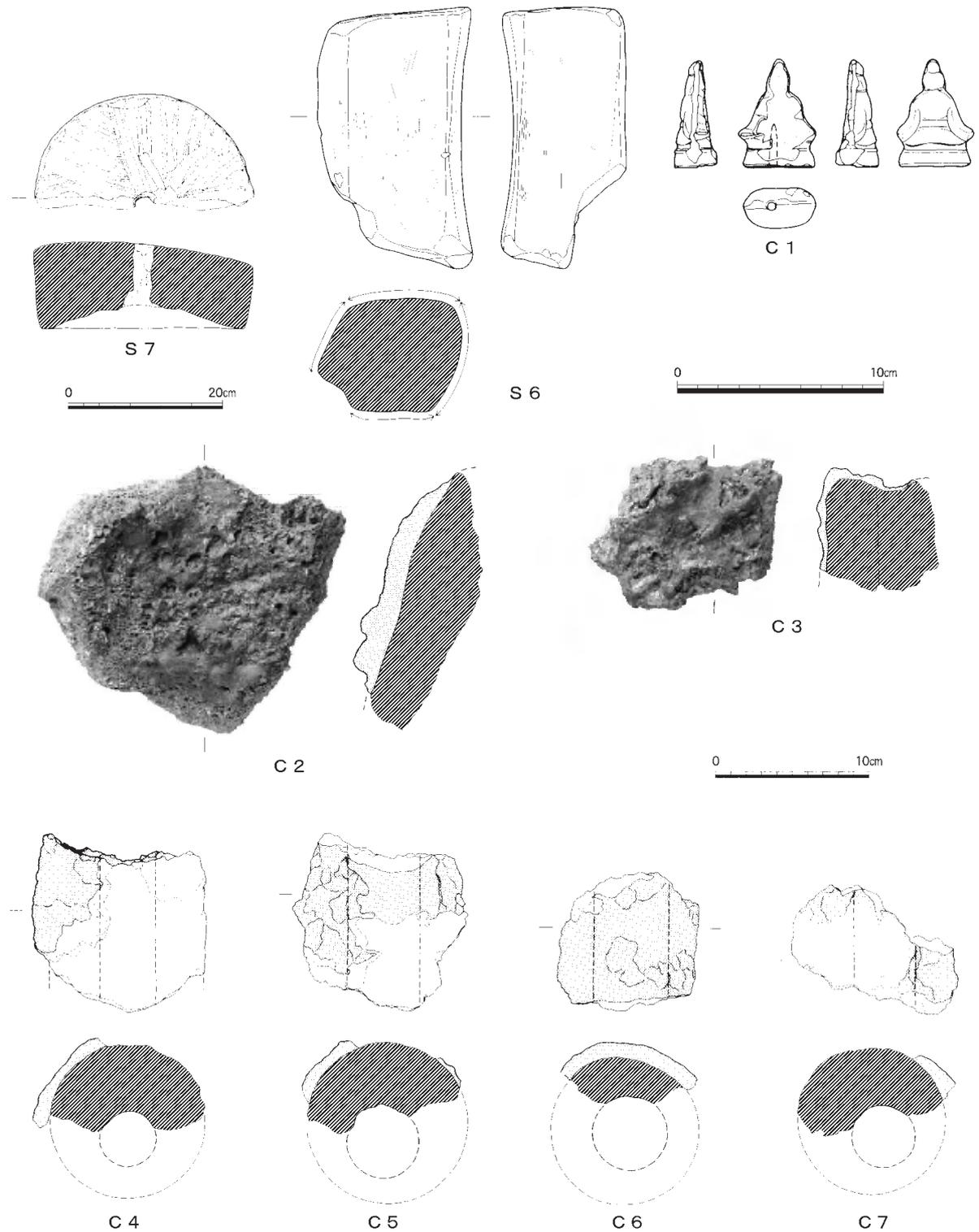
S7は粉挽き白の下白、S6は砥石である。C1は合わせ型作りによる土人形である。前面を削られるが、袴雛と考えられる。胎土は精良で、表面にキナコが付着する。C2・C3は炉壁片で、内面には銅滓が厚く付着する。今回の調査で銅製錬炉自体は検出されず、出土した炉壁も破片のため、本来の形態・規模は不明であるが、各地の調査例から製錬炉は素掘りの土壇内面に粘土を貼り付けたものと考えられる。胎土には粗砂を多く含むが、スサは混和していない。C4～C7は羽口で、外面には銅滓が付着する。いずれも破片で、本来の形態・規模は不明であるが、外径10cm前後、内径4～5cmと考えられる。胎土には粗砂を多く含むが、スサは混和していない。

M15～M19は銅滓（以下、非鉄金属滓の通称「カラミ」とする）である。このうち、M15・M16は推定直径20cm前後・厚さ2～7cmほどの円盤形塊状カラミで、表裏面とも凹凸に富む。M17～M19は

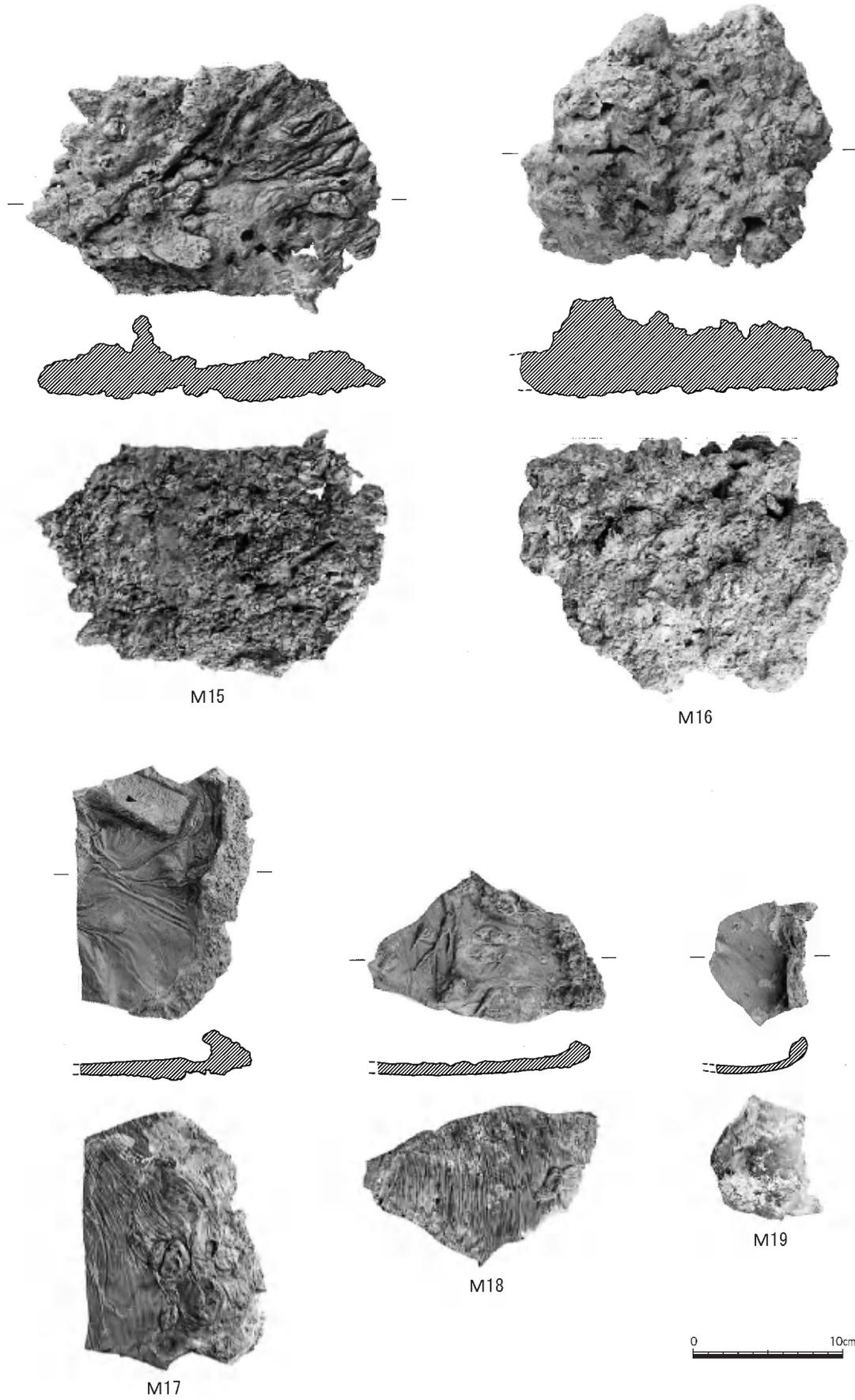


第43図 包含層出土遺物③ (1/4)

推定直径50~60cm・厚さ5~10mmほどの円盤形板状カラミで、表裏面は収縮による細かな筋で覆われ、周縁は蒲鉾状に厚くなる。両者の比率は調査時の感触ではほぼ同量で、理化学的分析調査の結果、銅製錬前半の「素吹き」時に排出されるものが主体であることが判明した（付載3参照）。このうち、塊状カラミは素吹き初期段階、板状カラミは最終段階に排出されるものと想定される。（佐藤）



第44図 包含層出土遺物④ (1/8, 1/3, 1/4)



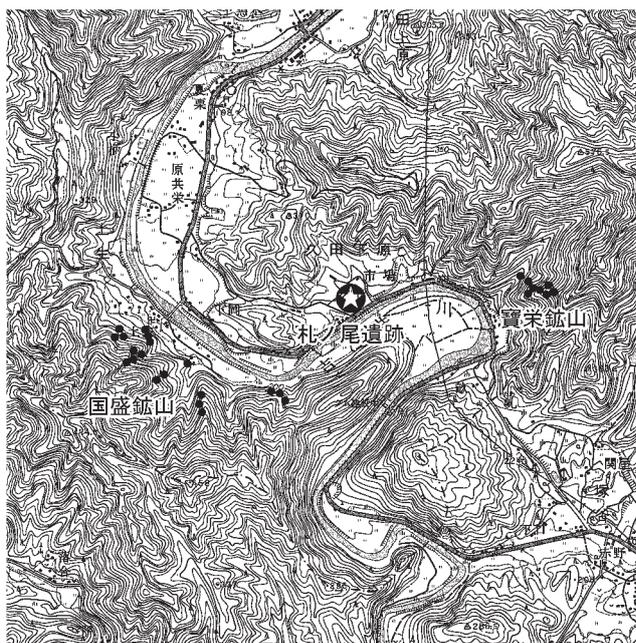
第45図 包含層出土遺物⑤ (1/4)

第4節 小結

発掘調査の結果、札ノ尾遺跡は近世を主体とする集落遺跡で、銅製錬を行っていたことが判明した。調査では、丘陵緩斜面で掘立柱建物・土塋（居住域）、そこからやや下がった斜面部で土塋墓（墓域）、さらに下がった谷部で井戸や水路（生産域）を検出し、丘陵部に立地する近世集落の構造を把握することができた。銅製錬に関わる遺構としては、製錬炉など直接的なものは検出できなかったが、建物内に強い被熱面や銅滓が充満した土塋（P15）をもつ掘立柱建物2や、内面に強い熱を受けた土塋5・6については、その可能性が高いと考えられる。また、3区造成土を中心に多量の炉壁・羽口・銅滓が出土しており、すでに削平された3区周辺に銅製錬施設が存在していたものと思われる。

出土遺物は、17世紀後半から19世紀前半の陶磁器が主体で、札ノ尾集落の最盛期がこの時期にあったことを示している。このうち、供膳具については肥前産陶磁器が主体を占め、17世紀後半では陶器の割合が高いが、18世紀以降は磁器主体となり、さらに19世紀には瀬戸・美濃産磁器が若干加わるようになる。調理具・貯蔵具は備前焼が主体を占めるが、肥前産甕や堺産播鉢も少量出土している。また、関西産陶器も僅かながら認められる。このほか、嗜好品として油壺や火入、茶入、土人形などが出土している。こうした土器様相や構成の時期的変化は、岡山城下の様相とも共通するが、高級品は認められず、一般的な山間農村の生活文化を反映しているものと考えられる。

札ノ尾遺跡で行われた銅製錬は、出土遺物や理化学的分析調査の成果から、周辺の鉱山から採掘した銅鉱石を溶解・製鉄し、荒銅と呼ばれる銅素材にして大阪（住友銅吹所）に送る、いわゆる山元製錬であったと考えられる。札ノ尾遺跡周辺には、近世～大正にかけて操業した寶栄鉱山・国盛鉱山（土生銅山）の記録があり、多数の坑道跡も認められることから（第46図）、ここで採掘された銅鉱石が札ノ尾遺跡へ持ち込まれた可能性が高い。札ノ尾遺跡が最盛期を迎える17～19世紀は、国内銅生産の飛躍的な拡大期で、世界有数の銅輸出国であったことが指摘されている。札ノ尾遺跡の銅製錬も、



第46図 札ノ尾遺跡周辺の坑道跡分布 (1/40,000)

こうした国内の銅需要の高まりに応じて行われたと考えられる。岡山県内には著名な備中吉岡銅山を始め、50か所以上で鉱山・鉱脈が記録されている。今回の発掘調査では良好な資料に恵まれず、山元製錬の実体解明には至らなかったが、近世銅製錬に関わる遺構・遺物の発見は県内初例で全国的にも数少なく、近世鉱業の考古学的研究にとって、重要な資料といえよう。（佐藤）

参考文献

- 『国内出土の肥前陶磁』九州近世陶磁学会 2002年
- 小葉田淳『日本鉱山史の研究』岩波書店 1968年
- 『季刊考古学』第62号雄山閣 1998年
- 『鼓銅凶録』江戸科学古典叢書1 恒和出版 1976年
- 『宝の山』・『諸国銅山見分控』住友史料叢書 1991年
- 苫田郡教育会『苫田郡史』 1927年

掘立柱建物および柱穴一覽表

遺構名	規模			柱間距離(cm)		面積 (㎡)	棟方向 N-°-E・W	柱穴 掘り方	時期	備考
	間数	桁行(cm)	梁間(cm)	桁	梁					
掘立柱建物 1	5 × 1	1180	506	336~200	504~136	59.5	N-42-E	円形	近世	上方に雨落溝
掘立柱建物 2	4 × 2	764	364	330~174	184~178	27.5	N-6-E			上方に雨落溝
柱穴列 1	2 × 2	388	372	238~150	194~178	—	—		近世?	

土壙墓一覽表

遺構名	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	人骨	副葬品等	時期	備考
土壙墓 1	楕円形	Ⅲ a	145	125	50	×		近世?	
土壙墓 2	楕円形	Ⅱ a	110	100	40	×			
土壙墓 3	楕円形	Ⅲ a	140	130	50	×		近世	底板遺存
土壙墓 4	楕円形	Ⅱ a	110	110	35	×	土師器小皿 3		
土壙墓 5	楕円形	Ⅲ a	180	132	48	×		近世?	
土壙墓 6	円形	Ⅲ a	114	114	34	×			
土壙墓 7	楕円形	Ⅲ a	105	95	62	×	寛永通宝 5	近世	
土壙墓 8	楕円形	Ⅲ a	89	82	42	×	寛永通宝 3		
土壙墓 9	楕円形	Ⅲ a	59	52	29	×		近世?	
土壙墓 10	楕円形	Ⅲ a	87	73	41	×			
土壙墓 11	円形	Ⅱ d	153	144	42	×			
土壙墓 12	円形	Ⅱ a	135	129	55	×			
土壙墓 13	円形	Ⅲ d	123	120	66	×	煙管	近世	
土壙墓 14	円形	Ⅲ a	110	110	40	×			

井戸一覽表

遺構名	構造	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔 高(m)	時期	備考
井戸 1	石組み	円形	132	130	106	189.74	近世	

土壙一覽表

遺構名	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面海拔 高(m)	時期	備考
土壙 1	楕円形	Ⅱ a	102	98	14	193.37	近世?	
土壙 2	楕円形	Ⅲ d	154	132	20	193.20		
土壙 3	円形	Ⅱ a	77	(56)	20	193.40		
土壙 4	長方形	Ⅱ a	300	160	600	185.40	近代以降?	壁面に木梓孔
土壙 5	楕円形	Ⅲ b	140	110	30	191.33	近世?	底面・壁面に被熱痕跡
土壙 6	方形	Ⅲ a	95	95	5	191.71		底面・壁面に被熱痕跡
土壙 7	円形	Ⅲ a	150	140	90	190.81		
土壙 8	円形	Ⅲ a	115	115	15	191.58		
土壙 9	楕円形	Ⅲ a	130	130	58	190.30		
土壙 10	円形	Ⅱ a	124	98	64	190.17		古代以前?
土壙 11	円形	Ⅲ a	110	106	22	190.52		
土壙 12	楕円形	Ⅲ a	108	96	14	190.91	近世?	
土壙 13	楕円形	Ⅲ a	128	(94)	52	190.28		
土壙 14	円形	Ⅱ b	112	104	30	190.24		
土壙 15	楕円形	Ⅱ a	98	82	24	189.69		
土壙 16	円形	Ⅱ a	113	111	28	189.57	近代以降?	
土壙 17	円形	Ⅱ a	132	120	72	189.20		
土壙 18	長方形	Ⅱ a	134	104	28	187.52		
土壙 19	長方形	Ⅱ a	113	84	66	187.07		

土器観察表①

掲載 番号	掲載 遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
1	包含層	縄文土器	深鉢				灰黄褐色(10YR6/2)		楕円押型文
2		弥生土器	壺	14.4			橙色(5YR7/6)		口唇部に刺突文
3		弥生土器	壺				鈍褐色(7.5YR6/3)		口縁上部に波状文、口唇部に凹線
4		弥生土器	甕				橙色(2.5YR6/6)		口唇部に凹線4条
5		弥生土器	甕		5.1		鈍褐色(7.5YR6/3)		底部内面に炭化物付着
6		弥生土器	壺				黒褐色(10YR4/1)		
7		須恵器	杯身		8.7		灰色(N4.5/1)		
8		須恵器	甕				灰白色(7.5Y7/1)		
9		勝間田焼	甕				灰黄色(2.5Y7/2)		
10		土師器	甕	29.5			橙色(5YR7/6)		
11	掘立柱建物1	肥前陶器	碗		4.6		灰白色(10YR8/2)		P8出土 京焼風陶器 削り出し高台内に「木下弥」の印銘 1660~80年
12	土壇墓4	土師器	小皿	9.6	7.0	1.5	褐灰色(10YR6/1)		底部糸切り 部分的に煤付着
13		土師器	小皿	8.7	5.7	1.1	鈍橙色(7.5YR7/3)		底部糸切り
14		土師器	小皿	8.7	5.5	1.4	鈍褐色(7.5YR6/3)		底部糸切り 口縁部に被熱痕
15	土壇17	土師器	小皿	8.3	6.0	1.5	鈍橙色(7.5YR7/3)		底部糸切り 部分的に煤付着
16	溝5	肥前磁器	筒形碗	7.7	3.8	6.1	灰白色(N7/1)		染付 外面に桜・流水 内面に四方禪 見込みに手書き五弁花 18c第4四半期
17		肥前磁器	小杯	7.8	2.9	3.7	灰白色(N7/1)		白磁
18		肥前陶器	碗		5.0		灰色(5GY6/1)		陶胎染付 山水(東屋) 18c前半
19		肥前陶器	皿		4.5		灰白色(10YR7.5/2)		内野山窯 青緑色釉 見込み蛇の目 釉剥ぎ 17c後半~18c前半
20		肥前陶器	瓶		8.6		灰色(N6/1)		暗緑色釉 白刷毛目 18c前半
21		肥前陶器	片口鉢	17.2	5.6	7.0	鈍黄褐色(10YR7/4)		灰褐色釉 白刷毛目 見込み蛇の目 釉剥ぎ 18c前半
22		陶器	片口鉢	15.0	6.0	9.0	灰色(N7/1)	完形	関西系 淡灰オリープ色釉 高台内に墨書 見込みに3箇所の胎十日
23		備前焼	播鉢	23.6	10.0	13.6	灰白色(10YR7/1)		内面~口縁部に化粧土(灰赤色10R5/2) 8本1単位の描目
24	包含層	肥前磁器	碗	8.7	3.8	5.5	灰白色(N8/1)		染付 コンニャク印判菊花と手描き草花 高台内に渦「福」18c第2四半期
25		肥前磁器	碗	10.2		4.2	灰白色(N8/1)		染付 波佐見 二重網目 18c後半
26		肥前磁器	碗		4.4		灰白色(N8/1)		染付 二重網目 1820~1860年代
27		肥前磁器	碗	8.1	3.0	4.1	灰白色(N7/1)		青磁染付 見込みにコンニャク印判五弁花 18c前半
28		肥前磁器	碗	8.2	3.1	5.3	灰白色(N7.5/1)		白磁 18c後半
29		肥前磁器	碗	8.5	3.4	5.3	灰白色(N8/1)		白磁 18c後半
30		肥前磁器	碗		4.2		灰白色(N8/1)		染付 波佐見系 見込みに帆掛け船 1820~1860年代
31		肥前磁器	碗	8.2			灰白色(N8/1)		染付 波佐見系 菊花 1820~1860年代
32		肥前系磁器	碗	10.8		5.1	灰白色(N8/1)		染付 銅版転写 明治後半~大正
33		肥前磁器	碗		6.2		白色(N1/9)		染付 広東碗 高台内に焼継印 1780~1810年代
34		肥前磁器	小杯	8.2			白色(N1/9)		染付 網干 17c後半
35		肥前磁器	小杯	6.6	2.4	3.7	灰白色(N7.5/1)		白磁 17c後半~18c前半
36		肥前磁器	小杯	6.9	3.2	2.7	灰白色(N7.5/1)		白磁 18c
37		肥前磁器	小杯	6.8	2.9	2.2	灰白色(N8/1)		白磁 紅皿? 18c
38		肥前系磁器	小杯	7.0	3.4	3.5	灰白色(N8/1)		白磁 18c後半~19c前半
39		肥前磁器	小皿	9.6	5.4	2.6	灰白色(N8/1)		染付 型成形 山水(東屋) 口唇部に口紅(鉄釉) 19c初頭~幕末
40		肥前磁器	皿		4.4		灰白色(N8/1)		青白磁 波佐見 蛇の目釉剥ぎ 17c後半
41		肥前磁器	皿		5.0		灰白色(N8/1)		青白磁 波佐見 蛇の目釉剥ぎ 17c後半
42		肥前磁器	皿		4.0		灰白色(N8/1)		青白磁 波佐見 蛇の目釉剥ぎ 17c後半
43		肥前磁器	皿		4.3		灰白色(N8/1)		青白磁 波佐見 蛇の目釉剥ぎ 17c後半
44	肥前磁器	蓋		9.8	3.0	灰白色(N8/1)		染付 1780~1840年代	
45	磁器	蓋		8.8	2.3	灰白色(N8/1)		コバルト染付 瀬戸美濃系 鳥・帆掛け船 明治	
46	磁器	小碗	7.9		4.1	灰白色(N8/1)		コバルト染付 瀬戸美濃 蓮弁 19c中頃	

土器觀察表②

掲載 番号	掲載遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
47	包含層	磁器	小杯	7.2	2.7	3.1	灰白色(N8/1)		コバルト染付 瀬戸美濃 高台内銘「田」 明治以降
48		肥前磁器	油壺		5.0		灰白色(2.5Y7/1)		色絵(赤褐色) 1680~1690年代
49		肥前陶器	碗	10.8	4.7	7.2	灰色(N7/1)		陶胎染付 唐草 18c前半
50		肥前陶器	碗	11.2	4.6	7.9	灰色(N6.5/1)		陶胎染付 唐草 18c前半
51		肥前陶器	火入	10.0	5.4	7.2	灰白色(7.5Y8/1)		陶胎染付 花木 18c前半
52		肥前陶器	火入	10.6			鈍赤褐色(2.5YR5/3)		陶胎染付 18c前半
53		肥前陶器	碗				浅黄褐色(10YR8/3)		山水 18c前半
54		肥前陶器	碗				灰白色(2.5Y8/2)		京焼風陶器 山水 17c後半~18c初頭
55		肥前陶器	碗	10.0			灰白色(10YR8/2)		呉器手 17c後半
56		肥前陶器	碗	11.7			灰白色(10YR8/2)		呉器手 17c後半~18c初頭
57		肥前陶器	碗	9.9	4.7	7.6	灰白色(2.5Y8/1)		呉器手 17c後半~18c初頭
58		肥前陶器	碗		4.8		灰白色(10YR8/2)		呉器手 17c後半
59		肥前陶器	碗		4.6		灰白色(10YR8/2)		呉器手 17c後半
60		肥前陶器	碗		4.4		浅黄褐色(10YR8/3)		呉器手 17c後半~18c初頭
61		肥前陶器	碗		4.7		浅黄褐色(10YR8/3)		呉器手 17c後半~18c初頭
62		肥前陶器	碗		4.6		灰黄色(2.5Y7/2)		呉器手 17c末~18c前半
63		肥前陶器	碗	10.2			褐灰色(10YR5/1)		黒褐色釉 白刷毛目 18c前半
64		肥前陶器	碗		4.1		鈍赤褐色(2.5YR5/4)		鈍黄褐色釉 白刷毛目 18c前半
65		肥前陶器	小碗	7.6			橙色(2.5YR6/6)		天目 17c後半~18c前半
66		肥前陶器	皿		4.4		灰白色(2.5YR8/1)		内野山窯 緑灰色釉 蛇の日釉剥ぎ 17c後半~18c前半
67		肥前陶器	皿		4.5		灰白色(10YR8/2)		内野山窯 緑灰色釉 蛇の日釉剥ぎ 17c後半~18c前半
68		肥前陶器	皿		4.6		灰白色(10YR8/1)		内野山窯 緑灰色釉 蛇の日釉剥ぎ 17c後半~18c前半
69		肥前陶器	皿		4.2		灰白色(10YR8/1)		内野山窯 緑灰色釉 蛇の日釉剥ぎ 17c後半~18c前半
70		肥前陶器	皿		4.0		灰白色(2.5Y7/1)		内野山窯 灰緑色釉 蛇の日釉剥ぎ 17c後半~18c前半
71		肥前陶器	皿		4.5		灰色(5Y8/1)		内野山窯 緑灰色釉 蛇の日釉剥ぎ 重ね積み痕 17c後半~18c前半
72		肥前陶器	皿		4.6		灰白色(10YR7/1)		内野山窯 緑灰色釉 蛇の日釉剥ぎ 重ね積み痕 17c後半~18c前半
73		肥前陶器	皿		4.6		灰白色(N8/1)		内野山窯 緑灰色釉 蛇の日釉剥ぎ 17c後半~18c前半
74		肥前陶器	皿		4.0		鈍褐色(5YR6/4)		内野山窯 灰緑色釉 蛇の日釉剥ぎ 重ね積み痕 17c後半~18c前半
75		陶器	皿	10.3	3.8	2.2	灰白色(2.5Y7/1)		関西系 鈍黄色釉 三足付きハマ痕 18c
76		肥前陶器	片口鉢	22.2	10.0	11.0	鈍赤褐色(2.5YR5/4)		黄褐色釉 黒褐色化粧土 白刷毛目 口唇部・高台無釉 17c末~18c前半
77		肥前陶器	片口鉢	23.0	10.0	10.9	灰赤色(10R4/2)		透明釉 黒褐色化粧土 白刷毛目 口唇部・高台無釉 17c末~18c前半
78		肥前陶器	片口鉢	26.1	10.3	13.2	鈍赤褐色(2.5YR5/4)	復元 完形	透明釉 黒褐色化粧土 白刷毛目 口唇部・高台無釉 砂土目 18c前半
79		陶器	ひょう そく	4.2	3.2	4.4	灰色(N6/1)	完形	関西系 透明釉 芯立部貼付 底部糸切り底面に円錐形の軸受け孔
80		備前焼	茶入	5.1	5.7	7.6	鈍赤褐色(2.5YR5/4)		内部に有機物の固形物付着
81		備前焼	搦鉢				灰赤色(2.5YR5/2)		口縁下部に重ね積み痕 6本1単位の搦鉢
82		備前焼	搦鉢				鈍赤褐色(2.5YR5/3)		7本1単位の搦鉢
83		備前焼	搦鉢				鈍赤褐色(5YR5/4)		口縁下部に重ね積み痕 7本1単位の搦鉢
84		備前焼	搦鉢				褐色(2.5YR6/6)		口縁下部に重ね積み痕
85		堺焼	搦鉢				褐色(2.5YR6/6)		6本1単位の搦鉢施文後に口縁部ヨコナデ
86		備前焼	搦鉢				鈍褐色(7.5YR5/3)		10本1単位の搦鉢
87		備前焼	搦鉢		14.0		灰赤色(2.5YR4/2)		10本1単位の搦鉢
88	堺焼	搦鉢		14.2		鈍赤褐色(2.5YR5/4)		11本1単位の搦鉢 見込みの搦鉢は十字形	
89	備前焼	甕				鈍赤褐色(5YR5/4)			
90	備前焼	甕	29.6			鈍赤褐色(2.5YR4/4)		口唇部・胴部上半に凹線	
91	肥前陶器	甕				黒褐色(7.5YR3/1)		外面縄状突起 内面縄叩き痕	

土器観察表③

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	特徴
				口径	底径	器高			
92	包含層	土師器	焙烙				鈍黄橙色(10YR7/4)		
93		土師器	小皿	11.8	6.6	1.9	鈍橙色(5YR7/4)		底部糸切り 部分的に煤付着
94		土師器	小皿	11.0	6.2	2.2	橙色(5YR7/6)		底部糸切り
95		土師器	小皿	8.7	6.3	1.5	鈍橙色(5YR7/4)		底部糸切り 部分的に煤付着

土製品および製銅関連遺物一覧表

掲載番号	掲載遺構名	器種	計測値(mm)					色調	時期	備考
			最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量(g)			
C 1	包含層	鉢	5.3	3.8	2.0			鈍橙色(5YR7/4)	近世	合わせ型作り 前面欠損 表面にキナコ付着 底面に軸受け孔
C 2		炉壁	203.0	180.0	63.0		1594.9	橙色(5YR6/6)	近世	内面に銅滓付着 外面は欠損
C 3		か壁	120.0	102.5	82.0		818.4	橙色(5YR6/6)	近世	内面に銅滓付着 外面は欠損
C 4		羽口	116.5	113.5		36.0	587.5	橙色(5YR6/6)	近世	外面に銅滓付着
C 5		羽口	116.5	114.5		46.0	471.0	橙色(5YR6/6)	近世	外面に銅滓付着
C 6		羽口	91.0	92.5		48.0	271.1	明赤褐色(5YR5/6)	近世	外面に銅滓付着
C 7		羽口	85.5	109.0		41.0	254.2	明赤褐色(5YR5/6)	近世	外面に銅滓付着

石製品一覧表

掲載番号	掲載遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備考		
			最大長	最大幅	最大厚						
S 1	包含層	石錐	39.5	11.0	5.5	2.5	安山岩	弥生			
S 2		石鏃または扁平片刃石斧未成品	58.5	33.0	10.5	19.5	安山岩				
S 3		扁平片刃石斧未成品	96.0	53.0	14.5	110.9	安山岩				
S 4	土壙墓13	粉挽き白(上白)				274.0 (114.5)	9400.0	花崗岩	近世	溝8分画	
S 5	土壙墓13・14	粉挽き白(下白)				270.0 (99.0)	6200.0	花崗岩		溝8分画	
S 6	包含層	砥石				128.5	75.5	61.0	847.4	流紋岩	
S 7		粉挽き白(下白)				284.0 (114.0)	6500.0	花崗岩	溝8分画		

金属器および製銅関連遺物一覧表

掲載番号	掲載遺構名	器種	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備考	
			最大長	最大幅	最大厚					
M 1	掘立柱建物1	銭貨	24.8		1.8	2.0	銅	近世	P 8出土 新寛永?	
M 2	掘立柱建物2	銭貨	24.3		1.6	1.7	銅		P 14出土 新寛永?	
M 3	土壙墓7	銭貨	24.0		2.0	1.8	銅		新寛永	
M 4		銭貨	23.5		1.7	1.2	銅		新寛永	
M 5		銭貨	23.0		1.2	1.2	銅		新寛永?	
M 6		銭貨	23.8		1.3	1.5	銅		新寛永?	
M 7		銭貨	24.0		1.3	1.0	銅		古寛永?	
M 8		土壙墓8	銭貨	25.5		2.0	2.7		銅	古寛永
M 9			銭貨	26.0		1.3	1.7		銅	古寛永
M 10	銭貨		23.8		1.5	2.1	銅		新寛永?	
M 11	土壙墓13	煙管(雁首)	52.5	15.0	16.5	5.5	銅			
M 12		煙管(吸口)	50.0	10.0	10.0	4.3	銅			
M 13	溝3	刀子(柄)	95.5	14.0	5.0	9.9	銅			
M 14		煙管(吸口)	39.5	7.5	7.5	0.9	銅			
M 15	包含層	銅滓	237.0	170.0	57.5	1345.5	銅			
M 16		銅滓	220.0	185.0	80.0	2150.0	銅			
M 17		銅滓	174.0	120.0	33.5	574.2	銅			
M 18		銅滓	112.0	150.0	23.0	314.0	銅			
M 19		銅滓	88.0	72.0	21.0	80.7	銅			

第14章 まとめ

第1節 発掘調査の成果

本書に収載した11遺跡の調査は、苫田ダム建設に伴う発掘調査のうち、平成7～10年度に実施したもので、おもに丘陵部とその縁辺の遺跡が対象となった。調査の結果、縄文時代から近世までの遺構・遺物を確認し、遺跡の性格も集落・製鉄関連・山城など、多種多様な内容を含むことが判明した。以下、本文と重複する部分もあるが、各遺跡の調査成果について時代順にまとめることとする。

縄文時代については、早期・後期・晩期の遺物を確認した。早期は河内構遺跡・岡遺跡・札ノ尾遺跡で楕円・山形の押型文土器がわずかながら出土しており、小集団の移動生活が想定される。後期は岡遺跡でまとまった量の土器が出土し、丘陵縁辺部に小集落が形成されていたものと思われる。晩期は岡遺跡・城峪城跡で土器片が若干出土したのみで、生活の中心は平野部に移行したようである。

弥生時代については、河内構遺跡・河内城跡・河内遺跡・ナル林遺跡・峪畑遺跡・岡遺跡・城峪城跡・札ノ尾遺跡で中期後半から後期の遺構・遺物を確認し、中～後期にかけて集落域が拡散する状況が把握できた。出土遺物のうち、峪畑遺跡出土の銅鏃は中細形銅剣C類（出雲型銅剣）の鋒を転用した可能性が高く、山陰青銅器文化の伝播を示唆する貴重な資料といえる。土器様相も中期までは瀬戸内地域と共通するが、後期以降は山陰地域との類似性が強まり、地域間交流の変化がうかがえる。

古墳時代については、遺跡立地の中心が平野部に移行し、丘陵部の遺構密度はきわめて低くなる。集落としては、ナル林遺跡で前期の竪穴住居1軒、河内遺跡で後期の竪穴住居1軒を検出したにすぎず、墳墓はまったく確認できなかった。また、城峪城跡で製鉄炉・横口付炭窯、比丘尼ヶ城跡で横口付炭窯を検出し、この地域においても7世紀代には製鉄が開始されたことが想定される。

古代については、前代に引き続き丘陵部の遺構密度は低いが、峪畑遺跡で9～10世紀代の製鉄炉を確認した。また、製炭施設と考えられる焼成土壌を河内城跡・久田上原城跡・峪畑遺跡・比丘尼ヶ城跡・城峪城跡で検出し、実体が不透明な古代木炭生産を検討する上で大きな成果が得られた。

中世については、河内遺跡で鎌倉～室町後半、河内構遺跡で室町後半～近世中頃を主体とする遺構・遺物を検出した。特に、河内構遺跡は大規模な溝や地名から『作陽誌』に記された「河端溝」に比定される可能性が高い。また、河内城跡・久田上原城跡・比丘尼ヶ城跡・城峪城跡は南北朝期の山城であることが判明した。当該期の山城の調査例は全国的にも少なく、城郭研究上極めて重要な資料といえる。さらに、河内城跡では集石墓・炭窯を検出し、北条高下遺跡では墳墓の存在が想定された。

近世については、河内構遺跡・河内城跡・城峪城跡・札ノ尾遺跡で遺構・遺物を確認し、山間村落における物質文化の一端が明らかになった。特に、札ノ尾遺跡では銅鉱石から荒銅と呼ばれる銅素材への製錬が行われていたことが判明し、全国的にも稀少な近世銅製錬遺跡の調査となった。

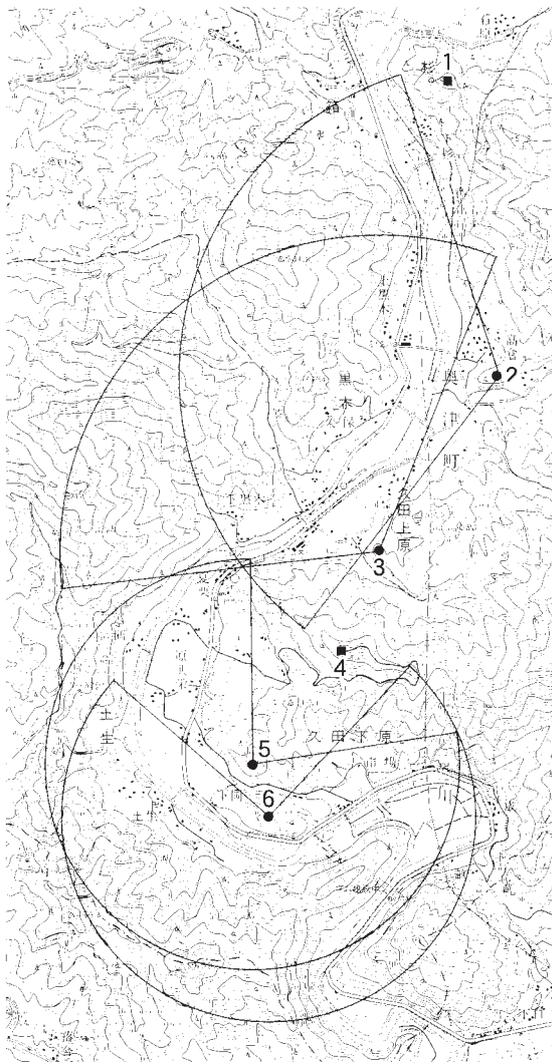
以上、本書収載遺跡の調査概要について記した。これらのデータは、今後刊行される平野部の諸遺跡の調査内容と組み合わせることで、より大きな成果を生み出すであろう。本書が久田地区の歴史復元、ひいては歴史学研究の基礎資料として活用されることを切に願う。（佐藤）

第2節 久田地区の中世山城

1 城郭の位置と立地

城郭の位置

久田地区の4城は、いずれも吉井川の東岸に連なる丘陵上に位置している。これは、東岸に広がるなだらかな河岸段丘が古くから生活の場として利用されて来たことに加え、西岸には峻嶒な山々が連なり、その裾を洗う吉井川が自然の障壁をなしているからにほかならない。そして、これらの城は北東の河内城から南西の比丘尼ヶ城にかけて約2.4kmの直線上に、1.1~1.3kmの間隔で並んでいる（第1図）。上流の河内城と久田上原城は杉から黒木にかけて、下流の城峪城と比丘尼ヶ城は久田下原全域を見わたせる位置にあるが、両者の間は高い丘陵に遮られ直接に見通せる位置にはない。しかし、



- | | | |
|--------|---------|---------|
| 1 天狗山城 | 2 河内城 | 3 久田上原城 |
| 4 東山城 | 5 比丘尼ヶ城 | 6 城峪城 |

第1図 城郭の位置 (1/40,000)

比丘尼ヶ城と久田上原城の中間に聳える標高447mの丘陵上には東山城があり、これを介せば情報の伝達は可能である。さらに、河内城の1.6km上流にある杉の天狗山城は上流の女原から下流の河内まで一望できる位置にあり、上流側を監視する見張り場としての役割を担っていた可能性がある。このように久田地区の諸城の間には、狼煙などの手段で上流と下流の情報を伝達する城郭間のネットワークが整備されていたものと思われる。

城郭の立地

ここでそれぞれの城の立地を今少し詳しく見てみたい。河内城は、吉井川と河内川の合流点に向かって張り出した標高271m、平地との比高60mを測る丘陵上に立地し、上流の杉から下流の夏栗まで半径20kmの範囲を視野におさめる好位置にある。河内川が山裾を洗う南側は急峻な傾斜をなすが、北側は南北に連なる山塊の裾部と接して標高240mあたりからなだらかな斜面となっており、防御の重点はこの方向におかれている。河内城から1km下流にある久田上原城は、標高260mの丘陵上に位置しており、平地との比高は32mある。吉井川から南東に離れたやや奥まった位置にあるため南北を丘陵に遮られて視界は狭く、河内城を直接見通すことはできない。また、南北に深い谷が入り込んで急峻な傾斜をなすものの、西へ延びる尾根筋の傾斜がやや緩やかで、この方向に防御

の主力があったものと判断される。城峪城は、大きく東へ蛇行した吉井川北岸の丘陵上に築かれている。標高は242mと4城のなかで最も低い。また、吉井川に面した東から南側は急斜面が続くが、北側は浅い谷を隔てて丘陵と接しており、その比高は10mを測るにすぎない。このため、城の防御は北斜面を中心に敷かれており、谷をなす南北の尾根の間にはこうした施設は認められない。また、眺望は吉井川に沿って開けているものの、上流にあたる北西側は比丘尼ヶ城の立地する丘陵によって遮られている。これに対し比丘尼ヶ城は、標高287mと最も高い位置にあり、平地との比高も100mを測る。このため久田下原全域をほぼ見渡せるとともに、城峪城との間を東西に走る旧街道を足下に見下ろす位置にある。標高250～270mの尾根が北西にのびるものの周囲は急峻な斜面で囲まれており、際立った弱点は見当たらない。しかし、曲輪の配置などからして街道を強く意識している様子がうかがえる。以上のような立地から、久田地区の4城は、吉井川に向かって突き出た丘陵上に立地する河内城・城峪城と、その東岸に連なる山塊の一画に築かれた久田上原城・比丘尼ヶ城に分けられる。前者はその立地から眺望に優れている反面、三方が平地に面するという欠点がある。河内城は南麓を流れる河内川を、城峪城は東側に接する吉井川を自然の障壁として取り込んでいるものの、こうした立地を補うために多大な労力を必要としたことは、広範に配置された防御施設を見れば容易に推察される。一方、後者は二方を急峻な傾斜をなす狭い谷によって隔てられ、防御は専ら平地側に向けられている。隣り合う山塊に遮られて眺望は良くないが、比丘尼ヶ城は高所に立地することでその欠点を克服している。両者のこうした違いは、後述する構造の変遷から築造時期の差として理解し得る。（亀山）

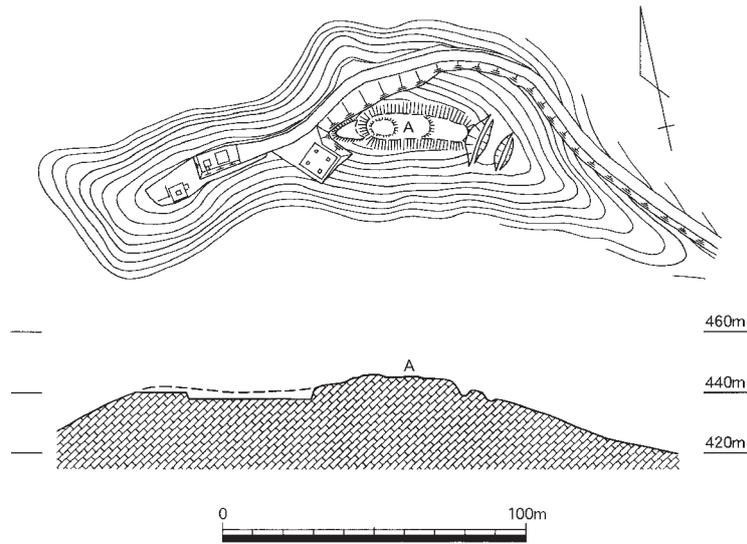
2 東山城^{ひがしやま}と天狗山城^{てんぐやま}

東山城（第1・2図）

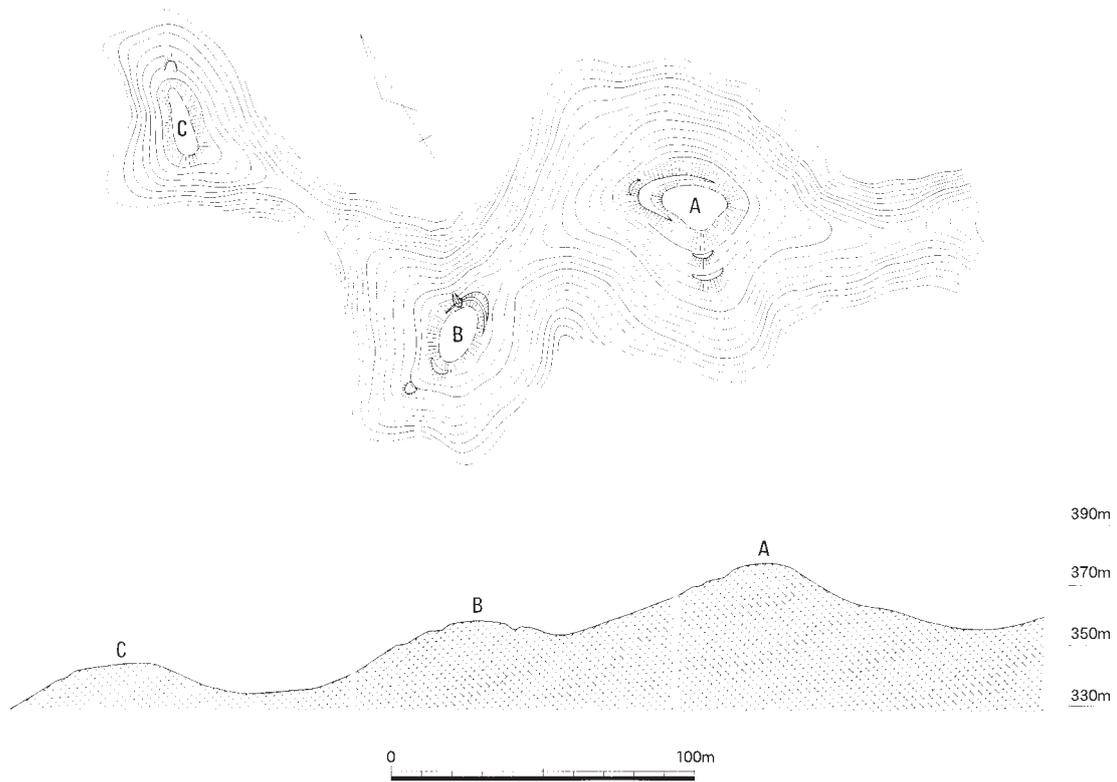
東山城は標高447m、平野部との比高237mの山頂に所在する。比丘尼ヶ城と久田上原城のほぼ中間に位置し、両城のみならず平野部の諸遺跡を見通すことができる。城郭は東西に細長い山頂尾根筋を利用して構築しており、最高所に中心となる曲輪Aを設け、東方に伸びる尾根筋を2条の堀切で分断している。現在、西に伸びる尾根筋には電波塔があるが、ここにも曲輪が存在していた可能性が高く、本来の城域は東西120m・南北20mほどと想定される。曲輪Aは長さ約31mで、削平は概して甘く自然地形を多く残しているように見受けられる。西よりに直径約8mの高まりが認められるが、久田上原城・比丘尼ヶ城で確認された土壇状遺構ほど明瞭ではない。2条の堀切の規模は、西側が幅7m・長さ18m・深さ4mで断面V字形、東側が幅5m・長さ13m・深さ2mで断面U字形を呈する。堀切の間隔は底面中心間で約10mを測り、発掘調査が実施された4城に近い数値を示す。遺物は採集できず、城の年代は確定できないが、上述の城郭構造や位置関係から室町時代前半期のものと考えられる。

天狗山城（第1・3図）

天狗山城は標高378m、平野部との比高158mの起伏に富んだ山塊を利用して構築されている。久田地区の北端に位置し、吉井川上流域への眺望に優れる。3か所の丘陵頂部に曲輪A～Cが配置され、曲輪間は90～110mを測る。現状では尾根筋を遮断する施設は認められないが、頂部と鞍部との落差が大きく、必要としなかった可能性もある。個々の曲輪は長さ20m・幅5～10mと小規模で、削平は甘く自然地形を多く残している。曲輪からやや下がった斜面には、三日月状の小規模な曲輪を分散配置し、曲輪Bでは曲輪Aへと続く北東側で浅い堀切と竪堀を確認した。遺物は採集できず、城の年代は確定できないが、上述の城郭構造や位置関係から室町時代前半期のものと考えられる。（佐藤）



第2図 東山城 (1/2, 500)



第3図 天狗山城 (1/2, 500)

3 城郭の構造

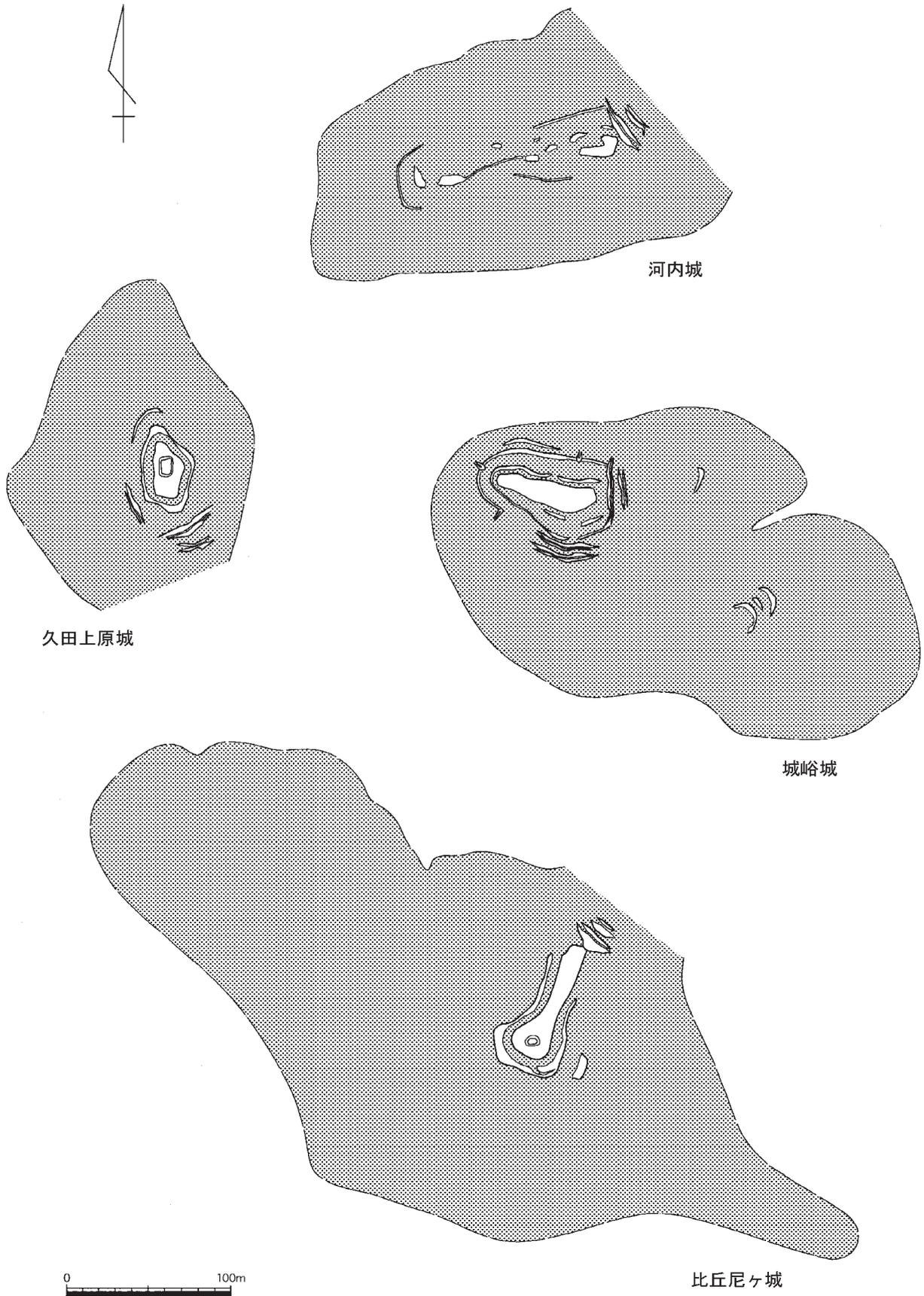
遺構の配置

河内城は、幅140mほどある丘陵を長さ200mあたりで断ち切り、尾根筋に曲輪を、斜面に切岸・土塁を配する。その範囲は東西157m、南北42mに及び、遺構間の比高は19mと4城の中で最も大きい。久田上原城も2条の堀切で分断した東西150m、南北150mの丘陵上に中心となる曲輪を配し、東に派

生する尾根との間に堀切を、西へ下る尾根筋に切岸・土塁を設けている。遺構の範囲は東西73m、南北92mで、遺構間の比高は10mほどある。城峪城は東西310m、南北180mの独立丘陵上に築かれている。曲輪は二筋に分れた尾根上に配されるが、特に頂部の曲輪は東と南に2条の堀切を設けて他と切り離している。また、切岸・土塁は北斜面を中心に3段にわたり設けている。東西200m、南北108mにも及ぶ遺構の広がり4城中で最大であり、それらの比高も13mと河内城に次ぐ落差をもつ。東西500m、南北210mの丘陵上にある比丘尼ヶ城は、丘陵頂に中心となる曲輪とそれを取り巻く帯曲輪を配したうえ東へ下る尾根筋に曲輪を設けており、その範囲は東西60m、南北106mを測る。これらの比高は10mを測るにすぎず、その山容に比して狭い範囲に遺構がまとまっている。さて、これらの遺構の配置を見ると、河内城や城峪城では遺構が分散的な配置であるのに対し、久田上原城や比丘尼ヶ城では丘陵頂に遺構が集中している状況が見て取れる。前者では丘陵頂部に設けられた中心となる曲輪と丘陵先端に配された曲輪とが離れた位置にあり、斜面に設けられた切岸・土塁ともかなりの落差があって相互の連絡がとりにくい状況にある。一方後者は、見通しのよい丘陵頂に曲輪を集約して連携を強化し、それぞれの曲輪が担っていた様々な機能を一体化させているように見受けられる。こうした遺構配置の相違は前述した立地の変化と深く関わっており、前者から後者への推移が想定される。

曲輪

河内城は、丘陵上の各所に小規模な曲輪を配置する特徴をもつ。特に丘陵の頂部には3つの曲輪が24×13mの範囲で逆L字形に配されるが、これらは相互に25cmほどの段差をもって接しており、同一面に揃える努力はなされていない。また、丘陵の先端にも斜面を切り崩して造成された曲輪が2カ所あるが、その規模は頂部の3つの曲輪と大差なく、中心となる曲輪がいまだ明瞭でない段階にある。城峪城は、2条の堀切で丘陵頂部を区画し中心となる曲輪を設けているが、中央に岩盤が削り残されるとともに南側は緩斜面となり、造成の及んだ範囲は極めて狭いものと推定される。また、二筋に分れた丘陵の先端にもそれぞれ小規模な曲輪が1～3段にわたって造成されている。久田上原城は、丘陵頂を平坦に造成して35×19mの中心となる曲輪を設けるとともに、これより4mほど低い位置に帯曲輪を巡らしている。比丘尼ヶ城も、南北に長い尾根上を平坦に造成して4城中最大となる76×24mの曲輪を設けている。また、久田上原城と同様に、2条の堀切で区切られた北を除く三方に帯曲輪を設けるとともに、東へ下る尾根の途中に小規模な曲輪を配置している。以上述べてきたような曲輪の特徴からすると、曲輪の規模が小さく中心となる曲輪も明瞭でない河内城から、堀切によって中心となる曲輪を独立させているものの造成範囲の狭い城峪城、さらに丘陵頂全体が平坦に造成され中心となる曲輪の規模拡大が図られる久田上原城や比丘尼ヶ城への変遷が想定される(第4図)。ところで、中心となる曲輪を調査した3城ではいずれも建物の存在が確認されていない。しかし、河内城では丘陵先端の南側に造成された曲輪10において多数の柱穴が検出され、城峪城においても曲輪1から南に下る緩斜面に造成された曲輪4・5で桁行の長い梁間1間の建物がそれぞれ確認されている。両者は尾根上からやや下った南斜面という点で一致するが、これはいずれもが北側を防御正面としていることに関係すると思われる。つまり防御正面とは反対の、丘陵頂からやや下った場所に建物を設けているとあってよい。敵からの直接的な攻撃を避けるとともに、中心となる曲輪と往来しやすい場所としてこうした位置が選ばれたものと考えられる。なお、久田上原城や比丘尼ヶ城では中心となる曲輪の中央で土壇状遺構が検出されている²⁾。その規模は、久田上原城で12.5×8.3m、比丘尼ヶ城で8.6×6.4mを測る。発掘調査が実施された久田上原城では、その上面に建物のような構造物が存在したこ



第4図 諸城の縄張り (1/3, 500)

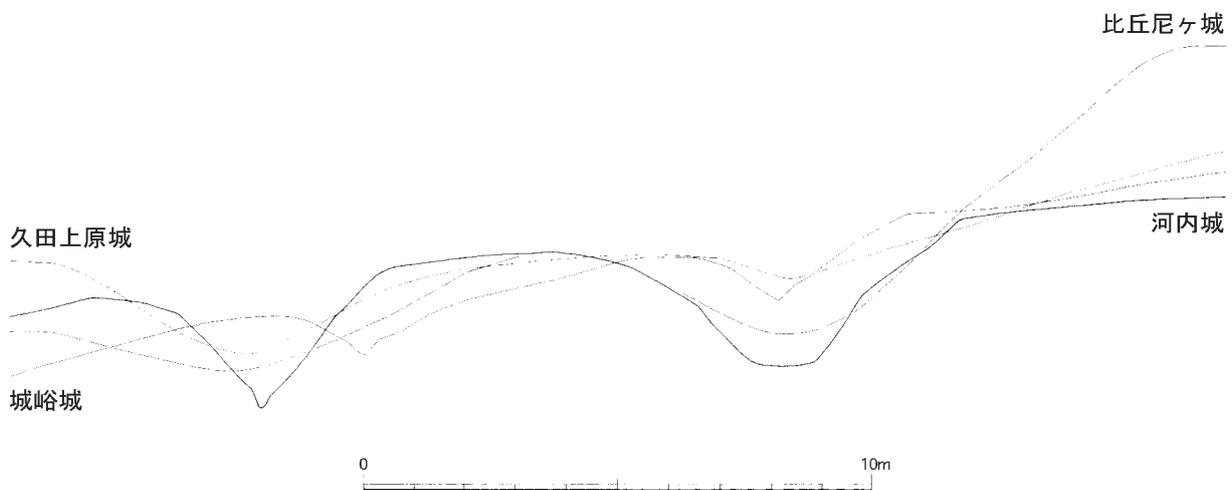
とをうかがわせる痕跡は確認されなかった。調査前にはここに小祠が祭られており、祭祀との関連を指摘する向きもあるが、その位置や構造からして簡易な指揮所といった機能を想定したい。

切岸と土塁

河内城では、堀切の掘削された東側を除く三方に、丘陵頂から9mほど下った斜面を切り崩し、全長49mにわたって切岸を設けている。とくに北側では、その土砂を斜面に盛り上げて土塁を構築している。その上面は堀切2の底面と連続し、通路として機能したものと思われる。切岸との間はあたかも横堀のような外観を呈し、つぶて石が多数出土することからすれば壕として利用されていたことも考えられる。同様の施設は城峪城や久田上原城でも検出されている。ことに城峪城では、北斜面を中心に5～3mの間隔をもって3段にわたって設けられ、その総延長は181mにも及ぶ。しかも、豎堀を組み合わせることで防御効果をより高めており、4城の中で最も嚴重な備えとなっている。久田上原城でも西へ下る尾根筋を遮断する目的で帯曲輪から5.5mほど下方に設けられているが、その規模は長さ30mとやや貧弱である。これに対し比丘尼ヶ城では、切岸・土塁はこれまでのところ確認されておらず、その險阻な立地に頼って斜面への防備が施されていないように見受けられる。このように、河内城や城峪城では斜面に切岸をめぐるし土塁を構築することに防御の主力が置かれているのに対し、久田上原城や比丘尼ヶ城では曲輪の整備に意が注がれているように見受けられる。

堀切と豎堀

久田地区の中世山城は、2条の堀をもって尾根を断ち切るという共通性をもっている。しかも、尾根筋における堀底間の距離は、河内城で9.8m、久田上原城で10.4m、比丘尼ヶ城で10.2mと10m前後で一致しており、その掘削にあたって一定の規格が存在したことをうかがわせる(第5図)。もっとも、城峪城では6.7～7.5mと他より狭くなっているが、この場合は中心となる曲輪を独立させる目的で堀切が設けられており、なおかつ堀切の外にも曲輪が存在することとも関係するのであろう。このことは堀の規模にも現れており、城を尾根から切り離す河内城の堀は上幅6.4～4.5m、深さ2.9～2.7mを測るのに対し、城峪城の堀は上幅5.1～3.9m、深さ90～50cmと小規模になっている。堀の断面はいずれもV字形をなす薬研堀であるが、河内城では薬研堀と箱堀が対をなして用いられている。これは、前述したように箱堀である堀切2の底面が通路として利用されたことによる。ところで、河内



第5図 堀切断面比較図(1/1,500)

城では堀の掘削にあたって排出された土が斜面に放置され、城峪城においても堀の排土が斜面に設けられた築城以前の炭窯や焼成土壙を覆っている状況が観察されている。しかし、久田上原城では堀の排土を城内側の肩口に積み上げ、土塁を構築して堀の深さを増す工夫がなされているようである。

典型的な豎堀は城峪城においてのみ検出されており⁴⁾、斜面中程に設けられた切岸・土塁の上面から掘りこまれている。西から南の斜面では、切岸・土塁3と堀切4の間を区切るように2条の豎堀が掘削され、北斜面では標高229mまで下る堀切2と切岸・土塁3との間に1条の豎堀が掘削されている。一般に、豎堀は戦国期に盛行するとされているが、最近では南北朝期にまで溯る事例もわずかながら知られてきており、城峪城の豎堀もその一例と考えられる。しかし、豎堀が防御施設として必ずしも定着しなかったことは他の3城に採用されていないことから察せられ、この場合も低丘陵という不利な立地を補うための工夫の一つであったと考えられる。(亀山)

4 出土遺物と城郭の年代

出土遺物

出土遺物のうち、城の時期を示す土器についてまず検討する。輸入陶磁器⁵⁾については、河内城で白磁皿Ⅸ類、久田上原城で白磁皿Ⅸ類・龍泉窯系青磁碗Ⅳ類、城峪城跡で白磁碗Ⅸ類・龍泉窯系青磁碗Ⅳ類が出土しており、13世紀後半～14世紀前半の年代を示す。備前焼⁶⁾については、河内城構築に先立つ集石墓でⅢ期中葉の壺、城峪城でⅢ期後半の甕とⅢ期後半～Ⅳ期初頭の播鉢が出土しており、14世紀中葉～後葉の年代を示す。これらは長期の使用が想定され、直ちに城郭の年代を示すものではないが、生活雑器である備前焼の製作年代を重視し、城塞群の築城と使用は南北朝期後半の数十年間と想定する。河内城出土の鉄鍋が14世紀代の特徴を示す⁷⁾こともその傍証になろう。また、15世紀以降の遺物は認められず、この段階には放棄されたと考えられる。土師器については、当該地の編年が未確立のため推測の域を出ないが、いくつかの特徴を指摘できる。形態的には杯と小皿から構成され、碗は認められない。口径平均は杯13.5cm、小皿8.5cmで、小皿には底部ヘラキリと糸切りがある。これらの特徴は山陰地域の様相に類似⁸⁾し、関係の深さがうかがえる。また、城峪城では土壙からまとまって出土しており、一味神水など祭祀的な行為に用いられた可能性もある。次に、出土土器の構成をみると、量的には少ないものの貯蔵具・煮炊具・供膳具が揃っており、ある程度的人数が一定期間城内で生活していた状況が想定される。さらに、砥石や石硯、温石、土錘⁹⁾などの出土もこれを裏付けている。また、武器として薙刀の石突や鉄鏃、多量のつぶて石が出土している。中世前半の武装の研究は、主に文献や絵巻物から進められている¹⁰⁾が、これを考古学的に検証しうる良好な資料といえる。(佐藤)

文献史料

今回調査を実施した4城のうち、元禄4年(1691年)に編纂された『作陽誌』に記述の見えるのは比丘尼ヶ城のみである。それによると「下原堡 同村にあり。或いは比丘尼城と名づく。一中略一山南二丁余も亦故壘あり。共に何人の住むやを知らず」とあり、その来歴は既に失われていたことが知られる。また、ここでいう「故壘」はその位置関係から城峪城を指すものと見られ、城塞としての伝承はあったことが知られる。しかし、河内城と久田上原城については記載がなく、ことに河内城では城に関わる地名すら残っていない¹¹⁾。こうした状況がどの程度歴史的事実を反映しているか問題はあるが、城跡としての伝えがいち早く失われた河内城と、江戸時代までその名が伝えられていた比丘尼ヶ城との間に時間差を読み取ることは、調査結果からしても不可能ではないように思われる。(亀山)

5 築城の歴史的背景

4で述べた通り、久田地区の諸城は14世紀後半の短期間のうちに築造されたと考えられる。ここでは14～15世紀における美作の状況を概観し、これらが築造された背景を検討する。

美作が争乱の舞台となったのは、観応の擾乱以後のことである。1352年、足利直冬を奉じて幕府に叛した伯耆守護山名時氏は美作に進出し、美作守護佐々木直貞もこれに従った。これに対し播磨守護赤松則祐は兄貞範を美作に派して山名氏を追い、その功によって美作守護が与えられた。しかし、山名時氏は1361年に再び美作に進出して支配下に置き、その翌年には幕府帰順によって美作の山名氏領有が正式に認められるのである。その後、明徳の乱（1391年）により山名氏が衰退すると美作は赤松氏の領するところとなるが、嘉吉の乱（1441年）によって赤松氏が滅亡すると、美作はその討伐に際して功があった山名氏に与えられる。そして応仁・文明の乱後、再び勢力を伸ばした赤松氏が美作に進出し、1488年に山名氏を駆逐するまで赤松氏と山名氏の抗争が繰り返されるのである。

こうした山名氏と赤松氏の抗争の間であって、陰陽を結ぶルート上にあるこの地域が、その重要度を増していったことは容易に想像できる¹²⁾。実際、このルートは伯耆の守護所が置かれた田内城（鳥取県倉吉市）と美作守護所であった院庄城（津山市）を結ぶ最短距離にあたることから、久田地区の諸城は陰陽を結ぶ交通路を押さえる目的で公的権力により築造された可能性も考えられる¹³⁾。その場合の公的権力として想定し得るのは、観応の擾乱（1352～62年）あるいは明徳の乱後（1392～1441年）の赤松氏であろう。ただし、仮にそうであったとしてもこうした城塞群が在地勢力とは無関係に築かれたとは思われない。文明13年の「山名政之注進状」に見える久田庄は旧久田村の範囲と考えられ、その中心は久田下原にあったと思われる。ここには久田堀ノ内遺跡のような居館が存在し、城塞群の存続期間とも一致する。彼らがどのような勢力であったかは判然としないものの¹⁴⁾、久田庄防衛の拠点として、あるいは美作進攻を阻止する砦として、城塞群の築造に深く関わっていたことは間違いないものと思われる。（亀山）

6 日本城郭史における位置付けとその評価

以上、詳述したように久田城塞群の特徴として、①城塞群の連携、②小規模な城域、③丘陵頂部の削平不明瞭、④小平坦面（曲輪）の分散配置、⑤堀切・切岸・細長い平坦面（本書の切岸・土塁や帯曲輪、犬走）が防御主体、という点が挙げられる。その内容は、従来から指摘されていた南北朝期山城の特徴¹⁵⁾をより具体的に示すものであるが、この時期の山城の代名詞ともいえる天険の利用や、戦国期と考えられていた塹堀の出現時期については、再検討の余地のあることが明らかとなった。

日本城郭史における中世山城の出現と発展過程については、千田嘉弘による総括的な研究がある¹⁶⁾。これによると、中世山城の出現は鎌倉時代中葉に求められ、防御機能の強化を軸とする発展過程が指摘されている。このうち中世前半期について模式的にまとめると、Ⅰ期（13世紀後半～14世紀前半）：城と館の機能が未分化。切岸が防御主体。Ⅱ期（14世紀後半）：山城の確立。切岸と堀切が防御主体。曲輪不明瞭。Ⅲ期（15世紀前半）：機能分化した曲輪の成立と防御施設との有機的結合。—という段階が想定できる。こうした流れの中で、久田城塞群は上記の特徴からⅡ期からⅢ期への過渡的な様相を示している¹⁷⁾。今回の調査成果は、南北朝期山城の特質をより明確にしたという点で非常に大きな意義をもつものであり、中世城郭研究における基準資料になりうるものと評価できよう。（佐藤）

久田地区の中世山城一覧表

	標高 (m)	比高 (m)	遺構範囲 (m)	遺構間 比高 (m)	主 郭 (m)	切岸 (m)	堀 切		堅堀	出 土 遺 物					
							断面形	幅		甌・杯	皿	播鉢	鍋	壺・甕	そ の 他
河内城	271	60	157× 42	19	24×13	138	薬研 箱	9.8		青磁	土師 白磁	備前	土師	備前	釘・鏃・刀子・石突・砥石 つぶて石・鉄鍋
久田上原城	260	32	92× 73	10	35×19	30	薬研	10.4		青磁	土師 白磁			備前	釘・礫石
城峪城	242	10	200×108	13	68×16	181	薬研	7.5 6.7	4	土師 青・白磁	土師 白磁	備前	土師	備前 勝間田	釘・刀子・石突・銭・砥石 硯・温石・礫石・土錘
比丘尼ヶ城	287	100	106× 60	10	76×24		薬研	10.2							つぶて石

註

- 1) 城峪城の東2.5kmにある小田草城は標高390m、比高150m、河内城の北3kmにある西屋城は標高515m、比高250mの丘陵上にあり、比丘尼ヶ城の立地はこうした戦国期城郭の先駆けとして評価できる。
- 2) 土壇状遺構は奥津川西の余瀬ヶ城（大河原堡）でも確認されている。なお、河内城や城峪城でも中心となる曲輪に地山を削り残した高まりが見られるが、久田上原城や比丘尼ヶ城のように整形されておらず、同種の遺構かどうか判然としない。
宇垣匡雅「余瀬ヶ城」『奥津町遺跡分布調査』岡山県古代吉備文化財センター 1994年
- 3) 河内城や城峪城では斜面に切岸を設けることに防御の主眼がおかれており、その前面に築かれた土塁との間が結果として横堀状を呈したとしても、斜面に溝をめぐらして障壁とする横堀とは本質的に異なるものと考えられる。また、河内城の犬走3・4も急斜面に切岸を設けることで生じた狭長な平坦地であって、土塁を欠くものの、他の切岸・土塁と同様の性格をもつ施設と理解される。
- 4) 河内城で検出された堅堀は、尾根筋から斜面にかけて掘削されており、その深さも浅い。東で曲輪6と接しており、区画施設としての性格が強いものと思われる。
- 5) 山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 1995年
『太宰府市の文化財第49集 太宰府条坊跡XV』一陶磁器分類編一 太宰府市教育委員会 2000年
- 6) 問壁忠彦・問壁菫子「備前焼研究ノート1～4」『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18 1966・1968・1984年
『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会 2000年
- 7) 五十川伸矢「古代・中世の鋳鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告』46 1992年
- 8) 八峠 興「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究XIII』 1998年
- 9) 土錘が出土する城館は小規模なものが多く、城番の兵士が平時に使用したと考えられている。
中井 均「中世城館遺跡から出土する土錘について」『久保和士君追悼考古論文集』 2001年
- 10) 『城と合戦』朝日百科日本の歴史別冊 歴史を読みなおす15 朝日新聞社 1993年
千田嘉博「中世の戦いと弥生の戦い」『織豊系城郭の形成』東京大学出版会 2000年
- 11) 城峪城には城峪・城谷、比丘尼ヶ城には城ヶ峪、久田上原城には城ヶ峪・四郎ヶ峪といった小字名がある。
- 12) このルートは嶮岨かつ隘路で、大軍の移動には不向きであったと考えられる。伯耆守護山名政之に叛した山名元之が奥津へ逃げ込んだのも、赤松氏の庇護を頼むというほかに、隘路であるがゆえに追討を逃れやすいという事情があったからであろう。
- 13) 中井均氏教示。ただし、同様の構造をもつ城塞は陰陽を結ぶ他の街道筋に見あらず、美作全域を掌握するような公的権力によって築城されたとするには疑問も残る。
- 14) 永禄～元龜年間、尼子方として活躍した国人原氏が知られており、比丘尼ヶ城をその居城とする説も見られる。しかし、原氏については伯耆の日野衆とする説もあって一定しない。
「米井家文書」『岡山県古文書集3』1956年
長谷川博史「尼子氏の美作国支配と国内領主層の動向」『岡山県地域の戦国時代史研究』広島大学文学部 1995年
- 15) 角田 誠「近畿地方における南北朝期の山城」『中世城郭研究論集』新人物往来社 1990年
- 16) 千田嘉博「室町期城郭の系譜」『織豊系城郭の形成』東京大学出版会 2000年
- 17) I期の例として大分県帆足城、II期の例として高知県木塚城、III期の例として福島県猪久保城などがある。
大分県教育委員会『瀬戸墳墓群・瀬戸遺跡・帆足城跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告17 2000年
徳平 晶「木塚城跡発掘調査成果報告」『中世城郭研究』第16号 中世城郭研究会 2002年
福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター『猪久保城』福島県文化財調査報告書第308集 1994年

付載 自然科学による鑑定・分析

1 峪畑遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査

(株)九州テクノリサーチ・TACセンター
大澤正己

概要

古代に属する峪畑遺跡（苫田郡奥津町所在）の製鉄関連遺物（炉壁、炉底塊、炉外流出滓、鉄塊系遺物）を調査して、次の点が明らかになった。

製鉄は、砂鉄原料の箱型製鉄炉の操業である。炉壁内面に半還元砂鉄の付着があり、鉄滓の鉱物組成はウルボスピネル（Ulvöspinel： $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ）を晶出。化学組成は、砂鉄特有成分の二酸化チタン（ TiO_2 ）を7.4～8.9%、バナジウム（V）0.16～0.18%を含み、更には酸化マンガン（ MnO ）0.99～1.02%と高値であった。一方、鉄塊系遺物は、還元初期のフェライト未凝集の極軟鋼（C：0.01%以下）と、高炭素含有の過共析鋼（C：0.77%以上）の2点を確認。後者の鉄中の非金属介在物（鉄鋼中に介在する固形体の非金属性不純物、つまり鉄やマンガン、珪素および燐などの酸化物、硫化物、珪酸塩などを総称したもの）はルチル（Rutile： TiO_2 ）を内蔵し、炉内温度はかなり高温操業が想定された。

1 調査方法

1-1 供試材

Table. 1に示す。5点の調査試料である。

1-2 調査項目

①肉眼観察、②マクロ組織、③顕微鏡組織、④ビッカース断面硬度、⑤EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査、⑥化学組成分析、⑦耐火度。

2 調査結果

(1) TDS-1（掲載番号C1）：炉壁（Photo. 1①～⑤、Table. 1～3参照）

内面全体に砂鉄が顆粒状に焼結した炉壁片である。胎土は、中小の砂粒と短かく切ったスサの混和がある。炉壁内面に付着した砂鉄粒子は、0.1～0.3mm径の磁鉄鉱（Magnetite： $\text{Fe}_2\text{O}_3\cdot\text{FeO}$ ）が大部分で、チタン鉄鉱粒子はあまり目に付かない。半還元砂鉄であり被熱により各粒子の周縁部から微細なウルボスピネルやファイヤライト（Fayalite： $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）結晶が分離し始めている。胎土側は、粘土が溶融ガラス化し、これに微細なマグネタイト（ Fe_3O_4 ）結晶が晶出する。

胎土の強熱減量（Ig Loss）は、1.70%と結晶構造水が飛散した熱経歴での分析となる。鉄分（ Fe_2O_3 ）は4.22%、酸化アルミニウム（ Al_2O_3 ）19.64%などは軟化性に問題を起す数値ではない。自媒剤となる塩基性成分（ $\text{Ca}+\text{MgO}$ ）も1.48%と適度に含有する。粘土中に砂鉄の混入があるのか二酸化チタン（ TiO_2 ）が1.0%と若干高めであった。荷重なしに自重だけで軟化し崩れる耐火度は1,280℃であった。炉壁粘土の性状としては、極く一般的な在地賦存物であろう。

(2) TDS-2（掲載番号M5）：炉底塊（Photo. 1⑥、Table. 1～3参照）

平面が不整形形状で、表面は流動状肌に2～3 cm程度の木炭痕を密につけ、裏面は5～20mmの小礫の嚙込みのある箱型炉の炉底塊である。鉱物組成は、淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネルと淡灰色長柱状結晶のファイヤライトを基地の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。砂鉄製錬滓の晶癖である。ウルボスピネルのビッカース断面硬度値は、667Hvを呈した。(注1)

化学組成は鉄分 (Total Fe) 35.71%と低めでガラス質分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は41.99%と多く、このうちに塩基性成分は6.0%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO_2) は7.43%、バナジウム (V) 0.16%と高めで、酸化マンガン (MnO) も0.99%とこれも多い。砂鉄製錬滓の成分系である。原料砂鉄は酸性砂鉄と塩基性砂鉄の境界レベルの組成であろう。

(3) TDS-3 (掲載番号M4) : 炉外流出滓 (Photo.1⑦、Table.1～3参照)

表面は流動肌の小皺をよせた炉外流出滓の破片である。裏面は炉壁粉が多量に固着する。鉱物組成はウルボスピネルとファイヤライトで構成される。炉外流出で急冷されて結晶は小型となる。砂鉄製錬滓の晶癖である。ウルボスピネルの硬度値は695Hvが得られた。

化学組成は、前述TDS-2に準じたもので、鉄分 (Total Fe) は37.82%と少なく、脈石成分は高めの二酸化チタン (TiO_2) 8.69%、バナジウム (V) 0.18%、酸化マンガン (MnO) 1.02%などである。

(4) TDS-4 (掲載番号M2) : 鉄塊系遺物 (Photo.2①～③、Photo.3、Table.1・3参照)

表面の凹凸が著しく、木炭の隙間で生成した60 gの鉄塊である。黄褐色の酸化土砂に覆われ、金属鉄の遺存で亀裂を多く走らせる。Photo.3のマクロ組織をみると、金属鉄は未凝集で分散されており還元初期のものである。顕微鏡組織は、フェライト (Ferrite : α 鉄もしくは純鉄) とフェライト基地に少量のパーライト (フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織) の析出する0.1%以下の極軟鋼組織である。金属鉄の周囲には、砂鉄製錬滓晶癖のウルボスピネルとファイヤライトが晶出する。硬度値は、フェライト部分で88Hv、フェライト・パーライト部分は123Hvであった。組織に見合った値である。

(5) TDS-5 (掲載番号M3) : 鉄塊系遺物 (Photo.2④～⑧、Photo.3、Photo.4、Table.1・3参照)

平面が不整形形状で小型 (21.5 g) の鉄塊系遺物である。酸化土砂をつけ、亀裂と共に一部表面剝離を起している。マクロ組織は、外周部は錆化するが中核部に高炭素系の金属鉄を遺存させる。金属組織は、顕微鏡組織に示すように全面パーライト基地に白色針状セメンタイト (Cementite : Fe_3C) を析出した過共析鋼 (C : 0.77%以上) である。パーライト基地の硬度値は300Hv、針状セメンタイトは773Hvを呈す。

また、顕微鏡組織の⑤は、表皮スラグで砂鉄製錬滓としてのウルボスピネルとファイヤライトの組合せである。Photo.4に10の番号をつけた結晶は62.2% FeO —32.9% TiO_2 でウルボスピネル ($2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$) が、12の番号は、63.5% FeO —31.3% SiO_2 組成でファイヤライト ($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) が同定された。11の番号は基地のガラス分である。49.7% SiO_2 —11.8% Al_2O_3 —6.7% CaO —2.0% K_2O —1.1% Na_2O 組成で珪酸塩である。

また、Photo.2の⑤は鉄中の非金属介在物の顕微鏡組織を示す。この介在物組成の分析がPhoto.4である。黒色球状ガラス中に淡茶褐色長柱状結晶に8の番号をつけた。組成は81.4% TiO_2 でルチル (Rutile : TiO_2) が同定される。ルチルは FeO — TiO_2 二元状態図でみると高温生成物である。(注2) 製錬温度の高温域での派生物と推定される。また、黒色ガラス部分の9の番号の個所は、68.0% SiO_2 —12.3% Al_2O_3 —7.5% CaO —1.6% K_2O —1.1% Na_2O 組成の珪酸塩が同定された。これには、3.1% TiO_2 が固溶される。砂鉄を原料とした高温還元の鉄塊の確認がとれた。

Table.1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		磁着度	メタル度	調査項目								備考	
					大きさ (mm)	重量 (g)			マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー		
TDS-1	峪畑遺跡	2区包含層	炉壁	古代	85×61×32	117.0	—	なし							○	○		掲載番号 C 1
TDS-2	峪畑遺跡	2区包含層	炉底塊	古代	117×93×67	794.9	4	なし		○	○				○			掲載番号 M 5
TDS-3	峪畑遺跡	2区包含層	炉外流出滓	古代	58×50×30	116.6	3	なし		○	○				○			掲載番号 M 4
TDS-4	峪畑遺跡	2区包含層	鉄塊系遺物	古代	45×41×33	60.0	7	L(●)	○	○	○		○					掲載番号 M 2
TDS-5	峪畑遺跡	2区包含層	鉄塊系遺物	古代	36×32×16	21.6	7	L(●)	○	○	○							掲載番号 M 3

Table.2 供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	耐火度 (°C)	造滓成分	造滓成分	
																									Total Fe	Total Fe
TDS-1	峪畑遺跡	2区包含層	炉壁	古代	5.03	0.12	2.52	4.22	65.04	19.64	0.37	1.11	2.28	0.56	0.11	1.00	0.08	0.01	0.33	#1.70	0.02	<0.01	1,280	89.00	17.694	0.199
TDS-2	峪畑遺跡	2区包含層	炉底塊	古代	35.71	0.08	41.86	4.42	28.18	6.94	3.38	1.72	1.30	0.47	0.99	7.43	0.04	0.04	0.40	0.04	0.16	<0.01		41.99	1.176	0.208
TDS-3	峪畑遺跡	2区包含層	炉外流出滓	古代	37.82	0.09	44.38	4.62	27.78	7.04	2.06	1.77	1.13	0.42	1.02	8.69	0.06	0.02	0.23	0.05	0.18	<0.01		40.20	1.063	0.230

Table.3 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	調査項目								所見
						Total Fe	Fe ₂ O ₃	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO	ガラス質成分	Cu	
TDS-1	峪畑遺跡	2区包含層	炉壁	古代	炉壁内面:半還元砂鉄M粒了付着	5.03	4.22	1.48	1.00	0.02	0.11	89.00	<0.01	砂鉄製鋸戸の炉壁
TDS-2	峪畑遺跡	2区包含層	炉底塊	古代	U+F 結晶成長して大	35.71	4.42	6.00	7.43	0.16	0.99	41.99	<0.01	砂鉄製鋸滓
TDS-3	峪畑遺跡	2区包含層	炉外流出滓	古代	U+F 結晶急冷で未成長、小	37.82	4.62	3.83	8.69	0.18	1.02	40.20	<0.01	砂鉄製鋸滓
TDS-4	峪畑遺跡	2区包含層	鉄塊系遺物	古代	滓:U+F 金属鉄:フェライト フェライト+パーライト									砂鉄系鉄塊、ただし鉄は未凝集、フェライト
TDS-5	峪畑遺跡	2区包含層	鉄塊系遺物	古代	滓:U+F パーライト基地に針状セメントイト、介在物ルチル(TiO ₂)									砂鉄系鉄塊、過共析鋼、高温生成物

U:Ulvöspinel(2FeO・TiO₂) F:Fayalite(2FeO・SiO₂) M:Magnetite(Fe₂O₃・FeO)

本文の(注)をこちらに転載。

- 注) ① 日刊工業新聞社「焼結鋸組織写真および識別法」1968. ヴァスタイトは450~500Hv、ファイヤライトは600~700Hv、マグネタイトは500~600Hvの範囲が提示されている。また、ウルボスピネルは硬度値範囲の明記がないが、EPMAの組成調査と硬度値を対応させると600Hv以上はウルボスピネルと同一とされる。
- ② J, B, Mac chesney and A, Murau: American Mineralogist, 46(1961), 572 イルミナイト(Ilmenite)、シュードブルーカイト(Pseudobrookite)、ルチル(Rutile)の品出はFeO-TiO₂二元平衡状態図から高温作業が推定される。

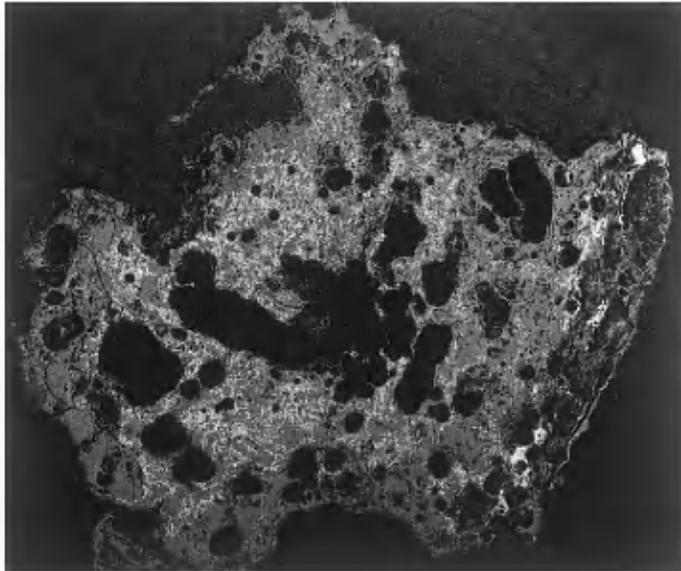


Photo. 3 上段：鉄塊系遺物（TDS-4）のマクロ組織（×5）
下段：鉄塊系遺物（TDS-5）のマクロ組織（×10）

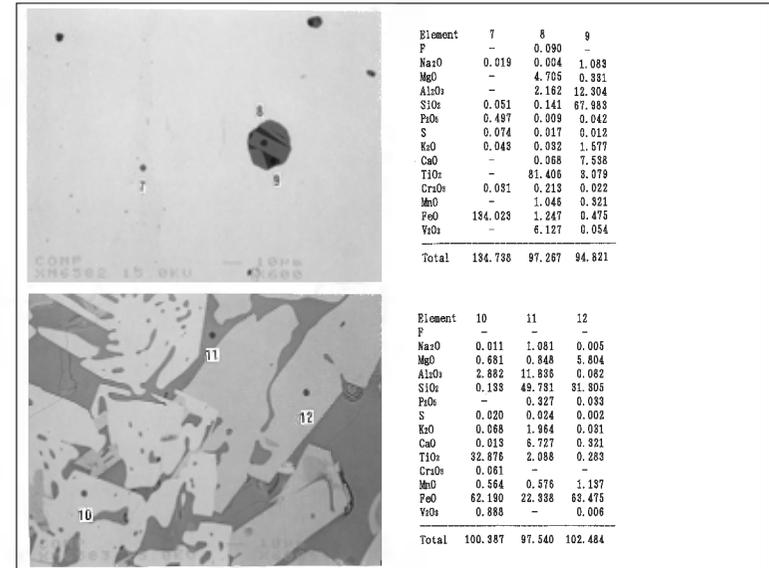


Photo. 4の原図

2 城峪城跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査

(株)九州テクノリサーチ・TACセンター

大澤正己

概要

7世紀代が比定される城峪城跡出土の製鉄関連遺物（炉壁、鉄滓、含鉄鉄滓、鉄塊系遺物、木炭）を調査して次の点が明らかになった。

〈1〉製鉄原料は中チタン含有砂鉄と黒炭系木炭である。また、高アルミで耐火性に優れた炉材粘土の充当があった。

〈2〉出土鉄滓の鉱物組成はウルボスピネル（Ulvo spinel： $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ）とファイヤライト（Fayalite： $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）を晶出し、化学組成は二酸化チタン（ TiO_2 ）4.76～6.59%、バナジウム（V）0.14～0.50%、酸化マンガン（ MnO ）0.62～1.01%を含む。

〈3〉含鉄炉底塊中の鉄は、吸炭のない未凝集フェライト（Ferrite： α 鉄、純鉄）で纏まりも悪い。しかし、鉄塊系遺物になると高炭素鋼の過共析鋼（C：0.77%以上）が生成される。更に表皮スラグにルチル（Rutile： TiO_2 ）が析出し、局部的には高温化領域の存在が確認できた。

〈4〉製鉄遺構は炉床部が円形で、炉形は円筒炉が想定される。炉材粘土は酸化アルミニウム（ Al_2O_3 ）が20.5～22.1%と多くて耐火度が1,420～1,500℃と優れていた。円筒炉の炉体を支えるに適した粘土の供給により製鉄炉の構築が可能となっている。なお製鉄関連遺物は、斜面堆積と土壌から出土しているが両者の組成は近似して同時操業時の排出物とみてよからう。

1 いきさつ

城峪城跡は岡山県苫田郡奥津町久田下原に所在する。遺跡の主体は中世の城郭である。二つの丘陵にまたがって郭面が検出されて、中央の谷部に炭窯（全長6.5m、幅1m、4つの横口をもつ）があり、東斜面より弥生時代後期の住居跡を掘り込んで製鉄炉の円形下部構造が確認された。この製鉄遺構の下側斜面には鉄滓や炉壁が堆積し、土壌もあってここからも製鉄関連遺物が出土する。これらの出土遺物を通して当時の鉄生産の実態を把握する目的から金属学的調査を行った。

2 調査方法

2-1 供試材

Table. 1に供試材の履歴と調査項目を示す。

2-2 調査項目

(1) 肉眼観察、(2) マクロ組織、(3) 顕微鏡組織、(4) ビッカース断面硬度、(5) CMA (Computer Aided X-Ray Micro Analyzer) 調査、(6) 化学組成分析、(7) 耐火度、(8) 木炭の性状。

3 調査結果

3-1 斜面堆積出土品

(1) SHI-1 (掲載番号C19)：炉壁（半還元砂鉄付着）(Photo. 1①～④、Photo. 2⑦・⑧、Table. 1・2・4)

炉頂部近傍の炉壁片で、内側被熱面は灰黒化し、一部に半還元砂鉄を付着する。胎土は淡赤色細粒粘土でスサ（3mm前後）混入痕が散見される。付着砂鉄の半還元状況をPhoto. 1の①～④に示す。①は滓化が進みウルボスピネル（Ulvöspinel： $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ）の結晶が晶出している。②は白色粒子のまだ熱影響の少ない砂鉄を示した。③は磁鉄鉱（Magnetite： $\text{Fe}_2\text{O}_3\cdot\text{FeO}$ ）粒子、④は格子組織をもつチタン鉄鉱（Ilmenite： $\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ）粒子である。それぞれは、②の組織拡大。砂鉄粒子は0.2～0.5mm程度を測る。胎土の鉱物相をPhoto. 2の⑦⑧に示す。粘土鉱物のセリサイト（Cerisite）は鱗片状を留め、熱影響はなく、混入石英粒や長石の類も少量である。炉壁胎土の化学組成をTable. 2に示す。胎土の強熱減量のIg Lossが8.76%と結晶構造水があまり飛散していない熱経歴での分析である。鉄分（ Fe_2O_3 ）5.92%と塩基性成分（ $\text{CaO}+\text{MgO}$ ）1.7%は特別低くはなく、かつ、酸化アルミニウム（ Al_2O_3 ）も20.52%は高めで、耐火度は1,500℃と優れた性状を呈している。粘土中に砂鉄の混入があるのか二酸化チタン（ TiO_2 ）が1.04%、バナジウム（V）0.01%など高め傾向にある。耐火性が良好な結果であるのは、砂鉄とのバランスであろうか。

(2) SHI-2（掲載番号C20）：炉壁（初期ガラス化溶融部）（Photo. 1⑤・⑥、Table. 1・4）

前述炉壁より下部側で内面は薄くガラス化溶融した炉壁である。側面側に半還元砂鉄を付着する。胎土の露出面にスサ跡が残り、SAI-1炉壁と一体のものに見做される。Photo. 1の⑤～⑥に内面ガラス化溶融したところの表皮スラグの鉱物組成を示す。珪酸塩ガラスに淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネルが、まだ僅かに砂鉄粒子の痕跡を留めながら晶出する。⑥の左側は1粒砂鉄がその粒子を残して付着する様子を提示した。該品は0.3mm前後の粒子である。

(3) SHI-3（掲載番号C21）：炉壁（送風孔付近）（Photo. 2①～③、Table. 1・4）

炉壁内面は12mm強幅の木炭痕を残し、炉内反応の激しさを留める凹凸ガラス肌である。胎土粘土は肌理細かく、SHI-1、2と共通する。Photo. 2の①～③に鉱物組成を示す。胎土内面は完全にガラス化し、砂鉄粒子も止めない溶融状態で、淡灰色微細析出物（ヘーシナイト：Hercynite： $\text{FeO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$ ）や表層にマグネタイト（Magnetite： Fe_3O_4 ）及びウルボスピネルの微小結晶を晶出する。炉壁溶融物としての一般的組織である。

(4) SHI-4（掲載番号M107）：炉底塊（Photo. 2④～⑥、Table. 1・2・4）

平面が不整六角形から半円形状の炉底塊である。当遺跡の炉形が円筒炉が想定できて、それに対応した炉底塊である。生きた側面が円弧を描く様相であって炉底塊の一部の破片。表面は灰黒色を呈し起伏をもち木炭痕や気泡露出、更には小石や石英粒の付着から至って荒れ肌である。裏面は椀形状で砂礫を付着するも一部は黒色基地に流動肌がみられる。破面は黒褐色岩肌状の緻密さで、5mm幅の気泡痕を残す。

Photo. 2の④～⑥に鉄滓の鉱物組成を示す。淡茶褐色雪花状結晶のウルボスピネルに淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライト（Fayalite： $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）が暗黒色ガラス質スラグに晶出する。砂鉄製錬滓の晶癖である。淡茶褐色雪花状結晶の硬度値は⑥の硬度圧痕をもつ結晶で671Hvであった。ウルボスピネルに同定される。（注1）化学組成分析結果をTable. 2に示す。砂鉄製錬滓の特徴をもつ成分系で鉄分は低くガラス質や脈石成分は高めである。すなわち、全鉄分（Total Fe）は37.80%に対して、金

属鉄 (Metallic Fe) 0.11%、酸化第1鉄 (FeO) 43.21%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 5.87%の割合である。ガラス質成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は42.54%で、このうちに塩基性成分 (CaO+MgO) を4.83%と高めを含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂) 4.78%、バナジウム (V) 0.17%、酸化マンガン (MnO) も多くて0.85%であった。銅 (Cu) は0.002%とこれは一般レベルである。

(5) SHI-5 (掲載番号M108) : 含鉄炉底塊 (Photo. 3①~⑤、Table. 1・2・4)

外縁部の一部が円弧を描く側面をもつ含鉄炉底塊の破片である。表裏共に茶褐色酸化土砂に覆われる。表面は10mm前後の木炭痕と鉄錆で荒肌を呈する。裏面はやはり椀形状で前述のSHI-4と一脈通ずる肌をもつ。また、端部には30mmを越す木炭噛み込み跡があり、鉄錆跡も多く残す。Photo. 3の①~⑤に顕微鏡組織を示す。金属鉄は還元直後で、まだ吸炭が進まぬ未凝集のフェライト (Ferrite: α鉄、純鉄) 粒と、淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネルおよびファイヤライトが暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。砂鉄製鍊滓の晶癖である。フェライトの断面硬度値は92.0Hvであった。やや高めであるがフェライトと同定できる。Photo. 3の①参照。Table. 2に化学組成分析結果を示す。こちらは含鉄系なので鉄分が増加してガラス分が低下するが、脈石成分は高めである。全鉄分 (Total Fe) は50.60%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 7.90%、酸化第1鉄 (FeO) 34.76%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 22.42%の割合である。ガラス質成分は23.59%で、このうちに塩基性成分 (CaO+MgO) を2.39%含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン (TiO₂) 6.59%、バナジウム (V) 0.50%は多くて、酸化マンガン (MnO) 0.62%、銅 (Cu) の0.005%などは砂鉄製鍊滓の成分である。

(6) SHI-6 (掲載番号M109) : 含鉄炉底塊 (Photo. 3⑥~⑧・9・10、Table. 1・4)

全面が赤褐色鉄錆に覆われ、凹凸激しく、亀裂を走らせる含鉄炉底塊の破片である。木炭痕も多く残す。平面は不整形形状であるが、これも周縁部の生きた側面は円弧状をなし、円形炉生成物が想定できる。Photo. 9にマクロ組織を示す。白色部は、縮緬雑魚 (ちりめんじゃこ) 状の纏まりきれないフェライトで、左側の一部は凝集しかかった状況を呈す。鉄滓は炉底塊なので滓のウルボスピネルが大きく成長した結晶がフェライト周辺で認められる。Photo. 3の⑥~⑧にフェライト結晶と小型ウルボスピネル共伴組織を示す。フェライトはナイトル (5%硝酸アルコール液) で明瞭な結晶粒界を現わして、その交点には微量のセメンタイト (Cementite: Fe₃C) の析出もない。純鉄そのものであった。フェライト結晶の硬度測定の際の圧痕をPhoto. 3の⑥に示す。硬度値は109Hvと若干組織に対して高めを呈する。測定基地側の面積が狭く誤差が生じたと考えられる。Photo. 10は滓の鉱物組成の特性X線像と定量分析の結果を示す。SE (2次電子像) に11の番号を付けた淡茶褐色台形状結晶は、白色輝点が鉄 (Fe) とチタン (Ti) に強く集中し、定量分析値は64.6%FeO-25.9%TiO₂組成が得られた。ウルボスピネル (Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂) が同定される。12の番号は基地の暗黒色ガラス部分である。ガラス質に白色輝点が集中して、定量分析値は38.7%SiO₂-14.9%Al₂O₃-8.9%CaO-3.0%K₂O-1.4%Na₂O組成で珪酸塩である。これには砂鉄特有成分の2.1%TiO₂-2.0%ZrO₂を固溶する。更に微小ファイヤライトの析出があるのか、26.8%FeOがあった。最後に13の番号は淡灰色長柱状結晶である。鉄 (Fe) と珪素 (Si) に白色輝点が集中し、定量分析値は63.6%FeO-30.2%SiO₂でファイヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) が同定された。これには1.2%TiO₂-1.7%MnOが固溶する。以上は砂鉄製鍊滓を表明する組成である。

(7) SHI-7 (掲載番号M104) : 含鉄鉄滓 (Photo. 4①~⑤、Table. 1・4)

平面は不整形形状で表裏共に暗黒色鉄錆に覆われた86 gと小型の含鉄鉄滓である。目立つ破面はなくほぼ完形に近い可能性をもつ。表面は流動肌と小突起の荒れの2面性があり、側面に木炭痕が顕著である。裏面には緑色の砂礫が付着し、5 mm前後の木炭痕とぶつぶつ肌及び流動面がみられる。顕微鏡組織をPhoto. 4の①~⑤に示す。鉱物組成は淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネルと淡灰色長柱状結晶のファイヤライトで構成される。砂鉄製錬滓の晶癖である。また、含鉄は未凝集のフェライトが散在する。前述してきたSHI-5、6の生成鉄に準じていた。鉱物組織のウルボスピネルの硬度値は665Hv、フェライトは92Hvであった。

(8) SHI-8 (掲載番号M105) : 含鉄鉄滓 (Photo. 5①~⑨、Table. 1・4)

平面が不整形形状で54 gの含鉄鉄滓である。表裏は亀裂が走り、赤褐色の鉄錆に覆われる。側面には顕著な破面は見当たらない。完形品だろうか。表面は5 mm幅程度の木炭窪みが数ヶ所に残し、凹凸をもつ荒れ肌である。裏面には8 mm前後の木炭痕と、石英粒の付着がある。Photo. 5の①~⑨に顕微鏡組織を示す。①は表皮スラグと金属鉄である。鉱物相は淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネルと淡灰色長柱状結晶のファイヤライトが金属鉄(中央白色部)をとり囲む。また②は鉄中の非金属介在物である。暗黒色ガラス質中に淡茶褐色ウルボスピネルの晶出が認められる。鉱物相と、介在物のウルボスピネルの存在は、砂鉄原料の履歴を明瞭に表わすものである。また、該品の鉄中の炭素含有量は、フェライトの極軟鋼から全面パーライト析出の共析鋼(0.77% C)までのバラツキをもつが、前述してきたSHI-5、6、7の未凝集フェライト生成に比べると、纏まりをもち、高炭素含有化の進んだ鉄塊になっていた。フェライトの硬度値は78Hvで本来の硬さであり、亜共析鋼(C:0.77%以下)のフェライト・パーライト域は136Hv、全面パーライト域は197Hvであった。それぞれが炭素含有量の増加につれて硬度値は上昇している。組織に対応した値であった。

(9) SHI-9 (掲載番号M106) : 鉄塊系遺物 (Photo. 6①~⑨・9下・11・12、Table. 1・4)

錆膨れで平面形は広がりをもつが、半棒状で18 gと小塊の鉄塊系遺物である。全面が淡褐色の鉄錆に覆われて、長軸両端は錆膨れと暗赤褐色錆汁を滲ませる。また、金属鉄の酸化の進行で亀裂が縦横に走る。裏面側には木炭痕が残り、木炭の間隙で生成された鉄塊の履歴を呈する。Photo. 9の下段に金属鉄のマクロ組織を示す。金属鉄は、フェライトとパーライトの層状組織で全面パーライトの共析鋼以上が想定される高炭素鋼であった。纏まりがよいが、自然腐食の進行でピット状に食われて孔が多発する。Photo. 6の①~⑨に顕微鏡組織を示す。①②は表皮スラグで暗黒色ガラス質中に晶出した白色片状結晶である。鉱物組成はシュードブルーカイト(Pseudobrookite: $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$)とルチル(Rutile: TiO_2)の混在である。これはPhoto. 11のSE(2次電子像)に7の番号をつけた結晶に対応し、白色輝点はチタン(Ti)にのみ集中し、当結晶の定量分析値は74.9% TiO_2 -9.9% V_2O_5 -2.0% ZrO_2 組成が得られた。砂鉄特有元素のみが強く検出されてルチル(Rutile: TiO_2)が同定される。ルチルは高温操業での析出物であるのはFeO-TiO₂二元平衡状態図で説明がつく。(注2)

次にPhoto. 6の③は鉄中の非金属介在物である。米粒程の10 μ 前後の褐色異物は硫化鉄(FeS)で、その周辺の黒点状に見えるのはFe-Fe₃C-Fe₃Pの三元系共晶であるステダイト(Steadite)の存在である。Photo. 12のSEに9の番号をつけた粒状介在物は86.4%FeO-29.3%Sで硫化鉄(FeS)が同定さ

れる。更にその周辺の10の番号の個所は、124.4%FeO (100%Fe) - 20.6%P₂O₅ (9%P) 組成が得られた。ステダイト組成の理論値はFe : 91.5%、C : 1.96%、P : 6.89%なので、これに準じたものと判定される。なお、前述硫化鉄 (FeS) には6.6%V₂O₃の固溶があつて、0.07%TiO₂と0.02%ZrO₂の結果である。鉄中の非金属介在物からTiが無くてVの検出のみであっても始発原料は砂鉄の可能性は言及できる。

また、Photo. 6の④～⑦にもどす。金属組織はナイトル腐食 (Etching) で全面パーライトと細く初析セメントイトが網状に析出した過共析鋼組織が表われた。高炭素鋼である。ビッカース断面硬度は⑧の共析鋼レベルで228Hv、⑨は一部にレデプライトの局部析出があつて過共析鋼レベルで1%を越える炭素域が想定されて319Hvが得られた。円筒炉の高温操業での吸炭反応の促進された鋼の生成である。

(10) SHI-10 (掲載番号M110) : 炉外流出滓 (Photo. 4⑥～⑧、Table. 1・2・4)

数條以上の重層でもって形成された炉外流出滓である。流出溝は12cm幅を超える。片側面は生きて、三方は破面となる。表面は灰黒色滑らか肌で局部的に3mm径の気泡を4・5点発する。裏面は全面に黄色や白色の礫を噛み込む。また破面は色調がさまざまに灰黒色、赤褐色、灰白色と変化する。更に緻密質であるが8mm径以下の円形や横伸びの気泡が露出する。Photo. 4の⑥～⑧に顕微鏡組織を示す。鉍物組成は、淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネルと淡灰色長柱状結晶のファイヤライトが暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。砂鉄製錬滓の晶癖である。鉍物相はウルボスピネルと断定したが硬度値をみると、724Hvと硬質なので結晶によっては、ウルボスピネルとヘーシナイトの混合組成も存在する可能性をもつ。

化学組成はTable. 2に示す。該品は前述したSHI-4炉底塊とSHI-5含鉄炉底塊の中間的組成を呈している。全鉄分 (Total Fe) は41.12%、ガラス質成分38.24%で塩基性成分を3.99%を含む。二酸化チタン (TiO₂) 5.79%、バナジウム (V) 0.21%、酸化マンガン (MnO) 1.01%、銅 (Cu) 0.002%などであった。砂鉄製錬滓の成分である。

(11) SHI-11 : 木炭 (Table. 1・3・4)

直径が6.0cm前後の落葉広葉樹の半割り炭である。コナラ系の黒炭であろうか。中央谷部の横口4個をもつ炭窯との関係が気掛りである。供試材の木炭は5.0×4.2×2.6cmを測り21gであった。木炭は製鉄操業の不可欠原料である。製錬時は砂鉄を燃焼によって加熱し、発生する一酸化炭素 (CO) ガスで還元反応を促進させる。主なる組成はTable. 3に示すように、固定炭素 (FC) は59.68%、揮発分35.71%、灰分4.61%、水分20.12%であった。供試材は埋蔵品として土中で汚染され、本来の数値になっていない。例えば現代の木炭であれば灰分1.5%以下、固定炭素は90%台、水分8%以下となる。(注3) また、供試材の発熱量は汚染された組成であり5,770cal/gを呈したが、これも7,000cal/g程度は有する性状であろう。なお硫黄 (S) は0.01%で、こちらは現代木炭と大差なかった。

3-2 土壌出土品

(1) SHI-12 (掲載番号C22) : 炉壁 (半還元砂鉄付着) (Photo. 7①～⑨、Table. 1・2・4)

平面が不整形形状の炉壁破片である。側面のうち1面は生きているが他は破面である。内面は被熱

により灰黒色ガラス化し、これに顆粒状砂鉄の付着がみられる。この位置には木炭痕は皆無であった。炉外面の胎土粘土は赤色化し、白色石英粒やスサの混入がある。内面で砂鉄付着のあるガラス化溶融部の顕微鏡組織をPhoto. 7の①～⑨に示す。付着砂鉄は細粒が多く、0.05～0.4mm径の範囲にバラツキをもつ。各粒子は白色粒のマグネタイト粒子から格子組織のチタン鉄鉱粒子までが混在する。また、被熱によりMag-Ilmeniteの溶離組織が明瞭となる粒子も検出された（⑤中央粒子を参照）。⑧⑨は半還元砂鉄から滓化が進み、微小ウルボスピネルが晶出する様子を示した。

次にTable. 2に胎土の化学組成を示す。該品は強熱減量のIg Lossが2.71%と減少し、結晶構造水の飛散した熱履歴をうけた粘土での分析である。鉄分(Fe₂O₃) 6.63%、塩基性成分(CaO+MgO)は2.50%など両者は高め傾向にあり、軟化性にやや不利になるが、酸化アルミニウム(Al₂O₃)は22.05%と高めで耐火性を向上させる含有である。1,420℃であった。当胎土成分は前述した斜面堆積出土の炉壁(SHI-1)に準ずる。また、耐火度は熱履歴の影響から若干低めとなったが、これも特別問題視するまでのものではない。

(2) SHI-13 (掲載番号M111) : 含鉄流動滓 (Photo. 8①～③・13、Table. 1・4)

平面が不整形形状の含鉄流動滓である。表面は赤褐色の流動肌で10mm幅の木炭痕を残す。幅広短軸側に15～20mm径の錆膨れを発生し、亀裂を生じて含鉄を表わす。裏面の先窄り片側面は流出状で2～5mmの礫を付着する。約2/3は炉外流出であろうか。そうすると1/3は炉内滓となる。裏面は2mm径の気泡を発生し、錆膨れ側はやはり亀裂があった。Photo. 8の①～③に顕微鏡組織を示す。鉄滓の鉱物組成は淡茶褐色雪花状結晶のウルボスピネルと、淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライトで構成される。砂鉄製錬滓の晶癖である。含鉄は錆化されてフェライト基地にパーライトを析出する痕跡を残す。炭素量は0.4%前後の半硬鋼レベルであった。鉄滓の鉱物組成の特性X線像と定量分析値をPhoto. 13に示す。SE(2次電子像)に2の番号をつけた淡灰色木ずれ状結晶は、鉄(Fe)と珪素(Si)に白色輝点が集積し、定量分析値は64.9%FeO-30.9%SiO₂-組成でファイヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)が同定された。これには4.7%MgO-1.3%MnOが固溶する。このファイヤライトにマンガンの固溶は、前述した斜面堆積含鉄炉底塊(SHI-6)と同じ傾向である。次に淡茶褐色雪花状結晶に3の番号をつけた。白色輝点は鉄(Fe)とチタン(Ti)に強く集中し、63.9%FeO-25.5%TiO₂-3.1%V₂O₃組成であった。ウルボスピネル(Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂)である。6.2%Al₂O₃の固溶があつてヘーシナイト(Hercynite: FeO·Al₂O₃)の混合傾向がある。最後に暗黒色ガラス部分に4の番号をつけて分析している。定量分析値は38.4%SiO₂-13.9%Al₂O₃-8.0%CaO-3.3%K₂O-1.6%Na₂O組成で珪酸塩が同定される。これにも1.3%TiO₂-1.8%ZrO₂の固溶があつて、これも斜面堆積含鉄炉底塊(SHI-6)と共通する。

(3) SHI-14 (掲載番号M112) : 流出溝滓 (Photo. 8④～⑧、Table. 1・2・4)

約9cm幅の溝滓の破片である。両側面は生きていて前後が破面となる。表面は灰黒色で鈍い光沢をもち、炉外流出で急冷を受け、小波状の皺を発生する。裏面は僅かに皿状に弯曲し、海綿状肌で2～5mmの礫を付着する。顕微鏡組織をPhoto. 8の④～⑧に示す。鉱物組成は淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネルと淡灰色短柱状結晶のファイヤライトで構成される。砂鉄製錬滓の晶癖である。また多角形結晶の硬度値は703Hvであつて、これからもウルボスピネルが同定された。Table. 2に化学組成を示す。鉄分低めで脈石成分を一定量含む。前述したSHI-4炉底塊によく近似した成分系である。全鉄分

(Total Fe) 39.86%、ガラス質成分39.12%、二酸化チタン (TiO₂) 4.76%、バナジウム (V) 0.14%、酸化マンガン (MnO) 0.94%などであった。この化学組成からも斜面堆積鉄滓と同系と指摘できる。斜面堆積滓と土壌出土滓は同時操業での排出滓とみてよからう。

4 まとめ

城峪城跡から検出された製鉄遺構は、下部構造が円形で、円筒形炉が想定される。近年このタイプの製鉄炉が中国地方山陽・山陰方面で数例以上が発見されている。例えば広島県では小丸遺跡 (SF1、SF2号炉)、(注4) 白ヶ迫遺跡、(注5) 小和田遺跡、西山遺跡 (注6) など磁鉄鉱 (岩鉄) を原料とする。また島根県では羽森第3遺跡で砂鉄原料、(注7) 今回報告の城峪城跡 (砂鉄) と列記できる。操業年代はいずれも古墳時代の可能性が求められる。一方、朝鮮半島側では洛東江上流の密陽、沙村遺跡では、6世紀前半から7世紀前半にかけて4基の円筒形製鉄炉の操業が報告されている。(注8) こちらは焙焼磁鉄鉱原料で大型送風管 (直径20cm) の使用があり、大規模・送風条件などに差異があるものの国内円筒形炉の技術の源流は半島側に求められよう。

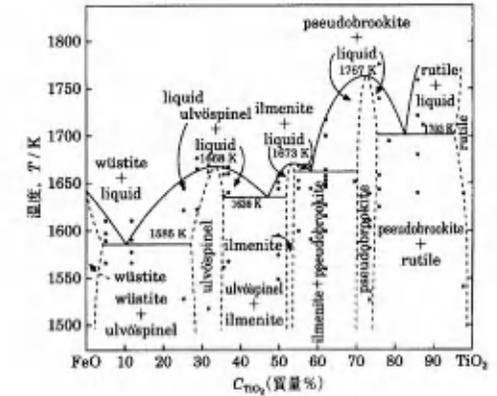
城峪城跡出土の製鉄関連遺物の調査結果のまとめをTable. 4に示す。原料は砂鉄で、鉄滓の鉱物組成はウルボスピネル (Ulvöspinel : 2FeO・TiO₂) を晶出する。また、鉄塊系遺物の表皮スラグからは、ルチル (Rutile : TiO₂) 析出の確認がとれて円筒形炉の煙突効果による高温操業が裏付けられた。生成された鉄は、非金属介在物に硫化鉄 (FeS)、高炭素域の過共析鋼 (C : 0.77%以上) が得られている。高炭素鋼は、刃剣類の利器など靱性が要求される鉄素材として重要視されたと考えられる。

注)

- (1) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968. ヴスタイトは450~500Hv、ファイヤライトは600~700Hv、マグネタイトは500~600Hvの範囲が提示されている。また、ウルボスピネルは硬度値範囲の明記がないが、CMAの組成調査と硬度値を対応させると600~700Hv以上はウルボスピネルと同定される。
- (2) J, B, Mac chesney and A, Murau : American Mineralogist, 46 (1961), 572 イルミナイト (Ilmenite)、シュードブルーカイト (Pseudobrookite)、ルチル (Rutile) の晶出はFeO-TiO₂二元平衡状態図から高温化操業が推定される。(状態図は次頁のTable. 1の横に掲載してある。)
- (3) 大澤正己「大山遺跡を中心とした埼玉県下の製鉄関係遺物分析調査」『大山』埼玉県立がんセンター埋蔵文化財発掘調査報告 (埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集) 埼玉県教育委員会1978
- (4) 松井和幸「小丸遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XI』1994 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター
- (5) 三良坂町教育委員会『白ヶ迫製鉄遺跡』1994
- (6) 1999年度庄原市教育委員会の発掘調査、4基検出、現在報告書準備中。同じく2000年度に西山遺跡、1基検出。
- (7) 掛合町教育委員会「羽森第2・羽森第3遺跡発掘調査報告書」1998
- (8) 孫明助「洛東江下流域の古代鉄生産」『日本海 (東海) がつなぐ鉄の文化』〈口韓合同鉄器文化シンポジウム〉鳥取県教育委員会、鉄器文化研究会 (口・韓) 2001. 11. 11
大澤正己「密陽沙村製鉄遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『密陽沙村 製鉄遺跡』国立金海博物館 2002

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	計測値		磁着度	調査項目										備考
				大きさ (mm)	重量 (g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ピッカース断面硬度	X線回折	CMA	化学分析	耐火度	カロリ-			
SHI-1	城峪城跡	斜面堆積	炉壁(半還元砂鉄付着)	62×58×32	80	3		○					○	○		掲載番号 C19	
SHI-2	城峪城跡	斜面堆積	炉壁(初期ガラス化溶融部)	64×57×28	68	8		○								掲載番号 C20	
SHI-3	城峪城跡	斜面堆積	炉壁(送風孔付近)	140×94×32	375	4		○								掲載番号 C21	
SHI-4	城峪城跡	斜面堆積	炉底塊	129×113×60	1303	4		○	○				○			掲載番号 M107	
SHI-5	城峪城跡	斜面堆積	含鉄炉底塊	128×108×42	722	8		○	○				○			掲載番号 M108	
SHI-6	城峪城跡	斜面堆積	含鉄炉底塊	94×77×52	405	8	○	○	○				○			掲載番号 M109	
SHI-7	城峪城跡	斜面堆積	含鉄鉄滓	54×47×32	86	8		○	○							掲載番号 M104	
SHI-8	城峪城跡	斜面堆積	含鉄鉄滓	48×45×26	54	8		○	○							掲載番号 M105	
SHI-9	城峪城跡	斜面堆積	鉄塊系遺物	42×14×31	18	8	○	○	○				○			掲載番号 M106	
SHI-10	城峪城跡	斜面堆積	炉外流出滓	116×82×30	598	-		○	○				○			掲載番号 M110	
SHI-11	城峪城跡	斜面堆積	木炭	50×42×26	21	3									○		
SHI-12	城峪城跡	土壌8	炉壁(半還元砂鉄付着)	77×69×41	160	7		○								掲載番号 C22	
SHI-13	城峪城跡	土壌8	含鉄流動滓	103×79×38	278	8		○						○		掲載番号 M111	
SHI-14	城峪城跡	土壌8	流出溝滓	88×62×23	220	3		○	○				○			掲載番号 M112	



(注2) FeO-TiO₂ 二元平衡状態図

Table. 2 供試材の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	*:lgloss Σ*																	造滓成分		TiO ₂		
				全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	一酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K ₂ O)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	一酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	耐火度	造滓成分	Total Fe	Total Fe
SHI-1	城峪城跡	斜面堆積	炉壁(半還元砂鉄付着)	5.38	0.08	1.49	5.92	57.87	20.52	0.49	1.22	1.46	0.67	0.08	1.04	0.02	0.10	0.08	#8.76	0.01	0.002	1500	82.23	15.284	0.193
SHI-4	城峪城跡	斜面堆積	炉底塊	37.80	0.11	43.21	5.87	28.97	7.07	2.78	2.05	1.02	0.65	0.85	4.78	0.06	0.04	0.29	0.04	0.17	0.002		42.54	1.125	0.126
SHI-5	城峪城跡	斜面堆積	含鉄炉底塊	50.60	7.90	34.76	22.42	15.59	4.78	1.28	1.11	0.54	0.29	0.62	6.59	0.07	0.09	0.12	0.05	0.50	0.005		23.59	0.466	0.130
SHI-10	城峪城跡	斜面堆積	炉外流出滓	41.12	0.20	49.11	3.93	25.45	7.16	2.42	1.57	1.16	0.48	1.01	5.79	0.03	0.02	0.31	0.04	0.21	0.002		38.24	0.930	0.141
SHI-12	城峪城跡	土壌	炉壁(半還元砂鉄付着)	6.00	0.42	1.21	6.63	59.88	22.05	0.89	1.61	1.55	1.13	0.10	1.02	0.10	0.01	0.07	#2.71	0.02	0.002	1420	87.11	14.518	0.17
SHI-14	城峪城跡	土壌	流出溝滓	39.86	0.10	48.12	3.37	26.09	6.75	2.77	1.80	1.07	0.64	0.94	4.76	0.02	0.01	0.32	0.04	0.14	0.002		39.12	0.981	0.119

Table. 3 木炭の性状

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	灰分	揮発分	水分	固定炭素	T.S (硫黄)	発熱量 (カロリー)
SHI-11	城峪城跡	斜面堆積	木炭	4.61	35.71	20.12	59.68	0.01	5770

Table. 4 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	顕微鏡組織	調査項目								所見
					Total Fe	Fe ₂ O ₃	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO	ガラス質成分	Cu	
SHI-1	城峪城跡	斜面堆積	か壁(半還元砂鉄付着)	砂鉄はM粒子、I粒子混在、スラグ化はU	5.38	5.92	1.71	1.04	0.01	0.08	82.23	0.002	砂鉄原料製鉄炉のか壁、胎土耐火性良好、1,500℃
SHI-2	城峪城跡	斜面堆積	炉壁(初期ガラス化溶融部)	内面ガラス化、溶融箇所U晶出、I粒子残存	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄原料製鉄炉の炉壁、SHI-1の下部
SHI-3	城峪城跡	斜面堆積	炉壁(送風孔付近)	珪酸塩ガラス中にH、Ma、Uら晶出	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄原料製鉄炉の炉壁、SHI-1、2の更に下部
SHI-4	城峪城跡	斜面堆積	炉底塊	U + F	37.80	5.87	4.83	4.76	0.17	0.85	42.54	0.002	砂鉄製錬滓
SHI-5	城峪城跡	斜面堆積	含鉄炉底塊	U + F + M・Fe	50.60	22.42	2.39	6.59	0.50	0.62	23.59	0.005	砂鉄製錬滓、含鉄は未凝集Ferrite
SHI-6	城峪城跡	斜面堆積	含鉄炉底塊	U + F + M・Fe	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄製錬滓、含鉄は未凝集Ferrite
SHI-7	城峪城跡	斜面堆積	含鉄鉄滓	U + F + M・Fe	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄製錬滓、含鉄は未凝集Ferrite
SHI-8	城峪城跡	斜面堆積	含鉄鉄滓	滓: U + F、金属鉄: フェライト域、亜共析域	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄原料を表明するUを内蔵した炭素鋼生成
SHI-9	城峪城跡	斜面堆積	鉄塊系遺物	表皮スラグ: R、金属鉄: 介在物FeS、過共析鋼	-	-	-	-	-	-	-	-	円筒炉吸炭反応促進生成物(高炭素鋼生成)
SHI-10	城峪城跡	斜面堆積	炉外流出滓	U + F	41.12	3.93	3.99	5.79	0.21	1.01	38.24	0.002	砂鉄製錬滓
SHI-11	城峪城跡	斜面堆積	木炭	落葉広葉樹炭	-	-	-	-	-	-	-	-	土砂汚染から灰分4.61%と多く、発熱量は5,770cal/gに留まる
SHI-12	城峪城跡	土層8	炉壁(半還元砂鉄付着)	砂鉄はM粒子、I粒子混在、スラグ中にU	6.00	6.63	2.50	1.02	0.02	0.10	87.11	0.002	SHI-1炉壁に近似した組成、耐火度1,420℃
SHI-13	城峪城跡	土層8	含鉄流動滓	滓: U + F、錆化鉄: 半硬鋼(0.4% C)レベル	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄製錬滓(含鉄)、斜面堆積含鉄炉底塊と同系
SHI-14	城峪城跡	土層8	流出溝滓	滓: U + F	39.86	3.37	4.57	4.76	0.14	0.94	39.12	0.002	SHI-4炉底塊の組成に近似、斜面堆積品と同系

M: Magnetite(Fe₃O₄) FeO) I: チタン鉄鉱(Ilmenite: FeO・TiO₂) U: Ulvöspinel(2FeO・TiO₂) H: Hercynite(FeO・Al₂O₃) Ma: Magnetite(Fe₃O₄) F: Fayalite(2FeO・SiO₂) M・Fe(Metallic Fe: 未凝集フェライト粒) R: Rutile(TiO₂)

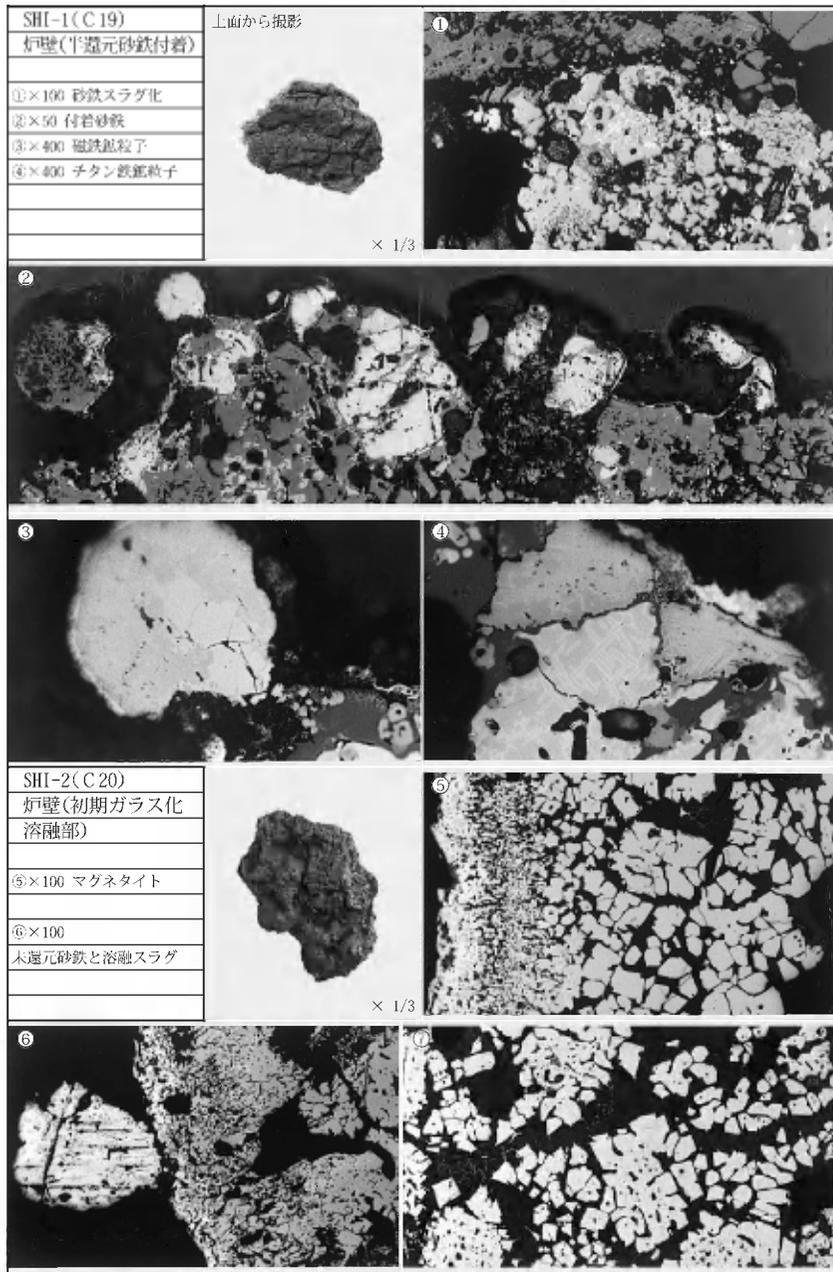


Photo. 1 炉壁溶融物の顕微鏡組織

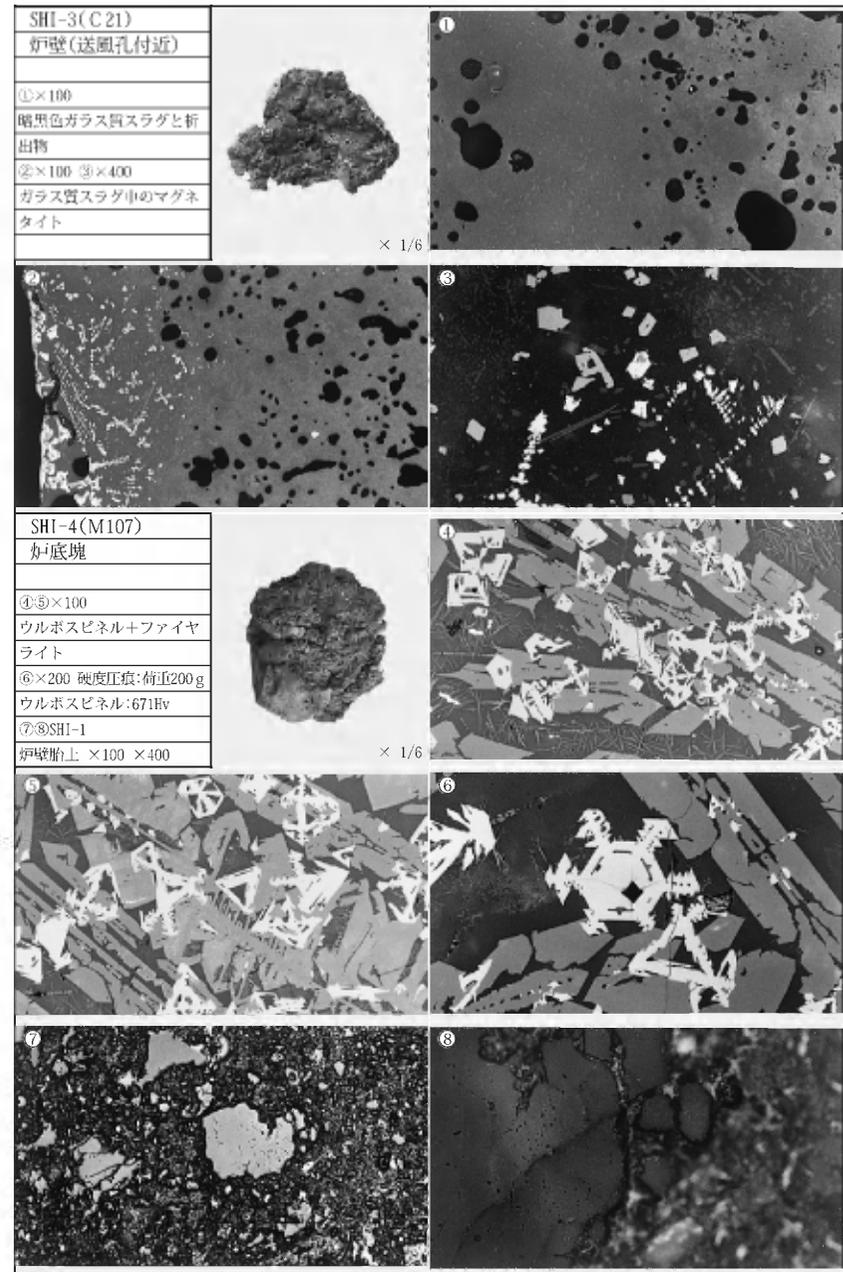


Photo. 2 炉壁(送風孔近傍)と炉底塊の顕微鏡組織

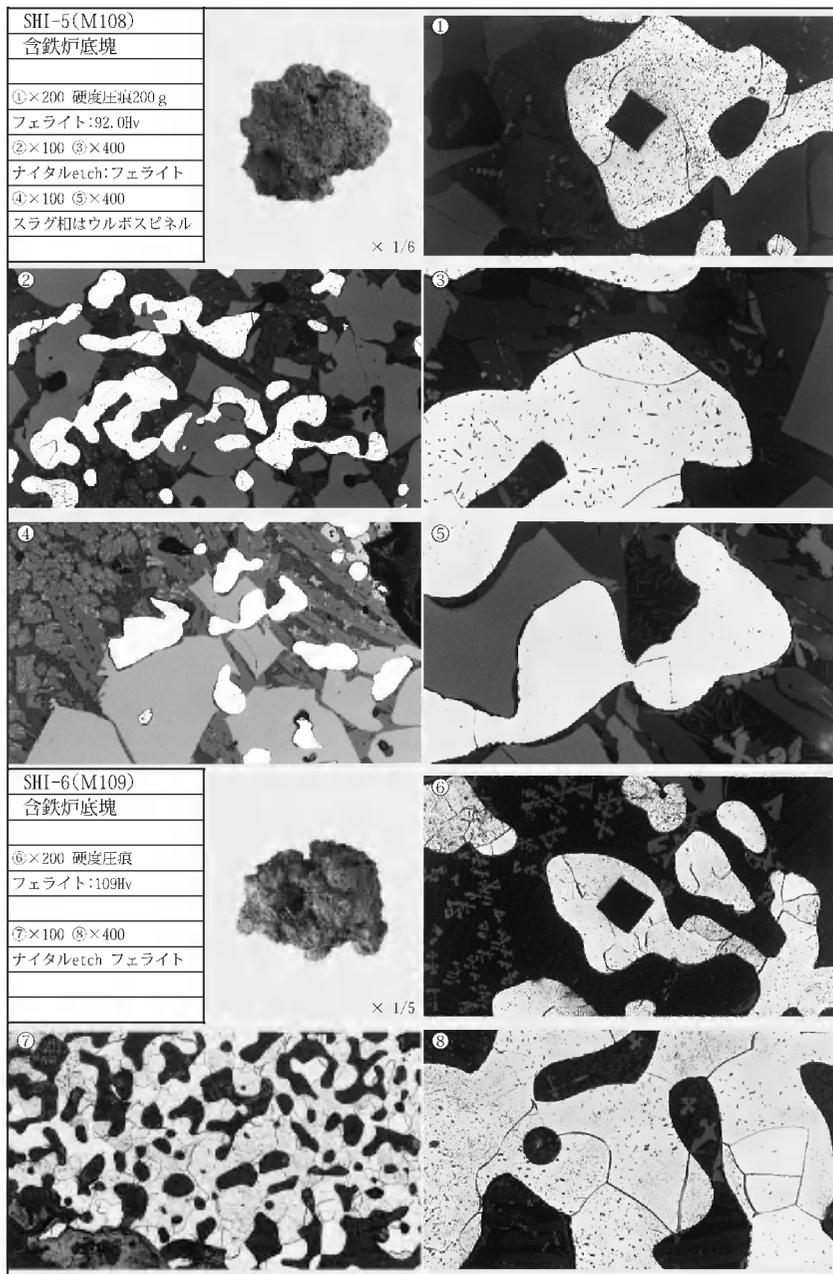


Photo. 3 含鉄炉底塊の顕微鏡組織

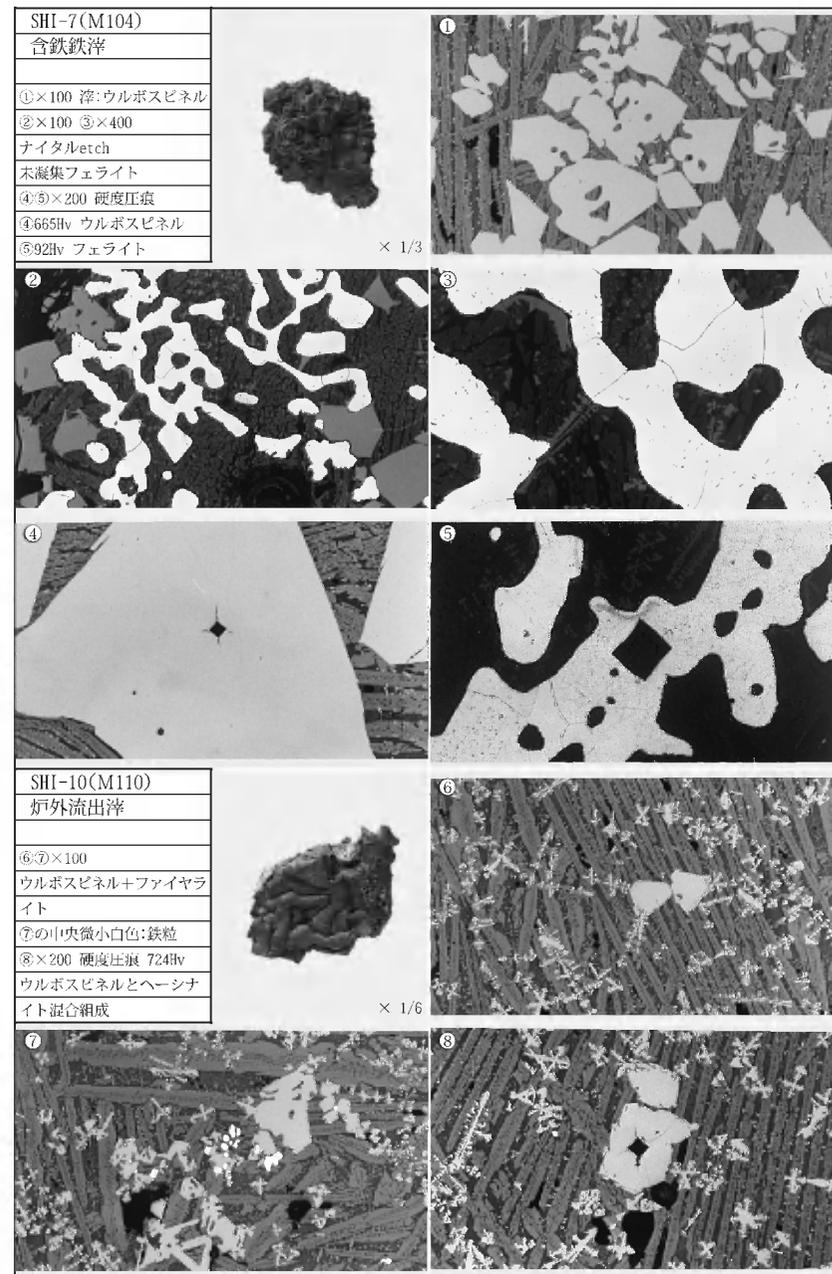


Photo. 4 含鉄鉄滓と炉外流出滓の顕微鏡組織

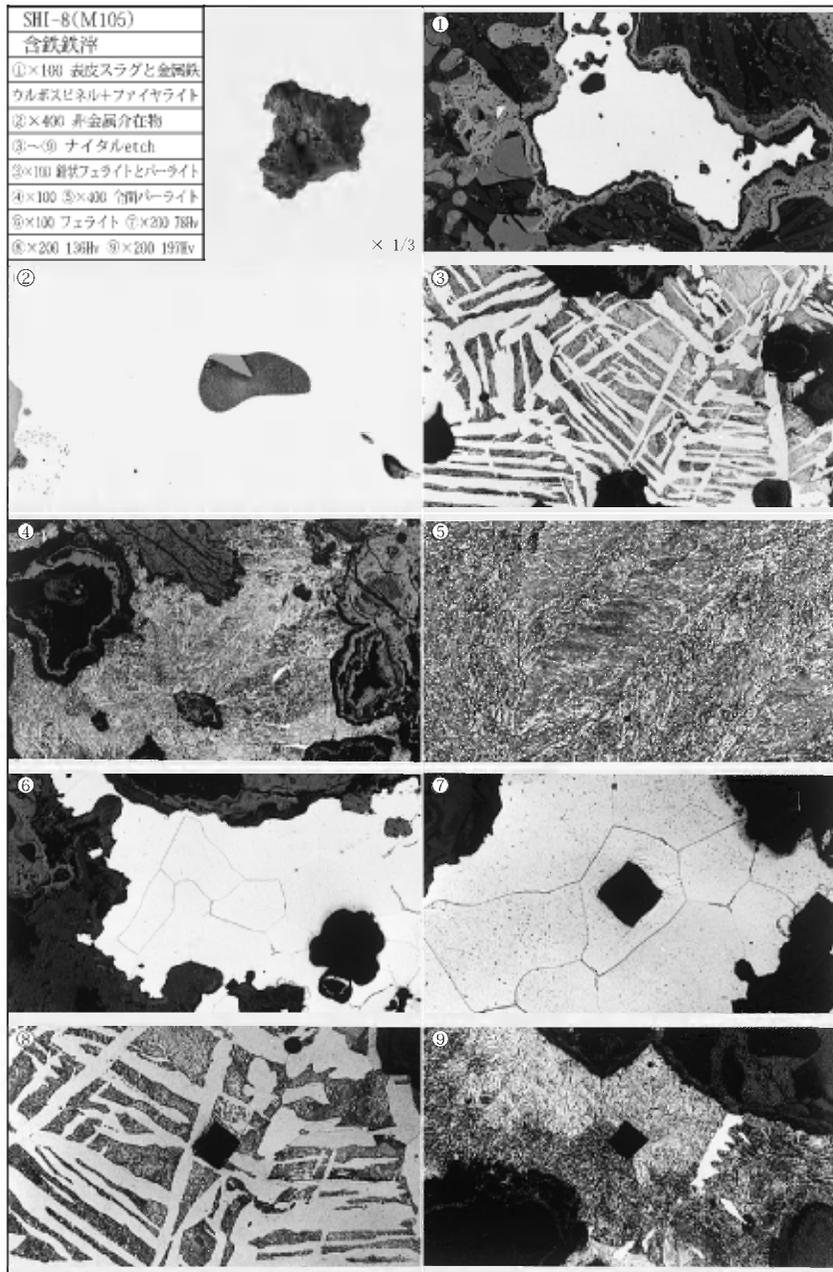


Photo. 5 含鉄鉄滓の顕微鏡組織

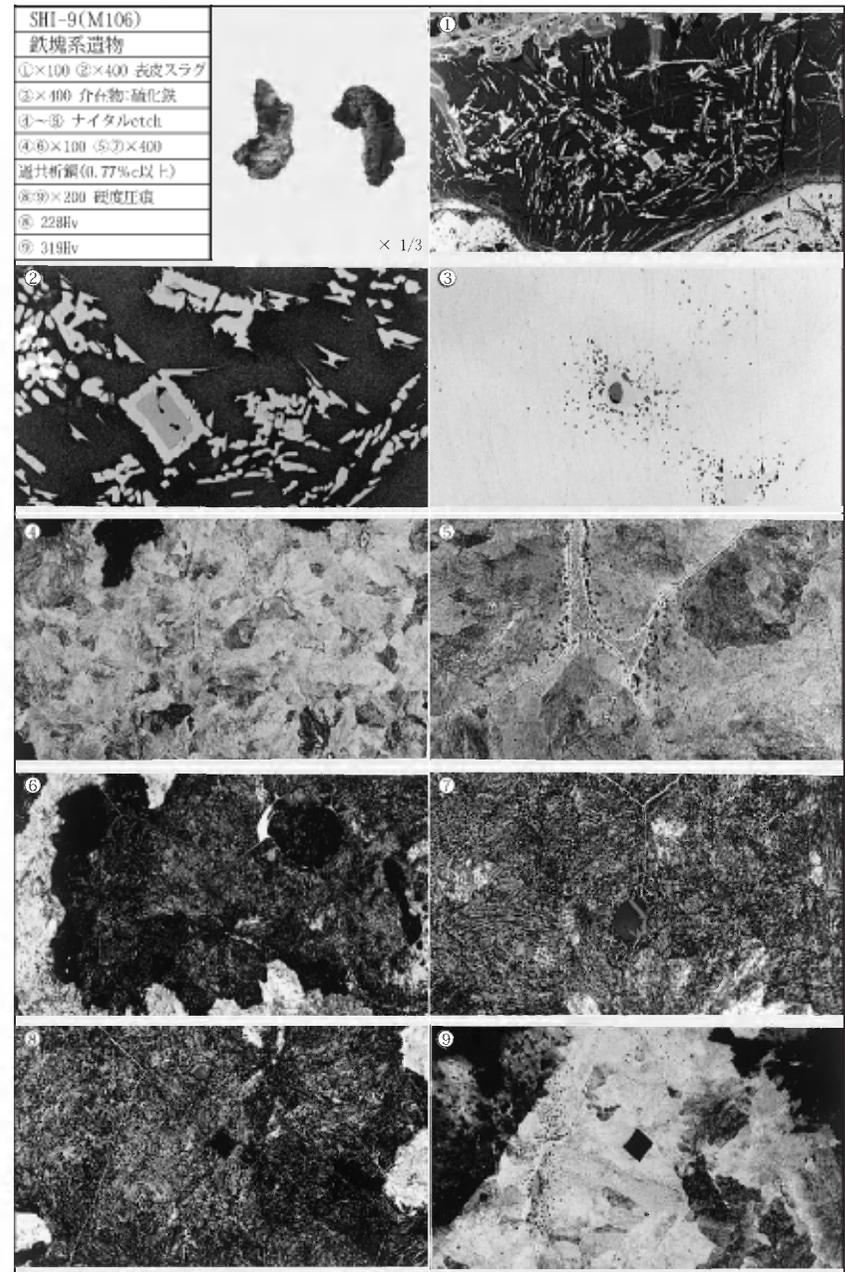


Photo. 6 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

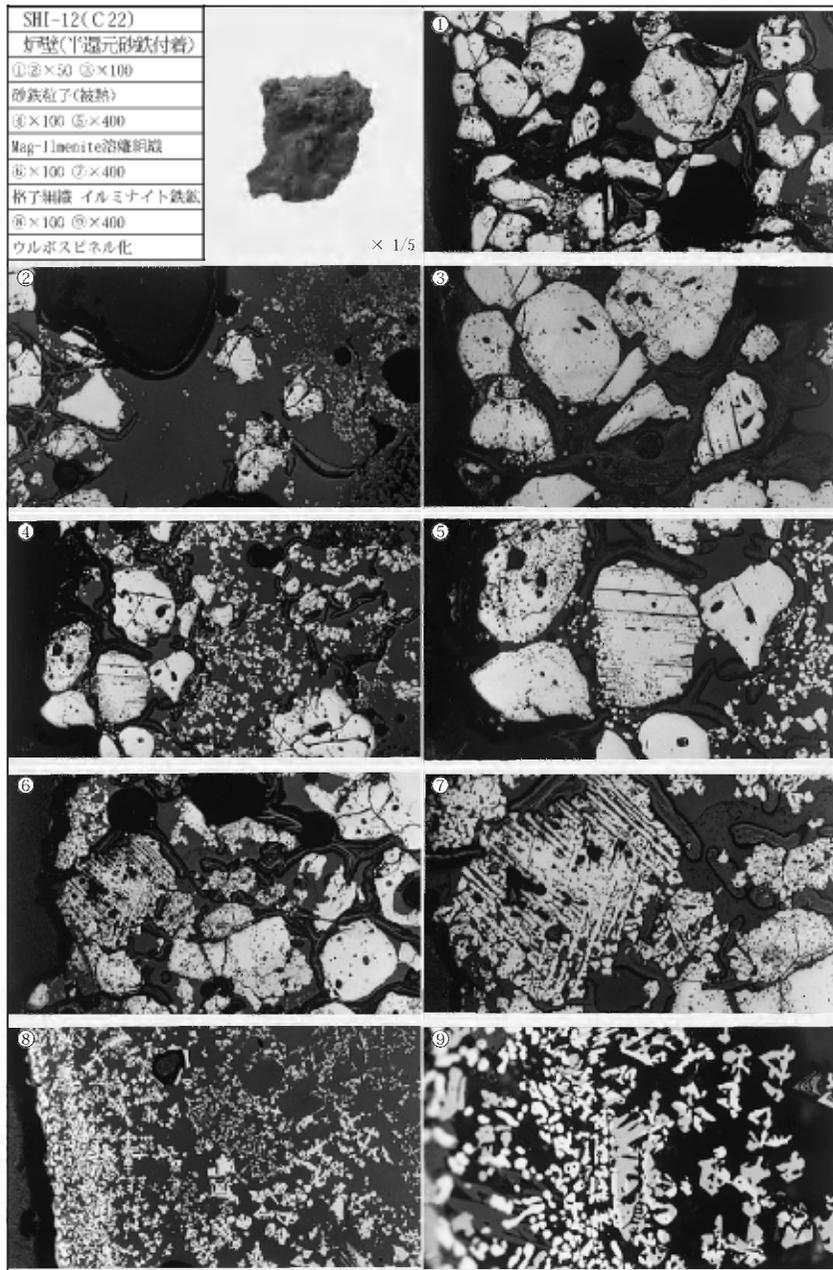


Photo. 7 炉壁の顕微鏡組織

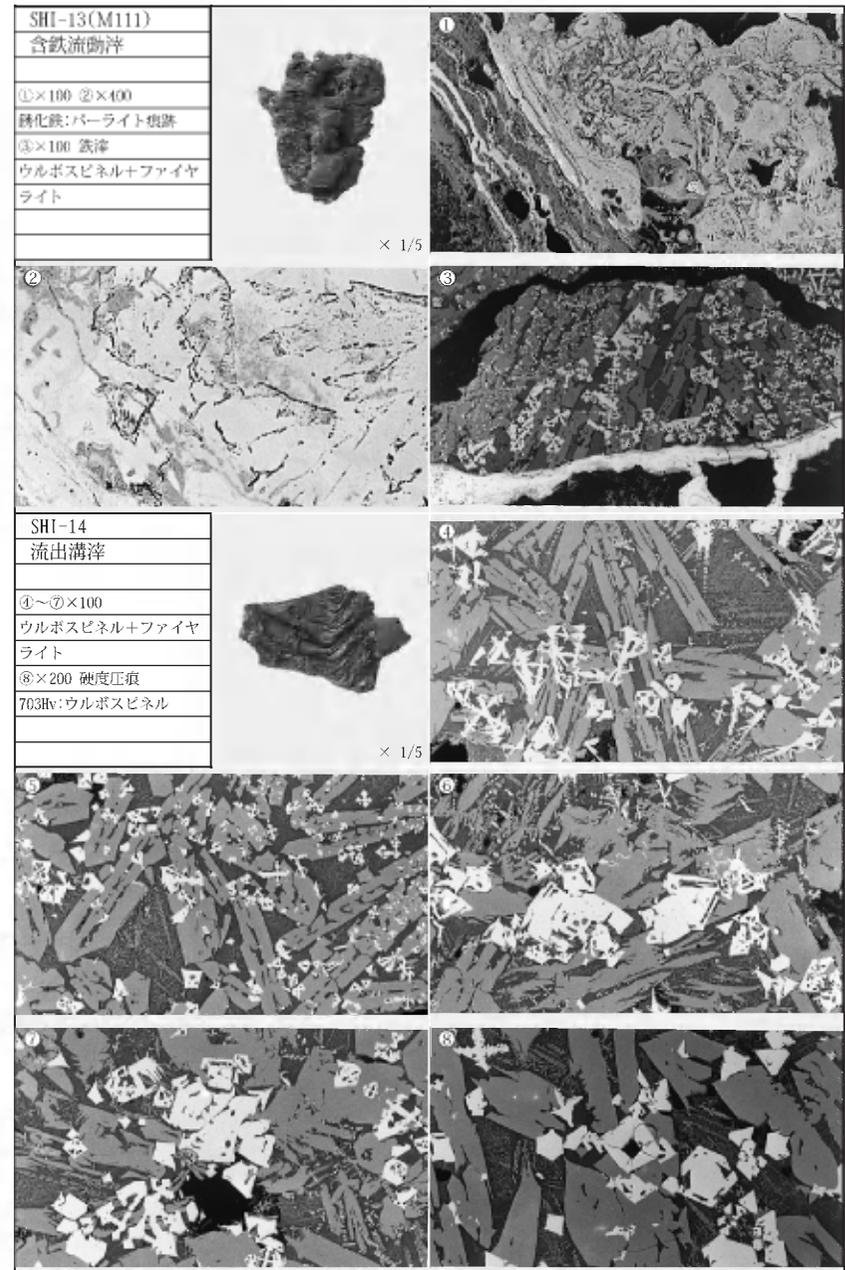
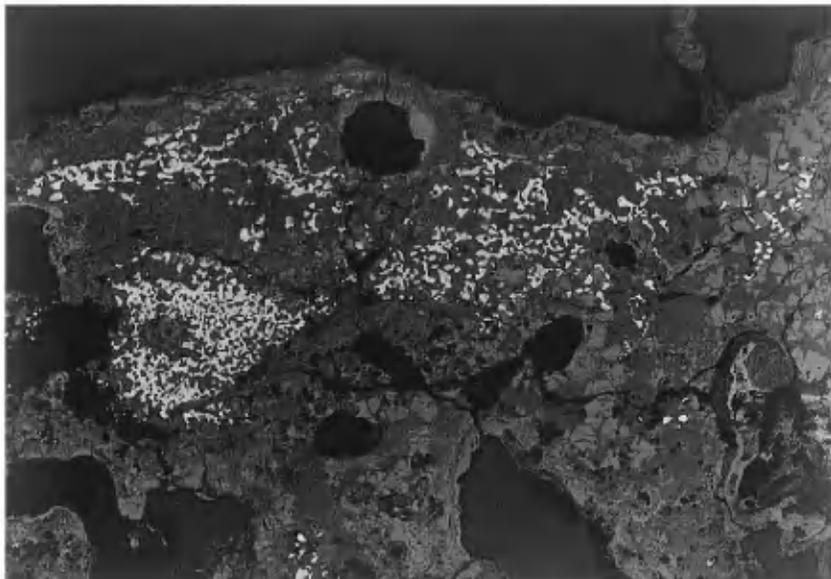
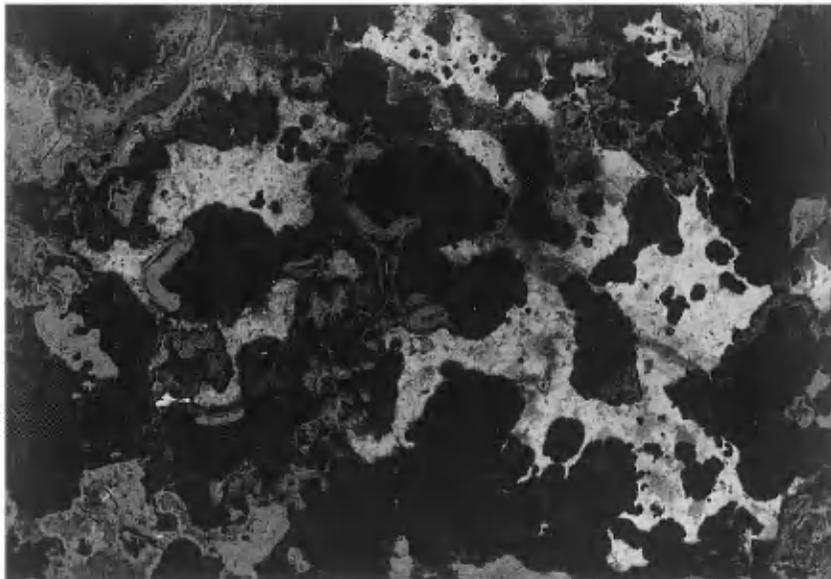


Photo. 8 含鉄炉内滓と流出溝滓の顕微鏡組織



SHI-6 : 含鉄炉底塊 (×20)



SHI-9 : 鉄塊系遺物 (×20)

Photo. 9 マクロ組織

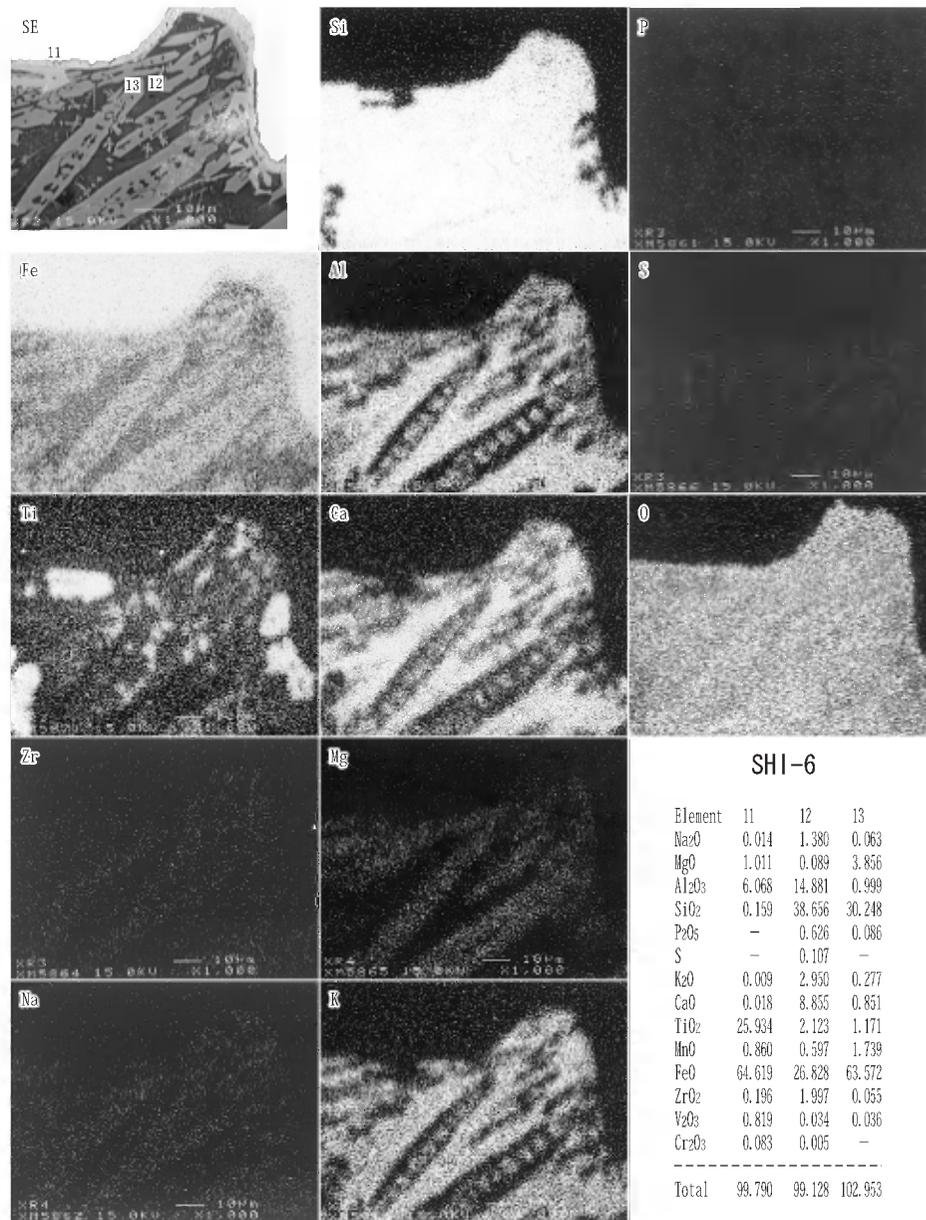


Photo. 10 含鉄炉底塊 (SHI-6) 鉍物組成の特性X線像と定量分析値

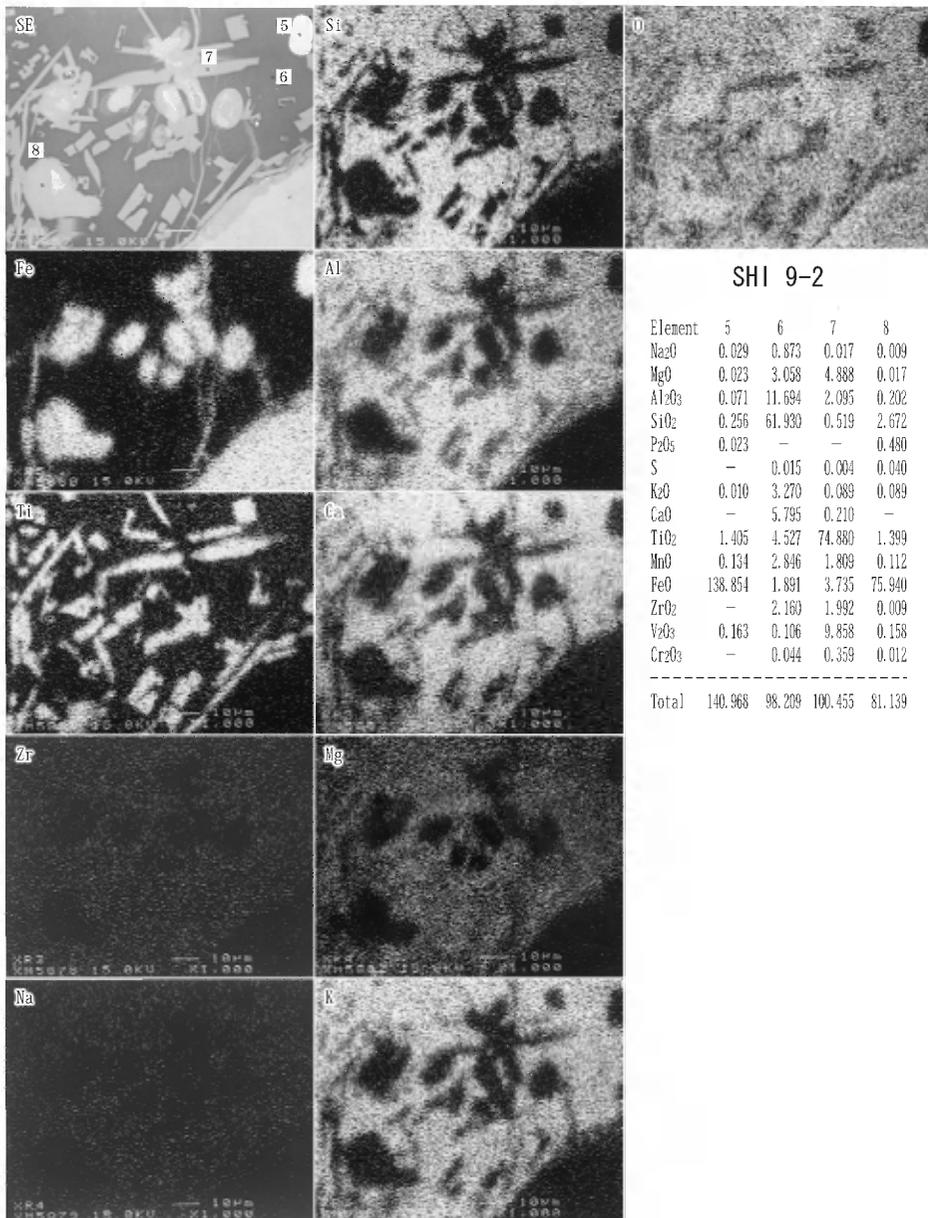


Photo. 11 鉄塊系遺物 (SHI-9) 表皮スラグの特性X線像と定量分析値

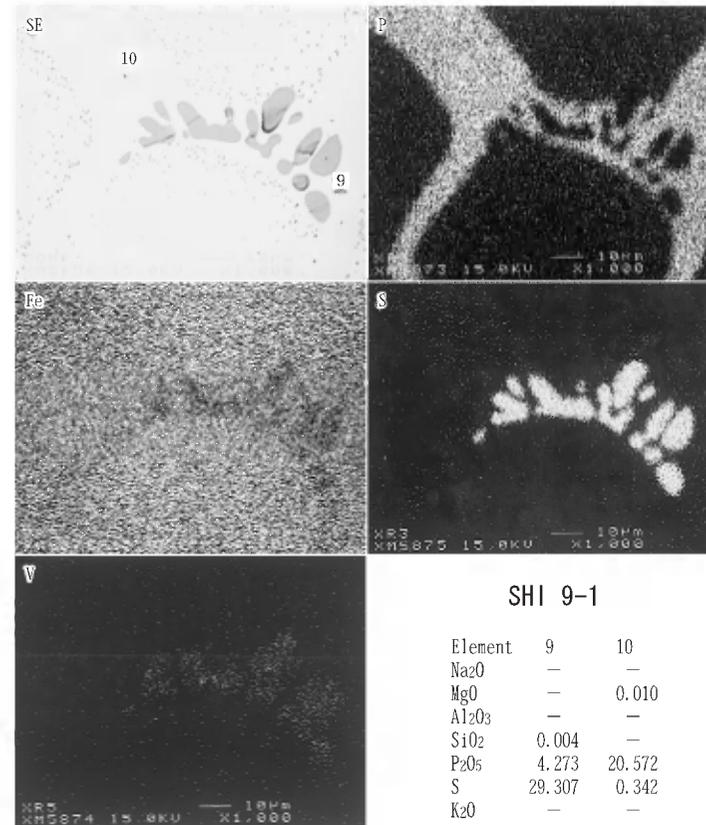


Photo. 12 鉄塊系遺物 (SHI-9) 鉄中非金属介在物の定性X線像と定量分析値

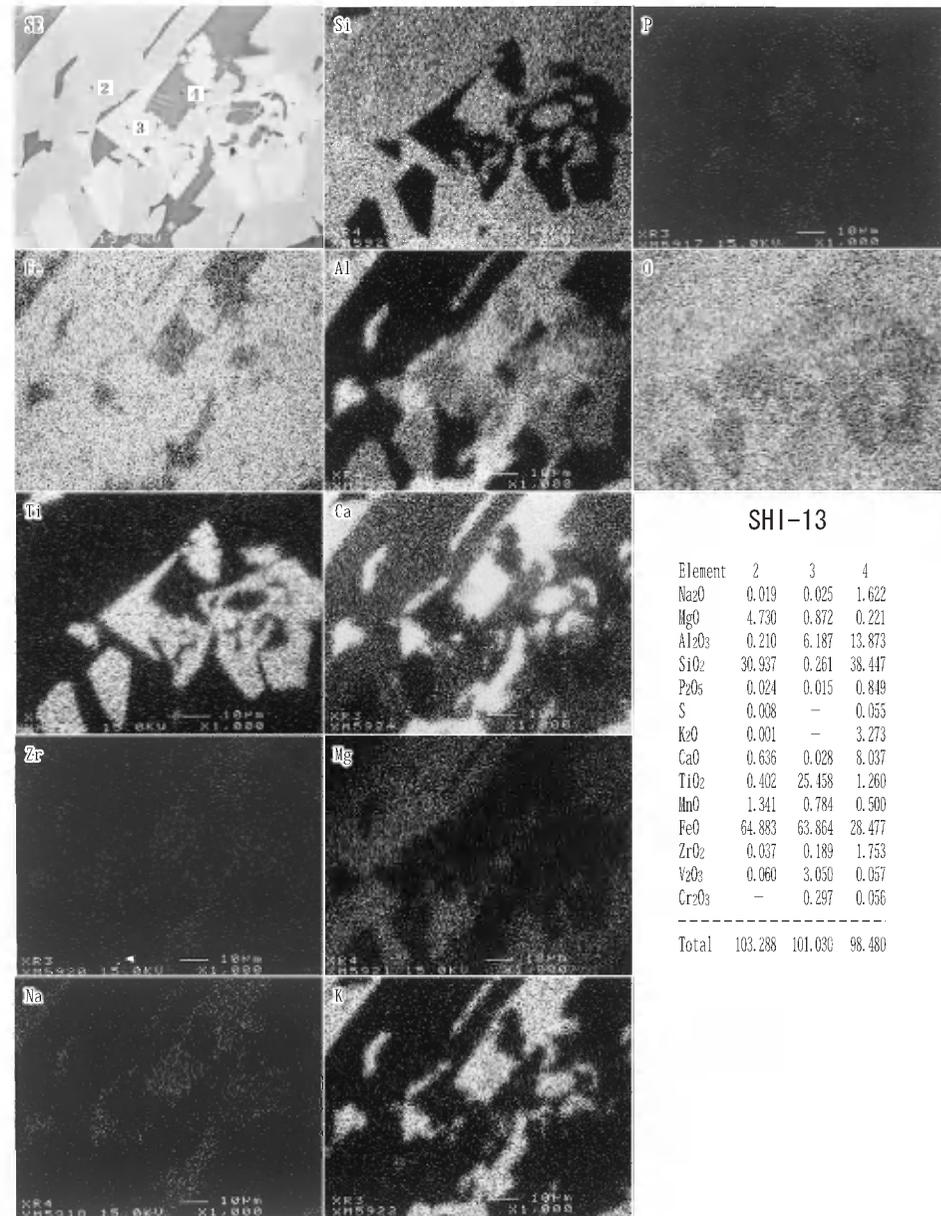


Photo. 13 含鉄流動滓（SHI-13）鉍物相の特性X線像と定量分析値

3 札ノ尾遺跡出土銅製錬関連遺物の理化学的分析調査結果

京都造形芸術大学

内田 俊 秀

1 はじめに

平成9年度の終わり頃、岡山県古代吉備文化財センターの佐藤寛介氏より、岡山県苫田郡奥津町に所在する札ノ尾遺跡から出土した銅製錬関連遺物の理化学的分析調査について依頼を受けた。銅製錬関連遺物の全体的出土量、遺物の種類については報告書の本文を参照されたい。この中から佐藤氏が、表1の遺物を分析対象遺物として選び出され、分析に供された。

表1 遺物の出土遺構と種類

試料番号	FUD-1	FUD-2	FUD-3	FUD-4	FUD-5
出土遺構	3区造成土	3区造成土	掘立柱建物2 P15	掘立柱建物2 P15	1区包含層
種類	炉壁頂部	羽口	カラミ(塊状)	カラミ(板状)	カラミ(塊状)
質重(g)	73.64	57.93	49.91	63.31	176.04

以上のように、分析対象遺物は炉、羽口、カラミの破片であり、調査目的の一つは遺物相互の作業上の関連を把握し、作業の全体を解明することである。

2 理化学的分析調査

分析調査は走査型電子顕微鏡(日本電子製、JEM-5300LV)による組成像の観察と付属のエネルギ分散型X線分析装置(同社製、JED-2001)による元素の定量分析である。測定結果を表2に示す。なお測定条件は、加速電圧20Kv、測定時間は120秒である。分析箇所は写真全体であり測定値は「*」を除き試料の全面を測定した値である。試料は小片を遺物から切りだし、エポキシ樹脂に包埋、エメリー紙およびアルミナパウダーで研磨、鏡面仕上げとし、この面を測定に供した。なおこの作業に際しては、あらかじめ佐藤氏から試料採取の許可を得、また考古学的な価値を出来るだけ損ねないよう留意した。

表2 炉壁内側、羽口、カラミのX線分析結果(Wt%)

試料No.	Fe	Cu	Si	Al	K	Ca	S	Mg	Mn	分析箇所
FUD-1	29.17	32.00	25.52	11.04	1.78	0.05	--	--	--	写真6
FUD-2	30.92	10.40	42.12	13.51	3.05	--	--	--	--	写真10
FUD-3(a)	46.16	--	33.19	15.24	0.92	2.16	2.36	--	--	写真12
FUD-3(b)	39.34	25.55	2.75	--	--	--	32.36	--	--	写真13
FUD-4	42.57	--	32.50	15.26	0.78	2.38	1.93	3.66	0.93	写真15
FUD-5*	43.01	17.43	9.71	7.46	--	0.22	22.16	--	--	写真16*

注) --は検出されなかったことを示す。 *は写真16の中央にある、白色の球状部分の測定値を示す。

3 結果と考察

写真1から5は試料FUD-1から5の外観で、写真6以降はSEMの組成像および特定元素の分布を示す面分析の写真である。写真を試料ごとに示すと、以下のようになる。

FUD-1：写真6（組成像）、写真7（写真6の珪素の分布）

写真8（写真6の鉄の分布）、写真9（写真6の銅の分布）

FUD-2：写真10（組成像）

FUD-3：写真11—13（組成像）、写真14（写真13の銅の分布）

FUD-4：写真15（組成像）

FUD-5：写真16（組成像）

江戸時代の銅製錬は硫化銅鉱を主な鉱石とし、鉱石を焼く「焙焼」、次にくる鉱石を溶かし鉞を作る「素吹き」、そして「間吹き」と続く。鉱山の近くではこの「間吹き」まで行われるのが一般的で荒銅まで仕上げ、大阪へ出荷した。

以上の前提にたち試料の考察を進めると、試料FUD-1の写真6は炉壁の内側でガラス化した部分であり、分析値は鉄と銅が高い値を示し、カリウムもみられるところから、木炭を燃料とした「素吹き」で使われたものと考えられる。なお写真中の、四角い灰色の結晶状の成分は約6割を鉄が、2割を銅がしめており、皮の組成ではなくそれを作る際に発生したスラグに近い。また四角い結晶状のものをかこむ基底は珪酸塩主体のものである。なお素吹きは、この遺跡の時代（17世紀後半以降）はほとんどが「地床」形式の浅い窪みを使う製錬方法であることから、炉壁片はこの破片であろう。

試料FUD-2は羽口の先端部であり熱影響でガラス化している。写真10は組成像で、珪酸塩主体の基底の中に金属の化合物が結晶状にみられる。成分の構成が似ていることから、FUD-1と同様の工程で使用された可能性が高い。

試料FUD-3は、色沢が全体的に褐色、一部黒色のカラミ。写真11から13までは組成像で写真12は写真11の右半分の一部を拡大したもので、長細い結晶状のものはファイアライトであろう。写真13は写真12の左半分をほぼ占める大きな白色の球状化合物を拡大したもので、写真14はそこに含まれる銅の分布を示している。分析値を表2のFUD-3(b)に示すが、これは鉞の組成に近い。従って試料はカラミであるところから、小球状の鉞を含む素吹きの工程で排出されたスラグとみられる。

試料FUD-4は表面が波打つ板状で色沢は黒色。写真15は組成像で、微細な鉄化合物の結晶がみられる。白い小球の成分は鉄が高い。成分分析値から銅が検出されていないので、銅製錬かどうかも含めて断定は出来ないが、この可能性は高い。

試料FUD-5は試料FUD-3と良く似たものである。特に白色部分の分析値はFUD-5※に示すように、似た傾向を示している。同様の工程で排出されたものと考えられる。

以上5点の分析結果から、鉱山の近くで行われた「山元製錬」と呼ばれるもので、鉞を作る工程での遺物が主体を占めていると考えられる。

<参考文献>

- ① 坪井美雄『銅鉞製錬法』丸善、昭和11年
- ② (財)大阪市文化財協会『住友銅吹所発掘調査報告』同協会、1998

写真1



写真2

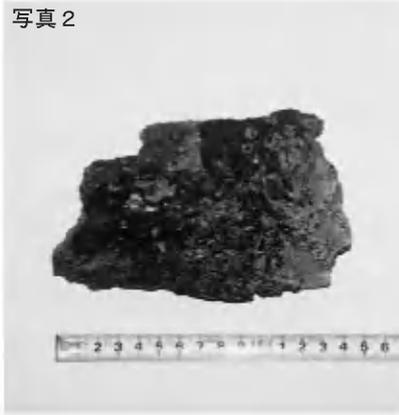


写真3



写真4



写真5



写真6

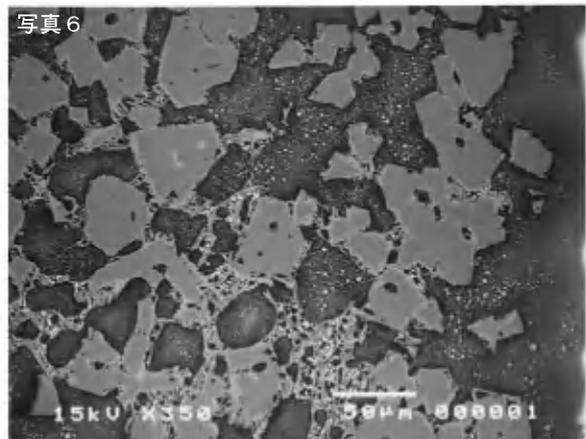


写真7

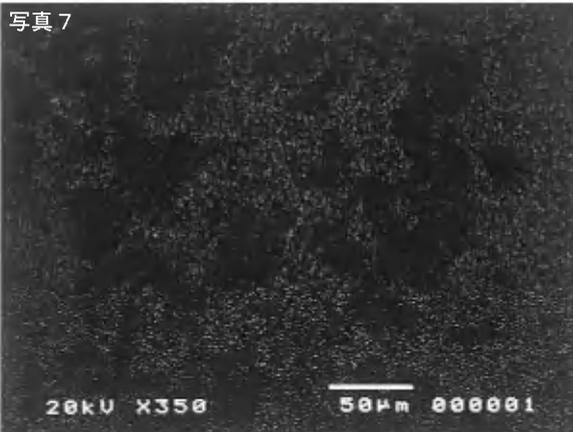


写真8

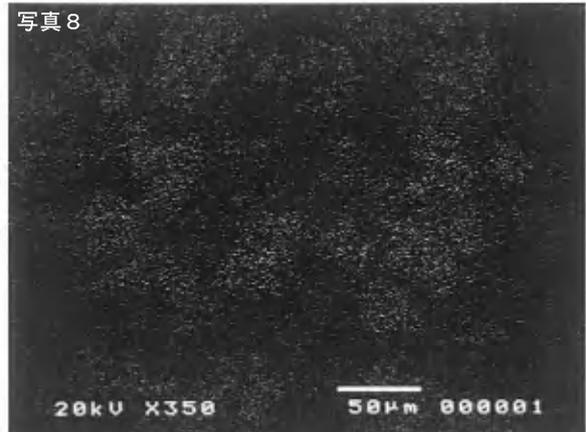


写真9

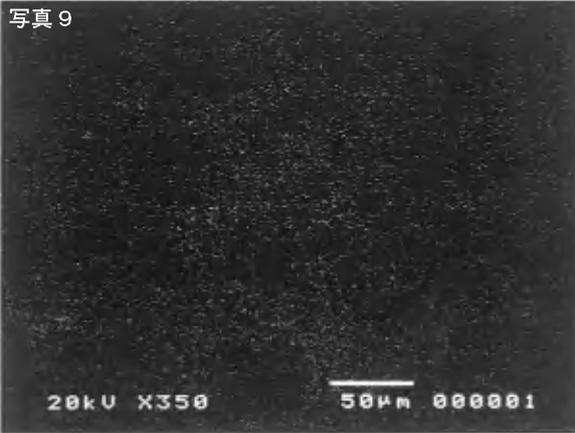


写真10

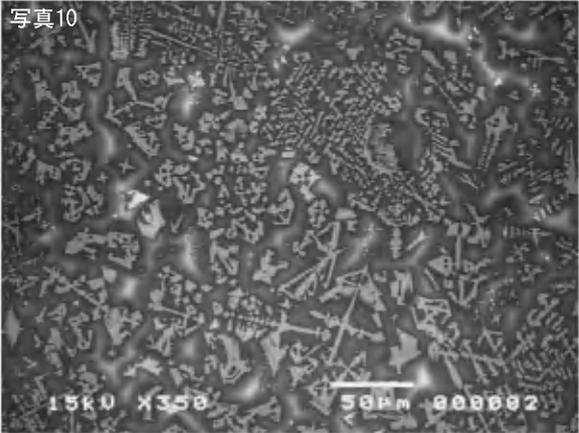


写真11



写真12

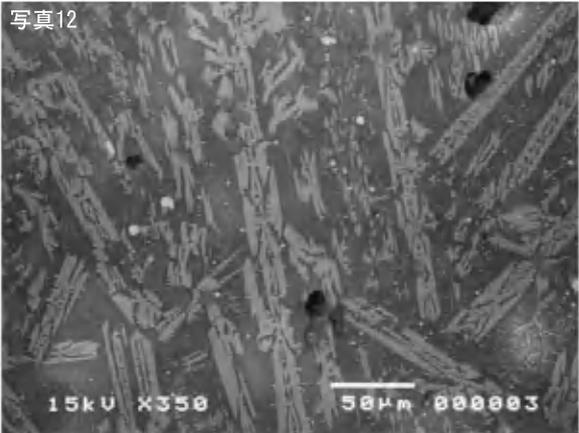


写真13

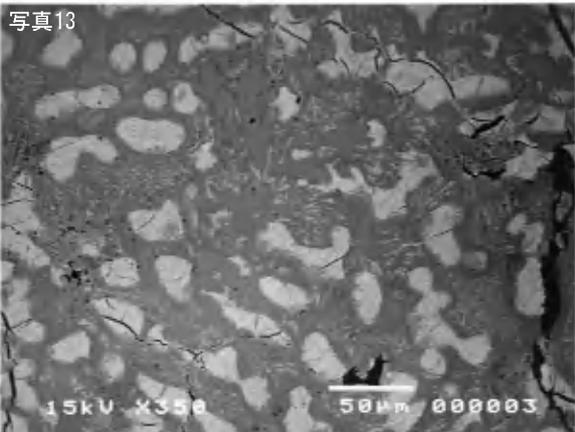


写真14

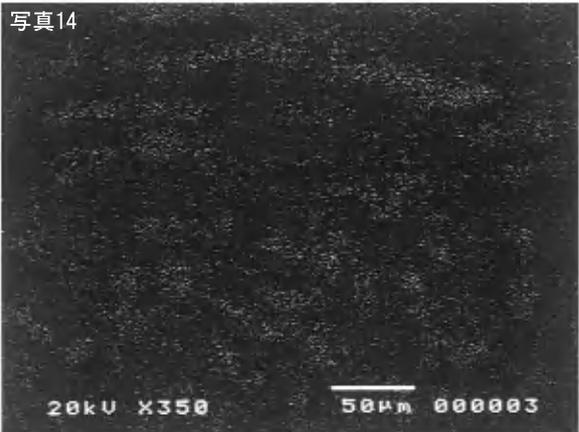


写真15

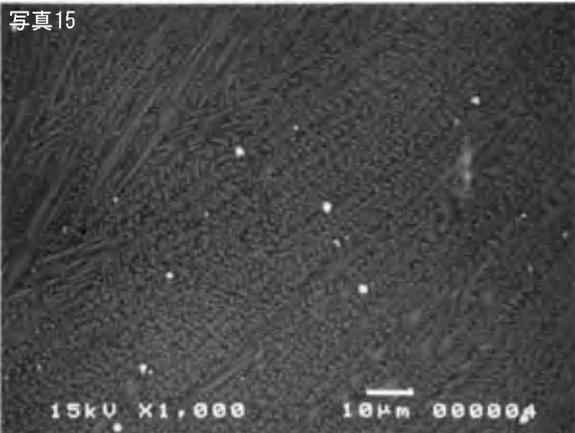
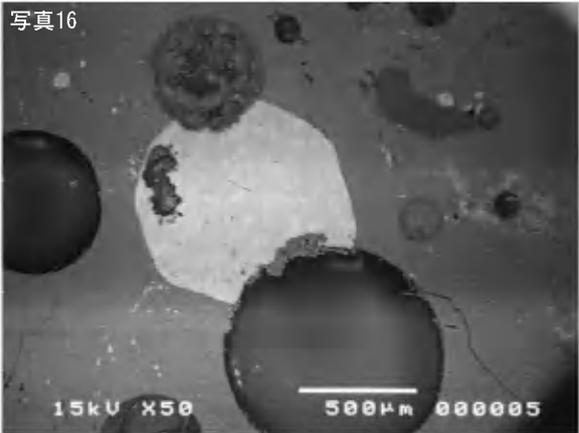


写真16



河内構遺跡

1 遠景
(北西上空から)



2 調査区中央全景
(上空から)

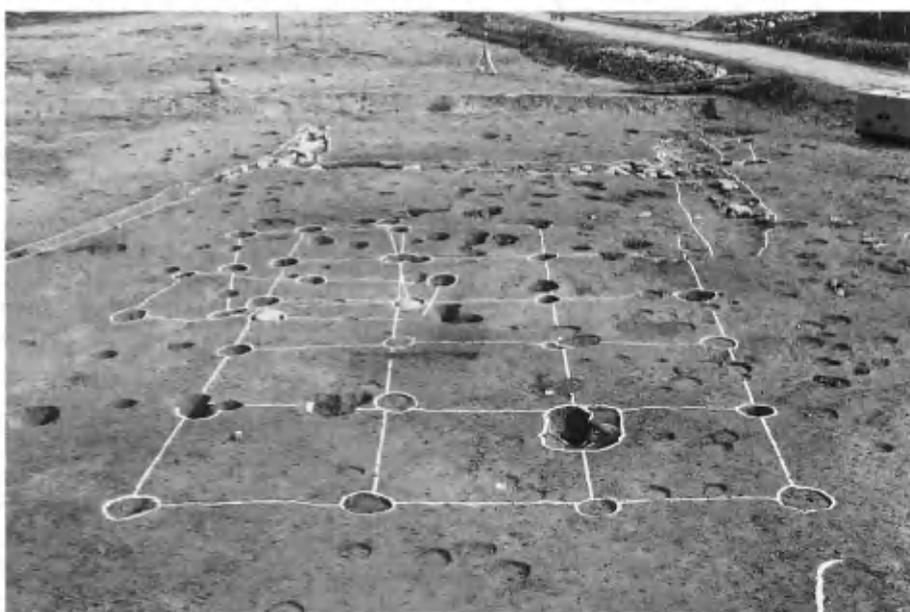


3 掘立柱建物 2・3
(南西から)





1 掘立柱建物 6
(北から)



2 掘立柱建物 8 ~
10・溝 4
(南西から)



3 方形周溝 1・2
(南から)

1 土壙墓7
(南から)



2 土壙墓7
遺物出土状況
(南から)

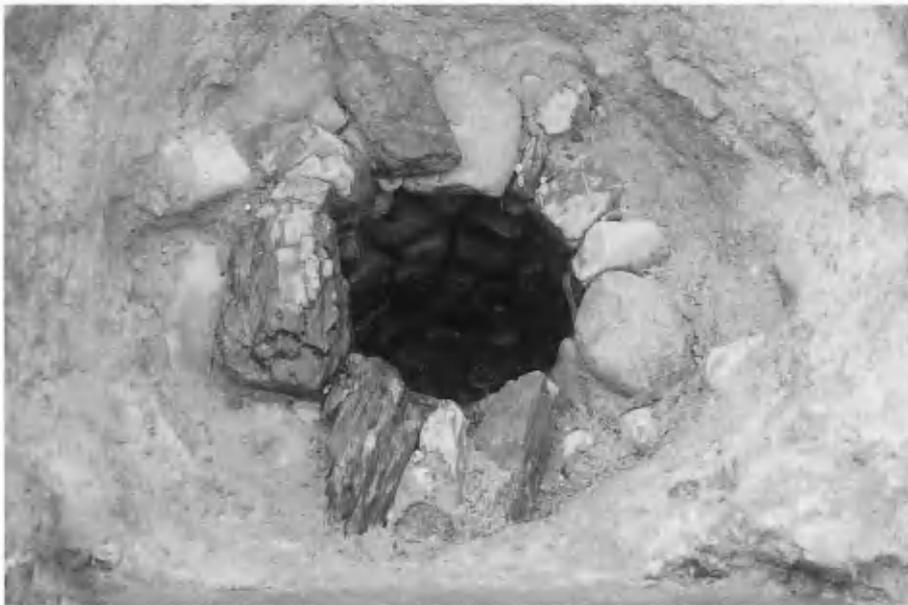


3 土壙墓8
(北西から)





1 井戸 1
(北から)



2 井戸 2
(南東から)



3 井戸 3
(西から)

河内構遺跡

1 溝1・柱穴列3
(南東から)



2 溝1・土壇2
～4(北東から)



3 溝2
(南西から)

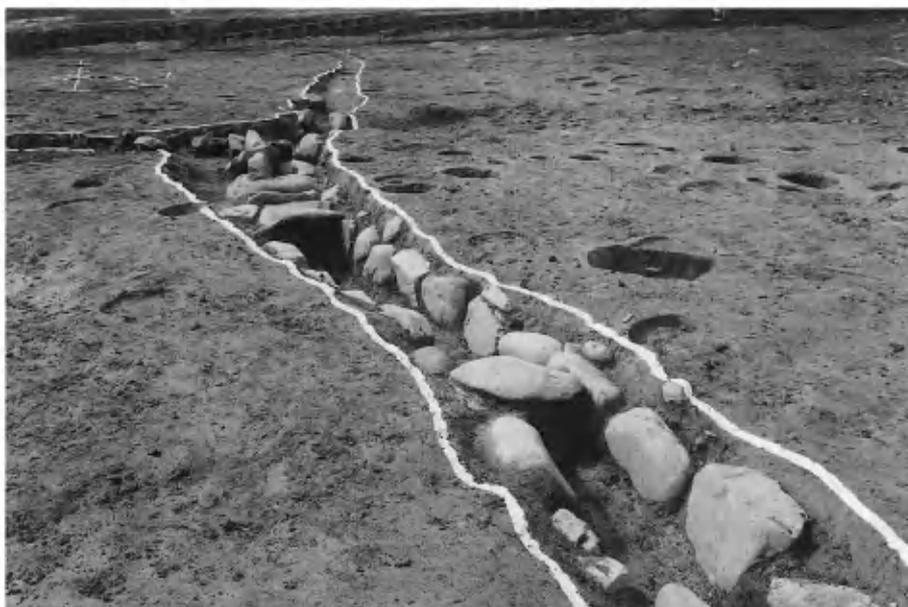




1 溝2
(北から)



2 溝3
(北東から)

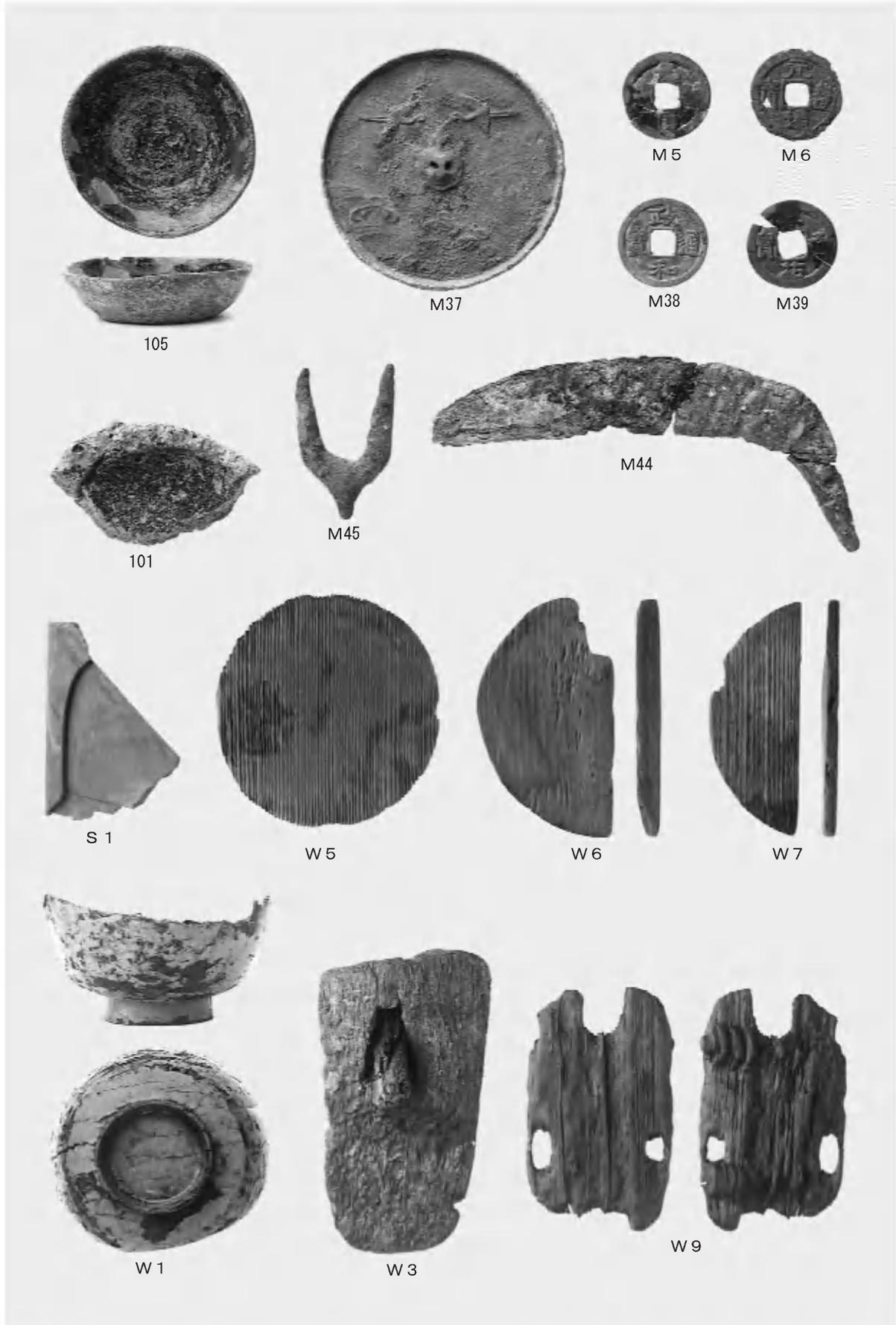


3 溝4
(北から)

河内構遺跡



出土遺物①



1 遠景
(北西から)



2 城郭全景①
(北から)



3 城郭全景②
(西から)





1 曲輪2
(西から)



2 曲輪3
(西から)



3 曲輪6・豎堀1
(東から)

河内城跡

1 曲輪8・9
(東から)



2 曲輪10・11、
犬走3周辺
(南上空から)



3 曲輪10
(西から)





1 堀切1・2
(北から)



2 堀切2
底面掘削痕
(北から)



3 堀切1・2周辺
(北東上空から)

河内城跡

1 豎堀1
(南から)

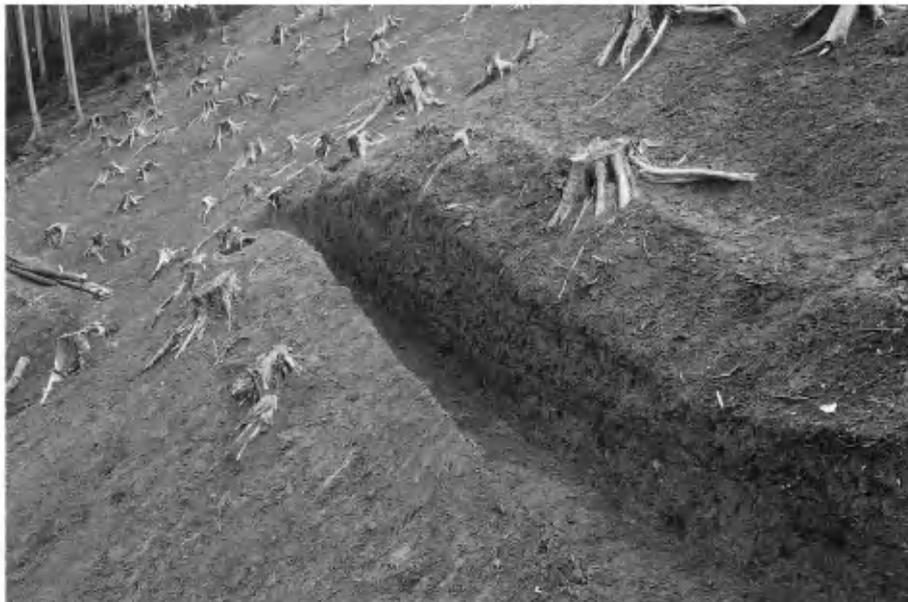


2 切岸・土塁1
(西から)



3 切岸・土塁1
つぶて石出土状況
(南西から)





1 盛土1
土層堆積状況
(西から)



2 犬走4
(西から)



3 曲輪10・11、
犬走3(南から)

河内城跡

1 集石墓 1・2
(東から)

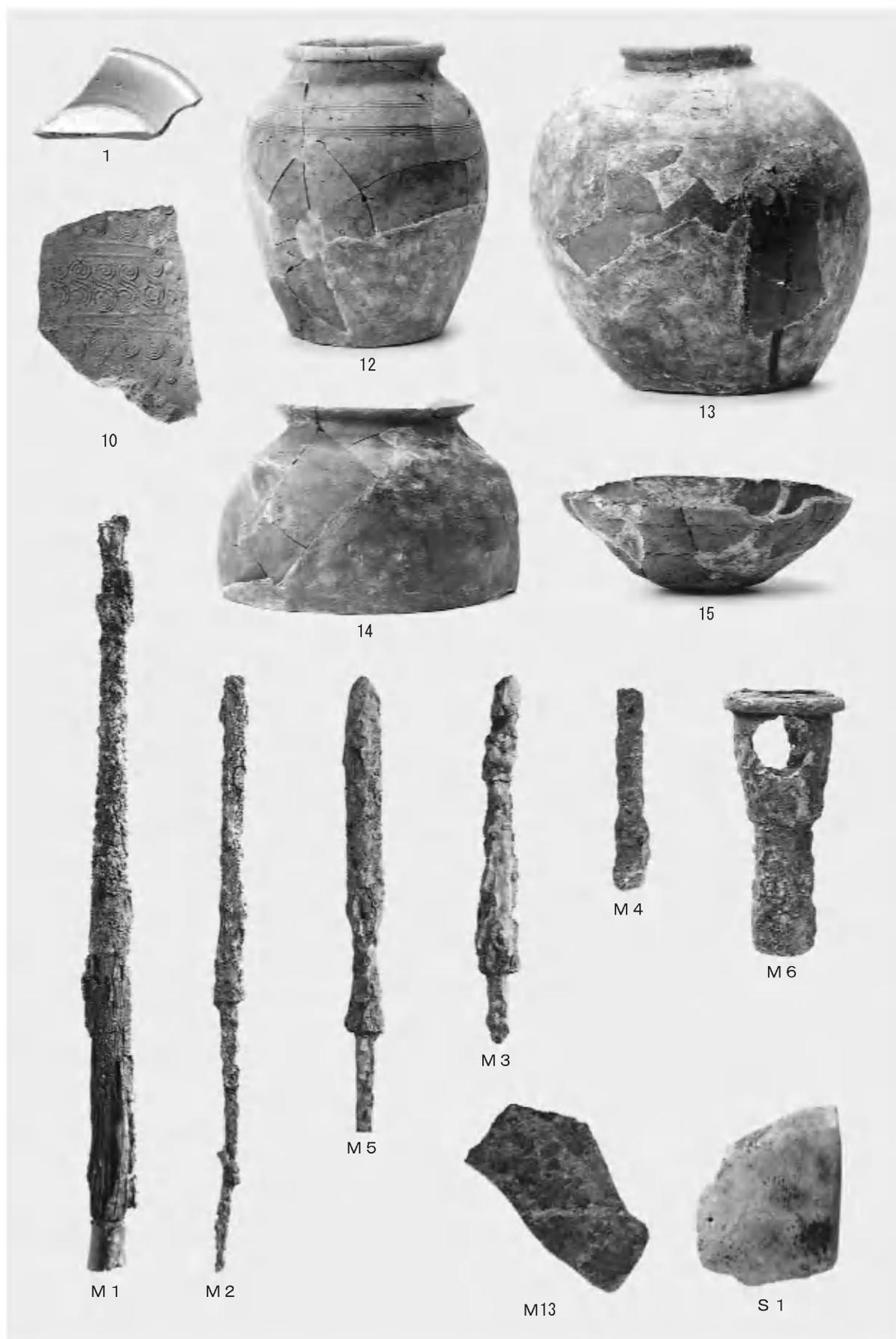


2 焼成土壇 1
(西から)



3 炭窯 1
(北から)





出土遺物

河内遺跡

1 遠景
(北から)



2 南側調査区全景
(北上空から)

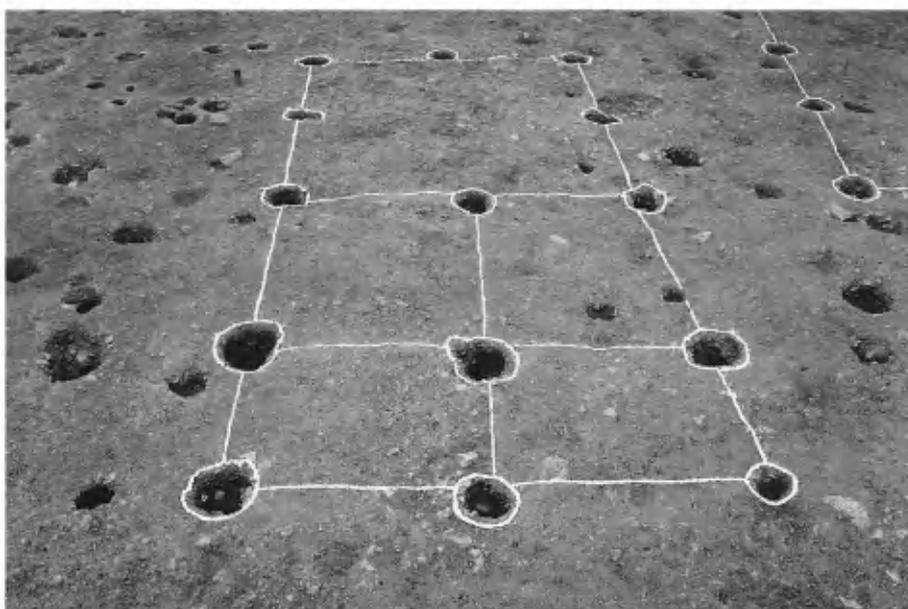




1 北側調査区全景
(西から)



2 竪穴住居 1
(南西から)



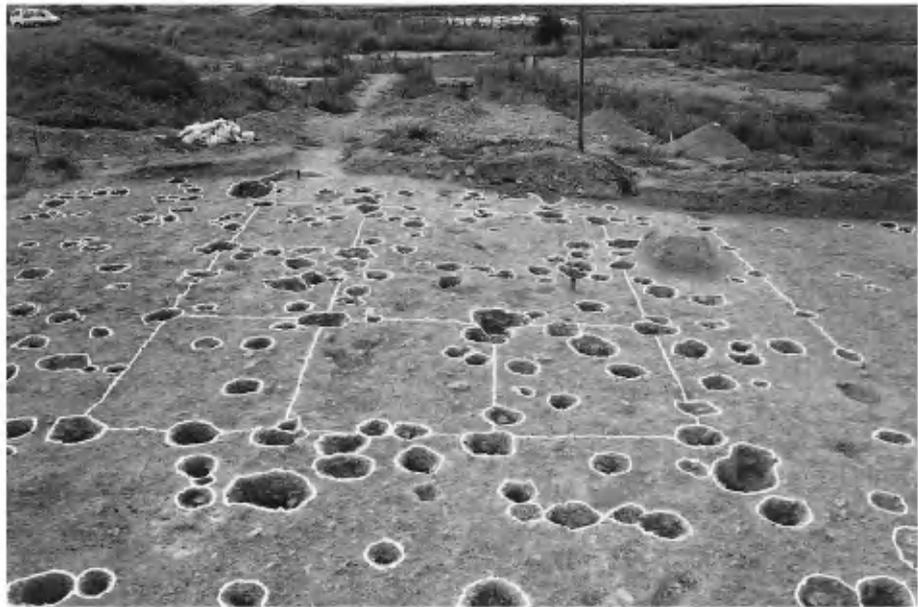
3 掘立柱建物 4
(南東から)

河内遺跡

1 掘立柱建物6
(北西から)



2 掘立柱建物7・8
(南東から)



3 掘立柱建物8 P12
土錘出土状況
(南から)





1 土壙墓 1
(南東から)

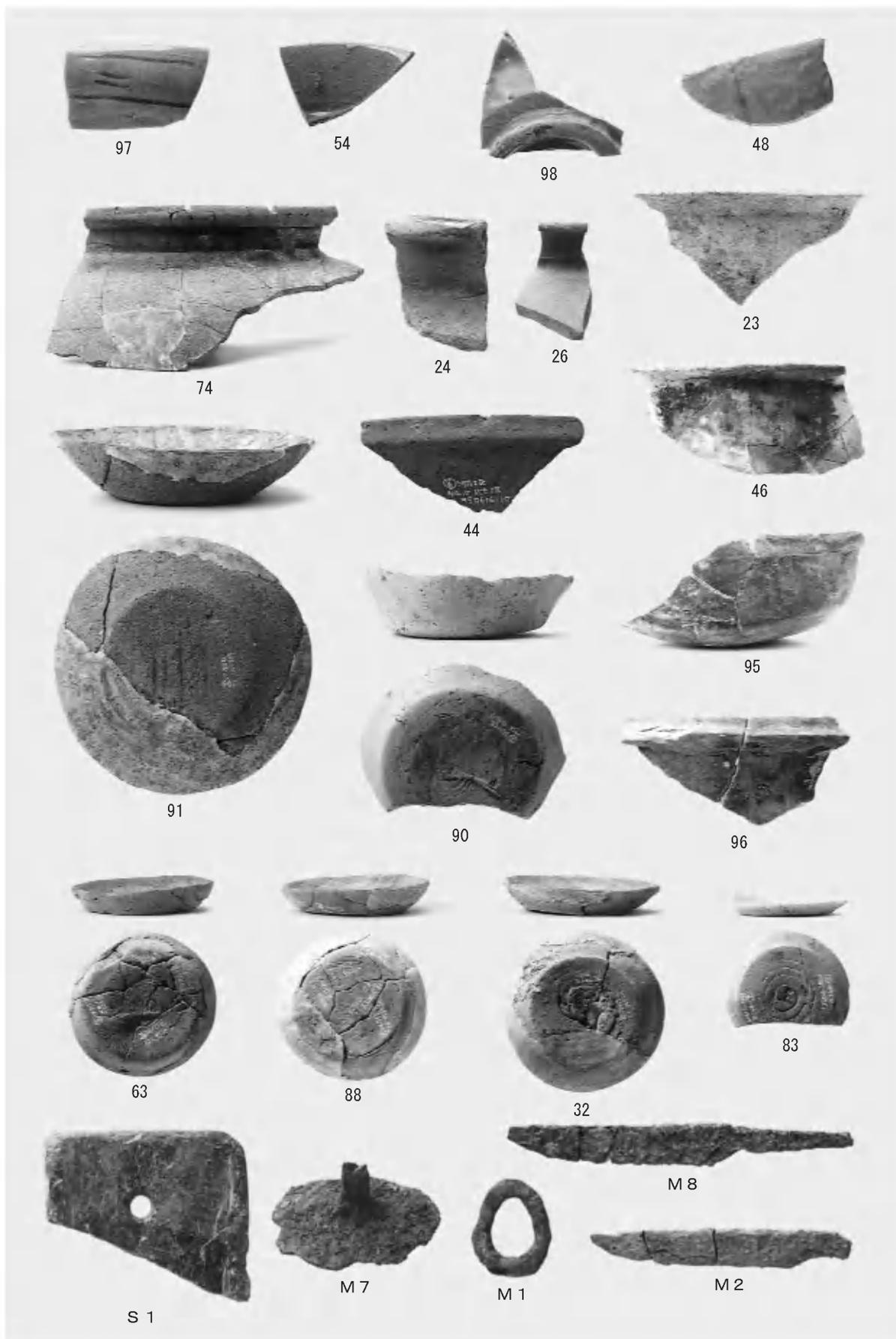


2 土壙 6
(南東から)



3 土壙 18
(東から)

河内遺跡



出土遺物



1 遠景
(南上空から)



2 調査区全景
(南西から)

ナル林遺跡

1 竪穴住居 1・2
土層堆積状況
(北東から)

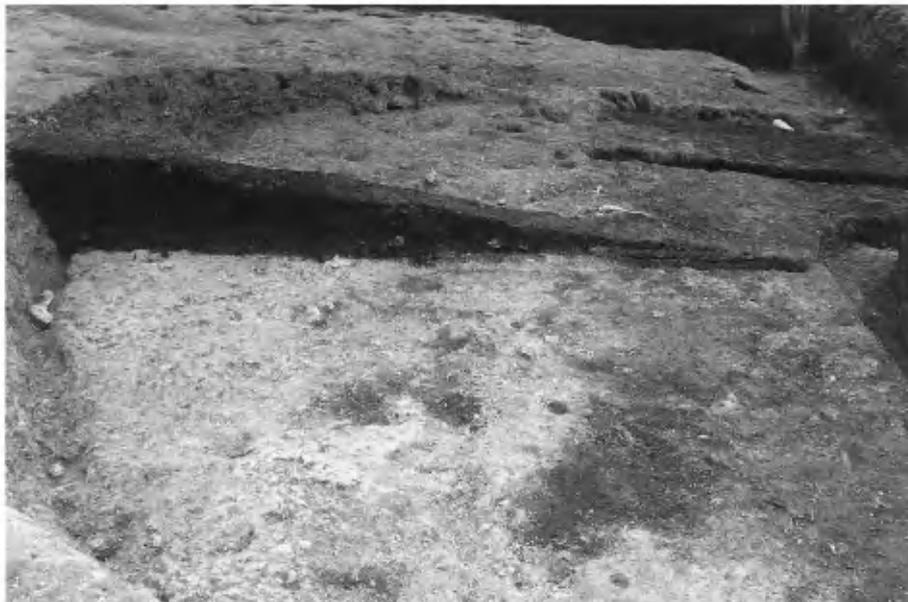


2 竪穴住居 1・2
完掘状況
(南から)



3 竪穴住居 2
遺物出土状況
(北西から)





1 竪穴住居3・4
土層堆積状況
(北西から)



2 竪穴住居7
(南西から)



3 袋状土壌1～3
(北西から)

ナル林遺跡

1 袋状土壙 5
(南から)

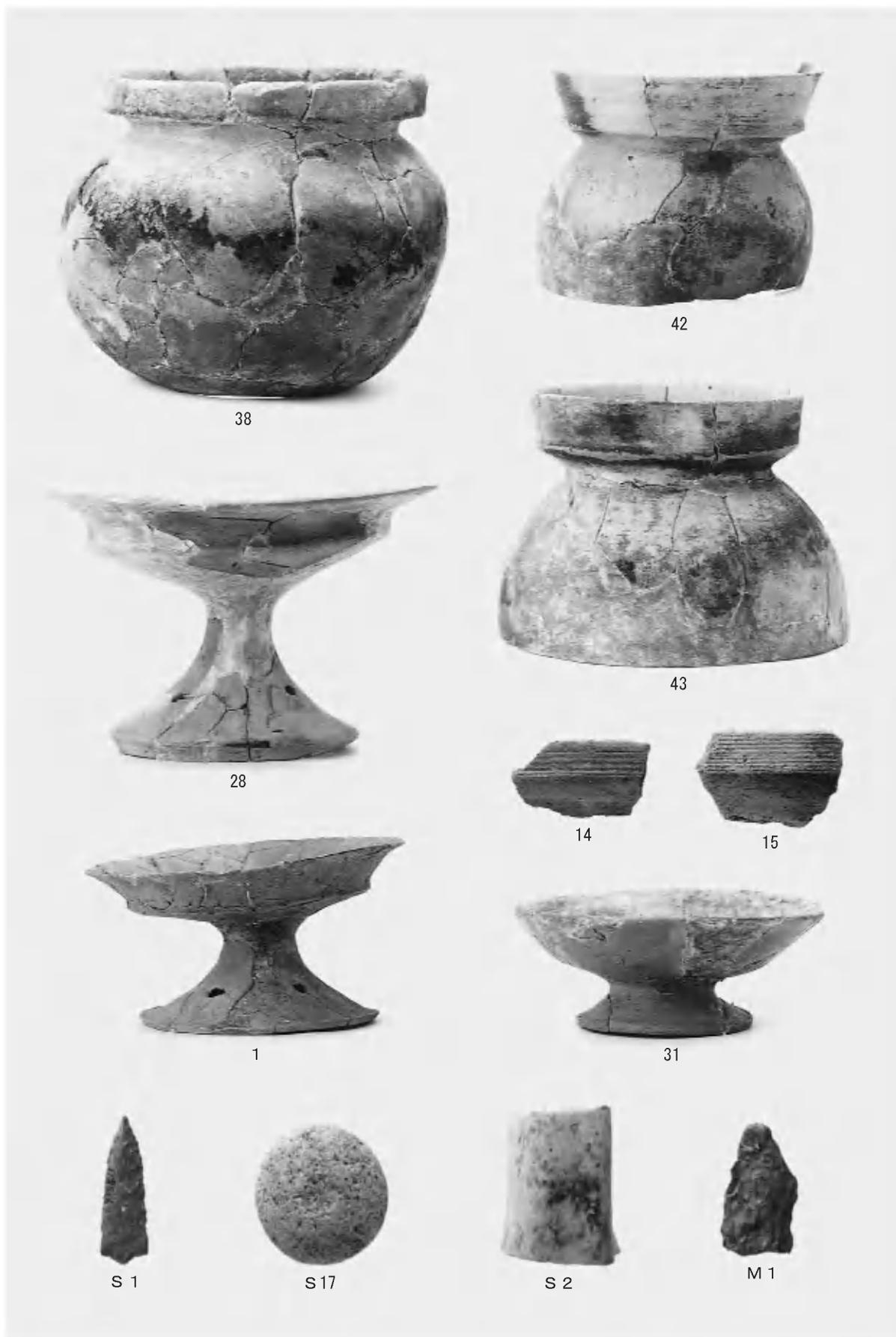


2 袋状土壙 6
(南から)



3 袋状土壙 8
(南から)





出土遺物

久田上原城跡

1 遠景
(北西から)



2 城郭全景
(北西上空から)



3 切岸・土塁1
つぶて石出土状況
(西から)





1 曲輪3周辺
(南上空から)



2 曲輪3集石
(北東から)



3 焼成土壌1
(東から)

久田上原城跡

1 城郭全景
(北東上空から)



2 曲輪1から北西
方向を望む

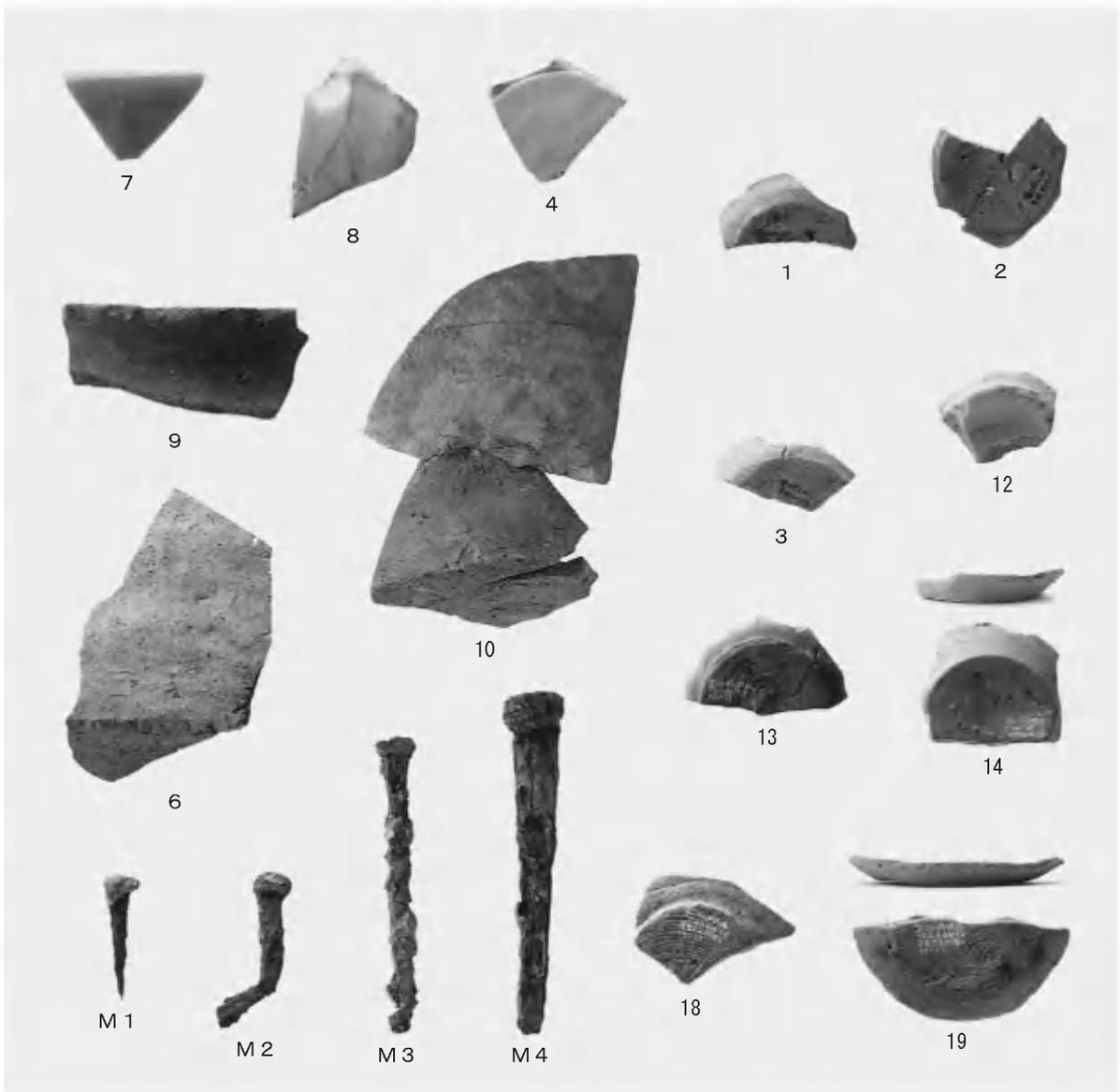


3 土壇状遺構1
(北西から)





1 曲輪 2
(南西から)



2 出土遺物

北条高下遺跡

1 遠景
(南から)



2 T1
(東から)



3 T3
(西から)





1 T4
(南西から)



2・3 奥津町教育委員会
保管

2 出土・採集遺物

峪畑遺跡

1 遠景
(北から)



2 1区全景
(南東から)



3 竪穴住居 1
(西から)





1 焼成土壌 1
(北から)



2 2区土層堆積状況
(北西から)

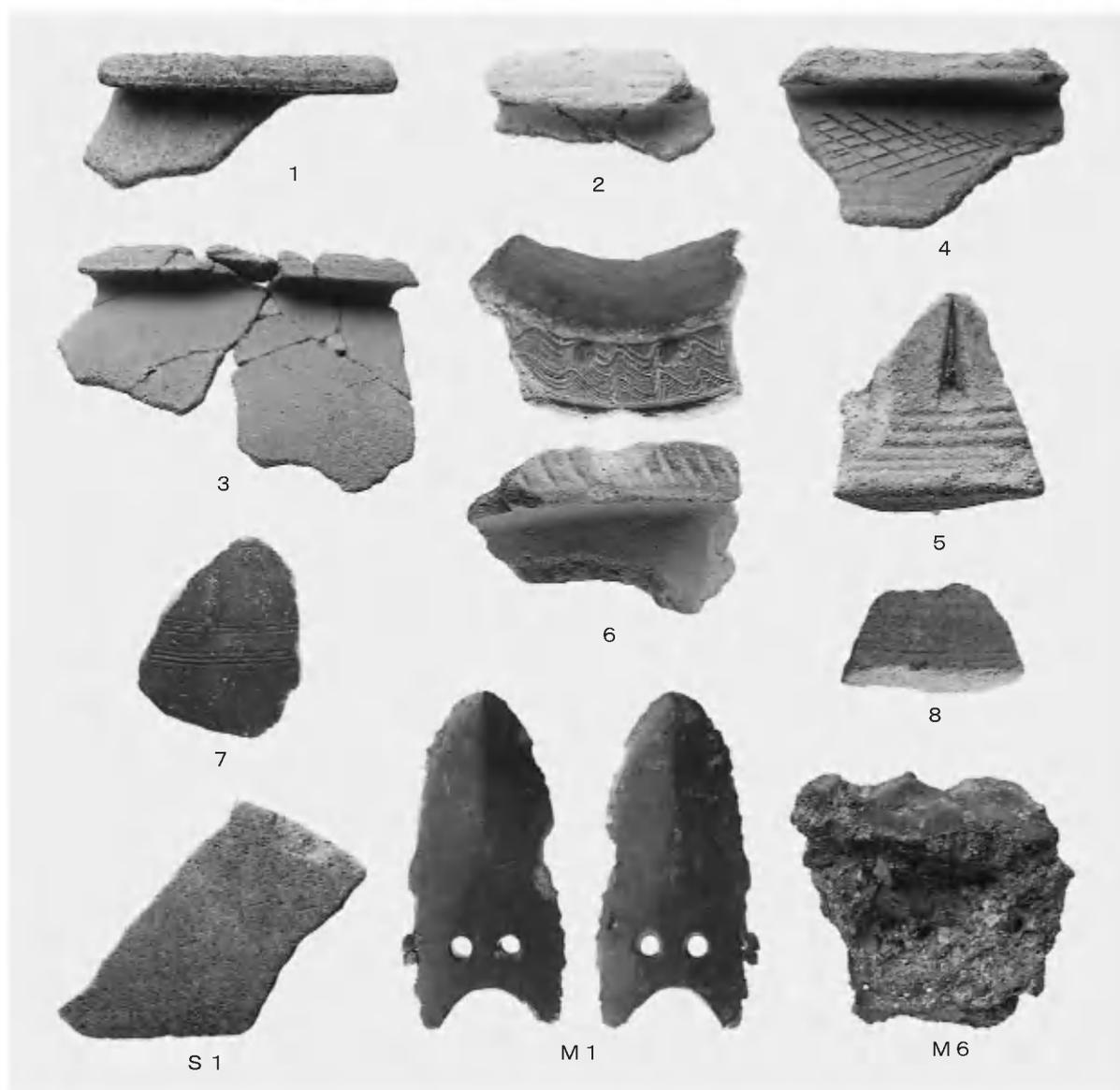


3 製鉄炉 1
(北西から)

峪畑遺跡



1 2区完掘状況
(北西から)



2 出土遺物



1 遠景
(西から)



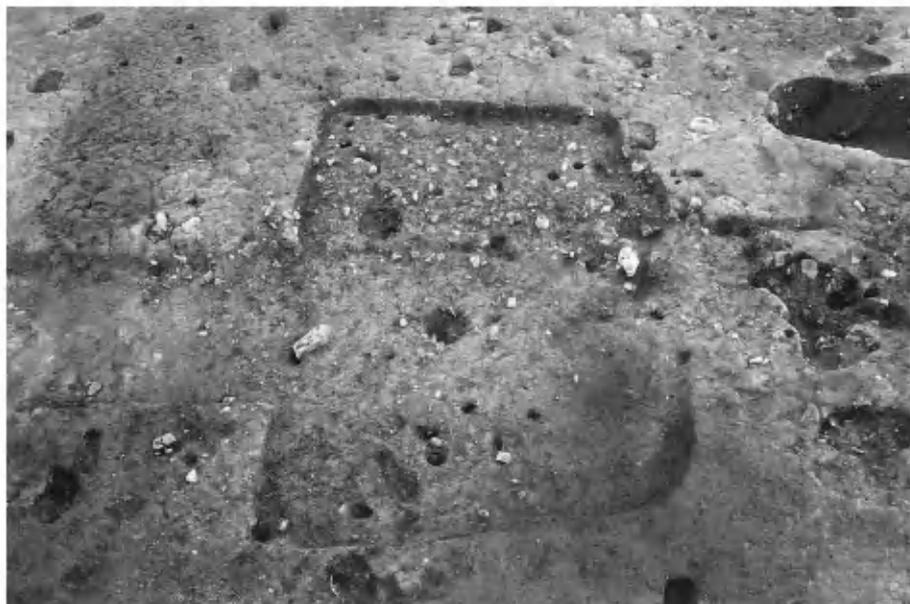
2 調査区全景
(北東から)



3 竪穴住居 1
遺物出土状況
(東から)

岡 遺 跡

1 竪穴住居 2
(西から)



2 竪穴住居 3
(西から)



3 土壇 1
遺物出土状況
(北西から)





1 袋状土壙1(南から)



2 袋状土壙2(南から)



3 出土遺物①



出土遺物②



1 遠景（南西から）



2 城郭全景（北西上空から）

比丘尼ヶ城跡

1 堀切1・2
(南西から)



2 堀切3の手前から
曲輪1・2を望む



3 堀切3
(北東から)





1 調査区全景①
(東から)



2 調査区全景②
(北東から)



3 炭窯1①
(北から)

比丘尼ヶ城跡

1 炭窯1②
(北東から)



2 炭窯1
焼成部内面
(上方から)



3 出土遺物





1 城郭全景
(南東上空から)



2 調査区全景①
(東上空から)



3 調査区全景②
(西上空から)

城 峪 城 跡

1 曲輪4
(北西から)



2 曲輪5
(南東から)



3 溝1・曲輪6
(北西から)





1 曲輪7
(北東から)



2 曲輪8~11、
豎堀4
(北から)



3 曲輪8
(東から)

城 峪 城 跡

1 曲輪9
(北西から)



2 堀切1・2
(南西から)



3 堀切3・4
(南東から)





1 豎堀 1
(北から)



2 豎堀 2
(北西から)



3 豎堀 3
(南西から)

城 峪 城 跡

1 切岸・土塁1
つぶて石出土状況
(東から)



2 切岸・土塁2
(西から)



3 切岸・土塁2
つぶて石出土状況
(北から)





1 切岸・土塁 2、3
(北東から)



2 切岸・土塁 3
(東から)



3 切岸・土塁 3
盛土土層断面
(北東から)

城 峪 城 跡

1 下層調査1区
製鉄炉1周辺
(南東から)



2 下層調査1区
土壌8
鉄滓出土状況
(北から)



3 下層調査1区
竪穴住居1周辺
(東から)





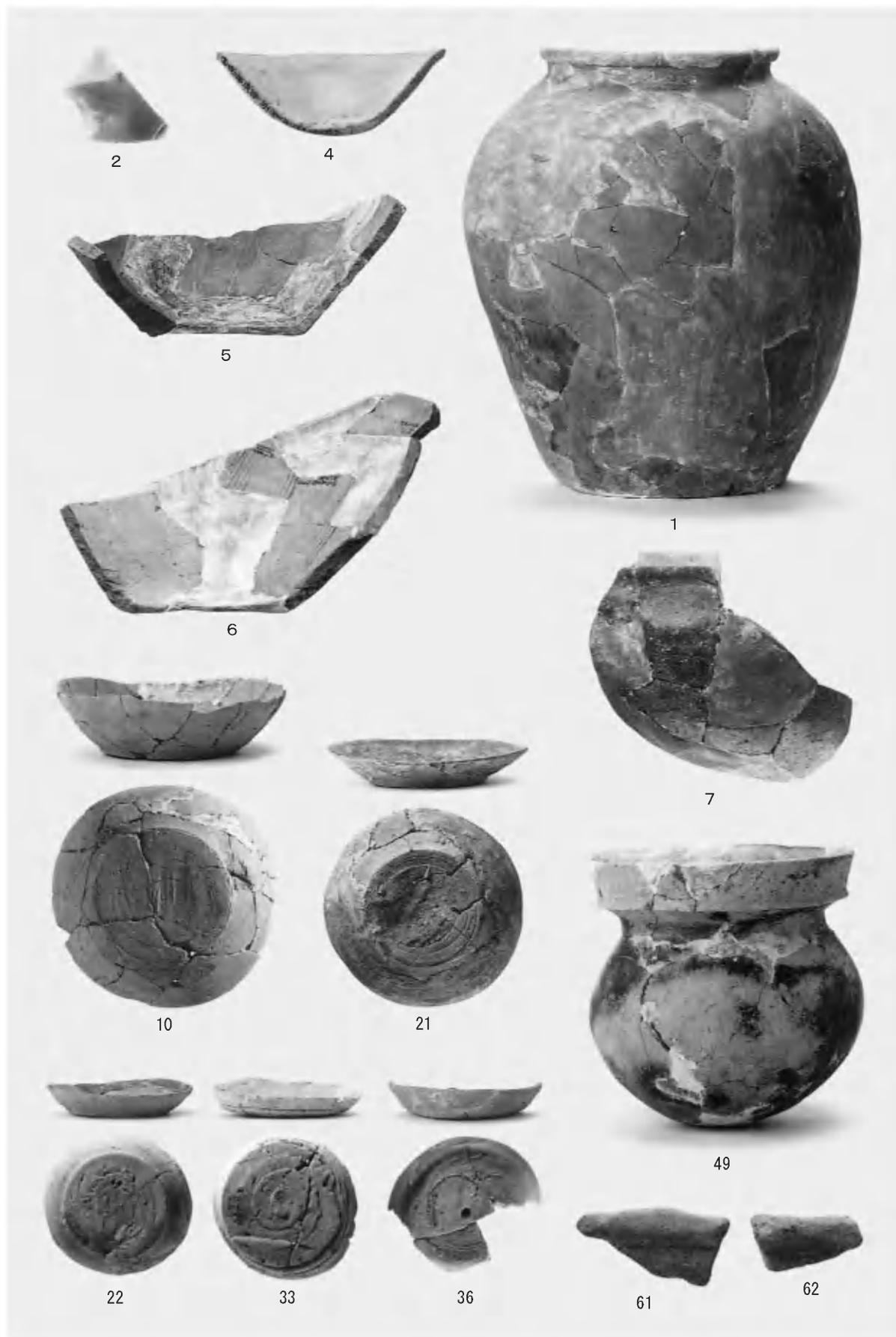
1 下層調査2区
炭窯1①
(北東から)



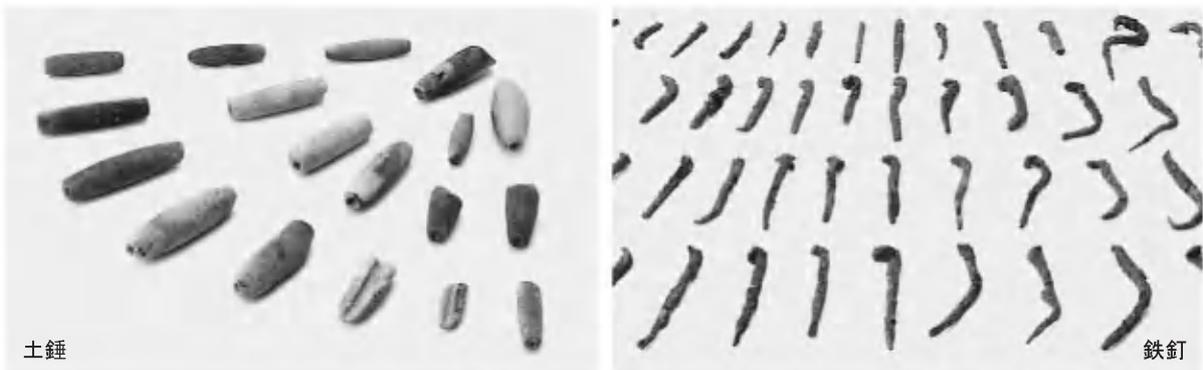
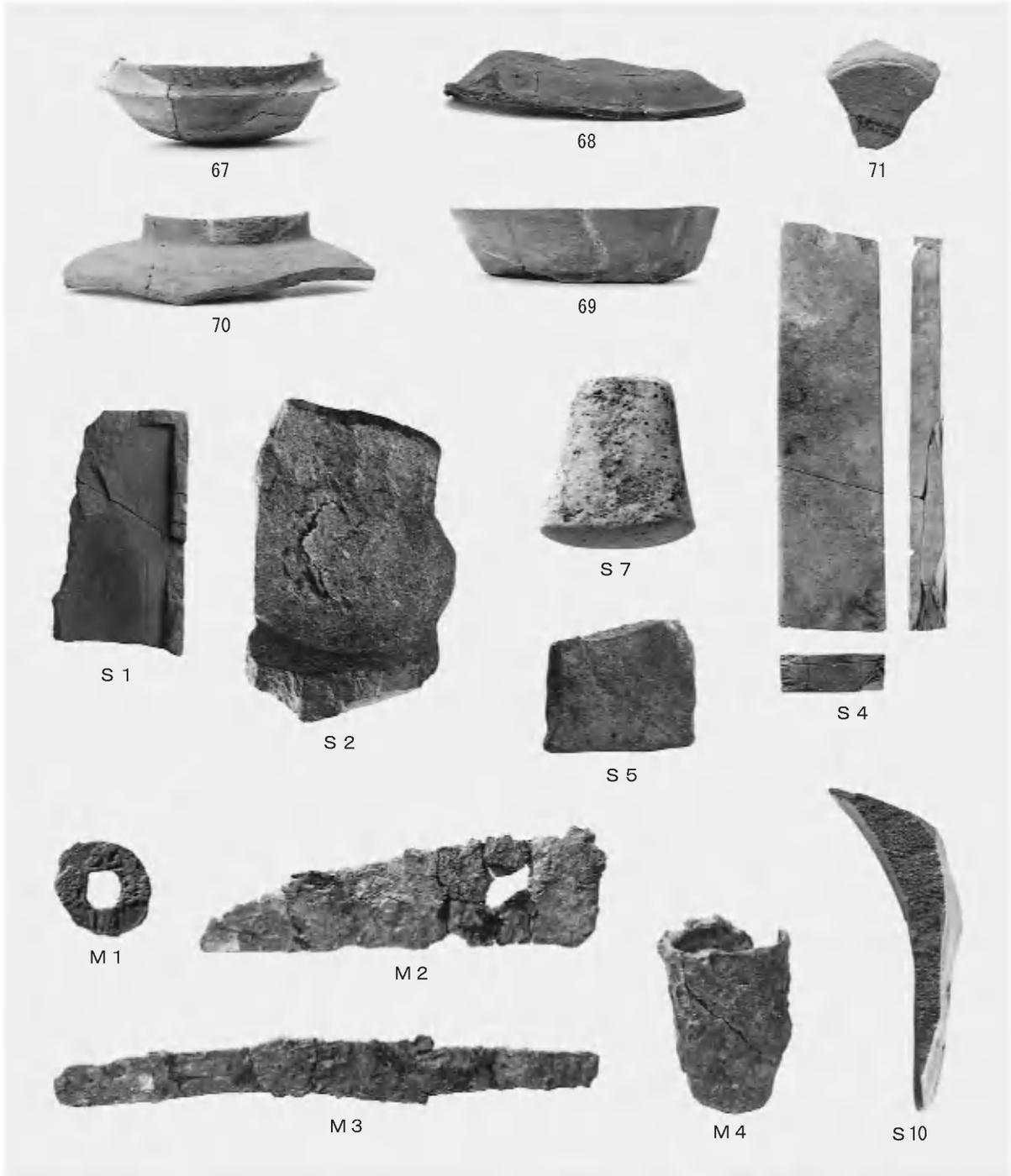
2 下層調査2区
炭窯1②
(南東から)



3 下層調査2区
炭窯1
焼成部内面
(南東から)



出土遺物①



出土遺物②

札ノ尾遺跡

1 遠景
(南東から)



2 調査区全景
(南東上空から)



3 掘立柱建物 1
(南西から)





1 掘立柱建物2
(東から)



2 土壙墓4 (北東から)



3 土壙墓7~10 (南東から)



4 土壙墓13 (南東から)



5 井戸1 (東から)



6 土壙4 (南東から)



7 土壙5・6、溝1 (北東から)

札ノ尾遺跡



出土遺物①



報告書抄録

ふりがな	こうちのかまえいせき	こうちじょうあと	こうちいせき	なるばやしいせき	くたかみのほらじょうあと	ほうじょうこうげいせき	さこはたいせき
書名	河内構遺跡	河内城跡	河内遺跡	ナル林遺跡	久川上原城跡	北条高下遺跡	岨洲遺跡
ふりがな	おかいせき	びくにかじょうあと	しろざこじょうあと	ふだのおいせき			
書名	岡遺跡	比丘尼ヶ城跡	城峪城跡	札ノ尾遺跡			
副書名	苦田ダム建設に伴う発掘調査						
巻次	1						
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	170						
編者名	江見正己 根木智宏 佐藤寛介 松本和男 高畑知功 下澤公明 岡田博 島崎東 宇垣匡雅 亀山行雄 高田恭一郎 渡邊恵里子 小嶋善邦						
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター						
所在地	〒701-0136 岡山市西花房1325-3 TEL 086-293-3211						
発行機関	岡山県教育委員会						
所在地	〒700-8570 岡山市内山下2-4-6 TEL 086-224-2111						
発行年月日	2003年2月28日						

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こうちのかまえいせき 河内構遺跡	こうちあざかまえ 河内字カマ江1006-1他	33603		35°09'02"	133°54'04"	1995.9~1996.3	5,580	苦田ダム建設に伴う埋没予定地および湖岸道路建設
こうちじょうあと 河内城跡	こうちあざおみずしも 河内字青水987-12他			35°08'56"	133°54'10"	1996.9~1997.2 1997.4	7,960	
こうちいせき 河内遺跡	こうちあざおきた 河内字沖田49他			35°08'45"	133°54'06"	1995.4~9 1997.1	4,850	
なるばやしいせき ナル林遺跡	くろきあざなるばやし 黒木字ナル林278-4他			35°08'50"	133°53'39"	1997.6~8	1,150	
くたかみのほらじょうあと 久川上原城跡	くたかみのほらあざしろやま 久川上原字城山150-1他			35°08'26"	133°53'47"	1995.10~11 1996.7	1,305	
ほうじょうこうげ 北条高下遺跡	くたしものほらあざほうじょうこうげ 久田下原字北条高下			35°08'12"	133°53'23"	1998.2	190	
さこはたいせき 岨洲遺跡	くたしものほらあざさこはた 久田下原字岨洲307他			35°08'03"	133°53'27"	1995.11 1997.5~7	620	
おかいせき 岡遺跡	くたしものほらあざおか 久田下原字岡315他			35°08'02"	133°53'14"	1995.10 1997.4~6	1,260	
びくにかじょうあと 比丘尼ヶ城跡	くたしものほらあざやたに 久田下原字矢谷771-1他			35°07'50"	133°53'20"	1997.8~1998.1 1998.4~5	2,330	
しろざこじょうあと 城峪城跡	くたしものほらあざしろざこ 久田下原字城峪827他			35°07'40"	133°53'25"	1996.4~12 1997.4~9	20,000	
ふだのおいせき 札ノ尾遺跡	くたしものほらあざふだのお 久田下原字札ノ尾906他		35°07'47"	133°53'13"	1996.7 1996.11~1997.3	2,960		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
河内構遺跡	集落	弥生、中・近世	掘立柱建物、井戸、土壇墓、袋状土壇、土壇、溝	弥生土器、土師器、備前焼、陶磁器	
河内城跡	城跡・墳墓	室町	曲輪、堀切、竪堀、切岸・土塁、集石墓	磁器、備前焼、勝間川焼、土師器、鉄鏃、鉄鍋、つぶて石	室町時代前半の山城
河内遺跡	集落	古墳、中世	竪穴住居、掘立柱建物、土壇墓、土壇	土師器、須恵器、備前焼、土錘	
ナル林遺跡	集落	弥生、古墳	竪穴住居、袋状土壇、土壇、溝	弥生土器、土師器、石器、鉄器	
久川上原城跡	城跡	室町	土壇状遺構、曲輪、切岸・土塁	土師器、備前焼、磁器、鉄釘、つぶて石	室町時代前半の山城
北条高下遺跡	墳墓	室町		(備前焼)、石塔	
岨洲遺跡	集落・生産跡	弥生、古代	竪穴住居、焼成土壇、製鉄炉	弥生土器、銅鏃、かま、鉄滓	銅剣転用の可能性が高い銅鏃
岡遺跡	集落	縄文、弥生	竪穴住居、袋状土壇、土壇	縄文土器、弥生土器、石器	
比丘尼ヶ城跡	城跡・生産跡	古墳後期~古代、室町	堀切・炭窯	須恵器	室町時代前半の山城
城峪城跡	城跡・生産跡	古墳後期~古代、室町	曲輪、堀切、竪堀、切岸・土塁、製鉄炉、炭窯	土師器、磁器、備前焼、石突、硯、砥石、つぶて石、土錘	室町時代前半の山城
札ノ尾遺跡	集落・生産跡	近世	掘立柱建物、土壇墓、土壇、溝	陶磁器、備前焼、土師器、煙管、銭貨、かま、羽子、銅滓	近世の銅製錬遺跡

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告170

河内構遺跡
河内城跡
河内遺跡
ナル林遺跡
久田上原城跡
北条高下遺跡
峪畑遺跡
岡遺跡
比丘尼ヶ城跡
城峪城跡
札ノ尾遺跡

苫田ダム建設に伴う発掘調査
1

平成15年2月20日 印刷
平成15年2月28日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3
発行 岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6
印刷 ワッシュ印刷株式会社
岡山県岡山市当新田381-3